續國譯漢文大成

文學部 二十五

309
65

始

吉田梯郎氏 寄贈本

續國譯漢文大成

文學部 第二十五册（第七帙の一）

韓退之詩集 上の一

309
65

韓昌黎集上卷目次

總説……一—三五

卷一

古詩

元和聖德詩幷序……三七
琴操十首幷序……六八
將歸操……七〇
猗蘭操……七三
龜山操……七七
越裳操……七九
拘幽操……八三
岐山操……八五
履霜操……八七
雉朝飛操……九〇
別鶴操……九三
殘形操……九四
南山詩……九七
謝自然詩……一二四
秋懷詩　十一首……一三三
赴江陵途中寄贈王・李・李翰林三學士……一五七
暮行河堤上……一七七
夜歌……一七八

重雲一首李觀疾贈之……一七九
江漢一首答孟郊……一八二

卷二 古詩

北極一首贈李觀……一九一
此日足可惜一首贈張籍……一九四
幽懷……二一二
君子法天運……二一四
落葉一首送陳羽……二一六
歸彭城……二一七
醉後……二二二
醉贈張祕書……二二四
同冠峽……二三〇
送惠師……二三一
長安交游者一首贈孟郊……一八五
岐山下一首……一八六
送靈師……二四一
縣齋有懷……二五二
合江亭……二六三
陪杜侍御遊湘西兩寺獨宿有題一首……二六九
岳陽樓別竇司直……二七五
送文暢師北游……二八六
答張徹……二九五
薦士……三〇八
喜侯喜至贈張籍張徹……三二三
古風……三二八
駑驥……三三一
馬厭穀……三三六
出門……三三八
嗟哉董生行……三四〇

卷三 古詩

河之水二首寄子姪老成……三五九
山石……三六三
天星送楊凝郎中賀正……三六八
汴泗交流贈張僕射……三七〇
忽忽……三七四
鳴雁……三七五
龍移……三七八
雉帶箭……三七九
烽火……三四六
汴州亂 二首……三四七
利劍……三五一
齪齪……三五三
條山蒼……三八二
贈鄭兵曹……三八三
桃源圖……三八六
東方半明……三九四
贈唐衢……三九七
貞女峽……三九九
贈侯喜……四〇〇
古意……四〇五

八月十五夜贈張功曹……四〇八
謁衡嶽廟遂宿嶽寺題門樓……四一三
岣嶁山……四二〇
永貞行……四二三
洞庭湖阻風贈張十一署……四三三

卷四　古詩

劉生詩……四六七
鄭羣贈簟……四七三
豐陵行……四七八
遊青龍寺贈崔大補闕……四八一
贈崔立之評事……四八八
送區弘南歸……四九七
三星行……五〇五
李花贈張十一署……四三五
杏　花……四三八
感春　四首……四四一
寒食日出遊……四五〇
憶昨行和張十一……四五七
剝啄行……五〇七
青青水中蒲　三首……五一一
孟東野失子幷序……五一四
陸渾山火和皇甫湜用其韻……五二二
縣齋讀書……五三五
新　竹……五三八
晩　菊……五四〇

落　齒……五四一
哭楊兵部凝陸歙州參……五四五
苦　寒……五四六
和虞部盧四酬翰林錢七赤藤杖歌……五五五
崔十六少府攝伊陽以詩及書見投……五六〇
送侯參謀赴河中幕……五六八
東都遇春……五七六

卷五　古詩

辛卯年雪……六〇三
醉留東野……六〇五
李花　二首……六〇八
招揚之罘……六一三
寄盧仝……六一六
感春　五首……五八二
酬裴十六功曹巡府西驛塗中見寄……五八九
燕河南府秀才……五九二
送李翺……五九六
送石處士赴河陽幕……五九八
送湖南李正字歸……六〇〇
酬司門盧四兄雲夫院長望秋作……六二五
誰氏子……六三〇
河南令舍池臺……六三三
送無本師歸范陽……六三五
石鼓歌……六四〇

雙鳥詩……六五三
贈劉師服……六五七
題炭谷湫祠堂……六六〇
聽穎師彈琴……六六六
送陸暢歸江南……六六九
送進士劉師服東歸……六七三
嘲魯連子……六七五
贈張籍……六七七
調張籍……六八一
盧郎中雲夫寄示送盤谷子詩兩章……六八六
寄皇甫湜……六九一
病中贈張十八……六九三
雜詩……七〇〇
寄崔二十六立之……七〇三
月蝕詩效玉川子作……七一八
孟生詩……七三五
射訓狐……七四一
將歸贈孟東野房蜀客……七四四
答孟郊……七四六
從仕……七四八
短燈檠歌……七五〇
送劉師服……七五三

韓昌黎集

文學博士 久保天隨譯解

總說

李杜の後、韓白あり。韓愈が終生の事業として、文に於ては八代の衰を振起し、これを古に復さしめたると共に、詩に於ては、一種の別調を肇め、大暦以後、漸く萎微せむとする流弊を排し、仍つて、重きを百代に爲せり。

韓愈、字は退之。その先は、漢の弓高侯頽當の裔孫尋より出で、南陽郡中、昌黎の潁川に住す。尋、後漢の時、隴西の太守たり、司空稜を生み、後に安定の武安に徙る。その後、幾代をか經たる後、魏に至りて、常山太守武安成侯耆といふものあり、遷つて九門に居り、尚書令征南大將軍安定桓王茂を生み、茂、均を生み、均、晙を生み、晙、仁泰を生み、仁泰、叡素を生む。叡素、桂州刺史となりて四子を生む。その長子仲卿は、實に愈の父なり。仲卿、武昌令となり、後、官を進めて祕書郎に終り、尚書令僕射を贈らる。李白に武昌德政碑及び去思頌あり、以て其人と爲りを想見すべし。仲卿の弟、卽ち愈の叔父たるもの、凡そ三人、曰く少卿、曰く雲卿、曰く紳卿。少卿は、李白の言に據るに、感慨

然諾を重んじ、早く節義に死せり。雲卿は、稍や溫厚にして、官は尙書禮部侍郎に至り、その子は、却つて性情激烈の人なり。紳卿は、古文に工にして、直言忌まざるの人と稱せらる。愈の祖先近親、略ぼ此の如く、その家門の風、髣髴として認知すべきなり。

愈は、仲卿の第四子にして、上に會・介・弇の三兄あり。自ら河內南陽の人と稱すれども、その生地は、實に長安に在り。生まれて二歳、父を喪ひ、又未だ幾ならずして母を喪ふ。乳母李氏、これを憫み、終に去つて嫁せず、これを鞠育すること、すでに久しく、いつしか、身亦た老いて、韓氏に終りしといふ。その嫂鄭夫人、愈を視ること、さながら所生の如く、因つて、幸に人と成るを得たり。その少時の事は、かつて、自ら記するところ「生まれて七年にして、聖人の道を學ぶ」といひ、「鷄鳴にして起ち、孜孜として利の爲にせず」といへるを見て知るべく、幼時よりして、勉學怠らざりしこと、もとより論なし。しかも、予輩は、父母に代りて、この兒を薫陶せし其長兄韓會の人物に就いて、先づ知るところなかるべからず。

韓會を思うて、先づ念頭に浮び來るものは、江南の四虁なり。會の壯なるとき、方に安史の大亂に値ひ、有爲の士、處處に會合して、經綸の策、帝王の略を談ずるや、盧東美・張正則・崔造の三友と深く相結託して、頗る名聲あり。この四人、學識衆に超え、才智俗に秀で、王佐を以て自ら任じ、天下亦た許すに後年の宰輔を以てし、呼んで四虁といへり。而して、會や實に其領袖たり。會亦た頗る文章に長じ、因つて、交道天下に廣く、かの詩聖として百代に名ある杜甫の如き、唐代古文の先驅として特に稱すべき蕭穎士・李華・獨孤及・梁肅の如き、皆その友たり。故を以て、一たび、京師に入るや、青雲一路、忽ち前に開いて、起居舍人に登りしが、功を成すに急なるや、遂に其去就を誤り、當時の權臣元載・王縉等に敬重されしに因り、大曆十二年、元王二人の敗るるや、亦た左遷せられて韶州刺史となり、愈も亦た之に從へり。居ること五年にして、會は館舍を捐て、韓氏太だ振はず。これより先、愈の三兄弇は、京師に在りて馬燧の軍に死し、二兄介は、すでに病歿し、その次子老成、謂はゆる十二郎は、會に子なかりし爲め、養はれて愈と共に在り。時に愈は十五歳、老成は僅に五歳。嫂鄭夫人は、乳母李氏と相謀りて、これを鞠育し、二人の生長を待つて、再び韓氏の門を大にせむとす。韶州は貶地、もとより久戀の地に非ざるを以て、尋いで、嵩に移る。時に李懷光の亂あり、數ば亂賊に刼され、又ここに安んずること能はず、乃ち走つて洛に至る。

この時に方り、愈は何人に就いて其業を修めしか、今より知るべからずと雖も、その多くは、自修に在り、後年自ら「讀書を知つてより、日に數十百言を記し、長ずる比、盡く能く六經百家の學に通ず」といへるもの、卽ち是れなり。貞元二年、十九歳、京師に鄕貢せらる。然れども、依るところなく、諸兄と深く相知りし馬燧の處に至り、その安邑里の第に寄寓し、その間、梁獨の徒に從つて遊び、銳意鑽研、自ら一代に振はむと欲し、數ば文を公卿の間に投じ、又故相鄭餘慶の爲に譽を延くあり、

これに由つて、稍や名を知らる。然れども、起つて進士の試に應ずるや、不幸にして、毎に第せず。

京華に寓すること、六年の久しきに及び、貞元八年、二十五歳にして試に應じ、明水賦・御溝新柳詩を試みらるるや、漸く陸贄に知られ、爲に進士の第を得たり。同時の擧人には、賈稜・陳羽・歐陽詹・李博・李觀・馮宿・王涯・張季友・齊孝若・劉遵古・許季同・侯繼・穆贄・李絳・溫商・庾承宣・員結・胡諒・崔羣・邢册・裴光輔・萬瑫等あり。この歳の一牓、天下孤儁偉傑の士多く、因つて龍虎牓の稱あり、然れども、博學宏詞の試に應ずるや、これを三たびして、遂に第せず。かの龍を以て自ら比し、科目に應ずるとき、人に與へし書は、正に此時に成る。又齊皥の下第を送りし書の如き、崔虞部に與へし書の如き、當時の感慨を吐露して、剩すところなし。愈、すでに二十八歳、年ごとに試に應ずるの煩なるに堪へず、因つて、直に宰相に上書するの止むを得ざるに至れり。しかも、これを三たびして、遂に報せられず。ここに於て、意を決して東歸し、因つて、その嫂を省せむとす。去るに臨み、同年の進士侯繼に一書を與ふ、その文、亦た頗る悲愴、曰く、僕、庸愚と雖も、書を讀む毎に、輒ち自ら用ふるを愧づ。今、幸にして時に用ひられず、朝夕孜孜の勞なく、將に試に學ばむとす。力足らずして後に止むも、猶は時俗の爭ふところに汲汲たるに愈れり。すでに得ずして、天を怨み、人を尤むるもの、これ吾が今の志なり。懼るるところは、足下、吾が退歸を以て、因つて謂はむ、我、復た自彊息まざること能はずと。故に書に因つて奉曉す。冀はくは、足下、吾の退くや、未だ始より進むと爲さずむばあらず、而して、衆人の進むや、未だ始より退と爲さずむばあらざるを、と。

かくの如くして、愈は飄零落魄、長安を出でて河南に向ひ、すでに潼關を過ぎ、黃河の南岸に沿うて東下するや、偶ま見る、二鳥を籠に入れたるもの、相竝んで西行するを。二鳥は、卽ち白烏と白鸜鵒。これを問へば曰く、某州の守某官、使者をして天子に進めしむるなりと。東西行くもの、皆路を避け、敢て正目するものなし。ここに於て、愈は忽ち聯想を自己の境涯に及ぼし、心中言ふべからざる悲哀を感じ、因つて、二鳥賦を歌へり。以爲へらく、二鳥は唯だ羽毛の美を以て、天子の知遇を受くるに反し、己は孜孜として力學すること、ここに二十年、行を磨き、德を積み、なほ一人の知己を得ず、時に遇へば、小善と雖も必ず達し、時に遭はざれば、累世の善も容れられず、嗟乎人にして鳥に若かずと。歐陽修、この賦を以て「一飽の時なきを嗟す」るものと爲す、その論、酷に過ぎて取るに足らず。

すでに河陽に至り、未だ家に達せず、ここに、料らずも老成が嫂氏の喪を護して墳墓の地に歸葬せむとするに會す。失意の人を以て、この大故に遇ふ、感を爲すこと、果して如何。ここに於て、祭文一篇あり。愈、今や歸るに家なく、依るに處なし。乃ち去つて藩鎭の中に活を成さむと欲し、先づ東都に向ふ。時に、貞元十一年九月なり。道、忽ち田橫の墓下に出づ。愈は橫が義高く、能く士を得たるを感じ、因つて酒を取り、以て祭り、文を作つて、これを弔ふ。知己零落の感に堪へざりしや、想

ふべきなり。すでに、東都に至るや、董晉に依り、尋いで、晉が汴州刺史宣武節度使となるや、漸く其推薦に依り、進士を以て祕書省校書郎に試みらるるを得、拜せられて觀察推官となり、從つて其地に赴く、時に歳三十一。

職に在ること二年、未だ榮遷の慶あらず。貞元十三年七月、遂に辭するに疾を以てし、退いて休居し、復志賦を作る。然れども、未だ免されず。居ること二年、十五年二月に至り、晉は病を以て薨じ、因つて、喪を護して、京師に赴く。すでにして汴州の亂あり、留後陸長源、兵士に殺さる。愈は、僅に四日の差を以て、この亂に値はず、此日足レ可レ惜の五古、これを述ぶること詳なり。都に在ること一二旬、又汴に歸るを欲せず。行いて汜水を渡つて、陳許の間に出で、二月の末、遂に徐州に至り、友人李翺の介を以て、その州の節度使張建封に依り、しばらく、符離睢上の居に在りしが、未だ幾ならざるに、頻りに請うて、節度推官の職を授けらる。然れども、その意、なほ慊らざるものあり。その不平の因は、自ら記するところ「牒を受くるの明日、使院中に在るや、小吏あり、院中の故事節目十餘事を以て、來つて愈に示す。その中、不可なるもの、九月より明年二月の終に至るまで、晉晨に入り、夜に歸り、疾病事故あるに非ざれば、輒ち出づるを許さず」といふに在り。乃ち書を建封に贈り、俗吏輩と同一視せずして、特に寛假するところあらむことを囑し、乃ち曰く、苟くも是の如くならば、日に千金の賜を受け、一歳に九たび其官を遷すとも、恩に感ずるは之あらむ、時に以て天下に稱して知己と曰はるるは未だし、と。

愈の建封に説くや、ひとり此に止まらず、節度使の職責を論じ、又その軍兵の訓練を忽にし、徒に毬を飛ばし、田獵以て日を送るを諫め、詩に、文に、これを諷諭せしもの、一にして足らず。然れども、建封、終に之を用ふるに及ばず。貞元十五年の冬、建封に代りて京師に朝正し、その翌十六年の春、徐州に歸るや、意を決して建封の幕下を辭せり。その去るや、數日にして、建封病んで死し、徐軍又亂る。その之を免れしは、前年汴に於けると同じく、兩度の災變、幸にして、一も難に罹らず、さながら天の呵護ありて然るに似たり。ここに於て、自奮の意、勃發するあり、衞中行に與ふる書の如き、以て觀るべきなり。

貞元十七年、愈、妻子を攜へて、京師に入り、その翌十八年春、遂に國子四門博士に調せらる。然れども、職、未だ其才に稱はず、かの于襄陽に求むるところありしは、正に此時に在り。この年一月より五月に至るまで、旱魃虐を爲し、關内三輔、飢饉に苦み、憂愁、里巷に滿ち、朝臣等、終に議して、今年七月吏部の選擧及び禮部の貢擧を罷むるに至れり。その意以爲へらく、歳かくの如く旱、もし選擧を爲さば、人士ここに輳集し、爲に京中米價の騰貴を來さむ、と。愈、これを以て大に不可となし、乃ち、論二今年權停一擧選一狀を作り、光順門に詣り、これを奉じて命を待ちしが、遂に報せられず。然れども、その技能才識は、幸にして、識者に認められ、貞元十九年、國學の微位より、一躍して監

察御史に登り、柳宗元、劉禹錫と同省に在り。この年又實らず、關中旱饑、人死して相枕藉するも、吏刻にして怨を取り、しかも、進奉の風、上下を浸潤するや、京兆尹李實、亦た之に倣ひ、德宗が嚢に征賦の半を罷めしに拘はらず、強ひて徵求を爲せり。ここに於て、愈は、同官張署・李方叔等と御史臺上論二天旱人饑一狀と題する一篇の封事を奏上せり。時の宰相杜佑は、これを納れむとせしが、他の佞幸諸臣は、憤怨して措かず、讒構百方、遂に諸人をして朝を去るの止むを得ざるに至らしめ、愈は陽山令となりて、再び藩鎮隷下の一小官となれり。

中使、愈の家に臨みて、頻りに其行を促す。江陵途中寄二翰林三學士一の詩、細かに個中の消息を傳ふ。陽山は、南彊の僻地なり「區冊を送る序」に其風土を記して曰く、陽山は天下の窮處なり、陸には、丘陵の險、虎豹の虞あり、江流悍急、横波の石、廉利、劍戟に侔しく、舟上下、勢を失し、破碎淪溺するもの、往往之あり。縣郭に居民なく、官に丞尉なし、江を夾んで荒茅篁竹の間、小吏十餘家、皆鳥言夷面、はじめ至るや、言語通せず、地に畫して字を爲り、然る後、告ぐるに租稅を出し、期約を奉ずべきを以てすべし。これを以て賓客游從の士、爲すところなくして至る。愈、罪を斯に待つこと半歲ならむとす、と。縣齋有レ懷の一首、又貶謫の苦を述ぶ。やがて、楊儀之が湖南支使となりて來り見え、將に別れむとするや、仍つて別知賦あり。

陽山に居ること、殆んど一年、この間、朝廷に於ては、順宗新に位を承け、二王、はじめて政を革め、因つて、前朝の逐臣を召還せしに因り、愈も亦た遷されて、江陵法曹參軍となる。未だ幾ならずして、憲宗即位、二王の黨、盡く斥けらるるや、愈は、却つて召されて、權知國子博士となる。永貞行の一篇は、劉禹錫が貶謫の次に江陵に邂逅して作りしものといふ。微意婉辭、深く劉柳諸人の爲に痛惜するもの、坦夷義を尙ぶの氣概を見るべし。

元和二年、國子博士となり、三年、東都に分敎たるや、憲宗の英明を頌して、元和聖德詩あり。その四年、分司都官となり、五年、河南令となり、六年、職方員外郎に遷る。はじめ、華陰令柳澗、辜あり、前の刺史、これを劾奏せしが、未だ報せず。しかも、刺史罷めらるるや、澗、百姓を諷して、實頓役直を遮り索めしむ。後の刺史、これを惡み、その獄を按じ、澗を貶して、房州司馬となす。愈職方に赴かむとして、その地を過ぐるや、これを見て以爲へらく、刺史陰に相黨す、と。因つて上疏して之を治す。すでにして、御史覆問して、澗の贓を得、再び貶して封溪尉となし、愈も亦た言ふところ正しからざりしに坐し、復た博士に下遷す。ここに於てか、進學解を作り、以て自ら慰む。

時に、武元衡・李吉甫・李絳等、相位に在り、愈の文を觀て、その才を奇なりとし、遂に擧げて比部郎中史館修撰たらしむ。然れども、史官は固より其志に非ざるを以て、力を職に專にせず、柳宗元、乃ち書を與へて、大に史を論ずるや、愈、因つて順宗實錄の撰あり。居ること、未だ幾ならず、進んで考功郎中知制誥となり、新に裴度と相識るを得たり。この時、淮西の寇、日に盛にして、

朝議未だ決せず、愈、乃ち淮西事宜狀を上つて、その必ず之を討つべきをいふ。すでにして、憲宗、意を決して之を討たむとし、李光顏・李愬・柳公綽等は、河北の兵を按じて其地に向ひ、尋いで、裴度の彰義節度使淮西宣慰招討使となるや、愈は行軍司馬となりて、從つて行く。潼關を出づるや、請うて、先づ遽に乘じて汴に入り、都統韓弘を感說し、ともに力を悉さしめ、又蔡州の精卒、悉く界上に處つて、官軍を拒ぎ、留まつて城を守るもの、率ね老弱、且つ千人に過ぎざるを察し、亟に度に白し、請うて精卒三千を以て、間道より入り、必ず吳元濟を擒にせむことを謀る。然れども、未だ發するに及ばず、唐鄧節度使李愬、雪夜、蔡州城に入りて元濟を獲たり。蓋し愬の爲せしところは、即ち愈の計策に外ならず、故を以て、知るもの、竊に愈の爲に深く惜みたりといふ。蔡州、すでに陷る。布衣栢耆といふもの、計を以て、愈に謁するや、愈、與に語つて大に奇なりとし、遂に度に白して曰く、淮西、すでに滅び、河北の王承宗、膽破れて、衆を用ふるを勞せざるべし。宜しく、相公の書を奉じて、禍福を明かにし、以て之を招かしむべし。その服するや、何の疑ふところぞ、と。度、これを然りとす。ここに於て、愈、直に文を草し、栢耆に命じ、これを袖にして鎭州に至らしむ。承宗、果して大に恐れ、急に表を上り、德棣二州を割いて獻じ、子を遣して入侍せしむ。愈の功少からざるを以て、擧げられて、刑部侍郞となる。

淮西の寇、すでに平いで、唐室中興の觀あり。ひとり惜むらくは、憲宗漸く治に怠り、驕奢を事とし、皇甫鎛・程异等を擧げ、裴度漸く疏んせられ、又山人柳泌に台州刺史を授けて、仙藥を求めしめ、次いで、佛骨奉迎の擧あるに至る。はじめ、鳳翔の法門寺に護國眞身塔あり、塔内に釋迦佛の指骨一節を藏し、その法として、三十年に一たび開くのみ。開けば、歲稔つて人泰なりと傳ふ。憲宗の元和十四年、恰も其歲に當りしを以て、正月丁亥、中使杜英奇を遣し、宮人三十を押し、香花を持し、迎へて大内に入らしめ、禁中に止むること三日、乃ち之を寺に送る。王公士庶、奔走贊嘆して捨施し、唯だ後に在らむことを恐れ、膜唄して夷法を爲すに至り、百姓亦た業を廢し、產を破り、頂を燒き、臂を灼し、供養を求め、賝貝を委し、騰沓して路に係るものあり。愈、素より佛を好まず、且つ其害少からざるを知る、乃ち中夜熱淚を灑ぎ、椽大の筆を執りて、沛然一揮、墨痕なほ淋漓たる一封の諫書を捧げ、朝に之を丹墀の下に獻じ、退いて命を待てり。その文は、有名なる佛骨表、即ち是れなり。憲宗、これを覽て大に怒り、特に宰相に示して、將に抵すに死を以てせむとす。裴度・崔羣の二人、謹んで帝の前に至り、首拜を爲し、奏して曰く、愈の言は訐悟せり、これを罪するや誠に宜し。然れども、內に至誠を懷くものに非ざれば、安んぞ能く此に及ばむや。願はくは、少しく寬假し、以て諫諍を來せ。帝曰く、愈、我が佛を奉ずる、唯だ過ぎたるをいふは猶ほ恕すべし。東漢、佛を奉せしより以後、天子咸な夭促すといふに至りては、言、何ぞ乖刺せるや。愈は、人臣にして狂妄なり、もとより赦すべからず、と。ここに於て、中外駭懼、戚里の諸貴と雖も、亦た愈の爲に言ふところあり、

乃ち潮州刺史に貶せらる。時に皇甫鎛・程异、相位に在り、その表を以て、愈の同年進士たる馮宿の草に係るを疑ひ、これを併せ貶して、歙州刺史と爲す。

愈の命を受くるや、卽日途に上り、便道疾きを取つて、先づ藍關に至る。時は正月癸巳の日、陰寒なほ去らず、彤雲慘澹、南望すれば羣山天に攢して、簇簇然、滿地の雪華、深さ一丈、馬蹄爲に進まず、知らず今夜誰が邊に宿せむ。遲遲として、鞭徐に下るとき、困憊殆んど極まり、進退正に歩を失す。時に、姪孫湘、後れて至り、漸く相及ぶ。愈、乃ち一律を賦して曰く、

一封朝奏九重天。夕貶二潮州一路八千。欲下爲二聖明一除中弊事上。豈將二衰朽一惜二殘年一。雲橫二秦嶺一家何在。雪擁二藍關一馬不レ前。知汝遠來應レ有レ意。好收二吾骨瘴江邊一。

路、忽ち商洛に入り、武關の西、配流の吐蕃に逢ふや、同病相憐むの情は、

嗟爾戎人莫二慘然一。湖南地近保レ生全。我今罪重無二歸望一。直去長安路八千。

の一絕となり、悲慘自ら禁せず。漸くにして、鄧州の界に入り、南陽を過ぎ、瀧吏の長古に潮陽の風土を想像し、臨瀧寺に題しては、

不レ覺レ離レ家已五千。仍將二衰病一入二瀧船一。潮陽未レ到吾能說。海氣昏昏水拍レ天。

といふ。一片の浩氣、なほ衰へず、百鍊の剛、遂に挫折せざるの槪を見るべし。その韶州に入つて、晩に宣溪に次するや、刺史張曙が書を惠んで別を敍せしに酬いて、

韶州南去接二宣溪一。雲水蒼茫日向レ西。客淚數行先自落。鷓鴣休下傍二耳邊一啼上。

韶州の地たるや、愈の兄韓會の貶謫されし處、時に、愈、十歳の幼齡を以て相從ひ、今や四十年を經、均しく苦懷を抱いて來り過ぐ、豈に感なきを得むや。この際、小女道にして死し、層峰驛傍の山に葬りしことあり。慘事愈よ多し。かくて、征行七旬に亙り、三月二十五日、はじめて潮州に達す、乃ち謝表あり、その中、皇帝陛下、天地父母、哀而憐レ之、といふは、旻天に號泣すると一般、憲宗爲に惻動し、乃ち宰相に謂つて曰く、昨、韓愈が潮州に至るの表を得たり、因つて思ふに、その諫めしところ、佛骨の事たるや、大に是なり、我、豈に知らざらむや。然れども、愈は人臣、人主佛に事へば乃ち年促ると言ふべからざりしのみ、と。帝、因つて復た之を用ひむとす。皇甫鎛等、奏して曰く、愈や太だ疎狂、しばらく一郡に量移すべしと。ここに於て、憲宗は、これを潮州の惡土より袁州の善地に徙したり。命の達せしは、同年十月にして、愈の潮州に在る、すでに半歳を經過せり。

この間、愈の政を爲すや、治績亦た少しとせず。その初めて潮州に至るや、先づ民の疾苦を問ふ。皆曰く、惡谿に鱷魚あり、民產を食うて盡きむとす、と。惡谿は、府城の東の地なり。愈、乃ち四月二十四日を以て一文を草し、その僚を遣し、羊豚を以て谿水に投じ、試に之を祝せしむ。謂はゆる鱷魚文、卽ち是れなり。その夕、乍ち暴風震雷、湫水の中より起り、數日にして水盡く涸れ、西に徙ること六十里、潮州、これより鱷魚の患なし。次は、文敎を布きしことにして、前者に比して、更に推

稱すべきものなり。潮州は極南の地、民風頗る陋、文身斷髮の俗を去る、まことに遠からず。ここに於て、愈、鄕校を置かむとし、これを朝に請ひ、進士趙德をして之が師たらしむ。これより、潮の士、常に文行に篤く、延いて黎民に及び、號して治め易しと稱す。潮州の地、もとより語るべきものなし。偶ま一僧大顚といふものあり、乃ち之を山より召して、州郭に至らしめ、留むること十數日、神を祭つて海上に至りしとき、親ら其廬を訪ひ、後、袁州に移らむとするや、衣服を留めて別をなす。尙書孟簡、これを傳聞し、その少しく佛を信ずるを疑うて、書を寄す。愈、書を復して、これを辨ずること、頗る詳なり。

十一月、袁州に向ふ。憲宗、會ま此歳を以て崩ず。その翌元和十五年正月八日、任に袁州に達し、仍つて、謝上表あり、又穆宗の卽位を賀する表あり、次いで、慰哀國表・賀赦表・賀冊皇太后表・賀慶表等あり。その十月、召されて京都に上る。袁州に在ること亦た一年に滿たず。その間、美政の傳ふべきもの一あり。はじめ、袁人、男女を以て隸となし、期を過ぐるも贖はざれば、これを沒入す。愈の至るや、悉く傭を計りて、沒するところを贖ふを得せしめ、これを父母に歸せしもの、七百餘人。因つて、與に約して、その隸たるを禁ず。柳宗元の柳州に於ける、亦た此事あり、愈、或は之を學びたるか。

愈の京師に入るや、國子監祭酒に任ず。直講に能く禮を說いて陋容なるものあり、學官多くは豪富の子弟、これを擯けて、ともに食ふを得せしめず。愈、乃ち吏に命じて曰く、直講を召し來り、ともに食せしめよと。學官、これに因つて敢て直講を賤ます。又奏して儒生、學官となるの日、命じて會講を爲さしむ。生徒、奔走聽聞し、皆相喜んで曰く、韓公、來つて祭酒となる、國子監、寂寞たらず、と。當日の重望、想見すべきなり。

すでにして、擧げられて兵部侍郎となる。時に、成德の王庭湊、田弘正を殺して、自ら節度使となり、深州を圍み、その罪を赦さるるも、なほ兵を解かず。官軍、すでに還り、守將牛元翼、出づる能はず。朝廷、これを哀み、庭湊に說かしめむとし、その人を難んず。ここに於て、愈は侍郎に遷りしを幸として、鎭州に赴き、庭湊の軍を宣慰することとなれり。朝臣中、さすがに之を危むものあり。元稹、又穆宗に謂つて曰く、韓愈惜むべし、と。帝、聞いて之を悔い、詔して曰く、境に至らば、事を度つて宜しきに從ひ、必ずしも入ること勿れ。愈、對へて曰く、止むるは君の仁、死するは臣の義、安んぞ君命を受け、滯留して自ら顧るものあらむや、と。時に長慶二年、愈の歲五十四。

行いて鎭州に至りて、王庭湊と相見るや、兵士をして刀を拔き、弓に弦して之を迎へしむ。愈、屈せず。昂然として入る。館に及ぶや、軍士の庭に羅するあり。すでにして坐す。庭湊曰く、紛紛たる所以のものは、乃ちこの士卒の爲すところ、庭湊の心に非ず、と。愈、直に聲を厲まして曰く、天子、公を以て將帥の材ありとなすが故に、賜ふに節旄を以てす。知らず、尙書、乃ち健兒と語る能はざる

か、と。語、未だ畢らず、軍士前んで奮つて曰く、さきに、太師、國の爲に朱泚を擊ち、血衣なほ在り。その軍、何ぞ朝廷に負かむや、乃ち以て賊となすか、と。愈曰く、爾等、先太師を記せずと思へり、若し記すれば善し、且つ順と逆とを爲すの利害は、遠く古事を引くに及ばず。唯だ天寶以來の禍福を以て、爾等の爲に明かにせむ。安祿山・史思明・李希烈・梁崇義・朱滔・朱泚・吳元濟・李師道等、もしくは子、もしくは孫の在ることありや、亦た官に居るものありや。衆曰く、無し、と。愈、語を繼いで曰く、田公、魏博の六州を以て朝廷に歸す、官は中書令として、父子旌節を受け、子孫孩提に在りと雖も、皆美官たり。王承元、その軍を以て朝廷に歸し、弱冠にして節度となり、劉悟・李祐、今皆大鎭たり。汝が曹、亦た之を聞くか。衆曰く、弘正刻なり、故に此軍安からず。愈曰く、然り、爾が曹、田公を害し、又その家を殘へり、復た何をか道はむ。衆乃ち讙して曰く、侍郎、これを語れ、と。ここに於て、庭湊、衆心の動かむことを恐れ、これを麾いて出でしめ、因つて、泣いて愈に謂つて曰く、侍郎來る、庭湊をして何をか爲さしめむと欲する。愈曰く、神策六軍の將、牛元翼の如きもの少からず。但だ、朝廷、大體を顧るに、之を棄つべからず、公、久しく之を圍むは何ぞや。庭湊曰く、即ち之を出さむ。愈曰く、若し然らば事なからむ、と。庭湊、すでに衆心の搖動せむことを慮り、愈をして歸らしむるに若かずとなし、因つて、此の如くせしのみ。愈の斯行、しばらく、その效果を論ずるを休めよ、その庭湊を詰責するや、簡嚴切直、今に至つて凛凛として生氣あり、その忠鯁大節、すでに足れりと爲すべし。

庭湊、すでに愈に聽きしと雖も、未だ深州の圍を解かず、未だ幾ならずして、牛元翼、十騎を將ゐ、圍を衝いて出で、事、乃ち止むを得たり。愈の歸つて復命するや、帝、大に悅んで曰く、卿、直に伊に向つて、かくの如く謂へるかと。その九月、功を以て、轉じて吏部侍郎となる。時に、裴度、左僕射の閒職に遷り、李逢吉、相位に在り、その中丞李紳と協はざるや、乃ち奏請し、愈を除して京兆尹となし、御史大夫を兼ねしめ、敕して臺參を許し、以て相當らしめむとす。愈の始めて官に上るや、六軍の將士、皆敢て犯さず、私に相告げて曰く、これ尚は佛骨をすら燒かむとせしもの、安んぞ忤ふべけむや、と。故を以て、盜賊止み、旱に遇ふも、米價敢て上らざりしといふ。愈は逢吉に擧げられしと雖も、もとより、その頤使に甘んずるものに非ず。李紳は、性峭直、屢ば上疏して事を論じ、愈と辭理往復せしことあり、然れども、狹量淺識、終に相知るに及ばず。紳、かつて、囚を械して府に送り、尹の杖を以て之を打たしむ。愈曰く、安んぞ、此あらむ、と。因つて、速に其囚を歸さしむ。紳、これを銜みて劾奏するや、愈、詔を以て自ら解く。その後、文刺紛然、逢吉、遂に兩者の官を改め、愈を以て復た兵部侍郎となし、紳を以て江西觀察使となす。然れども、紳、帝に見えて、先づ留まるを得、愈も亦た入つて謝し、帝の問に對へて自ら辯せしに因り、數日にして復た吏部に復す。官に居ること一年、長慶四年に至りて、疾を得、その百日に滿つるや、告を請うて、城南の別墅に居

る。時に、張籍、官の休罷に會し、兩月、游翔を倶にし、又賈島の來り訪ふあり、南溪始泛の詩は、即ち此時の作に係り、不幸にして絶筆となれり。夏を經て秋に入り、終に癒えず、冬に至りて病遂に革まる。愈、屬纊して、語つて曰く、某の伯兄、德行高くして、方藥を曉り、食するとき、必ず本草を觀る、年は四十二のみ。某は、疎愚にして、食、禁忌を擇ばず、位、侍郎となり、年、伯兄より出づること十五歲、もし又足らずとせば、何に於て足らむ。且つ牖下に終るを獲、幸に大節を失ふに至らず、以て、下、先人を視る、榮なりといふべし、と。遂に靖安里の私第に終る、時に十二月二日、歲五十六。詔して、禮部尙書を贈り、諡して文といふ。遺命すらく、喪葬は禮の如くならざること勿れ。俗、夷狄に習うて、浮圖を書寫し、日は七を以て之を數へ、及び陰陽に拘はるが如き、謂はゆる吉凶、一に我を汙すこと勿れ、と。唐末の皮日休、かつて愈を以て大學に配饗せむと請ひしことあり。降つて、宋の元豐七年、詔して、昌黎伯に封じ、元豐五年、朝散郎王滌、潮州に知たるや、令を出し、その廟を新にし、蘇軾をして碑文を撰せしむ。かくの如くして、絕代の詞豪は、南海に於て長しへに血食するを得たり。

愈、性宏通にして、人と交るや、榮悴變せず。少時、洛陽の人孟郊・東郡の人張籍と友とし善し。二人名位未だ振はず、愈、寒暑を避けずして、公卿の間に薦め、而して、籍、終に科第を成し、祿仕に榮、後、通貴と雖も、退公の際ごとに、相與に談讌して、文を論じ、詩を賦す。その諸權門豪士を觀るや、僕隷の如く、瞠然として顧みず。しかも、頗る能く後進を誘厲し、これを館するもの十六七、晨炊給せずと雖も、怡然として意に介せず。大抵名敎を興起し、仁義を宏奬するを以て事となし、凡そ內外の親、もしくは交游の後なきものは、爲に孤女を嫁遣して、その家を卹み、嫂氏の喪、爲に朞を服して以て報ず。平居、寢食と雖も、未だ嘗て書を去らず、怠れば以て枕となし、餐せば口に飴し、講評孜孜、以て諸生を磨すること完美ならざるを恐れ、游べば談笑嘯歌、皆義に醉うて歸るを忘れしむ。樂只の君子鉅人たるに庶幾し。

著すところの文集四十卷。李漢の序に曰く、遂に遺文を收拾して、失墜するところなし。賦四、古詩二百十、聯句十一、律詩一百六十、雜著六十五、書啓序九十六、哀詞祭文三十九、碑誌七十六、筆硯鱷魚文三、表狀五十二、すべて七百、目錄を併せて四十一卷となし、目を昌黎先生集といふ、と。今傳ふるもの、即ち是れなり。これに次いで、順宗實錄五卷あり。惜むべし、繁簡當らず、敍事取捨に拙、頗る當代に非とせらる。穆宗・文宗、かつて史臣に詔して竄改せしむ、時に李漢・蔣係、愈の壻を以て顯位に在り、諸公、これを難んず。而して、韋處厚、遂に別に順宗實錄三卷を撰す。然れども、愈の原本、今なほ世に傳ふ。他に、論語註十卷あり、又筆解二卷あり、ともに存す。

韓愈は、ひとり唐代に於てのみならず、古今東西を通じて稀に見るところの大人物といふべく、その多面的にして、しかも均しく偉大なる、他に其類を見ず、その一生は、五朝の間、政治界及び思想

界の兩天地を掩ひ盡して、さながら垂天の翼の如きものあり。然れども、彼は、あくまで常識の人にして、精微新警なる思想家たるに於ては、頗る遠きものあり。加ふるに、時勢の必要は、これをして儒敎の維持者たるに擧らしめき。その文章に至りては、古來すでに定評あり、且つ傍徑に入るを以て、ここには細論せず、左に其詩に就いて略論すべし。

前にも云へるが如く、韓愈の文は、すでに八代の衰を起したると共に、詩は一代の別調を開きたり。世人、或は之を呼んで變調と爲す。然り、謂はゆる變調なるものは、もとより、才力雄傑なるものに非ずむば斷じて能はず。韓愈の詩文に於ける、その一を以てするも、なほ千古に雄視するに足る。しかも、その詩の稱せられざる所以は、偶ま文名に掩はれ、且つ時に之を詆訾するものあるに由る。乾隆御批、これを論ずる最も詳なり。今、下に其全文を引く。曰く、韓愈、文は八代の衰を起し、而して、其詩亦た卓絕、論者常に文を以て其詩を掩ひ、甚しきは、或は謂ふ、詩に於て本と解するところなし、と。夫れ唐人詩を以て家に名づくるもの多く、文を以て家に名づくるもの少し、韓文は韓詩よりも重しといふは可なり、直に斥けて、その詩を工ならずといふは、羣兒の愚なり。大抵、韓詩を議するものは謂ふ、詩、自ら體あり、これは押韻の文、格、詩に近からず、又豪放餘あるも深婉足らず、常に意と語とともに盡くるに苦む、と。蓋し、劉攽・沈括より、時に異同あり、而して、黃魯直・陳師道の輩、遂に羣つて相訾謷し、宋元明を歷て、異論間出、これ實は昌黎得力の在るところに昧く、未だ嘗て波に沿ひ以て其源を討めず、眞に詩體を辨せざるものなり。夫れ六義、肇めて興り、體裁斯に別かれ、言簡にして意該、節短くして韻長く、含吐抑揚、その詞を重複すと雖も、彌よ不盡の味あり、これ風人の旨なり。二雅三頌に至りては、終始を鋪陳し、情を竭し、敬を盡す、義は揚厲に存して、その夸を病ます、情は呼號に迫つて、その激を嫌はず、その體たる、迥に風に異なり、特に詞に繁簡あるに非ず、その意の隱顯、もとより殊なり。千古以來、むしろ含蓄少なきを以て、雅頌の病となすものあらむや。然らば、唐詩王孟の一派の如き、源、風に出で、而して、愈は之を雅頌に本づけ、以て大に厥辭を暢ぶるものなり。その生平、詩を論ずる、專ら李杜を主とし、しかも、治水の航、磨天の刃に於て、慷慨追慕、まことに、その乾坤を震盪し、萬類を陵暴するに效ひ、而して後に、盡くその奇傑の氣を吐くを得むと欲す。その淸微淡遠、雅詠溫恭を視る、殊に以て吾が才を盡すに足らず、然れども、偶ま一たび之を爲し、餘力以て相及ぶに足る。琴操及び南溪諸作の如き、ともに特性近からざるところに在り、多く作らざるのみ。而して、仰ぎ攻むるもの、顧るに多少の數を執り、以て優絀の數を判たむとするか。桃源を擬して樂土となし、而して、輒ち洪河太華の人を駭するを謂ひ、仙佛の元虛を求め、反つて聖賢の經天緯地を以て多事となす。これ其說たるや、智者を待たずして決すべきなり。今試に韓詩を取つて之を讀むに、その壯浪縱恣、約束を擺去する、まことに李に減せず。その渾涵汪茫、千彙萬狀、まことに杜に減せず。而して、風骨崚嶒、腕力矯變、李杜の神を得て、

その貌を襲がず、則ち又奇を二子の外に出いて、自ら一家を成す。夫れ詩至つて足り、李杜と鼎立し、しかも論の定まる、猶ほ千歳の後に待つあり、甚しいかな、詩道の言ひ難きや。然れども、元稹、もとより常に杜を推して李を抑へ、歐陽脩、又退之を主として子美を主とせず、李杜、すでに然り、愈に在つては免れざるべし。かの自ら鳴り、自ら息むもの、又焉んぞ辨ずるに足らむや、と。

御批の言、甚だ高し。愈を以て雅頌の體を學ぶものとなす、甚だ可なるに似たりと雖も、やや固に近きを病む。蓋し、詩經楚辭より、漢魏六朝を經て、唐に至る、たとひ、師奉せずとするも、その體裁風致の相似たるを以て、その源を窮むれば、必ず歸宿するところあるべければなり。次に、李杜を規撫すといふは、可なりと雖も、その李杜に遜らずして、且つ特色ありといふは、むしろ、賞讃に過ぐるなきか、他なし、李杜の所長を沒して言をなすに似たればなり。ここに於て、予は、趙甌北の言、更に細微に入りしを多とせずむばあらず。曰く、韓昌黎、平生心摹力追するところのものは、唯だ李杜の二公。顧るに、李杜の前、未だ李杜あらず、故に二人の才氣横恣、各〻半面を開き、遂に千古を獨有す。昌黎の時に至つては、李杜、すでに前に在り、たとひ、力を極めて變化するも、終に再び一徑を闢くこと能はず。唯だ少陵奇險の處、倘ほ推擴すべきあり、故に一眼に覷ひ定め、これより山を闢き、道を開き、自ら一家を成さむと欲す。これ昌黎注意の在るところなり。然れども、奇險の處、亦た自ら得失あり。蓋し、少陵、才思の到るところ、偶然これを得、而して、昌黎は、專ら此を以て勝を求む、故に時に斧鑿の痕跡あり、心あると心なきとの異なり。その實、昌黎自ら本色あり、仍つて、文に在つては字に從ひ、自然に順中し、雄厚博大、縱横すべからず、專ら奇險を以て長を見す、恐らくは、昌黎亦た自ら知らず、後人平心これを讀まば、自ら見はれむ。若し徒に奇險を以て昌黎を求むれば、轉た之を失せむ、と。

これを要するに、韓詩の趣向するところは古調に在り、而して之を實現せむが爲に、少陵奇險の處を規模せしと雖も、長處却つて短處たるの嫌あり、その渾然融合の處、偶ま無限の神趣と特色とを見るといふべきのみ。

すでに奇險といふ、これを意にするは上なり、これを辭にするは下なり。李杜の作るところ、辭は平易詳明なるも、意の奇險なるもの、極めて多し。愈の出づるや、時、すでに晩く、加ふるに、これを概言して、中唐以下は、意象よりも修辭に向はざるべからざるの時に際したるが故に、愈は之を意にするを欲せざるに非ざるも、自然の勢、その結果は、概ね之を辭にしたるに過ぎず。すでに之を辭にすといふ、亦た自ら別あり。字法句法、もしくは體格、自ら深淺の別なき能はず、然れども、その多樣多變なるは、實に字法に在り。故に愈の作るところ、字は必ず奇にして拗、その來歷の繁冗にして意象の晦澁なる、殆んど解し易からざるものあり。趙甌北、又これを論じて曰く、盤空の硬語、須らく精思結撰するあるべし、若し奇字を撏摭し、務めて讀むべからざるを爲し、以て人の耳目を駭か

すは、眞の警策に非ざるなりと。因つて、其例として題二炭谷湫一の巨靈高二其捧一、保二此一掬慳一。及び吁無下吹毛刃、血二此牛蹄一般上。迸二無本師一の鯤鵬相摩窣、兩擧快二一噉一。月蝕詩の帝箸下レ腹嘗二其皤一。若寒行の啾啾聰間雀、所レ願暑刻淹、不レ如彈射死、郤得二親炰燖一。竹簟の倒レ身甘寢百疾癒、郤顧天日恒炎曦、等を算出せり。次に、その句法を創めしは、路傍堠の千以二高山一遮、萬以二遠水一隔、といふが如き、最も佳なるもの。凡そ、七言は、上四字相連り、下三字、これに足す、その送二區宏一の落以レ斧引以二纆徽一、及び子去矣時若レ發レ機、陸渾山火の溺二厥邑一囚二之崑崙一の如き、上三字相連り、下四字、以て之に足す、自ら亦た奇闢、然れども、終に讀むべからず、後人これに倣ふものなきや亦た宜なり。これを要するに、愈が字法句法に就いて苦心せしの極、往往にして、法則を超越し、却つて、檢束なきに過ぐるものあり。これを括言すれば、直に文法を適用し、散文と律語との區別を抹去せむとするに似たる形跡と傾向とあり。陳後山が「杜の詩法は、韓の文法なり。詩文、各々體あり。韓は文を以て詩を爲り、杜は詩を以て文を爲る、故に工ならざるのみ」といひしもの、元と詞膽變よりも窄くして然りと雖も、亦た必すしも相中らすむばあらず。故に蘇東坡又かつて曰く、書の美なるものは顏魯公に如くはなし、然れども、書法の壞は、顏より始まる。詩の美なるものは、韓文公に如くはなし、然れども、詩格の變は、韓より始まる、と。ここに至つて、韓愈の詩に於ける、功罪正に相半すといふべし。然れども、桓溫の語、大丈夫芳を百世に流す能はずむば、又當に臭を萬世に貽すべしといひしに想及すれば、これを孰れにするも、才力の雄傑、膽大にして氣壯なるは、斷じて爭ふべからず。

次に、體制もしくは排置の上に就いては、創意、さすがに觀るべきものあり。その通韻を用ひ、又一韻を用ふるが如き、古しへ、例あるものは、もとより不可と爲さず。又南山の詩に、春夏秋冬、四時の景を鋪列し、月蝕の詩に、東西南北、四方の神を鋪列し、譴二瘧鬼一詩に、醫師・灸師・詛師・符師を歴擧したるが如き、皆前人に於て見ざるところなり。又南山の詩に數十の或字を連用し、雙鳥の詩に不レ停二兩鳥鳴一を連用し、雜詩四首の第一首に五の鳴字を連用し、贈二別元十八一詩に四の何字を連用したるが如き、皆奇を出すに意ありて、別に一格を增すもの。答二張徹一の五律、起より結に至るまで、匆匆對偶、又全く拗體を用ひて、轉た生峭を覺ゆるが如きは、創體の最も佳なるものといはざるべからす。然れども、これより先、少陵の輩、純ら詩を以て命と爲し、掬出するところ頗る多きに比すれば、愈は、その生、すでに晩く、これを出すの餘地なく、終に其多きを得ざりしなり。

愈の才、もとより大を用ふるに適し、偏に古を以て勝る。而して、その得失、實に此の如く、次に各體に就いて評せむか。均しく、古體といふが中にも、四言は、氣格最も古きものにして、その力、能く之を運するに足るが故に、唐人中、ともに儷を得るなく、元和盛德詩、淮西碑の如き、辭嚴にして義偉なりと稱せらる。琴操は樂府の體、その高古の處、自ら雋絕を推す。次に五古に至りては、南山の詩、無慮千二十字、元和聖德詩と相竝んで、集中の最長篇なり。古しへより、これを杜甫の北征

と竝稱す。傳へて言ふ、孫莘老、王平甫と二詩の優劣を爭ひしとき、黄山谷、幼にして座に在り、乃ち曰く、もし工巧を論ずれば、北征、南山に及ばず。もし事を書し、國風雅頌と表裏を相爲すを以てせば、北征なかるべからず、南山作らずと雖も、未だ害あらず、と。仍つて、論、遂に定まる、と。然れども、まことに趙甌北の云へるが如く、工巧は猶ほ未だしく、且つ境地に切實ならず、唯だ險韻を以て之を出せし處、氣力の雄厚を見るに過ぎず。秋懷詩、江陵途中、此日足ㇾ可ㇾ惜、縣齋有ㇾ懷の數首、明覈詳晰、人に近き處、むしろ取るべし。七古は、稍や平易、山石、桃源圖、嗟哉董生行の如き、皆誦すべし。

然れども愈が七古の所長は、奇險より進んで巉刻に入るものと、その融會の極、却つて穩麗に歸せしものとに在るべし。前者の例としては、衡嶽廟あり、後者の例としては石鼓歌、八月十五日贈二張功曹一等あり。その他、一一擧げず。趙甌北が「措思極めて細、遣詞極めて工、試帖に工なるものと雖も、亦たその穩麗を遜る、これ則ち大才辨せざるなく、併せて以て、詩の工、もとより此に在つて彼に在らざるを見る」といひしもの、頗る中れりといふべし。若し夫れ、聯句に至りては、柏梁の舊を變じて、規模の大を爲せしものなりと雖も、唯だ層層鋪敍、段落不分、詩としての價値、むしろ卑しと云はざるべからず。

近體に至りては、その作、多からず。五律は、古に近きを以て、尙ほ長篇（卽ち排律）及び同人唱和の作あり。沈德潛曰く、昌黎高超邁俗、五言近體中、運らすに古風の筆力を以てし、英氣人に逼ると。七律は、集中わづかに十二首のみ、蓋し才力雄厚、唯だ古詩以てその馳驟を恣にするに足るも、一たび格式聲病に束せらるれば、卽ちその所長を展べ難く、故に多く作らず。然れども、月を詠じ、雪を詠ずるの諸詩、體物の工、措詞の雅を極め、更に一として完善穩妥ならざるなく、古詩の奇崛と判して兩手の如し。その明麗の句、廣平の梅花を賦するが如く、心、鐵に似たるを疑はず。絕句又間ま誦すべきものあり、「丘墳滿目衣冠盡」、「天街細雨潤如ㇾ酥」、「風光欲ㇾ動別二長安一」の數首、最も佳なり。

韓詩の傳ふるに足るや、かくの如く、しかも世人に誤らるる、亦た久し。故に東坡は曰く、李太白・韓退之・白樂天の詩、皆庸俗に亂する、爲に太息すべし、と。胡應麟、この意を承け、更に細說して曰く、元和よりして後、詩道浸く晩なり、而して、人、固に是れ一時に橫絕す。昌黎の鴻偉、柳州の精工、夢得の雄奇、樂天の浩博の如き、皆大家の才具、今人槪ね中晩を以て之を高閣に束ぬ、其れ惜むべきかな、と。ここに於てか、乾隆帝の唐宋詩醇、韓白を以て李杜に繼がしめしもの、千古の卓見、まことに推服すべきを知了すべし。

韓集は、李漢の編輯に係ること、前に述べたり。宋に至りて、これが註を爲るもの、往往にして出で、方崧卿に韓集擧正あり、朱文公に韓文考異あり、魏仲擧に五百家註音辨昌黎先生集あり、明に至つて蔣之翹の韓柳文あり。然れども、その重んずるところは、文に在りて詩に在らず、諸家亦た文を註

する餘力を以て、詩に及びしのみ。清の顧嗣立に至つて、はじめて、詩の專註を作り、名づけて韓詩集註といふ。嗣立は、朱竹垞の門人にして、纂するところ、元詩選あり、尤も世に行はる。その人、學問該博、箋註頗る精。德川氏の官版、すでに韓文を刻し、又この書を刻す。韓詩を見むと欲するもの、必ず此を讀まざるべからず。その後、桐城の方世擧、字は扶南といふもの、韓昌黎詩集編年箋註を作り、意を以て排比して、原集の次第を改む。德州の盧見曾、爲に貲を捐てて之を刻す。韓詩の專註は、只だ此二本のみ、而して、顧註尤も汎く世に行はる。

愈の子昶、進士に擧げられしが、その後遂に聞こゆるなし。愈、もとより道を以て世を濟ふに意あり、故を以て、自ら人の師たることを辭せず、その門、才を出すこと、亦た少しとせず。その中、張籍・李翺・皇甫湜・李賀・侯喜・劉師命・張徹・張署は後學を以て之を待ち、盧仝・崔立之は平交に屬し、孟郊、ひとり推重尤も至れり。而して、李翺・皇甫湜は、專ら文を學び、李賀・盧仝・張籍・王建・賈島・孟郊は、詩を以て名を成せり。今、これ等門下の詩客に就いて、その略傳を附載すべし。

張籍、字は文昌、和州烏江の人、貞元中、進士の第に登る。性詭激、能く古體の詩を作り、警策の句ありて時に傳ふ。當代の公卿、裴度・令狐楚、才名、白居易・元稹の如き、皆これと游ぶ。而して、韓愈、尤も之を重んず。元和の初、調せられて太常寺太祝となる。すでにして、眼を京師に病み、貧にして濟ふ能はず、因つて、外に出でむと欲す。愈、乃ち代つて書を作り、浙東觀察使李遜に與ふ。然れども、尋いで癒ゆ。後、累りに國子博士水部員外郎を授けられ、水部郎中に轉す。世、これを張水部といふ。その卒するや、國子司業を以てす、故に其集を張司業集といふ。籍の韓愈に於けるや、甚だ渥く、兩家の集中、これに及ぶもの、指を屈するに暇あらず。就中、その詳悉を極むるは、籍が祭退之の五古一篇に若くはなし。その中に言ふあり、公領二試士司一、首薦到二上京一、一來遂登レ科、不レ見レ苦二貢場一、觀二我性朴直一、乃言及二平生一、と。然れども、往往にして其見を異にし、互に論詰せしことあり、その爭や、もとより君子、偶ま其深交を證するに足る。籍の所長は、詩に在り、殊に樂府に長ず、愈が代作せる李浙東に與ふる書中、これを稱して曰く、籍、又古詩に善し、その心をして、衣食を憂ふるを以て亂れざらしめ、閣下無事の時、一たび座側に致し、跪いて、その有するところを進めしめ、閣下、几に憑つて之を聽かば、未だ必ずしも吹竹彈絲敲金擊石を聞くが如くならずむばあらざるなり、と。白居易、又詩を贈つて曰く、張君何爲者、業レ文三十春、尤工二樂府詞一、擧代少二其倫一、と。後人、これと王建とを並稱すれども、實は骨體遠く其上に出づ。然れども、籍も亦た文を學びしもの、愈が馮宿に與へて文を論ずる書に之を稱して曰く、近ごろ、李翺といふものあり、僕に從つて文を學び、頗る得るところあり。然れども、その人、貧にして多事、未だ其業を卒る能はず。張籍といふものあり、年、翺よりも長じ、しかも、亦た僕に學ぶ。その文、翺と相上下す。一二年、これを業とすれば、至るに庶幾からむ。然れども、その俗尙を棄てて、寂寞の道に從ひ、これを以て、名を時に爭

ふを惘むなり、と。籍の集、今存すと雖も、その文を載せず、文苑英華に韓愈に與ふるの二書を載す、その筆力を相るに、李翺・皇甫湜の間に在り、李觀・歐陽詹の剷彫に意あるに視ぶれば、亦た勝れりと爲す。その全豹、すでに知るべからず、まことに、嘆惜すべきなり。

李賀、字は長吉、系は鄭王の後より出づ。七歲、辭章を能くす。愈、皇甫湜と、はじめ聞いて、未だ信ぜず、その家を過ぎて、詩を賦せしむ。筆を援つて輙ち就り、自ら目して高軒過といふ。二人、大に驚く。これより、大に名あり。賀、旦日ごとに、出でて弱馬に騎し、小奚奴を從へ、古錦囊を背にし、得るところあれば、書して囊中に投じ、暮に歸るに及び、足して之を成し、率ね以て常と爲す。大醉弔祭の日に非ざれば、率ね此の如く、過ぐるも亦た甚だ省みず。母、婢をして囊中を探らしめ、書するところ多きを見れば、卽ち怒つて曰く、この兒、心を嘔出するを要して、乃ち已まむのみ、と。後、進士に擧げられて名あり。時人、その父、名を晉肅といふを以て、擧げらるべからずといふものあり。愈、因つて諱辨を作る。仕へて協律郞となり、卒するとき年二十七。詩四卷、外集一卷、本名を昌谷集といひ、今世に傳ふ。樂府數十篇、雲韶諸工、皆これを絃管に合す。賀の詩、奇詭を尙び、畦徑を絕去し、險怪冷僻、理足らずして詞餘あり、多く鬼語を爲し、好んで死の字を用ふ。故に鬼才の目あり。後賢、好惡の繫るところに因りて、評論一ならずと雖も、嚴滄浪が「自ら是れ天地間少き得ざるの文字」といふは、遂に爭ふべからざる斷案なり。宋の劉辰翁、評點を作り、吳正子、箋註を作り、我が邦の官版にも之あり。淸の王琦、彙解を作り、今專ら世に行はる。長吉の句、羲和敲レ日玻璃聲。羲和は、日を馭するに因つて敲日を生じ、敲日に因つて玻璃聲を生ず。眞に日を敲くの事あるに非ず。秋墳鬼唱鮑家詩、鮑照に蒿里吟あるに因つて、鬼唱を生じ、鬼唱に因つて秋墳を生ず、眞に詩を唱ふるの事あるに非ず。その點化宛轉、孚甲新意、大約これに類す。李憑箜篌引・金銅仙人辭レ漢歌・雁門太守行等は、全卷の眉目たり。

盧仝は范陽の人、少室山に隱れ、自ら玉川子と號す、諫議に徵されしが起たず。愈、河南令たりしとき、その詩を愛し、厚く之を禮す。かつて、月蝕詩を作りて、元和の逆黨を譏切し、愈、その工を稱す。後、王涯の第に宿せしに因つて、甘露の禍に罹る。詩三卷、專ら怪詭を以て稱せらる。

王建、字は仲初、大曆十年の進士。はじめ、渭南尉となり、祕書丞・侍御史を歷、太和中、出でて陝州司馬となり、軍に塞上に從ひ、後、咸陽に歸り、居を原上にトし、はじめて愈の門牆に游んで忘年の交を爲し、張籍と契厚く、唱答尤も多し。建、樂府に工に、又籍と名を齊しうし、今に張王竝稱す。宮詞百首、尤も人口に傳誦す。

賈島、字は浪仙、范陽の人。はじめ進りに文場に敗るるや、囊篋空甚しく、遂に浮屠となつて、無本と名づけ、東都に來り、旋つて京に往いて、靑龍寺に居る。時に僧を禁じて、午後出づるを得ざらしむるや、詩を爲つて自ら傷む。元和中、元白變じて輕淺を尙ぶや、島、ひとり格を案じて僻に入り、

以て浮雲を矯め、冥搜の際に當つては、前に王公貴人あるも皆覺らず、心を萬切に游ばしめ、慮、無窮に入る。自ら碣石山人と稱す。かつて歎じて曰く、余が素心を知るものは、唯だ終南紫閣白閣、諸峰の隱者のみ、と。嵩丘に草廬あり、歸らむと欲して未だ得ず。長安に留まる、行坐寢食と雖も、苦吟輟まず。かつて、蹇驢に跨り、蓋を張つて、天衢を橫截す。時に秋風正に厲しく、黃葉掃ふべし。遂に吟じて曰く、落葉滿㆓長安㆒、と。方に屬聯を思へども、杳として得べからず。忽ち秋風吹㆓渭水㆒を以て對となし、喜んで自ら勝へず、因つて、大京兆劉栖楚に唐突し、繫がるること一夕にして釋さる。後、復た閒に乘じ、蹇に策して李餘の幽居を訪ひ、鳥宿池中樹、僧推月下門の句を得、又僧敲に作らむと欲し、これを煉つて未だ定まらず。吟哦手を引いて推敲の勢をなし、傍觀するもの、亦た訝る。時に韓愈京兆に尹とし、車騎方に出づるや、覺えず、衝いて第三節に至る。左右擁して、馬前に至る。島、實を以て對ふ。愈、駐まること之に久しうして曰く、敲の字佳なり、と。遂に轡を竝べて歸り、ともに詩道を論じ、結んで布衣の交を爲し、授くるに文法を以てし、浮屠を去つて進士の試に應ぜしむ。その新に及第して、法乾無可精舍に寓居するや、姚合・王建・張籍・雍陶、皆琴樽の好あり。一日、宣宗、微行して寺に至り、鐘樓の上に吟聲あるを聞くや、遂に登り、島の案上に於て卷を取つて之を覽る。島、識らず、色を作し、臂を攘ひ、睨して之を奪ひ取つて曰く、郎君、鮮醴自ら足る、何ぞ此を會せむや、と。帝、樓を下つて去る。すでにして、島、これを覺り、闕に伏して罪を待つ。上、これを誚る。他日旨に中つるあり、乃ち長江主簿を授けられ、後、普州司倉に遷る。死するの日、家に一錢なく、唯だ病驢古琴のみ。島、詩を作る、頗る苦、況味蕭條、生計齟齬。かつて、獨行潭底影、數息樹邊身の詩に題して曰く、二句三年得、一吟雙淚流、知音如不㆑賞、歸臥故山秋、と。除夕に至る每に、必ず一歲の所作を取り、几上に置いて香を焚き、再拜して酒を酹し、祝して曰く、これ吾が終年の苦心なり、と。依つて、痛飮長謠して罷むといふ。島の詩、或は寒澁となし、幽奇となし、奧僻となし、これを指斥するもの多きこと、なほ孟郊の如し。然れども、前に盛唐の諸家あり、同時に韓柳元白あり、その間に介在して一家を成さむと欲せば、勢、諸家の未だ指を染めざるところに向つて、立脚地を求めざるべからず。而して、島の性情の孤僻なる、境遇の迍邅たる、ともに驅つて奧衍自ら喜ぶに至らしめしものならむ。その五律、尤も特色を見る。胡應麟、これを東野の古詩、長古の樂府、玉川の歌行に比し、稱して云ふ、その才、工力を具す、故に皆人に過ぐ、危峰絕壁、深澗流泉の如く、竝に自ら趣を成して相沿襲せず、と。まことに、知言といふべし。晚唐の李洞、黃金像を鑄て之に事へ、呼んで賈島佛といふ。その詩は、長江集と名づく。

孟郊、字は東野、湖州武康の人、少にして嵩山に隱る。性介にして諧合少し。愈、一見して、忘形の交を爲し、常に其字を稱し、これと文酒の間に唱和す。年五十、進士の第を得、溧陽尉に調せらる。縣に投金瀨・平陵城あり、林薄蒙翳、下に積水あり、郊、閒往、水傍に坐し、徘徊して賦し、曹務多く

廢す。令、府に白し、假尉を以て代らしめ、その半俸を分つ。鄭餘慶、東都留守となるや、水陸轉運判官に署し、その興元に鎭するや、奏して參謀となす。卒するとき、年六十四。張籍、私に諡して貞曜先生といふ。郊、詩を爲るに理難あり。愈、推重最も至れり。曰く、その高きこと魏晉に出で、懈らざれば古に及ばむ、その他は、漢氏に浸淫す、と。又曰く、昔年曾讀二李白杜甫詩一、長恨二人不二相從一、吾與二東野一生竝レ世、如何復能躡二其蹤一、我願化爲レ雲、東野化爲レ龍と。李觀又曰く、高處は古に在りて上なく、平處は下に二謝を見ると。但し、思、奇澁に苦み、後人時に異同なき能はず、遂に聯句の詩は、多く、韓、孟を改むるに係るといふに至る。黄山谷謂ふ、韓、何ぞ能く孟を改めむ、乃ち、孟、韓を改むるのみと。趙甌北、これを折衷して論を爲し、乃ち云ふ、この語、未だ過當を免れずと雖も、これを要するに、二人工力悉く敵し、實に未だ優劣し易からず、と。而して、東坡は、夜讀二孟郊詩一、細字如二牛毛一、孤芳擢二荒穢一、苦語餘二詩騷一、要レ當二門僧淸一、未レ足レ當二韓豪一といひ、隱居詩話には「孟郊の句、蹇澁窮僻、琢削暇あらず、眞に苦吟して成る」といひ、嚴羽は「孟郊の詩、刻苦、これを讀む人をして懽ばざらしむ」といひ、元遺山は、東野窮愁死不レ休、高天厚地一詩囚、江山萬古潮陽筆、合レ在元龍百尺樓、といひ、翁覃谿は「唐人の詩、皆讀むべくして、獨り讀むべからざるは、孟郊の詩なり」といへり。然れども、征婦怨に、君淚濡二羅巾一、妾淚滿二路塵一、羅巾長在レ手、今得レ隨二妾身一、路塵如得レ風、得レ上二君車輪一といひ、結愛に、結レ妾獨守レ志、結レ君早歸レ意、始知結二衣裳一、不レ如レ結二心腸一、坐結行亦結、結盡有二年月一、といふが如きは、纏綿の思、喩意殊に妙、奇闢生新、その專ら之を賈島と竝稱し、郊寒島瘦を以て之を斥くるは、蓋し誤れり。

劉叉は、元和の時の人、亦た一節士。少にして放肆俠行を爲し、酒に因つて人を殺し、亡命せしが、赦に會して出で、更に節を折つて書を讀み、能く歌詩を作る。然れども、故時負ふところを恃み、貴人に俛仰する能はず、常に穿屐破衣、愈が天下の士に接するを聞き、歩して、これに歸す。氷柱・雪車の二詩を作るや、盧仝・孟郊の右に出づ。樊宗師見て、ひとり拜を爲す。能く面のあたり、人の短長を道ふも、その義に服すれば、又彌縫すること、親屬の如く然り、後、爭語して賓客に下る能はざるを以て、因つて、愈の金數斤を持して去る。曰く、これ墓中の人に諛うて得たるのみ、若かず、劉君に與へて壽を爲さむには、と。愈止むる能はず、遂に齊魯に歸り、終るところを知らず。

韓愈の雄厚博大に加ふるに、孟郊・賈島の寒瘦、李賀・盧仝の怪詭、張籍・王建の平麗を以てす、これ實に中唐の新調なり。晩唐の詩、自個の特色を以て樹立する二三の名家を除いて、その他は、皆韓門の餘芳を傳ふるものにして、朱慶餘・陳標・任蕃・章孝標・司空圖・項斯の如きは、張籍を學び、李洞・方干・姚合・俞鳧・周賀、及び九僧の如きは、賈島を學びたり。但だ、韓と李とは、腹笥宏富、經營慘澹たるものに非ざれば、到底模擬すべからざるを以て、遂に替人なく、宋明以後、時に私淑するものを出せしのみ。

韓昌黎集卷一

古詩

元和聖德詩 幷序

臣愈頓首再拜言。臣伏見皇帝陛下卽位以來。誅流姦臣。朝廷清明。無有欺蔽。外斬楊惠琳・劉闢。以收夏蜀。東定靑徐積年之叛。海內怖駭。不敢違越。郊天告廟。神靈歡喜。風雨晦明。無不從順。太平之期。適當今日。臣蒙被恩澤。日與羣臣序立紫宸殿陛下。親望穆穆之光。而其職業又在以經籍敎導國子。誠宜率先作歌詩。以稱道盛德。不可以辭語淺薄。不足以自效爲解。輒依古作四言元和聖德詩一篇。凡千有二十四字。指事實錄。具載明天子文武神聖。以警動百姓耳目。傳示無極。其詩曰。

【訓讀】臣愈、頓首再拜して言す。臣、伏して見れば、皇帝陛下、位に卽いて以來、姦臣を誅流して、

朝廷淸明、欺蔽あるなし。外は楊惠琳・劉闢を斬つて、以て夏蜀を收め、東は靑徐積年の叛を定め、海內怖駭して、敢て違越せず。天に郊し、廟に告げ、神靈歡喜、風雨晦明、從順ならざるなし。太平の期、適ま今日に當れり。臣、恩澤を蒙被し、日に羣臣と紫宸殿の陛下に序立して、親しく穆穆の光を望む。しかも、その職業、又、經籍を以て國子を敎導するに在り。誠に宜しく率先して歌詩を作り、以て盛德を稱道すべし、辭語淺薄、以て自ら效すに足らざるを以て解と爲すべからず。輒ち古に依つて、四言元和聖德詩一篇、凡そ千有二十四字を作り、事を指して實錄し、具に明天子の文武神聖を載せ、以て百姓の耳目を警動し、無極に傳示す。その詩に曰く、

皇帝卽阼(一)。物無違拒。　皇帝阼に卽いて、物に違拒なし。
曰(二)暘而暘。曰雨而雨。　暘れといへば暘り、雨ふれといへば雨ふる。
維是元年。有(三)盜在夏。　維れ是れ元年、盜あり夏に在り。
欲覆其州。以踵(四)近武。　その州を覆して、近武を踵がむと欲す。
皇帝曰嘻。豈不在我。　皇帝曰く、嘻、豈に我に在らざらむや。
負(五)鄙爲艱。縱則不可。　鄙を負んで艱を爲す、縱さば不可と。

出(六)師征之。其衆十旅(七)。　師を出して之を征す、その衆十旅。
軍其城下。告以福禍。　その城下に軍し、告ぐるに福禍を以てす。
腹(八)敗枝披。不敢保聚(九)。　腹敗れ、枝披けて、敢て保聚せず。
擲首陴(一〇)外。降(一一)幡夜豎。　首を陴外に擲ち、降幡夜豎つ。
疆外之險。莫(一二)過蜀土。　疆外の險、蜀土に過ぐるは莫し。
韋(一三)皐去鎭。劉闢守後。　韋皐、鎭を去り、劉闢、守後たり。
血(一四)人于牙。不肯吐口。　人を牙に血ぬつて、肯て口を吐かず。
開庫啗士。曰隨所(一五)取。　庫を開いて士に啗はしめ、曰く、取るところの隨にせむ。
汝張汝弓。汝伐汝鼓。　汝は汝の弓を張り、汝は汝の鼓を伐て。
汝爲表書。求(一六)我帥汝。　汝は表書を爲つて、我を求めて汝に帥たらしめよと。
事始上聞。在列咸怒。　事始めて上聞するとき、在列咸な怒る。
皇帝曰然。嗟遠士女。　皇帝曰く、然り、嗟、遠き士女。
苟附而安。則且付與。　苟くも附いて安んせば、則ち且く付與せむと。

讀(一七)命於庭。出(一八)節少府。　命を庭に讀んで、節を少府より出す。
朝發京師。夕至其(一九)部。　朝に京師を發して、夕に其部に至る。
闢喜謂黨。汝振(二〇)而伍。　闢、喜んで黨に謂ふ、汝、而の伍を振へよ。
蜀可全有。此不當受。　蜀は全く有つべし、これ當に受くべからず、と。
萬牛臠(二一)炙。萬甕行酒。　萬牛、臠炙して、萬甕、酒を行る。
以錦纏股。以(二二)紅帕首。　錦を以て股に纏ひ、紅を以て首に帕す。
有(二三)恇其兇。有餌其誘。　恇れて其れ兇となれるあり、餌もて其れ誘はれたるあり。
其出穰(二四)穰。隊以萬數。　その出づる穰穰として、隊、萬を以て數ふ。
遂刼(二五)東川。遂據城阻。　遂に東川を刼し、遂に城阻に據る。
皇帝曰嗟。其又可許。　皇帝曰く、嗟、其れ又許すべけむや、と。
爰(二六)命崇文。分卒禁禦。　ここに崇文に命じ、卒を分つて禁禦せしむ。
有安其驅。無暴我野。　その驅ることを安にするあれ、我が野を暴すること無かれ。
日(二七)行三十。徐壁其右。　日に行くと三十、徐に其右に壁す。

闢黨聚謀。鹿(二八)頭是守。　闢の黨聚まり謀つて、鹿頭是れ守る。
崇文奉詔。進退規矩。　崇文　詔を奉じて、進退規矩あり。
戰不貪殺。擒(二九)不濫數。　戰つて殺を貪らず、擒にして數を濫せず。
四方節度。整兵頓馬。　四方の節度、兵を整へ、馬を頓す。
上章請討。俟命起坐。　章を上つて討たむことを請ひ、命を俟つて起坐す。
皇帝曰嘻。無汝煩苦。　皇帝曰く、噫、汝を煩苦すること無けむ。
荆(三〇)幷洎梁。在國門戶。　荆幷洎び梁は、國の門戶に在り。
出師三千。各選爾(三一)醜。　師を出すこと三千、各爾の醜を選せよ、と。
四(三二)軍齊作。殷(三三)其如阜。　四軍齊しく作つて、殷たること其れ阜の如し。
或拔其角。或脫(三四)其距。　或は、其角を拔き、或は其距を脫す。
長驅洋洋。無有齟(三五)齬。　長驅洋洋、齟齬あることなし。
八月壬午。闢棄城走。　八月壬午、闢、城を棄てて走る。
載妻與妾。包裹稚乳。　妻と妾とを載せて、稚乳を包裹す。

是日崇文。入處其宇(三六)。　この日、崇文、入つて其宇に處る。

分散逐捕。搜原剔藪。　分散して逐捕し、原を搜り、藪を剔る。

闢窮見窘。無地自處。　闢、窮して窘められ、自ら處るに地なし。

俯視大江。不見洲渚。　俯して大江を視るも、洲渚を見ず。

遂自顚倒。若杵投臼。　遂に自ら顚倒して、杵の臼に投ずるが若し。

取(三七)之江中。枷(三八)脰械手。　これを江中に取つて、脰に枷し、手に械す。

婦女纍纍。啼哭拜叩。　婦女纍纍、啼哭して拜叩す。

來獻闕下。以告廟社。　來つて闕下に獻じて、以て廟社に告ぐ。

周示城市。咸使觀覩。　周ねく城市に示して、咸な觀覩せしむ。

解脫攣(三九)索。夾(四〇)以砧斧。　攣索を解脫し、夾むに砧斧を以てす。

婉婉弱子。赤立傴(四一)僂。　婉婉たる弱子、赤立して傴僂す。

牽頭曳足。先斷腰膂。　頭を牽き、足を曳いて、先づ腰膂を斷つ。

次及其徒。體(四二)骸撐拄。　次に其徒に及び、體骸撐拄。

末乃取闢。駭汗如寫。　末に乃ち闢を取れば、駭汗寫ぐが如し。

揮刀紛紜。爭(四三)刌膾脯。　刀を揮ふこと紛紜、爭ひ刌いて膾脯にす、

優賞將吏。扶(四四)珪綴組。　將吏を優賞して、珪を扶り、組を綴ぬ。

帛堆其家。粟塞(四五)其庾。　帛は其家に堆し、粟は其庾を塞ぐ。

哀憐陣歿。廩給孤寡。　陣歿を哀憐し、孤寡を廩給す。

贈官封墓。周(四六)匝宏溥。　官を贈り、墓を封じ、周匝宏溥。

經戰伐地。寬免租簿。　戰伐を經たる地は、租簿を寬免す。

施令酬功。急疾如火。　令を施し、功に酬いて、急疾なること、火の如し。

天地中間。莫(四七)不順序。　天地の中間、順序あらざるなし。

幽(四八)恆青魏。東盡海浦。　幽恆青魏、東、海浦に盡く。

南至徐蔡。區外雜虜(四九)。　南は徐蔡に至り、區外の雜虜。

怛(五〇)威赧德。蹴(五一)踏蹈舞。　威に怛れ、德に赧ぢて、蹴踏蹈舞す。

掉(五二)棄兵革。私習簋(五三)簠。　兵革を掉棄して、私に簋簠を習ふ。

(五四)來請來觀。(五五)十百其耦。　來り請ひ、來り觀し、十百、その耦あり。

皇帝曰吁。(五六)伯父叔舅。　皇帝曰く、吁、伯父叔舅。

各安爾位。訓(五七)厥毗晦。　各爾の位に安んじ、その毗晦を訓へよ、と。

正月元日。初見宗祖。　正月元日、初めて宗祖に見ゆ。

躬執百禮。登降拜俯。　躬、百禮を執つて、登降拜俯。

薦于新(五八)宮。視瞻(五九)梁梠。　新宮に薦めて、梁梠を視瞻す。

慼見容色。淚落入俎。(六〇)　慼、容色に見はれ、淚、落ちて俎に入る。

侍祠之臣。助我惻楚。　侍祠の臣、我を助けて惻楚す。

乃以上(六一)辛。於郊用(六二)牡。　乃ち上辛を以て、郊に於て牡を用ふ。

(六三)除于國南。(六四)鱗筍毛簴。　國南を除うて、鱗筍毛簴あり。

廬幕周施。(六五)開揭磊砢。　廬幕周ねく施して、開き揭ぐること磊砢たり。

(六六)獸盾騰挐。(六七)圓壇帖妥。　獸盾騰挐して、圓壇帖妥。

天兵四羅。(六八)旂常婀娜。　天兵四に羅ねて、旂常婀娜たり。

(六九)駕龍十二。(七〇)魚魚雅雅。　駕龍十二、魚魚雅雅たり。

宵昇于丘。(七一)(七二)奠璧獻斝。　宵に丘に昇つて、璧を奠し、斝を獻ず。

衆樂驚作。(七三)轟𩔠融冶。(七四)　衆樂驚き作つて、轟𩔠融冶たり。

(七五)紫焰(七六)噓呵。(七七)高靈下墮。　紫焰噓呵して、高靈下り墮つ。

羣星從坐。(七八)錯落(七九)傪哆。　羣星坐に從つて、錯落傪哆たり。

(八〇)日君月妃。(八一)煥赫婐妮。　日君月妃、煥赫婐妮たり。

(八二)瀆鬼濛鴻。(八三)嶽祇嶪峩。　瀆鬼濛鴻、嶽祇嶪峩たり。

(八四)飫沃羶薌。產祥降(八五)嘏。　羶薌に飫沃して、祥を產し、嘏を降す。

鳳皇應奏。舒翼自拊。　鳳皇奏に應じ、翼を舒べて自ら拊つ。

赤麟黃龍。(八六)逶陀結糾。　赤麟黃龍、逶陀結糾たり。

鄉士庶人。(八七)黃童白叟。　鄉士庶人、黃童白叟。

踊躍歡呀。失喜(八八)噎歐。　踊躍歡呀、失喜して噎歐す。

乾清坤夷。(八九)境落褰舉。　乾清く、坤夷にして、境落褰舉す。

帝車廻來。日(九〇)正當午。　帝車廻り來り、日、正に午に當る。
幸丹鳳門。大赦天下。　丹鳳門に幸して、天下に大赦す。
(九一)滌濯剗磢。磨滅瑕垢。　滌濯剗磢して、瑕垢を磨滅す。
續功臣嗣。(九二)拔賢任耉。　功臣の嗣に續いて、賢を拔き、耉に任す。
孩養無告。仁滂施厚。　無告を孩養して、仁滂ねく、施厚し。
皇帝神聖。通達今古。　皇帝神聖にして、今古に通達す。
聽聰視明。(九三)一似堯禹。　聽は聰、視は明にして、一に堯禹に似たり。
生知法式。動得(九四)理所。　生れながらに法式を知り、動いて理所を得たり。
天錫皇帝。爲天下主。　天、皇帝に錫うて、天下の主たらしむ。
幷包畜養。無異細鉅。　幷包畜養して、細鉅を異にする無かれ。
億載萬年。敢有違者。　億載萬年、敢て違ふ者あらむや。
皇帝儉勤。(九五)盥濯陶瓦。　皇帝、儉勤、陶瓦を盥濯す。
斥遣浮華。好此(九六)綈紵。　浮華を斥遣して、この綈紵を好む。

敕戒四方。侈則有咎。　四方に敕戒すらく、侈るときは咎あらむ。
天錫皇帝。多麥與黍。　天、皇帝に錫うて、麥と黍と多し。
無召水旱。(九七)耗于雀鼠。　水旱を召くことなかれ、雀鼠に耗ゆ。
億載萬年。有富無窶。　億載萬年、富めるあつて窶しきこと無けむ。
皇帝正直。別白善否。　皇帝正直にして、善否を別白す。
擅命而狂。既翦既去。　命を擅にして狂たるは、既に剪り、既に去る。
盡逐群姦。靡有遺侶。　盡く羣姦を逐うて、遺侶ある靡し。
天錫皇帝。(九八)厖臣碩輔。　天、皇帝に錫うて、厖臣碩輔あり。
博問遐觀。以置左右。　博く問ひ、遐く觀て、以て左右に置く。
億載萬年。無敢余侮。　億載萬年、敢て余を侮るもの無けむ。
皇帝大孝。慈祥悌友。　皇帝大孝、慈祥悌友あり。
怡怡愉愉。奉(九九)太皇后。　怡怡愉愉として、太皇后に奉ず。
(一〇〇)浹于族親。濡及(一〇一)九有。　族親に浹くして、濡、九有に及ぶ。

天錫皇帝。與天齊壽。　天、皇帝に錫うて、天と壽を齊しくす。

登茲太平。無怠永久。　この太平に登つて、永久を怠ることなからむ。

億載萬年。爲父爲母。　億載萬年、父たり、母たり。

博士臣愈。職是訓詁。(一〇二)　博士臣愈、この訓詁を職とす。

作爲歌詩。以配吉甫。(一〇三)　歌詩を作爲して、以て吉甫に配す。

【字解】【一】卽阼　史記の漢文帝本紀に皇帝卽阼とあつて、朱熹の考異に「阼は東階を謂ふなり」とある。阼は卽ち主人の階、一番上の階段で主位に居るべきものの坐すべき處である。されば、登阼といへば天子が新に最高階段に坐わるといふことで、卽ち天位に卽かれたといふことになる。後には、踐祚といひ、卽ち「阼、或は祚に作る」といひ、示扁の字を使つて居るが、これは、何時頃よりか因襲的に誤つて來たので、正しくは踐阼と書かればならぬ。【二】曰暘而暘、曰雨而雨　書經の洪範に「八庶徵、曰雨、曰暘、曰肅時雨若、曰乂時暘若」とあるを用ふ。【三】有盜在夏　これは楊惠琳の亂を指したので、舊唐書に「夏州節度使韓全義、入朝す。その甥楊惠琳、留後に知たり、城に據つて叛す、詔して、河東天德の兵を發して之を誅す」とある。【四】踵近武　踵は繼ぐ、武は步。近武は近き前例、つまり最近の前例を繼ぐ。これより先、德宗建中の間、李希烈等、反を爲し、ここに至つて、楊惠琳、劉闢等、相繼いで起つた。【五】負鄙爲艱　鄙は邊鄙、艱は艱難なる事局、卽ち騷亂。邊地の要害を恃んで叛逆を企てる。【六】出師　この時、嚴綬、河東に在り、表して之を討たむことを請ひしに因り、詔して、天德軍に合して之を擊たしめたといふので、特に兵士を繰り出したといふのではない。【七】十旅　朱註に「按ずるに、周禮、五人を伍となし、五伍を兩となし、四兩を卒となし、五卒を旅となせば、一旅五百人にして十旅五千人なり、亦た順を以て逆に討ち、師、衆に在らざるの意を見るなり」とある。【八】腹敗枝披　腹の眞中が裂け、片片に出て居る枝が折れるといふので、卽ち內訌が生じたといふこと。【九】保聚　團結すること。【一〇】降外　左

傳昭公十八年に授兵登陴とあり、說文に城上女牆とある。【一一】降幡夜豎　舊唐書に「夏州兵馬使張承金、惠琳を斬り、首を傳へて以て獻ず」とある。【一二】其過蜀士　左思の蜀都賦に「臨谷爲塞、因山爲障、一夫守隘、萬夫莫向、由此言之、天下執險」とあり、李白の蜀道難にも劍閣崢嶸而崔嵬、一夫當關、萬夫莫開、所守匪親、化爲狼與豺とある。【一三】韋皐去鎭、劉闢守後　唐書に「永貞元年八月、劍南川西節度使韋皐卒す、行軍司馬劉闢、自ら留後と稱す」とある。【一四】血人于牙、不肯吐口　舊唐書に「闢、かつて病む、諸の病を問ふもの來るを見る。皆手を以て地に據り、倒行して闢の口に入る。闢、因つて狂殺して之を食ふ」とある。【一五】隨所取　朱註に「これ乃ちその士卒を誘啗するの詞を述ぶ」とある。「取るところの儘にせむ」といふ意。【一六】求我帥汝　唐書に「闢、主後たり、務めて諸將を諷して、旄節を徼む」とあつて、卽ち朝廷に請願書を出して、自分を本當の節度使に推擧せよといふ意。【一七】讀命於庭　詔命を王庭で讀み上げる。【一八】出節少府　唐書百官志に「符寶郎、凡そ將を命じ、使を遣すには、皆旌節を賜ふ、旌は以て賞を顓し、節は以て殺を顓す」とあつて、兵馬の權を授けられる時には、少府といふ禁中の倉庫に藏まつてある節鉞を取り出して、これを節度使に與へる。【一九】其部　部は屯營、蜀中を指す。舊唐書に「憲宗、はじめて卽位し、無事、人を息ましむるを以て、務と爲し、遂に闢に授けて、劍南西川節度使に充つ」とある。【二〇】振而伍　汝の部伍を整へよ、卽ち叛亂の準備なること、舊唐書に「闢、益す凶悖、不臣の言を出して、三川に都統たらむことを求む」とある。【二一】膂炙　膂は肉の切れ、炙はあぶる、ここでは、牛の肉を炙つて酒の肴とする。【二二】以紅帕首　赤い布片で鉢卷をする、卽ち味方の分かり易い樣に一定のしるしをつけるといふ義。實錄に「禹、塗山に會するの夕、大風雷震、甲兵卒千餘人あり、その甲を被らざるものは、紅綃を以て其額を抹す、これより遂に軍容の服となる」とある。【二三】有恇其兇、有餌其誘　恇は怯にして之を畏るること。朱註に「言ふは、その暴を畏るるものあり、その利を貪るものあり、故に之に從ふもの衆きのみ、本心より從を樂むに非ざるなり」とあり、蔣之翹の註に「黃石公の記に、芳餌の下には必ず懸魚あり、重賞の下には必ず死夫あり、詩意これを取る」とある。【二四】穰穰　衆きこと、詩經に降福穰穰とある。【二五】劫東川　舊唐書に「上、すでに闢に三川を許さず。元和元年正月、闢、遂に兵を發して、東川節度使李康を梓州に圍み、同幕盧若を以て東川節度使と爲さむと欲し、因つて、梓州を陷れて、李康を降す」とある。【二六】受命崇文、分卒禁禦　崇文、姓は

高。禁衞は、宮中の宿衞。つまり、高崇文に命じ、近衞の兵士を分つて、征伐に赴かしめるといふこと。舊唐書の高崇文傳に「劉闢、兵を阻む、朝議討伐、宰臣杜黄裳、武長城使高の以て功を成すべきを薦め、神策行營節度使に充て、諸鎭の兵を統べて、闢を討たしむ」とあり、憲宗紀に「元和元年正月戊子、神策行營節度使高崇文、兵馬使李元奕に詔し、歩騎を率ゐて、東川の李康、興元の嚴礪の師と犄角進討せしむ。崇文は斜谷よりし、元奕は駱谷よりし、ともに梓潼に會す」とある。【二七】日行三十　三十里といへば、日本里數で五里、それが一日の行軍道程で、唐書の賈耽之傳に「吉行には五十里、師行には三十里」とある。【二八】鹿頭　關名、舊唐書に「成都の北、一百五十里に鹿頭山あり。闢、城を築いて以て守り、又八柵を連ねて、以て王師を拒ぐ。この日、賊二萬を破り、明日又萬勝堆に勝つ。崇文、驍將高霞寓をして、攻めて其堆を奪はしめ、凡そ八戰して皆大に捷つ」とある。【二九】擒不濫數　朱註に「濫數とは、蓋し左傳數俘の語を用ふ」とあり、左傳襄公二十五年の條下「俘を數へて出づ」とある。これは俘虜の數を大袈裟に報告せざること。【三〇】荊井泊梁　泊は及といふ字、荊は荊南節度使裴均、井は河東節度使嚴綬、梁は山南西道節度使嚴礪を指す。【三一】胥䩑　䩑は類。【三二】四軍　高崇文の本隊と荊井梁三節度の兵とを併稱す。【三三】脫其如皐　脫は安、つまり動かずして靜かなること、如皐は詩經に如ㇾ岡如ㇾ阜とあるに本づく。【三四】脫其距　距は雞の蹴爪。角を拔き、距を脫すといふは、次第に敵の要害を取り崩して行くこと。【三五】齟齬　楚辭に圜鑿而方枘兮、吾固知ニ其齟齬而難ㇾ入とあつて、その註に「齟齬は相距ぐ貌」とある。ここでは部署に違ふといふ義。【三六】其宇　その城內に入り込んで營を布く。【三七】取之江中　舊唐書に「闢、逆黨盧文若と、西、吐蕃に走る。崇文、高霞寓等を遣し、これを追うて羊灌田に至る。闢、自ら岷江に投ず。これを擒にし、西蜀平らぎ、王師、成都に入る」とある。【三八】枷脰械手　脰は首、首枷を嵌め、又手錠をかける。舊唐書に「闢、京師に檻送す。路に在つて飲食自若、以爲へらく、死に當せずと。京西の臨皐驛に至るに及び、左右神策の兵士、これを迎へ、帛を以て首及び手足に繫け、曳いて入る。乃ち驚いて曰く、何ぞ乃ち是に至る」とある。【三九】擘索　引きしめてあつた繩。【四〇】夾以砧斧　胸に砧を當て、腰に斧を當て、砧と斧とで身體を挾んで置いて、その後、刑に處する。戰國策に「范雎曰く、臣の胸、以て椹質に當るに足らず、要、以て斧鑕を待つに足らず」とある。【四一】傴僂　身を屈める。張南軒の言に「退之の聖德頌を讀み、婉婉弱子、赤立傴僂、牽頭曳足、先斷腰膂の處に至るや、世榮子由の徒を擧げて曰く、

これ李斯秦を頌するも、言ふに忍びざるところ、しかも、退之自ら謂ふ、風雅に媲づるなしと。何ぞ其れ陋なるや。この說如何。曰く、退之、筆力高く、斬截の處を得たり、卽ち他を斬截す、豈に此を知らざらむや。この言を爲す所以の者は、蓋し說あり、藩鎭をして之を聞き、罪を畏れ、禍を懼れ、敢て畔かしめざらしむるのみ。今人、これを讀んで此に至り、猶は且つ寒心す、況んや、當時の藩鎭をや。これ正に是れ、風雅に合する處、只だ牆有茨、桑中諸詩の如し。或は以爲へらく、必ずしも載せず、と。而して、龜山は乃ち曰く、これ、書、夷狄に滅ぼさるるの由たり、退之の言、亦た此意なり、と。退之の意、子由に過ぐること遠し。大抵、前輩は輕しく議すべからず」とあつて、この四句は、いかにも慘酷で、忌まはしい樣であるが、これは、藩鎭叛逆の念慮を根絕せむが爲めであるといふこと。【四二】體骸撐拄　屍骸と死骸とが支へ合つて、やがて仆れる。古樂府に死人骸骨相撐拄といへると同轍。唐書に「闢を子城の西南獨柳樹下に斬る、子超郎等九人、部將崔綱と、次を以て誅せらる」とある。【四三】爭刌膾脯　或は膾となし、或は脯とする樣に、少しづつ肉を取つて切りさいなむ。樊汝霖の譜註に「この詩、蘇黃門、ひとり然らずと謂ふ、且つ曰く、これ、特に、憲宗、崇文に命じて、一劉闢を誅するのみ。その闢賊を棄てて走り、爭ひ切つて膾脯にすると言ふは、何ぞ其れ瑣屑の甚しきや。これを造語工といはば可、これを雅體を得たりといふは未だしきなり。詩に文王崇を討ち、武王紂を伐つを載す、もとより自ら體あり、退之ひとり此に至らざるか、亦た其れ少年爲るところの文ならむ、と。按ずるに、公年四十、少といふべからず、大抵德足らざれば夸、憲宗功烈、もとより偉なるも、文武に比すれば間あり。王荊公、かつて詩を論じて曰く、周頌の詞約、約は嚴たる所以、德盛なるが故なり、魯頌の詞侈、侈は夸たる所以、この詩や其れ亦た魯頌の謂か」とある。【四四】扶珪綴組　珪は諸侯を封ずる時に賜ふところの玉、組は印綬。【四五】其庾　庾は米倉。【四六】周匝、宏溥　手ぬかりなく且つ廣い範圍に行き亙る。この邊の事實は、唐書に「元和元年十月、劍南東西川山南西道、今歲の賦を減じ、脅從の將吏を釋し、陣亡者を葬り、その家に廩すること五歲。二年正月、文武官に勳爵を賜ふ」とある。【四七】莫不順序　整然たる次序に就かぬものはない、卽ち國內の事物が總て整理されるといふこと。【四八】幽恆青魏、徐蔡　或は魏幽恆青に作つてある。魏は魏博節度、幽は幽州盧龍節度、恆は成德軍節度、青は淄青平盧節度。「按ずるに、唐書地理志、魏州魏郡は今の大名府、幽州范陽郡は今の燕山府、鎭州、常山縣は今の眞定府、青州、北海郡なり、魏は田季安、幽は劉濟、恆は王士眞、

青は李師道、徐は張愔、蔡は吳少誠、これ皆一時藩鎭の國なり」とある。【四九】雜虜　夷狄に同じ。【五〇】怛威懷德　天子の威に懾れ、天子の德に懷き入るといふので、韓愈の上尊號表に怛威懷德とあると同義。【五一】蹴踖　舞蹈の貌。【五二】掉棄　掉は揮つ。【五三】簠簋　宗廟に於て、黍稷を盛る器、即ち祭具、簠簋を習ふとは、禮樂を講習すること。【五四】來請來覲　朝請參覲。【五五】十百其儔　儔は類、その類の多きこと十百を以て數ふべき程であるといふ意。【五六】伯父叔舅　朝請參覲せしものを親んで呼ぶので、禮記に「天子の吏、天子の同姓は之を伯父といひ、異姓は之を伯舅といふ。九州の牧、天子の同姓は之を叔父といひ、異姓は之を叔舅といふ」とある。【五七】甿畦　田間の百姓。【五八】新宮　先帝、即ち順宗の廟宮をいふ。【五九】梁梠　梁はたるき、梠は檐木、釋名に「梠、或は之を櫋といふ、櫋頭に綿連して齊平ならしむるなり」とある。【六〇】俎　肉を盛る祭器。【六一】上辛　月の中の初の辛の日、穀梁傳に「郊は正月より三月に至る、郊の時なり。我は十二月下辛を以て正月上辛を卜す、もし從はざれば正月下辛を以て二月上辛を卜す、もし從はざれば二月下辛を以て三月上辛を卜す、もし從はざれば郊せず」とある。又禮記「郊之用辛也」の註に「辛日を用ふるものは、凡そ人君たるもの、當に齋戒して自ら新にすべきのみ」とある。つまり辛の日を擇ぶといふのは、辛は新と音通で、天子が齋戒沐浴自ら新にするといふ意に取つたのである。【六二】用牡　牡は牡牛。【六三】除于國南　南郊に於て祓除の式を行ふ、つまり祭壇を設ける爲め、第一に土地を點定する。【六四】鱗筍毛簴　周禮考工記、梓人爲筍簴の註に「樂器縣るところ横なるを筍といひ、植なるを簴といふ」とある。すると、鱗筍は磬などを懸ける横木、毛簴は鐘を縱に懸ける器。【六五】闓揭磊砢　磊砢は魁壘の貌、蓋を開き揭ぐる樣が如何にも大きいといふ意。【六六】獸盾騰挐　盾は木で造つて、その上に龍虎が畫いてある、それが即ち獸盾。騰挐は、跳り上つて摑みかからむとする貌。盾の面なる龍虎の畫の活活としたるをいふ。【六七】圜壇帖妥　禮記に「圜邱、天に象る」といひ、賀循の上れる郊壇制度に「漢の舊儀、南郊の圓壇八陛、宮南七里に於てす」とある。帖妥は、穩にしつらへること。【六八】旂常婀娜　旂常は旗、婀娜は盛なる貌。【六九】駕龍十二　馬八尺以上を龍といふ。十二は十二閑といつて、天子の厩は十二棟に成つて居る。多くの御厩の中から、天晴な駿馬を選び出して、車を引かせる。【七〇】魚魚雅雅　蔣之翹の註に「雅雅の字、晉史劉毅傳に見え「洛中雅雅として三嘏あり」魚魚の字、未だ詳ならず。愚按するに、古樂府朱鷺の曲に朱鷺魚以烏、鷺何食、食茄下。烏の字、古しへ、雅と同じ、雅は下と叶ひ、はじめて其音を得、魚以雅とは、朱鷺の威儀かくの如きを言ふなり。韓文、これに本づく、要するに、車駕整肅の意とある。元來、魚は魚貫などといつて、必ず行列をなすものであるし、鴉も飛んで行くときには、隊伍をなして行くので、魚隊とか、鴉陣とかといふ熟語もある位。魚魚雅雅は、魚の如く、鴉の如く、行列が能く整つて居るといふこと。【七一】圓丘　即ち天を祭る處。【七二】蒼璧獻騂　白虎通に「璧は、外圓、天に象り、内方地に象る」とあつて、天地を祭る時に用ひる。次に禮記に「夏后氏は騩を以てし、商は犉を以てし、周は騂を以てす」とあつて、三代の間、各その用器が違ふ。ここでは、押韻の都合もあるが、特に騂の字を用ひたのであらう。【七三】轟軋　轟は衆車の聲、軋は相摩つこと。その音響の大きいこと。【七四】融洽　和洽、即ち互に調和して亂れざること。【七五】紫焰　松明の光を形容して云ふ。【七六】噓呵　天に燃えあがる。【七七】高靈　天神。【七八】錯落　その位置が交錯して居る。【七九】侈哆　詩經に「哆兮侈兮、成是南箕」とあつて、その註に「哆は大なる貌、侈哆は物に因つて之を大にするの名。星を形容して云ふ」とある。【八〇】日君月妃　禮記に「君の后とは、猶ほ日と月との如し」とあり、前漢書の李尋傳に「日は衆陽の宗、輝光の燭するところ、萬物同尊、人君の表なり」とあり、唐の楊炯渾天儀賦に「月也者羣陰之紀、上天之使、異姓之王、后妃之事」とある。【八一】煥赫嫫婳　煥赫は光り輝く貌、嫫婳は弱好の貌。煥赫は日、嫫婳は月をいふ。【八二】瀆鬼鴻濛　瀆鬼は四瀆、即ち四大河の神。鴻濛は、文選の註に「廣大の貌」とある。【八三】嶽祇嶪峩　嶽祇は嶽神、即ち五嶽の神、嶪峩は山高き貌。【八四】飫沃膻薌　膻薌の二字は禮記に見え、膻は羊臭、薌は穀氣とある。これは、天を祭るとき、犧牲の上に香ばしき草を並べて、これに酒を沃ぎかけ、それを燒くと、非常に香ばしい氣が空中に騰る。飫沃は、飫饜の意だらうといふので、その氣を十分に受納されるといふこと。【八五】降頫　頫は俯。【八六】逶陀結糾　蟠る貌。【八七】黃童白叟　黃口の小兒、白髮の老人。【八八】噎歐　喜に咽ぶ。【八九】墟落萋靡　落は部落、萋靡は空中に揚がること。人の住む處まで、神神しく成つたといふ意。【九〇】日正當午　天地を祭るは、夜を旨とし、朝になれば濟むので、當午といへば、太陽が其地の子午線に來るときで、即ち正午、校本に「一に日始東吐」とあつて、蔣之翹は「蓋し疑らくは、郊祀車を回し、應に午に至るべからざるなり、考を俟つ」といつた。【九一】滌濯剷磢　水で洗ひ落し、刀で削つて磨く、すべて塵垢汙穢を取り去る義。【九二】拔賢任耆　老成の人を任用する。【九三】

一似兜鳥　一似の二字は、洪興祖の辨證に「蓋し禮記一似ニ重有レ憂者一の語を取る。黄魯直云ふ、退之の文、老杜の詩、一字として來る處なきはなし、後人書を讀むこと少し、故に韓杜自ら此語を作すと謂ふのみ」とある。【九四】理所　理に當る處。【九五】盥漱陶瓦　顏を洗つたり、漱をするにも、我我と同じ様に陶製の者を用ひられる。【九六】綿紵　木綿に均しき粗衣。【九七】耗于雀鼠　雀や野鼠に食ひ減らされる。【九八】巨臣碩輔　巨碩、ともに大の義、大臣及び輔佐の名臣。【九九】太皇后　憲宗の母昭憲皇太后王氏。【一〇〇】洽　あまねくする、手厚くする。【一〇一】九有　詩經は奄ニ有九有一といつて、即ち九州。【一〇二】訓詁　原註に「爾雅に釋詁釋訓あり。釋詁は古今の異辭を釋し、釋訓は物の形貌を辨ず、訓詁は即ち歌詩なり」とある。【一〇三】以配吉甫　毛詩の序に「崧高、烝民、韓奕、江漢は、皆、尹吉甫、宣王を美するなり」とあり、又詩の烝民に吉甫作レ頌、穆如ニ清風一とあつて、古しへの吉甫と相配する様にしたいといふ意。

【題義】元和は、唐の憲宗の年號で、憲宗は晩年こそ不評判であるが、その初は、天晴一代の英主として、唐室中興の望を囑されて居たのである。順宗は、在位一年に滿たず、生來病身であつた爲に、全然政治に與からず、王伾・王叔文といふものが實權を握り、そして、韋執誼などいふ權臣と共に、黨派を立てて大政を攪亂した。この二王の徒は、門地もとより低く、それが朝政を革進しやうといふのであるから、自然に陰謀を廻らし、蹤跡詭祕に渉ることもあり、從つて、折角の志は有りながら、後世から、非常に惡く言はれて居るのは、聊か氣の毒である。元來、二王にして純然たる小人どもならば、柳宗元・柳禹錫等が、あれ程に心を輸して之に與する筈はない。しかし、憲宗は、部屋住の時から、二王と相容れず、彼等の一黨が權威を恣にすることを看破されて居たから、順宗の崩後、即位されると、第一に王叔文の黨派を遠ざけて、維新の政を布かれた。この時に當つて、藩鎭の諸將は、例の如く、毎に唐室を覬覦して、朝命を奉せずに居たから、憲宗即位、新政を布かるるを見て、自ら安んせず、往往兵を擧げて、朝廷に反抗したものがあつて、中にも、蜀の西川節度副使劉闢は、その最たるものといふべく、元和元年正月、反を爲したから、神策行營節度使高崇文に命じて之を討たしめた。三月、夏綏の留後楊惠琳が命を拒みしに因り、河東天德軍に詔し、討つて之を斬らしめた。四月、高崇文を以て東川節度副使とした。六月、崇文は、進んで鹿頭關を破り、連戰皆捷ち、九月遂に成都に攻め入り、劉闢を擒にし、京師に送つて之を斬り、蜀中悉く平定し、十月、崇文を以て西川節度使とした。かくの如く、憲宗は、神武の天子であつたから、さしもの大亂も、見る間に平らぎ、今後、朝威愈よ盛になるだらうと豫想された。韓愈は、江陵府法曹參軍であつたが、この年六月、召し還されて國子博士となつた。國子は、即ち國子學、主として、國子、即ち諸侯の長子を敎へる學校、博士は學位ではなく、學校の敎官といふ義で、國子博士といへば、今の學習院敎授といつた様なもので、行政事務に關係なき一の閒職である。韓愈は、憲宗の神武を讚尙すると共に、これに因つて、その知を得むが爲に、特に此詩を作つたのである。すると、この詩は、劉闢誅戮以後で、即ち同年十月頃の作であらう。それから、詩の前に在る序は、この詩を作つた由來を述べたのであるが、まことに明白で、分かり易いから、一一字解などは揭げずに、下にざつと講解することにする——臣

韓愈頓首再拜して申し上げます。私が伏して考へまするのに、皇帝陛下御卽位以來、先代の姦臣であつた王伾・王叔文乃至韋執誼の輩を、それぞれ誅戮したり、放流されたりしたから、朝廷は淸く明かに、再び君を欺いて聰明を蔽ふやうなことは無いやうに成つた。かくて、外に於ては、成夏節度使の留守居をして居る楊惠琳の如き、成都に居た西川節度副使劉闢の如きものが、相繼いで謀叛を企てたが、兵を出して、立どころに之を誅戮し、遂に夏蜀の地を取り戻し、長安の西なる邊疆の地は、悉く平定した。それから、長安より東に當つて居る靑州徐州には、平盧節度使李師道・徐泗濠節度使張建封等が、久しい前から、朝命を奉じなかつたが、それも、今次、朝威の漸く盛なるに驚いて、自然に歸服するやうになり、仍つて、積年の叛亂を平定することを得、海内、皆、天子の神武に怖れて、敢て朝廷の命令に違ふものも無い樣になつた。かくて、唐室中興の基礎を固めたから、帝王の唯一の大禮たる郊天告廟、卽ち天を祭り、先祖の宗廟に告げるといふ儀式を行はれた處が、神靈も、非常に御喜びに成つたと見えて、風雨晦明、從順ならざるはなく、折から、風雨であつたのも、その折、幸にも止んで晴れたといふ位。まことに、太平を期すべき時機は、丁度今日に當つて居ると申すべく、こんな目出たいことはない。臣韓退之は、恩澤を蒙つて、羣臣と共に、日日紫宸殿の陛下に順序正しく整列し、親しく穆穆たる天子の御顏を拜し奉つた。その上、私の職業は、國子博士で、經籍を以て諸侯の子弟を敎育する任に當つて居るから、誠に宜しく、先に立つて第一に歌詩を製作して、天子の盛德を稱道すべき筈であつて、辭語淺薄なるが爲に、到底報效を爲すに足らぬといふことを口實にして、それを作らぬ譯には行かぬ。そこで、古しへの詩の法に依つて、四言の體で、元和聖德詩一篇、凡そ一千有二十四字もある長いものを作り上げた。これ皆、事柄を指示して、實際を錄し、詳しく明天子の文武神聖なる德業を載せたものであつて、天下萬民の耳目を警動せしめ、徧ねく普天率土の果にまでも傳へ示す積りで、その詩は卽ち左に記す通りで御座りまする――この警動といふ二字が、全篇の趣旨であつて、兎角叛逆を企てたがる當時の民心を警めて、且つ感動させやうといふのである。されば、篇中に劉闢誅伐の事などを詳しく記述したので、今日朝威大に揚がり、一時は天子の威に服したから、この儘、續いて行けば、太平の御世となる、もし謀叛をすれば、立どころに、この劉闢の如く、誅罰踵を廻らさずといふ樣になるといふ意を逗露したので、これ卽ち警動の眞意である。同時に楊惠琳も亂を爲して誅せられたが、韓退之は、都に居て、自分で親しく目擊した譯でもないから、その事は、極めて簡單に片づけて仕舞つた。尤も、劉闢も、蜀中で亂を爲して、これとても、韓退之が其實況を見た譯ではないが、劉闢は、生擒にした上に、態態都に進れて來て、やがて斬に處し、前後の事實も大に明瞭であるから、この篇には、專ら其事を寫し出したので、ここらは、流石に、詳略その當を得たものである。

【詩意】今上皇帝、御卽位以來、聖德遍ねく行き渡つて居るから、天下萬物、御思召に違背したり、

反抗したりするものはなく、ひとり、人間のみならず、日の照るべき時には日が照り、雨の降るべきときには雨が降つて、何事も、皇帝の御意の儘ならぬものは無い位。然るに、即位の元年、叛逆の盜賊楊惠琳といふものが夏州に起り、其州を覆して己の所有となし、從來大逆を企てた李希烈・朱泚等の先例を繼がむとして居る。やがて、その事が朝廷に聞こえると、皇帝は、詔を下して「ああ此の如き逆徒を誅戮するのは、天子の職分ではあるまいか。かの楊惠琳は、夏州などいふ邊僻の要害を恃んで、事局の艱難を敢てしたものであるから、これを其儘に放棄して行くことは、一般の懲らしめにならぬ」と仰せられ、やがて、師を出して之を征することとなり、その兵は十旅、即ち五千人であつた。かくて、夏州の城下に攻め寄せて、賊徒に告ぐるに吉凶禍福を以てし、過を改めて歸順するやうにといつた處が、もともと、烏合の衆に過ぎぬから、忽ち内輪もめがして、中腹より破れ、片片の枝が折れるといふやうな安排で、團結が自然瓦解し、はては、その仲間の者が楊惠琳を討ち取つて、その首を女牆の外に投じ、夜の間に、降旗を竪てて、愈よ目出たく開城するといふ樣な事に成つた。それは扨て置き、王畿千里の疆外に在つて、天險を以て矜る處は、蜀が第一。その蜀には、はじめ韋皐といふものが節度使と成つて居たが、病死して其處に居なくなると、劉闢といふものが留後となつて、取り敢へず、一時代理として其跡を引き受けた。この劉闢といふ奴は、極めて兇暴獰惡な性質の者で、人に噛み付いて齒牙に血ぬり、敢て口より吐き出さず、その儘、人の肉を裂いて食つたと稱せられ、虎貙の本性、とても人とは思へぬ位。その上、久しく軍事出納の事を預かつて居たから、國庫を開いて財貨を兵士に與へ、先づ啗はすに利を以てし、何でも汝等の欲するものは、分捕勝手たるべし、その代り汝は汝の弓を張り、汝の鼓を打つて、聲威を張り、そして、表を朝廷へ上り「劉闢を此地の節度使に直して戴きたいと云つて請願せよ」といひ、やがて、愈よ其通りに運んで來た。その事が始めて上聞に達した時、朝廷在列の人人は、大に怒つて「劉闢は、まことに怪しからん奴だ、この儘には置けぬ」と言つたが、皇帝は、流石に思ふところあらせられたと見え「ハハー、さういふ次第か、元來、遠い蜀の土地の事ではあるし、その地の士女どもが、劉闢の配下に成つて、それで自ら安んずるものならば、それでも善いから、しばらく、その通りに致して、節度使の重職を付與して遣さうと仰せられ、任官の宣命を王庭に於て高らかに讀み上げ、節度使の證徴たるべき節鉞を少府といふ御庫から取り出し、愈よ敕使を派遣せられ、朝に長安を發し、夕に其屯營に至つて、遂に劉闢を西川の節度副使に任じて、節度の事を知らしむることにした。すると、劉闢は、愈よ付けあがり、その黨與に向つて「汝等は、各〻部伍を整へて、いつでも戰爭の出來る樣に用意せよ。もう一息で、蜀地全體を占有することが出來るぞ。されば、こんな敕命などは、いつそ受けぬ方が善い」といつて、謀叛の旗上げをすることになり、萬牛の肉を炙り、萬甕の酒を酌ましめ、大振舞の後に勢揃ひをなし、錦を以て股に纏ひ、赤い布片で鉢卷をなし、武裝を調へて、大に勢威を輝かした。勿論、その一味の者とても、心から叛

を欲したのではなく、劉闢の兇暴を恐れて、止むを得ず、屈服したものもあるし、金錢財帛を以て誘はるるを利として、之に付隨したものもあるが、兎に角、非常の多勢で、その隊の兵士は、萬を以て數へる位。はては、西川より東川に打つて入り、梓州の要害に據つて、その地を占領して仕舞つた。皇帝は之を聞かれ「さてさて不屆至極な奴、それでは、許す譯には行かぬ」と仰せられ、ここに神策軍使高崇文に命じて、近衞兵の幾分を割いて、蜀中に出征せしむることとし、人民の驅られて厭厭ながら賊に從つたものは、これを安撫し、そして、其地方を荒らさぬ樣にと懇に仰せられると、高崇文は、謹んで命を拜し、日に行くこと三十里、段段と蜀に攻め入つて、梓州の右方に駐屯せむとすると、劉闢は、その徒黨と謀議を凝らし、鹿頭關を守つて、そこで喰ひ止めやうとした。ここに、高崇文は詔を奉じて、進退ともに規矩に中り、戰つても濫りに敵兵を殺さず、俘獲をしても、大袈裟に其數を報告する樣な事はしなかつた。近衞の軍は、かくの如く、王者の師を以て自ら居り、まことに、堂堂たるものであつたから、四方の節度使どもも、その勢に恐れて、兵を整へ、馬を揃へて、出陣の用意を爲し、それから上書して「我我どもは、是非、劉闢を討ち平げたい。起つも、坐るも、君命の儘で、謹んで御差圖を待つて居ます」といつた。すると、皇帝は、之に答へて「イヤ、イヤ、其方にまで苦勞をかけるには及ばぬが、荊州、幷州、及び梁州、この三州は、蜀の北より西にかけ、その門戸ともなる地であるから、その三州の節度だけは、出兵して貰ひたい。但し、三千人だけで善いから、汝の同類の内から選んで呉れろ」といはれた。かくて、正面からは近衞の神策軍、他の三面からは、荊幷梁三州の兵を繰り出し、四路の兵馬、齊しく起り、その洪大にして動かざることは、さながら山の如く、或は角を拔き、或は蹴爪を引き剝すといふ樣に、次第に賊勢を殺ぎ、各部署を定め、洋洋然として長驅し、少しも手違なく、やがて鹿頭關を圍むまでに成つた。すると、劉闢は、力遂に敵せず、八月壬午の日に當つて、遂に城を棄てて逃げ出し、妻妾を車に載せ、幼兒をば包んで、一緒に連れて往つたが、その他の黨與は皆棄つぽかして仕舞つた。この日、官軍の總大將高崇文は、代つて其城に入り、おのが士卒を手分して、劉闢を追ひ捕へむとし、原野は勿論、森林藪澤までも、隈なく搜索させた。そこで、劉闢は、とうとう逃げ切れず、身の置き處なきまでに閉口して、牂牁江といふ岷江の上流に來かかり、俯して、大江を見ると、洲渚さへも分からぬが、後からは、追手が來るし、今は仕方がないといふので、自から顚倒して、江流に身を投じ、たとへば、杵を臼の中に投ずるが如く、勢よく落ち込んで仕舞つた。そこで、官軍は何の苦もなく、これを江中に取り押へ、首には首枷、手には手錠を御し、嚴重に縛り上げて仕舞つた。それから、ぞろぞろと引きも切らず、啼哭拜叩して命乞をする婦女どもまでも、珠數つなぎにして、劉闢と一緒に長安に送り、やがて、來つて闕下に獻じたから、天子は取り敢へず、逆賊退治の喜びを御先祖の廟に告げられた。それから、周ねく世人の戒とする爲に、城市の中を引き廻して、皆皆に見せしめられ、引廻しが濟むと、愈よ打首といふ順序

で、今まで堅く縛つてあつた繩を引きほどき、胸に砧、腰に斧を當てて、身體をぎゆッと挾んで置いて、やがて刑罰に處することにした。婉婉として、いとしげな小倅とても、容赦はせず、眞裸にして、ぶるぶると顫へて居るのを引ッ捕へて、無理に頭を牽き、足を曳いて、腰の番の處へ一あてザクリと當てると、身體が見事二つになつて、息が斷える。次に其一味の者どもをば殘りなく斬罪に處し、屍骸と屍骸とは、互に支へ合つて、やがて仆れて仕舞つた。さういふ風にして、最後に劉闢の番になると、性來兇惡な人非人も、慘憺たる刑罰施行の有樣を眼前に見せつけられたので、駭く汗は注ぐが如く、それをば、刀を揮つて一分づつ試し斬りにし、或は膾となし、或は脯とするといふ風に、切りさいなんで仕舞つた。劉闢以下、盡く誅に服したから、次は戰功ある將吏どもに優賞を施し、圭を賜はつて、王侯に封せられたものもあるし、印綬を腰に綴つて、大官に昇進したものもある。そして、布帛は其家に堆く、穀粟は其倉に滿つるといふ樣に、澤山の下され物があつた。生存者は、かくの如く、そして、陣亡者に對しても、十分に哀憐を加へ、その遺族たる孤兒寡婦には、それぞれ俸祿を頒ち賜はり、その本人には、或は官を贈り、或は墓を封じて、論功行賞の事は、行き亙らぬ隈もなかつた。それから、戰伐を經た地方には、篤と帳簿を調べて、今年の租稅を盡く免除された。かくて、令を施し、功に酬ゆることは、火の燃ゆるが如く、サッサと片づいて仕舞ひ、やがて、天地の中間は整然たる次序に就くやうに成つた。かういふ風に、劉闢の亂は、いつしか平らぎ、その跡始末も、すつかり濟んだ位であるから、幽恆靑魏より、東は海邊を極め、南は徐蔡二州に及び、その他、中國の外なる種種の蠻族どもに至るまで、各地方の節度使どもは、朝廷の威光に恐れ、天子の盛德に愧ぢ入り、踧踖として踏舞しつつ、心から敬意を表して、祝辭を申し上げ、從前の野心を絕ち、兵革を擲ち棄て、簠簋の取扱方を稽古して、禮節に心を寄せるやうになり、春秋に朝覲する者どもは、十百を以て數へる程に成つた。天子も、亦た之を優遇し「ああ伯父叔舅ども、各〻その位に安んじて、治下の農民どもを訓化する樣に」と、如何にも手厚く仰せられて、その心を收攬された爲に、今や四海の內、全く虞なしといふ樣に成つた。あくれば、元和二年正月元日、初めて祖宗の廟に參御せられて、御代拜にも命せられず、みづから百禮を執つて、登降拜俯の式を行はれ、次に、先帝順宗の殯宮に朝して、御供へ物をなし、その室の梁や棟木をじつと見詰められ、やがて、龍顏、愁の色を帶び、淚ははらはらと祭器の中にも落ちた位で、まことに感慨に堪へられぬ樣な御氣色であつた。そこで祭事に侍して居た臣僚も、これを見ると、自然感動し、天子の御嘆きを助け、悲しい聲を揭げることを禁じられなかつた。その次は郊に於て天地の祭を爲さむとし、翌翌日は、丁度、月の上旬の辛の日だといふので、牡牛を犧牲として、莊重なる祭を行はれた。もとより、前以て準備をなし、長安の南郊に新しき祭壇を修築し、壇上には磬を懸ける橫木と鐘を懸ける縱木とが交錯し、種種の樂器が備へられ、壇の周圍には、幔幕を施し、その規模の大なることは言を俟たず、前方には、すらりと盾を列ね、その面に繪いた龍や虎

は、活活として、互に攫み掛らむやうな勢を爲して見え、中心となつて居る圓壇は、手落なく穩に据ゑ付けられた。その當日、儀仗をなせる近衛の親兵は、四面に羅列し、その振り翳す旗は、幾旒とも分らぬ程で、ひらひらと風に流れて居る。天子は、十二の御厩から擇び出した龍馬に車を牽かせて、しづしづと練り行かれ、その鹵簿の整然たるは、もとより申すまでもない。かくて、夜中をも御厭ひもなく、新に築いた圜丘に登り、御手づから、璧を進め、酒器を捧げて、天を祭られると、かねて用意せる衆樂が一齊に起り、その聲は極めて大きいが、自然に調和されて居た。それから、松明の光は、天にも燃え上る位で、天帝は、彷彿として、來降せらるるかと疑はれ、天帝の座に近接して居る羣星も、相繼いで此に下り、錯落として其處に位地を占め、各々爛然たる光彩を放つて居る。その羣星の中で一番すぐれて居る日の神、月の神も、無論ここに來り、日は赫灼として、眩しき程であるし、月は流石に朧闌けて見える。天を祭ることが畢ると、次には四方山川、即ち地祇を祀るので、四瀆の河神は、廣大な形を現はし、五嶽の山靈は、巍峩として險しい姿をして居る。すべて、この祭祀に際しては、犧牲の上に香しい草を敷き竝べ、それに酒を沃ぎかけて、やがて之を燒くので、非常に香しい氣が、空中に立ち升る、それを天神地祇が喜んで飽くまで受納せられ、その報として、わが天子の爲に祥瑞を產し、嘏福を降されることと思はれる。その外、衆樂の響につれて、鳳凰は翼を舒べ廣げて、自ら羽ばたきをなし、赤麟黃龍なぞは、ぞろぞろと出て來て、その邊に蹲まつたり、蟠つたりして居る。天地の感應、かくの如くであるから、卿士庶人、黃口の幼童、白髮の老叟に至るまで、皆踴躍歡呼し、喜の餘りに咽び入つて、覺えず聲を放つものさへあつた。やがて、祭が全く濟むと、天地は、からりとして澄みわたり、人人の住む村里までも神神しく、この世ならぬ想がした。そこで、天子が車駕を廻されて、宮中に還御になつたのは、もう正午に近き頃であつた。もとより御疲れもあつたらうが、それに御構ひなく、直に丹鳳門に幸になつて、天下に大赦せられ、その舊惡を洗ひ清め、削り落して、古い創や垢を跡方もなくして仕舞つた。その次には、前代の功臣で其跡の絕えたものの家を再興し、又野に居る遺賢を拔擢し、老成人を任用し、賴るところなき無告の民を子養して、仁惠施與、あまねく天下に及んで、至らぬ隈もない程であつた。わが皇帝は、神聖にして古今の事に通達せられ、聽くこと聰に、視ること明かに、全く古しへの堯禹に類似し、生まれながらにして、法式を知り、する事、爲す事、すべて理の當然を得て居られる。さればこそ、天は特に皇帝に賜ひ、これをして天下に主たらしめたので、あらゆるものを倂せて包括し、且つ畜養して、巨細を分たず、全く一視同仁であるから、億載萬年の久しき、どうして、帝命に違背するものがあらうか。皇帝は、又儉勤を旨とせられ、御手足を洗ひ、漱をされるにも、我我臣下と同じ樣に陶製の器具を用ひられ、浮華なる物は斥け棄て、綾羅錦繡に代つて、木綿に等しき絺紵の類を好んで御召しになる。それから、詔を四方に下して、懇に民を戒め、何でも奢を爲すと咎があるから氣を付けよと仰せられて、身を以て

萬民の模範とされた。されば、その儉勤の報として、天は皇帝に錫うて、麥と黍とを多からしめ、豐年が打續いて、洪水旱魃などはなく、又、米が實つても、雀や鼠に食ひ減らされることもなく、收穫は、いつも十分である。億載萬年、この調子で行くと、唯だ富むことあつて、貧窶になることは、決して無い筈である。皇帝は、正直におはし、是非善惡を辨別され、命を擅にして狂暴なりし彼の楊惠琳・劉闢の如きは、すでに剪り去り、すでに除き去られ、その他の羣姦を盡く逐ひ斥けて、遺すところなきに至らしめた。天は皇帝に錫ふに大臣もしくは輔弼の名臣を以てし、博く問ひ、遠く觀むが爲に、之を左右に置かれるから、億載萬年の久しきに亙つて、敢て此天子を侮るものなどあらう筈がない。皇帝は、大孝におはし、慈悲の本性を以て、御兄弟の間には悌友を盡して、いつくしみ深くあらせられ、御生母の太皇后に對しては、怡怡愉愉として其歡を承け、親族の方方にも厚く致され、その仁德は、九州にも及ぶ位、天は皇帝に錫うて、天と壽を齊しくし、この太平を保つて、永久に怠ることなくするに相違ない。かくて、億載萬年の久しきに亙つて、天下の父となり母となつて、この民を撫育せられることであらう。臣韓愈は、國子博士の職に居て、聖經賢傳の訓詁を致すものでありますから、古しへ、周の世に尹吉甫が宣王の中興を美して、嵩高とか、烝民とか、韓奕とか、江漢とかいふ幾篇の詩を作つたと同じく、はるかに、世を隔てて相配せむと欲し、拙劣ながら、この歌詩を作つて御覽に入れた次第でありまする。

【餘論】この詩は、すべて七大段から成つて居るので、起首皇帝即レ阼より降旛夜竪に至るまでの二十句は、憲宗の即位より始めて、楊惠琳の誅滅を敍し、疆外之險より遂據二城阻一に至るまでの三十六句は、劉闢が留後として、專横に且つ兇暴なることより始めて、其叛をなすことを敍し、皇帝曰嗟より無レ有二餌餂一に至るまでの三十句は、高崇文に命じて之を征し、幷せて、荊幷梁、三州の兵馬を出して助勢せしむることを敍し、八月壬午より爭刌膾脯に至るまでの三十四句は、劉闢が縛に就き、その眷屬徒黨と共に誅に伏することを敍し、優二賞將吏一より訓二厥甿畮一に至るまでの二十八句は、戰後の論功行賞より始めて、諸節度使の歸服することを敍し、正月元日より仁滂施厚に至るまでの五十六句は、告廟、郊祭、大赦を旨として、功臣の後を存し、賢老を擢用することを敍し、皇帝神聖より結末以配二吉甫一に至るまでの五十二句は、種種の方面から、憲宗の聖德を讃したので、通篇、秩序整然として、一絲紊れず、段落も極めて明白である。次に諸家の評を擧げると、穆修は「退之の元和聖德詩、淮西碑、柳の雅章の類、皆辭嚴に、義偉に、制作經の如く、能く崒然として唐德を盛漢の表に聳えしむ」といひ、蔣之翹は「退之の元和聖德詩、銘頌體中に列するも、文、なほ質直にして觀るべし。もし四言詩を論ずれば、韋曹諸人、すでに前規を失ふ。三唐の間、安んぞ復た此を論せむ」といひ、乾隆御批には「典雅の處は毛詩に似たり、質峭の處は秦碑に似たり、華潤の處は文選に似たり、然れども、通體質峭多きに居り、首尾頌揚、亦た彌よ秦碑に近しと爲す」とあり、又「闢を誅するの一段、借つて以て藩鎭を悚動

す、前人これを論ずること詳なり。幽恆青魏の一段に至りては、諸道震慴して、朝廷の慰安鎮撫するを寫す、體を得て威あり、尤も是れ最著意の處」とある。但し、陳師道の言に「少游謂ふ、この詩、韓文に於ては下たり、淮西碑と兩手に出づるが如し」とあるが、秦觀は、何に由つて、かくの如く言つたか、これは、未必の說である。それから、この詩は、韓愈が衷心から唐室の中興を嘱望した爲であることは勿論とはいへ、その一は、これに由つて、憲宗の知を得むことを庶幾したものらしいが、この後、なほ十年ばかりの間は、升沈數囘、あまり立身もせず、元和十一年に考功郎中知制誥より中舍書人に遷り、それから、裴度の淮西を征するに從ひ、歸後、功を以て刑部侍郎に遷り、はじめて、臺閣に翱翔する身分と成つたので、して見ると、はるか後年に成つて、初めて分つたといふものの、暗暗の裏、なほ且つ多少の效果があつたものに相違ない。

琴操十首 幷序

琴操十首　幷に序

【題意】琴操は、琴曲といふ樣に、普通解釋して居るが、その詳は、後に述べることにする。この題は、韓集中に特異なもので、隨つて彼の聲名を不朽にする所以である。誰にしても、苟くも大家といひ、名家といはれる位な人は、何か一つ我より古を爲すといつた樣な、新創の大作があつて、これに因つて、不朽であるのが常で、李杜韓白の如きものに於ては、猶更の事である。李白には、古風五十九首あり、遠別離・蜀道難等、古題を借つて時事を諷論した樂府あり、杜甫には、歌行の一體あり、白樂天には長恨歌・琵琶行の如き敍事的分子の多い長篇あり、そして、韓退之は、その新創の一として、この琴操を作り出したのである。但し、琴操は、元と後漢の蔡邕に出たもので、朱註に「歐本に云ふ、これ蔡邕に效うて十操を作る、事跡皆蔡邕の琴操に出づと云ふ」とある。但し、蔡邕の琴操は、如何にも淺薄であつて、或は單に名を蔡邕に託したものだらうといふのが、一般の通說である。まして、これは、先秦の時代に屬し、周公といひ、孔子といひ、その當時、さういふ歌を作り、それが琴に遺つて居たのを蔡邕が編集したのであらうなどいふのは、愈よ以て不通の說で、その名目に眩せられたものに過ぎぬ。蔡邕の琴操の價値は、かくの如くであるが、その事實が面白いから、韓退之は、これを采つて、自己藥籠中の物としたので、元は十二あつたが、その中で伯牙の作と稱する水仙操・懷陵操の二つを省いて、十首としたのである。琴操の旨とするところは、古しへの聖賢に代つて、言を立て、歌を作るに在るので、つまり、その當時に於ける聖賢の心持を忖度して、これを文字の上に表顯するのである。琴操の操の字は、あやつるといふ字で、もと琴を彈くと云ふ上から命名したのであるが、應劭の風俗通には「琴曲を操といふ、操とは、窮阨するも、猶ほ其操を失はざるなり」といひ、操の字をミサヲ、卽ち操守の義に解したが、これは、內容の上に重きを置いたので、斷じて、原始的意義ではないが、今では、この方が却つて分かり易いかも知れない。さて琴操十首は、首首獨立

したもので、その事實は、簡單ながら、韓退之が自註を下して居るから、無論、これに準據して、詳述することにする。

將歸操　孔子之趙聞殺竇鳴犢作

將歸操　孔子、趙に之かむとし、竇鳴犢の殺されしを聞いて作る

(一)狄之水兮。其色幽幽。　狄の水、その色、幽幽たり。
我將濟兮。不得其由。(二)　我將に濟らむとして、その由を得ず。
涉其淺兮。石齧我足。　その淺きを涉れば、石、わが足を齧む。
乘其深兮。(三)龍入我舟。　その深きに乘ずれば、龍、わが舟に入る。
我濟而悔兮。將安歸尤。　我濟つて悔ゆれば、將に安くにか尤を歸せむとする。
歸兮歸兮。無與石鬪兮。　歸らむか、歸らむか、石と鬪ふ無かれ。
無應龍求。　龍の求めに應ずる無かれ。

【字解】【一】狄之水　一本に狄之水とあつて、文字の上から見れば、其方が善いやうだが、狄之水は地名で、移易する譯に行かぬ。水經に「河水、東阿在平等の縣を經、東北、四瀆の津に流る」とあつて、酈道元の註に「津西に四瀆の祠あり、東、四瀆口に對す。河水、東に分かれ、濟水河を受く、蓋し、濼口、水、斷えて通ぜず、はじめ是より出で、清水に於て沛瀆に合す。河より濟に入り、水徑周通す、故に四瀆の名あり。むかし、趙、鳴犢を殺す、孔子、河に臨んで歎じて、歌を作つて曰く、狄之水兮風揚波、舟楫顚倒更相加、歸來歸來胡爲斯と。按ずるに、今の臨濟は、故と狄なり、是れ濟の徑するところ、その通稱を得たるなり」とあるが、蔣之翹の註には「濟水、臨濟縣の南に徑す、これを詳にすれば、是れ濟水樂滌の下より潛流して、この四瀆の津口に至つて、後、復た出づ。河、又東、一支を分ち、之と合流し、以て臨濟を過ぎて、狄水となる。故に、孔子、河に臨んで、濟らずして狄水を歌詠す、これ即ち東に分かるるの河、復た出づるの濟なり。然れども、これ皆齊の地、今濟郡の間に在り。史記以爲へらく、孔子、衞より、將に西、趙簡子に見えむとす、と。すなはち、その道、當に此に出づべからず、又曉すべからざるものなり、姑らく之を闕いて、以て地理に深きものの正を俟つ」とあつて、どうやら、狄水も疑はしくなつて來た、朱竹垞も亦た「今相傳ふ、孔子、車を回す處は、山西澤州に在りと、これ正に衞より晉に入るの路、狄水太だ遠し、狄に作る、是れ近し、退之、或は訛を承く」とあるが、ここでは、舊文に從つて、しばらく狄之水として解釋することにする。【二】其由　由は由るところ、卽ち道、或は方法。【三】龍入我舟　淮南子に「禹、南に省方して江を濟る、黃龍舟を負ふ、舟中の人、五色主なし。禹、熙笑して稱して曰く、われ命を天に受け、力を竭して、萬民を勞す、生は寄なり、死は歸なり、何ぞ以て和を滑るに足らむ、龍を視ること猶ほ蝘蜓のごとし、と。龍、乃ち耳を弭れ、尾を掉つて逃る」とある。

【題義】題下の自註に見ゆる通り、これは孔子が趙に之かむとして、黃河の邊まで往つたとき、趙の賢臣竇鳴犢舜華といふ人の殺されたことを聞き、この人の殺される位なら、自分が往つた處で、とても、我が道は行はれないといふので、引き返さむとし、その時に作つたのである。史記には「孔子、すでに衞に用ひられず、將に西して趙簡子を見むとし、河西に至り、竇鳴犢舜華の死せしを聞くや、河に臨んで歎じて曰く、美なるかな、水洋洋乎たり、丘の濟らざるは命なるかな、と。子貢進んで曰

く、敢て問ふ、何の謂ぞや。孔子曰く、竇鳴犢舜華は、晉の賢大夫なり。趙簡子、未だ志を得ざるの時、この兩人を須ひて、而して後に政に從ふ。その已に志を得るに及び、これを殺して政に從ふ。夫れ鳥獸の不義に於けるや、尚ほ之を避くるを知る、しかも、況んや、丘をや、と。乃ち還つて鄹に息ひ、操して以て之を哀んで曰く、

翺二翔於衞一、復二我舊居一、從二吾所一レ好、其只樂且。

とあるし、同じ事が孔叢子にも見え、それを琴操に引いてある。次に、蔣之翹の註には「孔叢子に息鄹操あり、水經註に、又臨河歎を載せ、家語に又槃歌を載す、その事、皆、將歸の序と同じ。大略、琴操の一書、堯舜文武孔子の辭を載す、必ず昔人古に效うて僞撰するもの、故に其文一ならず、乃ち爾り」とあつて、流石に卓見である。この詩は、孔子が引き返された其時の意中は大方かういふのであらうといふので、作つたのである。

【詩意】秋の水は、深黑であつて、その色、幽幽として、如何にも怖ろしげに見える。われ、今、水邊に來り、これを渡らうとするのであるが、どうして善いか、分からない。無論、是非渡らうとすれば、渡れぬこともない。淺い處を徒渉すれば造作も無いやうであるが、鋭い石があつて、我が足を嚙み傷けることが無いとも限らぬ。深い處を舟で行けば、それでも善いやうであるが、ひよつと、龍が舟の中に飛び込むかも知れない。淺いにせよ、深いにせよ、何か危難が起るらしいが、もし、そんな目に遇つたならば、悔ゆるも及ばず、そして、誰に咎を歸して善いか、矢張、自業自得である。仕方がないから、もう斷念して、後へ引き返すことにし、石と鬪うて進むやうな冒險もせず、龍の求に應じて自分の身を棄てることも爲さぬが宜しい。まことに、どうも、餘儀ない次第である。

【餘論】全篇を通じて、比喩である。今まで、趙を左のみの危邦とは思はず、或は我を歡迎して與れるだらうと思つて居た處が、ここへ來て聞けば、賢明なる功臣さへ、むざむざと誅戮する位であるから、矢張、危邦である。そこへ無理に行けば、淺いか、深いか、いづれにしても、災難を免れない。むかしから、危邦には入らずと云ふ位だから、これは、この儘引き返すのが道であるといふ意で、趙の危邦たることを以て、狄水の幽幽たるに比して、構想を試みたので、蔣之翹が「これ、聖人、危邦に入らざるの意」と云つたのは、極めて的確である。なほ乾隆御批には「喩意奇警」といひ、朱竹垞は、涉二其淺一兮石齧二我足一以下を評して「四語、騷に近く、しかも稍や陗快を加ふ」といつた。

猗蘭操　孔子傷レ不レ逢レ時作

猗蘭操　孔子時に逢はざるを傷んで作る

(一) 蘭之猗猗。揚揚其香。　蘭の猗猗たる、揚揚たる其香あり。

(二) 不レ採而佩。於レ蘭何傷。　採つて佩びざるも、蘭に於ては何ぞ傷まむ。

今天之旋（三）。其曷爲然。 今天の旋る、其曷すれぞ然る。

我行四方。以日以年。 我、四方を行き、日を以てし、年を以てす。

雪霜貿貿（四）。（五）薺麥之茂。 雪霜貿貿、薺麥之れ茂る。

（六）子如不傷。我不爾觀。 子、もし傷まざるも、我、爾を觀ず。

薺麥之茂。（七）薺麥之有。 薺麥の茂るは、薺麥の有。

（八）君子之傷。君子之守。 君子の傷むは、君子の守。

【字解】【一】猗猗　班固の西都賦に「蘭茝發色、曄曄猗猗」とあつて、猗猗は色澤の貌。【二】不採而佩、於蘭何傷　楚辭に「紉秋蘭以爲佩」とあつて、蘭は君子の佩たるべきものである。それから、文子に「蘭芷は服するなきが爲にして芳しからずむばあらず、君子道を行ひ、知るものなきが爲にして止まず」とあつて、この二句と同義。【三】旋　旋轉逆行の義。【四】貿貿　陰昏不明の貌、禮記に「貿貿然として來る」とある。【五】薺麥之茂　淮南子に「麥は、秋、金王にして生じ、薺は、冬、水王にして生ず」とあり、西京雜記に「建亥の月、陰氣の極、薺麥はじめて生ず、陽升ればなり」とある。【六】子如不傷　この二句は、蔣之翹の解に「我は、薺麥の茂きが、霜雪の時に當つてその操を改めざるが如し。子、もし傷んで、我を用ひられるば可なり。子、もし傷まざれば、我も亦た子を見るに貶するの義なし」といつて居る。【七】薺麥之有　有は固有の特性。【八】君子之傷　この二句は、蔣之翹の解に「君子傷むべきの時に居て、その守を易へず、亦た猶ほ薺麥の有のごときなり」といつて居る。

【題義】これは、孔子が己の時に逢はぬことを傷んで作つたのである。琴操に「孔子、諸侯に歷聘せしが、諸侯能く任ずるなし。衞より魯に反るとき、隱谷の中に、香蘭の獨り茂るを見、喟然として歎じて曰く、夫れ、蘭は、當に王者の香たるべし。今、乃ち獨り茂り、衆草と伍を爲すと。乃ち車を止め、琴を援つて之を鼓し、自ら時に逢はざるを傷み、辭を香蘭に託して云ふ。

習習谷風。以陰以雨。之子于歸。遠送于野。何彼蒼天。不得其所。逍遙九州。無有定處。世人闇蔽。不知賢者。年紀逝邁。一身將老。

この詩の起首四句は、丸で詩經の集句であつて、到底、淺近を免れぬ。そこで、朱竹垞は「古詩句を餖飣するは、古歌多く然り、後の下句、稍や致あり、然れども是れ漢調」といひ、どうも、孔子の手筆では無いらしい。しかし、この詩の價値は兎に角、孔子は、實際かういふ感想を持つて居たに相違なく、そこで、韓退之も之に本づいて、更に新意を出したのである。

【詩意】蘭の物たるや、猗猗として色澤極めて盛に、そして、揚揚として、香氣を發するものである。今、この蘭は、折角咲いても、誰も采つて佩として與れる人がないが、蘭は、時に逢うて香を發することを以て、自ら滿足して居るので、たとひ采つて佩ばれずとも、蘭その物に取つては、少しも傷むことは無い。今、天が反對に逆行して、時ならぬに、蘭を人間に生じ、これを采る人を出さぬといふのは、一體どういふ譯であるか。われは、魯國を出でて、四方を遍歷すること、すでに久しく、日を以て計り、年を以て計る位であるのに、何人も我を用ひぬのは、丁度、蘭が空谷の中に棄てられてある

と同じである。今しも、雪や霜が皚皚として寒げに曇れる間に於て、薺や麥は、野を蔽ふばかりに茂つて居る。これを見ると、蘭も流石に顧みて、自ら傷まぬ譯には行かぬ。もとより、他を猜んだり排擊したりするのではないが、翻つて、自ら運命の拙きを傷むので、蘭の自ら傷むといふ處が、能く我が心に適ふのである。抑も、薺麥の茂れるは、薺麥固有の性であつて、彼此いふべきものではない、そして、君子の傷むのは、卽ち君子の操守から出たので、たとひ、傷むといつた處で、その操を破るといふ譯ではない。この蘭の心は、卽ち君子と同じ譯であつて、われは、今、この蘭を見て、嘆息に堪へぬ次第である。

【餘論】この篇は、十首中で、一番古奧に出來て居る處から、その意味の取り方も、註釋家に因つて、色色違つて居て、一說には、蘭が薺麥の茂るが如くなりたいと思つて居ると解して居る。勿論、薺麥は小人の時を得て蔓延するに比し、蘭は君子に比したのであるが、小人を羨むといふやうでは、君子の君子たる所以を失ふ樣に考へられるので、君子の傷むのは、小人の如何に關せず、唯だ自己を傷むといふ樣に見ねばならぬことと思ふ。乾隆御批には「薺麥の二語、和平に妙、君子の二語、斬截に妙、安土樂天の意を寫し得て出づ」とあり、朱竹垞は「三四太だ顯にして味少し、薺麥は又是れ蘭の比、子は是れ夫子、我は是れ蘭、蓋し蘭に代つて辭を爲す」といつて居る。

龜山操

孔子以季桓子受齊女樂諫不從望龜山而作

龜山操 孔子、季桓子が齊の女樂を受け、諫むるも從はざるを以て、龜山を望んで作る

龜之氛兮。不能雲雨。　龜の氛は、雲雨する能はず。
龜之枿兮。不中梁柱。　龜の枿は、梁柱に中らず。
龜之大兮。祗以奄魯。　龜の大なる、祗だ以て魯を奄ふ。
知將隳兮。哀莫余伍。　將に隳れむとするを知るも、哀んで余と伍するなし。
周公有鬼兮。嗟歸余輔。　周公鬼あらば、嗟歸つて余をして輔けしめむ。

【字解】【一】氛　もや。【二】不能雲雨　禮記に「山林川谷邱陵、能く雲を出し、風雨を爲し、怪物を見る、皆神といふ」とあり、春秋元命苞に「山は氣の包含、精を含み、雲を藏するところ、故に石に觸れて山に布く」とある。【三】枿　伐木之餘といひ、揚雄甘泉賦に「三枿之起、本根旣朽」とあるから、元と、ひこばへといふことであるが、ここでは、大木といふ樣に見ないと意義が透徹しない。【四】中　あたる。【五】隳　やぶる、そこなふ。

【題義】これは、孔子が魯の相として、大に用ひられかけた時、齊では、之を離間する爲に、女樂を魯に送ると、季桓子は、之を受け、そして孔子が受けるなと云つて、たつて諫めたのを聽かざりしに

因り、これでは駄目だと見切りをつけ、愈よ魯を去らむとして、龜山を望んで作つたので、史記に「季氏、齊の女樂を受け、三日政を聽かず、郊して又燔俎を大夫に致さず。孔子、時に魯の大司寇たり、遂に行り、屯に宿す。而して、師己、送つて曰く、夫子は罪に非ず、孔子曰く、吾、歌ふ、可ならむか、と。曰く、

彼婦之口。可二以出走一。彼婦之謁。可二以死敗一。蓋優哉游哉。一維以卒レ歳。

師己反る。季子曰く、孔子亦た何をか言ふ、と。師己、實を以て告ぐ。季氏喟然歎じて曰く、夫子、われを罪するに羣婢を以てするなり」とあり、琴操に「季桓子、齊の女樂を受く。孔子、諫めむと欲するも得ず、退いて魯の龜山を望み、この曲を作り、以て季氏を喩ふ、龜山の魯を蔽ふ若きなり」といひ、古詞に、

予欲レ望レ魯兮。龜山蔽レ之。手無二斧柯一。奈二龜山一何。

とある。この詩は、孔子の當時の心持になつて、龜山が大にして魯を蔽ふといふことを、季桓子が魯國の政を執り、その爲に、魯國が暗く蔽はれるといふに比し、その意味合から作つたのである。龜山は、魯の山で、詩に奄二有龜蒙一とあり、今は兗州泗水縣に屬して居る。

【詩意】龜山には、靄が常にかかつて居るが、雲となり、雨となつて、潤澤を天下に及ぼす程の效驗はない。龜山の上には、大きな木が森森と茂つて居るが、梁となし、柱となし得べきものは、一本もない。かくて、龜山は、非常に大きく、唯だ魯國を蔽うて居るだけで、いはば、邪魔である。今、季桓子が攝政の職に居りながら、民に德澤を施すことも出來ず、一國の柱石たるべき材能なく、唯だ非常の勢力を以て魯君の聰明を蔽うて居るのは、丁度、この龜山のやうなものである。苟くも、思慮あるものは、魯國の滅亡に瀕して居ることを知つて居るが、これを哀む心の我ほど深いものは無い。つまり、我から見れば、多くの人は、滅亡と知りつつ、しかも、格別憂慮しないのである。魯は、周公の後であつて、周公の靈にして苟くも存するならば、どうか、予をして、再び歸つて魯國に輔佐たらしめる樣にして貰ひたいと、かう思ふばかりである。

【餘論】乾隆御批には「一結深痛」とあるが、朱竹垞は「語太だ奇險、鐃歌郊廟歌に類す、稍や雅味に乏し、古操の渾妙にして含味深長なるに如かず」といつて居る。

越裳操　周公作

越裳操　周公作る

雨之施。物以孳。　雨の施す、物以て孳し、

我何意二於彼爲一。　我何ぞ彼の爲に意あらむ。

自二周之先一。其艱其勤。　周の先より、其れ艱に、其れ勤む。

以有疆宇。私我後人。　以て疆宇を有して、我が後人に私す。

我祖在上。四方在下。　我が祖、上に在り、四方、下に在り。

厥臨孔威。敢戲以侮。　その臨むこと、孔だ威あり、敢て戲れて、以て侮らむや。

孰荒于門。孰治于田。　孰れか門に荒びて、孰れか田に治めむ。

四海既均。越裳是臣。　四海すでに均しく、越裳これ臣たり。

【字解】〔一〕孳　孳殖する、蕃殖する。〔二〕疆宇　疆域封土。〔三〕在上　天上に在る。〔四〕荒　遊び戲れる。

【題義】これは、周公の心持になつて、越裳氏の來貢を喜んで作つたのである。越裳は、交趾の南の外國で、後の安南、九譯を重ねて至るといふ程、非常に遠い處に在る。周の成王の時、それが初めて入貢したので、まことに珍らしい處から、周公は、琴曲を以て之を詠じたのである。當時、成王なほ幼、つまり周公の德の爲であるが、自分では、さうは言はず、專ら之を祖先の遺烈に歸したのである。韓詩外傳に「周の成王の時、越裳氏、九譯を重ねて至り、白雉を周公に獻じて曰く、吾、命を受く、國の黃髮言うて曰く、久し、天、迅雷疾雨せず、海波溢せず、ここに三年、おもふに、中國に聖人あるか、盍んぞ往いて朝せざる、と。ここに於て乃ち來る、と。周公、遂に琴を探つて之を歌ひ、これを受けて、文王の廟に獻じて曰く、

於戲嗟嗟。非旦之力。乃文王之德。」

それから、古今樂錄にも、この歌を載せ「越裳、白雉を獻ず。周公、歌を作り、遂に之を傳へて越裳操となす」とあつて、越裳操の名は、即ち此に始まつたものである。

【詩意】雨が降ると、潤澤を施して、萬物が孳生する。但し雨は、初めから物を潤して、生長せしめやうとしたのではなく、つまり、自然の感化である。この度、越裳の入貢も、その通りで、此方では、入貢せしめむが爲に德を施したのではないが、此方の德が、自然、先方に感應して、さういふ事に成つたのである。顧みれば、周の先祖、古公亶父・公劉等は、隨分、御苦勞を爲され、そこで、初めて疆土を有するやうに成つて、それを我我後人に殘されたのであるから、元はといへば、わが物でもない。我が祖の靈は、天上に在まし、四方萬國は、下土に居り、そして、神靈は、鑒臨して、威德殊に顯著であるから、敢て戲れて侮るものはない。されば、誰が家に在つて遊び戲れて居るか、さういふ不心得のものは、もとより無い筈であるし、誰か田に出でて力作して居るか、すべての人が皆さうである。すべての善惡を、わが先祖は、天上に於て、ちやんと見て居られる。されば、わが先祖の遺德の及ぶところ、四海平均して、すでに虞なく、越裳の如き遠國すら、臣服して入貢したのである。

【餘論】蔣之翹の解に「豈に門に荒んで、能く田に治むるものあらむや」とあるが、さうすると、家に於て遊戲し、そして田に於て力作するといふことは出來ない。家に於ても、田に於ても、均しく勉

めねばならぬといふ風に見えるが、それでは、一人の身の上に就いて言つたので、どうも、意味が狹くなつて面白くない。つまり、誰か家に於て游戲するか、誰か田に於て力作するか、善惡、ともに祖先の靈が照鑒して居ますといふ意に見ねばならぬ。そこで之を推して行くと、内が治まらなければ、外は決して治まらぬといふ意にもなるので、李光地は「孰荒於門、孰治于田、言ふは、豈に門に荒して、しかも能く田に治むるもの、近きを安んずるに非ざれば、以て遠きを服するなきを見はし、下の兩句を起す」といひ、何義門も之を承けて「孰荒於門の二句、言ふは必ず内治まつて後に外服す、亦た謂はゆる邇きを泄らす、遠きを忘れざるなり」といつた。それから全篇の評として、乾隆御批には「我何意於彼爲とは、その贄を享けず、その人を臣とせず、妙用この六字に盡く。四海既均、越裳是臣、愈よ淡、愈よ妙、謂はゆる一字を著けず、盡く風流を得たるなり」とある。

拘幽操　文王羑里作

拘幽操　文王、羑里に作る

目(一)窈窈兮。其凝(二)其盲。　目窈窈として、其れ凝り、其れ盲す。

耳(三)肅肅兮。聽不聞聲。　耳肅肅として、聽けども聲を聞かず。

朝不見日出兮。　朝に日の出づるを見ず。

夜不見月(四)與星。　夜に月と星とを見ず。

有知無知兮。爲死爲生。　知るあるか、知るなきか、死と爲さむか、生と爲さむか。

嗚呼臣罪當(五)誅兮。　嗚呼、臣の罪、誅に當れり。

天(六)王聖明。　天王は聖明。

【字解】【一】目窈窈　或は窈拚拚に作り、或は目拚拚に作つてあるが、ともに宜しくない。【二】凝　目ぶたが癒合する。【三】肅肅　蔡琰の悲憤詩に肅肅入我耳とある。【四】月與星　楚辭に南指月與列星とある。【五】當誅　史記に「藺相如、秦王に謂つて曰く、臣、大王を欺くの罪、誅に當るを知る」とある。【六】天王　蔡邕の獨斷に「天王は、諸夏の稱するところ、天下の歸往するところ、故に天王と稱す」とある。

【題義】これは、周の文王が羑里の獄に幽閉せられ、眞暗な處に居た時、顛倒した心の思を其儘に述べたのである。史記に「周の文王、仁を篤くし、老を敬し、禮して賢者に下る。崇侯虎、これを紂に譖して曰く、將に帝に利あらざらむとす、と。紂、文王を羑里に囚ふ」とあり、琴操に「文王、德を修め、百姓親附す。崇侯虎、これを疾み、紂に譖して曰く、西伯昌は聖人なり、長子發、中子旦、皆聖人なり、三聖、謀を合す、君其れ之を慮れ、と。乃ち文王を羑里に囚へ、將に之を殺さむとす。ここに于て、文王の四臣、散宜生の徒、美女大貝白馬朱鬣を得て、以て紂に獻ず。紂、遂に西伯を出す。文王、羑里に在り、易の八卦を演じて以て六十四となし、鬱厄の辭を作つて曰く、困于石、據于

羨蓁と。乃ち憤を申べて、歌を作つて云ふ、

般道涸涸浸濁煩兮。朱紫相合不別分兮。迷亂聲色信讒口兮。炎炎之虐使我愆兮。幽閉牢穽由其言兮。遘我四人憂勤勤兮。

韓愈は、この古辭に本づき、例の如く、變化して之を出し、更に一層を進めたのである。なほ、羑里は、漢書地理志に「河南蕩陰縣に羑里城あり、亦た牖里に作る」とあつて、蕩陰は、後に湯陰といひ、卽ち河南彰德府に屬して居る。

【詩意】獄舍の中は、眞暗であるから、目は窈窈として、何も見えず、眼脂に張り詰められ、全く盲目も同樣である。又耳は肅肅として、怖れ戰き、耳鳴りがして、いくら注意して聽かうと思つても、何も聞こえない。朝に成つても、日の出は見えぬし、夜になつても、月とか星とかいふものは、一切見えない。この獄舍に居る時の心持は、知覺あるか、知覺なきか、死んで居るか、生きて居るかといふことさへ分からない位。しかし、唯だ一つ忘れないのは、かういふ處に囚はれたのは、もともと自分が惡いので、その罪、誅に當するが故に、かくの如く、幽閉されたといふことである。天王は、もとより聖明の君であつて、冤罪の者を矢鱈に禁錮される筈はないから、これは、飽くまで自分が惡いのである。

【餘論】文王は、元來、讒を蒙つて、羑里に拘へられたのであるが、あくまで、其責を己に引いて、少しも君を怨まぬ處は、溫柔敦厚の趣旨に愜つたものである。程伊川の言に「退之、琴操を作つて曰へるあり、臣罪當誅兮、天王聖明、と。文王意中の事を道ふ、前後の人、道うて此に到らず。徐仲車言ふ、退之の拘幽操、文王、羑里に囚はれて作るといふ、乃ち云ふ臣罪當誅兮、天王聖明、と。文王の用心を知ると謂ふべし。凱風七子の母、猶ほ其室に安んずる能はず、しかも、母氏聖善、我無令人と云ふ、自ら責むることを重んずるなり」とある。しかし、朱竹垞は、稍や反對の意見を出し「只だ拘幽の字上に就いて生發し來り、自ら意味あり、末二句、意正しと雖も、却つて、道ひ難からず。愚以爲へらく、尙ほ未だ圓妙ならず」といつて居る。

岐山操　周公爲太王作

岐山操　周公、太王の爲に作る

我家于豳(一)。自我先公。

我、豳に家する、我が先公よりす。

伊我承(二)序。敢有不同。

伊れ、我、序を承け、敢て同じからざることあらむや。

今狄之人。將土我疆。

今、狄の人、將に我が疆に土せむとす。

民爲我戰。誰使死傷。

民、我が爲に戰はむとす、誰か死傷せしむ。

彼岐有(三)岨。我往獨處。

彼の岐に岨あり、我往いて獨り處らむ。

爾莫余追。無思我悲。　爾、余を追ふこと莫れ、我を思うて悲む無かれ。

【字解】〔一〕豳　漢書に「公劉、豳に邑す」とあつて、顔師古の註に「今の豳州、是れ其地なり」とある。〔二〕承序　序の字は諸本に緒に作つてある、序は傳授の次第で、漢書に「朕、天序を承く」とある。緒は緒業で、商書に「丕に基緒を承く」とあつて、二字の義、各異なつて居るが、この場合には、いづれでも通ずる。〔三〕有岨　爾雅に「石山、土を戴くを岨といふ」とある、又岨は阻に通じ、卽ち險阻と解する人もある。

【題義】これは、周公が周の先祖たる太王の事蹟を思うて、その高德を其儘に述べ、太王の心持に成つて作つたのである。岐山は、陝西鳳翔府岐山縣の東北十里に在る山で、山に兩岐あるに因つて名づけたといふこと。太王は、卽ち古公亶父で、戎狄に逼られ、仍つて、岐山の陽に徙ると、人民どもは「仁人なり、失ふべからざるなり」といつて、ぞろぞろと隨つて來り、遂に岐山の下に於て國を肇め、やがて、周家八百年の基を開いたといふので、その事の詳は、孟子に見えて居る。又古操に、周公の詩と稱するものが載せてある。

狄戎侵兮土地遷移。邦邑適於岐山。烝民不憂兮誰者知。嗟嗟余何兮命遭斯。

この詩は、格別面白くもないから、無論、後人の擬作であらう。そして、韓愈は、もつと切實に其言を立てたのである。

【詩意】周の太王は、初め豳といふ處に居られたが、それは、先祖の公劉の開いた土地であつた。それを自分は後裔である處から、之を承け繼いだので、歷代相同じき事である。然るに、今、狄人は、遠慮なく侵入して、我が疆土を占領して、自分の者に致さうと企てて居る。もとより、人民を驅り催して、戰をすれば、防げぬことはないが、犧牲に供して死傷させるのが、まことに氣の毒で、わが心に忍びない。狄人は土地が欲しいので有らうから、遣つて仕舞はふ。そして、岐山の險阻な處は、流石の狄人も來られぬから、其處へ往つて、獨りで居れば、安全に暮らすことが出來る。汝等人民は、決して、我が跡を追つて來るにも及ばぬ、われは、岐山に隱れる積りであるから、今後、決して我を思うて悲んで呉れるな。

【餘論】太王は、かういふ考で、岐山へ行くと、豳の民は、ぞろぞろと其後に隨つて來た。つまり、盛德あればこそ、人民が父母の如く慕つて、險阻をも厭はず、新しき土地に往つて國を開いたといふのが、その後の事實で、それが餘意として、自然に含まれて居るのである。

履霜操　尹吉甫子伯奇無罪。爲後母譖而見逐。自傷作

履霜操　尹吉甫の子伯奇、罪なく、後母に譖せられて逐はる、自ら傷んで作る

父兮兒寒。母兮兒饑。　父あつて兒寒えたり、母あつて兒饑ゑたり。

（一）兒罪當笞。逐兒何爲。　兒、罪あらば、當に笞つべし、兒を逐ふは何すれぞ。

兒在中野。（二）以宿以處。　兒は中野に在り、以て宿し、以て處る、

四無人聲。誰與兒語。　四に人聲なく、誰か兒と語らむ。

兒寒何衣。兒饑何食。　兒寒えたれども何をか衣む、兒饑ゑたれども何をか食はむ。

兒行于野。履霜以足。　兒、野に行くとき、霜を履むに足を以てす。

母生衆兒。有母憐之。　母、衆兒を生めり、母の之を憐むあり。

獨無母憐。兒寧不悲。　獨り母の憐むなし、兒、寧ろ悲まざらむや。

【字解】【一】兒罪當笞　漢書に「車千秋、太子の寃を訟へて曰く、子、父の兵を弄せば、罪、當に笞つべし」とある。【二】中野　野中に同じ。

【題義】これは、尹伯奇といふ孤兒が、繼母に逐はれたが、その繼母の惡を少しも言はず、父に對する己の悲を訴へる心持で作つたのである。琴操に「履霜操は、尹吉甫の子伯奇の作るところなり。吉甫、後妻に聽いて之を逐ふ。伯奇、水荷を編んで衣、葶花を採つて食ひ、晨朝霜を履み、自ら罪なくして放たれしを傷み、乃ち琴を援り、これを鼓して此操を作り、曲終るや、河に投じて死す。詞に曰く、

朝履霜兮採晨寒。考不明其心兮聽讒言。孤恩別離兮摧肺肝。何辜皇天兮遭斯愆。痛殁不同兮恩有偏。誰說顧兮知此冤。

そして、尹吉甫は、周の宣王の時の人である。

【詩意】父よ、兒は今凍えて、その寒さに堪へぬ。母よ、兒は今飢ゑて、その苦に堪へぬ。もとより兒に罪はあらうが、笞つても濟むのに、兒を逐ひ出されたのは、どうした事か。そこで、兒は野の中に居て、以て宿し、以て處り、終日彷徨して居るが、四邊に人の聲もせず、誰か來て兒と語らうぞ、兒は凍えても、著る物もなく、兒は飢ゑても、食ふべき物もない。それのみか、うろうろ野中を歩いて、跣足で冬の朝の霜を履んで居る。これを見たならば、誰しも哀れと思はぬ者は無からう。母は、多くの子を生み、そして、いづれも之を憐み慈んで居る。しかし、兒のみは、母が憐んでも慈んでも呉れぬから、兒の心、いかで悲まずに居られやうか。

【餘論】起首に父兮母兮と二つ竝べて、後には獨無母憐といふのは、明かに其父吉甫に向つて訴へたので、母の惡は決して言はぬが、自分は寃罪だといふことは、明かに言外に見えて居る。蔣之翹は「退之の十操、惟だ此のみ、最も體を得たり、語、古に近くして、意、含蓄、味あり、絕えて、摹倣の痕跡なし。劉辰翁曰く、怨まざれば情に非ず、乃ち怨みたるなり、これ乃ち小弁の志か、と。又飢寒霜を履む、反覆感切、眞に以て鬼神を泣かしむべし、これ琴操たる所以なり」といひ、朱竹垞は

「通首精工、孝子の意を道ふこと眞切、末四句、略ぼ大意を指し、却つて露を傷まず」といつて居る。まことに、此首は、前の拘幽操に次いで、十操中、最も出色の文字である。

雉朝飛操　牧犢子七十無妻見雉雙飛感之而作

雉朝飛操　牧犢子、七十にして妻なし、雉の雙飛するを見、これに感じて作る

雉之飛。于朝日。　雉の飛ぶ、朝日に于てす。

羣雌孤雄。意氣横出。　羣雌孤雄、意氣横出。

當東而西。當啄而飛。　當に東すべくして西し、當に啄むべくして飛ぶ。

隨飛隨啄。羣雌粥粥。　隨つて飛び、隨つて啄み、羣雌粥粥たり。

嗟我雖人。　嗟、我人と雖も、

曾不如彼雉雞。　かつて彼の雉雞に如かず。

生身七十年。　生身七十年、

無一妾與妃。　一の妾と妃と無し。

【字解】【一】粥粥　音注に粥粥に作るべく、粥、音は祝、説文に「粥粥は、雞を呼んで之を畜養す」とあり、杜甫の詩にも「雞話用鶏畜」とある。但し、粥之鶏は、禮記に粥粥若無能也とあつて、卑謙の貌と註してあるから、ここでは、羣雌が雄に從つて飛啄する意に見れば善いので、必ずしも、字を換へて強ひて解釋するにも及ばぬといつて居る。【二】雉雞　雉は野雞といつて、雞の種類であるから、この字を添へたのである。

【題義】これは、牧犢子といふ人が七十になるまで、配偶なく、ある朝、雉が雌雄相呼び、相應じて飛び起つを見、如何にも羨ましく、翻つて、おのが孤獨を傷んで、この操を作つたといふので、吳兢の樂府古題要解に「舊説に、齊の宣王の時、沐犢子、年七十にして妻なし、出でて野に薪す、雉の雌雄相從ふを見、意動き、心怨む。乃ち天を仰いで歎じて曰く、聖王、上に在り、恩、草木鳥獸に及ぶ、しかも、我、ひとり獲ず、と。因つて、琴を採つて歌ひ、以て自ら傷み、その聲、中絶す。魏の武帝の宮人盧氏といふものあり、七歲、漢宮に入つて鼓琴を學び、能く此曲を傳ふ」といひ、その詞は、崔豹の古今註に見えて、即ち左の如くである。

雉朝飛兮鳴相和。雌雄羣遊於山阿。我獨何命兮未有家。時將暮兮可奈何。嗟嗟暮兮可奈何。

韓愈は、例の如く、專ら此古詞に準據し、そして、變化して之を出したのである。

【詩意】雉が朝日の輝く曉に飛んで居るが、雄一羽で、多くの雌を引き連れ、意態横出、まことに、得得たる有樣である。東に飛んだかと思へば、忽ち西に向ひ、物を啄んで居るかと思へば、忽ち飛び上り、少しも、ぢつとして居らず、その擧動も、まことに活潑である。かくて、飛んだり、啄んだり

して居る間に、多くの雌どもは、粥粥として、その周圍に羣れて、皆これに服從して居る。自分は、萬物の靈長たる人でありながら、かの雉にも及ばぬ位、行年七十、妻は勿論、正配すらもなく、今に孤獨に惱んで居る。

【餘論】蔣之翹は「嗟我の四句、語太だ淺露、これ二鳥に感じて賦し、識を後人に致すなり」といひ、朱竹垞は「後四句、直致に傷る。かくて、太だ力を著くることなきが如し、古詞を看るに、何等渾然たる」といひ、誰に言はしても、結末四句は、あまり、面白くないといふことである。

別鵠操　商陵穆子娶妻。五年無子。父母欲其改娶。其妻聞之。中夜悲嘯。穆子感之而作

別鵠操　商陵の穆子、妻を娶る、五年にして子なし、父母、その改娶せむことと欲す。其妻之を聞き、中夜悲嘯す。穆子、之に感じて作る

（一）雄鵠銜枝來。雌鵠啄泥歸。　雄鵠、枝を銜んで來り、雌鵠、泥を啄んで歸る。

巣成不生子。大義當乖（二）離。　巣成るも子を生まず、大義、當に乖離すべし。

（三）江漢水之大。鵠身鳥之微。　江漢は水の大、鵠身は鳥の微。

更無相逢日。且可繞樹相隨飛。　更に相逢ふの日なく、しばらく樹を繞つて相隨つて飛ぶべけむや。

【字解】（一）雄鵠　鵠はくぐひ、おほとり、一に天鵝といふ、形は雁より大きくして羽毛白く、翔けることが極めて高い。（二）乖離　そむき離れる。（三）江漢　江は揚子江、漢は漢江で、その支派の一である。

【題義】これは、商陵の穆子といふ人が、妻を娶つて、五年たつても子が出來ぬ、當時の制裁として、子なきものは去るといふから、穆子の父母は、之を逐ひ出して、別に娶らうとして居る。それを妻が聞いて、中夜に悲嘯して居るのを見て、穆子は、同情に堪へずして、之を作つたといふのである。崔豹の古今註に「商陵の牧子、妻を娶り、五年にして子なし。父兄、その改めて娶らむことを欲す。妻、これを聞き、中夜起つて、戸に倚つて悲嘯す。牧子、これを聞き、愴然として悲み、乃ち琴を援つて歌ひ、別鶴操を爲る、亦た別鵠操といふ」詞に曰く、

將乖比翼隔天端。山川悠遠路漫漫。攬衾不寐食忘餐。

後、還つて夫妻となる」とある。

【詩意】ここに、二つの鵠が居て、雄は木の枝に口を銜へて來り、雌は泥を啄んで歸り、そして、巣ごもりをしたが、一向子が生まれない。まことに、仕方がない、子なきものは去るといふから、大義の上から、乖き離るべく、われは、此妻を出して仕舞はねばならぬ。しかし、一たび別れると、再び

相逢ふことは出來ぬ。江漢は水の大なるものであるし、鵠の身は極めて微細なものである。その江漢の大なる處に、今までは一緒に居たが、一たび違つた方向に飛び去れば、又と相逢ふ機會はない。これを思ふと、まことに悲しく、暫時たりとも、樹を繞つて相隨つて飛び、名殘惜しさに別れ兼ねて居る。

【餘論】　江漢二句の解は、上に述べた如くであるが、一面に於ては、大義を大となし、私情を微となし、大義は到底破ることは出來ず、情は細微なるものであるが、どうしても、別るるに忍びないと云ふ意を影寫したものである。この二句に就いて、鍾惺は「この二語合し來る、便ち是れ樂府」といつて、聊か褒めて居るが、朱竹垞は之を貶し「水大鳥微の語、迂拙中に之を著け、字更に綴弱」といつて居る。それよりも、面白いのは、矢張、結末二句で、李陵の詩に、長當レ爲二此別一、且復立斯須といひ、古樂府に與子如二黃鵠一、將レ別復徘徊、といへると、略ぼ其意象を同じうし、餘韻嫋嫋として盡きざる趣がある。

殘形操　曾子夢見二一狸一不レ見二其首一作

殘形操　曾子、夢に一狸を見て、其首を見ずして作る

有レ獸維狸兮。我夢得レ之。　　獸あり、維れ狸、我夢に之を得たり。

其身孔明兮。而頭不レ知。　　その身、孔だ明かにして、頭を知らず。

吉凶何爲兮。覺坐而思。　　吉凶何すれぞ、覺めて坐して思ふ。

巫咸上レ天兮。識者其誰。　　巫咸、天に上れり、識るものは其れ誰ぞ。

【字解】【一】孔明　孔は甚だと訓すべし。【二】巫咸　離騷に巫咸將夕降兮懷二椒糈一而要レ之とあつて、その註に「巫咸は、古しへの神巫」とあり、又張衡の思玄賦に「拜二巫咸一使レ占レ夢兮乃貞吉之元符、とある。

【通義】　この首に關する事實は、大周正樂記に「曾子、琴を鼓す。崔子、戶外に立つて之を聽く。曲終るや、入つて曰く、善いかな、琴を鼓するや。身すでに成る、しかも、惜むらくは未だ其首を得ざるなり。曾子曰く、吾、晝臥し、夢に一貍を見る、但だ其身を見て、其頭を見ず、起つて之が爲に絃歌するなり」とある。要するに、天地間の事は、常理を以て分からぬことがあるといふので、聖賢が時に遇はずして自ら傷むも、矢張さうである。それを象徵的に顯はす爲に、琴操十首の終に、特に此首を置いたのであらう。

【詩意】　曾子が夢に貍を見た處が、身體は完全であつても、頭が見えない。この夢は、吉であるか、凶であるか、夢覺めし後、つくねんと凝坐して、いろいろに考へたが、どうも分からぬ。むかし、巫咸といふ恐ろしい神力のある巫女が居て、人間の吉凶禍福を豫知したが、その巫咸は、すでに死ん

で、天に升つたから、これを識別する人もない。矢張、分からぬことは、その儘、一邊に拋つて置く外はない。

【餘論】蔣之翹の說に「むかし、劉須溪、十操を論じ、惟だ此のみ、最も古意あり、その著述せざるを以てなりといへり。余以へらく、その辭、尙ほ歸宿を缺く、如かず、勝國の楊維楨、亦た此操に擬して云ふ、

我夢有レ獸兮、其獸曰レ狸、狸有レ怪兮、身首異而、告レ我以レ凶兮、戒而戒而、我邱有レ首兮、誓レ死完以歸。

亦た精深典雅、他作これに逮ばず」とある。つまり、退之の作は、尙ほ歸宿を缺くが故に、楊維楨の擬作に及ばないといふので、維楨も、亦た此題の引に於て「退之、殘形操を作る、末語に曰く、巫咸上レ天、識者其誰、余その詞、尙ほ歸宿を缺き、拘幽・將歸の二操、語、詠ずべきに如かざるを以てや、遂に爲に之を補ふ」といつて居る。現に維楨が禮記の狐死正邱首を翻用して收束としたのは、退之よりも、まさしく一歩を踏過したものである。朱竹垞も、亦た此首を評して「直に事を述べ、語亦た古質、但だ恨むらくは、言外の意少し」と云つて居る。何義門は「未だ其首を得ざるは、蓋し明主の作らざるを嘆ずるなり」と云つたが、さうすると、旨意も稍や明白になる。次に、琴操十首の總評を擧げると、滄浪詩話に「韓退之の琴操高古、正に是れ本色、唐賢の及ぶところに非ず」と云ひ、漁隱叢話に「唐子西の語餘に云ふ、古樂府命題、皆主意あり、後の人、樂府を用ひて題と爲すもの、直に當に其人に代つて措辭すべし。公無渡河の如き、須らく、妻、その夫を止むるの辭を作すべし。太白輩も、或は之を失ふ、惟だ退之の琴操、體を得たり。琴操は、柳子厚作る能はず、子厚の皇雅は、退之亦た作る能はざるなり」と云ひ、沈德潛は「琴操諸篇、深婉忠厚、風雅の正を得たり」と云つて居る。それから、韓退之は、何時頃、この琴操十首を作つたかといふと、清朝に至りて、韓集の編年を試みたる方世擧などの說に據ると、これは、韓愈が佛骨表を上つたに因つて、罪を得、潮州に流された其時に作つたといふことである。何さま、越裳操以外は、すべて失意の場合に限つて居るので、どうしても、得意時代の者ではない。そして、韓愈の失意の時といへば、上記の潮州貶謫が第一で、この說は、確證は無いが、まことに、理の當を得たものと思はれるので、今日の處、これに從ふより外はない。

南山詩

吾聞京城南。茲維羣山囿(一)。　吾聞く京城の南、茲に維れ羣山の囿と。
東西兩(二)際レ海。巨細難レ悉究。　東西兩つながら海に際し、巨細悉く究め難し。
山經(三)及地志(四)。茫昧非レ受授(五)。　山經及び地志、茫昧として受授するに非ず。

（六）閼辭試提挈（七）。挂一念萬漏。　辭を閼めて試に提挈し、一を挂けて萬を漏らさむを念ふ。
欲休諒（八）不能。粗敍所經覯（九）。　休まむと欲するも諒に能はず、粗ぼ經覯する所を敍せむ。
嘗昇崇丘（一〇）望。戢戢（一一）見相湊（一二）。　嘗て、崇丘に昇つて望めば、戢戢として相湊るを見る。
晴明出稜角（一三）。縷脈（一四）碎分繡（一五）。　晴明に稜角を出せば、縷脈、碎けて繡を分つ。
（一六）蒸嵐相澒洞（一七）。表裏忽通透。　蒸嵐相澒洞して、表裏忽ち通透す。
無風自飄簸。融液（一八）煦（一九）柔茂（二〇）。　風なけれども、自ら飄簸し、融液、煦めて柔茂。
橫雲時平凝。點點露數岫（二一）。　橫雲時に平凝し、點點として數岫を露はす。
天空浮修眉（二二）。濃綠畫新就。　天空に修眉を浮べ、濃綠、畫、新に就る。
（二三）孤撐有巉絕（二四）。海浴褰（二五）鵬噣。　孤撐して巉絕たるあり、海に浴して鵬の噣を褰ぐ。
（二六）春陽潛沮洳（二七）。濯濯（二八）吐深秀。　春陽、沮洳に潛るときは、濯濯として、深秀を吐く。
巖巒雖嵂崒（二九）。輭弱類含酎（三〇）。　巖巒、嵂崒と雖も、輭弱、酎を含むに類す。
夏炎百木盛。蔭鬱增埋覆。　夏炎、百木盛に、蔭鬱として增す埋覆す。
神靈日歊歔（三一）。雲氣爭結構。　神靈日に歊歔し、雲氣、爭うて結構す。

秋霜喜刻轢（三二）。磔（三三）卓立癯瘦。　秋霜、刻轢を喜び、磔卓として、立つて癯瘦す。
（三四）參差相疊重。剛耿（三五）陵宇宙。　參差として相疊重し、剛耿として宇宙を陵ぐ。
（三六）冬行雖幽墨（三七）。冰雪工琢鏤。　冬行、幽墨と雖も、冰雪工に琢鏤。
新曦照危峨（三八）。億丈恒高袤（三九）。　新曦、危峨を照らせば、億丈、恒に高袤。
（四〇）明昏無停態。頃刻（四一）異狀候（四二）。　明昏、停態なく、頃刻、狀候を異にす。
西南雄太白（四三）。突起莫間簉（四四）。　西南には太白雄たり、突起して間簉なし。
（四五）藩都配德運（四六）。分宅（四七）占丁戊（四八）。　都に藩として德運に配し、宅を分つて丁戊を占む。
逍遙越坤位。詆訐（四九）陷（五〇）乾竇。　逍遙して坤位を越え、詆訐して乾竇に陷る。
空虛寒兢兢。風氣較搜漱（五一）。　空虛寒くして兢兢たり、風氣較や搜漱。
（五二）朱維方燒日。陰霰縱騰糅。　朱維、燒日に方るも、陰霰、縱に騰糅す。
（五三）昆明大池北。去覰偶晴晝。　昆明、大池の北、去つて覰れば、偶ま晴晝。
緜聯窮俯視。倒側（五四）困清漚（五五）。　緜聯として、俯視を窮め、倒側、清漚に苦む。
微瀾動水面。踊躍（五六）躁猱狖。　微瀾、水面を動かし、踊躍、猱狖躁ぐ。

驚呼惜破碎。仰喜呀不仆。
前尋徑(五七)杜墅(五八)。坌(五九)蔽畢原陋(六〇)。
崎嶇上軒昂。始得觀覽富。
(六一)行行將遂窮。嶺陸(六二)煩互走。
(六三)勃然思坼裂(六四)。擁掩難恕宥。
(六五)巨靈與夸蛾(六六)。遠賈(六七)期必售。
還疑造物意。固護蓄精祐(六八)。
力雖能排斡(六九)。雷電怯呵詬。
(七〇)攀緣脫手足。蹭(七一)蹬抵積甃(七二)。
茫如試矯首。堛(七三)塞生怐愗(七四)。
威容喪蕭爽。近新迷遠舊。
(七五)拘官計(七六)日月。欲進不(七七)可又。
(七八)因緣窺其湫(七九)。凝湛閟陰嘼(八〇)。

驚呼して破碎を惜み、仰ぎ喜び呀として仆れず。
前に尋ねて、杜墅に徑すれば、坌蔽して畢原陋なり。
崎嶇上つて軒昂、はじめて觀覽の富を得たり。
行行將に遂に窮まらむとし、嶺陸煩はしうして互に走る。
勃然として坼裂を思ひ、擁掩して恕宥し難し。
巨靈と夸蛾と、遠く賈うて必ず售らむことを期す。
還た疑ふ、造物の意、固く護つて精祐を蓄ふるかと。
力、排斡を能くすと雖も、雷電、呵詬を怯る。
攀緣して手足を脫し、蹭蹬として積甃に抵る。
茫如として、試に首を矯ぐれば、堛塞して怐愗を生ず。
威容、蕭爽を喪ひ、近新、遠舊に迷ふ。
官に拘せられて、日月を計り、進まむと欲して、又すべからず。
因緣して其湫を窺へば、凝湛、陰嘼を閟づ。

魚蝦可俯掇。神(八一)物安敢寇。
林柯有脫葉。欲墮鳥驚(八二)救。
爭銜彎環飛。投棄急哺(八三)鷇。
旋歸道廻(八四)睨。達(八五)枿壯復(八六)奏。
吁嗟信奇怪。峙(八七)質能化貿。
(八八)前年遭譴讁。探歷得邂(八九)逅。
初從藍(九〇)田入。顧眄勞頸(九一)脰。
時天晦大(九二)雪。淚目苦(九三)(九四)矇瞀。
峻塗拖長冰。直(九五)上若懸溜。
褰衣步推馬。顚蹶退且復。
蒼黃忘遐睎。所矚纔左右。
杉篁咤(九六)蒲蘇。杲(九七)耀攢(九八)介冑。
專心憶平道。脫(九九)險逾避臭。

魚蝦、俯して掇ふべく、神物、安んぞ敢て寇せむや。
林柯、脫葉あり、墮ちむと欲して鳥驚き救ふ。
爭ひ銜んで、彎環として飛び、投棄、哺鷇よりも急なり。
旋歸、道より廻睨すれば、達枿、壯にして復た奏む。
吁嗟信に奇怪、峙質能く化貿す。
前年、譴讁に遭ひ、探歷、邂逅を得たり。
初め藍田より入り、顧眄して頸脰を勞す。
時に天晦うして大に雪ふり、淚目苦だ矇瞀。
峻塗に長冰を拖き、直に上れば懸溜の若し。
衣を褰げて、歩して馬を推せば、顚蹶して退き且つ復る。
蒼黃として遐睎を忘れ、矚るところは、纔に左右のみ。
杉篁、蒲蘇を咤き、杲耀、介冑を攢む。
心を專にして、平道を憶ひ、險を脫して臭を避くるに逾ゆ。

昨來逢清霽。宿願忻始副。　昨來、清霽に逢ひ、宿願、始めて副ふを忻ぶ。

崢嶸躋冢頂。倏閃(一〇〇)雜鼯鼬(一〇一)。　崢嶸として、冢頂に躋れば、倏閃、鼯鼬を雜ふ。

前低劃開闊。爛漫堆衆皺(一〇二)。　前低く、劃して開闊、爛漫として、衆皺を堆す。

或連若相從。或蹙若相鬬。　或は連つて相從ふが若く、或は蹙まつて相鬬ふが若し。

或妥若弭(一〇三)伏。或竦若驚雊(一〇四)。　或は妥うして弭き伏すが若く、或は竦つて驚き雊くが若し。

或散若瓦解(一〇五)。或赴若輻湊(一〇六)。　或は散じて瓦解の若く、或は赴いて輻湊の若し。

或翩若船遊。或決若馬驟。　或は翩として、船の遊ぶが若く、或は決して馬の驟けるが若し。

或背若相惡。或向若相佑。　或は背いて相惡むが若く、或は向つて相佑くるが若し。

或亂若抽筍。或嗥(一〇七)若注灸。　或は亂れて筍を抽くが若く、或は嗥うして灸を注ぐが若し。

或錯若繪畫。或繚若篆籀(一〇八)。　或は錯はつて繪畫の若く、或は繚うて篆籀の若し。

或羅若星離(一〇九)。或蓊若雲逗(一一〇)。　或は羅つて星の離るが若く、或は蓊にして雲の逗るが若し。

或浮若波濤。或碎若鋤耨(一一一)。　或は浮んで波濤の若く、或は碎けて鋤耨の若し。

或如賁育(一一三)倫。賭勝勇前購(一一四)。　或は賁育の倫、勝を賭して前購に勇に。

先強勢已出。後鈍嗔䜵譳(一一五)。　先には強うして勢已に出で、後には鈍にして嗔つて䜵譳するが如し。

或如帝王尊。叢集朝賤幼(一一六)。　或は帝王の尊、叢集して賤幼を朝せしめ、

雖親不褻狎。雖遠不悖謬(一一七)。　親と雖も、褻狎せず、遠と雖も、悖謬せざるが如し。

或如臨食案。肴核紛飣餖(一一八)。　或は食案に臨み、肴核紛として飣餖するが如し。

又如遊九原(一一九)。墳墓包槨柩(一二〇)。　又九原に遊んで、墳墓に槨柩を包みたるが如し。

或纍若盆甖。或揭(一二一)若甑豆(一二二)。　或は纍として盆甖の若く、或は揭として甑豆の若し。

或覆若曝鼈。或頽若寢獸。　或は覆うて曝鼈の若く、或は頽れて寢獸の若し。

或蜿若藏龍(一二三)。或翼(一二四)若搏鷲(一二五)。　或は蜿まりて藏龍の若く、或は翼いて搏鷲の若し。

或齊(一二六)若友朋。或隨若先後(一二七)。　或は齊しうして友朋の若く、或は隨つて先後の若し。

或迸若流落。或顧若宿留(一二八)。　或は迸つて流落するが若く、或は顧みて宿留するが若し。

或戾(一二九)若仇讎。或密若婚媾。　或は戾つて、仇讎の若く、或は密にして婚媾の若し。

或儼若峨冠(一三〇)。或翩若舞袖。　或は儼として峨冠の若く、或は翩つて舞袖の若し。

或屹若戰陣。或圍若蒐狩(一三一)。　或は屹として戰陣の若く、或は圍んで蒐狩の若し。

或靡然東注。或偃然北首。　或は靡然として東に注ぎ、或は偃然として北に首ふ。

或如火熺(一三二)焰。或若氣饙(一三三)餾。　或は火の熺焰の如く、或は氣の饙餾の若し。

或行而不輟。或遺而不收。　或は行いて輟まらず、或は遺して收めず。

或斜而不倚(一三四)。或弛而不彀(一三五)。　或は斜にして倚らず、或は弛んで彀らず。

或赤若禿(一三六)鬝。或燻若柴(一三七)槱。　或は赤くして禿鬝の若く、或は燻して柴槱の若し。

或如龜(一三八)拆兆。或若卦(一三九)分繇。　或は龜の兆を拆つが如く、或は卦の繇を分つが若し。

或前橫若剝(一四〇)。或後斷若姤(一四一)。　或は前に橫はつて剝の若く、或は後に斷えて姤の若し。

延延離又屬。夬(一四二)夬叛還遘。　延延として離れ又屬り、夬夬として叛いて還た遘ふ。

(一四三)喁喁魚闖萍(一四四)。落落月經宿(一四五)。　喁喁として魚萍を闖ひ、落落として月宿を經たり。

(一四六)闓闓樹牆垣。巘(一四七)巘架庫廄。　闓闓として牆垣を樹て、巘巘として庫廄を架す。

參參削劍戟。煥煥銜瑩(一四八)琇。　參參として劍戟を削り、煥煥として瑩琇を銜む。

敷敷花披萼。闟(一四九)闟屋摧(一五〇)霤。　敷敷として花萼を披き、闟闟として屋霤を摧く。

悠悠舒而安。兀兀狂以狃。　悠悠として舒べて安く、兀兀として狂以て狃る。

超超出猶奔。蠢蠢駭不(一五一)懋。　超超として出でて猶は奔り、蠢蠢として駭いて懋めず。

大哉立天地。經(一五二)紀肖營(一五三)腠。　大なる哉、天地を立つる、經紀、營腠に肖たり。

厥初孰開張。僶俛誰勸(一五四)侑。　厥の初、孰か開張する、僶俛、誰か勸侑する。

創茲朴而巧。戮力忍勞(一五五)疚。　茲を創むること朴にして巧に、力を戮せて勞疚を忍ぶ。

得非施斧斤。無乃假詛(一五六)呪。　斧斤を施すに非ざるを得ば、無乃詛呪を假らむや。

(一五七)鴻荒竟無傳。功大莫酬(一五八)僦。　鴻荒竟に傳ふるなく、功大にして酬僦するなし。

嘗聞於祠官。芬(一五九)苾降歆(一六〇)嗅。　かつて祠官に聞き、芬苾、歆嗅を降す。

斐然作歌詩。惟用贊報(一六一)酭。　斐然として歌詩を作り、惟だ用ひて報酭を贊けむ。

【字解】【一】匯　あつまる、相會する處、即ち交會點。【二】兩際海　史記に見えた春申君が秦の昭王に上る書に「王の地、一に兩海を經」とある。無論、支那の東は太平洋であるが、西は、西域の先も海であると、むかしから考へて居たので、後に東漢の時、甘英は條支、即ち今の小亞細亞まで行つて、地中海を望み、もう行かれぬと思つて引き返したといふ事實もある。【三】山經　山海經。【四】地志　歷代の正史に載せた地理志の類。【五】受授　口に傳へ手に傳へて師弟授受する。【六】團辭　あらむ限りの言葉を集める。【七】提挈　その大綱を提げる。【八】諒　まことに。【九】經覯　自分が親歷して實際に見たこと。【一〇】崇丘　高い岡。【一一】戢戢　集まる貌。【一二】相湊　湊は集まる。【一三】稜角　山の隅隅。【一四】樓脈　林の如くなつて居る山の脈理。【一五】分繡　刻繡のやうに判然と見える。【一六】蒸嵐　嵐は山氣、即ち霞。【一七】澒洞　淮南子に鴻濛澒洞とあつて、空濛の貌。王褒の

蕪賦、揚雄の羽獵賦にも同じ意味に用ひてあるし、唐人は、この二語を合用したこととなるので、杜詩に漂泊中ニ炎方ニといひ、又僻漏不レ可レ援といつて居る。【一八】融液　雨の潤澤。【一九】煦　あたためる。【二〇】柔茂　草木の生長すること。【二一】數岫　岫は兩山の間、即ち谷。【二二】修眉　洛神賦に修眉聯娟とあつて、長い眉。又西京雜記に「文君、姣好、眉色、遠山を望むが如し」といひ、飛燕外傳に「趙飛燕の妹、合德と名づく、薄眉を爲り、遠山黛と號す」とある。【二三】孤撐　ひとり離れて聳える。【二四】巉絶　鬱鋭くそそり立つ貌、劉孝標の廣絶交論に「太行孟門、豈に巉絶といはむや」といひ、杜甫の詩に巉絶華嶽赤とある。【二五】海浴褰鵬噣　史記に「中行は人面鳥噣」とあつて、噣は喙。そこで、此句は、大鵬が暫く其翼を休めて海に浴し、そして噣を以て海水を褰げて居るといふ意。【二六】春陽　春の陽氣。【二七】沮洳　下濕の地、詩經に彼汾沮洳とあつて、その疏に「潤澤の處」とある。【二八】濯濯　つややかな貌。【二九】嵂崒　險しき貌、史記に降崇嵂崒とあり、杜詩に高嶽前嵂崒とある。【三〇】含酎　酒氣を含む。【三一】歊歊　照りつける、氣の出づる貌。【三二】刻轢　史記の酷吏傳に「宗室を刻轢す」とある、刻削凌轢、刻んできしる。【三三】磔卓　蔣之翹の註に「草木皆落ち、山卓然として獨立するを言ふなり」とある。【三四】參差　不揃の貌。【三五】剛耿　山の木の兀立するを形容して云ふ。【三六】冬行　冬の間。【三七】幽墨　空の晦く曇りたるをいふ。【三八】危峨　高い峰。【三九】高袤　說文に「東西を廣といひ、南北を袤といふ」とある。ここでは高さと廣さ。【四〇】明昏　朝暮に同じ。【四一】頃刻　しばらくの間、暫時。【四二】肰候　形狀物候、即ち現象。【四三】太白　山名、三秦記に「太白山は、武功縣南に在り、長安を去ること三百里、俗に云ふ、武功太白、天を去ること三百」とあり、柳文に「雍州の西南、梁に界す、その山を太白といふ、その地、常に寒し」とある。【四四】莫間簉　左傳に「僖子、薳氏の簉を助けしむ」とあつて、その註に「簉は副倅なり」とある、即ち己に副ふものを云ふ。間簉は、交はるといふことで、傍に副次的に存在すること。【四五】藩都　長安の藩屏となる。【四六】配德運　太白は長安の西南、即ち未申で、坤位に當る、坤は土德。元來、唐は土德を以て天下に主となつた故に、太白を以て、德運に配すといつたのである。【四七】分宅　終南山が分家して太白山となつたといふ意。【四八】占丁戊　十干を方位に配すると、丁戊は矢張西南に當る。【四九】詆訐　引き返す。【五〇】陷乾竇　東北の乾の方角に山の尾が捌れ返る、蔣之翹の解に「二句、但だ言ふ、太白は特だ西南の坤位を占むるのみならず、又東北の乾位に侵し及ぶ、故に陷乾竇といふなり」とある。【五一】搜漱　水中で身體を洗ひ、又口を漱ぐこと、即ち掬撥を取る。【五二】朱維方燒日　夏の眞盛で、太陽が夏至線に來たといふこと。【五三】昆明　長安の西南に在つて周回四十里、漢の武帝の元狩二年に開鑿した。【五四】倒側　山の影が倒に側立する。【五五】困清漚　奇麗に澄んで居る水面に山の影をうつして困らせるといふので、聞分苦しい文字の使ひ方である。【五六】踊躍躁猱狖　猱は猨の屬、詩經に無レ教ニ猱升ニ木とある。狖は、鼠の屬で、善く旋るともいふし、又獸の名で、猿に似て居るともいふ。後者の方が善いかも知れぬ。楚辭に、猿狖群嘯兮虎豹嘷とある。微瀾動ニ水面ニ踊躍躁猱狖の四句は、微瀾が水面を動かすと、木に登つて居る猿どもは、自分の影といふことに氣附かず、自分が動かされて木から落ちたのだと思つて、非常に驚いて叫び、その影の破碎するを惜み、そして、ふと仰いで見ると、自分は、水中ではなく、依然木の上に居るから、ヤレ嬉しやといつて、口を開いて、驩喜しつつ幸に仆れずに居るといふ意。【五七】徑　わたる、尋ねる。【五八】杜墅　即ち杜陵、本と周の杜伯の國で、長安萬年縣の東南に在る。【五九】坌蔽　坌は塵の起る貌。【六〇】畢原　周の文王・武王を葬つた處で、萬年縣の西南二十八里に在る。【六一】行行　次第に進むこと、古詩に行行重行行とある。【六二】嶺陸煩互走　嶺は山、陸は平原、高低一ならずして、山と平原とが交互に前に走つて居る。【六三】勃然　心に怒ること。【六四】坼裂　切り開く。【六五】巨靈　西京賦に巨靈贔屓、高掌遠蹠とあり、郭緣生の述征記に「華山は、河東の首陽山に對す、黃河、二水の間を流る。古語に云ふ、これ本と一山、河に當り、河水、これを過ぎて曲行す、河神巨靈、手を以て其上を劈開し、足を以て其下を蹈み、中分して兩となし、以て河流を通ず」とある、即ち河神。【六六】夸蛾　列子に「北山の愚公、太行・王屋の二山を平かにせむと欲す、帝、その誠に感じ、夸蛾二子に命じて、二山を負はしめ、一は朔東に厝き、一は雍南に厝き、冀の南、漢の東より隴斷なし」とある。【六七】遠賈期必售　左傳成公二年に「勇ならむと欲するものは、余の餘勇を賈へ」とあり、詩經に賈用不レ售とあつて、賈の字から售といふ字が出て來るのみならず、歷とした用例がある。その意は、巨靈夸蛾は、きつと、その餘勇を賣るだらうから、自分達は遠くへ往つて、それを買つて來て、この山山を坼裂して、前面の善く見える樣にしたいといふ意。【六八】精祐　精靈の力。【六九】排斡　前の坼裂と同義。【七〇】攀緣　崖巖に攀ぢ緣る。【七一】蹭蹬　よろめく貌。【七二】積甃　石だたみ、甃は井戸側に積んだ瓦礫であるが、ここでは借り

て、小石の河原に成つて居る谷川を指す。【七三】埆塞 埆は土塊、ぎつしりと塞がる。【七四】拘攣 楚辭に直拘攣而自若とあつて、その註に「愚なり」とある。集韻には「通じて攣に作り、鄙音にして心明かならざるなり」と解してある、つまり煩悶すること。【七五】拘官 公務に拘束される。【七六】計日月 山岡を拆裂するには非常に多くの歳月を要する。【七七】不可又 續けて行くことが出来ない。【七八】因緣 たどり傳はる。【七九】湫 即ち沼、一に龍の居るところといふ、南山には炭谷湫といふのがあつて、大方、それだらうといふこと。【八〇】陰嘼 嘼、音は嘼、一に畜に作り、一に獸に作る。禮記に「龍、以て嘼となす」とある、即ち水中の蛟を指し、後に出て来る秋懐の詩に、其下澄湫水、有蛟寒可罾と同義。【八一】神物安敢寇 神物は前の陰嘼、即ち蛟、この句に二種の解釋があつて、蛟に對しては、我いかで寇を爲すべきぞといふのと、蛟は我に對して、いかで寇を爲すべきぞといふのとで、つまり、主客の相違である。要するに、かういふ語法は、兎角、曖昧晦澁に流れ易いもので、後人は尤も注意せねばならぬ。【八二】墮敷 木の葉の落ちるのを水中には落すまい、水を汚してはならぬといつて、鳥が横から飛んで来て、これを啣つて落させまいとする。譜之鶴は「その湫澄徹、葉落つ、その汚さむことを恐れ、即ち鳥銜み去る。蓋し、その神物の靈、かくの如し。公の炭谷湫祠に題する詩に、魚龍震擒獲と云ふものは、此なり」といつて居る。【八三】哺穀 鳥生まれて哺を須つを穀といひ、自ら食するを雛といふ。つまり、孵化したばかりの雛。【八四】廻睨 回顧する。【八五】逵枿 高い嶺、盧仝の月蝕の詩に頭戴弁冠高逵枿とある。【八六】復奏 輻輳に同じ。【八七】峙質能化貿 峙質は山の本體、化貿の貿は貿易の貿で、矢張、變易する意。山の本體は、常に變化するといふこと。【八八】前年遭譴謫 貞元十九年十二月、監察御史より連州陽山令に謫せられしことをいふ。【八九】邂逅 めぐり合ふ、出合ふ。【九〇】藍田 縣の名、そこに關所がある。【九一】頸脰 脰も首。【九二】大雪 韓愈は、兩度南方に謫せられ、その都度、藍田の關を通つたが、いつも雪に遇うた。陽山に謫せられた時は十二月で、江陵途中寄三學士の詩に、商山冬季月、氷凍絶行輈といひ、潮州に謫せられたは正月であつたが、矢張、大雪で、雪擁藍關馬不前の句を得た。【九三】苦 甚だ。【九四】暖眥 莊子に「子適ま眥病あり」とあつて、その註に「風眩冒亂」とある。つまり、目がくらむこと。【九五】直上若懸溜 嶺の上から氷柱が下つて、さながら、溜の水の様である。【九六】吒濆霈 濆霈は扶疎と音通、吒は吐く、ここでは茂つて居る。【九七】杲耀 詩經に杲杲出日とあつて、朝日に照り付けられる。【九八】擐介冑 武裝いかめしきをいふ。【九九】脫險逾避臭 臭を避けるのは、普通の人情であるが、早く險を脫したいといふ念は、それよりも甚しい。呂氏春秋に「人、大臭の者あれば、その兄弟親戚、皆能く與に居るなし」とある。【一〇〇】倏閃 素早き貌。【一〇一】鼯鼪 爾雅に「鼯鼪は夷由」その註に「之を飛生と謂ふ」とあり、又「鼪鼠」の註に「鼪は鼬に似たり、赤黃大尾、鼠を啖ふ」とある。むささび、貂の類。【一〇二】衆皺 山脈の重なり合ふ處が、衣上の皺に似たるよりいふ。方崧卿の校本は蜀人韓仲韶の本に從つて衆皺に作り「石巖なり、二韻皆喩を取る。謂ふは、高くして羣峰飛騰、鼯鼪の奔るが如く、低くして堆阜分布、衆皺の列するが如し、義に於て近しと爲す」といつたが、朱子は之を駁して「これ蜀本の誤、沈元用本も亦た然り、皆是に非ず。蓋し、此は但だ登山の時、叢薄蔽翳、方に蟲獸と羣行するを言ふ。しかも、忽ち上頂に至れば、豁然として前山の低きを見る、高陵深谷ありと雖も、但だ皺物、微に蹙摺の文あるが如きのみ。これ最も善く形容するものなり。高山に登り、曠野に臨むに非ざれば、この語の工たるを知らざるなり、況んや、この句、衆皺は下文諸の或の綱領たり、しかも、諸の或は、乃ち衆皺の條目、その語意接連、文勢開闔、毫釐を以て差ふべからざるものあり。若し方說の如くすれば、唯だその統紀を失ひ、その行列を亂すのみならず、しかも、鼯鼪は動物、山體常に靜にして、絕えて相似たるの理なし。石巖の堆阜と略ぼ相似たりと雖も、然れども、高頂より下觀し、猶ほ若し堆を成せば、亦た甚だしく小とは爲さず、しかも、未だ高山の極めて高きを見るに足らず、その餘の下文、諸の或、疎密工拙、又迥然として侔しからざるものあり、未だ古人を論ぜず、但だ今時の擧子をして稍や能く布置せしむるも、すでに之を爲さず、又況んや韓子文氣筆力の盛、關鍵紀律の嚴なるをや。大抵、今人、公の文に於ける、その力めて陳言を去るの工たるを知り、しかも、その文從字順の貴しと爲すを知らず、故に怪を好み常を失する、類ね多く此の如し、今すでに定めて諸本に從うて、復た備さに其說を論じ、以て觀者に曉すと云ふ」とある。【一〇三】弭伏 なびき伏す、俯伏する。【一〇四】雊雊 雊は雉の鳴くこと、鳴いて鳴く。【一〇五】瓦解 史記に「天下の患は、土崩に在つて、瓦解に在らず」とある。【一〇六】輻湊 輻は車輪の矢で、中央に集合して居る。【一〇七】或爛若注灸 爛然として高く聳えて居るのが、丁度、背中に灸を据ゑるとき、その痕が火ぼこつて居る樣に見える。【一〇八】篆籀 即ち大篆。周の宣王の時、太史籀といふものが、はじめて大篆を作つた。【一〇九】星離 離は、つらなる。支那の

文字には、一つの字で、正反對の意味を併有するものがあるので、例の亂臣十人の亂の字の如き、晁離・離騒の離の字の如きが、その例である。【一一〇】薈 薈鬱の薈で、盛なる貌、集まる貌。【一一一】雪逗 逗は逗留、即ちとどまる。【一一二】若鋤耨 鋤鍬で土地を均したやうな形になつて居る。【一一三】賁育 孟賁夏育、ともに秦の勇力者。【一一四】勇前購 懸賞物を目的として、勇んで進む。【一一五】嗔詛譎 嗔は怒る、詛譎は玉篇に「詭說なり、詭說は言正しからざるなり」とある。腹を立てて愚圖愚圖不平をいふ。【一一六】叢集 二字、ともに集まる。【一一七】雖遠不悖謬 遠ざけるといつても、少しも其者を悖ひ付けぬといふのではない。晁說之は「韓文公の詩、狀體を說す、鋪敍して含蓄なきを謂ふなり、雖レ親不二褻狎一、雖レ遠不二悖謬一の如き、理に詖ること多し」といつて居る。【一一八】飣餖 食を貯へること。【一一九】九原 墓地を云ふ。【一二〇】槨柩 槨は棺を蓋うたもの、即ち二重の棺で外に在るもの、柩は即ち棺。【一二一】搨 上の開いて居る貌。【一二二】甑豆 器の名、爾雅に「大豆、これを豆といひ、瓦豆、これを登といふ」とある。【一二三】藏鼫 隱れたる鼠、即ち潜鼠。【一二四】翼 翅を撃つ、羽ばたきをする。【一二五】搏鷙 他の物に搏ちかかる鷙、山海經に「景山に鷙多く、黑色にして刀あり」とある。【一二六】齊 順序よく竝ぶ。【一二七】先後 蔣之翹の註に「方言に、先後は猶ほ娣姒のごときなり。釋名に、來るの先後を以て言ふなり。史記に、見二神於先後一宛若、即ち娣姒を謂ふなり。校本、この義を詳にせず、しかも、先後を以て虛字と爲し、遂に友朋を改めて迎臨となし、以て之に偶し、又重複を避け、而して、臨の字を改めて蓋の字となす、その謬甚だし」とある。【一二八】宿留 史記に「これに宿留すること數日、見るところなし」とあり、又「武帝、海上に宿留す」とある。【一二九】戾 もとる、互に反目する。【一三〇】峨冠 高き冠。【一三一】蒐狩 ともに狩獵、爾雅に「春の獵を蒐といひ、冬の獵を狩といふ」とある。【一三二】熺焰 熺は熾、火勢盛にして焰を擧げる。【一三三】饙餾 爾雅に「飯を饋するを饙といひ、饋熟するを餾といふ」とあつて、飯を炊ぐ時に湯氣の吹き出ること。【一三四】倚 片よる。【一三五】彀 弓の弦を張る。【一三六】禿鬝 說文に「鬝は髮の禿げたるなり、或は云ふ頭瘡」とある。【一三七】柴槱 薪、粗朶をいふ。【一三八】龜坼兆 龜卜といつて、龜の甲を燒いてトをなし、その破れ方を見るをいふ。兆は罅れ目。【一三九】卦分繇 卦の面に因つて、易の本文を調べる。【一四〇】若剝 剝は坤下艮上 ䷖ 一番上だけが陽、前に横はつて下が續べて罅れて居る。【一四一】若姤 姤は巽下乾上 ䷫ 前と反對に一番下だけが陰、あとが切れて居て、上だけが續いて居る。【一四二】夬夬 しばらく離れる貌、易に君子夬夬、遇雨若濡とある。【一四三】喁喁 喁は魚が口を開いてぱくぱくして居る貌、吳越春秋に「天下喁喁たり」とある。【一四四】闖 馬の門を出づる貌、萍の間から魚が頭だけ出して居る。【一四五】綴宿 宿は列星。【一四六】閶閶 文選長門賦に桂樹交而相紛兮、芳酷烈之閶閶とある。【一四七】嶒嶸 姚令威は嶒嶸に作るべしといひ、魏都賦に飛檐嶒嶸とあつて、註に高き貌とある。【一四八】瑩琇 詩經に充耳琇瑩とあつて、註に美石とある。【一四九】闐闐 集まる貌。【一五〇】屋漏霤 說文に「霤は屋水の流なり」とある、屋根が破れて雨水が流れる。【一五一】不懋 求めず。【一五二】經紀 經營に同じ。【一五三】營腠 營は營衆、腠は腠理、血管の脈絡。【一五四】勸侑 二字ともにすすめる。【一五五】勞疚 疚はやましきこと、二字ともに疲勞。【一五六】詛呪 呪文まじなひ。【一五七】鴻荒 大に寬漠なること。太古の世、陰陽の未だ剖判せざるをいふ。【一五八】酬償 償は借りたものに對して謝禮をすること。【一五九】芬苾 供物の新鮮なるをいふ。【一六〇】歆嗅 神が之を享け、且つ其物の香を嗅ぐ。【一六一】報酬 報恩の意。

【題意】南山は即ち終南山。通典に「長安縣南に終南山あり、武功縣の東に在り、一名南山」とあり、元和郡縣志に「終南山は、京兆府萬年縣南五十里に在り」とあつて、藍田・咸寧・長安・盩厔、四縣の境に連亙して居る。そして、その山脈は、渭水と竝行し、西に走つて太白を起し、やがて、蜀中への通路となり、鳳嶺にまで續いて居る。この詩は、終南山に遊んで作つたのであるが、その結構をいふと、初めに、從來屢ば遊びに行かうと思つて計畫したが、兎角支障があつて、實際の景色を目擊することが出來なかつたといひ、それから、愈よ今次の探勝に及び、その下に於て、山中の景勝を述べたのである。しかし、その景勝を述べるには、全然、虛寫を用ひて、一も實筆を用ひず、さながら、終

南山賦を作るといふやうな心持で起稿した處が、絶代の奇作と稱せらるる所以である。

【詩意】吾聞く、長安城の南に當つて終南山があるが、この山は、宇內羣山の交會點といふべく、その餘脈は、長く連つて盡きず、東は東海、即ち太平洋に及び、西は西域の海、即ち地中海にまで走つて居る。かくの如く、支那本部を横斷して居る主山であるから、この山を寫すことは、なかなか六づかしく、巨細悉く究めることは出來ない。古くは山海經、近くは歷代正史の地理志等は、皆机の上で想像的に書いて居るから、茫昧として明かにし難く、聖賢が自身で探檢をした結果を口に傳へ手に傳へて授受したものではないから、これを一概して、確乎たる根據に乏しいものである。そこで、自分は、あらむ限りの文獻を取り集めて、試に其大綱だけでも書いて見たいと思ふが、一を擧げて萬を漏らす虞があるから、全體としての山を寫して見たいと思ふ。さういふ考を起してからは、止めやうと思つても、まことに止められず、全體と云つても困るから、自分が嘗て實地に跋渉して、目に見たことだけでも敍述することにし、そこで、愈よ此詩を作つたのである。ある時、長安の郊外に出で、高い岡に上つて終南山を望んだが、戢戢として、攢巒の相集まるのが見えた。天氣の好い時であつたから、山山の稜角は、くつきりと錯出し、絲を引いた山の脈理は、刺繡が零碎して分かれて居る樣であつた。山の間から蒸し出す煙嵐は、空濶にして、それが山の表裏に通透すると、折角の山が又見えなくなる。さういふ樣に、雲が一たびかかると、風もないのに、その雲は、愈よ飄つて廣がり、やがて、雨を降らし、長安一帶の草木は、これに暖められて、愈よ成長する。かくて、雲に鎖されると、山は全く見えぬが、時としては、横雲が平かに凝結し、その斷え間から、點點として數岫を露出することがある。又雨後の眺は一しほであつて、天空の極めて廣い處へ細長い眉を浮べ、その緑濃かにして匂ふばかりなるは、たつた今描いて初めて成つたものかと思はれる。それから、段段雲が切れると、山全體が又見え出し、その一番高い處は、ひとり、ぽつねんと聳えて、その勢の嶮絶なるは、かの大鵬といふ鳥が、渺茫たる海に浴し、おのが喙を以て、海水を刎ね飛ばして居るやうである。もとより四季の折折につれて、その眺、異にして、變化極まらず。春は陽氣が沮洳の地に潛んで居て、それから、水蒸氣が段段と立ち登ると、やがて、霞となり、山は浴後の美人が濯濯として、深秀を吐き出すやうに見える。全體、この山は巖山であつて、險しいけれども、春の時分は、物とはなしに軟弱にして、さながら、武張つた人が酒氣を含んで、平生の嚴格なるとは似ても付かぬやうである。夏は、炎氣の爲に種種の木が生長し、陰鬱として、すべてが其中に埋沒せられ、こんもりとして山が大きく見える。神靈儼として存し、もとより神神しい處へ、太陽が直射して照りつけるから、雲氣が自然に生じ、さまざまの形を結成する。秋、霜が降ると、木の葉が落ちて、山も刻削凌轢せられ、卓然獨立、愈よ痩せた儘、ぬつと聳えて居る。かくて、峰巒は、高低一ならずして重り合ひ、立ち枯れの木は、如鬼如鬼として、宇宙を凌いで居る。冬の時節になると、曇り勝で、墨を流したやうな眞黒な雲が出て、

やがて、氷雪を降らし、その氷雪が、工に琢鏤を爲して居る。そこへ朝日が高い峰を照らすと、山は高さと廣さとを增したやうに見える。四季の變化は、かくの如く、一日の中でも、朝と晩とは違ふので、少しもぢつとしては居らず、頃刻の間と雖も、狀候が互に異なつて居る。終南山脈の西に當つて太白山があつて、一方に雄視して居る。この山は、獨立して居て、其傍に交つて副侍するものなく、長安の藩屛として、德運に配すべく、終南山が分家をして、丁戊、卽ち西南の位置を占めたものと見るべく、又逍遙して、遠く其坤位を越え、折り返して、東北なる乾の方角に山の尾を刎ねかへし居る。そこで、この太白山に遊んで、それから、終南の本山へ行かうと思つたが、とうとう行かれなかつた。その時、大空は非常に寒く、風氣は、さながら垢離でも取つた樣であつたが、實は夏の眞盛りで、太陽が夏至線に當つて燒き付ける時分、ここでは、空が搔き曇つて、大粒な霰が、ばらばらと降つて來た位で、まことに淒寒にして險惡な天候であつたから、折角の企をも中止して、引返して仕舞つた。それから、又昆明池の北岸まで來たことがあつたが、その時は、からりと晴れた天氣であつて、眺めやる景色は、極めて宜しく、綿綿として長く續ける山の影を俯視すると、淸く澄める池に倒に映つて仄ち、水面に一ぱい處狹き程で、湖面が却つて迷惑に思ひさうな位、そして、猿などが、木の上に居るが、微瀾が水面に動搖するとき、そこに寫れるを、自分の影とは知らず、動かされて、木から水中に落ちたかと、一圖に思ひ込んで、驚きの餘りに啼き叫んで、その影の破碎するを惜んで居た。やがて、仰いで見て、はじめて、自分は矢張木の上に無事で居たと心づき、ヤレ嬉しやと大に喜んで、口を開いて、キヤツキヤツといつて居る。かくの如く、ここには猿などが人を恐れずして羣居する位、路の奇險は、云ふまでもないので、唯だ水の此方から山を望んだだけ、その水を渡つて、南山まで登つて行かうといふ勇氣も出ず、その時も亦た失敗して仕舞つた。次は、杜墅から南山に登らうとして、ある時、行つて見たことがあつて、程なく、畢原に差しかかると、頻りに塵埃が起つて目を眩まし、いかにもうるさかつたが、どうやらかうやらして、その原を橫斷し、やがて山道に差しかかると、崎嶇甚だしく、やがて、少し高い處へ辿り著くと、眼界が豁然として開け、大に眺望を縱にすることが出來た。その處を行き行きて、將に窮まらむとするとき、岡巒と平原とが交互に入り亂れて居て、地の高低は極めて甚だしい。その岡などの爲めに、山が遮られて見えなくなるので、勃然として腹を立て、その岡を盡く切り開いて仕舞ひたい、おのが眼界を壅蔽して居るから、斷じて、容赦は出來ぬと思つたものの、古しへ華山を裂いた巨靈や、愚公の手傳をした夸蛾の餘勇を買へば、はじめて、さういふ事が出來ると思はれるので、定めて、その餘勇を賣つて居るだらうから、遠くに出かけて買つて來たいと思つた。しかし、よく考へると、この岡巒を作つたのは、もと造物主の神業で、その本意は、これを以て、山の精靈を保護する爲めである。されば、たとひ巨靈や夸蛾の餘勇を買ひ得て、十分、その岡を切り開くことが出來るにしても、それでは、造物主の本意に違ふことで、雷電を起して、ひどく叱りつけられることがないとも限らぬから、マ

ア止めて置く方が善い。そこで仕方がないから、藤蘿に縋りついて、おのが手足を抜き取りながら、やつとの思で、山を越し、磴が石だたみの樣に成つて居る谷川の處へ、よろよろと、やつとの事で遣つて來た。ここでは、定めて、山が善く見えるだらうといふので、茫然として、首を擧げたけれども、鼻の先に山が閊へて、何も見えぬから。はては、煩悶を增すばかりである。元來、この山は、遠望すれば、威容凜然たれども、側へ來ると、極めて平凡になつて、蕭爽として聳えて居る景色は、全く失はれて仕舞ひ、今まで見なかつた新しい景色は、格別の趣もなく、矢張先度遠くで見た方が善かつたと思はれるので、心の中に迷ふばかりである。されば、全體の山を見るには、是非絶頂を窮めねばならぬが、自分は、官吏で、種種の俗務に拘束されて居て、登山には、かなりの時日を要するから、それも出來ず、進まうと思つても、續いて行く譯にも行かぬ處から、その時も、亦た登山を中止して仕舞つた。しかし、折角、ここまで來たのだから、どこか面白い景色は無からうかといふので、その邊を辿り行くと、例の谷川の處に來り、そこには、一つの湫潭がある。その沼は、湛然として碧色を凝らし、蛟が、その主として棲んで居る。水は澄んで居るから、その中に浮遊する魚や蝦などは、手で拾ひ取ることが出來るが、神物たる彼の蛟に至りては、もとより手の付け樣がない。やがて、風なきに、林の木から枯葉が落ちると、水中に落して池を汚すまいといふ樣に、横合から鳥が飛び出して、爭つて、これを嘴に銜へ、彎環として、其邊を飛んで行くが、それは、おのが雛を養成する爲めに、巢の中に其葉を投入せむが爲めである。さて愈よ思ひ切つて、歸途に就き、しばしば振り返つて眺めると、先刻つい側まで往つた時は、まことに詰まらなかつたが、ここでは、又一しほ面白く、終南の山は、高く聳えて、峰が集まつて居る。近くては詰らぬが、遠ければ面白いといふのは、まことに奇怪至極であるが、それは、山の本質上、かく變化するのだから仕方がない。それから、前年罪を被つて、左遷の身となり、陽山令に赴任するとき、又しても其麓を通つて、再び終南の山に邂逅した。その時は、初に藍田の關所から這入つて、しきりに、首を延ばして顧眄したが、俄に天が曇つて、大雪となり、唯ださへ、おのが不幸を嘆いて涙ぐましき目は、すつかり眩んで仕舞つて、十分の眺望を爲すことも出來ず、峻險なる路は、一面の氷で張り詰め、頭の上の巖石からは、氷柱が下つて、瀧津瀨と見まがふばかり、馬では滑つて、とても行かれぬから、馬から下つて、衣を捲くり上げ、とぼとぼと歩みつつ、馬を推して行き、幾度も蹶き轉んで、一たびは、引き返さうとも思つたが、やつとの事で、又ぞろ進んで行つた。かくて、あわただしく、おのが命さへ危い位であるから、のんきに遠方の景色などを眺めて居る餘裕もなく、目に見るところは、わづかに左右だけ、その左右は、杉だの竹だのが、扶疎として茂り合ひ、やがて、杲杲たる日光に照らされると、さながら武裝した人が、聚まつて居る樣で、いかにも物物しく、ただ早く平地に出たいと念じつつ、險を脱せむと欲する心は、臭を避くるよりも更に劇しかつた。かくの如く、前年、終南の探勝を思ひ立つて、毎毎おもふ樣に成らなかつた

が、昨日來、非常に天氣がよく、今度こそ絕頂を窮めて、我が宿願を遂げることが出來た。しかし峰嶸たる險しい路を攀ぢて、絕頂に登ることであるから、その間の危險は、もとより論なく、むささびや貂などに立ち交つて、すり拔けて行くといふ樣な工合。さて絕頂に辿り著くと、自分の居る處が高いから、前に在るものは、一齊に低く、それがくツきりと開いて見え、衆峰が一つに集まつて、多くの皺を集めた樣である。その衆峰は、千差萬別、形貌もとより一ならず、或は、連つて相從ふが如く、或は、疊み合つて相鬪ふが如く、或は、なだらかにして匍伏するが如く、或は、すつと聳えて驚いて鳴き立てるが如く、或は、散じて瓦解の如く、或は、一つ處に赴いて輻湊の如く、或は、翩翩として川の中に舟を浮べたるが如く、或は、決然として馬の馳せ出したるが如く、或は、背中を向け合つて相惡むが如く、或は、向ひ合つて相助くるが如く、或は、亂れて伸び上れる狀は 筍 の抽き出でたるが如く、或は、巉然として高く聳えて居る樣は脊中に灸を据ゑて其痕の火ぼこつて居るが如く、或は、錯綜して繪畫の如く、或は、繚繞して大篆の字の如く、或は、羅列して星の竝べるが如く、或は、こんもりとして雲の一つ處に留まるが如く、或は、浮んで波濤の如く、或は、砕けて鋤鍬で地ならしをなせしが如く、或は、古しへの力士、孟賁夏育などいふ手合が、勝を爭うて、前に賭け物を置き、先に立つた力の强いものが、自然の勢、前に出て仕舞ひ、後に居る鈍な奴は、これに追ひ付けないといつて、腹を立てて悒悒と不平を言ふが如く、或は、帝王の尊位に居て、賤幼の者を集めて參朝せしめ、民を愛すること子の如く、十分に親むけれども、おのが尊嚴を害するまで褻狎せず、それかといつて、之を遠ざくるも、その者を度外視して、少しもかまひつけぬといふことの無きが如く、或は、食卓に臨んで御馳走の品品がちやんと盛り上げられた如く、或は、墓地へ行つて見ると、卵塔婆の堆き間に、棺槨が包まれたるが如く、或は、纍纍として盆を幾つも重ねたるが如く、或は、上が開いて食器の如く、或は、覆つて甲羅を乾して居る 鼈 の如く、或は、姿勢を頽して寢て居る野獸の如く、或は、蜿として隱れたる龍の如く、或は、羽ばたいて攫み掛らむずる鷲の如く、或は、行儀よく列んで朋友の如く、或は、相隨つて娣姒の如く、或は、迸散して流落するが如く、或は、顧みて留宿するが如く、或は、相戾つて仇敵の如く、或は、親密にして婚媾の如く、或は儼然として高い冠を戴けるが如く、或は、翻然として舞袖を 飄 すが如く、或は、屹として動かざること戰陣の如く、或は、圍んで獵を催すが如く、或は、靡然として東注し、或は、偃然として北向し、或は、火が盛に燃えて焰を揚ぐるが如く、或は、米を炊いで湯氣の立ち升るが如く、或は、行いて止まらず、或は、遺した儘收められず、或は、斜なれども片よらず、或は、弛めども弦を張り直さず、或は、赤きこと禿頭の如く、或は、燻ぶること粗朶の如く、或は、龜甲が焚けて裂け目の明かなるが如く、或は、卦の分篠せるが如く、或は、前に橫はつて剝の卦の如く、或は、後が切れて姤の卦の如く、それから、延延として、離れては又付き、夬夬として、叛いては又合し、喁喁として、魚が浮草の間から頭をさ

し出したるやうでもあり、落落として、月が列星の間を經て光を發するやうでもあり、閻閻として、牆や垣を立てたやうでもあり、巘巘として、庫や廐をば架け渡したやうでもあり、參參として、劍戟を削つたやうでもあり、煥煥として、玉を銜んで居るやうでもあり、敷敷として、花が蕚を披いたやうでもあり、闇闇として、天井が破れて雨水が流れ込むやうでもあり、悠然として、なだらかに安らかなるもあり、兀兀として、狂うて猘れるもあり、超超として、出でて奔るもあり、蠢蠢として、怠けた樣で、駭いた儘戒めざるもあり、謂はゆる衆皺の堆せるを仔細に看ると、かういふ風であつて、從來、奇を窮めたいと思つて居た念願が、初めて屆いて、ここに、宇宙の絶觀を盡したのである。

ああ大なるかな、この山は、天地の間に立つて、これを經營し、山の組織は、人の血管の脈絡の樣である。その初、何人が此處に此の如き山を開張したか、たとひ、造物主でも、一人では到底出來ず、誰が勉めて此の如きものを御造り成さいといつて勸めたのであらうか。兎にも、角にも、かういふものを造り、朴率ではあるが、しかも其中に自然巧妙な處があるのを見れば、八百萬の神が力を合せ、疲勞を忍んで、熱心に造り上げたものと見える。但し、とても、自分の力だけでは、まだ足らぬので、明かに、斧斤を施し、詛咒を借りたに相違ないと思はれる處もある。神が此山を造つたのは、もとより太古鴻荒の世であつて、その事の詳細は、今日傳はつて居らぬが、その功の絶大なることは、到底酬ゆべきものもない位。かつて、終南山の祠官から聞いたことがあるが、今でも、山神を祀つて、供物は絶えず芬苾の香を發し、神さまが降つて來て、それを享けて嗅ぐといふことで、靈驗のあらたかなるは、言はずもがな。ここに、予は斐然たる此詩を作つたが、何も野心のある譯でもなく、聊か以て神樣が非常に苦心して此山を造つたといふ其骨折に對し、報恩の萬一を賛ける積りでしたのである。

【餘論】　この詩は、百二韻、卽ち一千二十字、その篇幅は、隨分長く、段落を截然とせねば、引締まらぬ處から、第一この點に意を用ひて居る。起首、吾聞京城南より粗敍レ所二經覯一に至る十句は、終南山の大體を敍して總提となし、嘗昇二崇丘一望より海浴褰二鵬噣一に至る十四句は、未だ南山に至らず、長安の郊外なる、ある岡に於て遙に南山を望んだことを敍し、春陽潛二沮洳一より頑刻異二狀候一に至る十八句は、その崇岡に於ける折折の景色を敍し、四季に分つて之を詳說し、西南雄二太白一より仰喜呀不レ仆に至る十八句は、太白山の方から南山に行かうとして失敗し、昆明池を經て引き返したことを敍し、前尋徑二杜墅一より欲レ進不レ可レ又に至る二十二句は、東南杜墅より、畢原を經て、南山に行かうとして失敗したことを敍し、因緣窺二其湫一より、峙質能化貿に至る十二句は、前と同時で、深湫の邊の風光を敍し、前年遭二譴謫一より脫レ險逾レ避レ臭に至る十六句は、陽山遷謫の途中、藍田を通つたが、その時も、亦た山に到り得ざりしことを敍し、昨來逢二淸霽一より蠢蠢駭不レ懋に至る八十句は今回初めて夙願を達し絶頂に登つて羣山を見たことを敍し、或の字が五十一もあり、その下、延延、决决等の句が十四もあり、すべて、山の形容である。その下、大哉立二天地一より惟用贊二報酭一の十四句は、山神の靈驗あることを敍し、

論贊內に收束したのである。乾隆御批にも、略ぼ此意を述べ「入手虛冒開局、晉昇崇邱望以下は、南山の大概を總敍し、春陽の四段は、四時の變態を敍し、太白昆明の兩段は、南山の方隅、連亙の自るところを言ひ、頃刻異狀候以上は、只だ是れ大體の遠望、未だ嘗て身歷せず、太白を瞻、昆明に俯するは、眺望乃ち專注あり、しかも、猶ほ未だ登陟せざるなり。杜墅に徑して、軒昂に上る、志、觀覽を窮む、蹭蹬進まず、わづかに、一たび龍湫を窺うて止む。貶に遭うて藍田より行けば、又艱危を跋涉し、觀覽に心なきなり。層層頓挫、滿を引いて發せず、直に昨來逢㆓清霽㆒に至つて、以下乃ち高きに憑つて、目を縱にし、得るところの景象を擧げ、囊を傾け、篋を倒にして之を出し、或の字を疊用し、北山の詩より化出し、物に比し、象を取り、態を盡し、姸を極め、然る後、大哉の一段を用ひて煞住す、通篇氣脈透遞、筆勢竦附、蹊徑曲折、包孕宏深、その手に非ざれば、亦た以て題に稱ふに足らざるなり」といつて居る。それから、潛溪詩眼に「孫莘老、かつて謂ふ、老杜の北征、退之の南山の詩に勝ると。王介甫以爲へらく、南山は北征に勝ると。終に相服する能はず。時に、山谷尙ほ少し。乃ち曰く、若し工拙を論ずれば、北征、南山に及ばず。若し一代の事を書し、以て國風雅頌と表裏を相爲すは、北征無かるべからず、しかも南山作らずと雖も未だ害あらざるなり、と。二公の論、遂に定まる」とあつて、これは、有名な話であるが、到底支那詩論家の一種の偏見を脫することが出來ぬものである。この論法で行くと、何でも、時事、卽ち重大なる史實に關したものは、必ず無からざるべからざるもので、永久に存在性を持つて居るが、自然現象を寫したものなどは、この社會に密接の關係がないから、有つても、無くても、差支ないといふことになる。かくて、詩は人事を寫したものが必要で、自然を寫したのは不必要だといふのは、つまり、詩その物の社會的效果を重んずる處から出て來るので、ここが卽ち支那流である。今日の見解に據れば、あらゆる藝術は、美を對象とする、詩の對象たる美は、もとより人間と自然とを問はないので、その間に甲乙の別などあらう筈がない。予輩は、支那の詩を讀むときには、支那流の見解に就いて一顧を與へることを辭せぬが、究極は、美學の知識に因つて、絕對的普遍的の批評を下すことの正當なるを忘れてはならぬ。なほ繼いで、この詩に關する評語を擧げると、洪興祖は「この詩は、上林子虛の賦に似たり、才力小なるものは、到るべからざるなり」といひ、顧嗣立は「これ等の長篇、亦た騷賦より化して出づ、然れども、却つて、焦仲卿妻、杜陵北征の諸長篇と同じからざるは、彼は事情を實敍し、これは物狀を虛摹す。公は、畫家の筆を以て、南山の靈異縹緲を寫し得て、光怪陸離、中間に五十一の或の字を連用し、復た十四の疊字を用ひ、正に駿馬の岡を下り、手中に轡を脫するが如し。忽ち大哉立㆓天地㆒の數語を用ひて、收と作す、又析聲忽ち驚き、萬籟皆寂たるが如し」といひ、朱竹垞は「この詩、雕鏤工と雖も、然れども、痕跡あり、且つ排置を費す。北征に比すれば、これを出すこと裕如たり、力量もとより勝る」といひ「賦を以て詩と爲す、鋪張宏麗、然れども、是れ才作」といひ、又或連若㆓相從㆒等を評して「以下、琢句工と

雖も、然れども、甚だ切實ならず、自ら味短きを覺ゆ、且つ翻して更に說き得て太だ板了」といひ、延延等疊字十四の一段を評して「韓公の高才を以てして、此に到つて、亦た出場に乏しく、强ひて馳騁を爲すと雖も、終に才竭くるを見る」といつた。元來、或の字を五十以上も疊用したといふのは、古來例の無いことで、その奇掘に係る處は、賞嘆を値するが、かう分析的に逐條列記を試みた處で、何等の印象をも遺さず、結局は、徒勞に終るを免れず、竹垞の此評は、少しも容赦するところなくして、まことに公平である。全體に於て、この詩は、有韻の記文と稱すべく、韓退之なればこそ、その大筆を行つたので、たとひ、幾多の缺點があるにしても、大膽にして新しい類型を始めたといふ其點に重きを置き、務めて、その美處を見出すやうにするのが必要で、これが卽ち古詩を讀み、且つ古人に對して、敬意を寄する上に於ける唯一の要諦であらうと思はれる。

謝自然詩

謝自然の詩

(一)果州南充縣。(二)寒女(三)謝自然。　果州の南充縣、寒女の謝自然。

(四)童騃無所識。但聞有神僊。　童騃識るところなく、但だ神僊あるを聞く。

輕生學其術。乃在(五)金泉山。　生を輕んじて、其術を學び、乃ち金泉山に在り。

繁華榮慕絕。父母慈愛捐。　繁華、榮慕絕え、父母、慈愛捐つ。

凝心感(六)魑魅。(七)慌惚難具言。　心を凝らして、魑魅を感せしめ、慌惚、具に言ひ難し。

一朝坐空室。雲霧生其間。　一朝、空室に坐し、雲霧、その間に生ず。

如(八)聆(九)笙竽韻。來自冥冥天。　笙竽の韻を聆くが如く、冥冥の天より來る。

白日變幽晦。蕭蕭風景寒。　白日、幽晦に變じ、蕭蕭として風景寒し。

簷楹暫明滅。五色光屬聯。　簷楹、暫らく明滅し、五色光屬聯す。

觀者徒傾駭。(一〇)躑躅詎敢前。　觀る者、徒に傾駭、躑躅して詎ぞ敢て前まむ。

須臾自輕擧。飄若風中煙。　須臾にして自ら輕擧し、飄として風中の煙の若し。

茫茫(一一)八紘大。(一二)影響無由緣。　茫茫として八紘大に、影響、緣るに由なし。

(一三)里胥上其事。郡守驚且歎。　里胥、その事を上り、郡守、驚き且つ歎ず。

驅車領(一四)官吏。(一五)吒俗爭相先。　車を驅つて、官吏を領し、吒俗、爭うて相先んず。

入門無所見。(一六)冠履同(一七)蛻蟬。　門に入つて、見るところなく、冠履、蛻蟬に同じ。

皆云神仙事。灼灼信可傳。　皆云ふ、神仙の事、灼灼として信に傳ふべしと。

余聞古(一八)夏后、象物知神姦。　余聞く、古しへの夏后、物を象つて神姦を知る。

山林民可入、魍魎莫逢旃。　山林、民入るべし、魍魎、旃に逢ふ莫れ。

(一九)逶迤不復振、後世恣欺謾。　逶迤として、復た振はず、後世、欺謾を恣にす。

幽明紛雜亂、人鬼更相殘。　幽明、紛として雜亂、人鬼、更る相殘ふ。

(二〇)秦皇雖篤好、(二一)漢武(二二)洪其源。　秦皇、篤好と雖も、漢武、その源を洪にす。

自從(二三)二王來、此禍竟(二四)連連。　二主より來、この禍、竟に連連。

木石生怪變、狐狸(二五)騁妖患。　木石、怪變を生じ、狐狸、妖患を騁す。

莫能(二六)盡性命、安得更長延。　能く性命を盡すなく、安んぞ更に長延するを得むとする。

人生處萬類、知識最爲賢。　人生、萬類を處す、知識を最も賢と爲す。

奈何不自信、反欲(二七)從物遷。　奈何ぞ、自ら信せずして、反つて物に從つて遷らむと欲す。

往者不可悔、孤魂抱深冤。　往者悔ゆべからず、孤魂、深冤を抱く。

來者猶可誡、余言豈空文。　來者、猶は誡むべし、余の言、豈に空文ならむや。

人生有常理、男女各有(二八)倫。　人生常理あり、男女各倫あり。

寒衣及饑食、在紡績耕耘。　寒衣と饑食と、紡績耕耘に在り。

下以保子孫、上以奉君親。　下は以て子孫を保ち、上は以て君親を奉ず。

苟異於此道、皆爲棄其身。　苟くも、此道に異ならば、皆、その身を棄つと爲す。

噫乎彼寒女、永託(二九)異物羣。　噫乎、かの寒女、永く異物の羣に託す。

感傷遂成詩、味者宜(三〇)書紳。　感傷、遂に詩を成す、味者は、宜しく紳に書すべし。

【字解】【一】果州南充縣　後の四川省順慶府の屬縣。【二】寒女　貧女に同じ。【三】謝自然　太平廣記に據ると、李康謝眞の類といふ。【四】童騃　騃は痴愚、知識も何もないといふ意。【五】金泉山　順慶府城の西に在る。【六】感魑魅　目に見えぬ妖魔怪物なも感動せしめる。【七】恍惚　不可思議の事。【八】聆　聞く。【九】笙竽　ともに樂器の名。【一〇】躑躅　楚辭王逸の九思に「待天明兮立躑躅」といひ、鮑照の行路難に「呑聲躑躅不敢言」とあつて、躑躅すること。【一一】八紘　淮南子に「九州の外に八殥あり、八殥の外に八紘あり」といひ、又列子に「八紘九野の水」とあつて、その註に「八極なり」とある。卽ち世界といふこと。【一二】影響　痕跡といふことで、今日普通に云ふのとは、稍や意義が違ふ。【一三】里胥　村長。【一四】領官吏　下役の者を召し連れる。【一五】甿俗　百姓ども。【一六】冠履　冠と履。【一七】蛻蟬　楚辭に「濟江海兮蟬蛻」とあり、夏侯孝若の東方朔畫像贊に「蟬蛻龍變、棄俗登仙」とあつて、蟬のぬけ殼。【一八】古夏后　卽ち大禹、左傳宣公三年に「王孫滿曰く、むかし、夏の方に德あるや、鼎に鑄つて物に象り、民をして神姦を知らしむ、故に民川澤山林に入るも、魑魅魍魎、能く之に逢ふなし」とある。【一九】逶迤　移り變る貌。【二〇】秦皇　秦の始皇。【二一】漢武　漢の武帝、ともに神仙を好みしこと、史記殊に封禪書に見ゆ。【二二】洪其源　その源頭を開いて流を大きくする。【二三】二王　卽ち秦皇・漢武。【二四】連連　莊子に「又奚ぞ連連として膠漆纆索の如き」とある、引き續いて絕えざる

こと。【三五】詩妖患　妖魔の患を恣にする。【三六】盡性命　管康の養生論に「導養理を得、以て性命を盡す」とある。【三七】從物遷　書經の畢命に「惟れ民の生厚けれども、物に因つて遷るあり」とある。【三八】有倫　倫は倫常。【三九】異物羣　怪物の羣。【四〇】書紳　紳は大帶、論語に見えた字面、忘れぬ爲に、帶に書きつけて、常に之を見て居る。

【題義】蔣之翹の註には「貞元十年十一月十二日、果州の謝仙女、白晝に輕擧す、時に郡守李堅、以聞す。詔を賜うて褒諭するあり、謂ふ、所部の中、靈仙表異、元風益す振ひ、至道彌よ彰はる、と。その詔、尙ほ石刻の在るあり」とある。顧嗣立の補註には、集仙錄を引いて、その文は聊か詳しい。曰く、謝自然は、果州南充縣に居る。年十四、道を修して食はず、室を金泉山に築く。貞元十年十一月二十一日、辰時、白日天に升る。士女數千人、咸な共に瞻仰す。須臾にして、五色の雲、一川に遮亙し、天樂異香、散漫たり。刺史李堅、表して聞するや、詔して之を褒美す」とある。それから、韓愈が此詩を作りし本志に就いて、蔣之翹は「公、釋老を排し、異端を斥く、故に、詩、取らざるところあり、これ卓然正大の見、近世詞家の及ぶべきところに非ざるなり」といひ、顧嗣立は「この篇、全く議論を以て詩を作る、詞嚴にして義正しく、目を明かにし膽を張る、原道・佛骨表の亞なり」とある。謝自然の升天したことは、當時著名の事實であつたが、韓退之は、儒教一點張りで、佛教も、道教も、生來蟲が好かぬといふので、ひたすら、排擊を事としたことは、例の原道一篇を見ても分かるので、全く韓愈は唐代に於ける儒教の維持者であつて、宋代理學の先驅を爲して居る。韓愈の考でいふと、道教を奉じた少女が、白日に升天したなどといふのは、無知蒙昧の愚民の申す話で、決して、左樣な事の有り得べきことでない。それだのに、郡守が特に上表し、天子が詔を賜ふといふのは、奇怪至極の事だといふので、この詩を作つて、その妄を辯じたので、さればこそ、佛骨表の亞とさへ云はれて居るのである。

【詩意】處は蜀で、果州の南充縣といふ地に謝自然と名づくる一個の貧女があつた。まだ子供で、一向知識も何もないが、道教を聞き嚙ぢつて、世に神仙と稱する有り難いものがあるといふことを承はつて居た。仍つて、人竝の物をも食はず、おのが生を輕んじて、神仙の術を學び、はては、金泉山に分け入つて、そこで、行ひ澄まして居た。かくて、世の中の榮華富貴などの念慮を絕ち、父母の慈愛をも棄てて仕舞ひ、やがて、心を凝らした一念は、魑魅をも感動せしめ、その神變不思議な事は、とても、眞面目では詳しく話しも出來ない位であつた。ある日、空堂に坐して居ると、雲霧が忽然として其間に生じ、冥冥たる天上よりは、物とはなしに、笙竽の微妙なる音樂が聞こえるやうであつて、その中に、一天俄に掻き曇り、白日光を失うて、幽晦に變ずると同時に、蕭蕭として、風景凄まじくなり、一團の黑雲が落ちて來たものと見え、軒端が暫く明滅して居たが、忽ちにして、五色の光が相連つて、燦然爛然と輝き渡つた故に、觀る者は、大に驚いたが、何分恐ろしいので、踟躕して敢て進ます、室中に入つて眞相を見極めることも出來なかつた。しばらくすると、雲霧の中より、謝自然の姿が歷

歴と顯はれて、輕く空中に舞ひ上つて、遂に升天したが、その有樣は、飄然として、風中の煙の如くであつた。すでに升天した後は、廣大なる世界に於ても、その痕跡を認めぬやうに成つて仕舞ひ、これは洵に不思議な事であるといふので、庄屋から其事を郡守へ申し出ると、郡守は、一たびは其事の奇なるに驚き、一たびは道敎の有り難いことを感嘆し、兎に角、檢分しやうといふので、役人どもを召し具し、車を馳せて出かけると、百姓どもは、爭つて、先に立つて往つた。さて其門に這入ると、何も見えず、平生著けて居た冠だの履だのが、恰も蟬の脫殼の如く殘つて居ただけであつた。これは、てつきり、尸解して仙人となつたに相違ない、神仙の事は、末世の今日と雖も、灼灼として傳ふべく、それにつけても、道敎といふものは、まことに結構なものであるといふことに成つて、一同、愈よ信仰を深くした。但し、予の聞くところに據れば、古しへの夏后、卽ち大禹は、洪水を治めて天下を統一した時、第一に鼎を鑄り、ありとあらゆる樣樣の神姦の物を集め、その形を象り、鼎の表面に鑄り出して民に知らしめた。そこで、人民が山林に行くにしても、容易に魍魎を辨別し、これを避けて逢はぬやうにし、安心して這入ることが出來た。但し、近頃になると、それ等の事は、復た振はぬやうになり、後世では、唯だ人を欺きだますことを恣にし、幽明兩界の區別がなくなつて、紛然雜亂し、人鬼互に相殘害するやうに成つた。すると、謝自然が白日上天したといふのも、實は魑魅魍魎に騙されて、幽冥界に連れて行かれたのであらう。抑も、道敎は、秦の始皇が元祖で、神仙の道を非常に好み、そして、漢の武帝になると、その源を廣げて、一層流を大きくして仕舞ひ、人鬼互に殘害するといふ禍も、秦皇漢武以來、漣漣として絕えない次第である。はては、木石までも、怪變を生じ、狐狸が人に憑いて妖魔の患を逞うするやうになり、おまけに、道敎を信ずる手合は、おのが天禀を全うすることを爲さず、徒に長生不死を求めて居るが、そんなことでは、どうして性命を長く延ばすことが出來やうか。元來、人は萬物の靈であつて、萬類の間に處して行くに就いては、知識が第一である。然るに、折角天から禀けた己が知識を自ら信せず、却つて、異物に從つて、其生を遷さうといふのは、何といふ馬鹿げた事ぞ。しかし、既往の事は、後悔しても仕方がない、謝自然とても、魑魅魍魎に引込まれて仕舞つたので、定めて、その孤魂は、深寃を抱いて苦んで居るであらう。かくて、將來は、相誡めて、道敎に沈溺せぬやうにして欲しいので、わが此言は、決して、空文ではない。人生には常理があるし、男女の間には倫常がある。そして、寒くして後に衣、飢ゑて後に食ひ、この二つを全うする爲に、紡績を爲し、耕耘を爲し、下は以て子孫を保ち、上は以て君親に奉ずるので、これが卽ち儒家の道、この以外に、敎義など有らう筈はない。苟くも、斯道に異ならば、天より禀けた知識を有するに拘らず、その身を棄てて異物に從つたものである。ああ、謝自然といふ彼の貧女は、氣の毒にも、永く異物の羣に託して、再び本に反へることが出來ぬので、世俗に對しては、まことに好い誡である。そこで、予は、感傷して、此詩を作つたので、理に昧きものは、宜しく之を

紳に書し、日に三復して、邪教の爲に惑はされぬやうにするが善い。

【餘論】起首、果州南充縣より灼灼信可レ傳に至る三十二句は、謝自然の事實を敍し、余聞古夏后より結尾、味者宜レ書レ紳に至る三十六句は、その批判であつて、道教を厩撃し、儒教を振興せむが爲めにしたので、人生有二常理一の八句は、かの原道に於て「夫れ謂はゆる先王の敎とは何ぞや。博愛、これを仁といふ。行うて之に宜しき、これを義といふ。是に由つて焉に之く、これを道といふ。己に足つて外に待つなき、これを德といふ。その文は詩書易春秋、その法は禮樂刑政、その民は士農工商、その位は君臣・父子・師友・賓主・夫婦、その服は麻絲、その居は宮室、その室は粟米・蔬果・魚肉。その道たる、明かにし易く、その敎たる、行ひ易きなり。これが故に、之を以て己を爲むれば順にして祥、これを以て人を爲むれば愛にして公、これを以て心を爲むれば和にして平、これを以て天下國家を爲むれば、處るところとして當らざるはなし。これが故に、生きては其情を得、死しては其常を盡し、郊にしては天神假り、廟にしては人鬼饗く」といふのと略ぼ同義、唯だ詳略の別があるのみで、取りも直さず、この篇の精髓である。李光地は、この篇を評して「世、もとより自ら仙道あり、韓子より之を言へば、皆鬼魅の爲すところなり。信か。曰く、その鬼魅に入るもの多し、故に首に凝レ心感二魑魅一といひ、後に木石生二怪變一、狐狸騁二妖患一といひ、而して、中ごろ、その昇擧の候を敍し、風寒幽晦、休徵に非ざることを知るべし。然れども、韓子の本意、是れ仙道と雖も、猶は鬼道のごときなり。故に曰く、莫三能盡二性命一、安得二更長延一といひ、その夢を記するに云ふ、安能從レ汝巢二神山一と、すなはち、直に世に仙道なしといふ、但だ窟宅巖崖、かの異物を竄するのみ」といひ、乾隆御批には「前敍後斷、排斥して餘力を遺さず、人、その白日飛昇を詫るも、吾、ひとり孤魂冤痛と爲す。世を警むる、至つて深切なり。凝レ心感二魑魅一の一語、半部の楞嚴を包括す」とある。それから、朱竹垞は「率爾漫寫、作手を見ず」といつたが、これは、稍や苛酷であつて、これに比すると、何義門の評は、尤も精該を極めて居る。はじめに「阮公の詠懷に云ふ、

王子十五年。游衍伊洛濱。朱顏茂二春華一。辨慧懷二清眞一。焉見二浮邱公一。擧レ手謝二時人一。輕蕩易二恍惚一。飄颻棄二其身一。飛飛鳴且翔。揮レ翼且酸辛。

退之の此篇、蓋し之より出づ」といひ、次に「唐書藝文志、李堅東極眞人傳一卷、註、果州謝自然」といひ、次に安溪先生云ふといつて、前に掲げた李光地の言を引いてある。

秋懷詩　十一首

秋懷詩　十一首

窻前兩好樹。衆葉光(一)薿薿。

窻前の兩好樹、衆葉光つて薿薿たり。

秋風一披(二)拂。策(三)策鳴不レ已。

秋風一たび披拂すれば、策策として鳴つて已まず。

微燈照空牀。夜半偏入耳。　微燈、空牀を照らし、夜半、偏に耳に入る。
愁憂無端來。感歎成坐起。　愁憂、無端來り、感歎して、坐起を成す。
天明視顏色。與故不相似。　天明、顏色を視れば、故と相似ず。
羲和驅日月。疾急不可恃。　羲和、日月を驅り、疾急にして、恃むべからず。
浮世雖多塗。趨死惟一軌。　浮生、多塗と雖も、死に趨るは惟だ一軌。
胡爲浪自苦。得酒且歡喜。　胡爲れぞ、浪りに自ら苦むや、酒を得て且つ歡喜せよ。

【字解】【二】颯颯　詩經に秦稷颯颯とあつて、光澤ある貌。【三】披拂　ふるひ拂ふ。【三】策策　ざわざわと音する。【四】與故　故は前日。【五】羲和　廣雅に「羲和は日御なり」とある。堯の時、羲氏をして日を、和氏をして月を觀測せしめたが、後には轉じて、羲和は日を御すといふ樣になつて來た。【六】多塗　分れ路が多い。【七】一軌　一つの車跡、一すぢ道。

【題義】秋懷は、字の通り、秋の思。この詩は、韓愈が元和六年に、河南より上京して、尙書職方員外郞となつて、大分立身をしかけたが、その翌七年二月、國に當れる者の忌諱に觸れて、再び國子博士に移されたことがあつて、その年の秋に作り、その明年、又進學解を作つた。韓愈の心中では、今の世に處するには、時の風尙に從ふのと、おのが操守を持續して行くのと、この二つより外に道はないが、前者は榮達を期すべきも、後者は沈淪を免れない。この二つの念が胸中に戰つた揚句に、矢張、後者の通りにしやうと決心したので、題は秋懷といつても、實は自己の人生觀を反覆詳述したものである。無論、十一首は連屬して居て、實は一首と看做すべく、そして、落葉が主になつて居て、第一首に之を出し、爾後數ば見えて居る。それは、折角、自分が用ひられかかつたのに、又もや卑職に貶されたのは、つまり木の葉の振ひ落されたやうなもので、これが感慨の由つて起るところであるからである。

【詩意】書齋の窓の前に、二本の見事な木があつて、夏の盛りには、多くの葉が一しほ茂つて、艷やかに見えて居たが、秋風一たび至つて、これを吹き拂ふと、その葉は、ざわざわと鳴つて已まず、やがて、ばらばらと軒端に落ちて來る。おのれは、微けき燈火を掲げて、空牀の間につくねんと坐して居たが、夜半になると、その策策の響が、益す甚しくなつて、頻りに耳に入つた。かくて、愁憂胸を衝いて生じ、おもはず、牀より起つて、感慨に堪へられなかつた。やがて、夜が明けて、例の窓前の樹を見ると、一夜の中に顏色が變つて、すべて前日と似ず、全く憐れな姿になつて仕舞つた。羲和は、絕えず太陽を驅つて居るから、節物の移るは、驚くべき程迅速で、少しも恃みにならぬことは、この兩好樹を見ても分かる。この浮世は、老幼男女、その志すところに從つて、各〻その道を異にして居るが、唯だ知らず識らずの間に死に向つて進んで行く其軌道のみは、誰でも同じである。されば、喜ぶも、憂ふるも、結局は同一の處に歸著するので、矢鱈に自ら苦んだ處で、仕方がないから、

酒を得て、しばらく歡喜し、つまり眼前の快樂を求めるより外に仕方がない。

【餘論】朱竹垞は「起四語常意、却つて寫し得て流快」といひ、何義門は「妙は秋聲耳に入るより寫し得て、驚心動魄、然る後、顏色の凋弊を轉出して來る。若し光霽蘢の下に於て、徑に凋瘁に接すれば、便ち蠟を嚼まむ」といつた。それから、浮生雖多塗、趨死惟一軌といふのは、沈痛の極、しかも、閱世の中より得來りたるもので、流石に韓愈の手筆たるに負かぬものである。

白露下百草。(一)蕭蘭共(二)雕悴。　白露、百草に下り、蕭蘭、共に雕悴す。

青青(三)四牆下。已復生滿地。　青青たり四牆の下、すでに復た生じて地に滿つ。

(四)寒蟬暫寂寞。(五)蟋蟀鳴自恣。　寒蟬暫く寂寞、蟋蟀鳴いて自ら恣にす。

(六)運行無窮期。(七)稟受氣苦異。　運行、窮まる期なく、稟受、氣苦だ異なり。

適時各得所。松柏不必貴。　時に適うて各所を得たり。松柏必ずしも貴からず。

【字解】【一】蕭蘭　二草の名、蕭は蓬の類。【二】雕悴　雕は凋に同じ、荀子に勞苦彫悴とある。【三】四牆　四方の牆。【四】寒蟬　日ぐらし。【五】蟋蟀　きりぎりす。【六】運行　日月の運轉。【七】稟受　天から受ける。

【詩意】白露が百草の上に降れば、蓬の如き詰まらぬものも、蘭の如き貴きものも、同時に凋悴して枯れて仕舞ふ。しかし來年の春になると、四面の籬の下に、青青として萌え出で、蓬も、蘭も、再び茂つて地面に一ぱいに成る。又夏の中に喧しく鳴いた日ぐらしも、秋になると、その聲を收めて、暫く寂寞となり、そして、きりぎりすが、時を得顏にすだいて居る。天上の日月は、運行して窮まり止むことなく、萬物は、天から氣を稟けるが、その稟け工合の異なるに因つて、各消長を爲すのである。されば、その時にさへ合へば、所を得て榮えるので、松柏の四時に綠なるも、矢張、氣の稟け方が自然さう成つて居るので、格別、貴い譯ではない。

【餘論】この詩は、前首の浮世雖多塗を受けて來たので、その歸著するところは、全然相同じく、すべての物は、氣の稟け方次第で、蕭蘭の秋に凋むも、松柏の四時綠なるも、何等の差違は無いといふので、つまり、人間の差別観を全然抹殺した哲理的見解を逗露したのである。劉辰翁は、これを評して「怨甚し」といひ、何義門は「翻案感慨」といつた。

彼時何卒卒。我志何(一)曼曼。　彼の時、何ぞ卒卒たる、我が志、何ぞ曼曼たる。

(二)犀首空好飲。(三)廉頗尚能飯。　犀首は空しく飲を好み、廉頗は尚ほ能く飯す。

學堂日無事。驅馬適所願。　學堂、日に事なし、馬を驅つて、願ふところに適かむ。

茫茫出門路。欲去聊自勸。
歸還閲書史。文字浩(五)千萬。
陳(六)跡竟誰尋。賤嗜(七)非貴獻。
丈夫意有在。女子乃多怨。

茫茫たり門を出づるの路、去らむと欲して聊か自ら勸む。
歸還して書史を閲すれば、文字浩として千萬。
陳跡、竟に誰か尋ねむ、賤嗜は貴獻に非ず。
丈夫意ある有り、女子は乃ち怨多し。

【字解】【一】卒卒　漢書の司馬相如傳に「卒卒として須臾の間なし」とあり、その註に「卒卒は促遽の意なり」とある。【二】曼曼　漫漫に同じ、廣大なること。【三】犀首　史記に「犀首は魏人なり、名は衍、姓は公孫氏」とあり、その註に「司馬彪曰く、犀首は魏の官名」とあり、又史記の上文の續きに「楚、陳軫をして秦に使せしむ、梁を過ぎて、犀首を見て曰く、公、何ぞ飲を好むや。曰く、無事なればなり」とある。【四】廉頗　史記に「廉頗は趙の將たり。讒を以て魏に走る。その後、趙王、使者をして、頗、尙ほ用ふべきや否やを視せしむ。頗、これが爲に、一飯に斗米肉十斤、甲を被り、馬に上り、以て用ふべきを示す。使者還り報じて曰く、廉將軍、老いたりと雖も、尙ほ善く飯す」とある。【五】浩千萬　浩は廣い貌、千萬は其數の多きをいふ。【六】陳跡　古くなつた遺跡、莊子に「六經は先王の陳跡」とある。【七】賤嗜非貴獻　蔣之翹の解に「日の暄を負うて君に獻ぜむと欲し、芹の美を食うて進御せむと欲す、貴賤もとより差あり、詩意、大抵以爲へらく、その嗜むところ、時と偶せざるなり」とある。

【詩意】天地の氣を禀けたものは、各その適するところを得れば、同じであるといふものの、かの時てふものは、過ぎ去ること極めて早く、まことに卒卒たるものである。そして、おのが信ずる道を行はうといふ我が志は、なかなか遠大であつて、まことに曼曼たるものである。卒卒の中に曼曼を以て居り、つまり、時は急いで過ぎ去るのに、志は遠大であるから、何時になつたら、自分の思ひ通りにならうか、まことに覺束ないことである。そこで、眼前の快樂を求めるより外に仕方がない。むかし、犀首は、唯だ酒ばかり飲んで居て、退屈で仕方がないからだ、何も、爲すべき事があるのに、それを止めて飲んで居る譯ではないといつた。それから、廉頗は、年が寄つても、一飯に斗米肉十斤を平らげたといふ位。さきに、自分は一寸立身しかけたが、又ぞろ元の國子博士となつて、學校では、日日格別の仕事もないから、矢張、犀首の眞似をして、詮方なく酒を飲み、その上、廉頗の如く、老健なることを、せめてもの取り得として、喜ぶ外はない。そして、時には、馬を驅つて、宰相の家などに至り、懇に賴み込んで、自分の願ふところに協ふやうにして貰はうと思はぬでもない。しかし、門を出ると、路は茫茫として、いづれとも分らぬ樣で、一たび、宰相の家に往かうとしたが、聊か又躊躇して、何事も宿命であるから、無暗に賴み廻るのは宜しくないと思ひ返し、そこで、家に還つて、書史を讀み出したが、元來、書物といふものは、浩浩として、文字の數測られず、とても、之を讀み盡すことは出來ない。まことに便りないことであるが、前人の陳跡たる書物を研究することは、今の世で、誰が遣らうぞ、唯だ、自分は、性情の嗜むところであるから、その勞を厭はずして、讀書に耽つて居るので、元來、賤者である自分の嗜好を絕對的の者として、貴人に進獻することなどは爲ない。自分が前人の陳跡たる書史を研究せむとするのは、大丈夫の確乎たる意志に本づいたので、かの婦女輩が、少し思ふやうに成らぬといつて、他を怨むといふ樣な眞似は、斷じて爲たくはない。

【餘論】讀書三昧、以て自己の天職となすのは、もと嗜好より出でたので、決して人の爲にするのではない。されば、仕官の方に遑ざかつた處で、決して悔ゆるにも及ばないといふのが、この首の餘意であつて、即ち進學解と互に表裏を爲して居るのである。朱竹垞が「十一詩の大指、通じて讀書に在り」といひ、何義門が「志士秋を悲む、思女春を傷むに同じからず、我は特に時失ひ易くして、志行ひ難きを以てするのみ、豈に老を歎せむや」といつたのは、流石に神解を推すべきものである。

秋氣日惻惻(一)。秋空日凌凌(二)。　秋氣日に惻惻たり、秋空日に凌凌たり。
上無枝上蜩(三)。下無盤中蠅。　上には枝上の蜩なく、下には盤中の蠅なし。
豈不感時節。耳目去所憎。　豈に時節に感ぜざらむや、耳目、憎むところを去る。
清曉卷書坐。南山見高稜(四)。　清曉、書を卷いて坐すれば、南山、高稜を見はす。
其下澄湫(五)水。有蛟寒可罾(六)。　その下、湫水澄み、蛟あり、寒くして罾すべし。
惜哉不得往。豈謂吾無能。　惜いかな、往くを得ず、豈に吾を能なしと謂はむや。

【字解】(一)惻惻　いたましげな貌。(二)凌凌　晴れて澄み切つて居る。(三)蜩　詩疏に五月鳴蜩とあつて、大蟬をいふ。(四)高稜　高い處の稜角。(五)湫水　湫は深き沼。(六)可罾　網で捕獲する。

【詩意】秋は愈よ深くなつて、ひいやりとせる其氣は、惻惻として人を傷ましむべく、空は綺麗に澄み切つて、寒さが次第に加はる處から、今まで木の枝の上に喧しく鳴いて居た蟬も、最早居なくなり、食事の時、皿などに羣つて居た蠅も既に無くなつて仕舞つた。節物の推移、かくの如く、ここに感慨を起さぬ譯には行かぬが、今まで、聞いて八釜しく、見てうるさかつた蟬や蠅が跡を絶つたのは、流石に心持が善い。そこで、秋の清曉に當つて、讀書すでに畢りし後、書を卷いて外の景色を眺めると、終南の山は、高く聳えて、その稜角が、くつきりと見える。その南山の下には、靈湫があつて、秋の水が澄んで居るから、その中に棲んで居る蛟龍などでも、網を投げ下せば、容易に捕へることが出來るに相違ない。しかし、何分暇がなくて行くことが出來ぬが、もし行けば、きつと捕へて見せるので、決して我が無能といふ譯ではない。

【餘論】前には、秋風はじめ至つて、落葉したことを云つたが、ここでは、秋が次第に深くなつて來たといふ處から筆を起した。そして、この詩には諷意があるといふのが通說である。前に元和聖德詩の下に述べた通り、その初、憲宗は、中興の英主を以て囑望せられ、君側の小人が次第に退けられたので、枝上の蜩、盤中の蠅は、即ち此等の小人に比し、その小人が居なくなつたのは、まことに嬉しいといふ意である。それから、蛟は吳元濟などの事をいつたので、今の時、兵を進めて征伐したならば、造作なく之を平げることが出來るといふので、當時の賢相たる裴度が先づ上書し、韓愈も同じ意見で

あつたから、續いて上言した處が、それが他の宰相の忌諱に觸れて、二人とも、一時は失脚したので、自分が此の如くなつたのは、時が然らしめた、決して、無能の爲めではないといふ意である。蔣之翹は「この詩、亦た爾爾、昔人これを評するものあり、云ふ、十九首と上下すべくして、氣復た之に過ぎたりと。吾が解せざるところ。唐汝詢曰く、これ謂へらく、憲宗の世、朝政漸く肅、宜しく不廷を討すべく、しかも、己れ權なし、故に是嘆ありと。然れども、自ら任ずる、亦た淺からず」といひ、略ぼ肯綮に中つて居る。乾隆御批には「用意、同谷六歌と同じ」とある。これは、杜甫の集に乾元中寓二居同谷縣一作二歌七首一とある中の第六首を指したので、その全首は、

南有レ龍兮在二山湫一。古木巃嵸枝相樛。木葉黃落龍正蟄。蝮蛇東來水上游。我行怪レ此安敢出。拔レ劍欲レ斬且復休。嗚呼六歌兮歌思遲。溪壑爲レ我廻二春流一。

といひ、神龍蟄伏、蝮蛇肆行、明かに是れ陽微にして陰勝つの象、劍を拔いて且つ休するは、これを誅せむとして誅するに勝へずといふ意、韓愈の此詩は、これと同一の用意を以て出來たといふのである。次に何義門は「悲秋の意より又一層と翻出す」といつて居る。

離離掛二(一)空悲一。戚戚抱二(二)虛警一。 離離として空悲を掛け、戚戚として虛警を抱く。

(三)露泫秋樹高。蟲弔寒夜永。 露、泫して秋樹高く、蟲、弔うて寒夜永し。

(四)斂退就二(五)新懦一。(六)趨營悼二(七)前猛一。 斂退、新懦に就き、趨營、前猛を悼む。

歸レ愚識二夷塗一。汲レ古得二(八)修綆一。 愚に歸つて夷塗を識り、古を汲んで修綆を得たり。

名浮猶有レ恥。味薄眞自幸。 名、浮にして猶ほ恥づるあり。味、薄くして眞に自ら幸とす。

庶幾遺二(九)悔尤一。卽此是(一〇)幽屛。 庶幾はくは、悔尤を遺れて、卽ち此に是れ幽屛せむことを。

【字解】【一】空悲 效果なき悲痛。【二】虛警 陸機の歎逝賦に節循虛而警立とあるのに本づいたといふが、それは字面だけのことで、虛しく自ら警めるといふこと。【三】露泫 謝靈運は花上露猶泫といひ、謝惠連は泫泫露盈レ條といひ、王僧逹は秋還露泫レ柯といひ、隨分用例もあるが、その本は、禮記の檀弓に「孔子、泫然として涕を流す」とあるので、泫は滴瀝の貌、それから轉じて、ぬれるといふこと。【四】斂退 身を斂めて退く。【五】新懦 新に懦弱なる思を生ずる。【六】趨營 奔走する。【七】前猛 從前激烈なりしこと。【八】修綆 長い井戸綱。左傳に「綆缶を具ふ」とあつて、その註に「汲索なり」とあり、荀子に「短綆は、以て深井の泉を汲むべからず」とある。【九】悔尤 後悔して咎める。【一〇】幽屛 幽處に屛居する、張衡の賦に雍抑幽屛とある。

【詩意】朝廷を肅淸し、藩鎭を討平しやうといふのが自己の理想であつて、今しも、其時であると思ふが、實際行はれぬ。されば、離離として、役にも立たぬ悲の念を掛け、又戚戚として、虛しく自ら警め惕れて居る。秋宵の景色如何とならば、木木は高く聳えて、その上に露が淚を流したやうに濕ひ、蟲は長き夜もすがら、悲しい聲を揚げて、われを弔ふが如くである。成る程、今まで、自分は出鋨張り過ぎたから、これからは萬事扣へ目にしやうといふ考も起つて、その爲に、新に懦弱な思を生じて、

はじめて書史に親み、世の中に奔走して、名利を求めやうとすることが、從前あまり激烈なりし爲めに、世人から斥けられたといふことも分かつた。かくて、本來の愚に歸つて見ると、初めて世の中にも平坦な路があるといふことが分かり、世人と競爭せず、自分は、獨り聖經賢傳を研究してさへ居れば、それで善いので、水を汲むには、長い井戸綱を用ふると同じく、古しへを汲むにも、それ相應の方法がある。世に名利を求めるといふが、それは、到底、實なき浮名に過ぎざれば、本當の學者の恥づるところであつて、淡泊無味、面白くもをかしくもない刻下の境涯が、取りも直さず、身を全うする所以であつて、自ら幸とすべきものである。つまりは、後悔の無いやうにし、永く世に遠ざかつて、幽處に屛居して仕舞はうと思ふ。

【餘論】葛立方は「これは陶潛歸去來辭、今は是にして昔は非なるを覺ゆるの意、悟るところあるに似たるなり」といひ、乾隆御批には「この首、特に見道の言多し」といひ、朱竹垞は「かくの如きの琢句、これ謝を學ぶ、然れども、意は却つて謝に比して精深」といひ、何義門は「悼前猛」は、蛟龍を攪するに應じ、就新儒」は、仍つて史書を閱するに歸す」といつた。

今晨不成起。端坐盡(一)日景。　今晨起つことを成さず、端坐して、日景を盡す。

蟲鳴室幽幽。月吐窻冏(二)冏。　蟲は鳴いて室幽幽たり、月は吐いて牕冏冏たり。

喪(三)懷若迷(四)方。浮(五)念劇含(六)梗。　喪懷、方に迷ふが若く、浮念、梗を含むよりも劇し。

塵埃慵伺(七)候。文字浪馳騁。　塵埃、伺候に慵く、文字、浪りに馳騁。

尙須勉其(八)頑。王事有朝(九)請。　尙は須らく其頑を勉むべし、王事、朝請あり。

【字解】【一】盡日景　景は古しへの影の字、日の影のある間。【二】冏冏　かがやく貌、江淹の詩に冏冏秋月明とある。【三】喪懷　兀然自失する。【四】迷方　方角に迷ふ、列子に「秦人逢氏の子、迷罔の疾あり、天地四方寒暑、倒錯せざるものなし」とある。【五】浮念　浮生の念、尋常の念、ありふれた人生觀。【六】含梗　梗は塞ぐ、障礙物を含む、即ち妨害になる。【七】伺候　權門に出入して御機嫌を伺ふ。【八】其頑　頑然移すべからざる自己の主義。【九】朝請　天子に參朝する、出仕。漢書に「吳王濞、人をして秋請を爲さしむ」とあつて、その註に「律、春には朝といひ、秋には請といふ」とある。

【詩意】今朝は、おのが部屋から起つて行きもせず、端坐した儘、日影の見えなくなる時分に及び、うとうとと暮らして仕舞つた。やがて、夜になると、蟲の聲がして、室中は極めて靜であるし、月は吐き出されて、窓の間が明るく見える。一日考へ通した揚句には、茫然自失、前後も分からぬやうになり、浮生の一念は、世の中に立つに際して、兎角、妨害になるものである。風塵中に奔走して、權門貴戚の方方へ御機嫌伺ひに罷り出るのは、もとより自分の好まぬ處で、唯だ文字を以て、おのが胸中の思を發揮し、縱橫に馳騁するのが、本來の願望である。しかし、生活の方法は、見非とも講せねばならぬから、頑然として移すべからざる自己の主義をも、勉めて曲げて、毎日出勤することだけは、

怠らぬ樣にする覺悟である。

【餘論】この詩は、刻下の境涯を敍し、衣食の爲めに仕ふるの止むを得ざることに及んだのである。

秋夜不可晨。秋日苦易暗。(一)　秋夜、晨なるべからず。秋日、苦だ暗くなり易し。

我無汲汲志。(二)何以有此憾。　我に汲汲の志なくむば、何を以て此憾あらむや。

寒雞空在棲。(三)缺月煩屢瞰。(四)　寒雞、空しく棲に在り、缺月、屢ば瞰ることを煩はす。

有琴具徽絃。(五)再鼓聽愈淡。　琴あり、徽絃を具ふ、再び鼓して、聽けば愈よ淡し。

古聲久埋滅。無由見眞濫。(六)　古聲久しく埋滅、眞濫を見るに由なし。

低心逐時趨。(七)苦勉祇能暫。(八)　心を低くして、時を逐うて趨る、苦に勉むれども、祇だ能く暫のみ。

有如乘風船。一縱不可纜。(九)　風に乘ずる船、一たび縱つて纜すべからざるが如きあり。

不如覩文字。(一〇)丹鉛事點勘。(一一)　如かず、文字を覩て、丹鉛、點勘を事とせむには。

豈必求贏餘。(一二)所要石與甔。(一三)　豈に必ずしも贏餘を求めむや、要するところは、石と甔とのみ。

【字解】【一】易暗　日が暮れ易い。【二】汲汲志　その汲汲は、名利を求むる爲めの意味ではなく、おのが志を行ふに就いて言ふので、陶淵明の詩に汲汲魯中叟、彌縫使其淳」といふ、その汲汲と同じである。【三】在棲　棲は塒、鳥小屋。【四】屢瞰　月の方から屢ば此方を眺め下す。瞰は上から下を見るといふ字で、月にしなければ意義を爲さぬ。【五】徽絃　徽は琴柱。【六】眞濫　禮記に「古樂は和正以て廣し、新樂は姦聲以て濫」とある。【七】低心　志を任げる。【八】苦勉　如何に勉強するも。【九】不可纜　とも綱をつけて繋ぎ留める。【一〇】覩　伺ふといふのが本義で、ここでは見るに同じ。【一一】丹鉛事點勘　丹鉛は朱、點勘は圈點を施したり、文字を校正したりする。任彥昇の范始興碑表に「人ごとに油素を蓄へ、家ごとに鉛筆を懷く」とあつて、その註に、「鉛は紛筆なり」とある。又王充の論衡に「揚雄、異國の殊語を采集し、常に三寸の弱翰を把つて、油素四尺を齎し、以て其異語を問ひ、鉛を以て之を槧に摘す」とある。【一二】贏餘　殘剩。【一三】石與甔　漢書の蒯通傳に「儋石の祿を守る」とあつて、その註に「應劭曰く、齊人、小甖を名づけて儋となし、三斛を受く。晉灼曰く、石は斗石なり」とあり、又揚雄傳に「家に儋石の儲なし」とある。儋甔通用。少しばかりの祿米。

【詩意】秋の夜は、長くして、なかなか明けないが、それと反對に、秋の日は長くて、まことに暮れ易い。勿論、明るい中に十分仕事を爲やうといふ了見がなければ、日が暮れ易いからといつて何の憾もないが、自分は一心に書史を研究して居るから、日の短いのが殘念で堪まらない。夕日影、淋しき時分には、寒雞が塒に歸り、やがて、片破れ月が數ば軒端から人を見下す頃となつた。夜は、書史を研究するのも厭になつたから、手馴れの琴を取り出し、それに絃を張つて、試に再三彈じて見て、そして聽けば聽く程、その琴の音は、非常に淡泊で、とても、時人の耳に入らぬやうに思はれた。かくの如き太古の音色は、埋滅して久しく世に傳はらぬから、今、自分の彈き出したのが、眞の音なりや、濫れた音なりや、それを判別して吳れる人もない。そこで、仕方がないから、心を低くし、志を

枉げて、時人の耳に入る様にしやうとも思つたが、おのが本性に適はぬことは仕方のないもので、如何に勉強しても、ほんの暫くの間だけであつて、矢張、もとへ還つて仕舞ふ。これを譬ふれば、風を受けて居る船が、その風に逆つて上らうとすると、非常の苦であつて、しばらくは上つて行くかも知れぬが、忽ちにして、風に吹き返されると、もう二度と纜を付けて元の處に繫ぎ止めることが出來ないやうなものである。萬事が此通りで、どうにも、仕方がないから、おのが性の好むままに、書物を披いて、文字を見て行き、朱筆を以て圈點を施したり、校正の書き入れをしたりして、自ら樂む方がはるかに善い。しかし、餓死しては仕方がないから、それ相應に世人と交際もせねばならぬが、澤山の金を餘して贅澤三昧をしたいといふのではなく、ほんの儋石の僅かばかりなる祿米を得れば善いので、まあ今の處では、餓死せぬ程度にして置いて、例の書史の研究をする外はない。

【餘論】この篇の大旨は、おのが志嚮と時勢とは互に背馳して、もとより相容れぬが、食はずに居られぬ上は、聊か時勢と調和せねばならぬといふことに就いて、感慨を起したのである。李光地は「首に、その汲汲志を求めて、日の足らざるを患ふるを言ふなり。又、淡古の音、世に知るもののなきを言ふ。心を低くし、時を逐ふは、性の堪へざるところ、風に乘ずるの船、自ら返る能はざるが如し。故に惟だ讀書以て自ら樂むあるのみ、苟くも、暫く儋石の儲を得れば、便ち浩浩乎として求むるなからむ」といひ、簡單ながら、その要を得て居る。朱竹垞は、寒雞空在棲の二句を評して「點景好し」といひ、何義門は「低心の句、上の塵埃慵伺候、文字浪馳騁を、承けて之を言ふ」といひ、又「史書の味は窮まりなく、朝請の求は限あり、何ぞ必ずしも、人の營營を以て己の汲汲に易へむや」といつて居る。

卷卷落地葉。隨風走前軒。　卷卷たり地に落つるの葉、風に隨つて前軒に走る。
鳴聲若有意。顚倒相追奔。　鳴聲意あるが若く、顚倒して相追奔す。
空堂黃昏暮。我坐默不言。　空堂、黃昏の暮、我は坐すれども、默して言はず。
童子自外至。吹燈當我前。　童子外より至り、燈を吹いて我が前に當る。
問我我不應。饋我我不餐。　我に問へども、我は應せず、我に饋れども、我は餐せず。
退坐西壁下。讀詩盡數編。　退いて、西壁の下に坐し、詩を讀んで、數編を盡す。
作者非今士。相去時已千。　作者は、今の士に非ず、相去ること、時すでに千。
其言有感觸。使我復悽酸。　その言、感觸することあつて、我をして復た悽酸たらしむ。
顧謂汝童子。置書且安眠。　顧みて謂へらく、汝、童子、書を置いて且く安眠せよ。

丈夫屬レ有レ念。事業無二窮年一。　丈夫、念あるに屬す、事業は、窮まる年なし。

【字解】〔一〕吹燈　吹は吹き消すのではなく、火鉢の火から何かを吹いて附木に移し、そして、燈火を點する。〔二〕饋　食事を進める。〔三〕時已千　千は千載、これは稍や歇後の語に類した嫌がある。

【詩意】卷かれ卷かれて地に落ちた枯葉は、風に隨つて、軒のあたりを走つて居る。ざわざわと聲を爲し、そして顚倒して互に追ひ合ふが如くであつて、それが、丁度、讀書以て古しへを師とせむとする夙志を枉げて、時趨を逐はなければならぬといふ我が身の上と同一である處から、さながら意あつて然るが如く思はれる。今黃昏の頃、獨り空堂の中に坐し、落葉の風に飜るを見て、感慨の極、一言も發せずして默つて居た。すると、童子が外より入り來り、燈火を點して、吾が前に差し出し、そして、吾に如何なされたかといつて、親切に問うて吳れたが、吾は答を爲さず、食事を促されても、吾は食ひたくないから、飯を食はうともせず、相變らず、つくねんとして居ると、童子は、手持無沙汰であると見え、西壁の下に退いて、かつて敎へて遣つた詩の本を取り出して朗誦し、やがて數篇に及んだ。その詩を作つた人は、今から千年の前に生きて居た人であるが、その詩の文句は、吾が心に感觸を與へ、悽酸の極、物とはなしに、悲しくなつて來た。そこで、顧みて、童子に向ひ、夜が更けて來るから、書物を讀むことを止めて安眠せよといつて、折角の讀書を中止させて仕舞つた。苟くも、丈夫たるものが、一たび遣つて見やうと心に念つて實行した事業は、永劫の生命を持つて居るもので、古人の詩が自分に觸動し、千歲を隔てて相感ずることを見ても分かる。されば、時趨を逐うて、儋石の儲を求めることは、生命を保つ爲めに仕方がないこととして、自分は、天晴、一廉の事業を爲し、それに因つて、不朽の計をなしたいものである。

【餘論】この篇は、落葉に因つて興を起して、はるかに第一首と呼應し、そして、平生の志の宏遠にして古人と軌を同じうし、到底、時人の窺ひ知るべからざるを公言したので、まことに、その抱負の大を見るべきものである。劉辰翁は「耿耿として目前に在るが如し、荊公の拋レ書還二少年一は、かくの如く暢ならず」といひ、李光地は「言ふは、古人の詩を誦して、古人と相感ず、默然安寢して無窮の業に志す、詩に謂はゆる獨寐寤宿、永矢レ弗レ告なるものか」といつた。

霜風侵二梧桐一。衆葉著レ樹乾。　霜風、梧桐を侵し、衆葉、樹に著いて乾く。

空堦一片下。琤若レ摧二琅（一）玕一。　空堦に一片下る、琤として琅玕を摧くが若し。

謂是夜氣滅。望（二）舒賓（三）二其團一。　謂ふ是れ夜氣滅し、望舒その團を賓すと。

青冥無二依倚一。飛（四）轍危難レ安。　青冥、依倚なく、飛轍、危うして安んじ難し。

驚起出レ戶視。倚（五）レ楹久汍（六）瀾。　驚き起つて、戶を出でて視、楹に倚つて、久しく汍瀾。

憂愁費晷景。日月如跳丸。　憂愁、晷景を費し、日月、跳丸の如し。

迷復不計遠。爲君駐塵鞍。　迷復、遠きを計らず、君が爲に塵鞍を駐む。

【字解】【一】琅玕　玉の名。【二】望舒　淮南子に「月御を望舒といふ」とあり、離騷に前望舒使先驅とあり、顔景陽の詩に望舒四五圓とある。望舒は、月を馭する人であるが、轉じて月をいふ。この句の解に「葉聲の琤然たるを聞いて、誤つて望舒の其圓を霣すと謂ふなり」とある。【三】霣其圓　公羊傳に「夜中、星霣ちて雨の如し」とある。その圓い球を落す。【四】飛轍　飛び行く車輪。【五】倚楹　楹は柱。【六】汍瀾　文選歐陽堅石の詩に揮筆涕汍瀾とあつて、その註に「涕流るる貌なり」とある。【七】晷景　晷は日影、景は物の影、ここでは日月の影。【八】日月如跳丸　莊子に東西跳梁とある。この句は、杜牧の日月兩跳丸と同じく、この意を取つたのである。【九】迷復　迷と又悟ること。

【詩意】霜氣を含んだ秋風が、梧桐を侵すと、その葉は、樹に著いた儘、乾いて枯れて仕舞ひ、やがて、一片一片、空階に落ちるが、その音は、琤琤然として、琅玕の玉を碎くが如くである。その内に一つ大きな葉が落ちて來て、今まで照り渡つて居た月が、其葉に遮られて暗く見えたから、自分は、清晶なる夜氣が滅して、天地が眞暗になり、そして、空行く月が其圓い球を大地に落したのではないかと思つた。月は、靑冥の天上に挂つて居るが、もとより據る處なく、その飛んで行く車輪は、危うして、安んじ難きものであるから、もしかすると、月が落ちたのでは無いかと思つた次第であるが、驚き起つて、戸を出でて見ると、月は落ちなかつたが、その己が心を驚かしたことの甚だしきにつけて、柱に倚つた儘、涙汍瀾として流れるを禁じられなかつた。抑も、わが一生は、憂愁の中に在つて、年月を送つて居るが、日月は、人が何と思はふが、そんな事には全く頓著せず、さながら、丸の廻る樣に轉がつて行くものである。そこで、桐の葉の落ちたのを月が落ちたと誤想したといふのは、如何にも愚な話ではあるが、おのが憂愁を排除し兼ぬればこそ、かういふ事に成るのである。一たびは迷うても又元に還つて悟つた上は、わが志の遠大なるをも過分とせず、精精勉めて遣つて見やうと思ふので、これに對して、日月は君が爲めに其塵鞍を止めるといつて、十分の時を與へ、そして、この志を成就せしめて吳れまいものか。

【餘論】この一首は、前詩の其言有感觸、使我復悽酸と略ぼ同義である。乾隆御批には「一葉の落つる、寫し得て許の如く奇峭、これ等の蹊徑、何處よりか闢き出でたる。聯句に云ふ、腸胃繞萬象と、落筆の時の意思を想見すべし」とあり、朱竹垞は「桐葉落つ、常事のみ、寫し得て奇峭、知らず多少營構の工夫を費せしかを」といつた。

暮暗來客去。羣嚚各收聲。　暮暗に來客去つて、羣嚚、各聲を收む。

悠悠偃宵寂。亹亹抱秋明。　悠悠として、宵寂に偃し、亹亹として、秋明を抱く。

世累忽進慮。外憂遂侵誠。　世累、忽ち慮に進み、外憂、遂に誠を侵す。

強懷張不滿。弱念缺已盈。　強懷、張れども滿たず、弱念、缺いて已に盈つ。
詰屈避語穽。冥茫觸心兵。　詰屈として、語穽を避け、冥茫として、心兵に觸る。
敗虞千金棄。得比寸草榮。　敗るれば千金を棄てむことを虞れ、得れば寸草の榮に比す。
知恥足爲勇。晏然誰汝令。　恥を知るは、勇となすに足れり、晏然、誰か汝をせしむる。

【字解】【一】璧璧　靜穩の貌。【二】語穽　言葉の落し穴、言語の過失。【三】千金棄　莊子に「林同、千金の璧を棄て、赤子を負うて趨る。或は曰く、その布の爲か、赤子の布寡し。その累の爲か、赤子の累多し。千金の璧を棄て、赤子を負うて趨るは、何ぞや。林同曰く、彼は利を以て合し、此は天を以て屬するなり。夫れ利を以て合ふものは、窮禍患害に迫まられて相棄つるなり、天を以て屬するものは、窮禍患害に迫まられて相報ゆるなり」とある。【四】寸草榮　爾雅に「木には之を華といひ、艸には之を榮といふ」とある。

【詩意】日が暮れて暗くなつたから、今まで居た客も、辭して去り、萬籟聲なく、四邊は極めて靜である。そこで、悠悠として、夜の清寂の中に、身體を伸ばして橫臥し、心は璧璧として、秋の空爽かに、月の光の明かなるを抱くやうな想がした。ひとり、色色の事を考へると、世間の俗累は、忽ち自己の思慮の中に進入し、外部の憂は、誠心を侵害するもので、餘程しつかりした意思を持つて居らぬといふと、世累や外憂の爲に次第に本心を失ふやうになる。そこで、強固なる懷抱を十分に張つて居やうと思つても、未だ十分ならず、薄弱なる念慮は、缺けて行くかと思つて居ると、やがて反對に胸に一ぱいになる。されば、窮屈にして自ら志を枉げ、言語上の落し穴を避けて、人に惡まれぬやうにし、冥茫の中に在つて、心の兵器を礪ぎ澄まし、少しも撓まぬやうにしたいと思ふ。しかし、それでは、世間を渡り行く時に、得るところ少くして失ふところ多く、なかなか、うまくは行かないので、失敗した時には、千金を地上に棄てたと同じく、偶ま一つ勝ち得たことがあつても、名も知らぬ小さな草が花を開いたやうなものである。但だ、恥を知るといふ一念だけが殘つて居れば、如何なる世累や、外憂が侵入して來ても、勇氣を鼓舞して之と戰つて行くことが出來るので、晏然として、誰の指圖をも受けず、自ら守つて、獨立特行することも出來るのである。

【餘論】これまでの九首に於ては、おのが志す處へ一直線に進むことを述べたが、ここに至りて、この外に吾が取るべき道もなく、たとひ行はれぬにしても、決して、おのが操守を枉げないと斷言したのである。朱竹垞は「これは是れ退之苦心の詩、純ち是れ意を錬る、故に妙」といひ、何義門は「これ又自ら其志を堅くし、依倚するところあるを欲せざるなり」といつた。

鮮鮮霜中菊。既晚何用好。　鮮鮮たり、霜中の菊、すでに晚くして、何ぞ好きを用ひむ。
揚揚弄芳蝶。爾生還不早。　揚揚たり、芳を弄するの蝶、爾が生、還た早からず。

運窮兩値遇。婉孌死相保。 運窮まつて、兩つながら値遇す、婉孌、死して相保つ。
西風蟄龍蛇。衆木日凋槁。 西風、龍蛇を蟄し、衆木、日に凋槁。
由來命分爾。泯滅豈足道。 由來、命分爾り、泯滅何ぞ道ふに足らむ。

【字解】【一】既晩 菊は秋開く故、時節が遲いといふ意。【二】弄芳 芳香に戯れる。【三】遲不早 これも亦た時が遲いといふ意。【四】婉孌 詩經に婉兮孌兮とあつて、註に「婉は少き貌、孌は好き貌」とある。【五】蟄 かくれ潜む。【六】凋槁 凋み枯れる。

【詩意】菊は霜中に咲き出でて、その色香は、鮮鮮として居る。もとより時候が遲いから、別段、必要も無いのだが、かくばかり顔よき色を爲して居る。その菊の芳香に戯れて居る蝶は、揚揚として、さも得意であるが、これも時節に遲れたものである。その運の窮まれる時に當つて、菊と蝶とは、各ゝ婉孌として、一は顔よき色に咲き出で、一は優しい香を懷かしんで、死に至るまで、互に相保つて、決して離れない。天命窮まれるも、猶ほ且つ、自己の節を忘れぬといふのは、丁度こんなものであらう。今しも、西風吹き起り、龍蛇は池中に蟄し、多くの木木は、皆枯れて仕舞つたので、菊も、蝶も、その命分に從つて、ここに出て來たので、たとひ遠からず亡びて仕舞ふにしても、そんな事は、どうでも宜しい。わが志を守つて死するも猶ほ變せざるは、恰も此通りである。

【餘論】最後の一首は、死に至るも變せず、おのが操守は、決して枉げないといふ意を述べたのである。劉辰翁は「甚だ悲惋、自ら足る、死を守つて易らざるの志あり、陳去非、以爲へらく、躁なりと、豈に其れ然らむや」といひ、何義門は「菊に黃華あれば九秋、故に秋懷これを以て終るなり」といひ、又「末二句、これを命に歸す、言ふは、盛衰道ふに足らず、時に及んで、德を進め、業を修むれば、死して亡びざるものあつて存す」といつた。なほ、樊汝霖は「秋懷の詩十一首、文選の詩體なり。唐人、最も文選の學を重んず。公、六經の文を以て諸儒の倡となし、文選は論せざるなり。ひとり、李郱の墓に於て之を誌して曰く、能く論語尙書毛詩左氏文選を諳記す、と。而して、公の詩、自許連城價、傍砌看紅藥、眼穿長訝雙魚斷の句の如き、皆これを文選に取る。故に、この詩、往往その體あり」といひ、陳後山は「韓詩、秋懷、別元協律、南溪始泛の如き、皆佳作なり」といひ、最後に、乾隆御批には「秋懷の詩、抑塞磊落、謂はゆる寒士職を失うて志不平なるもの。昔人謂ふ、東野の詩、これを讀まば、人をして歡ばざらしむ。昌黎の此等の作を觀るに、眞に乃ち異曲同工、もとより宜しく臭味の合あるべきなり」とある。

赴江陵途中寄贈王二十補闕李十一拾遺李二十六員外翰林三學士

江陵に赴くの途中、王二十補闕・李十一拾遺・李二十六員外、翰林三學士に寄贈す

孤臣昔放逐(一)。泣血追(二)愆尤。　孤臣、むかし放逐せられ、泣血して愆尤を追ふ。

(三)汗漫不(四)省識。(五)恍如乘(六)桴浮。　汗漫として省識せず、恍として、桴に乘じて浮ぶが如し。

或自疑上疏。上疏豈其由(七)。　或は自ら上疏かと疑ふ、上疏豈に其れ由あらむや。

是年京師旱。田畝少所收。　この年京師旱し、田畝收むるところ少し。

上憐民無食。征賦半(八)已休。　上、民の食なきを憐んで、征賦半ば已に休す。

有司恤(九)經費。未免煩徵求。　有司、經費を恤ひて、未だ徵求を煩はすを免れず。

富者既云急。貧者固已流(一〇)。　富者も既に云に急なり、貧者は固より已に流す。

傳聞閭里間。赤子棄渠溝。　傳へ聞く、閭里の間、赤子は渠溝に棄てらると。

持男易斗粟。掉(一一)臂莫肯酬。　男を持して、斗粟に易へむとするも、臂を掉つて肯て酬ゆるなし。

我時出衢路。餓者何其稠。　我、時に衢路に出づ、餓者、何ぞ其れ稠き。

親逢道邊(一二)死。佇立久咿嚘(一三)。　親しく道邊の死に逢ひ、佇立して久しく咿嚘す。

歸舍不能食。有如魚(一四)中鉤。　舍に歸つて、食ふ能はず、魚の鉤に中るが如きあり。

適會除御史。誠當得言秋。　適、御史に除せらるるに會し、誠に言ふを得る秋に當る。

拜疏移閤(一五)門。爲忠寧自謀。　疏を拜して、閤門に移し、忠を爲す、寧ろ自ら謀らむや。

上陳人疾苦。無令絕其(一六)喉。　上は人の疾苦の、其喉を絕たしむる無からむことを陳べ、

下陳畿甸內。根本理宜優。　下は畿甸の內、根本にして、理宜しく優なるべきを陳ぶ。

積雪驗豐熟。幸寬待蠶(一七)麰。　積雪、豐熟を驗し、幸にして、寬く蠶麰を待たむとす。

天子惻然感。司(一八)空歎綢繆。　天子、惻然として感じ、司空、綢繆を歎す。

謂言即(一九)施設。乃反遷炎(二〇)州。　謂うて言ふ、即ち施設せむと、乃ち反つて炎州に遷さる。

同官盡才俊。偏善(二一)柳(二二)與劉。　同官盡く才俊、偏に柳と劉とに善し。

或慮語言洩。傳之落冤讐。　或は慮る、語言洩れ、これを傳へて冤讐に落つるかと。

二子不宜爾。將疑斷(二三)還不。　二子宜しく爾るべからず、將疑ふらくは斷するか還た不か。

(二四)中使臨門遣。頃刻不得留。　中使、門に臨んで遣り、頃刻も留まることを得ず。

(二五)病妹臥牀褥。分知隔明幽。　病妹、牀褥に臥し、分かるれば明幽を隔つことを知る。

悲啼乞(二六)就別。百請不頷頭。　悲啼別に就かむことを乞ひ、百たび請へども頭を頷かず。

弱妻抱稚子。出拜忘慚羞。
(二七)僶俛不廻顧。行行詣連州。
朝爲青雲士。暮作白首囚。
商山季冬月。冰凍絕(二八)行輈。
春風洞庭浪。出沒驚孤舟。
逾嶺到所(二九)任。低顏奉(三〇)君侯。
酸寒何足道。隨事生(三一)瘡疣。
遠地觸途異。吏民似猨猴。
(三二)生獰多忿狠。辭舌紛(三三)嘲啁。
白日屋簷下。雙鳴鬬(三四)鵂鶹。
有蛇類(三五)兩首。有(三六)蠱羣飛游。
窮冬或搖扇。盛夏或重裘。
颶起最可畏。(三七)訇哮簸陵丘。

弱妻、稚子を抱き、出でて拜して慚羞を忘る。
僶俛して廻顧せず、行行連州に詣る。
朝には青雲の士となり、暮には白首の囚となる。
商山、季冬の月、冰凍つて行輈を絕つ。
春風洞庭の浪、出沒して孤舟を驚かす。
嶺を逾えて所任に到り、顏を低れて君侯に奉ず。
酸寒、何ぞ道ふに足らむ、事に隨つて瘡疣を生ず。
遠地途に觸れて異なり、吏民、猨猴に似たり。
生獰にして忿狠多く、辭舌紛として嘲啁。
白日屋簷の下、雙鳴して鵂鶹を鬬はす。
蛇あり、兩首に類し、蠱あり、羣飛して游ぶ。
窮冬、或は扇を搖かし、盛夏、或は裘を重ぬ。
颶の起る、最も畏るべし、訇哮、陵丘を簸る。

雷霆助光怪。氣象難比侔。
(三八)癘疫忽潛遘。十家無一瘳。
猜嫌動置毒。對案輒懷愁。
(三九)前日遇恩赦。私心喜還憂。
果然又羈縶。不得歸(四〇)耡耰。
(四一)此府雄且大。(四二)騰凌盡戈矛。
(四三)棲棲法曹掾。何處事(四四)卑陬。
生平企仁義。所學皆孔周。
早知(四五)大理官。不(四六)列三后儔。
何況親(四七)犴獄。(四八)敲搒發姦偸。
懸知失事勢。恐自罹(四九)罝罘。
湘水清且急。涼風日脩脩。
胡爲首歸路。旅泊尚(五〇)夷猶。

雷霆、光怪を助け、氣象、比侔し難し。
癘疫、忽ち潛に遘ひ、十家、一の瘳ゆるなし。
猜嫌動もすれば毒を置く、案に對して輒ち愁を懷く。
前日、恩赦に遇ひ、私心、喜んで還た憂ふ。
果然、又羈縶せられ、耡耰に歸するを得ず。
この府、雄且つ大、騰凌、盡く戈矛。
棲棲たり法曹の掾、何の處にか、卑陬を事とせむ。
生平、仁義を企て、學ぶところは皆孔周。
早く知る、大理の官、三后の儔に列せざるを。
何ぞ況んや、犴獄を親らするをや、敲搒して姦偸を發す。
懸かに知る、事勢を失ひ、恐らくは、自ら罝罘に罹らむことを。
湘水清且つ急、涼風日に脩脩たり。
胡爲れぞ、歸路に首つて、旅泊尚ほ夷猶するや。

昨者京使至。嗣皇傳（五一）冕旒。
赫然下明詔。首（五二）罪誅共（五三）吺。
復聞顯（五四）天輩。峨冠進鴻（五五）疇。
（五六）班行再肅穆。璜（五七）珮鳴琅璆。
佇繼貞觀烈。邊（五八）封脫兜鍪。
（五九）三賢推侍（六〇）從。卓犖傾枚（六一）鄒。
高議參（六二）造化。清文煥皇（六三）猷。
協心輔齊（六四）聖。致（六五）理同毛（六六）輶。
（六七）小雅詠鹿鳴。食苹貴呦呦。
遺風邈不嗣。豈憶嘗同（六八）裯。
失志早衰（六九）換。前（七〇）期擬蜉（七一）蝣。
自從齒牙缺。始慕舌（七二）爲柔。
因疾鼻又塞。漸能等薰（七三）蕕。

昨は、京使至り、嗣皇、冕旒を傳へたりといふ。
赫然、明詔を下して、首罪、共吺を誅す。
復た聞く、顯天の輩、峨冠、鴻疇を進むるを。
班行再び肅穆、璜珮鳴つて琅璆たり。
佇つらくは貞觀の烈を繼いで、邊封、兜鍪を脫せむことを。
三賢、侍從を推し、卓犖として、枚鄒を傾く。
高議、造化に參し、清文、皇猷煥たり。
心を協せて、齊聖を輔け、政理、毛の輶きに同じ。
小雅、鳴鹿を詠じ、苹を食うて呦呦たるを貴ぶ。
遺風邈として嗣がず、豈に嘗て裯を同じうするを憶はむや。
志を失うて、早く衰換し、前期、蜉蝣に擬す。
齒牙の缺けてより、はじめて舌の柔を爲すを慕ふ。
疾に因つて、鼻又塞がり、漸く能く薰蕕を等しうす。

深思罷官去。畢命依松（七四）楸。
空懷焉能果。但見歲已遒。
（七五）殷湯閔禽獸。解網祝蛛蝥。
（七六）雷煥掘寶劍。冤氛銷斗牛。
茲道誠可尚。誰能借（七七）前籌。
殷勤謝（七八）吾友。明月（七九）非暗投。

深く思ふ、官を罷て去り、命を畢へて松楸に依らむことを。
空懷、焉んぞ能く果さむ、但だ見る歲すでに遒ることを。
殷湯、禽獸を閔み、網を解いて蛛蝥を祝す。
雷煥、寶劍を掘り、冤氛、斗牛に銷ゆ。
この道、まことに尙ぶべく、誰か能く前籌を借さむ。
殷勤、吾が友に謝す、明月、暗に投ずるに非ず。

【字解】【一】放逐　都から遠地に逐ひ遣られる、卽ち左遷。【二】追愆尤　自分の罪科を追懷する。【三】汗漫　淮南子に「汗漫の宇に從倚す」とあつて、その註に「汗漫は生形なし」とあり、又「吾、汗漫と九垓の外に期す」とあつて、その註に「汗漫は之を知るべからざるなり」とある。譯の分からぬこと。【四】省諐　省みて諐る、反省して認識する。【五】悅　ぼんやりする貌。【六】桴　いかだ、小舟。【七】其由　由は理由。【八】牛已休　租稅の一牛を免ずる。【九】憧經費　經費の減少を心配する。【一〇】流　流離する。【一一】掉臂莫肯顧　史記に「馮驩曰く、朝に市に趨るものは、平旦に肩を側て門を爭うて入るも、日暮の後は、臂を掉って顧みず、期するところの物、その中に忘れたればなり」とあるに本づく。臂で拂ひ退けて全く相手にもしない。【一二】道邊死　死は尸、左傳に「石乞を生拘して白公の死を問ふ」とある。【一三】咿噫　心中に悶まはしく思ふ。【一四】魚中鉤　魚が釣針を呑む。【一五】閶門　宮殿の門。【一六】絕其喉　喉が食物を入れずして餓死する。【一七】蠶蛾　蛾は蠶の初めて熟すること。【一八】司空歎綢繆　始末の方法が宜しいといつて嘆賞する。司空は官名、今でいへば農林大臣。唐書に「貞元十九年三月、杜佑、檢校司空同中書門下平章」とあるから、この司空は、杜佑である。綢繆は、詩經に「綢繆束薪」「綢繆門戶」と用ひてある。【一九】卽施設

卽日實施する。【二〇】炎州　南方炎熱の地、卽ち連州陽山を指す。【二一】偏善　特別に仲が善かつた。【二二】柳與劉　舊唐書に「柳宗元、字は子厚、河東の人、進士の第に登り、貞元十九年、監察御史となる」とあり「劉禹錫、字は夢得、彭城の人、貞元九年、進士の第に擢んでらる。王叔文の事を用ふるや、禹錫及び宗元を引いて禁中に入り、これを圖議し、喜怒人を凌ぎ、道路目を以てす」とある。韓愈の永貞行に吾嘗同僚情可ㇾ勝とあつて、この時、韓愈は、柳宗元、劉禹錫と同じく監察御史であつた。【二三】斷還不　斷じて然るや、然らざるや。【二四】中使　朝廷の使。【二五】病妹　韓愈に妹があつたといふことは、斷じて聞かぬことであつて、一本には病姝に作るといふが、すると共妾であらう。【二六】乞就別　この三字は、一寸曖昧だが、別れるのが厭だから、一處に連れて往つて吳れといふ意に見ればならぬので、別れて行く旅路に一緒に就くと解する外はあるまい。【二七】僶俛　强ひて勉める。【二八】行幹　幹は車轅。【二九】所任　任地。【三〇】君侯　刺史とか節度使とかいふ上官。【三一】疣贅　疣はいぼ、やましき思、いやな思。【三二】生獰　生は馴化せぬこと、獰は野犬の如く獰惡なること。【三三】啁啾　啾も嘲る。【三四】鵂鶹　梟。【三五】兩首　兩頭の蛇、これを見るものは死すとさへ云はれて居る。【三六】蠱　蠱蟲の名。【三七】甸哮　甸は鳴り響く聲、哮は豕の蠢く聲。【三八】瘴疫　風土病、流行の惡疫。【三九】前日　この頃、貞元二十一年正月乙巳に順宗が卽位し、二月甲子に天下に大赦し、その時、韓愈も江陵に量移されることになつた。掾は、裁判所の書記の如きもの。【四〇】歸鋤耰　田園に歸臥する。【四一】此府　江陵を指す。【四二】駿凌盡戈矛　駿すさまじく往來するものは、いづれも戈矛を擁する武人であるといふこと。【四三】僂僂　見すぼらしい貌。【四四】卑陬　江陵法曹參軍の卑賤を指す。【四五】大理　堯の時、皐陶が大理となつた。大理は裁判官。【四六】不列三后儔　蔣本の註に「東漢の楊賜、廷尉となる。自ら以へらく、世、法家を非とす。書に曰く、乃ち三后に命じて功を于民に恤へしむ。伯夷・禹・稷の三君のみは士、皐陶は在らずと。蓋し之を吝とするなり」とある。【四七】犴獄　漢書音義に「鄕亭の獄を犴といふ」とある。【四八】敲搒　拷問する。【四九】罝罘　兎を捕ふる網。【五〇】夷猶　躊躇する、楚辭に君不ㇾ行兮夷猶とある。【五一】傳冕旒　冕旒は天子の冠、貞元二十一年八月、憲宗卽位せしことを指す。【五二】首罪　元兇、惡人の首魁。【五三】共吺　吺は兜、共工驩兜、書の舜典に「共工を幽州に流し、驩兜を崇山に放つ」とあつて、これは、憲宗が王伾を開州司馬に、王叔文を渝州司馬に

貶せしことをいふ。【五四】閎夭　書の君奭に「閎夭の若きあり、泰顚の若きあり」といひ、これは、杜黃裳・鄭餘慶等を任用して宰相となせることを指す。【五五】鴻疇　遠大なる謀。【五六】班行　朝臣の行列。【五七】璜珮鳴琅璆　玉佩には雙璜が付いて居て、それが當り合つて鳴るといふこと、禮裝を形容して云ふ。【五八】邊封　邊地に封土を有する節度使の輩。【五九】三賢　この詩を寄せた王涯・李建・李程の三人を指す。【六〇】侍從　天子の近侍。【六一】枚鄒　枚乘、鄒陽、ともに漢初の賦家で、梁の孝王に親侍して居た。【六二】參造化　天地の化育に參與して政を輔ける。【六三】煥　明かにする。【六四】齊聖　德齊しく神聖なること。【六五】致理　理は治、唐人は高宗の諱を避けて、治の代りに理の字を用ひた。【六六】同毛輶　詩經に「德輶如ㇾ毛」とあつて、毛の先までも行き屆くといふこと。【六七】小雅詠鹿鳴　小雅の鹿鳴に呦呦鹿鳴、食二野之苹一とある。【六八】同裯　詩經に抱二衾與一ㇾ裯とあつて、註に裯は禪被とある。ここでは裯を同じくして共に寢たといふこと。【六九】衰換　容貌が衰へて變はる。【七〇】前期　前程、これから先の壽命。【七一】蜉蝣　かげろふ、詩經に蜉蝣之羽とあり、埤雅に「蜉蝣は、朝に生まれて暮に死つ、浮游の義あり、故に蜉蝣と曰ふなり」とある。【七二】舌爲柔　舌の柔かな方が宜しい。淮南子に「老子、商容に學び、舌を見て柔を知る」とあつて、その註に「商、舌を吐いて老子に示す、老子、舌柔にして齒剛なるを知る」とある。又劉向說苑に「常摐、疾あり、老子往いて問ふ。その口を張つて老子に示して曰く、吾が舌存するか。老子曰く、然り。吾が齒存するか。老子曰く、亡し。老子曰く、舌の存するは、豈に其柔を以てするに非ずや。夫れ齒の亡ぶるや、豈に其剛を以てするに非ずや。曰く、嘻、是れのみ」とある。【七三】薰蕕　善い匂も惡い臭氣も混同して仕舞ふ。左傳僖公四年に「一薰一蕕、十年、尙ほ臭あり」とある。【七四】松楸　先祖の墓所。【七五】殷湯　賈誼の新書に「湯、網を張るもの、四面にあるを見、乃ち其三面を去り、祝して曰く、蛛蝥網を作る、左せむと欲すれば左せよ、右せむと欲すれば右せよ、吾、この令を犯すものを受けむと。土民これを聞いて曰く、德、禽獸に及ぶ、況んや我をや」とある。蛛は蜘蛛、蝥は稻を食ふ蟲、蜘蛛の如く米かみ蟲の如く、貪慾であつて、何でも取つて仕舞ふのは惡いといふ意。【七六】雷煥　晉書に「吳の未だ滅びざるや、斗牛の間、常に紫氣あり、張華、雷煥を以て豐城の令となし、これを尋ねしむ。獄に至つて、獄屋の基を掘り、地に入ること四尺餘にして、一石函を得たり。中に雙劍あり、竝に題刻あり、一を龍泉といひ、一を太阿といふ。この夕、

斗牛の間、氣、復た見えず」とある。【七七】借前籌　漢書張良傳に「良請ふ、前箸を借りて、以て之を籌らむ」とある。【七八】謝　禮をいふの義ばかりではなく、古しへは告げるといふことに用ひて居た。【七九】明月非暗投　鄒陽が獄中から梁の孝王に上つた書に「明月の珠、夜光の璧、暗を以て人に道に投ずれば、衆、劍を按じて相眄せざるものなし。因なくして、前に至ればなり」とある。蔣註に「公の意、渦を以て憲宗に譬へ、劍を以て己に譬へ、前籌を借るを以て三賢者に屬す、明月の珠、暗に投ずるに非ず」といつて居る。

【題義】前に總說の中に於て述べた通り、德宗の貞元十九年に、韓愈は、國子四門博士より監察御史に拜した處が、圖らずも、天子の逆鱗に觸れたことがあつて、連州陽山令に左遷された。それは、何事に因るかといふと、舊唐書には「德宗晚年、宮市の弊、愈、かつて上章數千言、これを極論するも聽かれず。怒つて、貶して連州陽山の令となさる」とあり、新唐書にも「愈上疏して、宮市を極論す。德宗怒つて陽山の令に貶す」とあるが、この篇で見ると、どうも、さうでもないらしい。洪興祖は、「貞元十九年、公、博士より監察御史に拜せらる。この時、詔あり、旱饑を以て租の半を蠲く。有司、徵すること愈よ急なり。公、張署・李方叔と上疏して言ふ、關中は天下の根本、民急なること、かくの如し。請ふ、民謠を寬にして、田租を免せむと。天子惻然たり。卒に幸臣に讒せられ、連州陽山令に貶せらる。幸臣は、李實なり。舊書云云、疏、今傳はらず。すなはち、公の絀けらるるは、この兩事に坐するなり」といひ、饑饉に就いて田租を免ずることと、宮市に就いて上書した爲めだといつて居るが、宮市は、殆んど關係なく、そして、田租を免ずることも、天子は嘉納されたが、幸臣等が自分に都合の惡いところから、讒を構へて罪に落したのだといふのが事實らしく、これに就いては、方崧卿の說が一番當を得て居る樣に思はれる。曰く「公、陽山の貶、三學士に寄するの詩に、その詳を敍述す。しかも、行狀には、但だ幸臣に惡まれ、出でて陽山に宰たりと云ふのみ。神道碑も、亦た只だ關中の旱饑を疏するに因つて、專政者、これを惡むと云ふのみ。すなはち、その宮市を論ずるが爲めならざること明かなり。然れども、行狀、しばらく謂ふ、幸臣に惡まると。而して、公の詩に云ふ、或自疑二上疏一、上疏豈其由、と。すなはち是れ又未だ必ずしも上疏の罪ならざるなり。又曰く、同官盡才俊、偏善二柳與一レ劉、或慮語言泄、傳レ之落二寃讐一、と。又岳陽樓の詩に云ふ、前年出レ官由、此禍最無妄、姦猜畏二彈射一、斥逐恣二欺誑一、と。これ蓋し王叔文・韋執誼等に排せらる。億昨行に云ふ、伾文未レ揃崖州熾、雖レ得二赦宥一常愁猜、と。これ、その叔文に排せらるるも、豈に不明甚だしく、特に咎を歸するところなく、その罪を上疏に嫁するのみ」とある。すると、幸臣といひ、專政者といふのは、てつきり、王叔文・韋執誼に外ならぬやうである。何はともあれ、韓愈は、上書の後、陽山に左遷されたので、仕方がないから長安を發し、貞元二十年の春、はじめて陽山に著し、居ること一年、明年正月、德宗崩じて順宗卽位せしが、やがて病んで事を覩ず、七月、太子、監國となり、八月、順宗位を太子に傳へ、新に卽位したのが憲宗で、幾もなくして、順宗は崩御になつた。韓愈は、順宗卽位の初に、特別の思召を以て、連州の樣な遠い南方の熱い處でなく、もつと善い處に移されることとなり、夏秋の交、

陽山を離れて命を郴に竢つこと三月、秋末になつて、はじめて江陵府法曹參軍を授けられた。順宗の在位は一年未滿で、その間、王伾・王叔文の二人は、微賤より起つて、政治の革新を爲さうとし、宰相の韋執誼を取り入れ、著著として其計畫を實施した。但し、あまり策略を弄した處から、後世からは、小人の如く云はれて居るが、その本志は、さうでもないらしい。但し、その爲に朝廷が擾亂されたのは事實で、やがて、憲宗が卽位されると、數ば前に云へる如く、英明の資を以て、唐室を中興せむとし、仍つて、容赦なく、王叔文・韋執誼の一黨を卻け、そして、從來韓愈と志を同じうして居た人人を擧用した。それは、丁度韓愈が江陵に移る時分で、彼に取つては、まことに千載一遇の好機會と稱すべく、是非とも、この時歸朝せねば、又といふ折も無いといふ處から、この詩を作つて、目下朝廷に居る己の同志の三學士に贈り、その周旋に因つて、一刻も早く都に召し還されたいといふ意を述べたのであるから、この詩は、韓愈の閱歷を考へる上に於て、極めて必要なものである。三學士は、卽ち王涯・李建・李程である。二十とか十一とかいふのは、例の排行で、これは、祖先の祭を爲すとき、その祖先に對して同じ關係を有するもの、卽ち自己の兄弟・從兄弟・從父兄弟といふ樣な者が、年の順で同列に坐る、その順序から來たので、唐人は、每に之を用ひて、名字の代りにして居る位。その王涯は右補闕の官に居り、後には宰相となつた人、李建は左拾遺、李程は員外郞で、いづれも翰林學士より出身したものである。

【詩意】 孤臣たる予は、曩に都から放逐されて、はるばる陽山に左遷された。そこで、血淚を揮つて、一體、如何なる罪科が有つたのかと、色色追懷して見たが、何分にも、茫昧の極、自ら反省して、これぞと認識することも出來ず、ぼんやりして小舟に乘つて浩渺たる大海に浮び出たやうな心持、この先、どうなるか分からない。その頃、自分は、上書したことがあつたから、その爲めかとも思つたが、どうも、上疏は、その理由ではないらしい。しかし、上疏中、どこかに惡い處があつたかも知れぬから、ここに、一寸その經過を述べて見やう。その年、卽ち貞元十九年には、京畿地方が旱であつて、田畠は收穫が少い。そこで、天子も、人民が食物少くして困まつて居ることを憐憫して、租稅の半を免除されることに成つた。すると、役人どもは、國庫の收入が無くなつて、經費に差支へるといふ處から、折角の恩詔があつたにも拘はらず、卻つて、樣樣の名目を付けて、課稅を徵收した。富める者でさへ、かほどに急劇では、とても遣り切れないといひ、まして、貧乏な者は、その爲めに一家の骨肉が、ばらばらに成つて、流離するものが多かつた。傳聞するところに據れば、閭巷の間では、赤子を溝の中に棄てたものもあつたし、最愛の男の子を賣つて、一斗の米に易へやうとしても、臂で拂ひ退けて、誰も相手にせぬといふことであつた。その時、予は、街衢に出て見たが、飢孚羣をなして、その數は非常なものであるし、面のあたり、道傍に橫はつて居る餓者の屍骸を見て、佇立すること、稍や久しく、まことに厭やな思に堪へられず、家に歸つても、これを思ひ出すと、飯も食へず、たとへば

魚が喉に釣針を呑んで苦んで居る樣な安排であつた。折しも、予は、觀察御史に除せられ、これは、古しへの諫官で、主上に御失行があれば、憚なく上疏することが出來るといふ役目であつたから、早速、上表を認め、宮殿の御門に差し出したが、予は、君の爲めに忠を盡さうとしたので、決して、己が身を謀つたといふ譯ではなかつた。その上疏の主意たるや、上には、人民の疾苦を述べ、これをして其喉を干上げさせて餓死するやうなことが有つてはならぬといひ、下には、京畿地方は、國家の根本であるから、自然の道理として、ここには、特に優詔を下し賜はつて然るべきことであるといひ、何にしても、役人どもが宜しくない、是非とも、前度の詔旨の徹底するやうに、何とか方法を講じて然るべきことである、それに、冬の間に雪が降つて、豐年の前兆が明白であつて、もう僅かばかりの間であるから、せめては、蠶が濟み、麥が始めて熟する其時まで、成るべく寛大にして、しばらく御待ちに成つたら宜しいでせうといふので、これを反覆して奏上した。仄かに聞けば、天子は、この上疏を御覽になると、惻然として感動せられ、司空杜佑といふ當路の大臣も、これは、まことに然るべき善後策だといつて感嘆されたとのことで、やがて、愈よ實施されるだらうと思つて居た處が、どうしたものか、反對の結果を生じ、自分は、一朝にして、連州陽山の令に左遷されたので、その經過に就いては、まことに不思議で譯が分からない。自分と同役で、觀察御史の職に居たものどもは、いづれも一代の才俊で、中にも、柳宗元だの、劉禹錫だのといふ手合は、特別の仲善しであるが、彼等は、

韋執誼・王叔文などと結託して居るから、ひよつとすると、彼等から語言が洩れて、之を韋執誼等の小人輩に傳へ、そして、自分を無實の罪に落すことに成つたかも知れない。平生の交際から云へば、柳劉二人は、かかる事を爲さぬ筈であるが、斷じて然りや、然らざるや、どうも其邊の事は分からない。それは兎に角、愈よ左遷となると、朝廷の使が、我が家に臨んで發足を命令し、暫時も滯留することは出來ぬといつた。時しも、妹が病氣で牀褥に臥し、ここで分れて仕舞へば、再び相逢ふことが出來ず、やがて幽明を隔つるやうになるといふ位。そして、妹も、別れることは厭だ、是非連れて往つて呉れろといひ、そんな無謀な事が出來るものか、マア思ひ止まつて呉れろと、賴む樣に百ぺんも言つて聞かせても、なかなかウンと云つて頷いて呉れないので、まことに閉口して仕舞つた。それから、若い妻は、幼兒を抱いて、出でて拜し、恥も外聞も忘れ、慟哭して別を敍するといふ始末。自分は、强ひて心を取り直し、それを無理に振り切つて出かけ、わざと見むきもせず、やがて、行き行きて、連州に到著した。おもへば、朝には靑雲の士となつて居たのに、暮には白髮頭の囚人となり、榮枯は轉瞬の間に起つて、まことに、感慨に堪へられぬ。連州へは、なかなかの長途で、はじめに商山に差しかかると、折しも窮冬十二月、地面は氷雪に張りつめられ、乘つて居る車も、時時進行が六つかしくなる位。洞庭に至れば、春風吹き渡り、その爲に浪が起つて、わが乘れる孤舟は、怒濤の中に出沒して、あぶなく顚覆せむとした。次には、五嶺の絕險を越えて、愈よ任地に到著し、恐れ入つ

て、上官の御機嫌を伺つて、どうやら、初めて落ち付いた。わが身の酸寒は、今さら言ふにも及ばぬが、陽山著後、する事、爲す事につけて、兎角やましき思をして、安堵の出來ないのは、困まつたものである。陽山は、もとより僻遠の地で、途中耳目に觸れたものは、すべて從來經驗したものと丸で違つて居る上に、官吏といひ、人民といひ、狡猾なることは猿の如く、とても人とは思へぬ。元來馴化されずして獰惡であるから、腹立ち易く、根性が曲つて居て、一寸した事にも、言語を費して、人を馬鹿にした樣なことを言ふので、まことに辛抱が爲し切れない。それから、晝日中、軒端の下には、梟が雙鳴して、喧譁をして居るので、これも聞き辛いし、蛇は、兩頭の蛇に類し、又蠱と稱する毒蟲が、羣を爲して飛び游んで居る。氣候は、極めて不順で、窮冬でも時時暑くて、扇を使はねばならぬことがあるし、盛夏でも、俄に寒くて、皮衣を重ねて著ねばならぬことがある。颶風の起るときは、最も畏るべく、ひどい聲を立てて、丘陵を簸ひ動かし、雷霆は、これに和して、紫電閃閃、光怪を助け、その氣象の慘澹たるは、到底喩へやうも無い程である。その上に、風土病が劇烈で、これに罹れば、十家が十家とも、死に絶えて、一人も全治するものはない。聞けば、食物の中には、風土病の毒氣が置かれて居るといふので、食卓に向つても、安心して物も食へず、毎毎愁を懷くといふ有樣である。然る處、前日、順宗皇帝の卽位に際して、幸に恩赦に値つて、江陵に移ることになり、心中に喜ばしいと同時に、翻つて又憂を爲すことを免れない。何となれば、矢張、微官に束縛されれる身分であつて、故園に歸住して、耕耘に從事することも出來ないからである。この江陵は、非常に雄大な都會で、藩鎭の權力も亦た非常である處から、勢すさまじく往來して居るものは、皆戈矛を職とせる武人どもであつて、文官は、全く以て、頭が上らない。おまけに、自分は見すぼらしい裁判所書記であつて、その微官が、何に成らうぞ。自分は、平生儒學を究め、仁義を行はむとし、周公孔子の道を學んで居るものである。むかし、皐陶は、大理官、卽ち裁判官であつたから、禹・稷・契、三人の後が、皆帝王となりしにも拘はらず、その子孫の末末まで顯はれず、全く仲間はつれになつたといふことで、裁判官といふものが、どうせ、結果の善いものではない。まして、自分は法曹掾といふ下役であるから、平生犴獄に親み、罪囚に接近し、時には、拷問にかけて、棒で撲つたり敲いたりして、人をひどい目に遇はせるのが、職分であるから、仕方が無いとはいふものの、まことに心に忍びない。今しも、自分の黨派は、勢力を失つて居るから、かうなるのも、已むを得ぬことで、御役大切に務めて居ても、ひよつと、上から睨まれて、飛んでも無い禍に罹ることが無いとも限らぬ。湘江の水は、淸くして流れ速に、涼風は、日日修修として吹き至り、一刻も早く歸路に就いて、都に上りたいと思つて居るものの、その機會を得ぬ爲めに、依然ぐづぐづと、此に旅寢をして居る。昨日、京師から使が來たので、はじめて、順宗皇帝は、すでに崩御に成つて、今上は、冕旒を傳へて、新に卽位せられ、赫然として明詔を下し、かの共工・驩兜に比すべき前朝の幸臣、王叔文・韋執誼の輩は、赦すべ

からざる惡人の首領だといふので、これを誅戮し、泰顚・閎夭に比すべき賢臣どもは、これに代つて登庸せられ、峩冠を戴いて入朝し、天子に向つて、洪大なる謀を進められるといふことで、今まで、紊れて居た朝廷の風紀も、再び肅穆となり、立派な儀禮が備はつて、參朝者は、佩玉を鳴り響かして、しづしづと往來して居ることと思ふ。されば、貞觀の昔、太宗の至治を繼ぐことは、期して俟つべく、藩鎭の叛將どもも、兜を脫いで降伏し、ここに、始めて、中興の實を擧げることに成るであらう。わが三君は、侍從の淸職に推され、その卓犖の才は、古しへの枚乘・鄒陽をさへ傾ける位、その高尙なる議論は、造化に參し、天晴の文章は、天子の洪圖を耀かすに足るべく、ともに、心を併せて、神聖なる天子を輔佐し、政治も殘る隈なく行き亙つて、鵜の毛の末までも上るといふ位。かくて、天子が羣臣百僚を集めて、宴を催される時など、呦呦たる鹿が苹を食ふといふ鹿鳴の詩の通り、野に在るものにまでも、思ひ及ぼされさうなものであるが、元來、鹿鳴の遺風は、邈然として、千載の下、これを嗣ぐものもなく、從つて、三君は、むかし、夜具を共にした同宿の友を思ひ出すこともあるまいと思ふが如何。自分は、これまで、夙志遂げず、さまざまに苦勞をしたから、年の割に容貌も衰へて變りはてて仕舞ひ、これからの壽命も、かげろふと一般、到底、長生は出來まいと思ふ。今では、齒も缺け落ちて、はじめて舌の柔い方が宜しい、自分も、若い時は强硬に過ぎて居たといふことが、やつと分かり、又病氣の爲めに、鼻が段段つまつて仕舞ひ、薰蕕を混合して、これを辨別することが出來なくなつて仕舞つた。そこで、いつそのこと、官を罷めて去り、先祖の墓所へ往つて、死後、自分も其處に埋葬し、つまり故山に歸住して、再び朝廷には出まいと、かう思つたものの、官を罷めれば、收入が無くなつて、飯が食へなくなるので、それも、出來ない相談であつて、何時果すべしとも見えず、その中に歲月は愈よ逼つて往く。むかし、殷の成湯は、禽獸を憐んで、網の三面を去り、蜘蛛や稍く蟲の樣に貪つてはならぬと祝しつつ、網に罹つて居たものを放つて遣つたといふことであるが、自分も、小人の爲めに羅網に陷つたものであるから、あはれ、天子の慈仁に因つて、救ひ出されるやうに、一つ骨を折つて貰ひたい。それから、雷煥が、寶劍を掘り出したに因つて、斗牛の間を衝いて居た寃氣も忽ち消えたといふ位で、もし自分を都に呼び返して呉れたならば、これまでの寃苦も、殘りなく忘れることが出來るであらう。聖賢の道は、まことに貴ぶべく、又誰にしても、人に相談することが必要であるから、三君にしても、相談相手が必要であらうから、前箸を借りて之を籌らむといつた彼の張良の如き自分を薦用したらば善からうと思ふ。そこで、懇に三君に告げるが、わが此言を爲すは、みだりに明月の珠を暗中で人に投げ付けるとは違つて、十分采用される見込があればこそ申すので、その決して徒勞に終らぬことは、もとより確信して疑はざるところである。

【餘論】この詩は、四段より成り、起首、孤臣昔放逐より行行詣二連州一に至るまでは、貞元の末、陽山に左遷された事の徑路を敍し、朝爲二靑雲士一より對レ案輒懷レ愁に至るまでは、途中の苦と連州の風土とを

敍し、前日遇恩赦より旅泊岡夷猾に至るまでは、順宗即位、仍つて江陵に量移されたことを敍し、昨者京使至より、結末、明月非暗投に至るまでは、憲宗の即位と三學士の擢用されたことを傳聞し、仍つて、汲引の惠を垂れむことを囑望して、題意を全うしたのである。黃震は「江陵に赴くの詩、敍次明密、これ記事の體なり」といひ、宋琰は「天涯の人、天涯の情、天涯の語、これを讀んで惻惻たり」といひ、蔣之翹は「この詩、詳切懇惻、その饑荒離別を述ぶるの二段、亦た工部に彷彿たり、较や南山に勝ること數籌」といひ、乾隆御批には「これ陽山より江陵に量移して、王涯・李建・李程に寄す。意、率復に在るのみ。人に求むるあれば、貶屈に陷り易し、而して、齒缺鼻塞等の語、失志衰換を借りて、寫意懲創あるに似たり。然れども、只だ詼諧を以て之を出し、もとより知る、倔强猶ほ昔のごとくして、肯て腰骨を折却せざるを。意纏綿として詞悽惋、神味極めて小雅に似たり」とあり、朱竹垞は「これ却つて北征に近し、その筆力馳驟、亦た相上下せず。但だ、氣脈、猶ほ生硬を覺ゆるも、杜は渾然たり」といつた。それから、韓愈は、この詩を三學士に贈つたが、效果が有つたかどうか分からず、なほ江陵に居ること一年有餘、明年、卽ち元和元年の六月になつて、はじめて召し還されたが、その任せられたのは、國子博士の閒職であつた。そこで、前に揭げた元和聖德詩を上つて、憲宗の一顧を得むとしたのである。

暮行河堤上

暮に河堤の上を行く

暮行河堤上。四顧不見人。　暮に河堤の上を行けば、四顧人を見ず。

衰草(一)際(二)黃雲(三)。感歎愁我神。　衰草、黃雲に際し、感歎、我が神を愁へしむ。

夜歸孤舟臥。展轉(四)空及晨。　夜、歸つて孤舟に臥し、展轉して、空しく晨に及ぶ。

謀計竟何就。嗟嗟世與身。　謀計竟に何をか就す、嗟嗟、世と身と。

【字解】【一】衰草　秋に成つて枯れた草。【二】際　接す。【三】黃雲　夕の雲。【四】展轉　眠り得ずして體を轉ばすこと。

【題義】この詩は、格別深い意味もなく、別に定まる題もないから、詩中の第一句を取つて、その儘、題に塡したのである。以下この例が多いが、一一斷らないことにする。貞元十六年頃、韓愈は、董晉の幕下に居た處が、晉が死んだから、徐州に往つて張建封に依つたが、矢張、志を得ぬに因つて、間もなく之を辭し、去つて洛陽に往つたので、この詩は、多分その時の作だらうといふことである。すでに、遇るべき人を二人まで失つて、何の目的もなく、洛陽の邊を彷徨し、河堤の上に立つて景色を見ても、もとより面白いとは思はずして、かくの如き感慨を牽き起したのであらう。

【詩意】舟を黃河に浮べて洛陽に赴かむとし、日暮に舟を繫ぎ、上陸して河堤の上を散歩したが、四方を顧みても、人影もなく、時しも秋の末、枯れた草は郊原に一ぱいで、はるかに夕雲に連つて見え

る位。この淋しき景色に對し、感愴の極、自然わが心を動かした。夜になつて、元の孤舟に歸つて臥した處が、如何にしても眠られず、展轉反側して、やがて、夜あけに及んだ。自分は、胸中に謀計を蓄へて居るが、何時成就するとも分からず、世は我を容れず、身は世に容れられやうともせず、あはれ、如何したら善いかと思ひ惑ふばかりである。

夜歌

夜歌

靜夜有清光。閒堂仍獨息。　靜夜、清光あり、閒堂、仍ほ獨り息ふ。

念身幸無恨。志氣方自得。　身を念うて幸に恨なし、志氣方に自得す。

樂哉何所憂。所憂非我力。　樂いかな、何の憂ふる所ぞ、憂ふる所は、我が力に非ず。

【字解】【一】閒堂　靜かな書齋。【二】非我力　自分の力で出來ないこと。

【題義】これは前詩よりも後の事で、その後、韓愈は、長安に往つて國子四門博士に任せられ、もとより閒職ではあるが、生活も聊か樂になつた。その頃は德宗の末年で、韋執誼などが用ひられ、やがて、帝が崩御になると、順宗即位、王叔文の一黨が韋執誼と結託して、一時朝廷を攪亂するに至つた。韓愈の此詩を作つた頃は、まだ德宗の在位中で、さういふ兆候があつたといふ位の處であつたので、一身の落ち付きは嬉しいが、國家の事は、如何にも心配であるといふ意を逗露したのである。夜は陰晦で、小人跋扈の象だといふ說もあるが、さうまで深く見ず、唯だ夜に因つて興を起したものとすれば宜しい。

【詩意】靜夜、月が冴えて、清光四に溢れて居るとき、自分は、靜かな書齋に坐して、獨り心のどけく休息して居る。わが一身の事を思へば、聊かながら、俸給を頂戴して、食ふには困まらず、幸に恨もなく、志氣方に自得すべき時であつて、大に樂まねばならぬ。その樂むべき折から、何の憂があるか、まことに、不思議の樣であるが、おのれの力で如何ともし難いことを憂へて居るので、餘計な御世話であるが、これも、わが身の性分であるから、仕方がない。

【餘論】蔣之翹は「退之、憂ふるところなきを以て樂と爲し、正に憂ふるを得ざるを以て憂と爲すなり」といひ、朱竹垞は「これ刻苦の語、劈空創出、清空襯貼なく、却つて濃味あり」といつた。

重雲一首。李觀疾贈之。　重雲一首、李觀の疾めるに之を贈る

天行失其度。陰氣來干陽。　天行、その度を失ひ、陰氣來つて陽を干す。

重雲閉白日。炎燠成寒涼。　重雲、白日を閉ぢ、炎燠、寒涼を成す。

小人但咨怨、君子惟憂傷。　小人は但だ咨怨、君子は惟だ憂傷。

飲食爲減少、身體豈寧康。　飲食爲めに減少、身體豈に寧康ならむや。

此志誠足貴、懼（四）非職所當。　この志、誠に貴ぶに足るも、職の當る所に非ざるを懼る。

（五）藜羹尚如此、（六）肉食安可嘗。　藜羹尚ほ此の如し、肉食安んぞ嘗むべき。

窮冬百草死、幽桂乃芬芳。　窮冬、百草死し、幽桂、乃ち芬芳。

且況天地間、大運自有常。　且つ況んや、天地の間、大運自ら常あり。

勸君善飲食、鸞鳳本高翔。　君に勸む善く飲食せよ、鸞鳳本と高く翔ける。

【字解】【一】天行　天の運行。【二】其度　即ち常度。【三】干陽　陽を侵害する。【四】非職所當　李觀の職は、さういふ事に關係がない。【五】藜羹　あかざな羹にして食ふ、つまり貧士。【六】肉食　上位に居る人、左傳莊公十年に「肉食者は鄙、未だ遠く謀る能はず」とある。

【題義】これは、韓愈の友の李觀といふものが、病氣で居た時に賦して贈つたのである。唐書に「李觀、字は元賓、貞元中、進士に擧げられ、太子校書郎を授けられて卒す」とあり、墓誌に「觀二十四、進士に擧げられ、年二十九にして京師に卒す」とある。李觀は、唐代古文家の随一人として知られ、韓愈より一歳年長で、いはば先輩である處から、韓愈も、常に敬意を表して居た。新唐書の五行志に「貞元十年春、雨、閏四月に至る間、止むは一二日に過ぎず」とあつて、この詩を贈つたのは、即ち此年、韓愈が長安に居て、しきりに宰相に上書した時であつた。詩の大意は、天が雨を降らして、陰陽の調和を失つた處から、李觀は、それを心配して、病氣に成つたといふので、矢張、辭を設けて當時の宰相を諷したのである。

【詩意】天體の運行が、どうしたものか、今年は、その常度を失ひ、陰氣が勢を得て陽を侵害し、その爲に、重る雲は白日を掩ひ匿して、暑くなるべき時候が、却つて寒冷に成つて仕舞ひ、田穀實らず、やがて飢饉にも成らうとして居る。そこで、愚民どもは、天道樣聞こえませぬといつて、ひたすら愁ひ喞ち、君子は將に來らむとする世の騷擾を豫め憂傷して居る。君は憂傷の揚句に、病氣に成つたので、飲食も減少した上は、どうして、身體が寧康であるべきぞ。國家の爲に憂傷するといふ其志は、貴いけれども、もともと其職分でも無いのに、御苦勞にも心配した處で、まことに始まらぬ話である。君は、藜の羹に甘んじて居る貧士であるのに、殊勝にも、かほどまで心配されるといふ位だから、廟堂に立つ肉食の手合は、食事を全く廢止して然るべき位であるが、さうもならないのが浮世の常で、今更、仕方がない。冬になつて、百草は盡く枯死するが、幽桂のみは、獨り芬芳を放つて居る。されば、君子は憂傷の間に於ても、一面には、心を確に持つべき筈である。まして、天地の間には、自然の次序があるので、たまたま少し位狂ひを生じた處で、いづれは、元に還つて、やがて正し

く運行する筈のものである。君に於ても、十分に養生して、善く飲食するが善いので、今や明天子賢宰相の上に在るは、さながら鸞凰が空高く翔舞するが如く、その位に在らざるものは、無暗に心配するにも及ばない。

【餘論】結一句は反語めいて居るので、すでに、明天子・賢宰相あつて、陰陽を燮理する上は、天行正しかるべきに、その度を失したのは、何の故ぞといふ意が自然に出て來て、褻饜尙如此、肉食安可晉と互に照映し、當時の宰相が元來宜しくない、肉食者の平氣で居るのは、洵に怪しからぬ次第だといふ意味が、自然こもつて居る。朱竹垞は此篇を評して「稍や率易」といひ、何義門は「諸短章、音節極めて古、且つ多く比興を用ふ。直に謂はゆる黃初に突過するなり」といつた。それから、結一句を矢張李觀に係けて見る說もあるので「元來鸞凰は羣鳥に伍せず、高く千仞の上に翔けるもので、資性高超、鸞凰と相比すべき君は、善く飲食せよ」といふ樣に解せられぬでも無いが、さうすると、抑揚波瀾に乏しく、自然平板に流れる嫌があるから、ここでは、上の如く解して置いた。

江漢一首答孟郊

江漢一首、孟郊に答ふ

[一]江漢雖云廣。乘舟渡無艱。

江漢廣しと云ふと雖も、舟に乘じて渡るに艱なし。

[二]流沙信難行。馬足常往還。

流沙信に行き難きも、馬足常に往還。

凄風結衝波。狐裘能禦寒。

凄風、衝波を結べども、狐裘能く寒を禦ぐ。

終宵處幽室。華燭光爛[三]爛。

終宵、幽室に處り、華燭、光、爛爛たり。

苟能行忠信。可以居夷蠻[四]。

苟くも能く忠信を行はば、以て夷蠻に居るべし。

嗟余與夫子。此義每所敎。

嗟、余と夫子と、此義每に敎くするところ。

何爲復見贈。繾綣在不諼。

何すれぞ復た贈らる、繾綣として諼れざるに在り。

【字解】【一】江漢　揚子江と漢水、詩經に漢之廣矣とある。【二】流沙　書の禹貢に見えて、今の西海の居延澤であらうといふこと。沈括の說に「かつて、無定河を過ぐ。活沙、これを履めば、百步皆動き、鼠の幕上を行くが如し、或は陷るときは、人馬車駝、百數千を以て、子遺の者なし。或は謂ふ、これ卽ち流沙なり」とある。【三】爛爛　爛の字を平聲に叶へたので、楚辭の九章に曾枝剡棘圓果摶兮、青黃雜揉文章爛兮とあるのが、その先例である。【四】夷蠻　本來、夷は東方、蠻は南方に限つて居るのだが、合せて化外の地と見れば善い。

【題義】孟郊の略傳は、前に總說の中に揭げて置いた。韓愈と孟郊とは、交際が非常に親密であつて、集中に唱和の詩が頗る多く、そして、二人の聯句は、更に有名である。この詩は、集中では一番最初に見えた應酬であるが、これを編年に直すと、最後の唱和であつて、韓愈が此詩を孟郊に贈つた時分、孟郊は、既に病死して居たといふことで、ここらは、編次錯亂の結果である。孟郊の集を見ると、こ

の時、韓愈に寄せた詩に、何以定二交契一、贈二君高山石一、何以保二貞堅一、贈二君青松色一、といふ句があり、又、衆人尙二肥華一、志士多飢羸、願君保二此節一、天意當レ察レ徵、とある處から、自然これ等の意を承けたのである。

【詩意】江漢の水は、非常に廣いが、舟に乘つて渡れば、格別困難なこともない。流沙は、大きな沙漠で、なかなか行き惡いが、馬足で常に往還をして居る。川の中に互に衝き合ふ波を凍らす程の風に向つても、狐裘を著けて居れば、その寒さを防ぐことが出來る。又夜もすがら、眞暗な部屋に居て、物が見えなくて、困まつて居る時でも、爛爛たる華燭を點ずれば、何の心配もない。すべて、世の中の困難なことは、數かぎりもないが、それ相應、これに打ち勝つべき方法がある。されば、どんな野蠻な處に往つても、忠信を行つて居れば、決して身の危くなることはない。予と君とは、永い間、交際し、互に敦く斯道を行はうといつて誓つた位。しかも、君の贈詩を見ると、何以定二交契一とか、衆人尙二肥華一とかいつて、この旨を反覆して贈られたが、それは君の親切から、決して之を忘れてはならぬぞといつて、特に注意されたので、まことに感激に堪へぬ次第である。

【餘論】前八句は、苟能行二忠信一といふ二句の前提で、これを引き出す爲に、辭を費したが、極めて精彩がある。そして、二句一意で、前句と後句と互に補助して居るのは、蓋し韓愈の創意に係るものであらう。朱竹垞は「四排一律、すべて是れ處し難きも、尙ほ意を爲して調法すべし、左太冲の四賢豈不レ偉に本づいて來る」といひ、何義門は「發端、下を疊んで四喩、繾綣の致を極む、詩、亦た黃初に突起す」といつて居る。

長安交游者一首、贈二孟郊一

長安の交游の者一首、孟郊に贈る

長安交游者。貧富各有レ徒。
長安交游の者、貧富、各〻徒あり。

親朋相遇時。亦各有二以娯一。
親朋相遇ふの時、亦た各〻以て娯むあり。

陋室有二文史一。高門有二笙竽一。
陋室に文史あり、高門に笙竽あり。

何能辨二榮悴一。且欲レ分二賢愚一。
何ぞ能く榮悴を辨ぜむ、且つ賢愚を分たむと欲す。

【題義】これは、初めて孟郊に遇つた時の詩で、無論、前首に先つて居る。孟郊の集中に長安羈旅行といふのがあつて、その篇中に、十日一理レ髮、每レ梳飛二旅塵一、三旬九過飲、每レ食惟舊貧、失レ名誰肯訪、得意爭相親、といひ、又長安道に、家家朱門開、得見不レ可レ乂、高閣何人家、笙簧正喧吸、といひ、如何にも天は不公平極まるといつて居る處から、韓愈は、乃ち此詩を贈つたのである。

【詩意】長安に居て交游して居るものを見ると、貧には貧の連れがあり、富には富の仲間がある。そして、互に仲の善い同士が相遇ふと、貧富ともに、それ相應に相娯むべき方法がある。貧者の樂とい

へば、陋室に居て文史を披閱することであるし、富者の樂といへば、高門の家で笙竽を合奏することである。この兩者に就いて、榮悴各〻別あることなどは、どうでも善い。ただ賢愚を分つて、交游せねばならぬので、何も必ずしも貧卽賢、富卽愚といふ譯ではないのである。

【餘論】これは、孟郊が過激の辭を弄して、富者を攻擊した故に、これを宥め諭す爲にしたので、朱竹垞は「末句、太だ說明、反つて味の短きを覺ゆ」といつたが、尤もと思はれる節もある。

岐山下一首

岐山の下一首

誰謂我有耳。不聞鳳皇鳴。　誰か謂ふ、我に耳ありと、鳳皇の鳴くを聞かず。
(一)竭來岐山下。日暮邊鴻驚。　竭來、岐山の下、日暮れて邊鴻驚く。
(二)丹穴五色羽。其名爲鳳皇。　丹穴五色の羽、その名を鳳皇と爲す。
昔周有盛德。此鳥鳴(三)高岡。　むかし、周、盛德あり、この鳥、高岡に鳴く。
和聲隨祥風。(四)宵窕相飄揚。　和聲、祥風に隨ひ、宵窕として相飄揚す。
聞者亦何事。但知時俗康。　聞くもの、亦た何事ぞ、但だ時俗の康きを知る。
自從(五)公旦死。千載閟其光。　公旦の死せしより、千載その光を閟づ。
吾君亦(六)勤理。(七)遲爾一來翔。　吾が君、亦た理を勤む、爾が一たび來り翔るを遲つ。

【字解】【一】竭來　もと楚辭に見えて、王逸の註に「竭は去るなり」とあるが、後世は、聊か意味が違ひ、顏延之の秋胡詩に竭來空復辭などが、その例で「この頃」と解し、又、極めて輕く「ここに」と見ても善い。【二】丹穴五色羽　山海經に「丹穴の山に鳥あり、狀、鶴の如し、五色にして文あり、名を鳳といふ、この鳥や、見はるれば、天下大に安寧」とある。【三】鳴高岡　詩經の卷阿に鳳凰鳴矣、于彼高岡とある。【四】宵窕　宵は窈に同じ、ここでは空を翔ける形容。【五】公旦　周公旦。【六】勤理　理は治、卽ち政治、前に見ゆ。【七】遲　易に遲歸有時とあり、漢書に「席を側て之を遲つ」とある、卽ち待つ。

【題義】岐山は、長安の西北鳳翔府の附近で、その鳳翔府は、むかし周の文王が起つた處である。韓愈が岐山の麓を經過した時、恰も兵亂の後、人心なほ靜まらず、兎角、不穩の狀態であつたから、やがて、鳳凰が出て來て、君德を謳歌するやうな時節になりたいといふ意を述べたのである。この詩は、本集に岐山下二首とあつて、日暮邊鴻驚より以上、卽ち破題の四句を以て第一首としてある。蔣註には「むかし、灌畦暇語の一書あり、謂ふ、子齊、はじめて擧に應ず、韓公、これを賞して、爲に丹穴五色羽を作る。子齊、姓は程、字は昔範、かつて中蕃三卷を著す。因語錄に見えたり。すなはち、下の詩、當に別篇となすべきに似たり、第だ前詩題するに岐山下を以てす。これ必ず鳳翔に遊ぶ日、作れるならむ。然れども、四語亦た篇を成さず。この詩、これを卷末に載す、疑ふらくは、脫誤あら

む」とある。これで見ると、丹穴五色羽以下が、まとまつた一首で、前の四句は他篇の殘缺といふことになる。しかし、顧嗣立は「この詩、必ずしも二首と作さず、庚陽の二韻、古しへ原と通叶するなり」といつた通り、無論一首であつて、灌畦暇語とやらいふ書に丹穴五色羽の句を擧げたのも、意味の上から、この句を以て全篇に題したものとすれば、何等の差支もない。されば、目錄に二首とあるのは、別に一首あつて、それが亡びたのであらうといふことである。

【詩意】人人苟くも耳あらば、鳳凰の鳴く聲を能く聞く程に成りたいものである。自分は、まだ鳳凰の鳴くのを聞かないから、耳が無いのも同然である。この頃、岐山の麓に來かかり、ここは、むかし鳳凰が鳴いた處だといふから、是非その聲を聞きたいと思つて居たが、鳳凰どころか、日暮になると、邊地の雁が兵器の影などに驚いて、飛鳴するばかりであつた。元來、鳳凰は、丹穴といふ山に生まれ、五色の羽を備へ、聖主が位に在れば見はれるといふので、むかし、周の文王は盛德ありしが故に、この鳥は、岐山の高岡に出て來て鳴いたといふことである。その時は太平の世であつたから、和らいだ聲は、目出たき風に隨つて、高らかに聞こえ、そして、鳳凰は、青天の上に翔つて、飄揚と舞ひ上つて居たのである。鳳凰の聲を聞かば、その時が太平の世であるといふ證據にもなる處から、人人は、爭つて之を聞かうとして居るので、自分も、矢張、その志であるが、殘念ながら、とうとう之を聞かなかつた。鳳凰は、周の世に出たといふが、それは文武兩王の御世に限られて居るので、攝政にして大聖たりし周公旦が歿して仕舞つてからは、千載の久しき、その光を閟して、今に至るまで出て來ないから、その聲を聞くことの出來ないのも、まことに、仕方の無いことである。しかし、今の元和の聖天子は、隨分、政治を勤めて能く天下を治められて居るから、鳳凰も出て來ねばならないので、汝が一たび現はれて、ここに來り翔らむことを翹望して止まぬ次第である。

【餘論】結末二句は、憲宗が天晴の明君であるといふので、至治の世に復さむことを囑望したのである。岐山を過ぎて鳳凰を思ひ、鳳凰より至治に及び、すべてを當時の事に引きつけた處は、流石に韓愈の手筆である。朱竹垞は「突起して奇なり」といひ「意深からず、却つて古に近し」といつた。

309
65

終

續國譯漢文大成

文學部　二十六

309
65

始

吉田鋭郎氏 寄贈本

續國譯漢文大成

文學部 第二十六册（第七帙の二）

韓退之詩集 上の二

309
65

韓昌黎集巻二

古詩

北極一首。贈李觀

北極一首、李觀に贈る

（一）北極有羇羽。南溟有沈鱗。
北極に羇羽あり、南溟に沈鱗あり。

川源浩浩隔。影響兩無因。
川源浩浩として隔て、影響兩つながら因なし。

風雲一朝會。變化成一身。
風雲、一朝に會すれば、變化して一身を成す。

誰言（二）道里遠。感激疾如神。
誰か言ふ、道里遠しと、感激すれば疾きこと神の如し。

我年二十五。求友昧（三）其人。
我年二十五、友を求めて其人に昧し。

哀歌（四）西京市。乃與夫子親。
西京の市に哀歌して、乃ち夫子と親む。

所尚苟同趨。賢愚豈異倫。
尚ぶ所は、苟くも趨を同じうす、賢愚豈に倫を異にせむや。

方爲金石姿。萬世無緇（五）磷。
方に金石の姿と爲つて、萬世緇磷なからむ。

無爲兒女態。憔悴悲賤貧。
兒女の態を爲し、憔悴して賤貧を悲む無かれ。

【字解】【一】北極有羈羽、南溟有沈鱗　列子の湯問には「終髮の北に溟海といふ者あり、天池なり、魚あり、其の廣さ數千里、その長さ稱ふ、その名を鯤となす。鳥あり、その名を鵬と爲す、翼、垂天の雲の若し、その體稱ふ、世、豈に此物あるを知らむや。大禹行いて之を見、伯益知つて之に名づけ、夷堅聞いて之を志るす」とあり、莊子の逍遙遊には「北冥に魚あり、その名を鯤と爲す、鯤の大、その幾千里なるを知らざるなり。化して鳥となる、その名を鵬と爲す、鵬の背、その幾千里なるを知らざるなり。怒つて飛ぶ、その翼、垂天の雲の若し。この鳥や、海運すれば、將に南冥に徙らむとす。南冥といふ者は天池なり」とある。列子では、鯤と鵬とが二つの物で、關係もないものの樣にしてあるし、莊子では、鯤が變じて鵬と成つたといつて居る。列子の書は、雜駁なもので、戰國より漢に亙つて、數人の手に成つたものだと吾輩は考へて居るが、莊子の内篇は、純然たる其手筆で、これは、或は列子の方が莊子を取つたものかと思はれる。この詩に見えた羈羽は鵬、沈鱗は鯤で、それが合體すれば、一身となるといふので、鯤鵬の舊を翻して、又新意を出したのである。羈羽は、獨りぼつちの鳥。沈鱗は、水底に沈んで居る魚。【二】道里遠　陶淵明の詩に「不怨道里長」とある。【三】昧其人　その人に値はぬといふ義。【四】西京　即ち長安、東なる洛陽に對して言ふ。【五】緇磷　論語に「磨して磷せず、涅して緇せず」とあつて、緇は黑くなる、磷は汙れる。

【題義】李觀は、前に重雲の詩の項に見えて居た。總說中に略述した通り、韓愈は、貞元八年に進士に及第して、その時、年は二十五。この詩にも我年二十五とあるから、即ち、其年の作である。李觀は、韓愈と同年に及第し、韓愈が第一、それから歐陽詹・李觀といふ順で、この年の進士には、名家が多かつたから、一に龍虎榜と稱されたといふ位。この詩は、當時、試驗に應ずる爲に、皆長安に上京し、そこで、韓愈は李觀と初めて相知つたので、その準備の爲に勉强して居る間に贈答をしたものらしく、蓋し、李觀に贈つた詩の中の最初の者であらう。

【詩意】北の果に獨りぼつちの鳥が居て、尋常の物とは違つて居るが、どこへ往つても容れられぬから仕方がない。南の大海には、萬仞の底に沈んだ大魚が居て、これも身體が大きくて、誰にも相手にされない。この二つの物の間には、大陸の川原が浩浩として橫はり、自然その隔てを爲して居るから、兩者互に影も見えず、響も聞こえず、風馬牛、相及ばざるが如く、從來何等の交涉もなかつた。然るに、天上の風雲が一たび動いて相會すれば、羈羽と沈鱗とは、忽ち變化して、一身に成つて仕舞ふ。かうなると、道路の遠く隔つて居たことなどは、何でもなく、唯だ兩者の心が感激すれば、その變化の速なることは、全く神の如くである。われと李觀とは、丁度これに比すべきものであつて、顧みれば、われは年二十五に成る今日まで、同心の友を探がしても、一向然るべき人に出合はず、この度、長安の都に出て來てからも、孤獨なる儘、哀歌を唱へて居た處が、ふとした事で、君と相知るやうに成つた。われと李觀と、志を同じうするは、まことに貴ぶべきことで、われの今に愚なると李觀の生來天稟賢なるとは、比べ物にならぬが、そんな事には頓著せず、たとへば、羈羽と沈鱗と、變化して一身と成つた樣な想がした。されば、今後は、君と共に金石の姿となつて、いつまでも白くして堅く、萬世を經るとも、黑ずんだり、汙れたりすることなく、徒に兒女の態をなしつつ、形容憔悴したといつて、貧賤を悲むやうな事があつてはならぬ。

此日足可惜一首贈張籍　此日惜むべきに足る一首、張籍に贈る

此日足可惜。此酒不足嘗。　この日、惜むべきに足れり、この酒、嘗むるに足らず。
捨酒去相語。共分(一)一日光。　酒を捨てて去つて相語り、共に一日の光を分つ。
念昔未知子。孟君(二)自南方。　念ふ昔、未だ子を知らず、孟君、南方よりす。
自矜有所得。言子有文章。　自ら得るところあるを矜つて、子が文章あることを言ふ。
我名屬(三)相府。欲往不得行。　我が名相府に屬す、往かむと欲するも行くことを得ず。
思之不可見。百端在中腸。　これを思へども、見るべからず、百端、中腸に在り。
維(四)時月(五)魄死。冬(六)日朝在房。　維れ時れ月魄死し、冬日朝に房に在り。
驅馳公事退。聞子適及城。　驅馳、公事より退き、子が適ま城に及ぶを聞く。
命車載之至。引坐於中堂。　車を命じて、之を載せて至り、引いて中堂に坐せしむ。
開懷聽其說。往往副所望。　懷を開いて、其說を聽けば、往往、望むところに副ふ。
孔丘歿已遠。仁義路久荒。　孔丘歿して已に遠く、仁義、路久しく荒めり。
紛紛百家起。詭(七)怪相披(八)猖。　紛紛として百家起り、詭怪、相披猖す。

長老守所聞。後生習爲常。　長老は聞くところを守り、後生は習うて常と爲す。
少知誠難得。純粹古已亡。　少知も誠に得難し、純粹は古しへも已に亡し。
譬彼植園木。有根易爲長。　かの園に植うるの木に譬ふ、根あれば長きを爲し易し。
留之不遣去。館(九)置城西旁。　これを留めて去らしめず、館して城の西旁に置く。
歲時未云幾。浩浩觀湖江。　歲時、未だ云に幾ならず、浩浩として湖江を觀る。
衆夫指之笑。謂我知不明。　衆夫これを指して笑ひ、我を知明かならずと謂ふ。
兒童畏雷電。魚鼈驚夜(一〇)光。　兒童は雷電を畏れ、魚鼈は夜光に驚く。
州(一一)家舉進士。選(一二)試繆所當。　州家、進士に擧げ、選試、當るところを繆る。
馳辭對我策。章句何煒煌。　辭を馳せて我が策に對し、章句、何ぞ煒煌たる。
相(一三)公朝服立。工(一四)席歌鹿鳴。　相公、朝服して立ち、工席に鹿鳴を歌ふ。
禮終樂亦闋(一五)。相拜送於庭。　禮終りて、樂も亦た闋り、相拜して庭に送る。
之(一六)子去須臾。赫赫流盛名。　之子去ること須臾、赫赫として盛名を流す。
竊喜復竊歎。諒(一七)知有所成。　竊に喜んで復た竊に歎じ、諒に成すところあるを知る。

人事安可恆。奄(一八)忽令我傷。　人事安んぞ恆なるべき、奄忽我をして傷ましむ。
聞(一九)子高第日。正從相公喪。　子が高第を聞くの日、正に相公の喪に從ふ。
哀情逢吉語。惝(二〇)怳難(二一)爲雙。　哀情、吉語に逢ひ、惝怳として雙を爲し難し。
暮宿偃(二二)師西。徒展轉在牀。　暮に偃師の西に宿し、徒に展轉して牀に在り。
夜聞汴(二三)州亂。遶壁行徬徨。　夜、汴州の亂を聞き、壁を遶つて、行いて徬徨す。
我時留妻子。倉卒不及將(二四)。　我、時に妻子を留め、倉卒、將ゆるに及ばず。
相見不復期。零落甘(二五)所丁。　相見ること、復た期せず、零落して丁るところに甘んず。
驕兒未絕乳。念之不能忘。　驕兒、未だ乳を絶たず、これを念うて忘るる能はず。
忽如在我所。耳若聞啼聲。　忽ち我が所に在るが如く、耳に啼聲を聞くが若し。
中途安得返。一日不(二六)可更。　中途にして安んぞ返ることを得む、一日も更ふべからず。
俄有東來說。我家免罹殃。　俄に東來の說あり、我が家、殃に罹ることを免ると。
乘(二七)船下汴水。東去趨彭城。　船に乘じて汴水を下り、東に去つて彭城に趨く。
從喪朝(二八)至洛。還走不及停。　喪に從つて朝は洛に至る、還り走つて停まるに及ばず。

假道經盟(二九)津。出入行澗(三〇)岡。　道を假りて、盟津を經、出入して澗岡を行く。
日西入軍門。羸馬顚且僵。　日、西にして、軍門に入れば、羸馬顚して且つ僵る。
主(三一)人願少留。延入陳壺觴。　主人少らく留まらむことを願ひ、延き入れて壺觴を陳ぬ。
卑賤不敢辭。忽忽心如狂。　卑賤敢て辭せず、忽忽として心狂するが如し。
飲食豈知味。絲竹徒轟轟。　飲食、豈に味を知らむや、絲竹、徒に轟轟たり。
平明脫身去。決若驚鳧翔。　平明、身を脫して去り、決として、驚鳧の翔けるが若し。
黃昏次(三二)(三三)汜水。欲過無舟航。　黃昏、汜水に次し、過ぎむと欲するも舟航なし。
號呼久乃至。夜濟十(三四)里黃。　號呼、久しうして乃ち至り、夜、十里の黃を濟る。
中流上灘(三五)潭。沙水不可詳。　中流より灘潭に上り、沙水、詳にすべからず。
驚波暗合沓。星宿爭翻芒。　驚波、暗くして合沓たり。星宿爭つて芒を翻す。
轅馬蹢(三六)躅鳴。左右泣僕童。　轅馬、蹢躅して鳴き、左右、僕童を泣かしむ。
甲午憩時(三七)門。臨泉窺鬪龍。　甲午、時門に憩ひ、泉に臨みて、鬪龍を窺ふ。
東南出陳(三八)許。陂(三九)澤平茫茫。　東南、陳許を出づれば、陂澤、平かにして茫茫たり。

道邊草木花。紅紫相低昂。
百里不逢人。角角雄雉鳴。
行行二月暮。乃及徐(二〇)南疆。
下馬步隄岸。上船拜吾(二一)兄。
誰云經艱難。百口無夭(二二)殤。
僕(二三)射南陽公。宅我睢(二四)水陽。
篋中有餘衣。盎中有餘糧。
閉門讀書史。窻戸忽已涼。
日念子來遊。子豈知我情。
別離未爲久。辛苦多所經。
對食每不飽。共言無倦聽。
連延三十日。晨坐達五更。
我友二三子。宦遊在西京。

道邊、草木花さき、紅紫相低昂。
百里、人に逢はず、角角として雄雉鳴く。
行行二月の暮、乃ち徐の南疆に及ぶ。
馬を下つて隄岸を歩し、船に上つて吾が兄を拜す。
誰か云ふ、艱難を經て、百口、夭殤なしと。
僕射の南陽公、我を睢水の陽に宅せしむ。
篋中に餘衣あり、盎中に餘糧あり。
門を閉ぢて書史を讀む、窻戸忽ち已に涼し。
日に子が來り遊ばむことを念ふ、子、豈に我が情を知らむや。
別離、未だ久しと爲さず、辛苦、經るところ多し。
食に對して毎に飽かず、共に言うて、聽に倦むなし。
連延三十日、晨より坐して五更に達す。
我が友二三子、宦遊して西京に在り。

東(二五)野窺禹穴。李(二六)翺觀濤江。
蕭條千萬里。會合安可逢。
淮之水舒舒。楚(二七)山直叢叢。
子又捨我去。我懷焉所窮。
男兒不再壯。百歲如(二八)風狂。
高爵尚可求。無爲守一鄕。

東野は禹穴を窺ひ、李翺は濤江を觀る。
蕭條たり千萬里、會合、安んぞ逢ふべき。
淮の水舒舒たり、楚山直に叢叢たり。
子又我を捨てて去る、我が懷、焉ぞ窮まるところ。
男兒再び壯ならず、百歲風の狂するが如し。
高爵、尚ほ求むべし、一鄕を守ることを爲す無かれ。

【字解】【一】分一日光　一日の光陰を共に分つ。【二】孟君　卽ち孟郊。【三】風相府　汴州董晉の幕下に居たことを指す。【四】纔時　時はこれと訓すべし、詩經に多く見ゆ。【五】月魄死　陰曆の朔日頃をいふ。【六】冬日朝在房　房は二十八宿の一、太陽が房といふ星座に來る。月令に「孟冬の月、日、房に在り」と見ゆ。上の句と井せて、十月の一、二日頃といふこと。【七】詭怪　道理に合はぬ奇怪な事ども。【八】披猖　昌披の如し、楚辭の註に「衣を被つて帶せざる貌」とある。覆ひかぶせる。【九】館　家を借りて宛がふ。【一〇】夜光　珠の名。【一一】州家　その州の主人公、卽ち董晉の役所。【一二】選試緣所當　汴州に於て進士諫選の試驗を行ふに就いて、自分が誤つて試驗官に成つたといふこと。この時、反舌無聲の詩を試みた處が、張籍は見事に及第した。【一三】相公　卽ち董晉。【一四】工席　工は樂工。【一五】閑　絲る。【一六】之子　詩經に之子于歸とあつて、對者を指して云ふ。【一七】諒　まことに。【一八】奄忽　倏忽、驀忽等に同じ。【一九】閣子高第日　張籍は、その後、上京して、貞元十五年、高郢が知擧たりしときに登第した。この年二月、董晉が病死したので、韓愈は、その喪を護して、洛陽に行くことになつたので、その詩は、前の幾戰に見えて居る。【二〇】惝怳　楚辭の遠遊に惝惝怳而乖懷とあつて、亂れる貌。【二一】歸爲雙　喜んで善いか悲んで善いか分らぬ

といふ意。【三】偃師　縣名、今洛州に在る。【三】汴州亂　韓愈の本傳に「愈、喪に從つて四日ならざるに汴軍亂る」とあつて、この年二月乙酉。宣武軍亂れて、留後の陸長源が殺されたことをいふ。【三】將　率ゆる。【三】甘所丁　西京賦に惟愛ㇾ所ㇾ丁とあり、留後に「丁は當なり」とあつて、成り行きの儘に甘んずる。【云】不可更　旅程を一日たりとも變更することは出來ない。【二七】乘船下汴水　蔣註に「公の妻子、先づ徐州に往く。唐地理志、徐州彭城郡今南直隸に屬す」とある。【云】朝至洛　蔣註に「或は朝の字なし、洛の下に陽の字あり。今按ずるに、朝至洛は、蓋し洛涔の語を用ふ。又下文日西入₂軍門₁といへば、これ當に朝至洛に作るべきこと明かなり」とある。【二九】星津　即ち孟津。【三〇】澗岡　溪山の間。【三一】主人　河陽節度使李鈍を指す、註に李元とあるのは誤である。【三二】夾　やどる。【三三】汜水　河南成皐縣に在る。【三四】十里黄　汜水は此で黄河と落ち合ふから、川幅が十里もある。【三五】瀍澤　河中の淺瀬をいふ、方崧卿の說に「郭璞曰く、江東の人、水中の沙堆を呼んで澤と爲すと、澤は即ち灘なり」とある。【三六】跳踉　跳り上がる。【三七】時門　地名、左傳昭公十九年に「鄭大水、龍、時門の外の洧淵に鬪ふ」とある。【三八】陳許　二地の名、今ともに河南開封府に屬す。【三九】陂澤　陂は陂塘、澤は卑濕の地。【四〇】徐南疆　徐州の南界。【四一】吾兄　蔣註に「公に三兄あり、皆早世す。集中に見ゆるものは、雲卿の子兪、紳卿の子岌、皆公の從兄、或は曰く、吾兄は張籍を謂ふと、非なり」とある。【四二】天竊　天は幼年で死ぬこと、竊は不虞の禍に罹つて横死すること。【四三】僕射南陽公　僕射は官名、南陽公は爵名、これは徐泗濠節度使張建封を指す。二月の末、韓愈は、徐州に著して、張建封を訪ふと、取り敢へず、節度推官に任命して呉れた。【四四】睢水陽　睢水は河の名。無論、徐州に在る。陽は日を受ける方で、山ならば南麓、川ならば北岸。韓愈の孟東野に與ふる書に「主人余と故あり、余を符離睢水の上に居らしむ」とある。【四五】東野窺禹穴　東野は孟郊の字、蔣註に「禹穴は本と蜀に在り、會稽に作るものは是に非ず。史記の自敍に、會稽に上るといふは、吳越を總ぶるなり。禹穴を探るとは、巴蜀を言ふなり。後人解せず、遂に會稽禹廟の傍の一小坎を以て之に當つ、故に退之亦た考に失し、遂に孟郊が越に遊ぶを以て、禹穴を窺ふといふ、これ亦た誤を以て誤を承くるなり」といつた。但し、韓愈は、時俗に從つて襲用したので、さう六つかしくいふ必要はない。【四六】李翺觀濤江　浙江の觀濤は、むかしから有名で、この濤江は、これを指したのであらう。李翺の論性の末に「南、濤江を觀て越に入る、而して、吳郡の陸傪存せり、これと言ふ。傪曰く、尼父の心なり」とあるので、多分この時だらうといふことである。【四七】楚山直　直は矗に同じ、徐は故の楚地にして、南、江淮に通ずるが故に、楚山といつたのである。【四八】如風狂　疾風の一過し去る樣だといふ意。

【題意】　張籍の略傳は、前に總說の中に述べて置いたから、參照して貰ひたい。この詩は、何義門が「貞元十五年、公、時に徐に在り、籍、公に謁するを得たり、未だ幾ならずして、辭して去る、故に是詩を作つて之を送る」といつた通り、徐州に於て、張籍を送つたので、詩中には、最初、張籍と交を結ぶに至りしことより始め、自分が此地の節度使張建封に身を寄せて居た處へ張籍が尋ねて來て、日夕會合をして居たが、今次何かの都合で、南、楚地に向つて出立することに成つた、まことに名殘惜しいといふので、大半は、自己の經歷を述べたものである。この詩は、杜甫を學び、北征・彭衙行の面影を傳へて居る。但し、押韻に至りては、一韻到底で、大體は七陽であるが、一東・二冬・三江・八庚・九靑を通押し、その上、複韻、即ち同じ韻を二度使ふこともあつて、前人の議論も、なかなか八釜しい。しかし、韓愈その人の見識で、古體の詩を作るには、近體と同じき窮屈な韻法に據る必要はないといふので、詩經、楚辭に溯つて、以上六部の文字は殆んど一韻と見ても差支がないといふ考から、之を雜用したのである。要するに、韓愈にして始めて可なりといふべく、後人が、こんな眞似をした處で、誰も是認して呉れる筈はない。

【詩意】この日は、實に惜むに足るべく、君と一處に居るのも今日限りである。この酒は、嘗むるに足らず、それよりも、一言でも多く話をして、胸のすく樣にしたい。そこで、酒を棄てて、君と共に語り明かし、この一日の光陰を共に長閑に過ごさうではないか。おもへば昔、まだ君と相知らざりし時、孟東野は、南方を旅行した歸りだといつて立ち寄り、頗る誇り顏に、自得するところあるものの如く、今次、旅中に張籍といふ者に遇つたが、その文章は、素張らしいものだといつたので、これが卽ち君の事を傳聞した其始まりであつた。その時、自分は、董晉の幕下に屬して、事務を執つて居たから、わざわざ出かけて、遇ひに行くことも出來ず、その人を思へども、相見るに由なく、千千に心に思ひ亂れて居たところが、その年の十月一二日頃、例の如く、終日公事に奔走して後、退廳すると、君が適まこの汴州に來たとのことであつた。そこで、大に喜んで、車を迎ひに遣り、君を載せて我が寓に來らしめ、中堂に案內して對坐し、自分の懷抱を開いて、君の說くところを拜聽したところが、果然、豫期せしところに協ひ、愈よ以て君の偉いことが分かつた。顧みれば、孔子が歿せられしより、ここに幾千百年、仁義の道も、いつしか荒蕪に歸して、往來も出來ぬ位、その後、諸子百家が紛然として起り、正理に合はぬ奇詭怪異の說を唱へて、互に他を幷さむと企て、儒敎の衰微は、愈よ以て甚しい。長老は、唯だ聞くところを固守して、獨善を以て能事となし、聖人の道を復興しやうともなく、後生は、その說を習うて常となし、儒敎は、退嬰主義の者だといふ位に思つて居る。

されば、少しく仁義の道を知つて居る者さへ、なかなか求め難く、まして、純粹な斯道を研究して、治國平天下の大業を成さうといふ者は、むかしから絕無で、君が常人と異なるところは、主として、此點に在る。たとへば、彼の園中に植ゑた木のやうなもので、根さへあれば、それから、枝葉の繁茂するは、造作もない。君は、既に根柢を得て居るから、これから、勉强次第で、どんな、偉い者にも成れる。そこで、自分は、及ばずながら、君をして大成せしめむと欲し、これを留めて去らしめず、城西の傍に小さな家を借りて、そこに君を置いてやり、日夕往來して、一處に學藝を研究した。かくて、歲時未だ幾ならざるに、君の文章は、益す進んで、浩浩として湖江の如く、明かに其大を增して來た。然るに、世人には、さういふ事が分からぬから、あんな貧乏書生が、何に成らうぞ、韓愈も、入らぬ世話をして居る馬鹿な奴だといつて、君を指しつつ、我が人を見ることの明かならざるを嘲笑して居た。元來、兒童は雷電を畏れ、魚鼈は夜光の珠に驚くが、世人は之と同じく、ほんの目さきだけの事で、格別深い考もないから、君の人物を知らないのも、まことに無理はない。その內に、汴州に於て、進士豫選の試驗を行ふことになり、自分は、謬つて試驗委員長に成つたが、その時、わが出した試問に對して、君は辭を馳せて答案を書かれ、その文は、章句の末末まで、光彩陸離として輝くばかり、無論、好成績で及第したから、愈よ紹介の文書を移して長安に送り出すことに成り、その送別の爲に、大宴會が催され、節度使の董晉は、朝服を著けて臨場し、樂工は、その席に於て、鹿鳴の古

詩を歌ひ、まことに、名譽至極な事であつた。かくて、饗宴の禮も濟み、樂も亦た終らむとする時に、董晉は、親ら相拜して之を公庭に送り、將來の雄飛を祝された。未だ幾ならずして、君は上京し、赫赫として盛名を馳せ、都でも大分評判が善いといふことを傳聞し、われは心竊に喜び、又私に感歎し、君が遠からず成功することは言ふまでもない事で、自分も世話甲斐があると思つた。しかし、人事は固より常なく、禍福相倚り、忽ちにして、我をして傷心せしめるやうな出來事が起つた。それは、外でもないが、君が愈よ進士の試驗に應じて登第したといふ報告を得た時、此方に於ては、主人と賴んで居た董晉が俄に病死したので、一方には哀情を催し、一方には吉語を耳にし、心が打亂れて、喜んで善いか、悲んで善いか、自分ながら全く分からぬやうな始末。それから、自分は、董晉の喪を護して、その故鄕なる洛陽に送り届けることになり、日暮に黃河の西岸なる偃師縣に投宿し、展轉反側、牀の上に困んで居ると、その夜、今まで居た汴州に於て大騷動が起つたといふことを聞き、遑てて身を起し、壁を繞つて、うろうろしたが、何とも仕方がない。自分は妻子を汴州に留めて置いて、倉卒の際、これを引き具して其地を立ち去るにも及ばなかつたので、かう成つた上は、再び彼等と相見ることが出來ないかも知れぬ。おのが一身は、どうせ不運に生まれ付いたのだから、成り行きの儘に甘んじて居るが、唯だ一つ心殘りになるのは幼女で、まだ乳を絕たぬ位、これを念うて忘れることも出來ず、忽ちにして、自分の傍に來て居る樣に思ひ、恍惚として、その泣聲を聞くやうな氣がした。そこで、一遍立ち歸つて、その模樣を詳しく見屆けたいが、自分は、現に主人の靈柩を護して行く途中だから、引き返すことも出來ず、おまけに、日程も定まつて居るので、一日たりとも、變更する譯には行かない。すると、幸にも、東方から便があつて、わが一家は、幸に殃に罹ることを免れたといふので、やつと、胸を撫で下して安心した。兎角する內に、妻子は難を免れて、後から追ひ付いたから、自分は、洛陽の用事を濟ましたら、彭城に往つて張建封の世話に成る積りだから、一足先に往つて居ろといふので、舟に乘せて汴水を下り、東に向つて彭城に行かせ、それで、やつと心配が無くなつた樣な次第。それから、自分は、董晉の喪に從つて、朝に洛陽に至り、用事も片付いたから、早速、彭城に向ふことにして、一宿するにも及ばず、やがて道を取つて、孟津の渡場を經、今度は、馬に乘つて、谿山の間を登頓下上して辿り行き、日暮には、河陽節度使李範の軍門に到著したが、今まで乘つて居たやくざ馬は、疲れ切つて、倒れて仕舞つた。すると、李範は、大に喜んで、暫時逗留しろといひ、その宅に迎へ入れて、種種酒肴を陳して、欵待して呉れた。自分は、もとより卑賤の身分であるから、少しも辭退せず、遠慮なく御馳走に預つたが、妻子の事が氣にかかるので、心落ち著かずして、さながら、狂するが如く、飮食をしても、味が分からず、絲竹の聲も、唯だ轟轟たるのみで、さつぱり面白くもなかつた。その內に、夜が明けると、李範の引き留めるを聞かず、無理に振り切つて身を脫し、その決起する樣は、さながら驚鳧の翔けるが如く、急ぎに急いで、黃昏の頃、汜水の岸に

著いた。汜水には渡し場があるが、生憎、渡らうとしても舟が見えず、屢ば聲を揚げて呼ぶと、漸く對岸から渡し守が來て、夜、十里も河幅のある黃河を渡つた。その中流には、淺瀨があつて、そこを上らねばならず、舟が沙に膠著することもあるが、夜であるから、その模樣は、はつきりとは分からなかつたが、時として、舟が深い處に這入つて、驚波が刎ね起り、それに映る星の光が芒を翻して閃くことがあつた。わが車を輓く馬も、一處に舟に乘せてあるが、驚いて跳ね上り、左右に居る小者は、聲を揚げて泣き叫ぶ位で、その困難は、一通りでない。かくて、甲午の日、時門といふ處に休息した。ここは、春秋の頃、龍が鬪つた處であるから、泉に臨んで、その故蹟を窺つた。次いで、田舍道を辿つて、東に行き、西に行き、陳許の處を通ると、ここらは、一帶の平地で、隄塘池沼が相交つて居て、道の邊には、草木が花咲いて、紅や紫が靡き亂れて居る。しかし、茫茫たる荒野で、百里の間、人にも逢はず、時たま、角角として雄雉が鳴き叫ぶのみである。行き行きて、二月の末に、やつと徐州の南境に著し、馬から下りて、隄岸を歩くと、そこに渡し場があつて、吾が從兄が迎ひに來て居たから、舟に上つて始めて挨拶をした。今までは、非常の困難を經たのに、一家百口、幼死したものもなく、橫死したものもないといふのは、勿怪の幸であつて、ここに、初めて愁眉を開いた。徐州に居る僕射南陽公張建封は、自分を迎へて、睢水の北岸に然るべき家を造つて與へられ、やがて、官職をさへ宛てがはれたから、生活も、どうやら樂になり、簞笥の中には餘分の著物もあり、米櫃の中には餘れる米があつて、朝夕に困らぬ樣になつたから、門を閉ぢ、客を謝して、ゆつくり書物でも見やうといふ氣にもなり、折から、窓戶の間、忽ち涼を生じて、世は、まさしく秋に成つた。日ごとに、君が此に來て吳れれば善いがと思つて居たので、君の方では、我が心情を察知して居た譯でもなからうが、嬉しや、君が此に來遊された。別離の後、日久しといふ譯でもないが、その間、自分は、さまざまの憂き目に遇つて、經驗したことも多かつたので、是非君に聞いて貰はねばならぬ。それから、我ひとり食に對すれば、腹が膨れて居る樣で、飯を食ふ氣にもなれぬが、君と共に話をして居れば、實に聽くに倦むことなく、三十日ばかり、引きつづいて、早朝より坐して五更にも及ぶ位、おもふ存分に對談をした。然るに、君は、今、われと別れて南方に行かれるといふから、ここに別れの思に堪へ兼ねる次第である。わが友人としては、君ばかりでなく、外に二三人はあるが、その中、孟東野は、近ごろ、越に行いて禹穴を探らむとし、李翺は、浙江に往つて濤を觀るといふので、いづれも、遠く立ち去り、蕭條として千萬里の外に隔り、滅多に會合することも出來ぬ。淮水は舒舒として長く流れ、楚山は、矗として簇がつて居る。さういふ處へ、君も亦た今次我を捨てて出かけるといふので、我が悲しい思は、まことに窮まる處もない位。さはれ、男兒たるもの、若い時は二度となく、百年の壽命も、旋風の一掃するが如く、知らぬ間に盡きて仕舞ふから、君にしても、今の中、せつせと旅行でもして、汎く交際を求めるのが善いので、今後立派なる高爵を求められることは、至極結構

な事といふべく、碌碌として一郷を守り、家にばかり、こびり付いて居るには及ばぬ。この別は、まことに辛いが、これも、君自身の爲であるから、この行の幸多からむことを祈る次第である。

【餘論】 この篇も隨分長いが、例の如く、段落は截然として、少しも紊れて居らぬ。此日足レ可レ惜の四句は總提。念昔未レ知レ子より魚龍驚二夜光一に至るまでは、初めて張籍と交を結び、しばらく自分の家に置いて、さまざまに奬勵したことを敍し、州家擧二進士一より惝怳難レ爲レ雙に至るまでは、張籍が進士の豫選に成功し、次いで上京して愈よ進士に成つたことを敍し、暮宿二偃師西一より東去趨二彭城一に至るまでは自分が董晉の喪を護して上洛せしことより、汴州の亂に及び、そして先づ妻子を徐州に遣したことを敍し、從レ喪朝至レ洛より百口無二夭殤一に至るまでは、洛陽に到著して喪事を終りし後、直に引返して、自分も徐州に赴きしことを敍し、僕射南陽公より結末、無レ爲レ守二一郷一に至るまでは、愈よ徐州に落ち著き、やがて張籍が來訪し、それから、今回又出發することを敍し、はるかに起首に回映して、現在の地位に立ち返つたのである。乾隆御批には「籍と交結の初に追溯し、今日重ねて逢うて別れ去るに至り、しかも、其中己の崎嶇險難を歴敍し、意境紆折、時地分明、摹刻傳へざるの情、覼縷必ずしも詳にせざるの事を併せて、倥傯雜沓、眞に波瀾夜驚き、風雨驟に至るの勢あり。若し、後人これを爲さば、これを冗散に失はざるもの鮮し。須らく、その勁氣直達の處を玩ぶべし。數十句、一句の如し。尤もその通篇章法博捖操縱、筆力、一髮の千鈞を引くが如きを玩ぶべし。庶はくは、規矩の外に神明たるべし」とある。それから、朱竹垞は破題を評して「起句奇壯、意高遠」といひ、孔丘歿已遠以下十餘句に就いては「敍事太だ詳、太だ實なるを覺ゆるも、亦た稍や拙」といひ、暮宿偃師西の一段に就いては「自己、跋涉辛苦、又この變を聞いて敍し來り、稍や味あるを覺ゆ。大抵文、情に生ず、これ本等」といひ、道邊草木花の四句に就いては「この間の點景、方に是れ詩家の趣味たるを知るを要す。北征の詩、或紅如二丹砂一等の句、亦た是れ此意」といひ、淮之水舒舒、楚山直叢叢の二句、わざと對句を爲さぬことに就いては「一の之字を添へ、故らに對を避く、乃ち更に古健。然れども、秋懷の詩、何ぞ嘗て對せざらむ。ここには、上下調法如何を見るを要す」といつた。それから、この詩の押韻に就いては、前にも概說して置いたが、歐陽修は「退之、用韻に工なり。韻を得て寬なれば波瀾橫溢、傍韻に泛入し、乍ち還り、乍ち離れ、出入回合、殆んど拘はるに常法を以てすべからず。此日足レ可レ惜の類の如き、是れなり。韻を得て窄ければ、復た傍出せず、しかも、難に因つて巧を見、愈よ險、愈よ奇。病中贈二張十八一の類の如き、是れなり。譬へば、善く馬を馭するもの、通衢廣陌には縱橫馳逐、惟だ意の之くところ、水曲蟻封に至りては、疾徐節に中つて、しかも少しも蹉跌せず、乃ち天下の至工なり」といつて居る。されば、古しへの通韻を用ひて、恬として怪まざるは、韓愈にして、初めて之あるものといふべく、洪容齋は「退之の此首、張籍に贈る、凡そ百四十句、東・冬・江・陽・庚・青の六韻を雜用す。その亡ぶるに及んで、籍、詩を作つて之を祭る、凡そ

百六十六句、陽・庚の二韻を用ふ。その語、鏗鏘震厲、全く韓體に倣ふ。謂はゆる乃出二侍女、合彈琵琶箏なるものなり」といひ、李光地は「按ずるに詩・易・書・春秋及び秦漢以上の古文、韻、東・冬・江を用ひて一部を爲し、陽一部、靑一部、庚は半ば陽に入りて、半ば靑に入るなり。蒸は自ら一部たり。支・微・齊・佳・灰、一部たり。而して、支韻の字は、半ば歌に入り、歌・麻は一部たり。而して、麻韻の字、半ば虞に入り。魚・虞は一部たり。蕭・肴・豪・尤は一部たり。尤韻の字、又その半を以て支と虞とに入る。眞・文・元・寒・删・先は一部たり。侵・覃・鹽・咸は一部たり。これ長洲顧寧人氏の區別するところ、凡そ十部、以て古韻に合す、その援据詳明にして、證驗的確なり。顧氏、韓公の古韻を識らざるを譏る。蓋し、古詩とは乃ち元和聖德詩の類なりと謂ふ。然れども、顧氏の學は、詩書古文に質して、古文に合ふものを以て多しと爲す。聲氣の元、歌樂の用に至りては、古人律を協へ文を同じうする所以の本なれば、未だ明かにする能はざるものあるに似たり。蓋し、東・冬・江・陽・庚・靑・蒸の七韻は、原と一部たり、その元、一氣生ずるところを以て之を用ひ、以て歌曲に叶ふるは、收聲必ず同じきが故なり。眞・文・元・寒・删・先、及び侵・覃・鹽・咸、皆然り。支・微・齊・魚・虞・歌・麻の諸韻に至りては、又各部の根、凡そ各部中の字、生音起韻、皆、これよりして得、應に自ら一部と爲して之を通同すべし。その源派分明ならむことを欲し、故に亦た別つて三部となす。歌・麻なり。魚・虞なり、支・微・齊なり。然れども、魚・虞の韻は、能く蕭・肴・豪・尤を生ず、故に蕭・肴・豪・尤は、魚・虞と同一收聲にして以て通用すべし。支・微・齊は、能く佳・灰を生ず、故に佳・灰は支・微・齊と同一收聲にして、以て通用すべきなり。歌・麻と魚・虞とに至りては、別部と雖も、しかも尤も相近し。蓋し、古人、魚・虞の字を讀んで、皆模の字の如く、麻の字を讀んで、皆歌の字の如く、歌・模兩部相近く、その收聲亦た頗る同じければ、魚・虞の蕭・肴・豪・尤に通ずべきもの、歌・麻亦た通ずべし。東・冬の七韻、眞・文の六韻、侵・覃の四韻の如き、亦た支・微・魚・虞・齊・歌・麻の生ずるところと雖も、然れども、齒舌脣鼻の間に翻轉して之を得、佳音直切の生ずるところ、蕭・肴・豪・尤・佳・灰の如き者の比に非ず、故に各〻自ら部を爲して相通ずべからざるなり。退之の此詩、正に東・冬等一部を用ひ、聖德詩は歌・魚・虞・尤等、上聲の一部を用ひ、謝自然の詩は眞・文等の一部を用ひ、皆、本を極め、源を窮め、古韻の精意を得たり。その學博くして、その見卓なり。且つ三代秦漢の古書、かくの如きもの、頗る衆し、第だ先入を主として察せざるのみ。歐公は以て、旁韻に泛入するに意あつて、以て奇を見ると爲し、又或は以て當つるに叶聲を以てして之を求むと爲す、これ固より淺近の論、而して顧氏の顚に譏斥を爲す、亦た未だ苟くも譏るを免れざるなり」といひ、兪瑒は極めて簡單に「この詩、用韻、雜に非ざるなり。古しへ、庚・陽二韻、原と自ら相通ず。鹿鳴采芑の詩を見て、自ら却つて俗說通用轉用の例に非ざるを見るなり。その東韻に入るものは、桑中の詩、亦た然り」といつた。これ等を併看すれば、その雜用なるもの、實は雜用に非ずして、古しへの韻法に叶へることを知るであらう。この詩には疊韻が少くないので、

光・鳴・更・狂の字が韻として各〻二つ用ひてある。胡仔は「退之は、好んで用韻を重疊して、以て己の意を盡す、蓋しその病たるを郵へざるなり」といひ、兪瑒は「少陵の飲中八仙歌、かつて韻を疊用す、この詩、中間の敍次、亦た彭衙・北征の光景に倣たり」といつて居る。

幽懷

幽懷不能寫(一)。行此春江潯(二)。
適與佳節會。士女競(三)光陰。
凝妝耀洲渚。繁吹(四)蕩(五)人心。
閒關(六)林中鳥。亦知和爲音。
豈無一罇酒。自酌還自吟。
但悲時易失。四序迭相侵。
我歌君子行(七)。視古猶視今(八)。

幽懷

幽懷寫くべからず、この春江の潯を行く。
適ま佳節と會し、士女、光陰を競ふ。
凝妝、洲渚に耀き、繁吹、人心を蕩す。
閒關たり林中の鳥、亦た知る、和して音を爲すを。
豈に一罇の酒なからむや、自ら酌み還た自ら吟ずるのみ。
但だ悲む、時は失ひ易くして、四序迭に相侵すを。
我は君子行を歌ふ、古を視ること猶ほ今を視るがごとし。

【字解】〔一〕寫　除く。〔二〕潯　水涯。〔三〕競光陰　月日の早いのに負けぬ樣に行樂に急なるをいふ。〔四〕繁吹　笛の聲の繁多なるをいふ。〔五〕蕩　とろかす。〔六〕閒關　和鳴の聲。〔七〕君子行　古樂府の題で、文選に載せ、その起首に君子防未然、不處嫌疑間、瓜田不納履、李下不正冠、嫂叔不親授、長幼不比肩」とある。〔八〕視古猶視今　列子に「世事苦樂、古しへ猶ほ今のごときなり」とある。

【題義】幽懷といふ題は、例の如く、第一句から取りしこと、もとより論なく、わびしき思といふ意で、われ一人世と異なる心の寂しさを詠出したのである。註釋家の說に據ると、韓愈が徐州なる張建封の幕中に居た時分、その命を奉じて、ある時、都に出張したことがあつたが、その目的を達することが出來ず、そして、幕僚には、始終氣兼をせねばならぬから、今度歸ると、その間が愈よ面白くない、しかし、公然、建封に訴へ出ることも出來ぬから、この詩を作つたといふのであるが、それは、單なる想像に本づいたので、確乎たる史實はない。又一說には、この詩の中なる君子行の君子は、次の君子法天運といふ詩に關係がある。そして、君子法天運の詩は、註釋家の說に據ると、順宗永貞中の作たることは、誰しも異論がないので、さうすると、この詩は、韓愈の友人たる劉禹錫・柳宗元輩が、韋執誼・王叔文と交通し、李下の冠、瓜田の履の嫌疑を避けないのは、甚だ其意を得ず、且つ洵に嘆はしいことであるといふ意を逗露したものといふことに成る。しかし、詩を以て諷諭に意ありとなすは、彼土論詩家の常弊で、予輩の好まざるところ、必ずしも之に拘泥せず、唯ださういふ解釋があるといふことを知つて居れば、それで澤山である。

【詩意】わびしき思を除き兼ねて、ひとり、春江の岸邊を漫歩すれば、折しも、長閑けき春の日で、

士女は遊ぶに忙しく、粧を凝らして洲渚に輝くばかり、笛の聲は繁くして、人の心を蕩かす程であるし、林中の鳥も、亦た間關として鳴きわたり、さながら之と相和するが如くである。われに一樽の酒が無いではないが、世俗と異なれば、自然友だちも少く、ひとりで酌んで、又ひとりで歌ふばかり。おもへば、時は失ひ易く、四時は遠慮なく推し移つて、まことに歳月は人を待たない。われは、君子行てふ古詩を歌つて、自ら慰めて居るが、かの未然を防ぎ、嫌疑の間に居てはならぬといふのは、昔も、今も、全く同じことである。

【餘論】 朱竹垞は「これ選調、これ自ら是れ詩の正派」といつた。それから、起首は阮籍の詠懐の中の獨坐空堂上、誰可與歡者、出門臨永路、不見行車馬に本づいたので、竹垞は「起は是れ嗣宗の獨坐空堂上の四句を裁して兩句と爲し、却つて、自然に近し」といつた。

君子法天運

君子法(一)天運。四時可前(二)知。　君子は天運に法り、四時前知すべし。

小人惟所遇。寒暑不可期。　小人は惟だ遇ふところ、寒暑期すべからず。

利害有常勢。取捨無定姿。　利害、常勢あり、取捨、定姿なし。

焉能使我心。皎(三)皎遠憂疑。　焉んぞ能く我が心をして、皎皎、憂疑に遠ざからしめむ。

【字解】 〔一〕法　則る。〔二〕前知　前以て知る。〔三〕皎皎　光明の貌。

【題義】 この詩は、前首の條に一寸言つた通り、劉禹錫・柳宗元、二人の爲に作つたのである。德宗の崩御に次いで、順宗が卽位された處が、王伾・王叔文の二人は、帝が東宮に居た頃、寵を得て居たから、朝政の革新を企て、宰相の韋執誼と結託して、順宗が病氣で物を言ふことが出來ないのを幸とし、天子の詔と稱して、短い時日に、樣樣の事を遣つた。劉柳二人は、その幕賓として大に信頼せられ、一時飛ぶ鳥をも落す勢であつたが、韓愈は之を傳聞し、さういふ惡い事をした處で、とても長く續くものではないといふ意を述べたのである。

【詩意】 世に君子といはれるものは、天運に法つて、一擧一動、道理に違はぬやうにするので、天運は、春夏秋冬、自然に順序があつて、四時の推移は、もとより、前以て、知ることが出來る。君子は、利害を豫察して、去就を爲すから、決して、その身を誤るやうな事はない。これに反して、小人は、唯だ其境遇に從つて、一己の僥倖を得むとし、寒暑の推移などは、少しも、あてにしない。元來、利害には常勢あつて、かういふ事をすれば利、かういふ事をすれば害といふ樣に、ちやんと決まつて居るのに、小人の取捨するところは、全然誤つて居て、一定の體式といふものがない。今や、劉柳の二人までが、取捨を誤るといふは、まことに呆れた話で、自分は、彼等の仲間に立ち交ることは出來

ない。我が心は、皎皎として潔白であるが、友人中に、さういふものがあるから、自分の身にも惡い事があるのではないかと思はれることを心配して居るので、どうか、さういふ事のない樣に、我が心をして憂疑より遠ざかる樣にして欲しいものである。

落葉一首。送陳羽。

落葉一首、陳羽を送る

落葉不更息。(一)斷蓬無復歸。　落葉更に息まず、斷蓬復た歸るなし。

飄颻終自異。(二)邂逅暫相依。　飄颻として、終に自ら異なり、邂逅暫く相依る。

悄悄深夜語。悠悠寒月輝。　悄悄として深夜に語り、悠悠として寒月輝く。

誰云(三)少年別。流涙各霑衣。　誰か云ふ、少年の別を、流涙、各衣を霑す。

【字解】【一】斷蓬　ちぎれて飛ぶ蓬の穗。【二】邂逅　めぐり合ふ。【三】少年別　梁の沈約の詩に、平生少年日、分手易前期とある。

【題義】陳羽は、韓愈と同年の進士で、その人が故郷に歸るに就いて、これを送つて作つたのである。

【詩意】落葉は、木から離るれば、ちりちりばらばらになつて、風のまにまに飛ぶことを止めぬし、斷蓬は、一たび吹き上げられると、又元の處に歸るといふことはない。我と君とは、落葉や斷蓬に比すべく、飄颻として、遂には異なるべきものであるが、偶然都に於て邂逅し、一處に試驗を受けて及第し、暫時互に相依つて助け合つて居たのに、又ぞろ此に別となつた。悄然として、夜の更くるまで語りつづけると、窓前には、悠悠として、寒月が照り輝いて居る。むかしの人は、少年の別は、他日相遇ふことがあるから、格別苦にもならず、無造作に手を分つといつたが、なかなか、そんな譯のものではなく、互に涙を流して、衣裳が濡れる程になつた。

【餘論】蔣之翹の評に「晚唐の人、律詩かくの如く、古體に入つて較や別、自ら致あり」といひ、朱竹垞は「これ亦た拗律といふべし」といつた通り、これは、律體で、第五句の平仄の脚か入り違つた處は、拗體と見るべきものである。されば、これを古體に入れたのは、斷じて編者の誤である。

歸彭城

彭城に歸る

天下兵又動。太平竟何時。　天下兵又動き、太平竟に何の時ぞ。

訏謨者誰子。無乃失所宜。　訏に謨るものは誰が子、乃ち所宜を失ふなきか。

前年關中旱。閭井多死饑。　前年關中の旱、閭井、死饑多し。

去歲東郡水。生民爲流屍。　去歲東郡の水、生民、流屍となる。

上天不虛應、禍福各有隨。 上天、應を虛しくせず、禍福、各隨ふあり。

我欲進短策、無由至彤墀(二)。 我、短策を進めむと欲するも、彤墀に至るに由なし。

刳肝以爲紙、瀝血以書辭。 肝を刳つて以て紙と爲し、血を瀝いで以て辭を書す。

上言陳堯舜、下言引龍夔(三)。 上言は堯舜を陳べ、下言は龍夔を引く。

言詞多感激、文字少葳蕤(四)。 言詞、感激多く、文字、葳蕤少し。

一讀已自怪、再尋良自疑。 一讀、すでに自ら怪み、再尋、良に自ら疑ふ。

食芹(五)雖云美、獻御(六)固已癡。 芹を食うて、美と云ふと雖も、御に獻ずるは、まことに已に癡なり。

緘封在骨髓、耿耿空自奇。 緘封して骨髓に在り、耿耿として空しく自ら奇とす。

昨者到京城、屢陪高車(七)馳。 昨は京城に到り、屢ば高車に陪して馳す。

周行(八)多俊異、議論無瑕疵。 周行、俊異多く、議論、瑕疵なし。

見待頗異禮(九)、未能去毛皮。 待せらるるは、頗る禮を異にすれども、未だ毛皮を去ること能はず。

到口不敢吐、徐徐俟其巇(一〇)。 口に到るも、敢て吐かず、徐徐として其巇を俟つ。

歸來戎馬間、驚顧似羇雌(一一)。 戎馬の間に歸り來つて、驚顧して羇雌に似たり。

連日或不語、終朝(一二)見相欺。 連日、或は語らず、終朝、相欺かる。

乘間輒騎馬、茫茫(一三)詣空陂。 間に乘じて輒ち馬に騎し、茫茫として空陂に詣る。

遇酒(一四)卽酩酊、君知我爲誰。 酒に遇へば卽ち酩酊、君知れりや、我をば誰と爲すかを。

【字解】【一】 訏謨　大に謀る、天下の大綱を攬つて政治を行ふ。【二】 彤墀　墀は階下の地。宮殿では、そこに赤い敷瓦を列べてある。【三】 龍夔　二人の名、堯を輔佐した臣下。【四】 葳蕤　草木の形容、ふさふさと繁茂して居る貌。【五】 食芹　說文に「芹は楚葵なり」とあり、列子に「宋に田父の喜んで芹を食ふものあり、鄉豪に對して之を稱す。鄉豪、取つて之を嘗む、口に螫く、腹に慘む。衆哂うて之を怨む。その人、大に慙づ」とあり、嵆康の山濤に與ふるの書に「野人、背を炙ぶるを快しとして、芹子を美として之を至尊に獻ぜむと欲するものあり。區區の意ありと雖も、亦た已に疎なり」とある。【六】 獻御　天子の供御に獻ずる。【七】 高車　大官の乘る車。【八】 周行　色色說もあるが、ここでは在廷の臣僚。【九】 異禮　尋常の禮に異なること。【一〇】 其巇　揚子法言に「巇、抵るべきか」とあつて、その註に「巇は罅隙なり」とある。【一一】 羇雌　羇は偶なきこと、獨り離れた雌。【一二】 終朝　終日に同じ。【一三】 茫茫　ぼんやりして。【一四】 遇酒卽酩酊　晉書に「山簡、出でて征南將軍となり、襄陽に鎭す。時に童子あり、歌うて曰く、山公出何許、往至高陽池、日夕倒載歸、酩酊無所知、時時能騎馬、倒著白接䍠、擧鞭問葛彊、何如幷州兒」と。

【題義】 彭城は徐州、この詩は、韓愈が張建封の幕中に居た時の作である。韓愈の作に係る歐陽詹の哀詞に「貞元十五年の冬、某、徐州の從事となり、京師に朝正す」とある。そして、この詩に歸彭城とあるから、これは貞元十六年、長安から徐州に還つて來たのである。篇中に天下兵又動といふは、

十五年の秋、諸道の兵を起して吳少誠を討つをいひ、前年關中旱といふは、十四年の冬、京師飢ゑたるをいひ、去歲東郡水といふは、十五年の秋、鄆滑に水ありしをいひ、その事は、齷齪の詩にも見えて居る。それから、韓愈は、張建封の代理として上京したのであるから、當路の大臣などに遇つて、種種話をして見たが、とても、おのが言を用ひて吳れないといふので、彭城に歸り後、在京中の事を追想して、この詩を作つたのである。

【詩意】去年の秋、天下兵又動き、吳少誠を征伐されたが、今は大軍を動かすべき時勢ではなく、かういふことでは、太平は何時來るであらうか。今日、天下の大柄を握つて天子を輔佐する人の爲すところは、宜しきを失つて居るのではないか、まことに譯が分からない。それから、一昨年の冬には、關中が非常に旱で、村里の間には、餓死したものが隨分多かつたし、去年の秋には東郡に大洪水があつて、其地の人民は、皆死骸となつて流失して仕舞つた。この天變地異の後を承けて、今しも、兵を動かすといふのは、まことに氣が知れない。上天は、決して、應報を虛しくはせぬので、水旱、ともに然るべき理由があつて、人を戒める爲めにしたので、禍福は、すべて善惡の行爲に隨つて來るものである。そこで、我は拙い論策を天子の御前に上言して、御警戒あるやうにと申し上げたいと思つたが、賤い身分であるから、丹墀の處まで參上することが出來ない。しかし、是非、おのが志を貫徹させたいといふので、肝を刳り取つて紙となし、血を滴らせて文字を書き列ね、上には、堯舜が無爲垂拱して天下治まつたから、その道を講せねばならぬといひ、下には、堯の時には、龍夔などいふ名臣があつたので、さういふ樣に輔佐の名臣が御側に居なければ駄目だといひ、どうにかして、これを君の御手元に差し上げやうと思つて、その草稿を讀み直して見ると、その言辭には、感慨激烈のことが多く、おまけに、文飾がなくて露骨である。かくて、一讀して自ら怪み、再び其意味を尋ねて、自ら疑ひ、どうも、これでは一寸差し出し兼ねると思つた。むかし、齊國の百姓は、芹がうまいから、之を主君の供御に獻じたいと云つたものがある。その志は、さることながら、まことに愚な話である。そこで、その上書を己が骨髓の中に封じとめて、唯だ耿耿として、自ら憐み、奇なり、奇なりといつて澄まして居る外はなかつた。去年の末、張建封の代理となつて、長安に上京し、數ば高車に乘るところの當路の大臣輩に陪して、議論を鬪はしたことがあつた。そして、在廷の臣僚には、俊異の人物が多いが、その議論は、如何にも婉曲であつて、些の瑕疵もなく、その上、韓退之は當今の文章家だといふので、特別の待遇を賜はつたのは善いが、それは、ほんの表面だけの事で、その底まで、毛皮を被つて居るから、その眞相を窮める譯に行かない。そこで、我が意見を述べ立てやうとして、もう口まで出かかつたが、しばらく差控へて、之を吐かず、徐徐として、善き機會もあれかしと待つて居た處が、とうとう言ひ出さずに仕舞つた。やがて、空しく彭城に歸ると、例の吳元濟征伐で、兵馬を繰り出すといふ最中であつたから、番を離れた鳥の樣に、ぼんやりして居た。張建封は、非常に

優待して呉れたが、時も時、場合も場合であるから、連日、或は一言も語り出でず、終日、やみやみと欺かれて居る樣な氣がした。仕方がないから、閑暇なる儘、馬に乘つて、何處といふ目當もなく、茫茫然として隄の處に來かかつた。この不平を消遣するには、他の方法もないから、酒さへあれば、飮んで酩酊する、それを見た人は、韓退之は、あんな飮んだくれの詰まらぬ男かといつて、わが本當の面目を知らずにけなし付ける、それが、まことに心苦しいが、胸の有耶無耶を掻き拂ふには、今さら仕方がない次第である。

【餘論】 乾隆御批には「時を憂ひ、亂を傷み、無聊に感憤し、馬に空陂に騎す、窮途の哭に減せず。周行後異の數語、風刺傲婉、謂はゆる中朝大臣老於事、詎肯感激徒媕婀なり。刿肝瀝血の句は、少陵鳳凰臺の詩より化して出づ、又庾信の經藏碑に皮紙骨筆の句あり、退之、釋典を用ふることを喜ばずと雖も、然れども、前人の詞語を運化して自ら嫌ふなきなり」とある。周行多後異は、反語に類し、滿廷の臣僚が純然たる官吏風で、相手の者を巧に言ひくるめて、口を開かしめず、そして、表面上、それを優遇して、巧に追ひ囘すといふ樣な有樣は、宛然見るが如くである。

醉後

醉後

煌煌東方星(一)、奈此衆客醉。　煌煌たり、東方の星、この衆客の醉を奈かむ。
初喧或忿爭、中靜雜嘲戲(二)。　初め喧しくして或は忿爭し、中ごろ靜にして嘲戲を雜ふ。
淋漓身上衣、顚倒筆下字。　淋漓たり身上の衣、顚倒す筆下の字。
人生如此少、酒賤且勤置。　人生、かくの如きは少し、酒賤しければ且つ勤めて置け。

【字解】【一】東方星　曉の明星。【二】嘲戲　文選の典論に、「雜以嘲戲」とある。

【題義】 この詩は、その題の通り、醉後の狀態を有りの儘に寫したのである。

【詩意】 曉の明星が、煌煌として光つて居るが、この席は猶ほ散せず、衆客は皆醉ひ潰れて居るから仕方がない。初めは、何か少しばかりの言葉の行違から、八釜しく、騷がしく、忿り爭ふこともあつたが、中ごろは、又靜になつて、色色冗談を言ひながら、互に打解けて居る。さうして、興が益す酣になると、著物の上に酒が淋漓として灑ぎかかり、興に乘じて、字を書いても、顚倒して、まことに變てこな物に成つて仕舞つた。かくの如く、多勢の人が相會して痛飮するのは、滅多に無いことであるし、おまけに、太平の今日、酒代も安いから、夜が明けても構はず、その儘に酒を置きッ放しにして、十分に飮むが善い。

【餘論】 魏道輔の紫薇詩話に「夏英公竦、老杜の初秋月を評して云ふ、微升紫塞外、已隱暮雲端。意、

肅宗を主とするなり。吾、退之の煌煌東方星を觀るに、其れ順宗の時の作か、東方は、憲宗の儲宮に在るなり」といひ、つまり、順帝の在位中、王叔文・韋執誼輩が權威を 恣 にして、勝手な眞似をして居るのを諷したものだといつたが、蔣之翹は之を駁して「彼此ともに失す、二公もし託寄あらば、斷じて此の若き謬あらず」といひ、これは流石に見識が高い。方世擧は、この首を以て、次の醉贈張祕書の後に作つたので、當夜の狀況を補寫したものだといつたが、この解釋は、極めて面白い。朱竹垞は、之を評して「醉態宛然たり」といつた。

醉贈張祕書

醉うて張祕書に贈る

人皆勸我酒。我若耳不聞。　人皆我に酒を勸むれども、我は耳に聞かざるが若し。

今日到君家。呼酒持勸君。　今日、君が家に到り、酒を呼んで持して君に勸む。

爲此(一)座上客。及余各能文。　この座上の客たるは、余に及ぶまで各文を能くせり。

(二)君詩多態度。藹藹春空雲。　君の詩は態度多し、藹藹たり春空の雲。

(三)東野動驚俗。(四)天葩吐(五)奇芬。　東野は、動もすれば俗を驚かし、天葩、奇芬を吐く。

(六)張籍學古淡。(七)軒鶴避雞羣。　張籍は古淡を學び、軒鶴、雞羣を避けしむ。

(八)阿買不識字。(九)頗知書八分(一〇)。　阿買は字を識らず、頗る八分を書するを知る。

詩成使之寫。亦足張吾軍(一一)。　詩成つて之を寫さしむれば、亦た吾軍を張るに足る。

所以欲得酒。爲文俟其醺(一二)。　酒を得むと欲する所以は、文を爲らむとして、其醺を俟てばなり。

酒味既冷冽(一三)。酒氣又氤氳(一四)。　酒味すでに冷冽、酒氣又氤氳。

性情漸浩浩(一五)。諸笑方云云(一六)。　性情漸く浩浩、諸笑方に云云。

此誠得酒意。餘外徒繽紛(一七)。　これ誠に酒意を得たり、餘外徒に繽紛。

長安衆富兒。盤饌羅羶葷(一八)。　長安の衆富兒、盤饌、羶葷を羅ぬ。

不解文字飲。惟能醉紅裙。　文字の飲を解せず、惟だ能く紅裙に醉ふ。

雖得一餉樂。有如聚飛蚊。　一餉の樂みを得と雖も、聚飛の蚊の如きあり。

今我及數子。固無(一九)蕕與薰。　今我及び數子、固より蕕と薰となし。

險語破(二〇)鬼膽。高詞(二一)媿(二二)皇墳。　險語は鬼膽を破り、高詞は皇墳に媿ぶ。

至寶不雕琢。神功謝鋤耘。　至寶は雕琢せず、神功は鋤耘を謝す。

方今向太平。(二三)元凱承華勛(二四)。　方今、太平に向ひ、元凱、華勛を承く。

吾徒幸無事。庶以窮朝曛。(二五) 吾が徒、幸に無事、庶はくは、以て朝曛を窮めむ。

【字解】【一】座上客　後漢書の孔融傳に「融、字は文擧、性寬容にして忌少く、士を好み、好んで後進を誘益す。閑職に退くに及び、賓客日に其門に盈つ。常に歎じて曰く、座上、客、常に滿ち、罇中、酒、空しからず、吾、憂なし」とある。座上客の三字は、之に本づいたのであらう。【二】君詩多態度　態度は風情、石林詩話に「韓退之、張籍(これは張祕書を誤つて張籍としたのである)に贈るに云ふ、君詩多態度、藹藹春空雲、と。司空圖、戴叔倫の語を記して云ふ、詩人の辭、藍田日暖にして、良玉、煙を生ずるが如しと。亦た是れ形似の微妙なる者、但だ學者その言を味ふこと能はざるのみ」とある。【三】東野　孟郊の字、前にも見ゆ。【四】天葩　天花、天より雨ふらす花。【五】奇芬　卽ち奇香。【六】張籍　前に數ば見ゆ。【七】軒鶴避雞羣　左傳に「衞の懿公、鶴を好み、鶴、軒に乘ずるものあり」といひ、晉書に「嵇紹、はじめて洛に入るや、或は王戎に謂つて曰く、昨、稠人中に於て嵇紹を見る、昂昂然として野鶴の雞羣に在るが如し」とある。朱註に「言ふは、張籍、古淡を學んで、綺靡に騖せず、乘軒の鶴を以て反つて雞羣を避くるが如きなり」といつて居るが、これは「雞羣を避けしむ」と訓ずべく、雞羣の方が自然屈伏して避けるといふ義に見ればならぬ。又顧嗣立の說に「以上四句、兩つながら相呼應す。東野の二句は、卽ち薦士の詩に謂はゆる敷柔肆紆餘と榮華肖天秀と、是れなり。張籍の二句は、卽ち調張籍の詩に謂はゆる騰身跨汗漫、不著織女襄、これなり。亡友早川、かつて謂ふ、東野文昌、兩君得るところ、極めて相似ず、しかも、同じく公に許さる、公の才大なるを見るに足る。知言と謂ふべし」とある。【八】阿買　人名、大方幼字であらう。趙堯夫の言に「或は魯直に問ふ、阿買は是れ退之の何人、答へて云ふ、退之の姪と。必ず據るところあつて云ひしならむ」とある。【九】字　ここでは古字。【一〇】八分　隸書に近き書體、周越書苑に「八分は、秦の羽人上谷の王次仲、隸書を飾つて之を爲す。鍾繇、これを章程書といふ。蔡文姬別傳、臣の父邕言ふ、程邈の字八分を割いて二分を取り、李斯の小篆、二分を割いて八分を取る、故に八分といふ」とあつて、小篆八分に隸書二分といふ字體である。【一一】張吾軍　左傳桓公六年に「楚の鬭伯比曰く、我、吾が三軍を張る」とある。【一二】酣　醉ふこと。【一三】冷冽　寒きこと。【一四】氛氳　匂ふこと。【一五】浩浩　浩大の貌。【一六】云云　衆語のがやがやすること。【一七】繽紛　錯亂の貌。【一八】羶葷　羶は臭、葷は辛臭の菜。【一九】蕕與薰　臭草と香草。【二〇】破鬼膽　開元天寶遺事に「李果、洛陽の令となる、劉象といふものあり、その境を過ぐ、夜、戶外の語聲を聞いて曰く、古今の正人李令、是れなり。その好事を見れば、人をして膽を破らしむと。戶を開いて之を觀るも物なし、乃ち鬼神なり」とある。【二一】媲　爾雅に「妃は媲なり」とあつて、註に「相偶媲するなり」とある、くらべる。【二二】皇墳　書經の序に「伏羲、神農・黃帝(卽ち三皇)の書、これを三墳といふ」とある。【二三】元凱　八元八凱、左傳文公十二年に「高陽氏、才子八人あり、これを八凱といふ。高辛氏、才子八人あり、これを八元といふ」とある。【二四】華勛　舜の字は重華、堯の字は放勛、これを併言す、卽ち堯舜といふこと。當時、憲宗はじめて卽位、杜黃裳・鄭餘慶・李吉甫・裴垍・李藩の徒、相繼いで相たりしをいふ。【二五】朝曛　曛は日の入ること、朝暮と同義。

【題義】これは、張祕書といふ人の處に招かれて、酒宴をした其席上に於て作つたのである。蔣註に「舊本の下に、或は徹の字を註す。徹は元和四年の進士、この詩は、元和の初に作り、徹は猶ほ未だ第せず。公は五六年の間、皆東都に在り。この詩、蓋し長安に在るの日作る、徹に非ざるなり」とある。そこで、方世擧は、張徹ではなくて、張署だらうといつた。現に、張署は、元和の初に進士となつて、直に祕書郎の官を授けられたといふから、大方それに相違なからう。但し、張徹にせよ、張署にせよ、詩意の上には何等の關係は無いから、その邊の事は、大抵にして濟まして置けば宜しいと思ふ。

【詩意】われは、生來あまり酒を好まず、人がいくら勸めて與れても、耳にも懸けないが、今日君の家を訪うて、酒を出させて自ら酌み、且つ君にも注いで勸めた。凡そこの座上の客たるものは、予と共に、いづれも、文藝の士であつて、第一、君の詩は、風情多く、たとへば、藹藹たる春天の雲の如

く、孟郊の詩は、動もすれば、俗を驚かし、天から降り來る花の、えならぬ奇香を吐くが如く、張籍の詩は、古淡を學んで、綺靡に馳せず、たとへば、車に乘つた鶴が、靈輦の中に下りても、飛び離れて獨り抜きん出て居る樣なもので、いづれも詩が上手である。そして、吾が甥の阿買は、まだ學問が深くないから、六づかしい字は知らぬが、生來、餘程上手に八分の字體を書くから、詩成りし後、この阿買に淨書させると、亦た以て吾が軍を張つて、大に氣焰を揚げるに足りる、元來、酒を得むと欲する所以は、文を作る間に醉はうと思ふので、醉ふと、自然興が湧いて、早速、作が出來るからである。酒の味は、すでに强くして、浸みる樣であるし、酒の氣は、どことなく匂ふ樣であつて、大分、好い心持に成り、性情は、次第に浩浩として、氣が大きくなり、諧謔談笑、今しも大分賑かである。かくの如きは、酒の眞意を得たもので、この以外の者は、徒に雜亂するばかり、全く以て取るに足らぬ。長安の富貴人は、皿に樣樣の物を竝べて、ひどく肴ごのみをするが、本來、風流なる文字の飲を解せざるが故に、唯だ紅裙を侍らし、絃歌を以て、その興を助けるだけで、まことに、俗惡の極といふべく、しばしの間の歡樂を得たりとも、畢竟、蚊が羣れ飛んで騷がしいと同一である。今、われと數子とは、格別、酒の肴をも擇ばず、至極あつさりして居るが、詩を作れば、その險怪の語、以て鬼神の膽を破るべく、高超の詞、古しへの三墳に倣ひ、まことに大したものであるが、至上の寶たる珠は、雕琢を待たず、天然の功は、耕耘を待たざると同じく、何も故らに苦心經營して作つたのではなく、自得の妙、乃ち此の如く、これ即ち醉中に得たところの文字の眞趣である。顧みれば、方今の世、漸く泰平に向はむとし、八元八凱にも比すべき幾多の名相輩出し、堯舜の如き吾が君を輔佐して行くから、四海すでに虞なく、吾が徒は、微官に居て、幸に事なきものなれば、希はくは、醉歌して、朝夕を送ることも出來るであらう。

【餘論】 西淸詩話に「張文潛云ふ、東坡、かつて言ふ、退之の詩、長安衆富兒、盤饌羅二羶葷一、不レ解二文字飲一、惟能醉二紅裙一と。疑ふらくは、淸苦自ら飾るものの如し。艶姬踏レ筵舞、淸眸射二劍戟一といふに至りては、すなはち知る、その老子、箇中興復た淺からず。文潛戲れに答へて曰く、文字の飲を愛するものは、俗人の酒を沽ふと科を同じうす」とある。朱竹垞は「只だ文字の飲を說く、杜の簡薛華醉歌と同じ、但だ少しく其超逸を遜るのみ」といひ、何義門は「詩の瓠葉、君子有レ酒、箋に云ふ、この君子は庶人の賢行あるものを謂ふ、その農功畢るや、乃ち酒漿を爲り、以て朋友を合し、禮を習ひ、道藝を講ずるなり。公の詩、文字飲、これに本づく」といひ「三君の文たる、上に既に之を言ふ、險語の四句、乃ち及レ余各能レ文の意を終る、筆勢錯綜、その詩を見ず、然れども、公に於て、實に愧ぢざるなり」といつて居る。

同冠峽

南方二月半。春物（一）亦已少。
維舟山水間。晨坐聽百鳥。
宿雲（二）尚含（三）姿。朝日忽升曉。
羈旅感和鳴。囚拘（四）念輕矯。
潺湲（五）淚久迸。詰曲思增繞。
行矣且無然。蓋（六）棺事乃了。

同冠峽

南方二月の半、春物亦た已に少なり。
舟を山水の間に維ぎ、晨に坐して百鳥を聽く。
宿雲、尚は姿を含み、朝日、忽ち曉に升る。
羈旅、和鳴に感じ、囚拘、輕矯を念ふ。
潺湲として淚久しく迸り、詰曲として思ひ增す繞る。
行け、且く然ること無かれ、棺を蓋うて、事、乃ち了らむ。

【字解】【一】春物　春景色。【二】宿雲　夜一つ處に留まつて居た雲。【三】含姿　姿態を含む。【四】囚拘念輕矯　囚拘に均しき身は、鳥の輕矯たるを羨ましく思ふ。【五】潺湲　楚辭に「横流涕兮潺湲」とある。【六】蓋棺　晉書に載する劉毅の言に「丈夫兒、蹤跡尋常なるべからず、便ち攀小中に混ずるも、棺を蓋うて事方に定まる」とあり、杜甫の句に「蓋棺事則已」とある。

【題義】　これから以下の數篇は、前の「赴江陵」云云の詩の條に述べて、貞元二十年、四門博士より陽山令に左遷された時の作である。陽山は、嶺南道廣州に屬して、今の廣東に近く、この時分は、南方の僻地であつた。そして、同冠峽は、陽山の西北七十里に在つて、日本の里數十里程で、もう廣州に著くといふ處に在る。集中に「次同冠峽」といふ詩があつて、第九卷に載せ、もとより同時の作であらうが、かくの如く別別に成つて居るのは、例の編輯の錯亂である。

【詩意】　南方の廣州に差しかかつて、同冠峽を經る時は、二月の中旬であつた。もとより、南方は時節が早いから、春景色も最早殘り少なに成つて居た。この時、舟を山水の間に繋いで、一夕ここに泊し、晨に坐して、百鳥の鳴くのを聞いた。谷間に宿れる雲は、なほ面白き姿を含み、やがて朝日が曉の空にさし上つた。何分にも、羈旅の身であるから、鳥の和鳴するを聞いても、自分に思ひくらべて、却つて淋しさを覺え、囚拘に等しき軀には、鳥がいとも輕げに飛び廻るを羨ましく思ふ。潺湲として淚は斷えず流れ出で、詰曲として結ぼれたる思は、愈よ繞り縈ふのみである。しかし、いくら嘆いたとて仕方がない、この儘行くとして、そんな眞似はせずもあれ、人間の事は、棺を蓋うて後に論が定まるといふから、眼前の憂き目に心を亂すは、愚の極である。かう思ひ直して、やがて、舟を進めた。

【餘論】　短幅の中に波瀾横生し、結二句は、自慰自奮の語である。朱竹垞は「昌黎の詩、大抵、謝客を師として、これに俊快を加ふ」といつた。

送惠師

惠師を送る

惠師浮(一)屠者。乃是不羈(二)人。　惠師は浮屠の者、乃ち是れ不羈の人。
十五愛山水。超然謝朋親。　十五にして山水を愛し、超然として朋親に謝す。
脫冠翦頭髮。飛步遺(三)蹤塵。　冠を脫して頭髮を翦り、飛步して蹤塵を遺る。
(四)發跡入四明(五)。梯空上秋旻(六)。　跡を發して、四明に入り、空に梯して、秋旻に登る。
遂登天台(七)望。衆壑皆嶙峋(八)。　遂に天台に登つて望めば、衆壑皆嶙峋たり。
夜宿最高頂。擧頭看星辰。　夜、最高頂に宿し、頭を擧げて星辰を看る。
光芒相照燭。南北爭羅陳。　光芒相照燭して、南北爭つて羅陳す。
茲地絕翔(九)走。自然嚴且神。　この地、翔走を絕ち、自然、嚴且つ神なり。
微風吹木石。澎(一〇)湃聞韶(一一)鈞。　微風、木石を吹き、澎湃として韶鈞を聞く。
夜半起下視。溟波銜日輪。　夜半、起つて下に視れば、溟波、日輪を銜む。
魚龍驚踊躍。叫嘯成悲辛。　魚龍驚いて踊躍、叫嘯して悲辛を成す。
怪氣或紫赤。敲磨共輪囷(一二)。　怪氣、或は紫赤、敲磨して共に輪囷。
(一三)金鴉既騰翥。六(一四)合俄淸新。　金鴉、すでに騰翥し、六合俄に淸新。

常聞禹穴奇。東去窺甌(一五)閩。　常に禹穴の奇なるを聞き、東に去つて甌閩を窺ふ。
越俗不好古。流傳失其眞。　越俗、古を好まず、流傳その眞を失ふ。
幽蹤邈難得。聖路(一六)嗟長堙。　幽蹤邈として得がたく、聖路長く堙れむことを嗟す。
廻臨浙(一七)江濤。屹起高峨(一八)嵋。　廻つて浙江の濤に臨めば、屹起して峨嵋よりも高し。
壯志死不息。千年如隔晨。　壯志死して息まず、千年、晨を隔つるが如し。
是非竟何有。棄去非吾倫。　是非竟に何かあらむ、棄てて去るは吾が倫に非ず。
凌江詣廬(一九)嶽。浩蕩極遊巡。　江を凌いで廬嶽に詣り、浩蕩として遊巡を極む。
(二〇)崔崒沒雲表。陂陀(二一)浸湖淪(二二)。　崔崒、雲表に沒し、陂陀、湖淪を浸す。
是時雨初霽。懸瀑(二三)垂天紳。　この時、雨はじめて霽れ、懸瀑、天紳を垂る。
前年往羅(二四)浮。步戛(二五)南(二六)海漘。　前年、羅浮に往き、步して戛す南海の漘。
大哉陽德盛。榮茂恒留春。　大なるかな陽德の盛なる、榮茂、恒に春を留む。
鵬(二七)騫墮長翮。鯨戲側(二八)修鱗。　鵬は騫つて長翮を墮し、鯨は戲れて修鱗を側つ。
自來連州寺。曾未造城(二九)闉。　連州の寺に來りしより、かつて、未だ城闉に造らず。

日攜青雲客。(三〇)探勝窮崖濱。　日に青雲の客を攜へ、勝を探つて崖濱を窮む。
太守邀不去。羣官請徒頻。　太守邀ふれども去らず、羣官請ふこと徒に頻りなり。
囊無一金資。翻謂富者貧。　囊に一金の資なけれども、翻つて富者を貧しといふ。
昨日忽不見。我令訪其鄰。　昨日忽ち見えず、我、その鄰を訪はしむ。
奔波自追及。把手問所因。　奔波、自ら追ひ及び、手を把つて所因を問ふ。
顧我却興歎。君寧異(三一)於民。　我を顧みて却つて歎を興す、君、寧ろ民に異ならむや。
離合自古然。辭別安足珍。　離合、古しへより然り、辭別、安んぞ珍とするに足らむ。
吾聞九疑(三二)好。夙志今欲伸。　吾、九疑の好きを聞き、夙志今伸べむと欲す。
(三三)斑竹啼舜婦。清湘(三四)沈楚臣。　斑竹、舜婦を啼かしめ、清湘、楚臣を沈む。
(三五)衡山與洞庭。此固道所循。　衡山と、洞庭と、これ固より道の循ふところ。
(三六)尋崧方抵洛。(三七)歷(三八)華遂之秦。(三九)　崧を尋ねて方に洛に抵り、華を歷て遂に秦に之く。
浮游靡定處。偶往即通津。　浮游、定處なく、偶ま往かば即ち通津。
吾言子當去。子道非吾遵。(四〇)　吾言ふ、子當に去るべし、子の道は吾が遵ふに非ず。

(四一)江魚不池活。野鳥難籠馴。　江魚は池にして活きず、野鳥は籠にして馴らし難し。
吾非西(四二)方敎。憐子狂且醇。　吾は西方の敎に非ず、憐む子が狂にして且つ醇なるを。
吾嫉惰遊者。憐子愚且諄。　吾は惰遊の者を嫉む、憐む子が愚にして且つ諄なるを。
去矣各異趣。何爲淚霑巾。　去れ、各趣を異にす、何すれぞ淚りに巾を霑す。

【字解】【一】浮屠　佛といふこと。後漢書の襄楷傳に「浮屠は卽ち佛陀、但だ堅轉するのみ」とある。浮圖、沒汰、勃陀、母駄、佛徒、部多とも書くが、皆同じである。舊譯には、知者、新譯では覺者としてある。【二】不覊　蔣註に「不覊は馬を以て喩となす。言ふは、覊靮を受けざるなり。鄒陽の吳王に上る書に「不覊の士をして牛馬と皂を同じうせしむ」とある。なほ史記に見えた同書の註には「拘繫するところなきなり」といひ、漢書の司馬遷傳には「少にして不覊の才を負ふ」とある。【三】遺蹤塵　その足跡を留めるといふこと。【四】發跡　出立する。【五】四明　山の名、明州に在つて、寧波府城の西南に當る。【六】秋旻　爾雅に「秋天を旻天といふ」とあり、又李白の詩に「衆星羅秋旻」とある。【七】天台　山の名、台州に在る。道書に、上、台星に應ずるから名づけたとある。【八】蟉蚼　甘泉賦に蛉巆蟉蚼とあつて、李善註に「深くして厓なきの貌」とある。【九】翔走　飛禽走獸。【一〇】澎湃　上林賦に洶湧澎湃とあつて、司馬彪の解に「澎湃は波相戾るなり」とある。【一一】韶鈞　韶は舜の樂、鈞は鈞天廣樂。【一二】輪囷　鄒陽の獄中の書に輪囷離奇とあつて、張晏の解に「委曲盤戾なり」とある。【一三】金烏　淮南子に「日中に踆烏といふものあり、三足の烏なり、金烏と稱するあり、その色を以ての故に云ふ」とある。隋の孟康の日を詠ずる詩に金烏升曉氣、玉檻漾晨曦」とある。【一四】六合　四方上下、卽ち天地。【一五】甌閩　今の福建地方、閩には七閩の地であつて、甌冶子、かつて劍を此に鑄りしが故に甌閩と稱す。【一六】禹路　舜禹南巡の路。【一七】浙江　卽ち潮江、越絕書に「子胥、死して大江に捐てらる、發憤馳騰、氣、奔馬の若く、乃ち神を大海に歸す」とあり、水經註に「錢塘江濤、二月八月、最も高く、峨峨二丈有餘。吳越春秋、以て子胥文種の神と爲すは、

これな謂ふなり」とある。【一八】峨岷　峨眉と岷山、ともに蜀中の高山。一統志に「眉州城南、岷山より來り、連岡疊嶂、延袤三百餘里、峨眉山と爲り、三峰を突起す」とある。【一九】廬嶽　即ち廬山、唐では江州に屬し、後には江西南昌府城の西に在る。【二〇】崔崒　高峻の貌。【二一】陂陀　司馬相如の哀二世賦に登二陂陀之長阪一とあつて、匡謬正俗に「陂陀は猶ほ靡迤といふがごときのみ」とある。【二二】湖淪　湖は彭蠡湖を指す。【二三】懸瀑垂天紳　李白の廬山開先寺瀑布の詩に、挂レ流三百丈、噴レ壑數十里といひ、宋之問の詩に、兩巖天作レ帶、萬壑樹披レ衣とある。天紳は、天の帶。孟郊の詩にも用ひてある。【二四】羅浮　二山の名、後の廣州曾城博羅二縣の境に在る。【二五】戛　突き當る。【二六】南海漘　東都賦に東澹海漘とあつて、その註に「漘は崖なり」とある。【二七】鶱　飛び上る。【二八】側修鱗　杜甫の詩に修鱗脱二遠枝一とある。今の動物學でいへば、鯨に鱗は無いが、むかしは鯨を魚と考へて居たから、かく云つたのである。【二九】城闉　闉は城上の重門。詩經に出二其闉闍一とあつて、その註に「闉は曲城なり」とある。【三〇】青雲　ここでは仙人じみた方の事で、山林隱逸の士をいふ。【三一】異於民　民は吾と同義に用ふ。【三二】九疑　湖中記に「九疑山は、蒼梧道縣に在り、九山相似て、行者疑惑す、故に九疑と名づく」とあり、水經註に「峰は數郡の間に秀で、異嶺同勢、遊者疑ふ」とある。【三三】斑竹啼舜婦　博物志に「帝の二女、舜の二妃を湘夫人といふ。舜崩す、二妃啼いて以て竹を揮ふ、竹、盡く斑なり」とある。【三四】清湘沈楚臣　史記に「屈原、楚に仕へ、上官大夫に讒せられ、石を懷いて汨羅に投じて死す」とある、汨羅は即ち湘水の濁で、水至つて清きが故に清湘といつたのである。【三五】衡山　即ち衡岳、衡州に在る。【三六】尋崧　崧は嵩山、即ち中嶽、河南登封縣に在つて、漢の洛陽の地。【三七】洛　即ち洛陽。【三八】歷華　華は華山、山海經に「一名太華、石壁、上、削り成すが如し」とある、即ち西嶽。【三九】秦　長安は、古しへの秦の都なるが故に云ふ。【四〇】非吾道　吾が道ふものに非ずといふ意。【四一】江魚不池活　この二句は、潘岳秋興賦の譬猶二池魚籠鳥有二江湖山藪之思一に本づいたのであらう。【四二】西方教　即ち佛教。

【題義】詩中に自レ來二連州寺一とあるを見ると、無論、韓愈が陽山の令たりし時に作つたので、陽山は、即ち連州の屬邑である。それから、韓愈は、王宏中の爲に、宴喜亭の記を作り、その中に、連州に居た頃、學佛の人景常元惠と與に游んだと書いてあるので、その元惠は、即ち此に謂ふ惠師である。元惠上人は、雲水の坊主で、足跡、海內に遍ねく、この詩、廣州に立ち寄つて、韓愈に遭つたものと見える。そして、これから、揚子江を渡つて、洛陽・長安の兩京へ往かうといふから、韓愈は、乃ち此詩を作つて贈つたのである。韓愈は、佛骨表を上つた位で、非常な佛嫌ひであるにも拘はらず、坊主どもと大分交游したので、この惠師といひ、次に見えた靈師といひ、その他高閑、大顚、文暢あり、賈島も、元は坊主で無本といつた。彼が坊主と交際したのは、坊主を敎化して、聖人の道に引き入れる爲だといふものもあるが、それは、故事付けで、孟尙書に與ふる書中に大顚の事を記して「頗る聰明にして道理を識る、實に能く形骸を外にし、理を以て自ら勝り、事物の爲に侵亂されず、これと語るに、盡くは解せずと雖も、要するに、自ら胸中滯礙なし。以爲へらく、得がたしと。因つて、與に來往す」とあるのが、多くの場合に於ける眞相であらう。しかし、流石は韓愈であるから、これ等の坊主に與へた詩文には、坊主臭いことは少しも言はないので、この詩に於ても、唯だ旅行の事のみを逃べて居るのが、即ちその好適例である。

【詩意】元惠上人は、坊主ではあるが、卓犖不羈の人であつて、年わづかに十五の頃から、天下の山水を愛し、超然として、朋友親戚に暇乞を爲し、冠を脫して頭髮を剪りし後、自由自在に、山水の間を飛び步いて、到る處に、その足跡を留めて居る。かくて、第一に發跡して、四明山に入り、雲梯を

踊んで、秋空に上り、やがて天台に登つて望むと、多くの谷には、巖が角角しく尖つて居る。夜、その最高頂に宿し、頭を擧げて天上の星辰を望むと、その數は、限りなく、光芒互に照らし合つて、南北に爭つて列れる衆壑と相映じて居る。ここは、非常に高い處で、飛禽走獸も居らず、自然に莊嚴にして神神しい。その時、颶風が木石を吹くと、澎湃として大きな聲を發し、さながら韶鈞といふ古しへの尊い音樂を聞く樣な氣がした。夜半に不圖起つて脚底を見下すと、海波の中に日輪が銜まれ、水中に住む魚龍などの怪物は、海が燒けるかと思つて、叫び嘯いて悲辛を爲すかと疑はれ、奇怪なる水蒸氣は、或は紫、或は赤といふやうに、樣樣の色彩を爲し、互に磨擦し合つて、はては、ぐるぐる廻旋する。その内に、金烏は、すでに中天に跳り上り、天地の間は、俄に清新になつた。凡そ高山で日出を觀るのは、奇絕快絕であるが、これは、天台の絕頂であるから、又一しほである。上人は、前から會稽には禹穴と云つて、大禹の故蹟があると聞いて居たから、東に向つて、古しへの甌閩の地を窺つたが、ここは、むかし、百越といつて、文身斷髮の野蠻國であつたから、今でも、その風が殘つて居て、古跡を保存するなどいふ考もなく、口耳相承けて、流傳して居る間に、いつしか其眞を失ひ、段段朧氣に成つて、果して、さうであるか、どうか、分からない樣になり、舜や禹の如き聖人の通つた路も、長しへに湮滅して仕舞ひ、格別面白くもなかつた。そこで、踵を廻して、浙江に來り、廣陵の觀濤を試みると、濤は屹然起立して、蜀中の峨岷二山よりも高く、伍子胥が冤死した其餘憤が、死後なほ猶ほ息まず、千年後の今でも、昨日の事の樣に感ぜられる。子胥の事の實否は分からぬが、そんな事は、吾吾の關係したことでは無いといふので、これを棄て去り、今度は、揚子江を溯つて、廬山に往き、浩蕩として巡遊を極めた。抑も廬山は、非常に面白い山で、崔崒として高い處は、雲表に隱れ、陂陀として低い處は、段段下つて隄の樣になり、やがて鄱陽湖に這入つて仕舞ふ。時しも雨が初めて晴れると、名だたる瀑布は、水量が增加して、さながら、天の帶かと疑はれる位。つい去年は、廬山から嶺南に出て廣東に赴き、羅浮山に遊び、步して、南海の端に突き當つて引き返した。その南海の端は、流石に熱帶地方であるから、陽德の廣大なるを見るべく、草木は繁茂して四時常に春の如く、大鵬は飛び上つて長い羽を落し、鯨は戲れて水中に長い鱗を逆立てて居る。そこで、愈よ引き返し、この頃、陽山附近の連州なる某寺に留錫せられ、大分、歸依する者もあるが、かつて、城門に入つたことはなく、日ごとに、山林隱逸の士を攜へて、山水の勝を探り、この先には、もう陸もないといふ海岸の果までも窮められた。かくて、太守は、其德を慕うて、態態迎ひに往つても、上人は、出て行かず、羣官が頻りに招いても、無益であつた。上人の高尚なることは、これを以て概見すべく、囊中には、一錢もないが、却つて、富者を貧なりといひ、ひとりで打澄まして居る。われは、幸ひ陽山に居て、上人と交際することが出來たが、昨日、突然行方が知れなく成つたといふ知らせがあつた。さて何處へ往つたかといふので、使を遣つて、その鄰の人に尋ねさせ、はては奔波

して、自身で跡を追ひかけて、やつと之に追ひ付き、手を執つて、どうした譯かといつて問ふと、上人は、一向平氣で、われを顧みて却つて嘆息し、君は大に吾と異なつて居る、離合は、むかしから有ることで、暇乞をするなどは、どうでも善いことである。それを態態跡を追ひかけて、此まで來られた處を見ると、君は、どうも、吾とは考が違つて居る。九疑山の絶勝は、久しく聞いて居たから、今度こそ、夙志を伸べむが爲に、其地に行くので、その外、娥皇女英が、舜の崩御を聞いて、これを追へども及ばず、やがて、涙を揮ふと、それが竹にかかつて、斑竹になつたといふ其遺跡もあるし、楚の忠臣たりし屈原が、水に投じて死んだ汨羅といふ處も、ちやんと殘つて居る。それから衡山と洞庭湖とは、路順であるから、是非立ち寄る積りであるし、その次には、嵩山を尋ねて、洛陽に至り、華山を歷て、愈よ長安に乘り込むといふ豫定で、もとより、雲水の身で浮遊するからには、處定めず、ぶらぶらして居るし、偶然行つた處が、卽ち路の經由する處である。さういふ譯だから、格別暇乞もせずに出立したのであると、かう云つた。そこで、此方も聊か腹が立つたから、なる程、さういふ了見ならば、ここを去つて行くも善からう。元來、君の守れる道は、我が遵奉すべき道でなく、君が君の道に從ふのは、もとより勝手次第。江中に住む魚は、池に持つて來ては活きて居らず、野に住む鳥は、籠中に飼つて馴らすことは六づかしい。君の如く、天下を飄遊するものを、しばしなりとも、無理に止めたのは、吾輩が惡かつた。われは、儒敎を信じて、西方の佛敎は大嫌ひであるが、君が、坊主に似合はず、氣違じみて、且つ醇粹なる處は、平生氣に入つて居たし、われは、坊主を以て、無職業なるのらくら者として大に惡んで居たが、君が獨りお上手も言はず、そして、淳朴なのには、平生心服して居た。そこで、今日、君を送るといつても、尋常別離の態を爲さず、君にして往きたくば、遠慮なく往くが善い、君と我とは、本來趣を異にして居るから、何も女女しく涙を流して、巾を霑すにも及ばないと、かう云つて、笑つて別れやうではないか。

【諭論】黃氏日抄に「惠師を送るの詩、皆、その游歷の勝槪を敍し、終に之を律するに正道を以てす」といひ、朱竹垞は「名山の遊を歷敍し、挨次鋪敍、語を下す鍊淨」といひ、その精彩は、天台廬山の勝を敍した處に在るので、結末十句は、送別の意を述べたのであるが、尋常情思の外に逸出して居る處が、まことに面白い。

送靈師

靈師を送る

佛法入中國。爾來六百年。　佛法、中國に入る、爾來六百年。

齊民逃賦役。高士著幽禪。　齊民、賦役を逃れ、高士、幽禪を著く。

官吏不之制。紛紛聽其然。　官吏、これを制せす、紛紛として、その然ることを聽す。

耕桑日失隷。(二)朝署時遺賢。
耕桑日に隷を失ひ、朝署、時に賢を遺す。

靈師皇甫姓。胤冑本(三)蟬聯。
靈師は皇甫の姓、胤冑、本と蟬聯たり。

少小涉書史。早能綴文篇。
少小にして書史に涉り、早く能く文篇を綴る。

中間不得意。失跡成(四)延遷。
中間、意を得ず、跡を失うて延遷を成す。

逸志不拘敎。(五)軒騰斷(六)牽攣。
逸志、敎に拘はらず、軒騰して牽攣を斷つ。

(七)圍棋鬭白黑。生死隨機權。
棋を圍んで白黑を鬭はし、生死、機權に隨ふ。

(八)六博在一擲。(九)梟盧叱迴旋。
六博、一擲に在り、梟盧、廻旋を叱す。

(一〇)戰詩誰與敵。浩汗橫(一一)戈鋋。
詩を戰はして、誰か與に敵せむ、浩汗、戈鋋を橫ふ。

飲酒盡百醆。嘲諧思逾鮮。
酒を飲んで百醆を盡し、嘲諧、思、逾よ鮮なり。

有時醉花月。高唱淸且緜。
時あつて花月に醉ひ、高唱、淸且つ緜たり。

四座咸寂默。杳如奏(一二)湘絃。
四座咸な寂默、杳として湘絃を奏するが如し。

尋勝不憚險。(一三)黔江屢(一四)洄沿。
勝を尋ねて、險を憚らず、黔江、屢ば洄沿。

(一五)瞿塘五六月。驚電讓歸船。
瞿塘五六月、驚電、歸船に讓る。

怒水忽中裂。千尋墮幽泉。
怒水、忽ち中より裂け、千尋、幽泉に墮つ。

環迴勢益急。仰見團圞天。
環迴、勢益す急、仰いで團圞の天を見る。

投身豈得計。性命甘徒捐。
身を投ずる、豈に計を得むや、性命、徒に捐つるを甘んず。

浪沫蹙翻涌。漂浮再生全。
浪沫、蹙まつて翻涌、漂浮して、再生全し。

同行二十人。魂骨俱坑塡。
同行二十人、魂骨俱に坑塡。

靈師不掛懷。冒涉道轉延。
靈師、懷に掛けず、冒涉、道、轉た延ぶ。

(一六)開忠二州牧。詩賦時多傳。
開忠二州の牧、詩賦時に多く傳ふ。

失職不把筆。珠璣爲君編。
職を失うて、筆を把らず、珠璣、君が爲に編す。

强留費日月。密席羅嬋娟。
强ひて留めて日月を費し、密席に嬋娟を羅す。

昨者至(一七)林邑。使君數開筵。
昨は林邑に至り、使君、數ば筵を開く。

逐客三四公。盈懷贈(一八)蘭荃。
逐客三四公、懷に盈ちて蘭荃を贈る。

湖游泛(一九)漭沆。溪宴駐潺湲。
湖游、漭沆に泛び、溪宴、潺湲に駐まる。

別語不許出。行裾動遭牽。
別語、出すを許さず、行裾、動もすれば牽くに遭ふ。

郴州競招請。書札何翩翩。　郴州、競うて招請し、書札、何ぞ翩翩たる。
十月下桂嶺(二〇)。乘寒恣窺緣。　十月、桂嶺を下る、寒に乘じて窺緣を恣にす。
落落王員外(二一)。爭迎獲其先。　落落たり王員外、爭ひ迎へて其先を得たり。
自從入賓館(二二)。占悋久能專。　賓館に入つてより、占悋して久しく能く專にす。
吾徒頗攜被。接宿窮歡妍(二三)。　吾が徒、頗る被を攜へ、宿を接して、歡妍を窮む。
聽說西京事(二四)。分明皆眼前。　西京の事を說くを聽けば、分明、皆眼前。
縱橫雜謠俗。瑣屑咸羅穿。　縱橫、謠俗を雜へ、瑣屑、咸な羅穿。
材調眞可惜。朱丹在磨研(二五)。　材調、眞に惜むべし、朱丹、磨研に在り。
方將斂之道(二六)。且欲冠其顚(二七)。　方に將に之を道に斂めむとし、且つ其顚に冠せむと欲す。
韶陽李太守(二八)。高步陵雲煙。　韶陽の李太守、高步して雲煙を陵ぐ。
得客輒忘食。開囊乞繒錢(二九)。　客を得ては、輒ち食を忘れ、囊を開いて、繒錢を乞ふ。
手持南曹敍(三〇)。字重靑瑤鐫。　手に南曹の敍を持し、字は靑瑤に鐫せしよりも重し。
古氣參象繫(三一)。高標摧太玄(三二)。　古氣、象繫を參へ、高標、太玄を摧く。

維舟事干謁。披讀頭風痊(三三)。　舟を維いで、干謁を事とし、披讀すれば、頭風痊ゆ。
還如舊相識。傾壺暢幽悁(三四)。　還た舊相識の如く、壺を傾けて幽悁を暢ぶ。
以此復留滯。歸驂幾時鞭。　これを以て復た留滯、歸驂、幾時か鞭たむ。

【字解】【一】佛法入中國　蔣註に「按ずるに、後漢の明帝、夢に金人を見、羣臣に問ふ。或は曰く、西方に神あり、名を佛といふ、その形、長丈六尺にして金色、と。ここに於て、使を天竺に遣して、佛の道法を問ひ、形像を圖畫して以て歸り、その敎、因つて流れて中國に入る。この詩、漢の明帝の時に據つて之を言ふのみ。故に、その佛骨表に云ふ、後漢の時、流れて中國に入ると。又云ふ、漢の明帝の時、始めて佛法あるなり」とある。但し、もつと古い時代にする說もあるので、漢武故事に「昆邪王、休屠王を殺して來り降り、その金人の神を得て、これを甘泉宮に置く」とあれば、佛の中國に入つたのは、漢武からで、成哀の間には、經もあつたらうと云はれて居る。又杜預の行守編に「漢武、昆明池を作り、地を掘つて黑灰を得たり。東方朔云ふ、西域の道人に問ふべし、と。西域の道人は佛の徒なり」とあり、又開皇歷代三寶記に「劉向稱す、予、典籍を覽る、すでに經あるを見る、將に知らむとす、周時の九流釋典、秦、燔除すと雖も、漢興つて復た出づと。すなはち、先漢の前、逆に周に至り、佛あり、經あり、その來るや遠し。范曄、胡すれぞ、以て明帝の時始めて中國に入ると謂ふか。退之は一世の大儒、謬謨を承襲するものに非ず、將た、心、その敎を惡むに由つて、復た詳に其源流の自るところを考へざるのみ」とある。【二】朝署　朝廷と官署。【三】蟬聯　晉書に「爵位蟬聯、文武相繼ぐ」といひ、又吳都賦に蟬聯林邸とあつて、その註に「蟬聯は絕えざる貌」とある。【四】延遷　逡巡して進まざる貌。【五】軒騫　飛び上る。【六】牽攣　牽制拘攣、戒律の拘束。【七】圍棋　邯鄲淳の藝經に「棊局縱橫各十七道、合せて二百八十九道、白黑棊子各一百五十枚」とあり、桓譚新論に「俗に圍棋あり、これ兵法の類」とある。【八】六博　楚辭の招魂に「箟蔽象棊有六博些」とあつて、采の目、これを六つ轉がして丁と半とを爭ふ。【九】梟盧　采の目の名、丁といひ半といふやうな意で、晉書劉毅傳に「毅、劉

辭と悵痛す。毅、擲つて雉を得たり、大に喜び、牀を繞つて叫んで曰く、盧を能くせざるに非ず、これを事とせざるのみ、と。裕、これを惡み、因つて五木を接し、これに久しうして曰く、老兄、試に卿の爲に答へむと。すでにして、四子ともに黑く、その一子、轉躍して定まらず、裕、聲を厲まして之を喝すれば、即ち盧と成る、毅、意殊に快からざるなり」とあり、杜甫の詩に「馮陵大叫呼五白、袒跣不肯成梟盧」とある。【一〇】戰詩　一に爭戰に作り、或は文戰に作り、詩戰に作る。方崧卿は「戰詩戰文、唐人の語なり」といひ、白樂天は戰文重操觚といひ、劉夢得は戰文矛戟深誰與といつた。【一一】戈鋋　鋋は小矛。【一二】湘鼓　楚辭に使湘靈鼓瑟兮令海若舞馮夷」とある、湘靈は湘君の靈魂。【一三】黔江　揚子江の上流で、重慶以上をいふ。【一四】洄沿　詩經に遡洄從之とあり、爾雅に「流に遡つて上るを泝洄といふ」とある。又書經に「江海に沿ふ」とあつて、その註に「流に順つて下るを沿といふ」とある。二字で江水を上下すること。謝靈運の詩に水涉盡洄沿とある。【一五】瞿塘　寰宇記に「瞿塘は、夔州の東一里に在り、古の西陵峽なり、連崖千丈、崩流電激」とあり、水經註に「峽中に瞿塘・黃龍の二灘あり、夏水廻復、沿泝忌むところ」とある。【一六】開忠二州牧　開忠は二州の名、今一は重慶に屬し、一は夔州に屬す。姚道輔の言に「二牧は韋處厚・白居易なり」とあるが、二人の出でて守たりしは、元和の末であるのに、この詩は貞元二十年であるから、この說は、無論誤つて居る。【一七】林邑　驩州に在る。【一八】蘭莖　香草の名。【一九】漭沆　西京賦に滄池漭沆とあつて、李善の註に「漭沆は寬大なり」とある。【二〇】桂嶺　縣の名、賀州に在る。【二一】王員外　唐書王仲舒傳に「吏部考功員外郞に遷り、坐累して連州司戶となる」とあるが、舊唐書の本傳には見えぬ。なほ後に大石頭驛の條下に於て詳論することにする。【二二】占愧　獨占して外に出さぬ。【二三】捿宿　泊まり込む。【二四】西京　即ち長安。【二五】朱丹　呂氏春秋に「丹は磨くべきなり、しかも赤を奪ふべからず」とある。【二六】道　即ち儒家の道。【二七】冠其顚　頭に冠を著せる。【二八】李太守　この人の事は分からぬ。【二九】乞　與へる。【三〇】南宮餞　南宮は吏部員外郞、即ち王仲舒を指す。餞は、今次靈師を送るの序である。王仲舒は、古文家で、韓愈の作つた墓志に「爲るところの文章、世俗の氣なし」とある。【三一】象繫　易の象辭と繫辭傳、杜甫の詩に前哲垂象繫とある。【三二】太玄　揚雄の著、易に擬して宇宙現象の階段的發達の形式を數論的に表顯したもの。【三三】頭風痊　莊子に「今予病少しく痊ゆ」とあり、典略に「魏の太祖、陳琳を以て記室を管せしめ、諸書を作る。檄草して成るに及びて、太祖に呈す。太祖、先に頭風に苦む。この日、疾發す。琳の作るところを讀み、翕然として起つて曰く、これ我が病を痊やす」とある。【三四】閑悄　悄は憂悒。

【題義】この詩も、前首と大抵同時、即ち貞元十九年、陽山に於て作つたのである。篇中に王員外といふ人があるが、名は弘中、字は仲舒、その時、連州司戶に謫せられて居たことは、宴喜亭記に見えて居る。靈師は俗姓を皇甫といつたことが、同じく篇中に見えて居るだけで、その他の經歷等は、一切分からぬ。

【詩意】佛法が我が支那に入つたのは、後漢の世で、それから、今日に至るまで六百年、一般の人民は、佛道に入れば納稅の義務を免れるといふので、相爭つて此敎を奉じ、高尚なる士人は、深遠祕密の禪を研究して、世事を拋擲して仕舞ふやうになる。しかも、何等の制裁も無く、歷代の官吏は、まことに不注意で、毫も之を禁せず、紛紛として、その然るに任せて置いたから、弊害が百出した。そこで、耕桑を業とするものは、追追に少くなり、朝廷官署に於ても、賢人を遺して之を登用することが出來ないといふ有樣である。ここに、靈師は、本姓皇甫氏で、名家の裔が今日まで蟬聯して絕えない。されば、この靈師も、年若き頃より、書史を涉獵し、早くから、上手に文章を作つたが、中ごろ、不得意の境涯に陷り、跡を失つて、愚圖愚圖して居る內に、とうとう坊主と成つて仕舞つた。しかし、普通の坊主とは違ひ、飄逸なる志を持つて居て、敎義に拘泥せず、おのが勝手に飛び上つて、

少しも戒律などの束縛を受けない。第一に碁が好きで、黒白の石を鬪はし、生死は石を下す機權から生ずるといふので、佛敎には無い生死だの、機緣だのいふことに關係して居る。その次には、博奕が好きで、六つの采を投げ出して、丁半を爭ひ、はては氣合を以て、これを叱して廻旋せしめるといふので、これも、全く坊主らしくない。その外、詩を作つて、人と文藻を鬪はし、その時は、非常な勢であるから、誰も之に敵するものなく、才鋒は森然として、數限りなき矛を押し立てた樣である。その上に又酒も飲むので、平生百杯を盡し、飲めば飲む程、氣が確かになつて、口に任かせて、諧謔の言葉を吐き出し、それが愈よ鮮かである。仍つて、時としては、花月に醉ひ、大勢の居る席上で、聲高に歌ひ出すと、その聲は淸らかに、長く引いて聞こえ、四座の客は、皆感に堪へ兼ねて、ひつそりして居ると、歌聲愈よ揚がつて、さながら、湘靈が瑟を彈ずるやうである。それから、旅行も大好で、勝地を探るに就いては、少しも路の險なるを憚らず、揚子江の上流を屢ば上下したことがある。中にも、五六月の頃に、瞿塘峽を通つたことがあつたが、歸船の速なることは、閃めく電光にも勝る位、そこに難所があつて、逆卷く水は、中間に於て一段凹んで居て、その處に嵌まり込んだら最後、千尋の深さある黃泉の底へ落ちて仕舞ふ。そこで、水は其難所を繞つて渦をなし、その勢、益す急に、左右は絕壁に支へられ、仰いで、團團たる天を見るのみである。されば、慣れた舟人でさへ、この難所に身を投じて舟を進めるは、計を得たものでなく、その巖陰を避けて、他の側を通ることを習とする

のに、靈師は、水の逆落しに成つて居る處に舟を入れやうとしたので、丸で命を無駄に棄てるやうなものである。それでも、同行を志願したものが大分あつて、愈よ浪が壅められ、巖に當つて碎け、沫を生じて涌き返つて居る處に舟を入れると、水勢益す激して、舟は見る間に顚覆したが、靈師は、水練の心得があつた故に、自ら泳いで再生し、どうやら、助かつたものの、同行二十人は、魂も、骨も、粉微塵に成つて、渦卷いて居る穴の底に沈んで仕舞つた。こんな大事變に出遇つても、靈師は、格別心にも止めず、相變らず、冒險的の跋渉を試み、次第に道を延ばして、蜀の奧地に進んで往つた。ここに、開忠二州の刺史は、偉らい人達で、その詩賦は、從來多く世上に傳はるにも拘はらず、左遷の厄に遭つて此に來てからは、碌に筆も執らなかつたが、今次靈師が來游せしに因つて、珠璣を列ねた樣な文字を編んで、見事な詩を贈つたとのことである。それのみか、靈師を無理に引き留めて、歲月を送り、ある時は、祕密の座敷に於て、嬋娟たる美人を侍坐せしめたといふことである。その後、靈師は、方方步るいた末に、古しへの林邑、卽ち廣東地方に來ると、太守は、頻りに之を歡迎して、數ば宴を催し、例の左遷の厄に遇つた三四の人人も、しきりに詩文を贈答し、たとへば、懷中に滿つるまで蘭荃等の香草を贈つた樣なものであつた。それから、漭沆として廣き湖水に遊んでは舟を泛べ、潺湲の音涼しき溪中に往いては、宴を催し、やがて別れの事を言葉にほのめかすと、滅多に此からは外に出さぬといつて、行きかけた裾を引つ捉へて、決して離さない。すると、近鄕の諸州でも、是非一度は來

て貰ひたいといつて、競うて靈師を招待し、その書札は、翩翩として遣つて來るが、林邑の太守が靈師を解放せぬから仕方がない。しかし、その年の十月に桂嶺を下り、熱帶地方では冬の方が善いといふので、この時に乘じて探勝を縱にし、やつとの事で、我が今居る連州に到著した。ここに吏部考功員外郎の王仲舒といふ人が居て、その性質は、極めて磊落であるが、爭つて迎へ、率先して自宅に案內し、賓館に入れ置き、丸で獨りで靈師を占領して、出し惜みをする樣な風で、久しい間、自ら專らにすることが出來た。陽山は、連州に近いが、交通が不便であるから、自分達は、夜具を持參し、泊りがけで之を訪問し、互に心を語り合うて、十分の歡喜を極めた。就中、長安洛陽の事を語り出すのを聞けば、遷謫の身には、耳新らしく、明かに眼前に湧き出る如く思はれ、まことに面白くて堪まらぬ位であつた。靈師が話をする時には、縱橫に閭巷卑俗の語を交へ、極めて細かなことまで羅列穿通するから、愈よ以て妙である。そこで、段段話をして見ると、靈師は、天晴の材調、坊主にして置くのは、まことに惜い位、げにや、朱丹も磨かざれば、赤い光も出ないといふ通り、これ程の材調あるものを坊主の中に埋沒さして置くのは、まことに、殘念至極であるから、どうにかして、この人を引き摺つて來て、孔子の道の中に收め、そして、剃り毀つた頭に毛を生やして、冠を著け、つまり還俗するやうにしたいと思つた。これから、靈師は、連州の鄰境なる紹州に往くといふが、その地の李太守は、高步して雲煙を淩ぎ、隨分出世をして居るにも拘はらず、ひどく客を愛し、客に對しては飲食をも忘れる位、その上、囊を開いて、金錢でも、布帛でも、少しも惜ますして、客に與へるといふ位、腹の大きい人物であつて、かの南曹に官する王員外の作つた贈序を讀んで、はじめて靈師の事を知つたといふが、成程、その贈序は、大した名文で、靑瑤に彫り付けたものよりも重い位。その文章は、古色に富んで、丁度、易の彖辭や繫辭傳を混用した樣であり、高尙なる標致は、揚雄の太玄經をも滅茶滅茶に碎き去る程である。そこで、李太守から、態態迎ひを寄越し、靈師は、やがて舟を繫いで謁見することに成つて、近近出發するが、さて始めて相逢ふ時、君の事を知つたのは、この贈序の御蔭だから、もう一遍、念の爲に讀んで見やうといつて、やがて之を披讀すると、頭痛も直る位、まして、贈序中に見えた當人に逢つたのだから、その面白いことは、言ふまでもない。君とは、今回始めて逢ふが、右の次第で、舊知も同樣であるといひ、酒壺を傾けて、憂悒の情を暢べられることであらう。しかし、かくの如く、李太守に好遇されて、その地に滯留したならば、何時、馬に鞭つて此地に歸つて來るか、それは、前以て分からぬことで、自分は、靈師の還俗を希望するのであるが、それも、當分差し控へる外はない。マア、彼方へ往つて、チヤホヤと持て囃されるのも惡い事ではないから、ゆつくりして居るも善からう。

【餘論】この篇は、六段より成り、起首、佛法入㆓中國㆒より朝署時遺㆑賢に至るまでは、佛教流行の弊害を敍し、靈師皇甫姓より香如㆑奏㆓湘絃㆒に至るまでは、靈師の人物、尋常僧侶と其撰を異にし、圍碁博奕

詩酒を好むことを敍し、尋レ勝不レ憚レ險より冒渉道轉延に至るまでは、瞿塘の冒險を主として、その旅行を敍し、開忠二州牧より書札何翩翩に至るまでは、從前處處に於て歡迎されたことを敍し、十月下二桂嶺一より且欲レ冠二其顚一に至るまでは、今次陽山に於て邂逅せる次第を敍し、韶陽李太守より結末譎騙幾時輟に至るまでは、これから韶州に赴くことを敍したのである。乾隆御批には「退之、佛を闢き、却つて頻りに浮屠に贈る詩を作る。前篇は、但だ、その山水に放浪するを敍し、後篇は、干謁飲博、有らざるところなし。その浮屠と稱する所以は、皆彼法の戒むるところ、良に彼法に拘はらざるを以て、乃ち始めて吾が徒に近く、且つ其人を人にせむと欲するのみ、幷せて未だ先王の道を明かにし、以て之を道くに暇あらざるなり。二僧、諸方を遊走し、行止亦た略ぼ相似たり。而して、兩作、各生面を開き、絶えて雷同せず、是れ其匠心布置の處」とある。それから朱竹垞は「亦た是れ順敍鋪去、筆力自ら蒼」といひ、何義門は瞿塘の數句を評して「造句警奇」といひ「この段、獨り才調あるのみならず、且つ膽勇を兼ぬるを見る」といひ、朱丹の四句を評して「四語是れ詩を作るの旨」といひ、ともに善く肯綮に中つて居る。

縣齋有懷

縣齋に懷あり

少小尚奇(一)偉。平生足悲(二)吒。　少小にして奇偉を尙び、平生悲吒するに足れり。

猶嫌子(三)夏儒。肯學樊(四)遲稼。　猶は子夏の儒を嫌ひ、肯て樊遲の稼を學ばむや。

事業窺臯(五)稷。文章蔑曹(六)謝。　事業、臯稷を窺ひ、文章、曹謝を蔑す。

濯(七)纓起江湖。綴(八)珮雜蘭麝。　纓を濯うて江湖に起り、珮を綴つて、蘭麝を雜ふ。

悠悠指長道。去去策高駕。　悠悠として長道を指し、去去として高駕に策つ。

誰爲傾(九)國媒。自許連(一〇)城價。　誰か傾國の媒たらむ、自ら連城の價を許す。

初隨(一一)計吏貢。屢入(一二)澤宮射。　初め計吏に隨つて貢せられ、屢ば澤宮に入つて射る。

雖免十(一三)上勞。何能一(一四)戰霸。　十上の勞を免ると雖も、何ぞ能く一戰して霸たらむ。

人情忌殊異。世路多權詐。　人情、殊異を忌み、世路、權詐多し。

蹉(一五)跎顏遂低。摧折氣愈下。　蹉跎として顏遂に低れ、摧折して氣愈よ下れり。

冶(一六)長信非罪。侯(一七)生或遭罵。　冶長、信に罪に非ず、侯生、或は罵に遭ふ。

懷書出(一八)皇都。銜淚渡淸(一九)灞。　書を懷にして皇都を出で、淚を銜んで淸灞を渡る。

身將老寂寞。志欲死閑暇。　身、將に寂寞に老いむとし、志、閑暇に死せむと欲す。

朝食不盈腸。冬衣纔掩骼(二〇)。　朝食、腸に盈たず、冬衣、纔に骼を掩ふ。

軍書既頻召。戎馬乃連跨。
(二一)大梁從相公。(二二)彭城赴僕射。
弓箭圍狐兎。絲竹羅(二三)酒炙。
(二四)兩府變荒涼。(二五)三年就休假。
求官去東洛。犯雪過(二六)西華。
塵埃(二七)紫陌春。風雨(二八)靈臺夜。
名聲荷朋友。援引乏(二九)姻婭。
雖陪(三〇)彤庭臣。詎縱(三一)青冥靶。
寒空聳(三二)危闕。曉色曜(三三)修架。
捐軀(三四)辰在丁。(三五)鎩翮(三六)時方蜡。
投荒誠職分。領邑幸寬赦。
湖波翻(三七)日車。嶺石坼(三八)天罅。
毒霧恒熏晝。炎風毎燒夏。

軍書、既に頻りに召し、戎馬、乃ち連りに跨る。
大梁、相公に從ひ、彭城、僕射に赴く。
弓箭、狐兎を圍み、絲竹、酒炙を羅ぬ。
兩府、變じて荒涼、三年、休假に就く。
官を求めて東洛に去り、雪を犯して西華を過ぐ。
塵埃紫陌の春、風雨靈臺の夜。
名聲、朋友を荷ひ、援引、姻婭に乏し。
彤庭の臣に陪すと雖も、詎ぞ青冥の靶を縱にせむ。
寒空、危闕を聳え、曉色、修架を曜かす。
軀を捐てて、辰、丁に在り、翮を鎩がれて、時、蜡に方れり。
荒に投ずる、誠に職分、邑を領する、幸に寬赦。
湖波、日車を翻し、嶺石、天罅を坼く。
毒霧、恒に晝に熏し、炎風、毎に夏を燒く。

雷威固已加。颶勢仍(三九)相借。
氣象杳難測。聲音吁可怕。
夷言聽未慣。(四〇)越俗(四一)循猶乍。
指摘兩憎嫌。(四二)睢盱互猜訝。
祇緣恩未報。豈謂生足藉。
(四三)嗣皇新繼明。率土日(四四)流化。
惟思滌(四五)瑕垢。長去事(四六)桑柘。
(四七)斸嵩開雲扃。(四八)壓潁(四九)抗風榭。
禾麥種滿地。梨棗栽繞舍。
兒童稍長成。(五〇)雀鼠得驅嚇。
官租日輸納。村酒時(五一)邀迓。
閑愛老農愚。歸弄(五二)小女姹。
如今便可爾。何用(五三)畢婚嫁。

雷威、固より已に加はり、颶勢、仍つて相借す。
氣象、杳として測り難く、聲音、吁怕るべし。
夷言、聽いて未だ慣れず、越俗、循うて猶ほ乍。
指摘、兩つながら憎嫌、睢盱、互に猜訝。
祇だ恩未だ報いざるに緣つて、豈に生、藉るに足れりと謂はむや。
嗣皇、新に明を繼いで、率土、日に化を流ぐ。
惟だ瑕垢を滌ひ、長く去つて桑柘を事とせむを思ふ。
嵩を斸りて雲扃を開き、潁を壓して風榭に抗す。
禾麥、種ゑて地に滿ち、梨棗、栽ゑて舍を繞る。
兒童、稍や長成、雀鼠、驅嚇を得む。
官租日に輸納し、村酒時に邀迓。
閑に老農の愚なるを愛し、歸つて小女の姹を弄せむ。
如今、便ち爾るべし、何ぞ婚嫁を畢るを用ひむ。

【字解】【一】奇偉 尋常ならずして優れて居る。【二】悲吒 郭璞の游仙に「撫レ心獨悲吒」とあり、杜甫は「令二人發悲吒一」といつて居る。吒は嘆く痛惜する。【三】子夏儒 論語に、孔子、子夏に向つて「汝、君子の儒となれ、小人の儒となる勿れ」とある。【四】樊遲 孔子の弟子で、圃を爲るを學びたいといつた事が同じく論語に見えて居る。【五】皐稷 皐陶と后稷、堯を輔佐した名臣。【六】曹謝 魏の曹植に宋の謝靈運とを併稱す。【七】滄纓 屈原の漁父に「滄浪之水清、可三以濯二吾纓一兮」とある。【八】鏘珮 佩玉、腰の飾り。【九】傾國謀 漢書外戚傳に「李延年、上に侍す、歌うて曰く、北方有二佳人一、絶世而獨立、一顧傾二人城一、再顧傾二人國一。上、嘆息して曰く、世、豈に此人あらむやと。平陽主、因つて延年に女弟あるを言ふ、上、召して之を見る」とある。【一〇】連城價 史記に「趙王、楚の和氏の璧を得たり、秦の昭王、これを聞き、願はくは、十五城の價を以て、請ふ璧に易へむ」とある。【一一】懸計吏貢 漢書武帝紀に「元光五年、吏民當世の務に明かなるあるを徵して、計を偕にせしむ」とあつて、その註に「計とは計吏の簿を上るを謂ふなり」とある。計吏と一處で、すべてを官費で支拂つて貢ふ。【一二】入澤宮射 禮記に「諸侯、歲ごとに貢士を天子に獻ず、天子、これを射宮に試む」といひ、又「天子將に祭らむとするや、必ず先づ射を澤に習ふ、澤は士を擇ぶ所以なり」とあつて、その註に「澤は宮名」とある。【一三】十上勞 戰國策に「蘇秦、秦の惠王に說く、書十たび上つて說行はれず」とある。【一四】一戰霸 左傳僖公二十七年に「一戰して霸たるは文の敎なり」とある。【一五】蹉跎 つまづく。【一六】冶長 論語に「子、公冶長を謂ふ、縲絏の中に在りと雖も、その罪に非ざるなりと。その子を以て之に妻はす」とある。【一七】侯生 史記に「魏に隱士あり、侯嬴といふ、大梁夷門の監者たり。公子無忌、左を虛しうして之を迎ふ。嬴、客あり、市屠の中に在り、車を引いて市に入り、下つて其客朱亥を見、睥睨して久しく立ち、其客と語る。從騎、皆竊に侯生を罵る」とある。【一八】出皇都 貞元十一年、韓愈は博學宏詞に試みられ、それから、三たび宰相に上書せしが、報ぜられざるに因つて、京師を去り、潼關を過ぎて河陽に歸り、河陽から洛陽に往つた。【一九】淸灞 灞水は八水の一で、長安の南郊を流れ、その水が澄んで居るから淸といつたのである。源を藍田の谷に發し、西北に流れて、渭に入る。もと滋水と云つたが、秦の穆公が霸功を章にする爲に今の名に改めた。【二〇】髂 埤蒼に「腰骨なり」とある。【二一】大梁從相公 貞元十二年、汴州に往つて董晉に依りしことをいふ。【二二】彭城赴僕射 十五年、徐州に至りて、張建封に依りしことをいふ。

【二三】酒禽 禽は炙に同じ、卽ち酒肴の義。【二四】兩府 汴州と徐州。董張二人、相繼いで徂謝せしことをいふ。【二五】三年就休假 この二句は、貞元十六年、張建封の死ぬ少し前に徐を去つて洛陽に歸り、その年の冬、長安に至り、三月又洛陽に歸り、十八年の春、はじめて四門博士に任ぜられ、十九年、監察御史に陞進したことを指すので、三年間は、丸で休暇同樣であつたといふこと。【二六】西華 卽ち華山、洛陽の西に當るから西華といつたのであらう。【二七】紫陌 都大路。天に紫微垣があつて、人主の宮は、これに象るが故に、宮を紫宮といひ、又紫禁といひ、殿を紫宸といひ、そして、京都の街衢を紫陌といつたのである。【二八】靈臺 むかし文王が築いたので、郿縣、卽ち長安の近郊に在る、何義門の解に「靈臺は四門博士に調せられしをいふ」とある。【二九】姻婭 姻は親戚、婭は爾雅に「兩壻相謂うて婭といふ」とあつて、卽ち妻が互に姉妹なること。【三〇】彤庭 前に見えた丹墀に同じ。彤庭の臣といへば御史で、この時、韓愈は監察御史たりしが故に云ふ。【三一】靑冥靶 靑冥、一に靑雲に作る、ここでは雲の上といふ意。靶は、手綱の革。【三二】危闕 高く聳えたる宮城。【三三】修架 長く續いた屋根の棟。【三四】辰在丁 上旬の日が丁に當つて居るといふので、これは、貞元十九年十二月、監察御史を以て、天旱人飢の疏を上り、仍つて、陽山令に左遷されしことをいふ。【三五】鎩翮 鎩は鳥の羽の病。卽ち羽蟲が出來、鳥の羽を害して飛べなくなること、ここでは、榮遷を得ず、却つて貶謫されしことを指す。【三六】時方臘 臘は年終の祭。廣雅に「夏には淸祀といひ、商には嘉平といひ、周には大臘といひ、秦には臘といふ」とある。韓愈が陽山令に貶せられて長安を出發したのは、十二月であつたといふこと、前に三學士に寄する詩にも、「商山季冬月、水凍絕二行轍一」とあつた。【三七】日車 淮南子に「自ら車に乘じ、駕するに六龍を以てし、羲和を御と爲す」とあり、杜甫も「西江發二日車一」といひ、愁長日車翻といつて居る。つまり、日神は車に乘つて大空を驅けるといふので、日車は卽ち太陽。【三八】天竅 竅は孔、自然に裂けて穴になつて居る。【三九】相倡 勢すさまじく一時天地を占領する。【四〇】越俗 陽山は、春秋の時、南越の地なりしより云ふ。【四一】猶猖乍 その風俗に倣つても、その時だけで、又、忘れて仕舞ふ。【四二】睢盱 老子に「而睢睢たり、而盱盱たり、而、誰と居る」とあつて、睢盱は仰ぎ視る貌。【四三】嗣皇 永貞元年、順宗の卽位せしことを指す。【四四】流化 流は布く、卽ち敎化を四方に布く。【四五】瑕垢 瑕は玉の疵、垢はあか、古るい罪科。【四六】桑柘 柘は桑の屬で、山桑もしくは野桑といふ。つまり野生の桑で

あらう。【四七】闢出　嵩山を切り開く。【四八】臨潁　潁川に臨む。【四九】抗　あぐ、高く聳かす。【五〇】雀鼠得驅嚇　莊子に「鴟、腐鼠を得たり。鵷鶵、これを過ぐれば、仰いで之を視て嚇といふ」とあつて、註に「嚇とは、怒つて物を拒ぐ聲」とある。ここでは、耕作物の害を爲す鼠や雀を驅つて追ひのけるといふこと。【五一】進趁　二字ともに迎へる。【五二】小女姹　後漢書に河間姹女工數錢とあつて、その註に「姹は少なり」とある。年の若きこと。【五三】畢婚嫁　後漢書に「向平、字は子平、隱居して仕へず。建武中、男女娶嫁、すでに畢るや、敕して家事相關するなく、當に我が死せし如くなすべし」とあり、齊書に「蕭惠基、常に所親に謂つて曰く、婚嫁畢るを須つて、當に歸つて舊廬に老ゆべし」とある。つまり、男子には其婦を娶り、女子は他に嫁せしめて、すつかり子供の始末をつけるといふ意。

【題義】縣齋は縣令の官舍で、これは、韓愈が陽山の令たりし時に作つたのである。且つ篇中に嗣皇新繼レ明とあるを見れば、貞元二十一年、順宗即位の事を傳聞したのである。有レ懷は、懷抱を述べるといふ意で、韓愈の希望は、遷謫を赦された後、全然浮世の事を棄て去つて、嵩山潁水の間に歸隱したいと云ふのである。

【詩意】われは、年なほ若き頃より、世人と異にして俊偉なることを旨として居たが、從前の境遇は、まことに嘆き悲むべきものであつた。しかし、孔子に君子の儒となれと云はれた子夏の樣な學者になるのも厭であるし、樊遲が志願した樣に、百姓の眞似をすることも好まない。何でも、事業を爲せば、古しへの皐陶后稷の如く成りたいと思ひ、文章を作れば、曹植・謝靈運をも侮蔑する位に成りたいと、かういふ志望であつた。そこで、江湖の淸き水に臨んで、冠の紐を洗ひ、腰下に佩ぶるに蘭麝の香高きものを以てし、すこしも、世俗の汚れを受けぬ覺悟で、修養を旨として、道義を身に行ひ、悠悠として人生の長路を指し、去去として立派な馬車を馳せる身分に成りたいと思つて居たが、いくら傾國の美人でも、媒をして薦めるものが無ければ、君寵を得るに由なきと同じく、自分は、長く沈淪することを免れず、かの和氏の璧と同じく、十五城に交換する程の價値があつても、自分だけ承知するのでは、何にも成らない。その初、鄕貢進士となり、計吏に連れられて上京し、射を澤宮に試みらるると同じく、數ば試驗場に立ち入り、蘇秦が十度まで上書したといふ程の苦勞は無かつたものの、なかなか一職して霸を爲すことは出來ず、兩三度失敗した後に、やつと進士に及第した。しかし、人情として、特別に優れたるものを忌み嫌ひ、その上、浮世は、權謀詐術が多いから、生來文才あつて、しかも資性極めて愚直なる自分は、到底、目ざましき立身をすることが出來ず、屢ば躓いて、不景氣な顏色をなし、幾度も失策して、氣が滅入ることを免れず、往往にして人から誤解されたが、實際は、公冶長の如く、全く罪に非ず、それから、侯嬴の如く、兎角無禮な奴だといつて、人から罵られたこともあつた。そこで、長安に居ても仕方がないから、これのみ自分の財產ともいふべき二三の書冊を懷にして、都を立ち去り、灞水の淸き流を渡るときには、覺えず涙ぐんだ位。固より身は寂寞の中に老ゆるを甘んじ、閒暇無事の間に生涯を終りたいと志ざしたものの、それでは、第一、衣食に差支へ、朝食は腹にも盈たず、冬の衣は、わづかに腰を掩ふだけで、とても、寒さを凌げない。時しも、天下騷亂に

苦み、國家愈よ多事であつて、軍書を以て絶えず兵士を召集し、そして、馬に跨つて出征するといふ位だから、どうにか任用の路が無いこともあるまいといふので、汴州に往つては董晉に依り、彭城に往つては張建封の幕中に赴き、或は狩場の御供をして、弓箭を以て狐や兎を取り圍む有様を實視し、或は宴會に陪席して、絲竹の聲賑しき間に列ねたる酒肴を御馳走に成つたこともある。しかし、董晉も、張建封も、程なく相繼いで歿し、汴州も、徐州も、荒涼の景色に變じたから、自分も、此を立ち去り、その後、三年の間は、丸で休職といふ狀態に在つたが、やがて官を求めむが爲に、洛陽より出で、雪を犯して、西の方、華山の麓を通つたが、隨分難儀な旅行であつた。やつとの事で、長安に到著すると、都大路の春は、流石に賑はしく、塵埃が地に捲いて起る位、そこで、四門博士となり、文王の遺蹟たる靈臺は、風雨の夜など、殊に寂しく、兩ながら感慨に堪へ兼ねた。その内に自分は、文章を以て賣り出し、朋友の御蔭で、大分評判も善かつたが、美官に引き上げて呉れる樣な有力者は、姻戚の中に無かつたから、仕方がない。それでも、やつとの事で監察御史を拜命し、丹墀に參候する身分とはなつたが、快馬を飛ばせて靑雲の上を驅け廻はるといふ樣な、目ざましい榮達は、到底望むことが出來ない。兎角する內、自分は、上疏したるに因つて左遷せられ、俄に長安を出ることになつたが、その時は、冬であつて、顧みれば、九重の城闕は高く寒空に聳え、そして、曉色は長く續ける屋根の棟に耀いて居たが、これが都の見納めかと思ふと、覺えず、愴然として心悲しくなつた。自分が一身を賭して上疏したのは、丁の字の付く日であつて、羽蟲に苦められた鳥の如く、貶謫の憂き目に遇つたのは、十二月、卽ち年の暮であつた。萬里の天涯なる荒漠の地に向ふのも、職分ならば致し方なく、まして、小邑でも領することの出來たのは、寛大なる恩赦であつて、もつと、ひどい目に遇つた處で、何とも言ふ譯には行かない。陽山に向ふ途すがら、渺渺たる湖波は、太陽の光を閃かし、嶺頂の石は、中から裂けて、自然に孔をなして居る。それから、愈よ陽山に到著して見ると、毒霧は、常に白晝を燻べ、暑い風は、いつもながら夏を燒くが如く、その上に雷鳴甚しくして、その威愈よ加はり、颶風が往往天地を占領して吹きめくることがある。かくの如く風土の變化は、杳然として測り難きが上に、耳に入る聲音は、まことに恐ろしい位。夷の言葉は、聞いて未だ慣れず、越地の風俗は、一寸眞似て見ても、到底長くは續かない。おまけに、自分は、遠來の人であるから、よそ者扱ひにされ、少しの事をも指摘されて、互に憎み嫌ひ、ぎよろりと睨み合つて、猜み訝るといふ始末。まことに、こんな邊鄙に居るのは、厭で堪まらないが、天恩未だ報いざるに因つて、しばらく此に留まるも、微官であるから、生活を之に託することは六つかしい。聞くところに據れば、皇太子が新に卽位して明德を繼がれ、率土の濱までも、日日に敎化を布き施されるといふことで、ここに古い罪科を洗ひ落し、これより長く去つて、田園の中に養蠶でもして暮らしたいと思ふ。その場處は、どこが善いかといへば、嵩山を切り開いて、雲に倚る扉を開き、潁川の流を壓するばかりにして、風の吹き入る臺榭を築き、米や

麥を一ぱいに田に作り、梨や棗を家の周圍に栽培し、子供等は段段に生長し、一處になつて田畑を荒らす雀や鼠を追ひ除け、お上へ差し出す租税は、屹度その日までに上納し、そして、田舍酒を用意して、近鄰の者を招いて共に樂み、老農の愚直なるを愛し、娘どもの年若きものを相手に笑ひさざめいて閑日月を送りたい。苟くも、志だにあらば、かういふ事は、今が今でも出來るので、何も、古しへの向子平の如く、子女の婚娶を終つてからで無ければならぬといふ譯でもない。

【餘論】この詩は、仄韻の排律で、對偶極めて精當、詞彩爛然として居る。大體、五段より成り、起首、少小尙奇偉より自許連城價に至るまでは、自ら其抱負を敍し、初隨計吏貢より侯生或遺屬に至るまでは、鄉貢進士となつて上京せしことを敍し、懷書出皇都より銜詔時方䄙に至るまでは、出京後、汴徐二州を經、それから四門博士より監察御史となり、陽山令に左遷されたことを敍し、投荒誠職分より豈謂生足藉に至るまでは、陽山貶謫中に於ける感懷を敍し、嗣皇新繼明より結末何用畢婚嫁に至るまでは、今次官を罷めて、嵩山穎水の間に隱遯したいといふ希望を述べたのである。蔣本の評に「詩甚だ佳なる處なし、只だ事を敍する、頗る詳快懇切なり」といひ、顧嗣立は「公の詩、句句來歷あり、しかも能く務めて陳言を去るものは、全く反用に在り。酬贈張秘書の詩、本と稽紹、鶴雞羣に立つの語を用ひて、偏に張籍學古淡、軒鶴避雞羣といひ、送文暢の詩、本と老杜の每愁夜中自足蝎の句を用ひて、偏に照壁喜見蝎といひ、薦士の詩、本と漢書「强弩の末、力、魯縞に入ること能はず」の語を用ひて、偏に强箭射魯縞といひ、嶽廟の詩、本と謝靈運の猿鳴誠知曙の句を用ひて、偏に猿鳴鐘動不知曙といひ、この詩の結語、もと向平婚嫁畢るの事を用ひて、偏に如今便可爾、何用畢婚嫁と云ふが如く、眞に舊事を翻新せしむ。この祕を解し得れば、臭腐皆化して神奇とならむ」といひ、朱竹垞は「規格、三學士に寄すると同じ、但し彼は一一實敍、此は組織華縟」といひ、乾隆御批には「仄韻の排律、名手希なるところ、かくのごとく組織精工、頓挫悲壯、集中に在つて亦た自ら一格を成す、塵埃紫陌の聯、梅花灞水の句と同一風致」とある。

合江亭

(一)紅亭枕湘江。(二)蒸水會其左。
瞰臨眇空闊。綠淨不可唾。
維昔經營初。(四)邦君實王佐。
翦林遷神祠。買地費家貨。
梁棟宏可愛。結構麗匪過。
(五)伊人去軒騰。(六)茲宇遂頹挫。

合江亭

紅亭は湘江に枕み、蒸水は其左に會す。
瞰臨すれば、眇として空闊、綠淨、唾すべからず。
維れ昔、經營の初、邦君、實に王佐。
林を翦つて、神祠を遷し、地を買うて、家貨を費す。
梁棟、宏にして愛すべし、結構、麗なるも過ぎたるに匪ず。
伊人去つて軒騰、茲宇遂に頹挫。

(七)老郎來(八)何暮。高唱久乃和。　老郎來ること何ぞ暮き、高唱久しうして乃ち和す。

樹蘭盈(九)九畹。栽竹逾(一〇)萬个。　蘭を樹ゑて、九畹に盈ち、竹を栽ゑて、萬个に逾えたり。

長綆汲(一一)滄浪。幽蹊下(一二)坎坷。　長綆、滄浪を汲み、幽蹊、坎坷を下る。

波濤夜俯聽。雲樹朝對臥。　波濤、夜、俯して聽き、雲樹、朝に對して臥す。

初如遺宦情。終乃最(一三)郡課。　初めは宦情を遺れたるが如く、終には乃ち郡課を最とす。

人生誠無幾。事往悲豈奈。　人生誠に幾くもなく、事往いて、悲、豈に奈せむや。

蕭條(一四)縣歲時。契(一五)闊繼庸懦。　蕭條として歲時縣なり、契闊にして庸懦を繼ぐ。

勝事誰復論。醜聲日已播。　勝事、誰か復た論せむ、醜聲、日に已に播す。

中丞黜凶邪。天子閔窮餓。　中丞、凶邪を黜け、天子、窮餓を憫む。

(一六)君侯至之初。閭里自相賀。　君侯至るの初、閭里自ら相賀す。

(一七)淹滯樂閒曠。勤苦勸慵惰。　淹滯して閒曠を樂み、勤苦して慵惰を勸む。

爲余掃塵階。命樂醉衆座。　余の爲に塵階を掃ひ、樂を命じて衆座を醉はしむ。

窮秋感(一八)平分。新月憐(一九)半破。　窮秋、平分を感じ、新月、半ば破れたるを憐む。

願書巖上石。勿使泥塵(二〇)涴。　願はくは、巖上の石に書し、泥塵をして涴さしむる勿れ。

【字解】【一】紅亭　赤色に塗つた亭榭。【二】湘江　水經に「湘水は、零陵始安縣陽海山より出で、又東北鄰縣の西を過ぐるや、承水、東南より來つて之に注ぐ」とある。そこで湘水が永州に至つて瀟水と合するときは瀟湘といひ、衡州に至つて沅水に合するときは、沅湘といひ、衡州に至つて蒸水に合するときは、蒸湘と云ふ。【三】蒸水　一に承水といふ、水經註に「承水は、衡陽重安縣の西、邵陵縣界の邪薑山より出づ」とあり、漢書地理志に「承陽は、承水の陽に在り、讀んで蒸の若し」とある。又蒸水は、その水氣蒸すが如きが故に名づけたといふことである。【四】邦君　地方長官、ここでは齊映を指す。【五】伊人　この人。【六】軒騫　飛び上る、立身する。【七】老郎　宇文炫を指す。【八】來何暮　後漢書廉范傳に廉叔度、何來暮とあるに本づく。【九】九畹　楚辭に余旣滋二蘭之九畹一兮、又樹二蕙之百畝一とあつて、王逸の註に「十二畝を畹と爲す」とある。【一〇】萬个　史記貨殖傳に竹竿萬个とあつて、古書には皆个の字を用ひてある。【一一】滄浪　楚辭に滄浪之水淸兮とあつて、ここでは、淸い水の義に用ひたのである。【一二】坎坷　石の相迫つて塞がつて居る處。【一三】最郡課　郡課とは、地方郡縣の役人の良否を課考すること、最は善い方の第一といふ義。【一四】縣　はるかなり。【一五】契闊　遠遠しいこと、中間の長いこと。【一六】君侯　今の刺史の鄭某を指す。【一七】淹滯　無爲にして長く留まる。【一八】感平分　ここでは秋の最中。【一九】半破　上弦の月で、まだ半は缺けて居る。【二〇】涴　汚す。

【題義】諸本に題合江亭寄刺史鄭君とあつて、その方が明瞭で、もとは、さうであつたらうが、これは、後人が短くして仕舞つたのであらう。顧註に「亭は、衡州の負郭に在り、今の石鼓頭、卽ち其地なり。地形特異、巋然として二水の間に崛起す。旁に朱陵洞あり、亦た之を朱陵仙府といふ。唐人の題刻、巖上に散滿す。公、陽山より江陵に量移するとき、衡山を過ぐ」といひ、又「鄭君は其名を逸す。亭は故相齊映の作るところ、故に曰く、維昔經營初、邦君實王佐と。宇文炫、又その制を增

す、故に曰く、老郎來何暮、高唱久乃和と。前刺史元澄、政なし、廉使中丞楊公憑、奏して之を黜け、遂に鄭公を用ふ。その中丞黜二凶邪一といふは、意ふに此を指すならむ」といつて居る。すると、この詩は、韓愈が陽山令から江陵に量移された時、洞庭湖南の衡州を通り、因つて、この亭を過ぎて作つたのである。亭は、詩中にも見える通り、湘江と蒸水との交會點に當つて居るから、その名があるので、元と此地方の長官で後に宰相となつて聲名ありし齊映が初めて之を建て、齊映去りし後數年、當時相當に名望のあつた宇文炫といふものが、この地方に來て修理を加へ、その後、元澄といふものが刺史となつて來任したが、これは宜しくない男であつたから、廉訪使の楊憑が之を彈劾して追ひ黜け、それから鄭某といふものが著任したので、韓愈の來たのは、丁度その頃であつた。鄭某は唐書にも見えないから、その人の閲歴等は、一切不明である。

【詩意】合江亭の朱塗の建物は、湘江に臨んで峙ち、そして蒸水は其左に於て合流し、つまり、この亭は、蒸湘二水の交會點に當つて居る。そこで、亭上から俯瞰すると、まことに眇然として、廣廣とした景色、殊に、二水は、綠色淨く澄み、唾をするだに勿體ないと思ふ位。初めて、この亭を經營したのは、刺史の齊映といふ人で、天晴、王佐の才を具へた偉らい人物であつた。その頃、このあたりは、林が茂つて、鎮守の祠があつたが、その林木を剪り拂つて、祠をも外に遷して仕舞ひ、それから、おのが財布の底をはたいて、土地を買ひ占めたといふことであつた。されば、梁棟は、廣くして愛すべく、その結構は、如何にも麗はしいが、しかし、この場所に過ぎたといふのではなく、江山の景致に對して、まことに相應しいやうであつた。その齊君は、もとより、邊鄙の地方官を以て終るやうな人でなかつたから、やがて、都に召し還され、忽ち立身して、宰相の高位に上つたが、あとに殘された此亭は、いつしか頽挫して、毀はれて仕舞つた。次に、老郎の宇文炫といふ人が刺史となつて來任したが、その來方の遲かつたのは、いささか遺憾で、たとへば、陽春白雪の高調も、久しうしてから、やつと和する人が出て來たやうなものであつた。しかし、宇文炫が遲蒔ながらも來たから好かつたので、やがて、蘭の如き香草を九畹に比すべき近邊の閒地に種ゑつけ、又竹を移植すること萬竿の多きに及んで、巖かどの兀兀たる間に細道を作つて、そこを辿り下ると、長い井戸繩で、滄浪の水に比すべき清き江水を汲み上げることが出來るやうにした。かくて、宇文炫自身は、ここに住んで居て、夜は、俯して波濤の響くを聞き、朝は、向ひ合つて、雲樹の團合せるを寢ながら眺めて居られた。かくの如くして、初めは、役人の務を全く忘れて居る樣に、人から思はれ居たが、治民の成績、頗る觀るべく、地方吏員の良否を課考するとき、第一の最善であつたといふを聞いては、誰しも、感服せぬものは無かつた。しかし、人生の事は、決して、いつまでも續くものではなく、この宇文炫も、亦た中央政府に召し還され、折角の文彩吏治、ともに過去の夢となり、これを回憶すると、まことに、悲に堪へられぬ程である。かくて、蕭條として物淋しい中に歲月を送り、契闊として久しい間を隔

てて、刺史の役を繼いだのは誰かといふと、元澄といふ凡庸懦弱の詰らぬ一俗吏であつた爲に、折角の勝事も、最早口にするものなく、刺史の不評判のみが日に增し世間に傳播することと成つた。ここに、中丞の楊憑といふ御方は、觀察使として、この地に來り、こんな事では、とても駄目だといふので、元澄の如き凶邪の者を黜くることにし、天子も亦た人民の窮餓を憐んで、手腕のある立派な刺史を遣されることになり、その選に中つて、はるばる下向したのが、今の鄭君で、その來任を聞いて、閭里皆互に相賀した位。君は、一方では、此處に淹滯して、無爲の中に閒曠なる景色を樂み、そして、一方では、自ら勤苦して、模範を示し、慵惰の者をば勵まし獎められた。そこへ我輩が丁度來かかつたから、予の爲に、塵階を掃うて懇に迎接し、樂を命じて座上の衆賓を醉はしめ、まことに、大した歡迎ぶりであつた。今しも、秋の半、しかも、名月には聊か間があつて、まだ月が半は缺けて見える時分、偶然ここに來て、御馳走に成つたから、この亭の緣起より始めて、君の功績を巖上の石面に書きつけやうと思つて、この詩を作つたのであるが、やがて之を鐫りつけ、そして、いつまでも泥塵に汙されぬ樣に注意して、特に保存して貰ひたいものである。

【餘論】この詩は、韓集中に於ては、もとより格別の者でもないが、毆臨眇空闊の二句、波濤夜俯聽の二句の如き、寫景の工、頗る愛すべきを覺える。

陪杜侍御遊湘西兩寺獨宿有題一首因獻楊常侍

杜侍御に陪して、湘西兩寺に遊び、獨宿して題あり一首、因つて楊常侍に獻ず

長沙千里平。勝地猶在險。　長沙千里平かに、勝地猶ほ險に在り。
況當江闊處。(一)斗起勢匪漸。(二)　況んや、江の闊き處に當つて、斗起、勢、漸に匪ず。
深林高玲瓏。青山上琬琰。(三)　深林、高くして玲瓏、青山、上に琬琰たり。
路窮臺殿闢。(四)佛事煥且儼。　路、窮まつて、臺殿闢け、佛事、煥として且つ儼なり。
剖(五)竹走泉源。開廊架崖广。(六)　竹を剖いて泉源を走らしめ、廊を開いて崖广に架す。
是時秋(七)之殘。暑氣尙未斂。　この時、秋の殘、暑氣尙ほ未だ斂まらず。
羣行忘後先。(八)困息棄(九)拘檢。　羣行して後先を忘れ、困息して拘檢を棄つ。
客堂喜空涼。華榻有淸簟。(一〇)　客堂、空涼を喜び、華榻、淸簟あり。
澗蔬煮蒿芹。(一一)水果剝菱芡。(一二)　澗蔬、蒿芹を煮、水果、菱芡を剝ぐ。
伊余夙所慕。陪賞亦云忝。　伊れ余夙に慕ふところ、陪賞亦た云に忝し。
幸逢車馬歸。獨宿門不掩。　幸に車馬の歸るに逢ふ、獨宿して門掩はず。

山樓黑無月。漁火燦星點。
夜風一何喧。杉檜屢(一三)磨颭。
猶疑在波濤。怵惕夢成(一四)魘。
靜思(一五)屈原沈。遠憶(一六)賈誼貶。
(一七)椒蘭爭妬忌。(一八)絳灌共讒諂。
誰令悲生腸。坐使淚盈(一九)臉。
翩飛乏羽翼。指摘困(二〇)瑕玷。
(二一)珥貂(二二)藩維重。政化類(二三)分陝。
禮賢道何優。奉己事苦儉。
大厦棟方隆。巨川檝行(二四)剡。
經營誠少暇。遊宴固已歉。
旅程愧淹留。(二五)徂歲嗟荏苒。
平生每多感。(二六)柔翰遇頻染。

山樓、黑くして月なし、漁火、燦として星のごとく點す。
夜風、一に何ぞ喧しき、杉檜、屢ば磨颭。
猶ほ疑ふ波濤に在るかと、怵惕して、夢、魘を成す。
靜に屈原の沈むを思ひ、遠く賈誼の貶せらるるを憶ふ。
椒蘭、爭うて妬忌し、絳灌、共に讒諂す。
誰か悲をして腸に生ぜしめ、坐ながら淚をして臉に盈たしむ。
翩飛、羽翼に乏しく、指摘、瑕玷に困める。
貂を珥んで、藩維重く、政化、分陝に類す。
賢を禮して、道、何ぞ優なる、己を奉じて、事、苦だ儉なり。
大厦、棟、方に隆、巨川、檝、行く剡る。
經營、まことに暇少く、遊宴、固より已に歉れり。
旅程、淹留を愧ぢ、徂歲、荏苒を嗟す。
平生、毎に感多く、柔翰、頻りに染むるに遇ふ。

(二七)展轉嶺猿鳴。曙燈青睒睒。

展轉すれば、嶺猿鳴き、曙燈、青くして睒睒たり。

【字解】【一】斗起　北斗の形の如く突然起つて聳えて居る。【二】匪漸　なだらかでない。【三】㢠㟁　蜿蜒に同じ。【四】佛事　法事ではなく、佛堂内の飾り付け等を合稱す。【五】剖竹　竟を云ふ。【六】崖广　广、音は掩、說文に「广は巖に因つて屋を爲る」とある。【七】秋之殘　殘はのこるではなく、動詞にすると、そこなふ、つくるといふ義、ここのも盡きる方で、即ち秋の末といふ義。【八】困息　一歲に休息する。【九】案拘檢　禮法に關係せぬ。【一〇】清簟　簟は竹むしろ、謝朓は珍簟清夏室といひ、杜甫は清簟疎簾看奕棋といつた。【一一】蒿芹　蒿はよもぎ、詩經に食野之蒿とあつて、その註に「菣なり、即ち青蒿」といひ、又薄采其芹とあつて、その註に「水菜なり」とある。【一二】菱芡　芡も水菜の一種。【一三】磨颭　風に搖すられて木の幹が互に摺れ合ふ。【一四】魘　おびへる、うなされる。【一五】屈原沈　屈原が汨羅に沈みしこと、前に屢ば見ゆ。【一六】賈誼　賈誼は都から出されて長沙王太傅となつた。【一七】椒蘭　離騷に余以蘭爲可恃兮、羌無實而容、椒專佞以慢慆兮、樧又欲充夫佩幃とあつて、王逸の註に「蘭は楚の懷王の弟司馬子蘭なり、椒は楚の大夫子椒なり」とある。【一八】絳灌　漢書の賈誼傳に「文帝、誼を以て公卿の位に任ぜむことを議す。絳灌、乃ち誼を毀つて曰く、洛陽の人、年少初學、專ら權を擅にして、諸事を紛亂せむとす、と。ここに於て、天子、以て長沙王の太傅と爲す」とあつて、顏師古の註に「絳は絳侯周勃、灌は灌嬰なり」とある。【一九】臉　顏面。【二〇】瑕玷　ともに玉の疵。【二一】珥貂　左思の詠史に七葉珥漢貂とあつて、李善註に「珥は挿なり」とあり、董巴の輿服志に「侍中、中常侍は、武弁を冠し、貂尾を飾となす」とある。即ち楊常侍を指す。【二二】藩維重　一地方の綱維を擔つて居る、其任が重い。【二三】分陝　公羊傳に「陝よりして東は、周公これを主り、陝よりして西は召公これを主る」とあつて、何休の註に「陝は今の弘農陝縣、是れなり」とある。【二四】剡　けづる、易の繫辭に「木を剡つて楫となす」とある。【二五】徂歲　行く年。【二六】柔翰　軟かい紙。【二七】展轉　寢られずして體を動かすこと、前に見ゆ。

【題義】この詩は、杜侍御と共に、湘西兩寺に遊び、その寺に獨宿した時、寺壁に題し、そして、楊

常侍といふ人に寄せたのである。湘西兩寺は、一つの寺の名とすれば、まことに變てこで、一本に兩の字なく、卽ち湘西寺とある方が本當らしい。杜侍御は、楊常侍の幕中の者で、初めは、楊常侍自身が案内する積りであつたが、何か差支があつたと見え、杜侍御をして、代つて案内させた者と思はれる。杜常侍は、如何なる人か分からぬ。楊常侍、名は憑、卽ち前詩に中丞黜㆓凶邪㆒とあつて其中丞で、韓愈の自註に「楊常侍は憑なり、時に湖南に觀察たり」とあるし、なほ詳しくは舊唐書に「楊憑、字は虛受、弘農の人、湖南江西觀察使に累遷し、入つて、左散騎常侍となる。氣節を負ひ、母弟凝・凌と相友愛す、皆時名あり」とある。すると、この時は、まだ常侍では無かつたのであるが、後に追改したのであらう。湖西は卽ち湘西、今の長沙一帶の地である。この詩は、韓愈が陽山から江陵に量移され、長沙附近を通つた時に作つたので、卽ち前詩を作つた直後の事と思はれる。この時、韓愈は、量移されたといふが、量移とは、比較的善地に遷されるといふに過ぎないから、もとより滿足する筈もなく、その感慨をも併せ述べて、地方長官の最高級に居る楊憑に示したのである。

【詩意】 長沙の地たるや、一望千里、極めて平坦であるが、勝地は、無論、險阻な處に在る。湘江の水の闊い處に當つて、山が突然聳えて居て、もとより、なだらかでない。山の上は、一帶の深林で、その綠の色は透き通る樣であるし、靑山は、その上に在つて、蜿蜒と長く續いて居る。その間に一條の路があり、その盡くる處、卽ち深林の一番奧に、立派な大伽藍があつて、それが湘西寺。堂塔の飾り付などは、美美しく且つ莊嚴である。それから、竹を破つて筧となし、泉源から導いて來る淸水は、混混として走り、又巖壁を削つて造つた長廊があつて、本堂の方へ行くやうに成つて居る。時しも秋の末、長沙地方は熱帶に近いから、まだ暑氣が收まらない。そこで、儀式立つて、その山に登ると、なかなか骨が折れるが、幸にも、案内をして吳れた杜侍御といふ人は、甚だ脫略な人であるから、羣行して、先後の順序を忘れ、案内者が跡になつても關はず、そして、一處に休息して、少しも禮法に頓著せず、肌を脫いでも、誰も咎めない。寺には、無論、客間があつて、それが特別に涼しい座敷、小ざつぱりした寢臺の上には、綺麗な竹むしろが鋪いてある。山中の事であるから、大した御馳走もないが、よもぎや芹などを谷川から摘んで來て、煮て吳れたし、又池中に生ずる菱の實などを剝いで食事を進めて吳れた。かういふ場處は、予が平生慕ふところであつて、今日杜侍御に陪して之に游ぶことの出來たのは、まことに辱い。そして、杜侍御は、氣の利いた人で、自分達が長く居ると、却つて窮屈だらうといふので、案内をして寺に送り込むと、さつさと車騎を揃へて歸つて仕舞ひ、自分だけが取り殘されて、此處に獨宿することとなり、もとより、邊鄙の山中で、盜賊の心配なども無いから、門は開いた儘である。今夜は宵やみ、山樓に上つても、あたりは眞暗で、何も見えないが、下は滂湃たる湘江に臨み、江中には、數點の漁火が、星の如く、爍然として輝いて居る。やがて、夜が更けると、風の音が極めて騷がしく、それは、杉だの檜だのが搖すられて、幹と幹とが互に摺れ合つて聲を

添へるからであつた。もとより、山樓の上に寢て居るのだが、さながら、江海の中に在つて波濤に搖られて居るが如く、さきに洞庭を渡つた時、あぶなく舟が難破せむとしたことなどを考へ出すと、夢にもおびえる位。おもへば、屈原が水に投じて死んだ汨羅の地も遠からず、賈誼が文帝の御機嫌を損ねて左遷されたのも、丁度、この長沙である。屈原は、子蘭・子椒の二人に妬忌せられ、賈誼は、周勃・灌嬰に讒を搆へられて、あの樣な事に成つたのである。今日、我をして悲を腸中に生せしめたのは誰か知らぬが、都を逐はれて貶謫された事は、かの屈原、賈誼と善く似て居る處から、千古同感、覺えず涙が流れて、顏に一ぱいになる。そこで、早く都の方へ歸りたいと思ふが、鳥ならぬ身には羽翼なく、その上、人の缺點をほじくつて攻擊する手合ばかり居るから、まことに、仕方がない。今、楊常侍は、貂尾を冠にし、一地方の觀察使として、その聲威、頗る重く、そして、政化の行き屆いたことは、むかし周召二公が陝を界として、天下を分治した樣なものである。そして、楊公は、賢を禮して、非常に優待せられ、己を奉することは、勤儉で、少しも、傲慢奢靡の處がない。やがて、中央政府の大官となり、大きな家の棟梁となり、巨川を渡る舟楫となつて、次第に立身すべきものとして、囑望されて居る。されば、毎毎公務の爲に少しの餘暇もなく、遊宴などは成るべく致さぬといふ御考で、今日も、杜侍御を代理として予を案内させて下さつたものと考へる。予の如き才力愚劣、且つ身分賤しき者が、個樣な處に來て、のんきに滯留して居るのは、まことに、愧ぢ入る次第、殊に歲月荏苒として空しく逝くことを思ふと、何一つ仕出來さぬ身は、愈よ嘆はしく覺える。もとより、平生、感慨多く、殊に今日の絕境に宿した處から、ここに柔翰を把つて、下らぬ事を頻りに書き續けた譯である。やがて、夜も段段更けて曉近くなると、峰には猿の聲がして、展轉の間に夢も結ばれず、殘燈の光は、靑く睒睒として、枕頭を照らして居るのみである。

【餘論】乾隆御批には「獨宿より、景を寫し、情を生ず、先づ客堂華楊を以て引き起し、猿鳴燈睒、仍つて獨宿の上に就いて結ぶ、章法一綫」とある。つまり、客堂華楊を前以て言つて置いて、段段と獨宿といふ事を引き出して來た其筆路は、まことに味はふべきことだといふ意である。それから、朱竹垞は、起首の數句を賞して「情景を寫して細に入る」といひ、何義門は、夜風一何喧の四句を擧げて「四句連りに之を夢魘に係く、便ち味ふべし」といつた。

岳陽樓。別竇司直　　岳陽樓、竇司直に別る

洞庭九(一)州間。厥大誰(二)與讓。　　洞庭は、九州の間、厥大誰にか讓らむ。

南匯羣(三)崖水。北注何奔放。　　南に匯る羣崖の水、北に注いで何ぞ奔放たる。

瀦(四)爲七百里。呑(五)納各殊狀。　　瀦して七百里となり、呑納、各、狀を殊にす。

自古澄不清。(六)環混無歸向。　古しへより、澄ませども清まず、環混して歸向なし。
炎風日搜攪。幽怪多冗長。　炎風、日に搜攪して、幽怪、冗長多し。
軒然大波起。宇宙隘而妨。　軒然として、大波起れば、宇宙、隘くして妨ぐ。
(七)巍峩拔(八)嵩華。(九)騰踔較健壯。　巍峩、嵩華を拔き、騰踔、健壯を較ぶ。
聲音一何宏。(一〇)轟輵車萬兩。　聲音、一に何ぞ宏なる、轟輵、車萬兩。
猶疑帝(一一)軒轅。張樂就空曠。　猶ほ疑ふ、帝軒轅、樂を張つて空曠に就くかと。
(一二)蛟螭露(一三)筍簴。(一四)縞練吹(一五)組帳。　蛟螭、筍簴を露はし、縞練、組帳を吹く。
鬼神非人世。節奏頗跌踢。　鬼神、人世に非ず、節奏、頗る跌踢す。
陽施見誇麗。陰閉感悽愴。　陽、施して、誇麗を見、陰、閉ぢて、悽愴を感ず。
朝回(一六)宜春口。極北缺隄障。　朝に宜春口に回れば、極北、隄障を缺く。
夜(一七)纔(一八)巴陵洲。(一九)叢芮纔可傍。　夜、巴陵の洲に纔し、叢芮、纔に傍ふべし。
(二〇)星河盡涵泳。俯仰迷下上。　星河盡く涵泳、俯仰、下上に迷ふ。
餘瀾怒不已。(二一)喧聒(二二)鳴甕盎。　餘瀾、怒つて已まず、喧聒、甕盎を鳴らす。

明登岳陽樓。(二三)輝煥朝日亮。(二四)　明に岳陽樓に上れば、輝煥として朝日亮なり。
(二五)飛廉戢其威。(二六)清晏息(二七)纖纊。　飛廉、その威を戢めて、清晏、纖纊を息む。
泓澄湛凝綠。物影巧(二八)相況。　泓澄として、凝綠を湛へ、物影、巧に相況す。
(二九)江豚時出戲。驚波忽(三〇)蕩瀁。　江豚、時に出でて戲れ、驚波、忽ち蕩瀁。
時當冬之孟。隙竅縮寒漲。　時、冬の孟に當り、隙竅、寒漲を縮む。
前臨指近岸。側坐眇難望。　前に臨んで近岸を指し、側坐、眇として望み難し。
滌濯神魂醒。幽懷舒以暢。　滌濯して、神魂醒め、幽懷、舒びて以て暢ぶ。
主人(三一)孩童舊。握手乍(三二)忻悵。　主人、孩童の舊、手を握つて、乍ち忻悵。
憐我竄逐歸。相見得無恙。　憐む、我が竄逐せられて歸り、相見て恙なきを得たるを。
開筵交(三三)履舄。(三四)爛漫倒家釀。　筵を開いて、履舄を交へ、爛漫として家釀を倒す。
杯行無停留。(三五)高柱送清唱。　杯は行りて停留なく、高柱、清唱を送る。
(三六)中盤進橙栗。(三七)投擲傾脯醬。　中盤に橙栗を進め、投擲して脯醬を傾く。
歡窮悲心生。(三八)婉孌不能忘。　歡窮まつて悲心生じ、婉孌、忘るる能はず。

念昔始讀書。志欲干(三九)霸王。　念ふ昔、はじめて書を讀み、志、霸王を干さむと欲す。
屠(四〇)龍破千金。爲藝亦云亢(四一)。　龍を屠りて、千金を破り、藝たる、亦た云に亢し。
愛才不擇行。觸事得讒謗。　才を愛して行を擇ばず、事に觸れて讒謗を得たり。
前年出官日。此禍(四二)最無妄。　前年、官を出づるの日、この禍、最も無妄。
公卿採虛名。擢拜識天仗(四三)。　公卿、虛名を採り、擢拜して天仗を識る。
姦(四四)猜畏彈(四五)射。斥逐恣(四六)欺誑。　姦猾、彈射を畏れ、斥逐して、欺誑を恣にす。
新恩移(四七)府庭。逼(四八)側廁(四九)諸將。　新恩、府庭に移り、逼側、諸將に廁はる、
于嗟苦駑緩。但恐失宜當。　于嗟、駑緩に苦む、但だ恐らくは宜當を失はむことを。
追思南(五〇)渡時。魚腹甘(五一)所葬。　南渡の時を追思すれば、魚腹、葬るところに甘んず。
嚴(五二)程迫風帆。劈箭入高浪。　嚴程、風帆に迫り、劈箭、高浪に入る。
顚沈在須臾。忠鯁(五三)誰復諒。　顚沈、須臾に在り、忠鯁、誰か復た諒とせむ。
生還眞可喜。剋(五四)己自懲(五五)創。　生還、眞に喜ぶべし、己を剋めて自ら懲創す。
庶從今日後。粗識得與喪。　庶はくは、今日よりして後、粗ぼ得と喪とを識らむ。

事多改前好。趣有獲新尙(五六)。　事、多くして前好を改め、趣、新尙を獲るあり。
誓耕十畝田。不取萬乘相(五七)。　誓つて、十畝の田に耕して、萬乘の相を取らず。
細(五八)君知蠶織。稚子已能餉(五九)。　細君は蠶織を知り、稚子は、すでに能く餉す。
行當挂(六〇)其冠。生死君一訪。　行く〻、當に其冠を挂くべし、生死、君、一訪せよ。

【字解】【一】九州　支那本土全體。「禹が洪水を治めた後に天下を九州に分ちしに始まる。【二】誰與讓　與は歟に通じ、誰にか讓らむと訓すべし。【三】羣崖水　蜀中溪壑の水。【四】瀦　溜まる。【五】呑納　湖水の呑んで納める多くの川。【六】環混　環繞混同。【七】巍峩　高き貌。【八】嵩華　嵩山は中岳、華山は西岳、ともに五岳の中に數へられて居る。【九】騰踔　飛び上る貌。【一〇】轟輵　輵は車聲。【一一】軒轅　黃帝軒轅氏、莊子に「黃帝、咸池の樂を洞庭の野に張る」とある。洞庭は、冬になると湘江の流域以外、皆乾いて仕舞ふから、その時は野といふのである。【一二】蛟螭　蛟は龍の屬、螭は龍の角なくして黃なるもの。【一三】筍簴　樂器を掛ける道具、前に元和聖德詩に見ゆ。【一四】縞練　ねり絹。【一五】組帳　帳幕。【一六】宜春口　宜春は縣の名、卽ち袁州。【一七】檥　舟を繫ぐ。【一八】巴陵洲　卽ち岳州。【一九】叢芮　草の生ずる貌。【二〇】星河　天の河。【二一】喧聒　かまびすしきこと。【二二】鳴甕盎　瓶の中の水が搖れて鳴り響く。【二三】輝煥　光明の貌。【二四】亮　爽朗の貌。【二五】飛廉　楚辭に後飛廉使奔屬とあつて、その註に「風伯なり」とある。【二六】淸晏　淸く靜かなること。【二七】息纖纊　木華の海賦に輕塵不飛、纖羅不動といへると同義。細かいことが羅紗の模樣に似た湖面は少しも動かないといふこと。【二八】巧相況　くらべ合ふ。【二九】江豚　海豚の類で、淡水中に住んで居る。說文に「江豚、一名、饞䱁、風ふかむと欲すれば踊る」とあり、許渾の詩にも、江豚吹浪夜還風とある。【三〇】蕩漾　のたりのたりする。【三一】孩童舊　小供の時分からの昔馴染。【三二】忻悵　喜憂に同じ。【三三】屐舄　舄は靴足袋。【三四】煩醲　濃醋なること。【三五】高柱　柱は琴の柱。【三六】中盤　盤中に同じ。【三七】投擲傾脯醬　脯は肉の乾

かしたもの、昔はひしほの類。棗栗などの菓物に醋醤を添へて味をつけること。【三八】 綰響 ここでは親切なること。【三九】 千鍛きつける。【四〇】 屠龍破千金 莊子に「朱泙漫、龍を屠ることを支離益に學ぶ、千金の家を殫し、三年技成つて、その巧を用ふるところなし」とある。【四一】 亦云亢 高ぶり過ぎる。【四二】 此禍最無妄 無妄は易に見えた語、ここでは必然的なる禍といふこと。【四三】 天仗 天子の儀仗。【四四】 姦猜 姦人の猜忌。【四五】 彈射 彈劾する。【四六】 恣欺詐 無實の罪に陷れられる。【四七】 移府庭 江陵府に量移されしこと。【四八】 逼側 相迫ること。【四九】 圃諸將 江陵府は武將の節度使が治めて居る處なるをいふ。【五〇】 南渡 前年この湖を渡つて、南、陽山に赴きし時の事をいふ。【五一】 魚腹 史記に「屈原曰く、むしろ常流に赴いて江魚の腹中に葬らるるも」とある。【五二】 嚴程 嚴重なる旅程。【五三】 忠鯁 誠忠骨鯁。【五四】 刻己 自分を枉げる。【五五】 懸劍 懸らし痛める。【五六】 新銜 新しい好銜。【五七】 萬乘相 天子の宰相。【五八】 細君 漢書東方朔の傳に「歸つて細君に遺らむ」とあつて、顏師古の註に「細君は朔の妻の名。一説に、細は小なり、朔、自ら諸侯に比し、その妻を謂うて小君といふ」とある。【五九】 能銷 辨當を運搬する。【六〇】 挂其冠 辭職すること。後漢書逢萌傳に「冠を解いて東都城門に掛け、因つて遂に潛藏す」とあり、南史に「陶弘景、冠を神武門に掛け、表を上つて祿を辭す」とある。

【題義】 この詩も、前の二首と同時で、陽山を發し、長沙を經て江陵に赴く間の作である。韓愈は、緩緩と此邊の山水を探りつつ赴任したので、詩中に冬之孟とあるより見れば、十月の初であつたが、その時、岳州にかかり、仍つて、岳陽樓に登つた。この樓は、周處の風土記に「岳陽樓は、城の西門の門樓なり、下に洞庭を瞰る、景物寬濶」とあるし、その詳は、宋の范仲淹の岳陽樓記に見え、文章軌範などにも引いてあるから、讀者諸君は、すでに先刻御承知の事であらう。その時、竇庠といふものが、岳州地方の役人であつたが、やがて、この人と別るるに臨んで、此詩を作つたのである。韓愈の原註には「竇庠、時に武昌の幕を以て岳州に權たり」とある。そして、舊唐書には「竇庠、字は胄卿、韓皐の武昌に鎭するや、幕中に辟し、大理司直に陟り、權りに岳州を領す」とある。

【詩意】 洞庭は、支那全土に於て、他に比類なき程大きな湖水であつて、蜀中羣崖の水は、南にめぐつて、この湖水となり、それが更に北注して長江となるので、その勢の奔放なるも、尤も至極な事である。洞庭の周圍は、七百里に及び、その呑んで納める多くの川は、各〻狀を殊にして居る。中には、隨分濁流もあること故、いくら澄まさうとしても、その水は淸くならないし、多くの水が環繞混同して、何處に歸向するか分からぬ位。もとより、熱い處であるから、炎風が日日その湖面を攪き亂し、さまざまの幽怪なる動物が、役にも立たぬ癖に、澤山生長して居る。かくの如き大湖であるから、軒然として大きな波が逆卷くと、宇宙を狹しとし、且つこれが邪魔で仕方がないといふ樣に暴れ廻る。嵩山だの、華山だのは、巍峨として隨分高い山であるが、洞庭の大波が飛び上るときには、これ等の山と其健壯を較べやうとして居る。從つて、その聲音の凄まじく大きいことは、萬輛の車が一時に馳せ出したかと思ふ位であるし、むかし、黃帝が空曠なる此處洞庭の野に於て咸池の樂を張られたのも、かくやとばかり。それから、水中の動物が形を現はすのは、丁度その時樂器の掛けてある道具に蛟螭の蟠つて居るのが露はれて居るかと思ふ樣であるし、波の白く長く續いて居るのは、その時、帳幕を設けて、四方に白い練絹を張つたやうである。かかる大きな響は、全く鬼神の爲すことで、到底人間の仕

業ではなく、又黄帝の頃は太古の昔であるから、跌踼たる大きな鼓吹を以て節奏としたのであらう。かくて、音律が陽に響くときは、萬物が調和して、賑はしきまで綺麗であるが、陰の聲をなす時は、悽愴の極、秋のやうな氣がして、人心を傷ましめ、それに應じて、景色が變り、氣候も違つて來る。洞庭湖の景色は、ざつと上述の如く、そして、予は、今朝、宜春口から舟を乘り出して、ここに到著したので、北進する間には、少しも、隄防などもなく、風でも起つたら、どうするかと思ふ位。夜に成つて、巴陵の洲に泊したが、そこには、蘆荻の類が叢芮として生えて居て、どうやら舟を寄せることが出來た。天の河は、その影を湖面に涵し、俯仰する間、空や水、いづれとも、上下を分かち兼ねるばかり。そして、餘瀾は、怒つて、なほ止まざるが故に、甕の中の水が搖られて、ざぶざぶと鳴るやうであつた。あくる朝、名だたる岳陽樓に登ると、きらきらしく朝日が輝きわたり、風伯は、その威を收め、湖面の羅紗模樣も決して動かず、非常に澄みきつた水は、凝綠を湛へ、萬象、皆その影を寫して、互に較べ合つて居る。その間に、江豚が時時水を出でて戲れると、驚波がのたりのたりとして居る。時しも、十月冬の初、寒く漲つた水の縮まるのが、隙間から見え、從つて、身に浸む水氣は、ぞつとする程である。前の方に臨んで近い岸を眺望すれば、よく見えるが、側坐して脇を向くと、眇として望み難いやうな心持がする。そこで、おのれの神魂を洗濯して、豁然として醒め、そして、幽懷をのびのびと引き延ばすことが出來た。今日、ここに予を招いて吳れた竇司直といふ人は、子供の時からの昔馴染であつて、久し振りに遇つたから、手を握つて、一喜一憂、貴君は陽山に竄逐されたが、恙なくして、此地に還り、かういふ樣に御目にかかることの出來たのは、まことに結構な事だといふので、宴を開いて履舃を交へ、多くの人人と併せて招き寄せ、手造りの酒を傾けて、ともに打ち興じた。そこで、しきりに盃を廻はして、少しも停滯することなく、やがて、琴柱を高くし、面白い歌などを歌はせ、盤中には、土地の名物たる橙栗を盛り、その上、脯醤などを添へて味を加へ、出來るだけ、御馳走をして吳れたので、喜び極まつて、物とはなしに悲を生じ、君の親切は、決して忘れることが出來ないと思つた。おもへば昔、はじめて書を讀んだ時、霸者王者に遊說し、天晴の人物となつて、一仕事やつて見たいと考へて居たが、その學んだところは、千金を費して龍を屠る術を稽古したと同じく、折角、その技が出來るやうになつても、高尙すぎて、役に立たない。加之、自分は、朋友と交際するのに、才のみを擇んで、その行狀を擇ばなかつたから、事に觸れて、先方の感情を害し、その爲に、譏謗せらるるを免れなかつた。これとても、前年出でて朝廷に官したから、必然的に起つた、謂はゆる無妄の禍であつた。その時、自分は、どうやら氣が進まなかつたが、公卿輩は、我が虛名を取つて、推薦して吳れ、やがて、擢んでられて朝官に拜し、天子の儀仗を識ることも出來る樣になつたのであるが、間もなく、奸人の猜忌に因つて彈劾せられ、無實の罪を言ひかけられて、南方に斥逐せられたのである。しかし、近ごろは、天恩を受けて、小縣より大府に轉任するこ

ととなつたが、そこは、武人どもの組織して居る節度使の官署であつて、自分は迫られて、諸將の間に立ち交り、もと文弱な身であるところから、薄のみであるといはれたり、事の宜しきを失つて、排斥されたりすることは無いかと、今から取越し苦勞をして居る。それから、曩に陽山に赴いた時の事を追思すると、矢張、ここを通過したが、非常の大風浪で、あはや、魚腹に葬られる處、おまけに何日任所に到著せよといふやうに、嚴重な日程がある處から、風帆を揚げて、矢を射るやうな勢で高浪の中に潛り入つて仕舞ひ、あぶなく、舟は顚覆する處であつて、若し死んで仕舞へば、わが忠信骨鯁を誰も諒として知るものは無かつたであらう。しかも、不思議に難を免れ、今日生きて此に還つたのは、まことに、喜ぶべく、自分の特性を枉げて、世事に懲りた様に行つて見やうと思ふのである。希はくは、今日より後、略ぼ人事の得失をも知つたから、事ごとに、むかしの嗜好を改め、そして新しい好尙を以て、趣味ある方に向ひたい。それには、歸隱して百姓となるのが第一で、誓つて、十畝の田を耕し、そして、天子の宰相と成らうといふ了見は抛つて棄てて仕舞はふ。わが妻は、蠶を飼つたり、布を織つたりする位な事は出來るし、倅も、大きくなつて、辨當を運ぶことは出來るから、行く行く冠を挂けて辭職しやう。それに就いて、君と此に別れるのであるが、時時、手紙でも寄せて、生きて居るか、死んで仕舞つたかといふ位の事は、尋ねて、御貰ひしたいものである。

【餘論】蔣之翹は「退之の岳陽樓の詩、前半は景を寫し、猶は卓犖にして致あり。時當冬之孟以下に至つては、便ち瑣屑甚だしきを覺ゆ。故に、唐子西謂へるあり、子美は四十字のみ、氣象閎放、涵蓄深遠、殆んど洞庭と雄を爭ふ、退之・禹錫、率ね大篇を爲るも、遠く逮ばざるなり」といつたが、その境遇と詩體とが、自然異なつて居ることを思へば、かく一槪に言つて退けるのは、あまりに無造作である。そこで、兪瑒は「この詩、前半首は景を寫し、後半首は事を述べ、却つて、追思南渡時を用ひて、數語挽轉、眞に千鈞の力あり、且つ此二段あつて、わづかに、此に到つて鋪張することの漫然に非ざるを見るなり、公が布局運筆の妙を見るべし」といひ、朱竹垞は「宏濶跌宕、これ大局面、大抵力量を以て勝る」といひ、後に其官途の經歷を述べる一段に就いては「この事、屢ば敍述す、改換の法、虛實繁簡、各〻境あるを看るを要す」といひ、何義門は追思南渡時に就いて「前半を打轉し、方に寫景の處、漫然鋪敍するに非ざるを見る、これ眞に匠手の結構」といひ、乾隆御批には「寫景兩段、陽開陰閉、范希文の岳陽樓記、これより脫胎するに似たり」とある。それから、この篇は、截然として二段に分れ、起首より幽懷舒以暢に至るまでは、專ら洞庭の風景を敍し、主人孩童稚より結末に至るまでは、專ら己の境遇を述べ、情景融合して、組織も緊密に出來て居る。劉禹錫は、この篇に和する六十韻の一篇を作つて、現に集中に載せてあるが、篇幅が長いから、ここに附載することを見合はせる。

送文暢師北游

文暢師の北游を送る

昔在四門館(一)。晨有僧來謁。　むかし、四門館に在りしとき、晨に僧あつて來り謁す。
自言本呉人。少小學城闕(二)。　自ら言ふ、本と呉人、少小にして城闕に學ぶ。
已窮佛根源。粗識事輗軏(三)。　すでに佛の根源を窮めて、粗ぼ事の輗軏を識る。
攣拘(四)屈吾眞。戒轄(五)思遠發。　攣拘して、吾が眞を屈し、轄を戒めて遠く發せむを思ふ。
薦紳(六)秉筆徒。聲譽耀前閥(七)。　薦紳、筆を秉るの徒、聲譽、前閥を耀かす。
從求送行詩。屢造忍顚蹶(八)。　從つて送行の詩を求め、屢ば造りて顚蹶を忍ぶ。
今成十餘卷。浩(九)汗羅斧鉞(一〇)。　今、十餘卷を成し、浩汗、斧鉞を羅す。
先生(一一)閟(一二)窮巷。未(一三)得窺剞劂。　先生、窮巷を閟ぢて、未だ剞劂を窺ふを得ず。
又聞識大道。何路補剠刖(一四)。　又聞く、大道を識ると、何の路か剠刖を補はむ。
出其囊中文。滿聽實清越。　その囊中の文を出せば、聽に滿ちて實に清越。
謂僧當少安。草序頗排訐(一五)。　僧に謂ふ、當に少しく安んずべし、序を草して頗る排訐す。
上論古之初。所以施賞罰。　上は、古しへの初、賞罰を施す所以を論ず。

下開迷惑胸。窙(一六)豁剷(一七)株橜。　下は、迷惑の胸を開いて、窙豁として株橜を剷る。
僧時不聽瑩(一八)。若飮水救(一九)暍。　僧、時に聽瑩せず、水を飮んで、暍を救ふが若し。
風塵一出門。時日多如髮。　風塵、一たび門を出で、時日、多きこと髮の如し。
三年竄荒嶺。守縣坐深樾(二〇)。　三年、荒嶺に竄せられ、縣を守つて深樾に坐す。
徵租聚異物。詭(二一)製怛巾韈(二二)。　徵租、異物を聚め、詭製、巾韈に怛く。
幽窮共誰語。思想甚含噦(二三)。　幽窮、誰と共にか語らむ、思想、噦を含むよりも甚し。
昨來得(二四)京官。照壁喜(二五)見蝎。　昨來、京官を得、壁を照らして、蝎を見るを喜ぶ。
況逢舊親識。無不比鶼(二六)蟨。　況んや、舊親識に逢ひ、鶼蟨に比せざるなし。
長安多門戶。弔慶少休歇。　長安、門戶多く、弔慶、休歇少し。
而(二七)能勤來過。重惠安(二八)可揭。　而も能く勤めて來り過ぐ、重惠、安んぞ揭ぐべき。
當今聖政初。恩澤完獝(二九)狘。　當今聖政の初、恩澤、獝狘を完うす。
胡爲不自暇。飄(三〇)戾逐鸇(三一)鷢。　何すれぞ、自ら暇あらざる、飄戾して、鸇鷢を逐ふ。
僕(三二)射領北門。威德壓胡(三三)羯。　僕射、北門を領し、威德、胡羯を壓す。

相公鎭幽都。竹帛爛勳伐。　相公、幽都に鎭し、竹帛、勳伐を爛かす。
酒場舞閨姝。獵騎圍邊月。　酒場、閨姝を舞はしめ、獵騎、邊月を圍む。
開張篋中寶。自可得津筏。　篋中の寶を開張すれば、自ら津筏を得べし。
從茲富裘馬。寧復茹藜蕨。　これより、裘馬に富まば、むしろ、復た藜蕨を茹はむや。
余期報恩後。謝病老耕垡。　余は期す、恩に報ずる後、病を謝して耕垡に老ゆるを。
庇身指蓬茅。逞志縱獫猲。　身を庇して蓬茅を指し、志を逞うして獫猲を縱たしめむ。
僧還相訪來。山藥煑可掘。　僧還つて相訪ひ來らば、山藥、煑て掘るべし。

【字解】【一】四門館　卽ち四門學、四方侯伯の子弟を敎へる處。もと國子監に六學があつて、一に國子學、二に太學、三に四門學、四に律學、五に書學、六に算學といふので、後魏の太和中、はじめて學を四門に立て、因つて、以て名となし、隋では、始めて國子に隸し、唐でも之を承けた。そして、唐代では、四門博士が三人あつて、卽ち其敎授である。つまり、國子學は在京貴族の子弟を敎へ、四門學は在外有爵者の子弟を敎授したので、兩方を合せて學習院といつた樣なものである。【二】城闕　詩經の鄭風子衿に挑兮達兮在城闕兮とあつて、都會といふ義、必ずしも天子の都に限つた譯ではない。【三】鞔軏　鞔は轅端の橫木、以て軛を縛するもの。軏は、轅端上の曲れる鉤衡。つまり、鞔は轅、軏は馬を縛り付ける木。個個の物の用途性質といふ義に用ひてある。【四】羈拘　漢書鄒陽傳に「能く羈拘の語を越ゆ」といひ、文選西征賦に陋吾人之拘攣といひ、卽ち束縛といふこと。【五】戒轄　轄は車輛の楔、卽ちくさび。【六】厲神　大官遠中。【七】蹯前閾　從前の門閾として著名である。【八】忍顚蹶　蹶きころぶことを我慢する。

【九】浩汗　分量の多いこと。【一〇】羅斧鉞　磨き立てた斧や鉞を羅列するが如く、光彩燦然たること。【一一】先生　韓愈自ら言ふ。【一二】閑窮巷　窮小路に佗住居をして居る。【一三】未得寬刵劓　刵は曲刀、劓は曲鑿、ともに板木を彫刻する道具。ここでは筆の働きに借りて言つたので、未だ先生の御作を頂戴しないといふこと。【一四】補劓刖　劓は黥に同じ、入墨をすること。刖は足を切ること。ともに極刑の名。莊子の大宗師に「庸詎ぞ、夫の造物者の我が黥を息めずして、我が劓を補はざるを知らむや」とある。儒家から見ると、坊主は、髮を剃つたりするから、刑餘の罪人に等しい、その者の道を補ふやうなことを承りたいといふ義。【一五】排訐　惡くいふ、譏る。【一六】寥豁　寥は開達の貌、二字でからりとする貌。【一七】副株槊　列子に「呀音が處るや、槃株に拘せらるるが如し」とあつて、その註に「斷木なり」とある。つまり、聖人の道を妨げる亂枕を一刀の下に切り棄てる。【一八】聽瑩　莊子の齊物論に「これ黃帝の聽瑩するところなり」とあつて、その註に「聽瑩は疑惑の貌」とある。【一九】救暍　暍は渴に同じ。【二〇】深樾　楚に兩木交陰の下を謂うて樾と爲す、卽ち林。【二一】詭製　奇怪なる拵へ方。【二二】巾韈　頭巾と足袋、卽ち服裝を汎稱す。【二三】含噦　噦は逆氣、胸が惡くて嘔吐を催す。【二四】得京官　元和元年六月、江陵より召し還されて國子博士となりしことを云ふ。【二五】喜見蝎　蝎はさそり、これに噬まれると離れ上つて痛い。但し、南方に居らずして、北地に限るといふこと。そこで、これを見るを喜ぶといつたのである。蔣註に「酉陽雜俎、江南舊と蝎なし。開元の初、一主簿あり、竹筒に盛りて、江を過ぐ、今、江南、往往之あり、俗呼んで主簿蟲と爲すと。蘇東坡、顯獸を聞いて筆を試むるに、余、黃州に謫居すること五年、今日、汝州を離れて北行す、岸上に顯獸、空籠を穿らす、意、亦た欣然たり。蓋し、此聲を聞かざること久し、退之の照壁喜見蝎も、虛語ならず、又嶺南より歸るに云ふ、旣脫鼠蝎變、行有見蝎喜と。皆これを此に取る」といつて居る。【二六】鶼蟨　鶼は比翼の鳥、蟨は二頭相連つて歩くといふ獸の名。爾雅に「南方に比翼の鳥あり、比せざれば飛ばず、その名これを鶼鶼といふ」とあり、孔叢子に「北方に獸あり、名を蟨といふ、蛩蛩距虛を愛す。食して甘草を得れば、必ず齧んで以て遺る。蛩蛩距虛、人の將に來らむとするを見れば、必ず蟨を負うて以て走る、蟨は蛩蛩距虛を愛するに非ざるなり、その足を假るが爲めなり。二獸も亦た蟨を愛するに非ざるなり。その甘草を得て、之に遺るが爲めなり。夫れ禽獸猶は比假して、相報ゆるを知るなり、況んや、士君子、名利を欲するものをや」とある。

【二七】爾能　爾は汝と訓すべし。【二八】安可揚　もたげ上げて之に擬することも出來ない。【二九】獝狘　狘は獝に同じ。禮記に「鳳以て畜と爲す、故に鳥獝せず。麟以て畜となす、故に獸狘せず」とあつて、その註に「獝は驚飛なり、狘は驚走なり」とある。【三〇】乖戾　戾はもとる、違ふ。乖然として一般の人と趣を異にする。【三一】鵂鵟　鵂は鴟の屬、鵟は鷹に似て尾白く、善く鼠を捕へる。【三二】僕射　田季安が魏博節度使たるをいふ。【三三】胡羯　ともに蠻夷の名。【三四】相公　劉濟が幽州節度使たるをいふ。【三五】竹帛　書物、古しへは竹簡に書し、又帛に書せしが故に云ふ。【三六】篋中寶　例の萬師先生の作った送序の類をいふ。【三七】津筏　渡りに船といふ義。【三八】茹　食ふ。【三九】藜蕨　あかざ、わらび。【四〇】耕垡　土を耕起するを垡といふとあつて、即ち土を均らすこと。【四一】獫猲　詩經に載獫歇驕とあつて、爾雅に「長喙を獫といひ、短喙を猲といふ」とある。即ち獵犬で、口先の長い短いに因つて區別する、【四二】山藥　山の芋。

【題意】文暢に就いて、韓愈は、別に送序を作つたことがあるので、それは貞元十九年、愈が四門博士であつた時である。その文は、文章軌範にも載せてあるから、讀者諸君は、先刻すでに御承知の事であらう。文中に「浮屠師文暢、文章を喜び、その天下に周遊する、凡そ行くあれば、必ず其志すところを詠歌せむことを求む、貞元十九年春、將に東南に行かむとす。柳君宗元、これが爲に請うて、その裝を解けば、得るところの詩敍累百餘篇を得たり」とある。蔣註には「柳君宗元、これが詩を作る、然れども、宗元の詩、今傳ふるなし」とあるが、柳宗元が此時詩を作つたといふことは、韓愈の送序には書いてないので、これは、一時檢點の誤であらう。その後、凡そ三年を經て、元和元年、韓愈は、京師に召し還されて、國子博士となり、元和四年の六月、都官員外郎に改められて洛陽に赴任するまでは、長安に居たから、その間に、此詩を作つたので、因つて、前に送序を作りし後、種種の閱歷を爲し、ここに又文暢の行を送るといふ處から、前後の對照を取つて、自己の感慨を寓したのである。それから、柳宗元の文集に、送㆓文暢上人㆒登㆓五臺㆒遂游㆓河朔㆒序の一文があるが、宗元は、永貞元年十月、永州司馬に貶せられ、元和十年、例に依つて京師に召され、やがて、柳州の刺史となるまで、凡そ十年間は、永州に居たのであるから、無論、この序も永州に於て作つたのである。さうすると、文暢は、貞元十九年に東南に旅行するといつて、長安を出てから、各處を經めぐり、元和二三年の頃、永州にも往つて、柳宗元に遇ひ、それから、長安に歸つて、五臺竝に河朔の方へ往くといつて、その序を作つて貰ひ、幾月をか經たる後、長安に來て韓愈に遇ひ、仍つて、この詩を作つて貰つたものと見える。

【詩意】むかし、予が四門博士として、都に在官した頃、朝早く、一人の坊主が尋ねて來た。聞いて見ると、名を文暢といひ、もと吳國の人で、若い時には、都會の學校で勉強をして居たが、その中にあらぬ方にそれて、佛學の根源を窮め、略ぼ佛理の本末を知り、その嚴重なる戒律に束縛されて、本性の眞を屈することを厭はず、又雲水の行脚を爲す爲に、車の轄を緘めて遠地に向つて出發せむとし、そこで、吾が方に來たのである。都に名高い貴顯を始め、文筆の士などは、文字上の閱閥をなし、聲譽赫赫として、なかなか偉く構へて居るから、毎毎さういふ人に送序を作つて貰はうといふので、滅

多に書かないのを、根氣よく數ば足を運び、顚び躓くことを忍んで、毎日催促に出かける。さういふ風にして、處處で作つて貰つた詩文は、段段たまつて、今では十餘卷となり、その分量も多く、且つ磨き立てた斧鉞を羅列するが如く、光彩燦然たるものがある。ここに、韓愈先生は、陋巷に佗住居をして居られ、未だ其文章を頂戴しないのは、まことに遺憾至極である、そして、先生は儒家の大道を知つて居られるから、刑餘の人に等しいと稱せらるる吾吾佛徒の爲になる樣なことを敎へて戴きたい、今まで手に入れたのは、この通りだといつて、嚢中の文を取り出して、それを讀み上げるのを聞くと、いかにも清越である。そこで、予は、文暢に答へて、さういふ譯なら、書いて遣るから、少し待つて與れといふので、浮屠文暢を送る序といふものを書き上げたが、佛敎の事は、性來大嫌であるから、餘程これを譏り、そして、全文の大意たるや、上にしては、古しへ國家といふものが出來上つた時分、聖君賢主が賞罰を施して人民を督勵した所以を論じ、下にしては、今佛敎を信じて居る有り難屋の迷つたり惑つたりして居る胸を推し開き、そして、聖人の大道を妨げるところの亂杭をさつぱりと一刀の下に截つて仕舞ひ、つまり、佛を排し、儒を進めるやうにせねば成らぬといふ旨意を述べた。これが、普通の坊主ならば、腹を立てるに相違ないが、流石に高僧と稱せられる文暢のことであるから、わが言ふところを聞き分けて、大分腑に落ちた樣な風で、たとへば、渴者が水を飲んで喉を濕すといふ樣に、非常に有り難く感じた樣に見えた。かくて、文暢は、浮世の風塵を追うて、一たび都門を出でてより、知らず、識らず、時日を經過したことは、亂れたる髮の毛の數ふるに勝へざるが如くであつて、その間に、わが一身にも、非常なる變化が起り、三年の間、荒れはてたる嶺南の地に謫せられ、陽山の縣令として、森の奥に住居し、土地の租稅として徵收せるは、いづれも見たことの無いやうな物品ばかり、その地の人民の服裝も、變てこな拵へ方であつて、すべてが目慣れぬものである處から、幽窮の中に在つて、話し相手もなく、いろいろ考へると、胸が惡くなつて、嘔吐を催すばかり。ところが、幸にも、國子博士となつて、都に召し還され、燈火を壁にさし付けて、蝎を見ても、嬉しく思ふ位。まして、むかしの朋友に逢ふと、鶼鶼と稱する鳥が翼を竝べて飛ぶが如く、蟨といふ獸が二頭相焉つて歩くが如く、いつまでも、相比し、相竝びて、末長く一處に居たいと思つて居た。さはれ、長安の都に於ては、非常に戶數も多いし、朋友も澤山ある處から、相離れない樣にといつても、さうは行かず、今日は誰の葬禮、今は某の慶事といふので、必ず出かけて行かねばならない。ここに、文暢は、よくも勤めて來訪されたので、その恩惠の厚いことは、なかなか、揭げて報ゆることも出來ぬ位である。今しも、聖天子が新に卽位されたばかり、その恩澤は、飛禽走獸にも及ぶ程であるのに、如何なれば、君は、自ら暇あらず、ことさらに世人と違うて、鷹の如く、鶻の如く、矢鐏に飛び去りたがるのであるか。君の行く方には、魏博節度使田季方が北門を領して、その威德は、胡羯を壓服するに足るべく、幽州節度使劉濟は、幽都を鎭して、その勳功は、竹帛の上に耀いて居る位。さういふ

處に君が行かれると、或は、宴會を催し、酒筵の上に於て、若い女どもに舞はせることもあるべく、或は狩獵を催し、邊地の月の皎皎たる下に、羣がる騎馬を以て獵場を圍むこともあるべく、いづれにしても、非常な歡迎を受けられることであらう。それから、君が今まで極力蒐集して篋中の寶となる例の送別の詩文を、一一開いて、僕射や相公に進めたならば、渡りに舟を得たるが如く、何か然るべき役目でも仰せ付けるかも知れない。かくて、君は、裘馬に富む樣な身分となれば、坊主の本色を無くして、精進三昧、藜や蕨ばかり食つて居るやうなこともなく、その方が、人間味があつて、却つて、善いかも知れない。これに反して、予は、今次召還された天恩に報ずるを得ば、それで、思ひ置くことが無いから、病氣を言ひ立てて歸農し、蓬茅の中に此身を置き、耕作を以て世を終り、その間、暇でもあれば、獵犬でも引き連れて、山林を跋渉したい。その時、君が浮世の事をうるさく思つて、尋ねて來て吳れたならば、僕射や相公の如き大した御馳走は到底出來ないが、せめては、山の芋でも掘つて、それを煮て差し上げやう。

【餘論】李光地は「先づ、文暢の言を求めて、當日序を作りしを敍し、古義を極陳し、以て其惑を破る、卽ち今集中文暢を送るの序、是れなり。中ごろ、陽山に貶せられ、自ら還つて親識を見るを幸とし、而して、僧の往來、尤も密。後、乃ちその墨を逃れて來り歸するを勸め、詩文を以て緣となし、以て自ら致すに足り、且つ與に異日相從ふの約を爲す」といひ、兪瑒は「公の諸長篇、險韻を用ひて、すべて傍借せず、正に謂はゆる巧を見難きに因る、獨り張十八に贈るの一首のみならざるなり、但だ江字韻、尤も窄しと爲すのみ」といひ、朱竹垞は「一味逞粗、硬然たる氣力、亦た驅使するに足る」といひ、何義門は酒場舞閨姝以下の數句を評して「數語甚だ鄙、恐らくは、却つて聰明道理を識る者に笑はれむ」といつたが、これは、わざと文暢を揶揄したので、さう眞面目に攻擊するにも及ぶまいと思ふ。なほ乾隆御批には「北道主人に就いて、歆動の語を爲す、純ら是れ聲色貨利の事、昌黎の胸次、何等乃ちこの腐鼠の嚇を作すか。その異學を惡むこと、俗情を鄙むより甚だしきに縁るか」とあるが、無論、韓愈は、坊主の世を舍てて淸淨寂滅を事とするを惡み、それよりも、人は人らしくせねばならぬといふので、仍つて、此に及んだのであらう。

答張徹

張徹に答ふ

辱贈不知報。我歌爾其(一)聆。
辱く贈らるるも報ゆるを知らず、我歌はむ爾其れ聆け。

首敍(二)始識面。次言(三)後分形。
首には始めて面を識ることを敍し、次には後に形を分つを言ふ。

道途(四)緜萬里。日月垂(五)十齡。
道途萬里緜に、日月十齡に垂んとす。

(六)浚郊避兵亂。(七)睢岸連(八)門停。
浚郊、兵亂を避け、睢岸、門停を連ぬ。

肝膽一古劍。波濤兩浮萍。　肝膽一古劍、波濤兩浮萍。
漬墨竄舊史。磨丹注前經。　墨を漬して、舊史を竄し、丹を磨いて、前經に注す。
義苑手祕寶。文堂耳驚霆。　義苑、祕寶を手にし、文堂、驚霆を耳にす。
暄晨躡露舃。暑夕眠風櫺。　暄晨、露舃を躡み、暑夕、風櫺に眠る。
結友子讓抗。請師我慚丁。　友を結んで、子、抗に讓り、師を請うて、我、丁に慚づ。
初味猶噉蔗。遂通斯建瓴。　初味、猶ほ蔗を噉ひ、遂に通じて斯に瓴を建つ。
搜奇日有富。嗜善心無寧。　奇を搜つて日に富めるあり、善を嗜んで心寧きなし。
石梁平侹侹。沙水光泠泠。　石梁、平かにして侹侹たり、沙水光つて泠泠たり。
乘枯摘野豔。沈細抽潛腥。　枯に乘じて、野豔を摘み、細を沈めて、潛腥を抽く。
遊寺去陟巘。尋徑返穿汀。　寺に遊んで去つて巘に陟り、徑を尋ねて返つて汀を穿つ。
緣雲竹竦竦。失路麻冥冥。　雲に緣つて、竹竦竦たり、路を失うて、麻冥冥たり。
淫潦忽翻野。平蕪眇開溟。　淫潦、忽ち野に翻り、平蕪、眇として溟を開く。
防泄塹夜塞。懼衝城晝扃。　泄るるを防いで、塹、夜塞ぎ、衝を懼れて、城、晝扃ざす。
及去事戎轡。相逢宴軍伶。　去つて、戎轡を事とするに及び、相逢うて軍伶を宴す。
觥秋縱兀兀。獵旦馳駉駉。　觥秋、縱に兀兀たり、獵旦馳せて駉駉たり。
從賦始分手。朝京忽同舲。　賦に從つて、始めて手を分ち、京に朝して忽ち舲を同うす。
急時促暗棹。戀月留虛亭。　時を急にして、暗棹を促し、月を戀うて、虛亭に留まる。
畢事驅傳馬。安居守窻螢。　事を畢りて、傳馬を驅り、居に安んじて、窻螢を守る。
梅花灞水別。宮燭驪山醒。　梅花灞水に別れ、宮燭、驪山に醒む。
省選逮投足。鄉賓尙摧翎。　省選、足を投ずるに逮び、鄉賓、尙ほ翎を摧く。
塵袪又一摻。淚眥還雙熒。　塵袪、又一たび摻し、淚眥、還た雙熒。
洛邑得休告。華山窮絕陘。　洛邑に休告を得、華山に絕陘を窮む。
倚巖睨海浪。引袖拂天星。　巖に倚つて海浪を睨し、袖を引いて天星を拂ふ。
日駕此迴轄。金神所司刑。　日駕、此に轄を迴し、金神、刑を司るところ。
泉紳拖修白。石劍攢高青。　泉紳は、修白を拖き、石劍は、高青を攢む。
磴蘚澾拳跼。梯飈颭伶俜。　磴蘚澾にして拳跼し、梯飈颭いで伶俜たり。

悔狂已(六三)咋指。垂誡仍(六四)鐫銘。　狂を悔いて已に指を咋み、誡を垂れて仍ほ銘を鐫る。

(六五)峨豸忝備列。(六六)伏蒲愧(六七)分涇。　豸を峨うして、列に備はるを忝うし、蒲に伏して涇を分つを愧づ。

微誠慕(六八)横草。瑣力摧(六九)撞筳。　微誠、横草を慕ひ、瑣力、撞筳を摧く。

疊雪走商嶺。飛波航洞庭。　疊雪、商嶺に走り、飛波、洞庭に航す。

下險疑墮井。守官類(七〇)拘囹。　險を下つて井に墮つるかと疑ひ、官を守つて囹に拘はるに似たり。

荒餐茹(七一)獠蠱。幽夢感(七二)湘靈。　荒餐、獠蠱を茹ひ、幽夢、湘靈を感ず。

刺史肅(七三)著蔡。吏人沸(七四)蝗螟。　刺史、蓍蔡を肅し、吏人、蝗螟を沸かす。

點綴(七五)簿上字。趨蹌(七六)閤前鈴。　簿上の字を點綴し、閤前の鈴を趨蹌す。

賴其飽山水。得以娛瞻聽。　賴に其れ山水を飽し、以て瞻聽を娛ましむるを得たり。

紫樹雕(七七)斐亹。碧流滴(七八)瓏玲。　紫樹、雕つて斐亹たり、碧流、滴つて瓏玲たり。

映波鋪遠錦。揷地列長屛。　波に映じて遠錦を鋪き、地を揷んで長屛を列す。

(七九)愁狖(八〇)酸骨死。怪花醉魂馨。　愁狖、骨を酸して死す、怪花、魂を醉はせて馨し。

(八一)潛苞絳實坼。幽乳(八二)翠毛零。　潛苞、絳實坼け、幽乳、翠毛零つ。

赦行五百里(八四)。月變三十蓂(八五)。　赦行五百里、月變三十蓂。

(八六)漸階羣(八七)振鷺。入學誨(八八)螟蛉。　階に漸みて、振鷺を羣り、學に入つて、螟蛉に誨ゆ。

(八九)苹甘謝鳴鹿。(九〇)罍滿慚罄缾。　苹甘くして鳴鹿を謝し、罍滿ちて罄缾を慚づ。

(九一)冏冏抱(九二)瑚璉。飛飛聯(九三)鶺鴒。　冏冏として、瑚璉を抱き、飛飛として、鶺鴒を聯ぬ。

(九四)魚鬣欲脫背。(九五)虬光先照(九六)硎。　魚鬣、背を脫せむと欲し、虬光、先づ硎を照らす。

豈獨出(九七)醜類。方當動朝廷。　豈獨り醜類を出づるのみならむや、方に當に朝廷を動かすべし。

勤來得(九八)晤語。勿憚宿(九九)寒廳。　勤めて來つて晤語を得、寒廳に宿するを憚る勿れ。

【字解】【一】其聆　聆は聞く。【二】始識面　北史に「齊の神武、太原より來り朝し、宋遊を見て曰く、かつて其名を聞く、今日はじめて其面を識る」とある。【三】分形　曹子建の求自試表に「誠に國と分形同氣、憂患これを共にするなり」とある。【四】緬　はるかに。【五】十齡　貞元十二年丙子より元和改元丙戌に至るまでを云ふ。【六】淺郊　古しへの舊邑の名、唐の汴州。時に貞元十五年、董晉の死後、宣武軍亂れて、留後陸長源を殺せしことを云ふ。【七】睢岸　徐州に至つて張建封に依りしこと。前の此日足可惜の詩中に、僕射南陽公、宅我睢水陽とある。【八】門倖　倖は居に同じ。【九】漬墨　墨を筆に含ませる。【一〇】窺舊史　古しへの史書などに句讀を切り、文字の誤を正し、又自説などを書き入れなどする。【一一】磨丹　朱墨を磨る。【一二】義苑　義は經義、つまり古人の經解を集める。【一三】露屨　露に濡れた靴。【一四】風櫺　風の吹き入る窗。【一五】讓抗　晉書の羊祜傳に「祜、出でて南夏に鎭し、陸抗と相對し、使命交通す。祜、これに藥を饋る。抗、これを服して疑ふ心なし。人、或は抗を諫む、抗曰

く、羊斟豈に人を敗するもの」とある。【一六】廝丁 左傳襄公十四年に「はじめ、尹公佗、射を庾公差に學ぶ、庾公差、射を公孫丁に學ぶ。二子、公を追ふ、公孫丁、公に御たり。尹公佗曰く、子は師たり、我は遠し」とある。【一七】初味 晉書顧愷之傳に「甘蔗を食ふ毎に、恒に尾より本に至る、曰く、漸く佳境に入る」とある。【一八】建瓴 漢書高帝紀に「譬へば、猶ほ高屋の上に居て、瓴水を建つるがごときなり」とあり、如淳の註に「瓴は水を盛る瓶なり」とある。【一九】石梁 石橋。【二〇】偃偃 長き貌。【二一】乘枯 枯木で編んだ筏に乘る。【二二】野蘤 野花に同じ。【二三】沈細 目の細かい網を水に投げ下す。【二四】抽潛腥 水中に匿れて居る魚を取り上げる。【二五】緣雲 雲に依る。【二六】淫潦 長雨の後の洪水。【二七】開溟 溟は大海、水色の黑きが故に溟といふ。【二八】壅 汴渠の水門を塞ぐ。【二九】懾衝 水勢の衝突を恐れる。【三〇】事戎幕 張建封の手引に依つて節度推官に任ぜられしことを云ふ。【三一】軍伶 軍樂隊。【三二】縱兀兀 兀兀たる思を縱にして痛飲する。【三三】駉駉 勢よき貌、詩經に駉駉牡馬とある。【三四】從賦 張徹が進士の試驗を受ける爲に上京せしをいふ。【三五】同舲 舲は舟の窓あるもの。この年冬、韓愈は、徐州の從事を以て京師に朝し、仍つて、張徹と途中で會して、それから舟で同行したと見える。【三六】暗棹 暗夜に舟を棹す。【三七】盧亭 人なき亭舍。【三八】傳馬 傳は驛、即ち宿つぎの馬。十六年春、朝正の事畢りて、彭城に歸ることをいふ。【三九】守囊螢 螢を集めて讀書した車胤の故事を用ふ。【四〇】灞水 前にも見えた、長安の近郊に在る川。【四一】宮燭 驪山には離宮があつて、そこに點した燈火。【四二】曙 宮人の夢が醒める、即ち朝早き時分。【四三】省選 禮部省の選拔試驗を行ふ。【四四】投足 足を投じて其中に入る、即ち試驗場に入る。【四五】鄉貢 即ち鄉貢進士。【四六】擺翎 鳥が羽を擺くといふのは失意の樣で、ここでは落第せしことを云ふ。【四七】塵袪 塵にまみれた袂。【四八】一摻 摻は擥る、身に著ける。【四九】雙熒 兩方の目が涙に輝く。【五〇】洛邑得休告 貞元十八年、韓愈が四門博士となりし後、暇を願うて洛陽に歸省した時の事を指す。【五一】絕陘 爾雅に「山は絕陘」とあつて、郭璞の註に「連山中斷するを陘といふ」とある。【五二】日駕 日の車、前に見えた日御に同じ。【五三】退轄 轄はくさび、車を廻すといふこと。山が非常に高いから、太陽も此に來ると、車を廻して退卻するといふ意。【五四】金神所司刑 華山は五嶽の中の西嶽で、その神は少昊、金神、そして西方は刑を司る故に云ふ。【五五】泉紳 瀑布が帶を垂らした樣になつて居る。【五六】皤白 長く白い。【五七】磴蘚 苔を帶びたる石段。【五八】澾 ぬらりと滑べる。【五九】拳跼 踡局して行き難き貌。【六〇】梯飆 ゆらゆらと風に動く繩梯子。【六一】颭 うごく、ゆらめく。【六二】伶俜 行いて正しからざる貌。【六三】咋指 指を嚙む。【六四】鐫銘 心魂に銘じて刻みつける。李肇の國史補に「韓愈、奇を好む、客と華山の絕峰に登り、返るべからざるを度り、乃ち遺書を作り、狂を發して慟哭す。華陰の令、百計これを取らしめ、乃ち下る」とあるが、全く實事であるか、さなくば、この詩句に本づいて捏造した小說であらう。【六五】峨豸 說文に「獬廌獸は、牛に似て一角とあり」といひ、異物志に「北荒中に獸あり、獬豸と名づく。性、曲直を分つ。人の鬪ふを見れば、直ならざる者に觸れ、人の爭を聞けば、正しからざる者を咋む。楚王、かつて此獸を獲、因つて、其形に象り以て衣冠を製す」といひ、漢官儀に「獬豸獸、性、不直に觸る、故に、執憲者、角形を以て冠となす」といつて居る。獬豸の付いて居る高い冠を戴くといふことで、貞元十九年、侍御史となりしことをいふ。【六六】伏蒲 漢書に「史丹、直に臥內に入り、頓首して青蒲の上に伏す」とあつて、應劭の註に「青を以て地を規するを青蒲といふ」とある。蒲上に身を伏せ、面を犯して天子を諫める。【六七】分涇 涇は濁流、渭の清きに對していふ。分涇とは、涇渭と分別して清濁を明かにすること。詩經に涇以レ渭濁、湜湜其沚とある。【六八】橫草 漢書終軍傳に「軍に橫草の功なし」とあつて、顏師古の註に「言ふは、草中を行き、草をして偃臥せしむるなり」とある。【六九】撞莛　は草の莖、鐘を撞くに草莖を以てしても、何の效果もない。說苑に「子路、趙襄子に對へて曰く、天下の鳴鐘を建てて、之を撞くに莛を以てす、豈に能く其聲を發せしむや」とある。【七〇】拘囹 囹圄即ち獄中に囚へられる。【七一】獠蠻 獠は種族の名、北史に「獠は南蠻の別種、名字なく、長幼の次第を以て之を呼ぶ」とある。蠻は蟲。【七二】湘靈 即ち湘君、堯の二女、舜の妻で、舜を追うて洞庭の邊に來り、舜の死を聞いて、そこで死んだ。【七三】蓍蔡 蓍はめどぎ、蔡は龜、ともに卜筮を爲すに用ふ。史記の龜策傳に「蓍、千歲なれば、一本百莖、下に神龜あつて之を守り、上に青雲あつて之を覆ふ」とあり、家語に「臧氏の家に守龜あり、名づけて蔡といふ」とあり、袁彥伯の三國名臣贊に思同二蓍蔡一、運用無レ方とある。【七四】蝗螟 蝗はいなご。螟はうんか、稻を害する蟲。左傳隱公五年、螟の杜預註に「蟲の苗心を食ふもの」とある。【七五】簿上字 簿書の文字。【七六】閤前鈴 役所に出頭すると、鈴を鳴らして著到を報ずる。後漢書の周行傳に「又鈴下を問ふ」とあつて、その註に「漢官儀に、

鈴下侍二閤辟車一、これ皆名を以て自ら定むるものなり」とあり、晉書の羊祜傳に「出でて南夏に鎮す、鈴閤の下、侍衛、十數人に過ぎず」とある。【七七】斐亹 亹なり合ふ。【七八】瓏玲 玉の響く聲。【七九】愁狖 狖は蜼、獼猴に似て大、亦た善く啼く。楚辭に猿狖羣嘯兮虎豹嘷とある。【八〇】酸骨 骨を酸にする。【八一】潛苞 見えぬ葉かげに苞に包まつて居る。【八二】陽孔 温氣を帶びたるないふ。【八三】犂毛 若ないふ。【八四】五百里 陽山より江陵に量移されたことないふ。【八五】三十莢 帝王世紀に「堯、時に天子となる、蓂莢、庭に生じ、帝の爲に歴を成す、一日に始まり、一莢を生じ、月半に至つて十五莢を生じ、十六日、一莢を落ち、晦日に至つて盡く。小月には、莢厭して落ちず」とある。卽ち三十個、二年中の義。【八六】漸階 紫宸殿の階に進む。【八七】振鷺 詩經に振鷺于飛とか振振鷺とかあつて、官員の行列をなすこと、これは召し還されて國子博士となりしことを云ふ。【八八】螟蛉 揚子法言に「螟蛉の子、殪れて蜾蠃に逢ひ、これを祝して曰く、我に類せよ、我に類せよ、と。久しうして之に肖る」とあり、陸璣の蟲魚疏に「螟蛉は桑上の小青蟲、蜾は蠃土蜂、蜂に似て小腰、桑蟲を取り、これを木空中に負ひ、七日にして化して其子となす」とある。【八九】苹甘 詩經の鹿鳴に呦呦鹿鳴、食二野之苹一とあるに本づく、前にも見ゆ。【九〇】罍滿慚罄缾 詩經に缾之罄矣、維罍之恥とあつて、罍は大なる器、缾は小なる器。【九一】閃閃 輝く貌。【九二】瑚璉 論語に孔子が子貢を稱して瑚璉だといつたことが見えて居る。【九三】鶺鴒 詩經に鶺鴒在レ原、兄弟急難とあり、爾雅に鶺鴒雝渠とあつて、郭璞の註に「雀の屬なり、飛べば鳴き、行けば搖く」とある。張徹の墓志に「徹の弟復、亦た進士に擧げらる」とあつて、この頃、二人ともに試驗の準備をして居たのである。【九四】魚鬣欲脫背 魚の鱗が取れ、變化して龍となる。【九五】虹光 刀の光ないふ。【九六】照硏 砥石で磨けば愈よ光る。【九七】醜類 醜は同類。【九八】晤語 晤は對面する。【九九】寥廓 さびしき官舍。

【題義】張徹は、前にも見えて居た人であつて、もと韓愈の門下の士、又その從子の壻である。韓愈は、後に其墓志を撰して「徹、進士に擧げられ、殿中侍御史に遷り、幽州節度判官となり、軍亂るるや、賊を罵つて死す」とあつて、なほ其詳は唐書に載せてある。はじめ、張徹が韓愈に詩を贈つたから、韓愈は、之に答へて、乃ち此詩を作つたのである。

【詩意】折角、君から贈詩を辱うしたから、何か之に報ゆるところが無くてはならぬ。そこで、我は一つの歌を作つたので、どうか君聞いて呉れ。その歌は、最初君と相見て知り合に成つたことを敍し、それから、君と別れ別れになつた今日までの經過を殘らず述べるつもりである。地を以てすれば、道途萬里を隔て、時を以てすれば、日月、すでに十年にもならうとする。その間の事であるから、隨分長くなつて聞きづらいが、マア辛抱して聞いて呉れろ。その頃、われは、汴州の兵亂を避けて、睢水の流れて居る彭城に來り、君とは門を連ねて、鄰り同士であつて、その時、はじめて君を知つたのである。予の君に於ける、肝膽相照らして、殆んど一把の古劍の如く、そして、予とともに、波に搖らるる浮草の定めなきが、偶然ここに出合つたやうなものであつた。君は、筆に墨を付けて、古い歷史類に書き入れをしたり、朱墨を磨つて、前代の經書に註釋を加へたりして、專ら經史を研究して居た。かくて、君は經義の苑に立ち入つては、古人が奧義を極めた祕寶を手にし、文章の堂に入つては、高名雷の如く、人の耳に轟き渡る位。しかし、勉強ばかりしても居られないから、暖かい朝には、露に靴を濕らして吾が家に來り、暑い夕には、風の吹き入る窓に眠る爲に、君の住居を訪ふこともあつた。君の如き善き友達はないと思つて、頻りに平等の交際を求めたが、君は、其才陸抗に讓るといつて謙遜し、予に師たるを請はれたが、予は公孫丁に及ばぬことを愧づるばかり。予の言ふことは、初めこ

そ詰まらないが、後には味が出て來て、丁度甘蔗を嚙むやうであるが、君は、早くも之を悟り、たとへば、屋上から瓶の水を傾くるが如く、まことに、思ひ殘すことが無くて、ひどく嬉しかつた。そこで、珍らしい文字を搜がして、日ごとに知識を增し、又善を嗜んで、之を身に行ひ、心に少しの暇もない位。しかし、時時は打連れ立つて、郭外に出かけたこともあるので、石橋は、平に長く、その下には、沙をひたして居る水が冷冷として流れる。そこへ、枯木を編んだ筏を浮べて、岸に咲きたる野花を摘み、網を打つて、水底に潛める魚を取つたこともある。又、時として、古寺を訪はむとして、山に上り、歸途には、捷路を尋ねて、元の沙汀に出でむとし、ふと道を誤り、雲に緣つて竦竦たる竹林に入り、麻畑の暗い處に迷ひ込んで、出るにも出られず、大に閉口したことがある。この邊は、黃河に近いから、長雨の名殘の洪水が、なほ野に飜り、そして、平蕪の處は、滮滮として、さながら大海の如くであつた。そこには隄があつて、水の漏れ出ることを防ぐ爲に、夜になると、水門を塞ぎ、又、水勢の衝突するを恐れて、晝でも城門が閉ぢてある。かういふ處をうろうろした時には、お互に隨分困まり入つたことであつた。兎角する內に、予は節度推官に任ぜられたから、前の樣に閒散な身でないやうになり、時たま、君に逢うて軍樂隊の居る前で酒を飲んだ位な事であつた。それから、秋の頃、田獵を畢つて宴會を催される其席上に於て、君に遇つたこともあつたが、大きな杯を手にし、兀兀たる思を縱にして、十分痛飮し、あくる朝は勢よく馬を馳せた。その後、君は、都に出て試驗に應ずる爲に、暫く手を分つこととなつたが、折ふし、予も公用を帶びて上京することがあつたから、途中で遇つて、舟を同じうすることになつた。二人とも、急ぎの旅であるから、船頭を促して、暗夜にも舟を棹させたが、今宵は月が好い、明日急げば取り返しも付くからといつて、盧亭に一宿して、良夜の眺を恣にするといふ樣な風流もあつた。かくて、上京の後、予は、用事も片付いたからといふので、驛馬を馳せて徐州に還らむとし、君は試驗準備の爲に、窻の螢を集めて、これから一勉强するといふことに成つた。そこで、君は、梅花の開く頃、態態予を灞水まで送られたが、朝早く、驪山の宮殿に於ては、燭火わづかに盡きて、宮人の夢將に醒めむとする時であつた。それから、君は愈よ試驗場中に足を投げ入れた處が、折角の鄕貢進士も、鳥が羽を摧いた樣に、落第して仕舞ひ、朝衣を著ける筈の目的が外れて、塵に塗れた衣物を執つて、今一度、身に著けねばならぬこととなり、淚の爲に、兩の眥も輝いて見えるばかり、頻りに慟哭して、その不運を歎き侘びて居た。その時、予は段段閱歷を重ね、休暇を貰つて、洛陽に歸省して居たが、幸な折だといふので、絕險を躡んで、華山に登攀を試み、絕頂なる巖に倚りかかつて、浪だつ雲の海を眺め、袖を引いて、天上の星を拂ひ落し、流石にこの山は渡る日の影も、かぎろひて、車を廻すかと疑はれる程の高さで、西方を支配し、秋の神として刑罰を司るといふのも、尤もな事と思つた。山中處處に瀑布があつて、帶の如き泉は、眞白に長く、劍の如き石は、攢まつて高く靑い。それから、降りの道は、まことに危險で、苔むした

る石段は、ぬらぬらと滑つて、なかなか足が運ばれず、風にゆらめく繩梯は、ひらひらとして、容易に進むことが出來ない。そこで、かかる冒險を敢てした少年の狂氣を悔いて、おもはず指を嚙み、君子は危きに近よらずといふ誡は、一刻も忘れてならぬものと、深く心に銘した。その内に、侍御史に任せられ、獬豸の高い冠を戴いて、朝臣の員に備はり、蒲に伏して直諫し、自分だけは、淸んだ水であつても、同輩の濁りを分たねばならぬことを心に愧かしく思つた。もとより、赤誠を盡して、草野の中に横はつても、君の爲に報效を致さうと思つて居るが、何分微力である處から、草莖を以て鐘を撞けば、やがて摧けて仕舞ふと同じである。兎角する内に、罪を得て、陽山に謫せられ、雪中、商山を踰え、春の波起つ頃、洞庭を渡り、險を下れば、井戸の底に落つるかと疑はれ、官を守つて遠地に居るは、さながら、囚人の樣な氣がして、堪まらなかつた。もとより、蠻地であるから、住民は、蟲などを取つて食となし、貶謫の身は、夢の中にも湘靈の事を感じ、淋しき思は愈よ增すばかりであつた。その地の刺史は、卜筮をなして、穀物の實のるを祈るのが本職の樣になつて居るが、役人どもは、そんな事とは知らず、蝗螟でも出ると、鼎の沸いた樣に騷ぐ。すべて下役人の仕事は、帳簿の上の整理をすることであつて、出入の際は、閤前の鈴を振り鳴らして、長官に知らせるやうになつて居る。こんな處で、こんな事をして居ては、まことに詰まらぬが、唯だ一つの樂は、飽くまで、山水の勝を探つて、耳目を喜ばしたことである。紫色の木は、浮き彫りをした樣に重り合ひ、碧色の綺麗な水は、玉の如き音を發して流れて居る。その木が波に映じたのは、錦を鋪き詰めたのを遠くから眺めるやうであるし、地に挿んだ處は、長い屛風を立て列ねたるが如く、その山水の間には、猿が居て、悲しき聲に骨までも痛めて死し、見なれぬ花は、人の心魂を醉はしむるまで、高い香氣を發して居る。葉がくれには、苞が破れて、中から赤い實が顯はれ、濕地には、苔がへばり付いて居る。兎角する中に、予は、量移されて、江陵に徙ることとなり、又ぞろ、五百里の長旅を爲し、それから、凡そ三十ケ月を經て、やつと、都に還ることとなり、天子の階に進みて、鵷鷺の班に連り、そして、國子學に於て、蜂が蛆蟲に向つて、我に類かれ我に類かれといふ樣に、子弟どもを教育することとなり、呦呦たる鹿が友を呼び集めて、苹といふ草を食ふ樣に、專ら同役と共に其事に當つて居るが、折角、生徒を仕立て上げやうといふ志を遂げず、大きな罍が一ぱいでも、小さな缾に分つことの出來ないやうなのは、まことに、愧づべきことである。ここに、君は、冏冏たる瑚璉の器を抱いて居るから、及第して偉らい者に成るは、もとより言を俟たず、そして、飛飛たる鶺鴒の如く、令弟も一處に試驗の準備をして居られるさうで、隨分苦しいことであらう。さはいへ、君は、もとより前途多望の身で、やがて、魚の背の鰭が取れて龍に變化するが如く、劍を砥石にかければ、愈よ光を出すと同じで、やがて一朝志を得て、仕官したならば、ひとり同類に拔き出づるばかりでなく、その名聲は、忽ち朝廷を震動させることと思ふ。そこで、逢つて御話をすれば、幾分か御爲めに成ることもあらうから、

見苦しい官舍ではあるが、ここに泊ることを憚らず、どうか、是非尋ねて來られむことを希望する次第である。

【餘論】 筆墨閒錄に劉偘の言を擧げて「張徹に答ふる詩、尤も奇麗、梅花灞水の一對、極めて風味あり」といひ、蔣之翹は「退之、張徹に答ふるの詩、綦組特に工、雅縟、䧟䧟たる者の比に非ざるなり、思を運して、更に精鑿を加へしむれば、是れ潘陸と彷彿たるべし」といひ、顧嗣立は「この詩、通首對句を用ひ、しかも、生峭の筆を以て之を行る、便ち律詩と大に別、少陵 橋陵 の詩、便ち是れ此種」といひ、乾隆御批には「排律、拗體を用ふ、亦た是れ變格、調古にして詞豔、徒に敍致の工のみならず」とある。

薦士

士を薦む

(一)周詩三百篇。雅(二)麗理(三)訓(四)詁。
周詩三百篇、雅麗にして訓詁を理む。

曾經聖人手。議論安敢到。
かつて、聖人の手を經たり、議論安んぞ敢て到らむ。

五言出漢時。(五)蘇李首更號。
五言は、漢時に出で、蘇李首めて號を更む。

(六)東都漸瀰漫。派別百川導。
東都、漸く瀰漫、派別して百川導く。

(七)建安能者七。卓(八)犖變風(九)操。
建安、能くする者は七、卓犖として風操を變ず。

(一〇)逶迤抵晉宋。氣象日凋(一一)耗。
逶迤として、晉宋に抵り、氣象、日に凋耗。

中間數鮑(一二)謝。比(一三)近最淸(一四)奧。
中間、鮑謝を數ふ、近きに比すれば最も淸奧。

齊梁及陳隋。衆作等蟬噪。
齊梁と陳隋と、衆作、蟬噪に等し。

搜春摘花卉。沿(一五)襲傷剽竊。
春を搜つて、花卉を摘み、沿襲して、剽竊に傷らる。

(一六)國朝盛文章。子(一七)昂始高蹈。
國朝、文章盛なり、子昂、始めて高蹈。

勃興得李(一八)杜。萬(一九)類困陵暴。
勃興して、李杜を得たり、萬類、陵暴に困む。

後來相繼生。亦各臻閫(二〇)奧。
後來、相繼いで生じ、亦た各閫奧に臻る。

有窮者孟郊。受材實雄驁。
窮者孟郊あり、材を受くる實に雄驁。

(二一)冥觀洞古今。象(二二)外逐幽好。
冥觀、古今を洞し、象外、幽好を逐ふ。

橫空盤(二三)硬語。妥(二四)帖力排(二五)奡。
空に橫はつて、硬語を盤し、妥帖して力排奡。

敷柔肆紆餘。奮猛卷海(二六)潦。
敷柔、紆餘を肆にし、奮猛、海潦を卷く。

榮華肖天秀。捷疾逾響報。
榮華、天秀に肖たり、捷疾、響報に逾えたり。

行身踐規矩。甘辱恥媚竈(二七)。　身を行うて規矩を踐み、辱を甘じて媚竈せむことを恥づ。
孟軻(二八)分邪正。眸子看瞭眊(二九)。　孟軻、邪正を分ち、眸子、瞭眊を看る。
杳然粹而淸。可以鎭浮躁。　杳然、粹にして淸、以て浮躁を鎭すべし。
酸寒溧陽尉。五十幾何耄(三〇)。　酸寒たり溧陽の尉、五十、幾んど何ぞ耄せる。
孜孜營甘旨(三一)。辛苦久所冒。　孜孜として甘旨を營み、辛苦久しく冒すところ。
俗流知者誰。指注(三二)競嘲傲(三三)。　俗流知る者は誰ぞ、指注、競うて嘲傲。
聖皇索遺逸。髦士(三四)日登造(三五)。　聖皇、遺逸を索め、髦士、日に登造。
廟堂有賢相(三六)。愛遇均覆燾(三七)。　廟堂に賢相あり、愛遇、覆燾に均し。
況承歸(三八)與張。二公迭嗟悼。　況んや承く歸と張と、二公迭に嗟悼するを。
靑冥送吹噓(三九)。强箭射魯縞(四〇)。　靑冥に吹噓を送り、强箭、魯縞を射る。
胡爲久無成。使以歸期告。　胡すれぞ久しく成るなく、歸期を以て告げしむ。
霜風破佳菊。嘉節迫吹帽(四一)。　霜風、佳菊を破り、嘉節、吹帽に迫る。
念將決焉去。感物增戀嫪(四二)。　念ふ將に決焉として去らむとし、物に感じて戀嫪を增す。

彼微水中荇。尙煩左右芼(四三)。　彼の微たる水中の荇、尙ほ左右に芼ぶことを煩はす。
魯侯國至小。廟鼎(四四)猶納郜。　魯侯、國至つて小、廟鼎猶ほ郜を納る。
幸當擇(四五)珉玉。寧有棄珪瑁(四六)。　幸に當に珉玉を擇ぶべし、寧ろ珪瑁を棄つることあらむや。
悠悠我之思。擾擾風中纛(四七)。　悠悠たる我の思、擾擾たり風中の纛。
上言愧無路。日夜惟心禱。　言を上つて、路なきを愧ぢ、日夜、惟だ心に禱る。
鶴翎不天生。變化在啄菢(四八)。　鶴翎は天生せず、變化は啄菢に在り。
通波(四九)非難圖。尺地(五〇)易可漕。　通波、圖り難きに非ず、尺地、漕ぐべきこと易し。
善善不汲汲。後時徒悔懊(五一)。　善を善とすること汲汲たらざれば、後時、徒に悔懊せむ。
救死具八珍(五二)。不如一簞犒(五三)。　死を救はむとして八珍を具ふるは、一簞の犒へるに如かず。
微詩公勿誚(五四)。愷悌神所勞。　微詩、公、誚るなかれ、愷悌、神の勞するところ。

【字解】【一】周詩三百篇　詩經を云ふ。【二】雅麗　麗は詩の共通性質であるが、その麗にも種類があるので、詩經の詩は雅麗であるといふこと。【三】理　修める。【四】訓誥　古訓を調べて今の言葉で解釋する。【五】蘇李首更號　文選に李陵が蘇武に與へた詩があつて、その註に「五言の詩は、陵より始まるなり」とある。更號とは、前に四言を詩といつたが、今後改めて五言を詩と號したといふこと。五言の詩が蘇李二人から始まつたといふのは、通說であるが、實は未必の事で、文選に收めた古詩十九首中の八首と關若

生二春陽一の一首とは、玉臺新詠に載せて、作者を枚乘としてある。枚乘も、蘇李も、同じく漢の武帝の時の人であるが、蘇李河梁の唱和は、昭帝の時の事であるし、枚乘は、武帝の初年に死んで居る。それから、卓文君の白頭吟の如きも、無論、武帝の在世中で、ともに蘇李に先つて居る。要するに新體詩の發生は、特に誰といつて一人を名ざす譯にも行かず、一般の風氣が、自然に、かかるものを釀醸したのである。【六】東都　後漢は洛陽に都した。五言の詩は、後漢に成つて漸く瀰漫して世に行はれたといふこと。【七】建安能者七　建安は漢末獻帝の時の年號。當時名だたる詩人が凡そ七人あつた。魏の文帝の典論に「今の文人、魯國の孔融文擧、廣陵の陳琳孔璋、山陽の王粲仲宣、北海の徐幹偉長、陳留の阮瑀元瑜、汝南の應瑒德璉、東平の劉楨公幹、この七子は、學に於て遺すところなく、辭に於て假すところなし」とある。但し後世では、孔融に代ふるに曹植を以てして居る。元來、孔融は、年次の上からいつても、獨り其外の者より長じて居るし、曹植の才は、これ等の諸人を抜いて居るのであるが、文帝は、自分の弟だから、わざと之を數へなかつたのであらう。【八】卓犖　すぐれる。【九】風操　風は國風の風。操は琴曲であるが、汎く樂章といふ義。つまり古風及び樂府といふこと。【一〇】逶迤　するすると推移して行く。【一一】凋耗　凋萎して衰耗する。【一二】鮑謝　鮑照と謝朓、或は謝朓でなくて謝靈運だといふ人もある。杜甫の詩にも、賦詩何必多、往往凌二鮑謝一とあつて、この二人は、齊梁間の代表者となつて居る。【一三】比近　近代の者に比すれば。【一四】清奧　清簡博奧。【一五】沿襲傷剽盜　自分で新意を出さず、前人の作意のみを踏襲し、自然剽竊に類する嫌がある。【一六】國朝　唐代。【一七】子昂　唐書に「陳子昂、字は伯玉、梓州射洪の人、唐興つて、文章、徐庾の餘風を承け、天下祖尙す。子昂、はじめて雅正に變じ、感遇の詩三十八章を爲り、海內宗として以て法と爲す」とある。【一八】李杜　李白・杜甫、唐書に「杜甫、少にして李白と名を齊しうし、時に李杜と號す」とある。【一九】萬類困陵暴　天地の萬物は、李杜二人の詩筆に因つて蹂躙されるのに閉口して居たといふ義。【二〇】閫奧　閫居の內、奧の間。蘊奧といふこと。【二一】冥觀　冥冥の中に廣く觀る。【二二】象外　天地萬有の外。【二三】縈　めぐる。【二四】妥帖　平易で穩當。【二五】排奡　夏の時、寒浞、有窮の后羿を殺し、その室に因つて奡を生む。奡多力、能く陸地に舟を行る。少康に殺さる。奡は人名で、多力の義に用ひ、この多力の人をも筆の力で推し開くといふこと。許彥周詩話に「退之云ふ、橫空盤二硬語一、妥帖力排奡、蓋し能く殺羿の事實、意義と合ふ、最も之を能くし難し。その餘き

を知らば、與に詩を論ずべし、これ東野を稱する所以なり」とある。【二六】海潦　海と行潦とではなく、韻の都合で、潦の字を用ひたので、唯だ海水といふに同じ。【二七】媚竈　論語に見ゆ。【二八】孟軻　人の善惡邪正を知るには眸子を見よといふことが孟子に見えて居る。【二九】瞭眊　瞭は黑白分明なること、眊はぼんやりして居る。【三〇】耄　禮記に「八十、九十を耄といふ」とある。【三一】甘旨　禮記の內則に「昧爽にして朝す、慈むに甘旨を以てす」とある。親を養ふこと。【三二】指注　指ざして注目する。【三三】嘲嗷　嘲弄する。【三四】髦士　俊傑の士。【三五】登造　登庸されて、官に就く。【三六】賢相　鄭餘慶を指す。【三七】覆燾　天が地を覆ふこと。【三八】歸與張　歸登と張建封。孟郊は、かつて、この二人に知られて居た。或は、歸を以て歸崇敬となす說もある。【三九】吹噓　李白の詩に、故人東海上、一見借二吹噓一とあり、杜甫の詩に、揚雄更有二河東賦一、唯待二吹噓送上一レ天とある。吹き上げる。【四〇】射魯縞　漢書の韓安國傳に「強弩の末力、魯縞に入る能はず」とあつて、顏師古の註に「縞は素なり、曲阜の地、俗、善く之を作る、尤も輕細となす」とある。【四一】吹帽　晉書孟嘉傳に「桓溫の參軍となる。九月九日、龍山に宴す。寮佐畢く集まる。風あり至る、嘉の帽を吹いて墮落す、嘉、これを覺らず」とある。【四二】戀嫪　嫪は物を悋む、又「嫺嫪は戀惜なり」とあり。【四三】芼　詩經に參差荇菜、左右芼之とあつて、毛傳に「芼は擇ぶなり」とある。【四四】郜鼎寧納廟　春秋桓公二年に「郜の大鼎を宋に取り、戊申、大廟に納る」とある。【四五】擇瑉玉　擇はえり分ける、瑉は石の玉に似たるもの。禮記に「君子は、玉を貴んで碈を賤む」とあつて、碈は珉と同じ。荀子に「珉の彫彫ありと雖も、玉の章章たるに若かず」とある。又李白の詩に、流俗多二錯誤一、豈知二玉與一レ珉とある。【四六】珪瑁　珪は圭、諸侯の執るもの。又周禮に「天子、瑁四寸を執り、以て諸侯を朝す」とある。瑁は、圭頭、邪に刻む、即ち天子の圭。【四七】風中纛　纛は　牛の尾を以て之を爲り、大、斗の如く、左騑馬軛の上に繫ぐ。左傳に「楚王曰く、寡人の心、搖搖然として旌を懸くるが如し」とあり、張景陽の詩に、羇旅無二定心一、翩翩如二懸旌一とあつて、即ち其意を取つたのであらう。【四八】啄菢　菢は鳥の卵を伏すること。【四九】通波　川の水が海の波に通ずること。【五〇】尺地　地は池だらうといふ說もある、さうすれば一層善く分かる。【五一】悔懊　後悔して懊惱する。【五二】八珍　周禮の膳夫に「珍、八物を用ふ」とあり、食醫に「八珍の齊を掌る」とあり、禮記の內則に「八珍とは、淳熬・淳母・炮豚・炮牂・擣珍・漬・熬・肝膋を謂ふなり」とある。【五三】一簞醪　黃石公記に「むかし、良將、兵を用ふ、

人、一篇の詞を饋るものあり、これを河に投ぜしめ、將士をして流を迎へて之を飲ましむ」とある。【三】愷悌　詩經に愷悌君子、神所ノ勞矣とある。

【題義】舊註に「東野を鄭餘慶に薦むるなり。東野、貞元十一年、溧陽の尉となる。時に、鄭餘慶、河南に尹たり、公、この詩を作り、以て之を薦む」とある。顧嗣立は說をなして「舊唐書鄭餘慶傳、貞元十四年、中書侍郎平章事に拜せられ、郴州司馬に貶せられ、元和元年、復た本官平章事に擢んでられ、尋いで河南尹に拜せらる。公の貞曜先生墓志、東野、年五十に幾く、來つて京師に集まり、進士の試に從ひ、すでに得て卽ち去る。四年を閒て來り、選ばれて溧陽尉となる、尉を去ること二年にして、故相鄭公、河南に尹たり、奏して、水陸運從事と爲す。後、鄭、興元軍を節領し、奏して、軍參謀となす。卒するとき年六十四。今、王註に謂ふ、東野、貞元十一年、溧陽尉となる。この時、餘慶、尙は未だ河南に尹たらざるなり。公の詩に云ふ、廟堂有二賢相一愛遇均二覆燾一と。その餘慶に薦むる、中書侍郎たるの時か、且つ、公、餘慶に與ふるの書、再び示問を奉ずるあり、皆孟家の事に緣る。すなはち、公の東野に薦むる、止だ此一詩のみならざること知るべし。公の詩、又云ふ、況承歸與レ張、二公迭嗟悼、と。蓋し、東野五十を以て尉と作り、人、ともに歎息す、二公を引重して、以て餘慶の聽を啓かむとするなり。按ずるに、唐書、張建封、貞元十六年に卒す。もし是詩餘慶が河南に尹たるの日に作ると云はば、建封死すること、すでに久し、何ぞ獨り援引して之に及び、しかも竝に懷舊感嘆の意なきか。舊註紛紛、附會穿鑿、悉く刪去を爲す」といつて居る。すると、貞元十一年は善いとして、その時鄭餘慶が河南尹であつたといふのが惡いので、これは十四年頃、餘慶が中書侍郎であつた時だらうといふことである。貞元十一年といへば、韓愈は博學宏詞に試みられたが、意の如くならず、三たび書を宰相に上つて報せられざるに因つて、洛陽に赴き、途中で二鳥の賦を作り、その翌十二年、汴州に往つて董晉に依つて十五年まで居たので、まだ無位無官の一書生であるのに、東野を鄭餘慶に薦めたといふのも、一寸變であるが、餘慶は、數ば韓愈の爲に譽を引き、特別の關係があつて、依賴するに易い處からであらう。しかし、考へ樣に依つては、孟東野を薦むると共に、併せて、自己の事を暗に賴んだものかも知れない。孟東野は、文字上に於て、韓愈の莫逆の友であつて、平生互に推服したから、現に東野が初めて溧陽尉に調せられた時には、大凡物不レ得ニ其平一則鳴の一句を冒頭にして、鳴の字を三十九用ひたといふ一篇の序を以て其行を送り、東野の才を稱しては「その存して下に在るものは、孟郊東野、始めて其詩を以て鳴る。その高きこと、魏晉に出で、懈らずして古に及ぶ、その他は漢氏に浸淫す」といひ、最後に「東野の江南に役せらるるや、釋然たらざるが若きものあり、故に、吾、その天に命せられたるものを道うて以て之を解す」といつた。かくて、東野は、一先づ溧陽に赴任したが、遠地の一卑官でもあり、到底、榮轉の見込などが無いから、韓愈は、ひどく之を氣の毒に思ひ、賴まれもせぬのに、汴州から、態態この詩を鄭餘慶に上つて、汲引の惠を垂れむことを囑望し

たのであらう。しかし、この一篇は、韓愈が特に精神を注いだもので、士その者に對する自己の見解を詳しく述べた處が、後世に重んぜらるる所以で、ひとり、孟東野を薦めたばかりでなく、自然韓愈その人の學問識見抱負が窺はれる。なほ此詩中に孟郊の詩を稱して、「橫空盤硬語、妥帖力排奡」といふ語があるが、いくら韓愈でも、故なくして、手前褒めをする譯には行かぬから、東野を借りて、詩に對する自己の理想を述べたのである。王荆公は、李・杜・韓は唐の三家で、そして、その得力の處は、各その詩の中で知ることが出來る。「吟詩各得るところ」ありで、李白は淸水出芙蓉、天然去雕飾。杜甫は或看翡翠蘭苕上、未掣鯨魚碧海中。韓愈は橫空盤硬語、妥帖力排奡で、各盡きて居るといつた位、これを以て見ても、韓愈の此詩に於ける、東野を薦むる以外に、大に爲にするところあつて作つたものだといふことが分かる。

【詩意】周詩の存するものは三百篇、一言にして評すれば雅麗、卽ち著想が高雅で、文字が綺麗に出來て居る。但し、古訓を調べ、それに依つて、今人が初めて解釋することが出來るので、學問として研究することが必要である。この三百篇は、孔子の删正を經て、一部の詩經としてまとまつて居るから、今更批評すべき限りではなく、もとより、超絕的である。現世に行はれる五言の詩は、漢の時代に出來たので、蘇李の唱和に始まると稱し、これまでは、四言を詩といつたのに、爾後、改めて五言を詩と號することに成つた。五言の詩は、後漢の世になつて、次第に廣がつて來て、たとへば、一の源の水が海に落ち込むまでには、樣樣に別れて、百川になると同じ樣に、流派が多くなつて來た。漢末建安の世には、詩を能くするものが七人あつて、いづれも、すぐれた才氣を以て、競うて之を作つたから、古詩樂府を變じて、詩の規模が一層大きく成つて來た。それから、愈よ變化を重ねて、兩晉より宋になると、折角の氣象が、凋喪消耗して、今は意を主とせず、却つて辭を主とするやうに成つた。六朝の詩は、もとより道ふに足らぬが、鮑照謝朓の二人は、その中間に於ける名家であつて、近代の諸家に比すれば、淸雋にして博奥なる處がある。次いで、齊梁となり、陳隋となると、世は愈よ降つて、その間の衆作は、唯だ蟬の聲の耳に聒しきと同じく、全然取るに足らぬものが多い。その爲すところは、春を搜つて、花卉を摘むが如く、いくら、花が綺麗でも、根の無いものは、生氣が缺けて居るから、仕方がないので、唯だ前人の眞似を爲し、人の摘んだものを橫取りして、わが物とするといふ風で、その極、剽竊に陷ることを免れなかつた。かくて、唐代になると、文章が又ぞろ盛になつて、詩も再び勃興し、陳子昂が第一に起り、衆人を飛び越えて、復古を唱道し、その次に、李杜二人が勃興して來た。李杜二人は、古今稀に見るところの大詩人で、宇宙間の有らゆる物を捉へて、盡く詩にした處から、萬類は、この二人の筆に蹂躙されるのに辟易した位。そこで、後來相繼いで起つた詩人輩も、各その閫奧に參入することが出來る樣に成つた。ここに、窮者孟郊といふ者が居るが、その天稟の才は、實に雄銳にして、馬の逞しきが如く、冥冥の中に洞觀して、詩に關した古

今の事を一切腹の中に疊み込み、天地萬有の外に於て、自分ひとり、詩の幽僻なる嗜好を逐うて居るので、つまり、立脚地を前人未踏の地に求め、その作つたものは、六つかしい言葉のみを空中に蟠まらした樣であるが、錬り上げて脱稿した上は、よく落ち付いて、極めて平易らしく、その力量は、奡といへる古しへの力者をさへ排斥するに足る位である。その延んびりと柔かい處は、紆餘の趣を恣にして、見榮えある華美なる趣は、天然の花の秀でたるが如く、奮つて勢猛き時は、大風の海水を捲くが如く、その素早いことは、響の聲に應ずるが如くである。孟郊は、獨り詩を善くするのみならず、はじめより、聖人の敎に服して、身を行ふには規矩に從ひ、微官の卑きに甘んじて、竈に媚びるといふ阿諛主義に反對である。むかし、孟子は、人物を鑒識するときには、その眸子を見よといつたが、孟郊の目は、杳然と澄み渡つて居て、他の浮躁者流を鎭めることが出來る。溧陽の尉といへば、酸寒の極で、まことに貧乏臭い上に、壯年ならば、これから榮達するといふ望もあるが、年五十といへば、最早老耄に近く、これから先の壽命も知れたものである。それだのに、一家を背負ひ、孜孜として勉勵し、親に甘旨を與へさへすれば善いといつて、久しい間、辛苦を冒して居る。それだのに、俗流は、もとより之を知るものなく、却つて之を指して嘲弄して居るので、孟郊その人に對して、まことに氣の毒で堪まらない。今や、聖天子、上に在つて、遺賢逸民を求められ、俊髦の士は、日ごとに登用されて、各〻地位を造るといふ折柄、廟堂の上には、閣下の如き賢宰相が居て、才ある者を愛遇する

ことは、さながら、天の地を覆ふが如く、その上、承はれば、歸登・張建封などいふ有力者も、孟郊の不遇に就いて、痛く同情を寄せて、毎毎嘆息されて居たといふので、どうにかして下されさうなものだと思つて居る。物が青冥の大空に飛び上るには、大風の吹噓を待たなければならぬし、強弩の末ならぬ強箭ならば、容易に魯縞を射ぬくことも出來る筈で、宰相の御聲がかりといへば、孟郊を擧げること位は、造作も無いと思はれるが如何。おまけに、孟郊は久しくして成すことなく、この頃、任期が滿ちると、その儘免官になるといふことである。今しも、秋の末、霜を帶びたる風は、香しき菊を開かしめ、重陽の佳節は、眼前に迫つて、卽ち孟嘉が帽を落した高興もしのばれる。この時、孟郊は、免官に成れば、その儘、決然として、此を去る積りであらうが、我我は、物に感じて、孟郊の才を愛する處から、是非これを引き止めたいと思ふのである。かの微微たる水中の荇は、宮女輩が左右から后妃を助けて擇り分けた上で、御祭の供へ物にする。孟郊の如きものでも、之を扶けて、上に擇び取る人さへあれば、初めて、廟堂の上に立つことが出來る。魯は、春秋列國の中では、極めて小さい國であつたが、その廟の寶物として、周の鼎が必要だといへば、郜の大鼎をば太廟に納れたといふことがある位で、堂堂たる我が唐の朝廷に於て、鼎に等しきこの孟郊を容れないといふ譯がない。抑も人を用ふるには、宰相の鑒識が必要で、玉石を判然と見わけねばならぬが、孟郊の如きは、珪瑁といつて、天子の禮に用ひられる最上の玉に等しきものであるから、これを棄てるといふ理由はない。その孟郊

は、貧窮の底に沈んで居るから、悠悠たる我が思、まことに堪へられず、その擾擾として落ち付かぬ有様は、さながら、大旗が風の中に動揺して居るやうである。さればといつて、自分も、矢張、微賤に居て、天子に上言を致さうと思つても、その路なきを愧づるばかり、日夜心に念じて、閣下の如き人が宰相の位に居られる上は、孟郊とても、まさか、棄てられることも有るまいと思ふが、それとても、あてにならぬ處から、この詩を作つた次第である。鶴は、品格の善い貴い鳥であるが、天然に生長するのではなく、親鳥が抱いて之を孵化せしめ、餌を啄んで之に與へ、それで、やつと生長するのである。孟郊にした處で、矢張、上位に居る人が啄荷の勞を取つて、懇に世話をしないことには、到底物には成らない。それから、一河の水を大海の波に通せしめるのは、まことに造作も無いことで、たとへば、一尺も隔つて居る處に物を運漕する樣なものである。善を善とし、人を登用することに汲汲たらざれば、卽ち同情が無いといふことであるし、又孟郊にしても、今の時に救はなければ、何にもならぬので、他日惜い事をしたといつて後悔された處で、追ッ付くものではない。孟郊の窮の甚しき、まさしく、飢餓に迫つて居るので、これを救ふには、何も八珍といふやうな山程の御馳走を以てせずとも、一簞の食を以て勞つて遣れば、それで善いので、もとより、一足飛びに高位大官を希望するといふ譯でもない。この詩を見られて、韓愈は餘計な世話をする奴だ、そんなことを言つて來ても、此方でも困るといつて、責められるかも知れぬが、詩經にもある通り、愷悌の君子、卽ち心樂しくして、優しい御方が、此の如き人物を登用されたならば、神樣から御褒めの言葉を賜はるに相違なく、無益な事で無いどころか、これが卽ち閣下の職分で御座りませう。

【餘論】 この首は、初めに支那に於ける詩の沿革を敍し、そして、孟郊の地位を明かにして、今次推薦の事由としたのであるが、その議論は、流石に簡明にして、よく要領を得て居る。許彥周詩話に「六朝詩人の詩、熟讀せざるべからず、芙蓉露下落、楊柳月中疏の如き、鍛錬、ここに至る、唐より以來、人の能く及ぶなきなり。退之云ふ、齊梁及二陳隋一、衆作等二蟬噪一と。この語、吾、敢て議せざるも、亦た敢て從はず」といつたが、韓愈は唯だ概說して居るので、かういふ樣に、區區たる一聯を擧げて、彼此言ふのは、議論の旨意が丸で違つて居る。臨漢隱居詩話に「孟郊の詩、蹇澁窮僻、琢削暇あらず、眞に苦吟して成る。その句法格力を觀て、見るべし。その自ら夜吟曉不レ休、苦吟鬼神愁、如何不二自閒一、心與レ身作レ仇と謂ひ、しかも、退之その詩を薦めて、榮華肖二天秀一、捷疾逾二響報一といふは何ぞや」といひ、竹坡詩話に「韓退之、薦士の詩に云ふ、孟軻分二邪正一、眸子看二瞭眊一、杳然粹而淸、可三以鎭二浮躁一と。余、かつて東野下第の詩を讀む、云ふ、棄置復棄置、情如二刀劍傷一と。登第に及んでは、自ら謂ふ、春風得意馬蹄疾、一日看盡長安花、と。宜なり、その之を得と雖も、しかも享くる能はざるや。退之、可三以鎭二浮躁一といふ、恐らくは、未だ過情を免れず」といひ、ともに一應は尤もである。しかし、韓愈が孟郊の詩を褒めて云云したものの、その大部分は、これを借つて、おのが詩の理想を述べ

たので、孟郊に取つては、意外の贊辭である。又孟郊の人物は、猥瑣齷齪、もとより大詩人の襟度を缺いて居るが、その詩の爲に苦心する處は、いかにも、氣の毒で、韓愈が之を極力推擧したのは、ひとり、嗜痂の癖のみならず、その平生の有樣に就いて、同情を寄せたからである。これ等諸家の評語を觀て、後人が一槪に孟郊を排斥し、殆んど三文の價値なき樣にするのは、又極端なる見解といはねばならぬ。全唐詩話に「李翺の孟郊を張建封に薦むるに云ふ、ここに平昌の孟郊あり、正士なり、伏して聞けば、執事舊と之を知ると。郊、五言の詩を爲り、前漢の李都尉・蘇屬國より建安諸子、南朝の二謝に及ぶまで、郊、能く其體を兼ねて之を有すと。李觀の郊を梁肅補闕に薦むるの書に曰く、郊の五言詩、その高處ある、古しへに在つては上なし、その平處ある、下に兩謝を顧ると。韓の郊を送る詩に曰く、作詩三百首、杳默咸池音と。彼の三子は、皆知言なり、豈に天下の人を欺かむや」といひ、兎に角、李觀・李翺までが、これ程に言ふ處を見ると、孟郊とても、さう馬鹿にしたものでないといふことが分かる。次に顧嗣立が「公の此詩、詩學の源流を歷敍し、三百篇より後、漢魏には止だ蘇李、建安の七子を取り、六朝は止だ鮑謝を取り、餘子は一筆に抹倒す、眼明かに、手辣に、識力最も高し。唐初の格律、子昂に變じ、李杜二公に至つて極まる、謂はゆる李杜文章在、光焰萬丈長と、公の平生、最も力を此に得るを知るなり。後、東野を以て、之に繼ぐ、猶ほ未だ此に當るに足らざるに似たり。公の才大にして力雄、思沈んで筆雄なるが若き、庶はくは、李杜に配して甎なかるべし」といひ、乾隆御批に「孟郊は、一詩流の幽逸なる者のみ、殊に未だ武を諸大家に踵ぐに足らず、而して、退之の士を說く、乃ち肉に甘んじ、その自ら善を嗜み心事きなしといふものは、此なり」とあり「橫空盤硬語、妥帖力排奡、十字中、尤も妙なるは、妥帖の二字に在り、樊宗師の文最も奇崛、しかも、退之は文從ひ字順なるを以て之に許す。其れ亦た世の謂はゆる妥帖なるものに異なれり」とあるが如き、ともに議論の精該を極めて、細心に玩味すべきものである。

喜侯喜至贈張籍張徹　　侯喜の至るを喜び、張籍・張徹に贈る

昔我在(一)南時。數君長在(二)念。　むかし、我南に在るの時、數君長く念に在り。
搖搖不可止。諷詠日喁(三)噞。　搖搖として止むべからず、諷詠して日に喁噞す。
如以膏濯衣。每漬(四)垢逾染。　膏を以て衣を濯ふが如く、漬す每に垢逾よ染む。
又如心中疾。箴石非所砭(五)。　又心中の疾の如く、箴石砭すところに非ず。
常思得遊處。至死無倦厭。　常に思ふ、遊處を得て、死に至るまで、倦厭なしと。
地遐物奇怪。水(六)鏡涵石劍。　地遐にして物奇怪、水鏡、石劍を涵す。

荒花窮漫亂。幽獸工騰閃(七)。　荒花、窮まつて漫亂たり、幽獸、工に騰閃す。

礙目不忍窺。忽忽坐昏墊(八)。　目を礙つて窺ふに忍びず、忽忽として、坐ながら昏墊す。

逢神多所祝。豈忘靈即驗。　神に逢うて祝する所多く、豈に靈即ち驗なるを忘れむや。

依依夢歸路。歷歷想行店。　依依として歸路を夢み、歷歷として行店を想ふ。

今者誠自幸。所懷無一欠。　今は誠に自ら幸なり、懷ふところ、一も欠くるなし。

孟生(九)去雖索(一〇)。侯氏來還歎(一一)。　孟生、去つて索ると雖も、侯氏、來つて還た歎れり。

欹眠聽新詩。屋角月豔豔。　欹眠して新詩を聽けば、屋角、月、豔豔たり。

雜作承閒騁。交驚舌手䠞(一二)。　雜作、閒を承けて騁せ、交も驚いて、舌、手に䠞く。

繽紛指瑕疵。拒捍(一三)阻城塹。　繽紛として、瑕疵を指し、拒捍して、城塹を阻つ。

以余經摧挫。固請發鉛槧(一四)。　余が摧挫を經たるを以て、固く請うて鉛槧を發せしむ。

居然妄推讓。見謂爇天燄。　居然として、妄りに推讓、天を爇くの燄と謂はる。

比疎語徒妍。悚息不敢占(一五)。　比疎にして、語、徒に妍なり、悚息して、敢て占めず。

呼奴具盤餐。飣餖(一六)魚菜贍。　奴を呼んで盤餐を具へ、飣餖、魚菜贍ふ。

人生但如此。朱紫(一七)安足僭。　人生、但だ此の如くむば、朱紫安んぞ僭するに足らむ。

【字解】【一】在南時　陽山に在りし時をいふ。【二】在念　念頭に在つて忘れ得ぬこと。【三】喁噞　吳都賦に喁噞沈浮とあつて、その註に「喁噞とは、魚、水中に在つて嘉出し、口を動かす貌」とあり、淮南子に「水濁れば魚喁噞す」とある。【四】漬　ひたす、つける。【五】砭　針を打つ。說文に「石を以て病を刺すを砭といふ」とある。【六】水鏡涵石劍　水鏡、一名は蜮。陸璣の毛詩疏に「蜮、一名は射影、江淮の水濱、皆之なり。人、岸上に在つて、影、水中に見ゆれば、人影に投じて之を殺す」とある。その蟲が石の蔭などに潜んで居て、劍を以て人の影を刺すと、その人は忽ち病氣になつて、死ぬといふこと。【七】騰閃　飛び上つて閃めく。【八】昏墊　塞がつて開通せざること。【九】孟生　即ち孟郊。【一〇】雖索　索は索居の索で、離れる。孟郊は、その年の十一月、江南尹鄭餘慶に從ひ、水陸運從事となつて赴任した。【一一】歎　懽に同じ。ここでは、飽き足る。【一二】舌手䠞　手は互に同じ、䠞は吐く。互に舌を吐いて驚嘆する。【一三】拒捍　拒いで強情を張る。【一四】發鉛槧　前に狄儐の詩にも見えて居た。西京雜記に「揚子雲、事を好む、常に鉛を懷にし、槧を提げ、諸計吏に詣り、殊方絕域の語を訪ふ」とある。ここでは、筆を執つて十分に評正すること。【一五】悚息不敢占　恐れ入つて敢て受け取らない。【一六】飣餖　積み重ねる。【一七】朱紫　大官の服色をいふ　達服の義に用ふ。

【題義】數ば述べた通り、韓愈は、元和元年六月、江陵法曹參軍より召し返されて、國子博士となつた。その頃、孟郊、竝に張籍・張徹などは、頻りに其門に出入し、詩酒の間に交を結んで、唱和をなし、城南聯句の如き、會合聯句の如きものをさへ作り、即ち聯句に於て一新體を搊出して、大に世俗を驚かした。ところが、孟郊は、前に薦士の詩に在つた通り、溧陽の尉を罷められた儘、都に久しく居たが、矢張任用されず、食ふにも困まる處から、又徵官を得て、遂に都を去つて仕舞つた。す

ると、侯喜といふものが新に入門したから、韓愈は、大に喜び、この詩を作つて、張籍・張徹等に吹聽したのである。侯喜、字は叔記、貞元十九年、進士の第に中り、國士主簿に終つたので、韓愈の文集に祭侯主簿文といふのがある。

【詩意】さきに、予が南、陽山に在りしときは、諸君の事を念頭に挂けて、一刻も忘れることなく、是非逢ひたいと思ふ心は、搖搖として、止めることも出來ず、せめては、諸君を寄懐する詩でも作つて、自ら慰めやうといふので、諷詠終日、丁度、魚が口を動かして居る樣であつた。しかし、それは、垢の付いた衣を膏で洗ふやうなもので、洗へば洗ふ程、垢が付くと同じく、詩を作らうとすればする程、一しほ諸君の事を思ふ樣になる。又、心臟の病は、針でも、藥でも、到底治療することが出來ぬと同じく、諸君の事を我が念頭より去るといふことは、絶對に不可能であつた。その頃、諸君と會合して、面白い遊び場所で心ゆくばかり唱和でもしたならば、死すとも決して厭はないと、常常心の中に思つて居たものの、それが中中六つかしかつた。陽山は、熱帶に近くして、地、すでに遠ければ、見る物として、奇怪ならぬはなく、水鏡といふ蟲が居て、水中に人の影が映つると、それを目がけて、その身を投げる、すると、その人は、非常な疫病に罹つて直に死ぬといふ位、この蟲は、平生、石の蔭で劍を水に涵して待ち構へて居るといふやうな安排。それから、名も知らぬ變な形の氣味の惡い花が爛漫として咲き亂れ、山深く住む奇異な獸類は、時たま、白晝にも出て來て、頭の上を飛んで閃くことがある。こんな風であるから、目を礙るものは、すべて見るに忍びず、終日忽忽として、丸で昏睡して居る樣であつた。そこで、神社さへあれば、必ず參詣して、歸京の一日も早からむことを祈り、もし靈驗があつたらば、神恩は、決して忘れないと固く心に誓つた位で、時たま、都に歸る夢を見て、旅宿の有樣なども、歷歷たるばかりであつた。かくて、心の誠が貫徹して、さきに都に召し還され、今日ここに在るのは、誠に幸とせねばならぬことで、南方に在つて、色色豫想して居たところは、少しも缺けて居ない。尤も孟郊だけは、獨り離れて此に居らず、どうやら物淋しい心持がするが、その代り、侯喜といふ人が新に入門して、日夕過訪せられ、まことに、この身に取つては滿足なことである。諸君が我が家に會合して、詩を作られる時、自分は、横に成つて臥しながら、その朗吟の聲を聞いて居ると、折しも、屋角に上つた月は、豔豔として輝いて居る。その詩たるや、さまざまの事を作つて、少しでも、目つけ處があると、それをすかさず、おのが才情を騁せ、その出來上つたのを見ては、互に舌を吐いて驚くばかり、そこで、互に入り亂れて、瑕疵を指摘すると、中には、强情に負惜みを云つて、城に塹濠を設けて、固く守つて居る人もある。諸君は、予が貶謫を經たる身なるを以て陋なりとせず、筆を執つて、十分に加朱して呉れろといつて依賴され、いつもながら、予に對して推讓し、一同の師範と仰がれ、予の作つた詩文は、光焰萬丈、天を燒くといはれるが、比較が甚だ無造作であつて、言はれる言葉は、誠に美はしいが、恐懼の餘、うかとは受け取れな

い樣である。何は兎もあれ、かういふ會は、非常に、樂しいから、下部を呼んで、御馳走の用意を爲さしめ、積み上げた惣菜は、魚や野菜が澤山で、格別珍らしくもないが、決して不足なことはない。苟くも、この世に在る間、毎日かういふ風にして面白く暮らして行けたならば、この上もない愉快なことで、何も朱紫を身に纏ふにも及ばない。つまり、詩酒の樂は美官に勝るといふべきものではあるまいか。

【餘論】この詩は、一應無難とは見えるが、陽山の風土を擒ぎ出した處などは、蛇足に類して、どうやら、相應しくもない。何義門は欹眠聽新詩の二句を評して「佳句、老杜の夜闌月落の一聯に方ぶべし」といひ、又人生但如此の二句を評して「收め得て力を費さず、虚舍味あり」といつたが、その妙處は、零碎的に求むべく、渾成の妙に至つては、未だしといはねばならぬ。

古風

今日曷不樂、幸時不用兵。
無曰既蹙矣(一)。乃尚可以生。
彼州之賦(二)。去汝不顧。

古風

今日、曷ぞ樂まざる、幸にして時に兵を用ひず。
すでに蹙まれりと曰ふ無かれ、乃ち尚ほ以て生くべし。
彼の州の賦、汝を去つて顧みず。

此州之役(三)。去我奚適。
一邑(四)之水。可走而違。
天下湯湯(五)。曷其(六)而歸。
好我衣服。甘我飲食。
無念百年。聊樂一日。

この州の役、我を去つて奚くにか適く。
一邑の水は、走つて違くべし。
天下湯湯、曷其して歸らむ。
我が衣服を好くせよ、我が飲食を甘くせよ。
百年を念ふ無かれ、聊か一日を樂まむ。

【字解】【一】蹙矣　民の命が縮まる。【二】賦　田の稅。【三】役　公役として奉仕すること。【四】一邑　一の村落。【五】湯湯　水の多い貌。【六】曷其　何其に同じく、如何かと訓すべし。

【題義】樊汝霖の解に「安史の亂後、方鎭、內地に相望み、大なるものは州十餘を連ね、小なるものも三四を下らず、兵驕れば帥を逐ひ、帥強ければ上に叛く、廷せず、貢せず、往往にして是れなり。故に古風に託して意を寓す。」とある。すると、この詩の主意たるや、今日の樣では、とても太平の長く續く望はない、きつと今に騷亂が起るに相違ない、現にその前兆が見えて居るといふ意を述べたのである。この詩は、疑もなく、德宗時代であつて、卽ち貞元中の事に係るのである。前にもいへる如く、今の韓集は、分類でもなく、編年でもなく、唯だごたごたに編輯したから、かういふ錯亂が起るので、すべて詩文集の

編年は、最も自然的と思はれる。なほ以下數首は、いづれも、韓愈の若い時分の作である。それから、ここの古風といふのは、李白の古風などとは異にして、格別深い意味もなく、一は、詩體が古に近い處からでもあるし、一は、わざと分からぬ樣に、かくの如く題を命じたのであらう。

【詩意】剋下の時勢を觀ると、マア成るべく享樂を爲すより外に仕方がない。幸にして、何處で戰が起つたといふ譯でもないから、今の內に愉快を盡すべきである。處處の藩鎭では、勝手に苛税を課して居るが、まだ民命すでに縮まつたといふ程でもなく、どうやら、生きて居られるのが何よりである。かの州の賦は、自分の居る處でないから、一向關係がないが、この州の役は、現に自分が住んで居て、嚴しく課せられるから、どうにも仕方がない。どこへ往つた處で、到底賦税を免れることは出來ない。一つの村落だけに水が出たのならば、走つて之を避けることが出來るが、天下湯湯、到る處、大洪水であれば、どうにも、仕方がないので、丁度それと同じ樣なものである。今にも、兵亂が起るに相違なく、一たび起つたら、死ぬより外に道はない。されば今の內に、我が衣服を出來るだけ好くし、我が飮食を在らむ限り贅澤にし、百年も末の事などは考へずに、聊か一日の安を偸んで、兎に角樂むのが第一である。

【餘論】胡渭は「詩に云ふ、幸時不㆑用㆑兵と、これ必ず貞元十四年以前の作ならむ。十五年には吳少誠反し、而して大に諸道の兵を發して之を討つ。本と賦役の民を困めて逃却するところなきを譏る。言ふは、時に兵を用ひず、正に宜しく甘食好衣、相與に樂を爲すべし。辭、逾よ婉にして、意、彌よ痛む。山樞萇楚の遺音なり」といひ、蔣之翹は「この詩、質にして俚ならず、婉にして風多し、古謠諺の遺に似たり、唐人の語に非ざるなり」といひ、乾隆御批には「史記韓信傳に曰く、農夫、耕を輟め、耒を釋て、褕衣甘食せざるなしと。索隱に曰く、滅亡久しからざるを恐る、故に作業を廢止して、美衣甘食を事とすと。この篇、結意これに類す、長歌の哀、痛哭より深しといふべし」とある。

駑驥

(一)駑駘誠齷(二)齪。市者何其稠。
力小(三)苦易㆑制。價微良易㆑酬。
渴飮㆓一斗水㆒。饑食㆓一束芻㆒。
嘶鳴當㆓大路㆒。志氣若㆑有㆑餘。
騏驥生㆓絕域㆒。自矜㆑無㆓匹儔㆒。
牽驅入㆓市門㆒。行者不㆓爲留㆒。

駑驥

駑駘誠に齷齪たり、市ふもの何ぞ其れ稠き。
力小なれば苦だ制し易し、價微なれば良に酬い易し。
渴しては一斗の水を飮み、饑ゑては一束の芻を食ふ。
嘶鳴して大路に當り、志氣、餘あるが若し。
騏驥は絕域に生じ、自ら匹儔なきを矜る。
牽驅して市門に入れば、行くもの爲に留まらず。

借問價幾何。黃金比嵩丘。（四）
借問す、價幾何ぞ、黃金、嵩丘に比す。

借問行幾何。咫尺視九州。
借問す、行くこと幾何ぞ、咫尺、九州を視る。

饑食玉山（五）禾。渴飲醴（六）泉流。
饑ゑては玉山の禾を食ひ、渴しては醴泉の流を飲む。

問誰能爲御。曠世不可求。
問ふ誰か能く御を爲す、曠世求むべからず。

惟昔穆（七）天子。乘之極遐遊。
惟れ昔、穆天子、これに乘じて遐遊を極む。

（八）王良執其轡。（九）造（一〇）父挾其輈。（一一）
王良、その轡を執り、造父、その輈を挾む。

因言天（一二）外事。茫惚使人愁。
因つて、天外の事を言ひ、茫惚、人をして愁へしむ。

驁駘謂騏驥。餓死余爾羞。
驁駘、騏驥に謂ふ、餓死、余、爾に羞づ。

有能必見用。有德必見收。
能あらば、必ず用ひられむ、德あらば、必ず收められむ。

孰云時與命。通塞皆自由。
孰れか云ふ、時と命と、通塞皆自由と。

騏驥不敢言。低徊但垂頭。
騏驥敢て言はず、低徊して但だ頭を垂る。

人皆劣騏驥。共以驁駘優。
人皆騏驥を劣れりとし、共に驁駘を以て優れりとす。

（一三）喟余獨興歎。才命不同謀。
喟として、余、獨り歎を興す、才命、謀を同じうせず。

寄詩同心子。爲我商聲（一四）謳。
詩を同心の子に寄す、我が爲に商聲に謳へ。

【字解】【一】驁駘　やくざ馬。【二】齷齪　鮑照の放歌行に小人自齷齪とある。こせこせして詰まらぬこと。【三】荅　荅だ。【四】嵩丘　即ち嵩山、黃金を嵩山ほど積み上げる、杜甫の驄馬行に朝來久試華軒下、未覺千金滿高價と同義。【五】玉山禾　山海經に「玉山は、王母の居るところ。崑崙の墟、高さ萬仞、その上に木禾あり、長さ五尋、大さ五圍」とある。【六】醴泉　甘い泉、禮記に「地、醴泉を出す」といひ、史記に「崑崙山上に醴泉あり」といひ、白虎通に「醴泉は美泉、狀、醴の如し」とあり、孫興公の天台山賦に醴泉涌溜於陰渠とある。【七】穆天子　史記の秦本紀に「周の穆王、驥・溫驪・驊騮・騄耳の駟を得、西に巡狩し、樂んで歸るを忘る」とあり、裴駰の註には郭璞の紀年を引いて「穆王、十七年、西、崑崙の邱に征いて西王母を見る」とあり、正義には六國春秋を引いて「前梁張駿の酒泉守馬岌上言す、酒泉南山は即ち崑崙の邱なり、穆王、西王母に見ゆるは即ち此、石室、王母堂、珠璣樓あり、驂飾、煥として神宮の若し」とある。【八】王良　王褒の聖主得賢臣頌に良執靶とあつて、張晏は「王良は郵無卹なり」とあり、又、韓子に「王良、轡を佐くれば、身、勞せずして輕獸に及び易し」とある。【九】其轡　轡は手綱、これを「くつわ」といふのは、邦訓の誤である。【一〇】造父　史記の趙世家に「造父、周の穆王に幸せらる。穆王、造父をして御たらしむ。西に巡狩して、西王母を見る、乃ち造父に賜ふに趙城を以てす」とある。【一一】其輈　輈は車轅。【一二】天外事　即ち崑崙の邱の事をいふ。【一三】喟　喟然、溜息を吐く貌。【一四】商聲　阮籍の詠懷に素質由商聲といひ、禮記に「孟秋の月、その聲商」とあつて、秋の淋しい聲。

【題義】　蔣註に「唐本に贈歐陽詹の字あり、或は驁駘吟示歐陽詹に作り、詹の集に、答韓十八驁驥吟あり」とあり、詩の結末に寄詩同心子とあれば、無論、これは歐陽詹に贈つたものであらう。それから、他人ならば、驁驥吟といつて、吟の字を添へるのであるが、韓愈は、題を古めかしくする

ことが好きであるから、初めは有つたのを、後に削り去つたのかも知れない。歐陽詹は、中唐に於ける一才人で、韓愈・李觀・李絳・崔羣・王涯・馮宿・庾承宣と同時に、進士に及第し、その時、龍虎榜と稱せられた。又蔣註に、詹、字は行周、泉州晉江の人、貞元八年、公と同じく進士の第に當る。公、貞元十五年の冬、徐州從事を以て、京に朝す。詹、時に國子監四門助敎たり、その徒を將率し、闕下に伏し、公を擧げて博士となす、この詩、殆んど斯時作るところか」とある。詩の意は、駑駘と騏驥とを竝擧し、騏驥の良馬を以て、己れ若しくは歐陽詹に比し、駑駘を以て、一般の人に比したのである。比興の意味は、むかしから有り觸れたことで、格別珍らしくもなく、韓愈の詩としては、むしろ淺近平易であつて、同時の白樂天・元微之の作に酷似して居る。或は、元白の新樂府などを觀て、試に一たび其調を彈じ、偶ま之に倣つたのかも知れない。

【詩意】やくざ馬は、まことに詰まらぬものであるが、これを買ふものは、極めて多い。そは何故となれば、力乏しきが故に、暴ばれることがなくて、極めて制し易く、價やすくして、たやすく買ひ取ることが出來るからである。又、これを飼ふにしても、格別費用がかかる譯でもなく、渴すれば一斗の水を飮ませ、飢ゑては一束の藁を食はすに過ぎぬ。そこで、駑駘は大流行となり、高い聲に嘶いて長安の大道を歩くときなど、志氣餘あつて、自分ほど偉いものは無いといふ樣に威張つて居る。これと反對に、騏驥は中國よりもずつと遠い絕域に產し、自分では他に匹儔の無いものと思つて居るが、牽かれて長安の市門に入ると、道ゆく人は、格別目も呉れず、立ち留まつて見る人もない位、まことに情ない話であるが、それにも理由はあるので、その價はと問へば、黃金を嵩山ほどに積まねばならぬといひ、その代り、一日にどれ位行くかといへば、九州を見ること、さながら咫尺の如くである。この馬を飼ふとき、飢ゑては崑崙に生ずる穀物を以てし、渴すれば仙境に湧くところの醴泉を以てする。そして、誰が之を御するかといへば、世を曠しうしても、その人は見付からず、唯だむかし周の穆王が之に乘つて、四方を巡遊したといふことで、王良は、その手綱を執り、造父は其轅を挾み、そして思ふが儘に馳驟し、崑崙の彼方、西王母の居る處に往つたといふが、それは、天外の事であつて、今日では、茫昧恍惚、いたづらに人をして愁へしむるばかり、從つて、この馬を買はうといふ者はない。そこで、駑駘は騏驥を顧みていふには、汝は千里の名馬であつても、御する人がなければ、餓死する外なく、まことに氣の毒ではあるが、今さら仕方がない。吾は、汝を以て羞づべきものと思つて居る。凡そ能あればこそ用ひられ、德あればこそ人に收められるので、汝の如きは、偉いには相違なからうが、用もなければ德もないものである。勿論それには時あり、命あり、如何に能あり德あるものでも、そればかりは致し方が無いといふかも知れぬが、時を得て通ずるも、時を失うて塞がるも、おのが心次第で、どうでも成るので、汝も、少しく考へたら善からうといつた。しかし、騏驥は、唯だ頭を低れて、何とも返辭もしない。げにや、世間の人は、騏驥を劣れりとし、駑駘を以て優れりと

して居るが、これに對して、予は喟然として嘆息するので、由來、才と命とは一致せず、才あるものは往往にして命なく、命あるもの必ずしも才あらず、そこで、此詩を作つて、平生同心の好ある貴兄に寄せるので、これは我が心中の感慨を述べたものであるから、君にして、之を諒としたならば、せめては、商聲を張り上げて、一度歌つて吳れ玉へ。

【餘論】この詩は前に云へるが如く、平易ではあるが、いささか淺近の嫌があるので、朱竹垞は「語氣古に近し、然れども、甚しき風致なし」といつた。

馬厭穀

馬厭穀兮。士不厭糠籺。(一)
士被文繡兮。(二)士無裋褐。(三)
彼其得志兮不我虞。(四)
一朝失志兮其何如。
已焉哉。嗟嗟乎鄙夫。

馬、穀に厭く

馬は穀に厭きて、士は糠籺に厭かず。
士は文繡を被つて、士に裋褐なし。
彼其れ志を得て、我を虞らず。
一朝志を失はば、其れ何如。
已んぬるかな、嗟嗟乎鄙夫。

【字解】〔一〕糠籺　糠はぬか、籺は臼で搗き割つても割れぬ大麥の粒。杜甫の句に黎民糠籺窄とある。〔二〕文繡　さまざまの縫ひ取りをした敷物。〔三〕裋褐　漢書貨殖傳に「貧者裋褐完からず」とあつて、顔師古の註に「裋は布の長襦なり、褐は編枲の衣なり」とある、つまり尻切半天と弊衣。或は裋を短に作り、二字通用するといふ說もある。方崧卿は「前漢の貨殖傳、實に裋の字を用ふ。董彥遠、洪慶善、皆かつて古しへ短褐の字なきを辨す。按ずるに、裋褐の字、兩漢、賈誼、貢禹、貨殖傳、班彪、劉平、張衡傳の如き、凡そ六たび見えて、短の字に作るものなし。班彪の王命論に短褐の襲、漢書に裋に作り、晉堅、襦なり。文選には丁管の切を用ふ。唐人に至りては、方に之を用ふ。故に史記孟嘗君傳と戰國策顏斶子の語とを以て、皆傳寫の誤となす。退之、古を好むこと、最も深し、當に裋の字を以て正となすべく、是なり」といつて居るが、蔣之翹は之を駁し「然れども、これを淮南子に考ふるに、巫馬期、繞に短褐を衣る、しかも、高誘、說なし、亦た恐らくは、未だ必ずしも皆傳寫の誤ならず、況んや、柳子厚も亦た嘗て之を用ふ、又安んぞ退之が必ずしも然らざるを知らむや、今兩つながら之を存して、以て知るものを俟つ」といつて居る。要するに、裋褐も、短褐も、兩つながら、古く用例があるから、或は其一を以て他の傳寫の誤といひ、或は短裋同音だといふが如き、ともに取るに足らぬ僻說であらう。〔四〕虞　はかる、心配する。

【題義】韓愈は、博學宏詞に試みられし後、なかなか任官されなかつたから、直接に宰相に上書して、登庸を依囑すること、打續けて三回に及んだが、宰相は、一向かまひつけもしなかつた。この詩は、大方、その時にでも作つたらうといふので、その構想の本づくところは、劉向新序の中の一節に在る。曰く、燕相、罪を得て將に出でむとし、門下の諸大夫を召して曰く、能く我に從つて出づるものあるか。大夫に進む者あり、曰く、凶年饑歲には、士、糟糠にも厭かず、しかも、君の犬馬、餘穀粟あり。隆冬烈寒、士裋褐、全からず、而して、君の臺觀幃簾、錦繡、飄飄として弊る。財は君の輕んずると

ころ、死は士の重んずるところ。君、君の輕んずるところを施す能はずして、士の重んずるところを求む、亦た難からずやと。韓愈は、新序の文字を使ひこなし、士を過することを知らぬ宰相の愚を罵倒して、この詩を作つたのである。

【詩意】 厩に居る馬は、穀に飽けども、門下の士は、糠粃にも飽かぬ。その住居は、非常な結構を盡し、土の上に文繡の敷物を被らせて居る位であるが、士には裋褐すら無い。宰相輩が賢才を過する道を知らぬことは、洵に甚しい。彼は、今得意の境涯に居て、自分達の事などは一向念頭にも置かぬ位であるが、彼にして、一朝志を失つたならばどうか、死力を出して、艱難を共にするものなどは、一人もなく、その時になつて、賢才を冷遇したことを後悔したところで、仕方がない。こんな譯の分からぬ奴等が權勢の地位に居る間は、全く駄目で、已んぬるかな、已んぬるかな、それに就けても、鄙夫の者ども、今にも屹度思ひ知ることがあらう。

【餘論】 蔣之翹は「意、古に似て、語、亦た太だ激す」といつた通りで、その激した處は、あまりに淺露に失し、聊か韓愈の人格にも關係することと思ふ。

出門

門を出づ

長安百萬家。出門無所之。 長安百萬の家、門を出でて之くところなし。

豈敢尙幽獨。與世實參差。(一) 豈に敢て幽獨を尙ばむや、世と實に參差す。

古人雖已死。書上有其辭。 古人すでに死すと雖も、書上、その辭あり。

開卷讀且想。千載若相期。 卷を開いて、讀んで且つ想ふ、千載、相期するが若し。

出門各有道。我道方未夷。(二) 門を出づれば、各道あり、我が道、方に未だ夷ならず。

且於此中息。天命不吾欺。 しばらく、此中に於て息ふ、天命、吾を欺かず。

【字解】 (一) 參差 不揃といふが本義だが、ここでは齟齬する、くひ違ふ、相容れずといふ義。 (二) 未夷 未だ平かならず。

【題義】 方世擧の說に據ると、この首は、韓愈が鄉貢進士として長安に來たばかりの時の作に係り、一向彼を顧るものなく、ひどく落拓したのを嗟嘆したものだといふことで、內容から見れば、至極尤もであるし、又文字の使ひ方なども、極めて幼稚で、佶屈聱牙の特質を見出さず、極めて、流暢平易なる處は、又實に之を證するものである。

【詩意】 長安の都には、百萬の人家があるが、飄零落拓の孤客は、門を出ても、何處へ行かうといふあてもない。もとより、幽獨を貴ぶ譯ではないが、世人と兎角相容れずして、食ひ違つて居るから、かく成るのも仕方がない。古人は、既に死んだが、その言辭は、書物の上に殘つて居る。卷を開いて

之を讀み、その後、瞑想一番、千載の下、古人と相期して、冥契するやうな感がある。門を出れば、大道坦坦として、誰でも行けるが、吾のみは、その道とするところが、未だ平かならず、危險至極で、うつかり出て歩かれない。そこで、しばらく、古人の書物の中に吾が身を休める外なく、天命は、もとより吾を欺かず、これが此身の定業であるから、どうにも仕方がないのである。

嗟哉董生行

（一）淮水出桐柏山。
東馳遙遙千里不能休。
（二）淝水出其側。
不能千里百里入淮流。
（三）壽州屬縣有安豐。
唐貞元時。縣人董生召南。
隱居行義於其中。

嗟哉董生行
淮水は桐柏の山より出で、
東に馳せて、遙遙千里、休む能はず。
淝水は其側に出で、
千里なる能はず、百里淮に入つて流る。
壽州の屬縣に安豐あり。
唐の貞元の時、縣人董生召南、
隱居して義を其中に行ふ。

刺史不能薦。
天子不聞名聲。
爵祿不及門。
門外惟有吏。日來徵租更索錢。
嗟哉董生朝出耕。
夜歸讀古人書。
盡日不得息。
或山而樵或水而漁。
入廚具甘旨。上堂問（四）起居。
父母不慼慼。妻子不（五）咨咨。
嗟哉董生孝且慈。
人不識。惟有天翁知。

刺史薦むる能はず、
天子名聲を聞かず、
爵祿門に及ばず。
門外惟だ吏あり、日に來つて租を徵し、更に錢を索む。
嗟哉董生、朝に出でて耕し、
夜歸つて古人の書を讀む。
盡日息ふを得ず、
或は山にして樵し、或は水にして漁す。
廚に入つて甘旨を具へ、堂に上つて起居を問ふ。
父母慼慼たらず、妻子咨咨たらず。
嗟哉董生、孝且つ慈。
人識らず、惟だ天翁の知るあり。

生祥下瑞無時期。
家有狗乳出求食。
雞來哺(六)其兒。
啄啄庭中拾蟲蟻。
哺之不食鳴聲悲。
徬(七)徨躑(八)躅久不去。
以翼來覆待狗歸。
嗟哉董生誰將與儔。
時之人。
夫妻相虐。兄弟爲讎。
食君之祿。而令父母愁。
亦獨何心。
嗟哉董生無與儔。

祥を生じ、瑞を下して、時期なし。
家に狗の乳するあり、出でて食を求め、
雞來つて其兒を哺す。
啄啄庭中蟲蟻を拾ふ、
これを哺して食はず、鳴聲悲し。
徬徨 躑躅 久しうして去らず、
翼を以て來り覆うて狗の歸るを待つ。
嗟哉董生、誰と與に儔せむ。
時の人、
夫妻相虐し、兄弟讎を爲す。
君の祿を食ひ、而して父母をして愁へしむ。
亦た獨り何の心ぞ、
嗟哉董生、與に儔するなし。

【字解】【一】淮水出桐柏山　書の禹貢に「淮を導いて桐柏よりす」とあつて、孔傳に「桐柏山は、南陽の東に在り」と記し、又水經註に「淮水は、南陽平氏縣胎簪山より出で、東北桐柏山を過ぐ」とある。【二】泗水　水經に「泗水は、九江成德縣廣陽鄉より出で、西北淮に入る」とあり、卽ち晉の謝玄が苻堅の大軍を破つた處である。【三】壽州屬縣有安豐　唐書地理志に「壽州壽春郡、中都督府、本と淮南郡、天寶元年、名を更む、安豐縣あり、淮南道に屬す」とある。【四】問起居　御機嫌を伺ふ。【五】吞吞　歎息する。【六】哺　養ふ。【七】徬徨　うろうろする。【八】躑躅　躑躅する。

【題義】詩中に見ゆる通り、董召南は、壽州安豐の人。召、一に邵に作る。しかし、その經歷は分からず、唯だ此詩に因つて、その德行の君子たるを知るのみである。韓愈は、別に召南の河北に游ぶを送る序を作り「董生、進士に擧げられ、連りに志を有司に得ず、利器を懷抱し、鬱鬱として茲土に適く、吾、その必ず合ふことあるを知るなり、董生勉めよや」とある。この文は、文章軌範にも載せてあるから、誰でも知つて居ることと思ふ。それから、蘇東坡は、かつて蘇州姚氏三瑞堂の詩を作り、君不見董召南、隱居行義孝且慈、天公亦恐無人知、故令雞狗相哺兒、又令韓老爲作詩、爾來三百年、名與淮水馳といつて居る。詩中に貞元中とあるから、この詩は十五年、徐州に居た時の作に係り、送序よりも前であるらしく、且つ專ら其敬慕の意を述べたのである。

【詩意】淮水は、桐柏山より出で、滔滔と流れて東に馳せ、遙遙千里、なほ休まずして、何處までも流れて行く。その淮水に一つの支流があつて、泗水といひ、淮水の如く千里なること能はざれども、百里の間を屈曲して流れ、さうして、淮水に逼入る。この二つの河に取り圍まれて居る處が、壽州で、

その壽州の屬縣に安豐縣といふ處がある。その安豐縣に、貞元年中、縣人董召南といふ人が隱居して、義を其中に行つて居た。董召南は、德行の君子であるから、刺史も之を推薦することが出來ず、天子も其名聲を御聞になることとなく、從つて、爵祿が門に及ばない。そして、門外には、時たま縣の役人が來て、租稅を徵收し、その上、附加稅の上納金などを取り立て、威張り散らして、かしましく罵る聲が聞こえるだけである。董生は、朝に出でて郭外に耕し、夜は家に歸つて燈下に古人の書を讀み、終日すこしも休息することが出來ない。それから、農事の餘暇には、山に往つて薪を伐り、水に臨んで魚を捕へ、その魚は、父母に奉ずる爲めで、厨に入つて旨い物を調理し、堂に上つて父母の起居を候するを以て、唯一の樂として居る。董生が、かういふ風であるから、一家一族、いづれも、世間離れがして居て、父母は其子の貧乏をして居ることをも格別苦にもせず、妻子も之を嘆かはしいことと思はず、團欒の有樣は、如何にも樂しさうである。董生は、かくの如く親孝行で、慈悲深いが、世人はこれを識らず、唯だ天道樣が知つて居られるだけである。そこで、天は、不思議なる祥瑞を下して、絕え間がない。家に飼つてある親狗は、子を乳する間、食を求める爲に外に出ると、雞が來て、その狗の兒を養ふ爲にと、庭中を啄んで、蟲や蟻などを拾つて來て食はせるが、狗の食ふ物と雞の食ふ物とは違つて居るから、子狗は之を食はうともしないので、雞は悲しげに鳴き、うろうろとしながらも、踟蹰して久しく去らず、はては、翼を以て子狗を庇ひ、そして、親狗の歸るを待つて居る。雞狗互に相助けて居るのは、一寸外では見られぬことで、これも、董生の感化の然らしめたところ、つまり天より降された祥瑞の一つである。ああ、董生の德行は、誰といつて之と匹敵するものはない。顧みれば、今の人は、夫妻相虐げ、兄弟相仇とする位であるから、仕官して、君の祿を食めば、碌な事を仕出來さず、父母に心配をかけるに過ぎぬ。彼等は、果して如何なる心か知らぬが、それにつけても、董生の德行は、世に類なきものである。

【餘論】兪瑒は「古詩長短句、太白に盛に、蜀道難、遠離別の篇の如き、實に公が法を取るところのものたり。その奇橫は、偏に用韻の處に在り、貫下一筆、然る後截住、以て上意を足す、盡日不レ得レ意、亦獨何心等の句の如き、是れなり」といつて居る。卽ち、嗟哉董生朝出耕、夜歸讀二古人書一、盡日不レ得レ息は、盡日不レ得レ息で事が切れ、從つて、ここに押韻せねばならぬのであるが、その上なる讀二古人書一で押韻してある。時之人、夫妻相虐、兄弟爲レ讐、食二君之祿一、令二父母愁一、亦獨何心も、亦獨何心で押韻すべき處を、その上なる而令二父母愁一で押韻してある。すると、押韻と意味の切れるのとが一致しないので、參差錯落の趣が加はる。これが、古樂府の特長であるが、韓愈は古を好むところから、故意に之を學んだので、ひとり句格の長短のみではない。されば朱竹垞も「長短句錯はる、これ古樂府に倣ひ、意調亦た彷彿として之に似たり」といひ、乾隆御批にも「神味古淡、節族自然、集中の寡二少雙一、惟だ琴操間ま之に近きものあり」といつて居る。

烽火

烽火

登高望烽火。誰謂塞塵飛。　高きに登つて烽火を望む、誰か謂ふ塞塵飛ぶと。

王城富且樂。曷不事光輝。　王城、富み且つ樂し、曷ぞ光輝を事とせざる。

勿言日已暮。相見恐行稀。　言ふ勿れ、日すでに暮ると、相見る、恐らくは行く稀ならむ。

願君熟念此。秉燭夜中歸。　願はくは、君、熟ら此を念ひ、燭を秉つて夜中に歸れ。

我歌寧自感。乃獨淚霑衣。　我が歌、寧ろ自ら感ずるならむや、乃ち獨り淚衣を霑す。

【字解】【一】烽火　說文に「烽は候表なり、邊、警あれば火を擧ぐ」とある。【二】塞塵　塞上の塵埃。【三】王城　洛陽を云ふ。後漢書地理志に「河南縣は、周公築くところの雒邑なり、春秋の時、これを王城といふ」とあつて、その註に「地道記に曰く、雒城を去ること四十里」とあり、又通典に「河南縣は、古しへの郟鄏の地なり、これを王城となす」とある。

【題義】蔣註に「周の幽王、烽燧を爲り、寇至るとき、擧げて以て兵を招く。諸侯、これを患ふ。公、時に感じて取るあり。時に、吳少誠、韓全義を敗り、兩都甚だ擾擾たり。公の詩、これを以て作る」とある。韓全義は、吳少誠を征伐に出かけた大將であつて、貞元十六年五月、廣利城に敗れ、七月又五樓に敗れ、走つて陳州を保つた。この時、韓愈は、徐州を去つて洛陽に居たので、即ち其地に於て作つたのである。

【詩意】高い處に登つて眺めやれば、烽火が赤く見える。無論、遠い國境だとは聞いて居るが、その戰塵が此處まで飛んで來ることもあらうかと思はれるので、聊か杞憂に堪へられぬ。マアそんな事は暫く措いて、ここは、むかしの王城で、從來豪富を極めたる歡樂の鄕であるから、自分の力で出來るだけ榮華を極め、光華を事としやうではないか。日が暮れれば歸らねばならぬから、暮れたなどとは言はぬが善い。明日になると、今日の如く、此處で君と共に酒を飮んで樂むことは出來ないかも知れない。願はくは、君、よツく考へて吳れろ。夜に成つてもかまはない、燭を秉つて夜中に歸れば善いから、先づ先づ此に留まつて、樂めるだけ樂まうではないか。しかし、考へて見れば、情ない話、今日かくの如く樂を極めても、何日兵亂に陷るかも分からぬので、わが歌は、自然感慨を免れず、はては淚下つて衣裳を濕すばかりである。

【餘論】朱竹垞は「この烽火、塞塵に因らず、意特に悲切」といつた。つまり、烽火だけでは、塞塵が飛んで來るとまで考へずとも善いが、時勢の窮通から、自然かくの如き杞憂を懷くに至つたので、それが、即ち詩意の悲痛なる所以である。

汴州亂　二首

汴州亂　二首

汴州城門朝不開。　汴州城門、朝に開かず。

【字解】【一】天狗　星の名。漢書天文志に「天狗、狀は大流星の如

(一)天狗墮地聲如雷。　天狗地に墮ちて、聲、雷の如し。
(二)健兒爭誇殺(三)留後。　健兒爭ひ誇る、留後を殺すと。
(四)連屋累棟燒成灰。　連屋累棟、燒けて灰となる。
(五)諸侯咫尺不能救。　諸侯、咫尺、救ふ能はず。
(六)孤士何者自興哀。　孤士、何者ぞ自ら哀を興す。

くして聲あり、その下つて地に止まる、狗の墜つるところに類す。これを望むに及べば、火光の炎炎たるが如く、中天千里、軍を破り、將を殺す」とあるし、孟康は「亦た太白の精なり」といつた。【二】健兒　兵士。【三】留後　卽ち陸長源。【四】連屋累棟　留後の居宅等。【五】諸侯　鄰近各地の節度使。【六】孤士　韓愈自ら云ふ。

【題義】唐書地理志に「汴州陳留郡は武德四年、鄭州の浚儀・開封、滑州の封邱を以て置く」とある。蔣註に「汴州は、大曆より後、兵多し。劉元佐死し、子士寧、これに代りしが度なし。その將、李萬榮、逐うて之に代る。萬榮死して、董晉、實に之に代る。晉、卒して、司馬陸長源、留後の事を總べ、八日にして、軍亂れて、長源等を殺す、監軍俱文珍、密に宋州の刺史劉逸準を召して、後務を總べしむ。朝廷、これに從ひ、名を全諒と賜ふ。公、この時、すでに晉の喪に從ひ、汴を出でて四日、實に貞元十五年。二詩、蓋し德宗姑息の政を譏ると云ふ」とある。それから、この騷動は、陸長源等が自ら招いたものだといふので、楊愼は「韓文公の汴州亂の詩、白樂天の哀二良文、宣武軍司馬陸長源の爲に作るなり。他史を考ふるに及んで、長源酷刑、以て驕兵を威し、これを御するに、その道を失へり。

又、軍中の厚賞を裁して、高く官壖の直に在り、曰く、我、河北の賊と同じく、錢物を以て健兒の旌節を買はず、と。委任するところの從事楊儀・孟叔度、浮薄にして檢せず、常に戲に軍營に入り、婦女を調笑して、自ら孟郎と稱す。三軍怨怒、遂に長源竝に楊孟を執へて、之を殺す。これに由つて之を論ずれば、これ長源以て自ら取るあり。何ぞ雲南の張乾陀・楊州の呂用之に異ならむや。昔人言へるあり、曰く、大雅人を先にするは禍の聚まるところ、小智自ら私するは怨を藏するの府と。長源の謂か」といつて居る。前に數ば述べた通り、韓愈は、汴州の節度使董晉の幕中に居て、あまり香しくもなく、罷めたい罷めたいと思つて居る內に、董晉が俄に病死したから、その柩を奉じて、洛陽に赴くことになつて、汴州を出發した。汴州では、董晉の死後、司馬陸長源といふものが、推薦に由つて、一時、留後、卽ち節度使の臨時代理となつたが、上述の如く、不人望であつた爲に、兵士が亂を起して之を殺し、汴州城中は、鼎の沸く樣な騷ぎ。韓愈は汴州を出て二日の後、途中で、この事を聞き、かういふ事の起るのは、畢竟、朝廷の德が衰へたからだといふので、歎息の意味を以て、この二詩を作つたのである。

【詩意】汴州には、大騷動が起つたといふので、朝に成つても、城門は開かず、天上の天狗星が地に落ちて、雷の如き響を發した樣な騷がしさである。聞けば、兵士どもは、われこそ、留後の陸長源を殺したといつて、互に威張つて居るさうで、留後の居宅などは、殘らず燒けて仕舞つた。もとより、汴

州を環れる各地には、他の節度使等が居るが、皆咫尺を距つるにも拘はらず、これを救はうともせず、袖手傍觀するのは、亂を喜ぶ爲か。これを聞いて、獨り哀しく思ふのは、我輩の如き孤士であつて、いくら慷慨した處で、ごまめの齒ぎしり同樣、何等の效果もない。

【餘論】蔣之翹は結末を評して「二語、神氣黯然として絕えむと欲す」といひ、朱竹垞は「質直、情を得たり、正に是れ歌謠の意」といつた。そして、この首は、主として四鄰の坐視を譏つたのである。

母從子走者爲誰。　母、子に從つて走るものを誰とか爲す。

(一)大夫夫人留後兒。　大夫の夫人、留後の兒。

昨日乘車騎大馬。　昨日車に乘じて大馬に騎し、

坐者起趨乘者下。(二)(三)　坐者は起趨し、乘者は下る。

(四)廟堂不肯用干戈。　廟堂、肯て干戈を用ひず、

嗚呼奈汝母子何。　嗚呼、汝母子を奈何。

【字解】【一】大夫　下の留後と同じく、ともに陸長源を指す。【二】起趨　立つて出て來て禮をする。【三】下　馬より下る。【四】廟堂　朝廷。

【詩意】母らしき人が子供等を連れて、倉皇逃げて行くは、誰かといへば、留後陸長源の夫人や倅どもである。昨日までは、車に乘つて外出するときには、大馬を驅つて、威勢よく走り、そこらに坐つて居るものは、俄に立つて、出て來て禮を爲し、馬に乘つて居るものは、遽てて下りて挨拶をした位。それが、今日この樣を爲すのは、如何にも情ない。陸長源は兎に角、罪もない其妻子までが、ひどい目に遇ふのは、どうした事か。かくの如き內亂の突發せしにも拘はらず、朝廷から、兵を出して之を戡定するといふ御沙汰を聞かず、すでに之を未然に防ぎ得ず、又亂が起つても棄てて置くといふのは、威信地に落ちた證據で、それに付けても、汝等母子は、まことに憐むべきものである。

【餘論】この章は、君相の姑息を譏つたのである。蔣之翹は「退之、好んで長句を爲ると雖も、然れども、短古極めて觀るべきものあり。汴州亂、馬厭穀、古風、河之水、諸作の如き、ともに高古絕倫、倘ほ是れ琴操の餘技、家の春父曰く、敍し得て慘、二首の結語、ともに奈何ともすべなきの辭」といひ、その見地、極めて公平妥當である。

利劍

利劍光耿耿。

佩之使我無(一)邪心。

利劍

利劍、光、耿耿たり。

これを佩べば、我をして邪心なからしむ。

故人念我寡(二)徒侶。
持(三)用贈我比知音。
我心如冰劍(四)如雪。
不能刺讒夫。
使我心腐劍鋒折。
決(五)雲中斷開青天。
噫劍與我俱變(六)化歸黃泉。

故人、我が徒侶寡きを念ひ、
持用して我に贈つて知音に比す。
我が心は冰の如く、劍は雪の如し。
讒夫を刺す能はず。
我が心をして腐し劍鋒をして折れしむ。
雲を決いて中斷し、青天を開く。
噫、劍、我と倶に變化して、黃泉に歸せむ。

【字解】【一】無邪心　韓絕書の寳劍篇に「三に曰く邪に勝つ」とある。【二】寡徒侶　友達が少い。【三】持用　これを持ち來る。【四】劍如雪　吳景陽の七命に質如鑛雪とある。【五】決雲　莊子の說劍に「上、浮雲を決し、下、地紀を絕つ」とあり、又李白の詩に飛劍決浮雲とある。【六】變化歸黃泉　晉書張華傳に「雷煥、豐城の雙劍を得、一を以て華に與へ、一を以て自ら佩ぶ。華誅せられて、劍の在るところを失ふ。煥卒す、その子、持して延平津を過ぐ、忽ち腰間に於て躍り出でて、水に墮つ、兩龍の蟠繞するを見る、ここに於て劍を失ふ」とある。

【題義】これは、劍に託して、おのが滿腔の不平を敍したのである。

【詩意】銳利なる寳劍は、燒刃の匂こまやかに、光耿耿として、これを腰に佩びたばかりで、われをして、邪心を消亡せしめる位、まことに心持の善いものである。わが友人は、わが獨り世に容れられずして、日夕追隨する仲間の少いのを氣の毒に思ひ、この寳劍を我に贈つて、知音とも見よといはれ、その厚意は、まことに感謝すべきである。元來、わが心は氷の如く、そして劍の光は雪の如くである。世の中には讒者が多い、それを此劍で斬れば、まことに痛快であるが、さういふことが出來ないから、わが心をして腐敗せしめ、劍の鋒先をして折れしめる。かの讒者を斬つたならば、さながら、雲を切り捲つて中斷し、そして、青天を開いて望むが如く、この上もなく、さつぱりした事であるが、それは單に理想に止まつて、到底實行出來ぬ上は、世の中に居ても仕方がないから、われと劍と、共に變化して黃泉に歸つて仕舞はうと思ふのである。

【餘論】蔣之翹は「わが明の孫炎、かつて、劉伯溫の爲に寳劍歌を作り、結に云ふ、還君持之獻明主、歲若大旱爲霖雨と。これ何等の精神、何等の氣概。退之、劍與我俱變化歸黃泉の一語、便ち萎餒に屬すること極まれり。世運興衰の象、ここに於て見るべし」といつたが、孫炎の極力苦心したものと、韓愈が不用意に詠み棄てたものとを比較するのは、すでに當を失して居ることと思ふ。次に朱竹垞は「語調ともに奇險、亦た風謠に近し」といつて居るが、これは流石に妥當である。

齪齪

齪(一)齪當世士、所憂在饑寒。
但見賤者悲、不聞貴者歎。
大賢事業異、遠(二)抱非俗(三)觀。
報國心皎潔、念時涕(四)洸瀾。
妖姬坐左右、柔指發(五)哀彈。
酒肴雖日陳、感激寧爲歡。
秋陰欺(六)白日、泥潦不少乾。
河隄決東(七)郡、老弱隨驚湍。
天意固有屬、誰能詰其端。
願辱太守薦、得充諫諍官。
排雲叫閶(八)闔、披腹呈琅(九)玕。
致君豈無術、自進誠獨難。

齪齪

齪齪たり當世の士、憂ふところは饑寒に在り。
但だ賤者の悲むを見て、貴者の歎ずるを聞かず。
大賢は事業異なり、遠抱は俗觀に非ず。
國に報いて心皎潔、時を念うて涕洸瀾。
妖姬、左右に坐し、柔指、哀彈を發す。
酒肴日に陳すと雖も、感激、寧ろ歡を爲さむや。
秋陰、白日を欺き、泥潦、少しも乾かず。
河隄、東郡を決し、老弱、驚湍に隨ふ。
天意、もとより屬するあり、誰か能く其端を詰らむ。
願はくは、太守の薦を辱うして、諫諍の官に充つるを得む。
雲を排して、閶闔に叫び、腹を披いて、琅玕を呈す。
君を致す豈に術なからむや、自ら進むこと、誠に獨り難し。

【字解】【一】齪齪　史記貨殖傳に其民齪齪とあつて、こせこせとしてあせる貌。【二】遠抱　遠大なる抱負。【三】俗觀　俗物の觀念。【四】洸瀾　涙の流れる貌。【五】哀彈　潘岳の笙賦に輟張女之哀彈とあつて、悲しい音を彈じ出す。【六】欺白日　欺は壓倒する。この二句は、楚辭に皇天淫溢而秋霖兮、后土何時而得乾とあり。杜甫の詩に秋來未曾見白日、泥汙后土何時乾とあると同義。【七】東郡　唐の滑州は白馬縣に治し、卽ち漢時の東郡である。【八】閶闔　離騷に吾令帝閽開關兮、倚閶闔而望予とあつて、王逸註に「閶闔は天門なり」とある。なほ司馬相如の大人賦に、排閶闔而入帝宮とある。【九】琅玕　書の禹貢に「厥貢惟球琳琅玕」とあつて、その註に「石の玉に似たるもの」とある。

【題義】蔣註に「貞元十五年、鄭滑大水。公、十六年、京師より彭城に歸る。詩に云ふ、去歲東郡水と。而して、此詩亦た云ふ、河隄決東郡、老弱隨驚湍と。詩意相似たり。大抵、當世の士、齪齪として能く國の爲に慮るものなきを言ふ」とあるし、胡渭は更に之を詳說して「洪譜を按ずるに、公、十五年二月暮を以て、徐州に抵る。張建封、これを符離睢上に居らしむ。秋に及んで、將に辭し去らむとす。建封、奏して、節度推官となす。符離は徐州封城郡に屬す。詩に云ふ、願辱太守薦と。太守は卽ち徐州刺史。蓋し、この時、建封尚ほ未だ奏辟せず、故に太守の薦に望むあり。大賢事業異より感激寧爲歡に至るまでの八句は、太守を美するなり」といつた。この詩は、もとより、薦用を依囑したのであるが、われより憐みを乞うて求めるのではなく、今の時勢の惡いのを敲き直すには、是非我輩の如きものを登用せねばなるまいといふ意味を述べたので、その守るところを失はざるは、その人物の雋偉なる所以である。これから見ると、かの宰相に求めた三篇の上書などは、むかしから、乞

食文章といはれた通り、いかにも局促猥瑣を免れず、到底、これとは比較にも成らないやうである。

【詩意】當世の士人は、こせこせと、あせりにあせり、唯だ飢寒をのみ憂へて、富貴に眷戀し、そして、自分が富貴になると、貧賤の者の事など一切考へない處から、何時まで立つても、賤者の自ら悲むを見るのみで、貴者が之が爲に嘆息し、一肌脫がうなどいふことは、かつて聞いたこともない。ここに、徐州の刺史張建封は、世に大賢と稱せられる人で、その事業は、世人と異にして、遠大なる抱負は、もとより俗人の觀念と全く別である處から、報國の心は、あくまで皎潔であるし、時勢の日に非なるを念うて、毎に涙を流して居られる。もとより、富貴の地位に居るから、美人は左右に侍し、その女どもは、主人公を慰める爲に、柔かき指を以て哀音を發する琴などを彈ずることはあるし、又日日酒肴を陳して、宴を催されるが、平生家國の事に感激して居るから、そんな事では、歡樂を得られる譯でもない。頃ろ、秋の天氣は曇り勝ちで、白日を壓倒し、雨後の泥水は、少しも乾かず、黃河の隄は、東郡に於て決潰し、老弱男女は、逆卷く波に隨つて流れて仕舞つた。かかる災害を下したのも、畢竟、天意が下を誡める爲であるが、誰も其端端を詰り問ふものなく、一向平氣で打澄まして居る。但し、太守に於て、もとより御考も御座らう。願はくは、太守の推薦に依つて、諫諍の官に充てられたいもので、さうすれば、白日を蔽ふところの雲を推し開いて、天門の下に叫號し、今日災害の來りし所以を十分に詰問し、おのが心腹を披いて、琅玕にも比すべき濟世の方策を天子に奏聞したい。我輩、不肖なれども、君を堯舜に致すことに就いては、相當の術があるが、自分で推薦することは、誠に六つかしいから、取り敢へず、御依賴するので、何分にも、一臂の力を貸し玉はむことを懇願する次第である。

309
65

終

始

309
65

帙入

續國譯漢文大成

文學部　二十七

吉田律郎氏 寄贈本

續國譯漢文大成

文學部 第二十七册（第七帙の三）

韓退之詩集 上の三

309
65

韓昌黎集巻三

古詩

河之水二首寄子姪老成

河の水二首、子姪老成に寄す

(一)河之水、去悠悠。
河の水、去つて悠悠。

我不如水東流。(二)
我は水の東流に如かず。

我有孤姪在海陬。(三)
我に孤姪あり、海陬に在り。

三年不見兮使我生憂。
三年見ず、我をして憂を生せしむ。

日復日、夜復夜。
日復た日、夜復た夜。

三年不見汝、
三年汝を見ず。

使我鬢髪未老而先化。(四)
我が鬢髪をして、未だ老いざるに先づ化せしむ。

【字解】(一) 河之水 黄河。(二) 水東流 梁の武帝の詩に河中之水向東流とある。(三) 海陬 海邊の片田舍。(四) 先化

化して白髮となる。

【題義】これは、韓愈が其姪の老成に寄せたのである。老成は、韓愈の兄率府軍佐韓介の子で、姪とはいふものの、年もさう違はず、且つ兄弟は皆すでに死し、唯一の肉親である處から、韓愈は之と非常に親密であつた處が、早く死んだから、祭文を作つたので、即ち有名なる祭十二郎文である。從來、祭文には押韻するのが普通であるが、この文は、散體を以て之を行り、十分に思ふ樣を述べて居るので、祭文に於て一新紀元を劃したものと看做されて居る。これより先、韓愈が、汴州なる董晉の幕中に居た時、老成が尋ねて來たが、家族を引き連れて來て同居する積りで、其家に歸つた。すると、間もなく、董晉が死んだ爲に、韓愈は徐州に赴いて、張建封の幕下に身を寄せた處が、老成は、來る來るといつて居て、遂に來るを果さずして病死した。その顚末は、十二郎を祭る文の中に「吾年十九、はじめて京城に來り、その後、四年にして歸つて汝を視、又四年、吾、河陽に往いて墳墓を省し、汝が嫂の喪に從つて來り葬るに遇ふ。又二年、吾、董丞相に汴州に佐たり。汝、來つて吾を省し、止まること一歲、歸つて其孥を取らむことを請ふ。明年、丞相薨じ、吾、汴州を去り、汝來るを果さず。この年、吾、戎に徐州に佐たり、汝を取るものをして始めて行かしむ。吾、又罷めて來り、汝、又來るを果さず。吾、汝の東に從ふを念ふに、東又客なり、以て久しうすべからず。久遠を圖るには西歸に如くはなし、將に家を成して汝を致さむと欲す。嗚呼、孰れか、汝、遽に吾を去つて歿すと謂はむや」といつて居る。すると、韓愈が汴州に居た時、老成は一度尋ねて來たッ切り、相逢ふこともなく、それが即ち永別となつたのである。この詩は、韓愈が徐州に居て、ある年、參賀か何かの爲に上京した時に作つたものである。それから、老成は、何處に居たかといふと、かの祭文の中に「汝と食に江南に就く」といひ、「この病（軟脚病、即ち脚氣）は江南の人、常常之あり」といひ、しきりに、江南といつては居るが、その地を點醒せず、はつきり何處とも分らぬ。しかし、今の鎭江、もしくは上海附近だらうといふことである。

【詩意】黃河の水は、悠悠として、東に流れ、末は海に注いで居る。その水に沿うて下つたならば、汝の處へ往けるのであるが、人の幕客たる此身には、それ程の餘暇もなく、つまり、河水に如かざる次第である。わが一人の姪の老成といふものは、海邊の片田舍に居て、三年以來、打絕えて逢はぬから、我をして、日夜愁を生せしめる。かくて、日復た日、夜復た夜と、歲月は頻りに移り行けども、汝と相見る機會もないから、まだ老年といふ程でもないのに、鬢髮が次第に變じて、白くなつて仕舞つた。

河之水。悠悠去。
我不知水東注。

河の水、悠悠として去る、
我、水の東に注ぐを知らず。

古詩　河之水二首寄子姪老成

我有孤姪在海浦。　我に孤姪あり、海浦に在り。

三年不見兮使我心苦。　三年見ず、我が心をして苦ましむ。

采蕨于山。緡魚于淵。　蕨を山に采り、魚を淵に緡す。

我徂京師。不遠其還。　我、京師に徂かば、遠からず其れ還らむ。

【字解】【一】采蕨于山　詩經に「陟彼南山、言采其蕨」とある。【二】緡魚于淵　詩經に其釣維何、維絲伊緡とある。

【詩意】黃河の水は、悠悠として東に注ぐが、我は汝を訪ふことが出來ずして、河水にも及ばぬ譯である。わが一人の姪は、海邊に居て、三年の久しき、相逢ふ機會とてはなく、その爲に、我が心を痛く苦ましめる。もし一處に居たならば、打連れて、山に蕨を采り、淵に臨んで、ともに釣を垂れ、どんなに樂いか分からぬが、遺憾ながら、それが出來ない。われは、今張建封の命を奉じて上京するが、遠からずして歸つて來るから、汝も亦た海邊から徐州まで來て異れぬか。さうすれば、蕨を采つたり、魚を釣つたりすることも出來るので、相思の餘、取り敢へず、ここに詩を寄せる次第である。

【餘論】この詩は、詩經三百篇を模擬したので、詩經は、大抵四言であるに對して、此は三言、六言、七言など色色錯綜して、體裁は聊か異なつて居るが、その構想は、全篇彼を踏襲したのである。それから、二首を竝觀すると、その大半が互に類似し、韻脚の文字を換へて使つて居る處は、全く詩經の聯作の面影を傳へて居るし、後首の後半が前首と全く句法を異にして居る處も、矢張、詩經に例があるので、全體に於て、何處までも、三百篇の體を傳へるといふことに熱中して作つたのである。劉辰翁が「これ其れ楚語なり」といつたのは、稍や中らぬ樣であるが、朱竹垞が「これ國風を學ぶ、却つて、乃ち長短句、蓋し亦た稍や面貌を換へむと欲す」と云つたのは、流石に見るところありと稱すべく、何義門が「二詩、一片の眞氣、詞も亦た古極まる」といつたのも、同じく妥當である。

山石

山石犖确行徑微。　山石、犖确として、行徑微なり。

黃昏到寺蝙蝠飛。　黃昏、寺に到つて蝙蝠飛ぶ。

昇堂坐階新雨足。　堂に昇り、階に坐すれば、新雨足れり。

芭蕉葉大支子肥。　芭蕉葉大にして、支子肥えたり。

僧言古壁佛畫好。　僧は言ふ、古壁佛畫好しと。

以火來照所見稀。　火を以て來り照らせば、見るところ稀「なり。

鋪牀拂席置羹飯。　牀を鋪き、席を拂うて、羹飯を置く。

【字解】【一】犖确　かどかどしき貌。【二】行徑　人の通る小路。【三】蝙蝠　かうもり、說文に「蝙蝠は服翼」とあり、古今註に「一名仙鼠」とある。【四】芭蕉　蘇頌の草木疏に「大なるものは二三尺圍、重皮相襲り、葉は扇の如く生ず」とある。【五】支子肥　支子は梔子卽ちくちなし、酉陽雜俎に「諸花六出の者少し、惟だ梔子花のみ六出、卽ち西

（六）疏糲亦足飽我饑。　疏糲、亦た我が饑を飽かしむるに足れり。
夜深靜臥百蟲絕。　夜は深く、靜に臥すれば、百蟲絕え、
清月出嶺光入扉。　清月嶺を出でて、光、扉に入る。
天明獨去無道路。　天明獨り去れば、道路なし。
出入高下窮煙霏。　出入高下、煙霏を窮む。
山紅澗碧紛爛漫。　山紅澗碧、紛として爛漫たり。
時見（七）松櫪皆十圍。　時に松櫪を見れば、皆十圍。
當流（八）赤足蹋澗石。　流に當つて、赤足、澗石を蹋む。
水聲激激（九）風吹衣。　水聲、激激として、風、衣を吹く。
人生如此自可樂。　人生、かくの如きは、自ら樂むべし。
豈必局束（一〇）爲人鞿。　豈に必ずしも局束、人の爲に鞿されむや。
嗟哉吾黨二三子。　嗟哉、吾が黨の二三子。
安得至老不更歸。　安んぞ、老に至るまで、更に歸らざるを得む。

城の著錦花なり」とある。それから、杜甫の句に紅綻雨肥梅とあって、肥の字は、これに本づき、即ち上の新雨足を承けたのである。【六】疏糲　列子に「食は則ち疏糲」とあり、杜甫の句に百年疏糲腐儒餐とある。糲は、よくつかぬ米、即ち玄米。【七】松櫪　南都賦に楓柙櫨櫪とあって、李善の註に「櫪は櫟と同じ」とある。櫪は即ちくぬぎ。【八】赤足　杜甫の詩に、南望青松架短壑、安得赤脚蹋層氷」とある。【九】風吹衣　杜甫の句に風吹客衣日杲杲とある。【一〇】爲人鞿　漢書溜夫傳に「延頸局趾、轅下の駒に效ふ」とあり、又楚辭に余雖好脩姱以鞿羈とあって、その註に「鞿の口に在るを鞿といふ」とある。又漢書刑法志に「是れ猶ほ鞿を以てして、駻突を御するがごとし」とあって、顔師古の註に「馬、頭を絡するを鞿といふ」とある。爲人鞿とは、人の爲に覊束せらるといふ意。

【題義】蔣註には「この詩、河之水の後に編次す、當に是れ徐を去つて洛に卽く時に作りしなるべし。蘇子瞻、かつて、客と南溪に遊び、醉後、相與に衣を解き、足を濯ひ、因つて公の此篇を詠じ、その韻に次すこと蘇集に見ゆ」とあるが、韓集の編次は全く出鱈目で、あてには成らず、從つて、この說は誤つて居る。この詩は、韓愈が徐州を去りし後、しばらく洛陽に居た時、貞元十七年七月二十二日、その門人、李景興・侯喜・尉遲汾といふ人人と共に、洛陽の郭外なる溫水に遊び、その歸途、洛北の惠林寺に往つた處が、夜遲くなつたから、その儘、留宿したといふので、惠林寺に題名が殘つて居た爲に、その時の事實が明かに成つたのである。山石は、例の如く、篇首の二字を取つて題に塡したので、格別の意味もない。

【詩意】かどかどした山石の間に、やつと人の通る一條の細徑があつて、これを辿つて行くと、惠林寺に到著したが、それは蝙蝠が得意に飛び廻る黃昏の頃であつた。そこで、堂に升り、階に坐すれば、新に暑熱を洗ひ去つた雨あがりの時で、秋の初の氣が爽かに、冷いやりとして居た。雨後であるから、芭蕉の葉は大きく伸びひろがり、梔子の花も肥えて、えならぬ香氣を放つて居る。すると、坊主が出て來て、當寺の壁畫は、隨分古いもので、佛樣が大そう見事に描かれて居るから、是非御覽なさいといつたから、燈火を以て照らして見た處が、薄暗くて、何が何だか、さつぱり分からなかつた。今日は、

一日遊び暮らして腹も減つたからといふので、牀を鋪き、席を拂つて、羹や飯を持つて來て貰ひ、さて愈よ箸をつけて見ると、まづい玄米の飯であつたが、ひもじい時に不味い物なしといふ通り、それでも、飢を飽かすには十分であつた。やがて、夜が更けたから、靜に横に成つた處が、百蟲の響も絶え、淸き月が東嶺にさし上り、その光が扉の中へ照らし込んで、まことに澄み切つた氣分がした。それから、夜が明けて、同行者のまだ寢て居る内に、自分ひとり起き出て、山中の景色を眺める積りで歩いて見ると、路もない處に迷ひ入つたが、それにも拘はらず、高い處に出で、低い處に入り、朝靄の挂つて居る間を彼方此方と窮めて廻はつて見た。すると、山の土は赤く、谷川の流は靑く、紛として爛漫といふやうに、如何にも善い眺めであつた、山には松だの櫟だのが生えて居て、いづれも、十抱程ある老木である。その前には水が流れて居るから、跣足になつて、巖石を踏みしめて、とぼとぼと覺束なくも進み行けば、淺瀨には、水の音が激して聞こえ、風は、颯然として衣を吹き、身にしみる樣な寒さを感じた。こんな面白い事は無い、人生かくの如く、始終ここに居れば、實に樂しいことであらうと思ふ位で、世の中に局束し、きびしく繫がれて、人の爲にこき使はれるにも當るまいと、つくづく心に感じた。そこで、歸後、同行の弟子ともに告げて、ならう事なら、君等と共に、老に至るまでも、歸り去らず、この儘、山中の人と成りたいと思ふといつた。

【餘論】黃震は「山石の詩、最も淸峻」といひ、乾隆御批には「以レ火來照所レ見稀、嶽廟の作、神縱欲レ福難レ爲レ功と略ぼ同じ。法に於ては、手に隨つて撇脫し、意に於ては、素より滿たざるところの事、卽ち隨處自然に流露するなり」といひ、顧嗣立は「七言古詩、整麗に入り易くして、亦た平熟に近し。老杜、はじめて拗體を爲る、杜鵑行の類の如し。公の七言、皆この種を祖とす、而して、中間極めて鮮麗の處あり、雕琢を事とせず、更に精采あり、聲あり、色あり、自ら是れ大家。元遺山の論詩絕句に云ふ、有レ情芍藥含二春淚一、無レ力薔薇臥二晩枝一、拈二出退之山石句一、始知渠是女郎詩、眞に篤論なり」とある。有レ情芍藥の二句は秦少游の詩で、これを韓愈の山石の詩に對照して見ると、同じく綺麗であるけれども、秦少游のは女郎の詩、韓愈は丈夫の作であるといふので、元遺山の宗奉するところも分かる。つまり、韓愈のは、雄壯渾成の中に時たま綺麗な處があるので、これは、一寸眞似の出來ぬ處である。東坡の詩にも、犖确何人似二退之一、意行無レ路欲レ從レ誰、宿雲解駁晨光漏、獨見山紅澗碧時、とあつて、彼は、山紅澗碧が、ひどく氣に入り、始終かういふ詩を作らうと苦心して居たのである。なほ、何義門は破題四句を評して「卽目を直書し、工を求むるに意なく、しかも文自ら至り、謝家の模範を一變す、畫家の荊關の如し」といひ、山紅澗碧の四句を評して「すべて是れ雨後の興象、又卽ち犖确黃昏の二句中、包蘊するところに發端するなり」といつて居る。

天星送楊凝郎中賀正　天星、楊凝郎中の賀正を送る

天星牢落雞喔咿。　天星牢落、雞喔咿たり。
僕夫起餐車載脂。　僕夫起つて餐し、車載ち脂す。
正當窮冬寒未已。　正に窮冬に當つて、寒、未だ已まず。
借問君子行安之。　借問す、君子、行いて安くにか之く。
會朝元正無不至。　會朝元正、至らざるなし。
受命上宰須及期。　命を上宰に受け、須らく期に及ぶべし。
侍從近臣有虛位。　侍從近臣、虛位あり。
公今此去歸何時。　公、今ここを去つて、歸るは何の時。

【字解】【一】牢落　ばらばらとして居る、數が漸く少く見ゆる貌。【二】喔咿　楚辭に喔咿嚅唲とあり、王延壽の賦に聲喔咿而喔咿とあり。李白の雉子斑に、喔咿振迅欲飛鳴とある。【三】車載脂　詩經に載脂載牽とあつて、車に油をさす。【四】窮冬　賀正に上京するから、前年の冬、出發するので、即ち貞元十四年十二月である。【五】會朝　會は甲と音通。甲朝は第一の朝といふに同じく、即ち元日の朝會の義。

【題義】この詩は、前詩よりもずつと前、貞元十四年、韓愈が汴州董晉の幕中に居た時、郎中楊凝といふ人が、賀正の爲に上京するのを送つて作つたのである。この時分の節度使は、儼然として諸侯の如く、なかなか其任地を離れて出かけることは無いので、元日以下の式日には、大抵代理を遣すことに成つて居た。韓愈も、後年徐州に居た時に、張建封の代理として、賀正の爲に上京したことがあつた。それから、楊凝は、唐書に「字は懋功、弘農の人、右司郎中に遷る、宣武の董晉、表して判官となす」とある。

【詩意】夜は明けなむとして、天上の星は、ばらばらと輝き、一番雞が喔喔として、花やかに鳴き立てたので、僕夫は早く起きて、食事を畢り、車に脂をさして、出立の準備も調つて居る。今しも、窮冬十二月、寒さは一ばん烈しい時であるのに、君は、これから何處へ行かれるのか。元旦の會朝は、一年中で最も重い朝廷の御儀式であつて、四方萬國、至らざるなく、この度、上宰の董晉が君を代理として京師に遣はされるのであるから、さつさと出かけて屹度間に合ふ樣にせねば成るまい。君は、もとより一個の人才であつて、由來、人才は、一地方の節度使などが勝手に私すべきもので無い。近ごろ、天子侍從の近臣どもの中には缺員があると聞いて居るから、君が上京されると、ひよつと、天子の御目に留まり、その儘、引き止めて任用されるであらうから、この度、ここを去れば、何時歸つて來るか分からぬ樣な事に成るかも知れない。

【餘論】結二句は、一歩を拓開して、楊凝の爲に祝意を表した次第で、董晉には、あまり聞かせたくは無い樣な意味である。勿論、韓愈は、董晉に心服して居らず、どうかして早く汴州を去りたいと思つて居た位で、後年、張建封に於けるも、矢張その通り。彼は、無論藩鎭の屬官たるに甘んせず、天子の直臣となり、そして、滿腹の經綸を展べて、藩鎭を敲き潰さうといふのが、その年來の夙望である

處から、無意識の中に、時たま、かういふ事を云つたのである。

汴泗交流贈張僕射

汴泗交流、張僕射に贈る

汴泗交流郡城角。 汴泗交流す郡城の角、
築場千步平(一)如削。 場を築くこと千步、平かなること、削るが如し。
(二)短垣三面繚(三)逶迤。 短垣三面、繚つて逶迤たり、
擊鼓騰騰樹赤旗。 鼓を擊つこと、騰騰として、赤旗を樹つ。
新秋朝涼未見日。 新秋朝涼しうして、未だ日を見ず、
(四)公早結(五)束來何爲。 公早に結束し、來つて何をか爲す。
(六)分曹決勝約(七)前定。 曹を分つて、勝を決すること約前に定む、
百馬攢蹄近相映。 百馬、蹄を攢めて、近く相映ず。
毬驚杖奮合且離。 毬は驚き、杖は奮つて、合し且つ離る、
(八)紅牛纓紱黃(九)金羈。 紅牛の纓紱、黃金の羈。

【字解】【一】平如削 地ならしをして平坦に成つて居るをいふ。【二】短垣 丈の低い矢来。【三】繚逶迤 めぐつて長く續く。【四】公早 この早は早朝の義。【五】結束 支度をする。【六】分曹 組を分ける。【七】約前定 前以て規約を定めて置く。【八】紅牛纓紱 牛の毛で造つて、頭の飾りとしたるもの。【九】黃金羈 羈は韁、おも綱。【一〇】霹靂應手神珠馳 霹靂が手に應じて起るかと思はれる程に、毬が飛んで行く。南史曹景宗傳に「むかし、鄕里に在り、快馬に騎して龍の如く、弓弦を拓いて霹靂の聲を作し、箭は餓鴟の叫ぶが如し」とあり、王思の內人圖毬賦に毬體似珠とある。それから、曹植の白馬篇に「仰手接飛猱、俯身散馬蹄」といひ、杜甫の前出塞に「走馬脫轡頭、手中挑青絲、捷下萬仞岡、俯身試搴旗」といひ、韓愈は、此等に本づいて、變化し ものだといはれて居る。【一一】超遙 前方に駈け去る貌を云ふ。【一二】散漫 今まで整列して居たものが左右に推し開く貌。【一三】揮霍 一生懸命に技能を盡すこと。【一四】意氣麤 麤は粗と同字、粗豪なること。

側身轉臂著馬腹。 身を側て、臂を轉じて、馬腹に著く、
(一〇)霹靂應手神珠馳。 霹靂、手に應じて、神珠馳す。
(一一)超遙散(一二)漫兩閑暇。 超遙散漫、兩つながら閑暇、
(一三)揮霍紛紜爭變化。 揮霍紛紜、爭うて變化す。
發難得巧(一四)意氣麤。 發するに難く、得るに巧に、意氣麤なり、
讙聲四合壯士呼。 讙聲四に合して、壯士呼ぶ。
此誠習戰非爲劇。 これ誠に戰を習はす、劇を爲すに非ず、
豈若安坐行良圖。 豈に若かむや、安坐、良圖を行はむには。
當今忠臣不可得。 今に當つて、忠臣得べからず、
公馬莫走須殺賊。 公の馬、走る莫れ、須らく賊を殺すべし。

【題義】この詩は、貞元十五年、韓愈が徐州なる張建封の幕中に居た時に作つたのである。汴水は徐の西、泗水は徐の南、つまり、徐州は汴泗二水の間に在るところから、これを以て篇に名づけたのである。舊唐書に「張建封、字は本立、兗州の人、貞元四年、徐州の刺史となり、十二年、檢校右僕射を

加へらる。彭城に在ること十年、賢を禮し、士に下る、文人、許孟容・韓愈の如き、皆これが從事となる」とある。この詩は、張建封に贈つて、その打毬に耽けることを諷したので、文集を見ると、諫二張僕射擊一毬書といふのがある。張僕射は、本來打毬が好きであつた。打毬は、もとより武技を練る爲めであつて、武人として之を好むは、惡いことではないが、あまり凝り過ぎて、遊藝の樣に成つては面白くないといふので、この詩の終に此誠習レ戰非レ爲レ劇、豈若安坐行二良圖一とあつて、かの諫書と同じ意味である。

【詩意】汴水と泗水とは、鄆城の角に於て合流して居る。そこに打毬場を設けて、廣さ千歩に亙れる地域を、すつかり地ならしをして、平坦なること、削るが如く、そして丈の低い矢來を三面に繞らして、ずつと長く續き、その內では、どうどうと太鼓を鳴らし、赤い旗を立てて、用意を調へて居る。今しも、新秋の好季節、朝涼しくして、まだ日の出ない時分、張建封に於かれては、早朝から支度をして、親しく此場に臨まれたが、それは何を爲すかといへば、即ち打毬を催すとのことである。そこで、組を分けて、決勝點を設け、前から約束を定め、多くの者どもは、馬に跨り、馬は蹄を攢めて、近く相映じて、そこを驅け廻はつて居る。さて愈よ競技が始まると、取り合はれる爲に、毬は驚いて轉げ廻り、杖を奮つて之を擊たむとし、忽ち合し、忽ち離れ、牛尾の頭飾や、黃金をより込んだおも綱が入り亂れて、旁午しつつある。競技する者は、いづれも、身を引込め、臂を轉じて、しつかりと馬腹に身體をつけ、そして、杖を奮つて毬を爭ひ、さながら、霹靂が手に應じて起るかと怪まれ、珠は精神あるが如く頻りに飛び廻はつて居る。時としては、先方に馳せ向ひ、時としては整列した者が左右に推し開き、しかも、足なみを揃へて、一絲紊れず、餘裕綽綽として、あわてず、騷がず、遣つて居るが　その內に、祕術を盡し、變化を極め、ここを先途と勝負を爭つて居る。中にも、上手な者は、一たび毬を受ければ、容易に之を發せず、投げれば、屹度おもふ壺に中るといふので、意氣自ら粗豪であつて、その人が勝を占むれば、四方から讙聲が起り、壯士どもは、我を忘れて大呼する。元來、打毬てふものは、武技を講習する爲に案出したもので、決して、遊戲に充つべきものではない。但し、今日の時勢からいへば、なかなか、打毬どころではなく、帷幄の中に安坐して、百戰百勝の良圖を運らさねばならぬことと思ふ。殊に、刻下の世に於て、國難に身を捐てるといふ樣な忠臣は、到底求められない位だから、今にも賊が來たといへば、公の馬は逃げ去らずして、進んで之を殺す覺悟を以て、下を引き回して、平生訓練することが必要である。こんな風に、游戲三昧に打毬を遣つて居る樣では、いざとなると、皆馬に乘つて逃げ去るに相違なく、この點を篤と考へて頂かねばならぬので、何にせよ、一時の快を得むが爲に、毎日打毬などを遣られるのは、甚だ以て感服せざる次第である。

【餘論】朱竹垞は、「側レ身轉レ臂著二馬腹一」の二句を賞し「奇處は、全く身を翻して馬腹に著くるに在り」といひ、何義門は「この詩、用韻變を極めて、しかも整ふ」といひ「風旨、老杜の冬狩行と略ぼ相似

たり」といひ、ともに肯綮に中つて居る。次に乾隆御批には「神采飛動、結、忠告あり、便ち雉帶箭に比して一格を高うす」とあるが、その雉帶箭は、後に見えて居る。

忽忽

忽忽乎余未知生之爲樂也。
忽忽として、余、未だ生の樂たることを知らざるなり。

願脱去而無因。
脱し去らむことを願へども而かも因なし。

安得長翮大翼如雲生我身。
安んぞ得む、長翮大翼、雲の如き、我が身に生じ、

乘風振奮出六合絶浮塵。
風に乘じて振奮し、六合を出でて浮塵を絶つことを。

死生哀樂兩相棄。
死生哀樂、兩つながら相棄て、

是非得失付閒人。
是非得失、閒人に付せむ。

【字解】【一】長翮　翮は羽の莖、つまり長い羽といふこと。【二】六合　天地四方を併稱す。

【題義】蔣註に「貞元十五年、董晉薨す。公、汴を去りて張建封に徐州に依る。志を得ずして作る」とある。これも、矢張、局束して人の覊と爲るに忍びぬといふ意を述べて、その不平を遣つたのである。

【詩意】忽忽として、いかにも、詰まらなく、予は、未だ此生の樂たる所以を解し得ない。そこで、この人間を脱し去らうと願つて居るが、因なくして、それも出來ない。この上は、かの垂天の雲の如き長い羽と大きな翼とが我が身に出來て呉れれば善いと念じて居るので、さうすれば、風に乘じ、一たび羽ばたきをして奮飛し、見る間に、六合を出て、浮塵を超絶して仕舞ふことが出來る。かくて、死生哀樂などは、いづれも棄て去り、是非得失などは、一切世の閒人に付して、自分は之に與からず、この世界を丸呑にして、自由の生涯を送りたいものである。

【餘論】この詩は、格別面白くもないが、唯だ古色を帶びた處は、さすがに韓退之の手筆たるに負かず、そして、其處に力量が認められるのである。

鳴鴈

嗷嗷鴻鴈鳴且飛。
嗷嗷鴻鴈、鳴いて且つ飛ぶ、

【字解】【一】嗷嗷　詩經に鴻雁

于飛、哀鳴嗷嗷とある。【二】窮秋南去　管子に「鴻雁は、春、北して、秋、南し、その時を失はず」とある。【三】稻粱微　劉孝標の廣絶交論に「雁鶩の稻粱を分つ」とあり、杜甫の官池春雁の詩に「自レ古稻粱多不レ足」とあり、又韓詩外傳に「田饒、魯の哀公に謂つて曰く、黄鵠、君の園池に止まり、君の稻粱を啄む」とある。【四】羣侶違　古樂府に、「離鵾鶤羣侶」とある。

窮秋南去春北歸。窮秋、南に去つて、春、北に歸る。
去レ寒就レ暖識レ所レ依。寒を去り暖に就いて、依るところを識る、
天長地闊棲息稀。天は長く、地は闊くして、棲息稀なり。
風霜酸苦稻粱微。風霜酸苦にして、稻粱は微なり、
毛羽摧落身不レ肥。毛羽摧落して、身、肥えず。
徘徊反顧羣侶違。徘徊反顧して、羣侶違ふ、
哀鳴欲レ下洲渚非。哀鳴下らむと欲するも、洲渚非なり。
江南水闊朝雲多。江南、水闊くして、朝雲多し。
草長沙軟無二網羅一。草は長く、沙は軟にして、網羅なし。
閒飛靜集鳴相和。閒飛靜集、鳴いて相和す。
違レ憂懷レ惠性匪レ他。憂に違ひ、惠を懷ふ、性、他に匪ず。
淩風一擧君謂レ何。淩風一擧、君、何とか謂ふ。

【通義】蔣註には「これ前詩と同時、公、蓋し、託して以て自ら喩ふるなり」といひ、顧註には「公、徐州に在り、孟東野に與ふる書に曰ふあり、去年、汴州の亂を脫し、遂に此に來る、主人、余と故あり、余を符離睢水の上に居らしむ、秋に及びて、將に辭し去らむとす、云云、と。主人は建封を謂ふ。公、徐に在り、鬱鬱として志を得ず、書と詩とに見ゆるもの此の如し。公、蓋し雁に託して、以て自ら喩ふるなり」とある。

【詩意】嗷嗷と悲しげに飛びながら鳴く雁は、秋の末には南の方に去り、春になれば北に歸る。そは寒を去つて暖に就くので、善く己の依るところを知つて居る。然るに、今、空中を見ると、一羽の雁があつて、天は長く、地は濶けれども、おのが棲むべき處だになく、頻りに飛び迷ひ、そして、風霜の酸苦なるに遭うて、その食ふべき稻粱をも見出さず、毛羽は摧落して、身は瘦せ衰へ、徘徊反顧して、その友達を呼んで居るが、さて友達らしいものは、一向見えない。かくて、哀鳴して空から大地に下らうとしても、身を寄すべき洲渚もない。唯だ江南は、水濶く、朝雲多く、その上、時候も暖であつて、草は長く、沙は軟かで、加之、網羅の憂が無いから、先づ當分そこへ往つて、閒に飛び、靜に集まつて、その友達と共に鳴いて相和して居たらば善からう。すべて、物の性として、憂ふべき處を去つて、惠に懷くのが普通であるから、やがて、風を淩いで、一擧して遠く去るのは、まことに止むを得ぬ次第。自分は、久しく、君の幕下に身を寄せて居たが、どうも滿足することが出來ず、よい處があれば、立ち去るかも知れぬが、それは、違憂懷惠の然らしむるところ、さのみ深く、君の咎

めざらむことを懇願するのである。

【餘論】この詩は、何分にも、ここに居ても詰らぬから、その内どこかへ行くかも知れぬといふ心をほのめかしたのである。全篇が柏梁體で、毎句に押韻してある。一寸見ると、前の方は五微で、朝雲多以下は五歌で、韻が換はつて居るかと思ふが、實は、さうでなく、古しへは、五微と五歌とが相通じたので、韓愈は之を一韻と看做したのである。但し、之を錯綜して使用すると、或は調子はづれといはれる虞もある處から、わざと五微の方を先に出し、五歌の方を後にしたので、ここらは、特に注意したものである。

龍移

龍移る

天昏地黑蛟龍移。天は昏く、地は黑くして、蛟龍移る。

雷驚電激雄雌隨。雷は驚き、電は激して、雄雌隨ふ。

清泉百丈化爲土。清泉百丈、化して土となる。

魚鼈枯死吁可悲。魚鼈枯死、吁、悲むべし。

【字解】【一】雷驚電激　班固の西都賦に見ゆ。

【題義】蔣註に「この詩は、南山の湫を謂ふなり。湫、はじめ平地に在り、一日風雷、移つて山上に居る。その下の湫、遂に化して土と爲る。長安の人、今に至つてこれを乾湫といふ。公の炭谷に題する詩に云ふ、厭レ處二平地水一、巢居揷二天山一と、これを指す」とある。その湫が龍と共に山上に移つたといふ珍事は、韓退之の時分に有つた事で、それを傳聞して、乃ち此詩を作つたのである。

【詩意】一天俄に掻き曇り、大地も黑く、咫尺晦冥、そことも見分かぬ時に當り、雷は驚き、電は激し、世にも恐ろしい聲がして、蛟龍は、雌雄相隨つて、その居をば山上に移して仕舞つた。そこで、今まで龍が住んで居た百丈の清泉は、すつかり土で埋もれ、その中に棲んで居た魚鼈の類は、いづれも乾ぼしに成つて死んで仕舞つたので、まことに、氣の毒なことであつた。

【餘論】後半は、城門火を失して、その災、池魚に及ぶといつたやうな事で、何だか、諷意があるらしい。そこで、方世擧は說をなし、これは例の王叔文・韋執誼の一黨が敗れた爲に、柳宗元・劉禹錫等、謂はゆる八司馬の貶謫と成つたことを指したのだらうと云つた。無論、さう見た處で差支は無いが、ただ推測であつて、確乎たる證據の有る譯ではない。

雉帶箭

雉帶箭

原頭火燒靜兀兀。(一) 原頭、火燒いて、靜、兀兀たり。

【字解】【一】兀兀　說文に「高くして上平かなるなり」とある。

野雉畏鷹出復沒。　野雉、鷹を畏れて、出でて復た沒す。
將軍欲以巧伏人。　將軍、巧を以て人を伏せむと欲し、
(二)盤馬彎弓惜不發。　馬を盤らし、弓を彎いて、惜んで發せず。
地形漸窄觀者多。　地形、漸く窄く、觀るもの多し、
雉驚弓滿勁箭加。　雉驚き、弓滿ちて、勁箭加はる。
衝人(三)決起百餘尺。　人を衝いて決起す、百餘尺、
紅翎白鏃相傾斜。　紅翎白鏃、相傾斜。
將軍仰笑軍吏賀。　將軍は仰いで笑ひ、軍吏は賀す、
(四)五色離披馬前墮。　五色、離披として、馬前に墮つ。

(二) 盤馬　馬を乘り廻す。(三) 決起　俄に飛び上る。(四) 五色　爾雅に「雉、五彩皆備はつて、章を成すを翬といふ」とあり、射雉賦に有五色之名翬とある。

【題義】 これは、韓愈が張建封の幕中に居た時、狩獵に隨行し、その雉を射落す樣を實視して作つたので、即ち縣齋有懷の詩に大梁從相公、彭城赴僕射、弓箭圍狐兎、絲竹羅酒炙、とある其時の事である。

【詩意】 はじめ、鳥獸の隱れ家を索がす爲に、山野の草木を燒き拂つたから、その跡は、極めて靜かで、兀兀然として居る。そこに雉が居るが、鷹を畏れて、頻りに出たり引つ込んだりして居る。その時に、箭を濫發すると、雉は遠くへ飛び去る虞があるが、將軍は、射藝に巧なることを以て人を心服せしめむと欲し、馬を乘り廻し、弓を引いて箭を番へた儘、なかなか放たない。段段追ひ込んで、地形の窄い處へ來ると、左右には、澤山の見物人が片唾を呑んで控へて居る。雉は、もう逃げられないから、多勢の居るのもかまはず、人を衝いて百餘尺も高く飛び上つた。この時遲く、かの時早く、弓は滿を放ち、勁箭が勢こんで飛んだから、見事に的中し、白羽の征矢は、紅の羽と共に、ばらばらと傾斜して下に落ちて來た。その有樣を見て、將軍は空を仰いで、からからと笑ひ、軍吏どもは、喝采して之を賀する程もあらせず、箭を帶びた雉は、五色離披として、さつと馬前に墮ちて來た。

【餘論】 この詩は、格別諷諭の意味があるのではなく、唯だ狩獵の實況を敍したので、杜甫の哀江頭に輦前才人帶弓箭、白馬嚼嚙黃金勒、翻身向天仰射雲、一箭正墮雙飛翼、といふ其描寫の法を學んだのである。洪容齋は「昌黎雉帶箭の詩、東坡、かつて、大字これを書し、以て妙絶と爲す。予、曹子建の七啓を讀むに、羽獵の美を論じて云ふ、人稠網密、地逼勢脅と。乃ち韓公用意來るところの處を知る」といひ、顧嗣立は「將軍欲以巧伏人、盤馬彎弓惜不發の二句、無限の神情、無限の頓挫、公、蓋し人に示すに運筆作文の法を以てするなり。その全首の波瀾委曲、細微熨貼に至りては、王留耕の謂はゆる寫物の妙、その狀、目前に在るが如し、信に然り、信に然り」といひ、又「句句實境、

寫し來つて絶妙、是れ昌黎極めて得意の詩、亦た正に是れ昌黎の本色」といひ、沈德潛は「李將軍、中らざるを度つて發せず、發すれば必ず弦に應じて倒る。未だ弓を彎かざるの先に審量し、此は已に弓を彎くの條に矜惜す。すべて肯て嚴しく其技を見はさざるなり。詩を作り、文を作る、亦た須らく此意を得べし」といひ、最後に乾隆御批には「篇幅限あり、しかも、盤屈跳盪、生氣遠く出づ、故に是れ神筆」といつて居る。

條山蒼

條山蒼。河水黃。　　條山蒼し

　　條山は蒼、河水は黃なり。

浪波沄沄去。松柏在山岡。　　浪波沄沄として去り、松柏は山岡に在り。

【題義】條山は卽ち中條山、黃河が西北より來り、華山の北麓を屈曲して、やがて、洛陽の方へ流れる。その屈曲する處の北岸に中條山があつて、その下に蒲津といふ處がある。この詩は、韓愈が蒲津を通つた時に作つたのである。

【詩意】中條山は、蒼蒼として居るし、その下を流れる黃河は、いたく濁つて、その名の通り、眞黃な色をして居る。その黃なるは、波浪沄沄として流れ去るからであるし、その蒼なるは、松柏が山岡に在つて、茂つて居るからである。

【餘論】はじめ、條山蒼、河水黃、と置いて、後の二句で之を解釋したのである。黃震は「簡淡にして餘興あり」といひ、顧嗣立は「語多からず、却つて古に近し」といつたが、こんな短いものでは、格別の面白い味を包含する譯に行かぬ。曾國藩の說に、この浪波沄沄去といふ句は、世人の俗に從つて、墮落して行く有樣を言つたのであるし、松柏在山岡は、君子のみが、何處までも後凋の節を守つて居ることを美したものだとあるが、かういふ解釋は、毎毎の事で、折角ながら、あまり有り難くもない。方世擧の說では、これは、蓋し脫文が有るので、ひよつとすると、その下にまだ數句あつたのが亡びて仕舞つた爲に、こんな變なものに成つたのでは無からうかといつて居るが、これは如何にも尤もである。

贈鄭兵曹

　　鄭兵曹に贈る

罇酒相逢十載前。　　罇酒相逢ふ十載の前、

君爲壯夫我少年。　　君は壯夫たり我は少年。

罇酒相逢十載後。　　罇酒相逢ふ十載の後、

我爲壯夫君白首。　　我は壯夫たり君は白首。

【字解】【一】周行　詩經にも數ば見え、もと周代習用の語で、役人の行列といふ意。【二】遑遑　いそがしげに驅け廻る。

我材與世不相當。我が材、世と相當らず、
戢鱗委翅無復望。鱗を戢め、翅を委して、復た望むなし。
當今賢俊皆周行。當今、賢俊、皆周行、
君何爲乎亦遑遑。君、何すれぞ、亦た遑遑。
杯行到君莫停手。杯行つて君に到る、手を停むる莫れ。
破除萬事無過酒。萬事を破除する、酒に過ぐるはなし。

【題義】兵曹は、詳しくいへば兵曹參軍事、將軍鎭將の屬官で、その詳は、唐書の百官志に見えて居る。ここには、鄭とあるだけで、その名は分からない。ある説には、鄭通誠で、張建封が武寧に節度たりし時、通誠は副使であり、韓愈は、その軍の從事であつたから、その時であらうといふが、白居易の哀二良の詩に、祠部員外郎鄭通誠とあるを見れば、どうも、さうとは思はれず、要するに、その詳は分からないが、詩で見ると、年は韓愈よりも多く、そして、老後なほ微官に沈淪して居たものと思はれる。

【詩意】かつて十年の前、ともに酒を飮んだ時、君は血氣盛んの壯夫で、我はまだ靑二才の少年であつたが、十年の後の今日、ともに酒を飮めば、我は壯夫で、君は白髮の老人となり、十年の間に、すつかり變りはてて仕舞つた。顧みれば、我輩の如きは、才あるも、世の風潮に合はざるが故に、魚が鱗を戢めて小さな池に泳ぐが如く、鳥が翅を疊めるが如く、全く世事を度外視して、格別の希望もない。今しも、賢俊の士は、竝び進んで、役人の行列に連つて、いづれも、納まつて居るのに、如何なれば、君は仕官もせずに、そわそわとして居るか。これも時勢で仕方がないとすれば、もう何も言ふまい。されば、盃が廻はつて君の處に至れば、手を停めず、さつさと早く飮んで返杯をし玉へ、何は兎もあれ、人間の萬事を忘れるのは、酒が第一で、せめて、これでも飮まなければ、とても遣り切れない。

【餘論】朱竹垞は「起四句大快、」これ韓退之ならず、これ張正言」といひ、又「收、味あり」といつた。張正言は卽ち張籍で、起首の處は張籍の樂府の筆致に似て居るといふのである。しかし、この詩は、張籍よりも、むしろ白樂天に近く、當時、元白の詩體が世に流行したから、韓愈は、おれは平生六つかしいことばかり言つて居るが、さういふ詩でも作れないのでは無いぞといふので、特に其調を彈じたものと見え、集中に、數ば其例がある。それから、結二句の如き、今では、あまり人口に膾炙して、格別の妙味もないが、その當時に於ては、まさしく破天荒の名句で、讀者をしてアッと言はせたものに相違ない。

桃源圖

(一)神仙有無何眇芒。
桃源之說誠荒唐。(二)
流水盤廻山百轉。
(三)生綃數幅垂中堂。
(四)武陵太守好(五)事者。
題封遠寄南宮下。
(六)南宮先生忻得之。
波濤入筆驅文辭。
文工畫妙各臻極。
異境恍惚移於斯。
架巖鑿谷開宮室。
接屋連牆千萬日。

桃源圖（たうげんのづ）

神仙の有無、何ぞ眇芒、
桃源の說、誠に荒唐。
流水盤廻、山百轉。
生綃數幅、中堂に垂る。
武陵の太守、好事の者、
題封遠く寄す南宮の下。
南宮先生、これを得たるを忻び、
波濤、筆に入つて文辭を驅る。
文は工に畫は妙に、各〻極に臻る、
異境恍惚として、斯に移る、
巖に架し、谷を鑿つて、宮室を開き、
屋を接し、牆を連ぬる千萬日。

(七)嬴顚劉蹶了不聞。
(八)地坼天分非所恤。
種桃處處惟開花。
川原近遠蒸紅(九)霞。
初來猶自念鄉邑。
歲久此地還成家。
漁舟之子來何所。
(一〇)物色相猜更問語。
(一一)大蛇中斷喪前王。(一二)
(一三)羣馬南渡開新主。
聽終辭絕共悽然。
自說經今六(一四)百年。
當時萬事皆眼見。

嬴顚劉蹶、了に聞かず、
地は坼け天は分るるも恤む所に非ず。
桃を種ゑて、處處に惟だ花を開く、
川原近遠、紅霞を蒸す。
はじめ來つて、猶ほ自ら鄉邑を念ふ、
歲久しく、此地還た家を成す。
漁舟の子、何の所より來る、
物色相猜して、更に問語す。
大蛇中斷前王を喪ひ、
羣馬南渡して新主を開く。
聽き終つて、辭絕え、共に悽然、
自ら說く、今に經る六百年。
當時萬事皆眼に見る、

【字解】【一】神仙有無　神仙といふものが實際有るか無いかといふこと。蔣註に「淵明、桃源を敍し、初より神仙の說なし。梁安貧、武陵記を爲る、亦た其語を襲述するのみ。淵明云ふ、先世、秦の亂を避くと。而して、安貧亦た云ふ、昔に秦人の亂を避くるを以て、邑人相率ゐ、妻孥を擕へて此に隱る。厥後、外に還ぜず、何ぞ人世の多く貿遷するや、と。すなはち知る、漁人の遇ふところは、乃ち其子孫、はじめて山に入るものに非ず、後人深く考へず、因つて謂ふ、秦人晉に至つて猶ほ死せず、遂に以て仙と爲す。故に退之云云」とある。これは、題後の項にも一寸述べて置いたが、余の爲めに更に引抄して置く。【二】荒唐　莊子天下篇の註に「廣大にして域畔なきなり」とあるし、疏には「荒唐は兎絲の別名、兎絲に根なし、以て言の無根を況するなり」とある。いづれにしても、根據の分からぬ取り留めもない言葉。【三】生綃　生絹、即ち畫絹。【四】武陵太守　武陵は、唐の世では朗州武陵郡、明以後は湖廣常德府に屬して居た。その太守の姓名は分からない。【五】好事者　漢書の揚雄傳に「好事者、酒肴を載せ、從つて游學す」とある。【六】南宮先生　南宮は禮部省、南宮先生といへば、禮部郎中某氏であらうが、その姓名は分からない。或は韓愈が自ら言ふと解する說もあるが、韓愈は禮部に出仕したことが無いから、これは誤である。【七】嬴顚劉蹶　秦漢の相繼いで亡びしこと、嬴は秦の

不知幾許猶流傳。　知らず、幾許か、猶ほ流傳。

爭持酒食來相饋。　爭うて、酒食を持して、來つて相饋る、

(一五)禮數不同(一六)樽俎異。　禮數同じからず、樽俎異なれり。

月明伴宿(一七)玉堂空。　月明伴うて宿すれば、玉堂空し、

骨冷魂淸無夢寐。　骨冷かに、魂淸くして、夢寐なし。

夜半金雞(一八)啁哳鳴。　夜半、金雞、啁哳として鳴く、

(一九)火輪飛出客心驚。　火輪飛び出でて、客心驚く。

人間有累不可住。　人間累あり、住むべからず、

依然離別難爲情。　依然、離別、情を爲し難し。

船開棹進一迴顧。　船は開き、棹は進んで、一たび迴顧、

萬里蒼蒼煙水暮。　萬里蒼蒼、煙水暮る。

世俗寧知僞與眞。　世俗、寧ろ知らむや僞と眞と、

至今傳者武陵人。　今に至つて傳ふるものは、武陵の人。

姓、劉は漢の姓。【八】地坼天分　魏晉の亂を指す。【九】紅霞　河圖に「昆侖山に五色水あり、赤水の氣上蒸して霞となる」とあり、蜀都賦に「舒丹氣而爲霞」となる。【一〇】物色　後漢書、嚴光傳に「物色を以て之を訪はしむ」とある、ここでは、じろじろと見合ふと云ふこと。【一一】大蛇中斷　漢書高帝紀に「夜、澤中を徑る、前に大蛇あり、道に當る。乃ち劍を拔いて之を斬る。蛇、分れて兩となり、道開く。後、人來つて蛇の所に至る、一老嫗を見る。曰く、吾が子は白帝の子なり、化して蛇と爲つて、道に當る、今、赤帝の子、これを斬る」とある。【一二】喪前王　秦の亡びたことを云ふ。【一三】羣馬南渡　晉書に「元帝卽位、建業の童謠に云ふ、五馬渡江、一馬化爲龍」とある。五馬は、瑯琊、西陽、汝南、南頓、彭城の五王をいひ、瑯琊王、實に帝位に登りしが故に、化して龍と爲るといつたのである。【一四】六百年　晉書に「始皇の時、望氣の者云ふ、五百年後、金陵に天子の氣あり」とある。按ずるに、元帝の建武より武帝の太元に至るまで、又すでに六十年、六百といふのは、成數を擧げたのである。【一五】禮數　禮儀度數。【一六】樽俎　飲食の器具。【一七】玉堂　楚辭に紫貝闕兮玉堂とあるし、吳都賦に玉堂對霤、李善註に「玉堂は仙人の居なり」とある。【一八】啁哳　楚辭に鵾雞啁哳而悲鳴とあつて、聲高に歌ふ貌。【一九】火輪　太陽。

【題意】　これは、桃源の圖に題した詩である。抑も桃源の事は、陶淵明の作つた記文にだけ見えて居るので、試に其文を擧げると「晉の太元中、武陵の人、魚を捕ふるを業とし、溪に緣つて行き、路の遠近を忘る。忽ち桃花の林に逢ふ。岸を夾むこと數百步、中に雜樹なく、芳草鮮美、落英繽紛。漁人甚だ之を異み、復た前行して、その林を窮めむと欲す。林盡きて、水源に一山を得たり。山に小口あり、髣髴として光あるが若し。便ち船を捨てて口より入る、はじめ、極めて狹く、わづかに人を通ず。復た行くこと數十步、豁然開朗、土地平曠、屋舍儼然、良田美池桑竹の屬あり。阡陌交通、雞犬相聞こえ、その中、往來種作、男女衣著、悉く外人の如く、黃髮垂髫、並に怡然として自ら樂む。漁人を見て、乃ち大に驚き、その從つて來るところを問ひ、具に之に答ふるや、便ち要して家に還り、酒を設け、雞を殺して食を作す。村中の人、この人あるを聞き、咸な來つて問訊す。自ら云ふ、先世、秦時の亂を避け、妻子邑人を率ゐ、この絕境に來つて、復た出でず、遂に外人に間隔すと。問ふ、今は是れ何の世ぞ。乃ち漢あるを知らず、魏晉を論ずるなし。この人、一一爲に具に聞くところを言へば、

皆歎惋す。餘人、各復た延いて其家に至り、皆酒食を出す。停まること數日、辭して去る。この中の人、語つて云ふ、外人の爲に道ふに足らざるなり、と。すでに出でて其船を得、便ち扶けて路に向ひ、處處に之を誌し、郡下に及び、太守に詣つて、說くこと、かくの如し。太守、乃ち人を遣して、さきに誌せしところを尋ぬるに、遂に迷うて復た路を得ず。南陽の劉子驥は、高尚の士なり、これを聞き、欣然として親ら往かむとせしが、未だ果さざるに、尋いで病んで終り、後、遂に津を問ふものなし」といふ唯だこれ丈の事に過ぎないので、ひよつとすると、老子の篇末に見え、莊子の胠篋に見えたる道家の理想を陶淵明が繼承し、やがて具體的に表出し、詩的想像を以て潤色したものかとも考へられるが、當時、實際かかる傳說が有つたのかも知れない。次に、世人は、この桃源を以て神仙の境となし、その人を以て、秦人が晉の世に至るまで猶ほ未だ死なずに居た樣に考へて居るらしいが、東坡の云へるが如く、この文中に「先世、秦の亂を避けて此に來る」といへば、斷じて、その子孫であるし、且つ雞を殺して食を作るなどいふことは、仙家には無いことと思はれるので、いはば、我が邦の五個莊、祖谷山などいふ平家の落武者の村里と略ぼ相似たものと考へられる。しかし、韓愈の斯詩なども、聊か世俗の謬を承けて居る樣である。なほ一言して置くが、後世にも、かかる話は、いくらもあるが、要するに、皆この桃源の記事から出たので、多くは、根據の無いことである。

【詩意】 世に神仙が有るとか無いとかいふが、そは渺茫として分からぬことであつて、桃源の傳說の如きも、まことに根據の無いことである。今、この中堂に挂れる圖は、數幅の生絹より成り、川の流が盤廻し、山勢の之に隨つて百轉する狀が寫し出してある。こは好事者の稱ある武陵の太守が、實景を寫したといふので、ちやんと封を爲し、宛名を書いて、禮部郎中某の處へ送つて寄越した。郎中は、これを得て大に喜び、やがて、筆下に波濤を捲くの勢ある文章を作り、その文の工なると、畫の妙なるとは、兩兩相得て、各、その極に至り、これに對すれば、この世ならぬ神仙の世界が、恍惚として眼前に見える樣である。抑も、桃源の人は、この絕境に來て、巖に橋を架し、谷を切り開いて、住宅を造り、屋舍牆垣、相連接して、千萬日の久しきに亙り、秦漢の滅びしをも聞かず、魏晉の亂、地拆け天裂くるが如きも、一向知らねば憂ひもせず、ただ處處に桃を植ゑ、その花の開くときは、川原一帶遠近に紅の霞を蒸し出したやうである。その初めて此に來りし時は、故鄕を思ひ出したであらうが、いつしか住み慣るれば、ここが家だと思ひ、ゆツくり落ち付いて、又立ち去らうともしなかつた。さて、漁人が舟に乘じて、偶然ここに至れば、どこから來たかといつて、じろじろと眺め合つた後に、ここに來た次第を尋ね、さまざまの事を問ひしに因つて、漁人は、秦から以後の事を話して聞かせ、漢の高祖が大蛇を斬つた祥瑞に因つて秦を亡ぼし、それから、兩漢の後に魏晉となり、五馬江を渡るといふ童謠に應じて、晉の元帝が新に江南に卽位して、東晉となつたといつた。桃源の人は、これを聞き終つて、やがて、話が濟むと、いづれも、今昔の感に打たれた樣であつたが、扨て云ふには、

はじめ、秦の亂を避けて、ここに來りしより、六百年にもなり、當時の事は、すべて眼に見て、詳しく知つては居るが、その中の幾分が人間に流傳して居るか、世の推移變遷も、まことに甚だしいものであるなどといひ、漁人を要して、その家に歸り、爭つて、酒食を持つて來て、御馳走をしたが、作法も今とは違つて居るし、飲食の器具も珍らしいものであつた。かくて、月明の夜、さつぱりした家に泊めて呉れたが、さすがに仙境の事であるから、物とはなしに、骨も冷かに、魂も淸く、心澄み渡つて、碌碌寢られもせず、うとうとして居る内に、夜半の頃、金雞が聲花やかに鳴き出で、太陽が高くさし上れば、客心驚くばかり。漁夫は、なほ人間に係累ある身の、とても久しく留まつて居ることも出來ぬ處から、やがて辭して立ち去つたが、さすがに別はつらく覺えた。そこで、舟を押し出し、棹を進めて、元と來し方に歸り、試に顧みて望めば、萬里蒼茫として、煙にまがふ水の色も暮れかかり、さしもの仙境、再び尋ねることが出來なかつた。かくの如き次第で、世俗の間に傳はるところの桃源の事は、眞僞の程も分からず、今に至るまで之を傳へるのは、矢張、武陵の人のみある處から、その地の太守は、この圖を作つて、わざわざ寄せて來たのであらう。

【餘論】 兪瑒は「公の七言古詩、すこしく對句を用ふ、この篇諸對、亦た甚だ奇偉」といひ、乾隆御批には「一起一結、善く地步を占む」とある。これより先、王維に桃源行といふ七古があつて、初唐の格を以て之を行り、屬對を多くして、巧妙に敍寫し、非常に名高い詩である。韓愈は、それを粉本とし、同一の筆法を以て寫し出し、詳略各異に、互に表裏を成す樣にして、この詩を作り、たとひ比較されても、決して、ひけを取らぬといふ抱負を見せつけるといふ考であつたことは、もとより言ふまでもない。そこで、念の爲に、王維の詩を次に擧げることにする。

漁舟逐レ水愛二山春一。兩岸桃花夾二去津一。坐看二紅樹一不レ知レ遠。行盡二靑溪一不レ見レ人。山口潛行始隈隩。山開曠望旋平陸。遙見二一處一攢二雲樹一。近入二千家一散二花竹一。樵客初傳漢姓名。居人未レ改秦衣服。居人共住武陵源。還從二物外一起二田園一。月明松下房櫳靜。日出雲中雞犬喧。驚聞俗客爭來集。競引還レ家問二都邑一。平明閭巷掃レ花開。薄暮漁樵乘レ水入。初因レ避レ地去二人間一。及レ至レ成レ仙遂不レ還。峽裏誰知有二人事一。世中遙望空雲山。不レ疑靈境難二聞見一。塵心未レ盡思二鄕縣一。出レ洞無レ論隔二山水一。辭レ家終擬長游衍。自謂經過舊不レ迷。安知峰壑今來變。當時只記入レ山深。靑溪幾曲到二雲林一。春來遍是桃花水。不レ辨二仙源一何處尋。

韓愈の作の起結照應して、均しく畫に係ることは之を除き、王維は、桃花源記の本文通りに、漁人が尋ね入つたことに筆を起したが、韓愈は、桃源の人の方に力を盡し、漁舟之子來二何所一の一句で、初めて題に入り、そして、兩者の問答せる一段は、極めて面白い。次に漁人留宿の事は、二詩ともに略ぼ同じである。その次に、王維は、相變らず漁人の事を述べ、歸後再び尋ねたが見付からなかつたといふので、かなり長く書き立てたが、韓愈は、極めて簡單に濟ませ、王維が當時只記入レ山深の四句を費し

て居る處を、萬里蒼蒼煙水暮といつて、唯だ一句で片付けて居る。すべて、かういふ風に、詳略出入、各異なるが故に、竝存を妨げないので、古題を詠ずるものには、毎毎、その巧妙手段が必要である。後には、王安石が王維と同じく桃源行を作つて居るが、即ち左の通り、

望夷宮中鹿爲馬。秦人半死長城下。避世不獨商山翁。亦有桃源種桃者。一來種桃不記春。采花食實枝爲薪。兒孫生長與世隔。知有父子無君臣。漁郎放舟迷遠近。花間忽見驚相間。世上空知古有秦。山中豈料今爲晉。聞道長安吹戰塵。東風回首亦沾巾。重華一去寧復得。天下紛紛經幾秦。

これは、又作法を異にし、中間に桃源漁郎の事、各一解宛で述べ、そして、前後には、史實を述べて、無限の感慨を寓し、王韓二家の外に立つて、拔戟亦た一隊を爲すの槪がある。

東方半明

東方半明大星沒。
獨有太白配殘月。
嗟爾殘月勿相疑。
同光共影須臾期。
殘月暉暉。
太白睒睒。
雞三號。更五點。

東方半ば明かなり

東方半ば明かにして大星沒し、獨り太白の殘月に配するあり。嗟、爾殘月、相疑ふ勿れ。光を同じうし、影を共にして須臾を期す。殘月暉暉、太白睒睒、雞三號、更五點。

【字解】【一】半明　蔣之翹は未明の方が善いといつたが、必ずしもさうでは無いと思はれる。【二】太白　長庚星で西方の星なるが故に、月に配すと云つたので、又太白は大臣を主とし、その餘な上公となすが故に、特に意を用ひて之を點出したのである。【三】睒睒　太玄經に明復睒、中天獨爛也とあつて、その光焔の殊に明かなるをいふ。【四】雞三號　史記に「雞三號、卒に明かなり」とあり、杜甫の句に「雞鳴度必三」とある。【五】更五點　通典に「一夜を五更に分つは、五夜更爲を以て名となすなり」といひ、顧之推は「五夜は甲乙丙丁戊を謂ふなり。點とは、下漏滴水を以て名となす、一更ごとに又分つて五點となすなり」とある。

【題義】韓醇は「この詩、煌煌東方星と興寄頗る同じ。蓋し順宗卽位、政を親らする能はずして、憲宗東宮に在るの時を指すなり」といひ、蔣之翹は之を承けて「然れども、煌煌東方星は、詞義尙ほ影響に屬す。而して、この詩、嗟爾殘月勿相疑の一句を觀れば、公、託意なきに非ざるに似たる者なるを知る。但し、舊註碎雜にして存すべからず」といつた。なほ某氏は、一一これを當時の史實に引きあてて「時に買耽・鄭珣瑜の二相、皆天下の重望、王叔文、事を用ふるや、相繼いで引いて去る。この詩、東方半明大星沒に喩ふる所以なり。韋執誼、叔文に汲引せらる、この詩、獨有太白配殘月に喩ふる所以なり。順宗、すでに機政を厭ひ、執誼・叔文、尙ほ私意を以て更る相猜忌す、この詩、嗟爾殘月勿相疑、同光共影須臾期ある所以なり。憲宗立つて、叔文竄せらるるに及びて、猶ほ東方明

かにして殘月太白滅するがごとし、この詩、殘月暉暉、太白睒睒、雞三號、更五點に喩ふる所以なり、意徹にして願、まことに詩人の旨を得たり」といつた。要するに、この詩は、順宗が位を禪られる少し前、王叔文と韋執誼とが確執を生じ、小人同士軋轢して居るのを見て作つたので、そんな眞似をして居ては、とても長持ちする筈もなく、やがて共倒れをする外はあるまいといふので、太白とか、殘月とかいふものに比して、構想したのである。

【詩意】今の世は、さながら東方の將に明かならむとする時で、天上に燦爛たる大星が大抵隱れて見えなくなつたといふ樣な按排、從前衆望ありし諸宰相は、みんな辭職して、廟堂には居ない。そして、曉の明星たる太白が殘月に配し、兩兩相對して、弱弱しい光を放つて居る。その太白と殘月とが、今しも、軋轢するといふが、そんな事をして居るべき場合ではない。しばらくの間、光を同じうし、影を共にし、互に志を合せたならば兎に角、さうしない限りは、どうして、長持ちが出來やうか。殘月は暉暉、太白は睒睒、互に負けぬ氣に成つて光つて居る。兎角する内に、雞が三聲高く鳴いて、五更の鐘が一たび響けば、忽ち夜が明け離れて、暉暉も、睒睒も、有つたものではなく、すべての物は、消滅して仕舞ふではないか。

【餘論】暉暉、睒睒の字は、巧に點出したので、その光り合つて居る有樣が、目に見える樣である。樊汝霖は「公の憶昨行に謂はゆる伾文未揃崖州熾、雖得赦宥常愁猜、近者三奸悉破碎、羽穴無底幽黃龍、義、この詩と同じ。惟だ此詩に東方半明といふのは、その詞を徹にする所以、かくの如し、蓋し風人の物に託するなり」といひ、朱竹垞は「枯淡の若しと雖も、然れども、含味却つて濃腴、氣格極めて練」といひ「只だ此の如く收め、更に意を點出せず、最も妙」といつて居る。

贈唐衢

唐衢に贈る

虎有爪兮牛有角。　虎には爪あり、牛には角あり。
虎可搏兮牛可觸。　虎は搏つべく、牛は觸るべし。
奈何君獨抱奇材。　奈何せむ、君、獨り奇材を抱き、
手把鋤犂餓空谷。　手に鋤犂を把つて空谷に餓うるを。
當今天子急賢良。　當今、天子、賢良に急、
(一)匭函朝出開明光。(二)　匭函、朝に出でて明光を開く。
胡不上書自薦達。　胡ぞ上書して自ら薦達し、
坐令四海如虞唐。(三)　坐して四海をして虞唐の如くならしめざる。

【字解】【一】匭函　舊唐書の武后紀に「垂拱二年、命じて匭を朝堂に置き、書を進め、事を言ふものあらば、之を投ずるを聽るす」とある。目安箱、投書箱。【二】明光　殿の名、三輔記に「未央宮漸臺の西に桂宮あり、中に明光殿あり」と見ゆ。【三】虞唐　即ち堯舜、堯は唐に居り、舜は虞に封ぜられしが故に云ふ。

【題義】唐衢は、韓門に遊んだ人で、左程詩文に達して居たことは聞かぬが、世に善哭を以て稱せられ、そして、舊唐書に於ては、韓愈の傳の後に附載してあつたが、新唐書では、削つて仕舞つた。舊唐書には「衢、進士に應せしが、久しうして第せず、能く歌詩を爲り、意、感發多く、人の文章を見て、傷嘆するところあらば、讀み訖りて、必ず哭し、涕泗已む能はず、人と言論する毎に、すでに別れ、聲を發して一號す。音辭哀切、聞くもの、泣下らざるなし、故に世に唐衢善哭と稱す。左拾遺白居易、これに詩を贈る、略に云ふ、賈誼哭二時事一、阮籍哭二路岐一、唐生今亦哭、異代同二其悲一とある。この詩は、韓愈が唐衢に贈つたので、その自ら薦達せむことを勸めたのである。

【詩意】虎には、銳い爪があつて、他の獸を搏つべく、牛には、丈夫な角があつて、その敵に觸れて、突き殺すことが出來る。これと同じく、人にして才あるものは、時の用に立つべきものである。然るに君は、如何なれば、奇才を抱いて、しかも、時に用ひられず、手に鋤鍬を把り、躬ら耕して、空谷の中に飢ゑて居るのであるか。今しも、天子は、賢良の士を求められるに急にして、朝堂には、匭函を設け、且つ明光殿を開いて、大に天下の士を召見せられる位であるから、君も上書して、自ら推薦し、やがて要職に登り、天子を輔佐して、堯舜の世の如き至治を成さしめたならば善いので、何も引込んで、快快として自ら韜晦するには及ばない。

【餘論】慰藉至らざるなく、且つ其奮起を望んだので、一應尤もな言ひ草であるが、詩としては、淺俗に近きを免れぬものである。

貞女峽

江盤峽(一)東春(二)湍豪。
雷風戰鬭魚龍逃。
懸流轟轟射二(三)水府一。
一瀉百里翻二雲濤一。
漂レ船擺(四)レ石萬瓦裂。
咫尺性命輕(五)二鴻毛一。

貞女峽

江は盤り、峽は束ねて、春湍豪なり。雷風戰鬭して、魚龍逃る。懸流轟轟として水府を射る。一瀉百里、雲濤を翻す。船を漂はし、石を擺いて、萬瓦裂く。咫尺性命、鴻毛よりも輕し。

【字解】【一】峽東　杜甫の詩に「峽東滄江起」とある。峽間が俄に狹くなつて、迫まつて居る。【二】春湍　春、水が增して、勢氾に凄まじくなれる早瀨。【三】水府　龍宮、海賦に、「爾其水府之內、極深之處」とある。【四】擺石　擺は推し開く。【五】輕鴻毛　漢書司馬遷傳に「或は鴻毛よりも輕し」とある。

【題義】この詩は、貞元十九年の冬、韓愈が陽山に左遷される途中の作である。王韶の始興記に「桂陽の貞女峽、傳へて曰く、秦の世、數女あり、螺を此に取り、風雨に遇ふや、一女忽ち化して石人となる、今形七尺、狀女子の如し」とある。

【詩意】江水は盤曲し、峽勢は愈よ蹙まつて狹く、折しも春で、水嵩が增して居るから、流の瀨は更

に早く、その勢は、風雷の空中に戰ふが如く、その響の凄まじきに驚いて、魚龍なども居たたまらずに、逃げ出すといふ位。向ふを見ると、數十丈の斷崖から、懸流が轟轟として直下し、水底の龍宮まで射透すかと疑はれ、一瀉百里、雲濤を翻すといふ樣な按排。そこを船で下るのであるから、大抵の舟は、顚覆して漂はされ、石でさへも、波の爲に推し開かれ、さながら、萬瓦の裂ける樣に、すべての物は粉碎されて仕舞ふ。ここに至れば、わが生命の輕きことは、さながら鴻毛の如く、まことに、危いことである。

【餘論】僅僅六句であるが、峽流の奇險は、眼前に見るが如く、人をして、覺えず戰慄せしめる。朱竹垞は「起、長吉に似たり」といつて、殊に其破題の筆致を激賞して居る。

贈侯喜

侯喜に贈る

吾黨侯生字叔迟。
吾が黨の侯生、字は叔迟。

呼我持竿釣溫水。(一)
我を呼び、竿を持して、溫水に釣る。

平明鞭馬出都門。
平明、馬に鞭つて、都門を出で、

盡日行行荆棘裏。
盡日行行荆棘の裏。

【字解】【一】溫水　即ち洛水、河南鞏縣北に在る。易の乾鑿度に「王者、盛德の應あれば、洛水先づ温かなり、故に溫洛と號す」とある。

溫水微茫絕又流。
溫水微茫、絕えて又流る。

深如車轍闊容輈。
深きは車轍の如く、闊きは輈を容る。

蝦蟇跳過雀兒浴。
蝦蟇跳り過ぎて、雀兒浴す。

此縱有魚何足求。
ここに縱ひ魚あるも、何ぞ求むるに足らむ。

我爲侯生不能已。
我、侯生の爲に已む能はず、

盤針擘粒投泥滓。
針を盤げ、粒を擘いて、泥滓に投ず。

晡時堅坐到黃昏。
晡時、堅坐して、黃昏に到る。

手倦目勞方一起。
手倦み、目勞して、方に一たび起つ。

暫動還休未可期。
暫く動いて還た休み、未だ期すべからず。

蝦行蛭渡似皆疑。
蝦は行き、蛭は渡るも、皆疑ふに似たり。

擧竿引線忽有得。
竿を擧げ、線を引いて、忽ち得るあり。

一寸纔分鱗與鬐。(二)
一寸纔に分かる、鱗と鬐と。

是日侯生與韓子。
この日、侯生と韓子と、

【二】鱗與鬐　鬐は魚の鰭。

良久歎息相看悲。　良に久しうして歎息し、相看て悲む。

我今行事盡如此。　我、今、行事盡く此の如し。

此事正好爲吾規。　この事、正に好し、吾が規と爲さむ。

半世遑遑就擧選。　半世遑遑、擧選に就く。

一名始得紅顏衰。　一名はじめて得て、紅顏衰ふ。

人間事勢豈不見。　人間の事勢、豈に見ざらむや。

徒自辛苦終何爲。　徒に自ら辛苦して終に何すれぞ。

便當提攜妻與子。　便ち當に妻と子とを提攜し、

南入箕潁無還時。　南、箕潁に入つて、還る時なかるべし。

叔记君今氣方銳。　叔记、君、今、氣方に銳。

我言至切君勿嗤。　我が言、至つて切、君嗤ふ勿れ。

君欲釣魚須遠去。　君、魚を釣らむと欲せば、須らく遠く去るべし。

大魚豈肯居沮洳。　大魚、豈に肯て沮洳に居らむや。

【三】箕潁　莊子に「許由、箕山に逃れ、耳を潁水の下に洗ふ」とあり、高士傳に「許由、字は武仲、堯舜、天下を以て由に讓らむと欲す、乃ち遁つて、中嶽、潁水の陽、箕山の下に耕す」とある。

【題義】侯喜は、韓門に在つて、あまり藝の出來なかつた人と見えて、その作も、殘つて居ない位。しかし、韓愈は、之を棄てずして、精精引き立てて遣つたものと見える。韓愈の洛陽に居た時、侯喜の催しで、一緒に洛北の溫水に釣に出かけたことがあつて、この詩は、その時の作である。そして、その歸途、惠林寺に立ち寄つて、山石の詩を作つたので、その折の題名に「韓愈・李景興・侯喜・尉遲汾、貞元十七年七月二十二日、魚于溫洛、宿此而歸」とあつて、それが長く殘つて居た爲に、後人に考據の材料を提供した。ところが、この日は、一向魚が釣れなかつたから、そこに趣向を設けて、戲に侯喜に對して、不平を言ふやな意味で作つたのである。

【詩意】吾が黨の侯生は、字は叔记といひ、その男の發起で、一日竿を擔いで、溫水に釣をしやうといふことに成つた。そこで、朝早く、馬に鞭つて都門を出たが、その路は、荊棘の間に通じて居る爲に、なかなか暇どり、ざつと一日かかつて仕舞つた。さて愈よ溫水に到著して見ると、兼ねて聞いて居たとは甚だ異に、唯だ儆茫として、碌碌水もなく、絶えては又流れるといふ有樣、その深さは、車の轍が土中へ滅入り込んだ位しかないし、その闊さは、車の心棒がやつと通るかと思ふ位。それは蝦蟇でも飛び越せるし、雀が來て水を浴びるに丁度善い。こんな處に、たとひ魚が居つたにしても、求むるに足るやうなものは居ないことに決まつて居る、しかし、侯生に誘はれて、折角ここに來た上は、釣が目的であるから、その儘、歸る譯にも行かず、やがて釣道具を取り出し、針を曲げ、飯粒を

劈いて、それを泥水の中に投げ込んだ。河に著いたのが、すでに七ツ下りであつて、それから、釣を垂れ、じつと其處に坐つて、黃昏までも居たけれども、一向魚が餌を食ふ樣子もなく、竿を持つ手もだるくなり、見詰めて居る目も疲れ、しやがみくたびれたから、はじめて、一たび身を起した。小さな蝦か蛭が絲に觸れても、魚の樣に思はれるが、一寸絲が動いたかと思ふと、又止まつて仕舞つて、一向釣れさうなあてもない、彼此する內に、すこしく手ごたへがする程動いたから、占めたといふので、竿を擧げて絲を引くと、果して一尾の魚が掛つて居た。さて、どんな魚かと見ると、わづか一寸位、よく見なければ鱗も鰭も分からぬ樣な小さな魚であつた。かくて、侯生と韓子とは、あまり釣れぬ處から、稍や久しうして嘆息し、相見て悲んだ。何となれば、我輩平生の行事は、丁度、今日の事と同じく、小さな事にのみ、齷齪して居るからで、今日、これだけ辛抱しても、その結果の一向詰まらぬは、平生の行事に對して、まことに善き規箴となる譯である。我輩は、半生の間、遑遑として試驗に憂き身を窶し、やつとの事で、一たび及第を得るに至れば、最早、年が寄つて仕舞つて、紅顏も、いつしか衰へた。人間の事勢は、大抵これで分かつて居るので、徒に自ら辛苦したとて、何の得るところもなく、丁度、今日の釣魚と同じである。されば、妻子を提攜して、南の方、箕山潁水の間に入つて、再び世間に出まいと思つて居る。しかし、叔冦の如きは、今しも年少氣銳であるから、決して、世の中を棄てるにも及ばぬが、我が言の痛切なるを聞いて、笑はずに居て吳れろ。元來、魚を釣らうとするには、こんな狹い川では、到底駄目なので、大きな魚は、決して、水溜りの樣な處には住んで居らぬから、少くとも、江海に臨んで釣を垂れる外はない。何は兎もあれ、世の中で仕事をするには、遠大の計畫を爲すことが、第一に必要である。

【餘論】蔣註に「蘇東坡の記に、儋耳、上元、杖を放つて笑ふ。過問ふ、何をか笑ふ、曰く、自ら笑ふなり、然れども、亦た韓退之、魚を釣らむとして、得るところなく、更に遠く去らむと欲するを笑ふ。知らず、海に走るもの、未だ必ずしも大魚を得ざるなりと。蓋し、公、この詩を作る時、年三十四、徐を去り、洛に居り、方に求レ官來二東洛一の語あり、而して、東坡は晚歲、儋耳にして、憂患の餘に發す、覽者、以て異となす無かれ」とある。この詩は、全篇が平易で、釣を垂れる一段などは、事こまかに敍述してあるが、品致未だ高からず、その言つて居ることも、瑣細に過ぎる。されば、顧嗣立は「淺事淺敍、只だ語太だ繁なるを嫌ふのみ」といつて居る。

古意

(一)太華峰頭玉井(二)蓮。　太華峰頭、玉井の蓮、

(三)開レ花十丈藕(四)如レ船。　花を開く十丈、藕、船の如し。

【字解】【一】太華　山海經に「華山、一名太華」とある。【二】玉井蓮　華山記に「山頂に池あり、千葉の蓮を生じ、これを服すれば羽化す」と

冷比二雪霜一甘比レ蜜。　冷は霜雪に比し、甘は蜜に比す、
一片入レ口沈痾（五）痊。　一片、口に入つて沈痾痊ゆ。
我欲レ求レ之不レ憚レ遠。　我、これを求めむと欲して、遠きを憚らず、
青壁無レ路難二夤緣一。　青壁路なく、夤緣し難し。
安得二（六）長梯一上摘レ實。　安んぞ長梯を得て、上つて實を摘み、
下種二（七）七澤一根株連。　下、七澤に種ゑて根株連るを。

ある。【三】開花十丈　瑯琊代醉篇に韓古叢録を引いて「はじめ、意へらく、退之、自ら豪傑の辭を爲すと。後に眞人關令尹喜傳を見るに、老子曰く、眞人は、遊ぶ時、各蓮花の上に坐し、花は輒ち徑十丈、返生香あり、水に逆つて三千里に聞こゆ、と。又北齋修文御覽に返生香の一門あり、專ら此事を敍す」とある。韓愈は、果して此に本づいたか、どうか分からぬが、參考の爲めに、兎に角、舉げて置く。【四】蘂　蘂の花。【五】沈痾　長びいた病氣、持病。【六】長梯　杜甫の詩に安得二萬丈梯一爲レ君歩二上顚一とある。【七】七澤　司馬相如の子虛賦に「楚に七澤あり、その小なるもの、名づけて雲夢といふ方九百里」とある。

【題義】朱子の説に「この詩、古意を以て篇に名づく、登山紀事の詩に非ざるなり、舊註、國史補華山に登る事、及び沈顏の登華旨略を援引す、聚訟紛紛、殊に謂はれなきに屬す、今悉く删り去る」といつた通り、何か寓意があるらしいが、今に成つては、本當の事が、よくは分からぬ。韓愈は、華山に登つたことがあつて、その時の作だらうといふ人もあるが、どうも、さうでも無いらしい。唯だ方世擧の編年本に據ると、憲宗の末年、神仙の道に惑溺して、藥草を求められたことなどがあつたから、それを諷したものだらうといふので、或は、さうかも知れぬ。が、憾むらくは、確證がない。

【詩意】華山の絕頂なる玉井といふ池には、千葉の蓮があつて、花を開けば、その大さ十丈に亙り、さながら、船と見まがふばかり。この花は、仙藥に成るので、冷たきことは霜雪の如く、甘きことは蜜の如く、唯だ一片を口に入れれば、平生の持病も、忽ち直る。我は之を求めむと欲し、遠路を憚らずして、態態出かけて見たが、何分にも、青壁千尋屹立し、到底、攀ぢ登ることが出來ない。いかで長梯を用意して、之を摘み來り、根株相連る樣に、楚の七澤の中に植ゑ込んで、遍ねく天下の人を救ひたいと思ふばかり、遺憾ながら、それも出來ない相談である。

【餘論】世間に云ふ神仙の道は、太華峰頭、玉井の蓮の如きもので、到底、求め得られるものではなく、長生不死も、虛談に過ぎぬ。もし、本當に神仙の道が得られるならば、天下の人を化して盡く長生不死にすれば、それで善いといふのが、この詩の諷諭の本旨らしいと見える。或は又、この詩を以て、世人が榮に趨り、位を貪り、懸厓を渉るが如き險を顧みず、やがて顚危踣蹶して、はじめて、後悔することを諷したものと爲す說もある。朱竹垞は「すべて、只だ諷事諷語を以て結構す」といひ、まことに的確な評語である。

八月十五夜贈張功曹

八月十五夜張功曹に贈る

纖雲四卷天無河。　纖雲、四に卷いて、天に河なし、
清風吹空月舒波。　清風、空を吹いて、月は波を舒ぶ。
沙平水息聲影絕。　沙は平かに、水は息んで、聲影絕ゆ、
一杯相屬君當歌。　一杯相屬す、君、當に歌ふべし。
君歌聲酸辭且苦。　君が歌、聲酸にして、辭且た苦なり、
不能聽終淚如雨。　聽き終る能はずして、淚、雨の如し。
洞庭連天九疑高。　洞庭、天に連つて、九疑高し、
蛟龍出沒猩鼯號。　蛟龍出沒、猩鼯號ぶ。
十生九死到官所。　十生九死、官所に到る、
幽居默默如藏逃。　幽居默默として、藏逃するが如し。
下牀畏蛇食畏藥。　牀を下れば蛇を畏れ、食には藥を畏る、
海氣濕蟄熏腥臊。　海氣濕蟄、熏して腥臊。
昨者州前搥大鼓。　昨は、州前、大鼓を搥ち、
嗣皇繼聖登夔皐。　嗣皇、聖を繼いで、夔皐を登ぐ。
赦書一日行萬里。　赦書、一日、萬里を行き、
罪從大辟皆除死。　罪、大辟に從ふも、皆死を除く。
遷者追廻流者還。　遷者は追廻し、流者は還る、
滌瑕蕩垢朝清班。　瑕を滌ぎ、垢を蕩して、朝に班を淸くす。
州家申名使家抑。　州家は名を申べ、使家は抑ふ、
坎軻秖得移荊蠻。　坎軻、秖だ荊蠻に移るを得たり。
判司卑官不堪說。　判司は卑官、說くに堪へず、
未免捶楚塵埃間。　未だ捶楚を免れず、塵埃の間。
同時輩流多上道。　同時の輩流、多く道に上る、
天路幽險難追攀。　天路幽險にして、追攀し難し。
君歌且休聽我歌。　君の歌、しばらく休めて、我が歌を聽け、

【字解】【一】天無河　銀河さへ見えない。【二】相屬　漢書灌夫傳に「夫、田蚡を迎へて竇嬰を過ぐ。酒を飲んで、酣なるに及びて、夫、起つて舞うて、蚡に屬す」とあつて、顏師古の註に「屬は付なり、猶ほ今の舞訖つて相勸むるがごときなり」とある、さしつける。【三】淚如雨　詩經に涕零如雨とあり、李白の詩に獨宿空房淚如雨とある。【四】洞庭、九疑　前に見ゆ。【五】猩鼯　爾雅翼に「猩は、人面豕身、言語を能くす。鼯は狀、小狐の如く、翼あり、大率服翼の如し」とある。猩は猩猩、鼯はむささび。【六】官所　謫所。註に「張署、公と同じく御史より、事を言ふを以て黜けられ、張は郴州臨武令となる」とある。【七】藏逃　かくれ逃げる。【八】畏藥　藥は毒藥。【九】嗣皇繼聖　貞元二十一年正月、順宗卽位せしを云ふ。【一〇】登夔皐　夔と皐陶、ともに堯舜の時の名臣、この二人にも比すべき賢良を登用する。【一一】赦書　同年二月甲子、天下に大赦せしことをいふ。【一二】大辟　死刑。【一三】追廻　卽ち量移。【一四】朝清班　朝廷に於ては班列を淸うする、卽ち姦邪を黜け忠良を進むること。【一五】州家　地方官。【一六】使家　湖南觀察使を指す。【一七】坎軻　不遇の意。【一八】判司　功曹參軍をいふ。【一九】未免捶楚　杜甫の送高書記詩に、脫身簿尉中、始與捶楚辭とあり、杜牧の詩に參軍與簿尉、塵土驚劻勷、一語不中治、鞭笞身滿瘡とある。蔣註に「唐制、參軍簿尉、過あれば、

我歌今與ㇾ君殊ㇾ科。　我が歌、今、君と科を殊にす。
一年明月今宵多。　一年、明月今宵多し。
人生由ㇾ命非ㇾ由ㇾ他。　人生命に由る、他に由るに非ず。
有ㇾ酒不ㇾ飮奈ㇾ明何。　酒あり、飮まずむば、明を奈何。

卽ち笞杖の刑を受く」とある。【三】天路　都に歸る路。

【題義】この詩は、貞元二十一年八月十五夜に當つて、張功曹に贈つたのである。張功曹、名は署。これから先、韓愈は、陽山に貶謫せられ、張署も同じ地方の郴州臨武に流されて、韓愈と同役であつた。ところが、憲宗卽位、天下の罪人を大赦するといふので、二人ともに赦免を蒙り、江陵に量移されることになり、そして、韓愈は命を郴州に俟つて居ることになり、そこで張署に遇つたものと見える。韓愈が江陵に居た時、祭㆓郴州李使君㆒文といふのを作つて、その中に、輟㆓行道於俄頃㆒、見㆓秋月之三殺㆒、逮㆓天書之下降㆒、猶低徊以宿留、とあるから、この時、郴州に居たことは、顯著なる事實である。張署の事は、韓愈の作れる墓志に「署は河間の人、進士に擧げられ、監察御史に拜せらる。幸臣に讒せられ、同輩韓愈・李方叔と、三人ともに南方に縣令となり、二年、恩に逢うて、ともに徙つて江陵に掾たり、半歲、邕管奏して判官となす」とある。兩人とも、全く同じ閱歷を持つて居る處が、一段の因緣だといふので、この詩は純ら構想を此に著けたのである。

【詩意】宵の內は、ちらちらと細い雲があつたが、やがて四方に卷き散らされて、跡方もなく、空は澄み切つて、天の河さへ見えぬ位。淸風瑟瑟として空を吹き、月は水面より登つて、その光は、波の上に舒びて居る。平沙渺渺として、水の動くのが見えず、さながら、息んで居るらしく、聲もなく、影もなく、あたりは、ひつそりとして居る。この時しも、君と我と相對坐し、杯を君にさして、心に思つて居ることを遠慮なく歌ひ出されよといつた。そこで、君は歌ひ出したが、その歌は、極めて酸楚、その言辭は極めて悽苦、我輩は、これを終まで聞くことが出來ずして、涙は雨と降るやうであつた。さて君の歌はといふと——さきに南方に貶謫された時、長長しい旅をしたが、洞庭の湖水は天に連り、九疑の山は高く聳え、水には、恐ろしい蛟龍が出沒し、山には、猩猩だの、むささびなどが悲しい聲を出して哀號して居る。普通の者ならば、十人の中、九人までは死ぬといふ困難を經て、やつと郴州の臨武に到著したが、もとより、僻地である處から、默默として逃げ隱れて居る樣な工合、人に顏をも合はさなかつた。その上、この邊は、南方瘴癘の區であるから、寢床の下には蛇の潛んで居ることがあり、食物の中には毒が入れてあるといふ樣なこともあつて、始終用心をせねばならぬ。おまけに、海氣は、濕うて、腥い樣な氣を蒸し出し、如何にも、堪へられない。昨日、州前に於て、太鼓を搥つ聲がしたが、聞けば、先帝が崩御になつて、太子は新に卽位せられ、そして、古しへの夔・皐陶に比すべき忠良の大臣輩は登用せられて、萬事革新といふことになり、やがて、天下に大赦し、

その赦書は、一日に萬里を馳せて、殘る隈なく觸れ廻り、死罪に該當するものまでが首を繋がれ、左遷されたものは善地に量移せられ、流されたものも召し還されるといふ次第。かくて、先帝の末世に於て、瑕と稱し垢と稱せられた樣な惡政は、悉く洗ひ去られ、そして奸邪の臣を除いて、朝廷の班列を盡く淸められたのは、まことに有り難いことである。そこで、我我どもも、御赦免に漏れぬ樣にといふので、折角地方官から名を書いて上申した處が、上役に睨まれたものと見え、觀察使の手許で差押へられ、本來ならば、都に召し還される處を、やつとの事で、やや善地と稱せられる荊蠻に量移されることになつた。但し、功曹參軍といへば、觀察使の一屬官で、もとより御話にも成らぬ樣な卑職であつて、たまに過失でもあると、上役に鞭で敲かれて、塵土の間に打ち据ゑられることもある。我輩と同じ罪名で遠流されたものは、大方召し還されて、旣に發足したが、我輩のみは然らず、天路幽險にして、攀ぢ難きを嘆息して居る始末、お互に詰まらぬことでは御座らぬか――かくの如く、張功曹は歌ひ出でた。如何にも御尤もではあるが、先づ暫く止められよ、今度は私が歌はうが、私の歌は、君のとは大分品種を殊にしたものである。今宵は八月十五日、一年中で一番好い月の夜ではないか、人間の事は、すべて運命の然らしむるところ、何も外に惡い者があつて、爲す譯でもない。それは、今さら仕方がないことと思ひ諦め、この皓皓たる明月に對し、折角酒があるのに、樂しく飮まないと、やがて、夜があけて仕舞ふ、サア、これから十分、痛飮を致さうではないか。

【餘論】この詩は、一種の奇格で、はじめに風景を敍し、それから、自分の述べやうとする意を悉く張功曹の言葉として寫し出し、最後に、天命なるが故に思ひ諦めよといふことを、自分の言葉にしてある。もとより、張功曹は、同じ閱歷の人で、互に同情がある處から、自分を餘處において、自分の思ふところを其人に言はせるといふ趣向と見え、全體に於て、用語も平易を旨とし、その風調も自然流暢である。朱竹垞は起首を評して「寫景の語淨」といひ、又「張を借つて又歌を借つて悲樂を分つ、すべて是れ、人を抑へ、己を揚ぐ」といつて居る。

謁二衡嶽廟一。遂宿二嶽寺一。題二門樓一。

衡嶽廟に謁し、遂に嶽寺に宿して、門樓に題す

(一)五嶽祭秩皆三公。　五嶽の祭秩、皆三公。
四方環鎭嵩(二)當レ中。　四方に環り鎭して、嵩は中に當る。
(三)火維地荒足二妖怪一。　火維、地荒れて、妖怪に足れり。
天假二神柄一專二其雄一。　天、神柄を假して、其雄を專にす。
噴レ雲泄レ霧藏二半腹一。　雲を噴き、霧を泄らして、半腹を藏す。
雖レ有二絶頂一誰能窮。　絶頂ありと雖も、誰か能く窮めむ。

【字解】【一】五嶽祭秩皆三公　禮記に「天子は天下の名山大川を祭り、五嶽は三公に視ぶ」とあり、書經に「柴して山川を望秩す」とあつて、その註に「その秩の如き、次第して之を祭る」とある。五嶽は、各順序があつて、第一に東嶽泰山、第二に西嶽華山、第三に北嶽恆山、第四に南嶽衡山、第五に中嶽嵩山といふ樣に、順

我來正逢秋雨節。
(四)
陰氣晦昧無清風。
潛心默禱若有應。
(五)
豈非正直能感通。
須臾靜掃衆峰出。
仰見突兀撐青空。
(六)
紫蓋連延接天柱。
石廩騰擲堆祝融。
森然魄動下馬拜。
松柏一逕趨靈宮。
(七)　(八)
粉牆丹柱動光彩。
(九)
鬼物圖畫塡青紅。
(一〇)　(一一)
升堦傴僂薦脯酒。

我、來つて、正に逢ふ秋雨の節。
陰氣晦昧にして清風なし。
心を潛めて、默禱、應あるが若し。
豈に正直の能く感通するに非ざらむや。
須臾にして靜に掃うて、衆峰出で、
仰ぎ見れば、突兀として青空を撐ふ。
紫蓋連延して天柱に接し、
石廩騰擲して、祝融を堆す。
森然魄動いて、馬を下つて拜す。
松柏一逕、靈宮に趨る。
粉牆丹柱、光彩を動かし、
鬼物、圖畫、青紅を塡す。
堦に升つて、傴僂、脯酒を薦む。

顚に祭つて行く。そして、五嶽は三公と同樣、卽ち天子の次に位するものとして待遇する。【二】嵩當中　嵩山は、他の四嶽の眞中に當つて居る。白虎通に「嵩山は、四方の中に居る、故に嵩といふ」とある。【三】火維　盛弘之の荊州記に「衡嶽、下、離宮に踞して、位を火鄕に接す」とあり、徐靈期の南嶽記に「衡山は朱陵の靈臺、太靈の寶洞、上、冥軫を承け、萬物を鈐鎋す、故に衡山と名づく。下、離宮に踞し、火帥を統攝す、故に南嶽と號す、赤帝、その巓に館し、祝融、その陽に宅す」とある。火維は、南方で赤道に近い處。【四】無淸風　蔡註に「淸風興つて羣陰伏す、淸風なければ雨意未だ已まざるなり」とある。【五】正直　詩經に「神之聽之。正直是與」とある。【六】紫蓋

欲以菲薄明其衷。
(一二)
廟令老人識神意。
(一三)　(一四)
睢盱偵伺能鞠躬。
(一五)
手持盃珓導我擲。
云此最吉餘難同。
竄逐蠻荒幸不死。
衣食纔足甘長終。
侯王將相望久絶。
神縱欲福難爲功。
夜投佛寺上高閣。
(一六)
星月掩映雲朣朧。
(一七)
猿鳴鐘動不知曙。
(一八)
杲杲寒日生於東。

菲薄を以て、其衷を明かにせむと欲す。
廟令の老人、神意を識り、
睢盱偵伺して、能く鞠躬。
手に盃珓を持し、我を導いて擲たしむ。
云ふ此れ最も吉、餘は同じうし難し。
蠻荒に竄逐せられて、幸に死せず、
衣食纔に足つて、長く終はらむことを甘んず。
侯王將相、望久しく絶ゆ。
神、縱ひ福せむと欲するも、功を爲し難し、
夜、佛寺に投じて、高閣に上る。
星月掩映して、雲朣朧たり。
猿は鳴き、鐘は動いて、曙を知らず、
杲杲たる寒日、東より生ず。

長沙記に「衡山七十二峰、最も大なるもの五、芙蓉、紫蓋、石廩、天柱、祝融を最高と爲す」とあり、杜甫の望嶽の詩にも、祝融五峰尊、峰峰次低昂、紫蓋獨不朝、爭長業相望とある。【七】粉牆　白壁。【八】丹柱　朱塗の柱。【九】塡青紅　青紅は丹青に同じ、繪の具で塗り埋めてある。【一〇】傴僂　身を屈めて拜伏する。【一一】脯酒　乾肉と酒。【一二】廟令　宮司。【一三】睢盱偵伺　恐る恐る伺ふ。【一四】鞠躬　身を屈めて丁寧に挨拶する。【一五】盃珓　唐韻に「珓は盃珓なり、玉を以て之を爲る」とある。程大昌の演繁露に「トを神に問ふ、器あり、盃珓と名づく。兩蚌殼を以て、空に投じて地に擲つ、その俯仰を觀て以て休咎を斷ず、後人、或は竹を用ひ、或は木を用ふ、

断つて蛤形の如くして、中分二となる、亦た盃珓と名づく。野廟の巫、未だ必ずしも力めて能く玉を用ひず、當に是れ蚌殼瑩白の者を擇んで、之を爲るべし、因つて玉を附して名と爲す。凡そ今の珠璣琲瑙の字、玉に從ふと雖も、その實は、蚌の屬なり」とある。すると、盃珓とは云ふものの、その實、貝殼で作り、それを投げ上げて地に落つるとき、表が出るか、裏が出るかに因つて吉凶をトするのである。【一六】朣朧 蔣註に「按ずるに、朣朧、朣の字、祇だ日に从ふあり、月に从ふものなし、朣朧は本と日の出づる貌。然れども前輩、月を詠ずる、多く之を用ふ、梁李紳の詩、朣朧入二林聲一。潘岳秋興賦、月朣朧而含レ光の類の如きなり、當に更に之を考ふべし」とある。【一七】猿鳴 謝靈運の溪行の詩に猿鳴誠知レ曙、谷幽光未レ顯とある。【一八】杲杲寒日 詩經に杲杲出日とあり、禮記に「大明、東より生ず」とある。

【題義】爾雅に「霍山を南嶽となし、一名は衡山」とあり、郭璞は「衡山は南嶽」といひ、唐書地理志に「衡山は、長沙湘南縣南に在り」といひ、元和郡縣志に「衡嶽廟は、衡山縣の西三十里に在り」と記してある。衡嶽廟は、衡山の麓に在るので、韓愈は陽山より江陵に量移されたとき、はじめ廟に謁し、夜、嶽寺に宿し、その門樓の上に、この詩を題したので、絶頂まで登つたのではない。それから、この詩を以て、潮州から袁州に移る時に作つたものだとする說もあるが、それは、無論、誤つて居るので、顧嗣立の集註に引ける王伯大の說には、詳しく之を論じて居る。曰く、公、兩たび南方に謫せらる。はじめは、陽山より北に還つて、衡を過ぐ、永貞元年に在り、八月、潭を過ぐ、適ま殘秋に當る、陪二杜侍御一、游二湘西寺一の詩に云ふ、是時秋向レ殘、と。是れなり。今云ふ、我來正逢秋雨節、と。故に知る、この詩は是れ陽山より還る時の作、後、潮州より還り、移つて袁州に刺たるは、元和十五年十月、蓋し未だ嘗て衡を過ぎず。袁州謝表に據るに云ふ、去年正月、貶せられて潮州刺史を授けられ、その年十月、例に準じて量移す云云、と。卽ち潮より徑に當に袁に來るべし、又未だ嘗て秋雨節の時に遇はざるなり。蘇東坡の海市を觀るの詩に、潮陽太守南遷歸、喜見石廩堆二祝融一と云ふは、これを徇言するのみ」とあつて、考據極めて確切である。

【詩意】五嶽は、中原に於ける名山であるから、その順序も定まつて居て、且つ三公の位を以て之を待遇する。その五嶽の中で、泰・華・衡・恆は、四方に環つて鎭を爲し、そして、嵩山は其中央に當つて居る。ここに、南方の赤道に近い地方は、一體荒漠たる處であつて、妖怪などが隨分居る處から、天は、衡嶽の神に權柄を假し、その威力を以て、これを鎭壓することに成つて居る。かくの如き名山であるから、或は雲を噴き、霧を泄らし、半腹以上は雲霧の中に隱れて居て、絶頂は、何處とも分からない位である。自分は、今しも、その山麓に差しかかつたが、秋の長雨の降り續く時で、陰氣晦昧として深く立ちこめ、それを吹き拂ふべき淸風もない。自分は、何時又來るか分からず、是非一度、山の全形を見たいと思ひ、心を潛めて默禱すると、さながら、神靈の感應があつたらしいので、もともと、神樣は正直であるから、わが心が自然に感通したのであらう。しばらくすると、雲霧は靜に掃ひ退けられ、多くの峰峰は、一齊に出で、突兀として靑空を撑へて居る有樣が、はつきりと見えて來た。眺めやれば、紫蓋峰は連延して天柱峰に接し、石廩峰は騰擲して躍るが如く、そして、祝融峰は堆くな

つて之に引き續いて居る。さても、神靈の威德は、素晴らしいものだといふので、森然として魄の動くをも覺えず、取り敢へず、馬を下つて再拜した。それから、松柏の左右に生ひ茂れる一徑を辿つて、衡嶽廟に往つて見ると、眞白の壁に丹塗の柱が相映じて、光彩自ら動いて見え、廟壁には、鬼物など、奇怪の者が青や赤の繪の具で、塗り塡められて居る。そこで、廟中に入り、階を登り、身を屈めて神前に額づき、乾肉と酒とを供へ、もとより菲薄な物ではあるが、今日感應を與へられた御禮の積りで、おのが誠心を表明せむとした。すると、宮司の老人は、平生神に事へて、自ら神の意志を善く知つて居るものであつて、我輩の參拜するを見、恐る恐る伺ひを立て、鞠躬如と身を屈めて我輩に向ひ、ここに御參拜になる御方は、神樣の前で將來の吉凶を占ふことが慣例に成つて居ますから、これを投げて御覽なさいといつて、盃珓を持つて來て呉れた。そこで、試に之を投げると、廟令は之を見て、貴君の前途は大吉であつて、これまで餘人の投げたのには、こんな善いのは頓と無かつたといつた。しかし、自分は、心の中で嘲笑し、廟令は、人を喜ばす爲に、あんな調子の善いことを言ふけれども、自分は、南方蠻荒の地に左遷せられ、今日まで死なずに居たのが、物怪の幸で、この上は、衣食が粗ぼ足りて、天年を終へれば、自分で滿足する。侯王將相に成りたいといふ希望は、もう久しく斷念して居たので、神樣は、福を與へて下さつても、何の效果もないと、かう思つた。やがて、嶽寺に投宿して高閣に上つた處が、夜になると、星と月とが見えて、互に掩映して居るが、雲氣朦朧として、空は曇つて居る。山奥の事であるから、猿が鳴き、そして、鐘を敲き出したが、ぼんやりして居たので、夜が明けたのかどうか、少しも分からなかつたが、その中に杲杲たる寒日が東の空からさし上つて、看る看る朝になつて仕舞つた。

【餘論】この詩は、四段より成り、起首、五嶽祭秩皆三公より雖レ有二絶頂一誰能窮に至るまでは、五嶽より始めて衡山の事を敍し、我來正逢秋雨節より欲下以二非薄一明中其衷上に至るまでは、衡山の麓を過ぎた時の實況を寫し、廟令老人識二神意一より神縱欲レ福難レ爲レ功に至るまでは、衡嶽廟に謁した時の事を敍して、その感興を述べ、夜投二佛寺一上二高閣一より以下、最後の四句は、門樓に宿した時の光景で、これを以て、題意を全うしたのである。なほ此篇は、一韻到底の古詩で、毎句に平仄法が儼然として存して居る。即ち押韻の句は、第五字必ず平、第四字必ず仄、そして、踏み落しの句は、その反對であつて、これは、普通の律句の平仄法（即ち二四不同二六對）を破る最も簡便にして最も規則立つた法式である。そこで、王漁洋が古詩平仄論を著した時には、開卷第一に之を掲げて、一韻到底の七古の模範としたのである。朱竹垞は須臾靜掃衆峰出の數句を評し「相傳ふ、南嶽、時として雲なきはなし、乃ち退之禱れば、即ち開霽、亦た大に異なり」といひ、又「この下、須らく、虛景の語を用ひて、更に點注すべし、更に活するに似たり、今却つて、四峰を用ひて一聯を排す、微に板實を覺ゆ」といひ、沈德潛は「横空盤硬語、妥帖力排奡、この詩、この語に當るに足れり」といつた。乾隆御批

には「東坡の謂はゆる能く衡山の雲を開くものは此に本づく」とあつて、これは、東坡の作れる潮州韓文公廟碑に「故に、公の精誠、能く衡山の雲を開けども、しかも、憲宗の惑を回す能はず」といふ一節あるを稱したのである。

岣嶁山

岣嶁山(一)尖神禹碑。
字青石赤形(二)摹奇。
(三)科斗拳レ身(四)薤倒披。
鸞飄鳳泊(五)拏二虎螭一。
事嚴跡祕鬼莫レ窺。
道人獨上偶見レ之。
我來咨嗟涕(六)漣洏。
千搜萬索何處有。
森森綠樹猿猱悲。

岣嶁山

岣嶁の山尖、神禹の碑、
字青く、石赤くして、形摹奇なり。
科斗、身を拳めて、薤、倒に披く。
鸞飄鳳泊、虎螭を拏む。
事嚴に、跡祕にして、鬼も窺ふなし。
道人獨り上つて、偶ま之を見る。
我、來つて、咨嗟して涕漣洏たり。
千搜萬索、何の處にか有る。
森森たる綠樹、猿猱悲む。

【字解】【一】山尖　山頂に同じ、【二】形摹　形畫に同じ。【三】科斗　支那最古の字體、王愔の文字志に「科斗は古篆なり、その頭麤、尾細なるを以て、水蟲の科斗に類す」とある。【四】薤倒披　薤はひらぎ、その葉が倒に懸けられたやうに見える字體。【五】拏　攫み合ふ。【六】漣洏　王粲の詩に、涕涙漣洏とあつて、涙の流れる貌。

【通義】岣嶁山は、衡山の中の一峰で、山海經の註には「衡山、一名は岣嶁山」とあるが、それは宜しくないので、蔣註などに「今按ずるに、岣嶁は、實に衡山南麓別峰の名、前詩と同時に作る。東坡の中隱堂の詩に、岣嶁何須レ到、韓公浪自悲とあるは此を指す」といつた方が確かである。そして、岣嶁山には、禹の碑があるといふので、盛洪之の荊州記に「南嶽は、周回數百里、むかし禹、登つて、之を祭る。因つて、玄夷使者を夢み、遂に金簡玉字の書を獲たり」といひ、徐靈期の南嶽記に「夏禹、水を導き、瀆を通じ、石に刻して、名山の高きに書す。皆科斗の文字、岣嶁碑は、むかし樵者かつて之を見る。自後見るものあるなし」といひ、輿地紀勝に「碑は夔門に在り、宋の嘉定の初、蜀士、樵夫の引に因つて、其處に至り、紙を以て之を摹す。凡そ七十二字、皆曉るべからず、而して、摹本を以て之を觀中に刻す。後、倶に亡ぶ」とある。すると、碑が有るといふのは、甚だ怪しいので、この詩に據れば、韓退之も夙に之を聞いて居たから、山に登つて、態態詮索したが、どうしても知れなかつたといふのである。それから、朱子の說にも「岣嶁は、衡山南麓別峰の名、今、衡山、實に禹の碑なし、この詩、記するところ、蓋し當時傳聞の誤、故に卒章自ら疑詞を爲し、以て微意を見はす。劉禹錫、呂衡州溫に寄せて亦た云ふ、嘗聞祝融峰、上有二神禹銘一古石琅玕姿、祕文螭虎形と。蓋し、亦た傳聞に得たるなり、倒薤書は、歐公集古錄唐玄度十體書に見ゆ」とあつて、最初から、神禹の碑など無いといふ方が、どうやら正確である。然るに、後世は岣嶁山碑の拓本などがあつて、韓退之も

朱子も捜し得なかつたもので、愈よ珍らしいと言ひ觸らして居るが、そんな物は、もとより信用することが出來ない。由來、支那人は、碑などを巧に僞造して、天下後世、これに惑はされて居るのを、竊に嘲笑して喜んで居ることが毎毎あるので、これもその一つに相違ない。

【詩意】岣嶁山の絕頂の尖つて居る處に、神禹の碑が立つて居るといひ、その碑は、古色蒼然たるもので、字は靑く、石は赤く、碑の形も極めて珍らしく、その字體は、もとより古篆であつて、科斗が身を曲げたやうであつたり、ひひらぎの葉が倒に懸つて居るやうであつたりして、そんな字が碑面に一ぱい鐫り付けてあるから、鸞鳳の飄泊するが如く、龍虎が攫み合ふが如くであるといふことである。但し、神禹が碑を建てたといふことは、極めて神聖で、その跡、祕密に屬し、鬼神でさへも容易に窺ひ知ることが出來ぬといふのに、道人などが、時たま、山に登つて、偶然これを見たといふのは、甚だ怪しい次第である。自分などは、もとより、凡骨の者で、そこに往ける箸もない。その腁甲萋なさに涕淚漣漣として流れる。されば、如何に捜したとても、その碑は、到底見つかる譯ではなく、森森たる綠樹の閒に、猿が悲しげに鳴くのみである。

【餘論】碑の存在を表面から否定せず、有るには有るさうだが、自分には行かれぬから殘念だといふ處に、無限の餘情がある。蔣本には「結語淒淸、耋の如し」とある。

永貞行

君不見太皇(一)諒陰未出令。
(二)小人乘時偸國柄。
(三)北軍百萬虎(四)與貔。
天子自將非他師。
一朝奪(五)印付私黨。
懍懍朝士何能爲。
(六)狐鳴梟噪爭署(七)置。
(八)賜睒跳(九)踉相嫵媚。
夜作詔書朝拜官。
(一〇)超資越(一一)序曾無難。
公然白日受賄賂。

永貞行

君見ずや、太皇亮陰、未だ令を出さず、

小人時に乘じて、國柄を偸む。

北軍百萬、虎と貔と、

天子自ら將として他の師に非ず。

一朝印を奪うて、私黨に付す、

懍懍たる朝士、何ぞ能く爲さむ。

狐鳴き、梟噪いで、爭うて署置す、

賜睒跳踉して、相嫵媚す。

夜、詔書を作つて、朝に官を拜し、

資を超え、序を越えて、曾て難なし。

公然、白日、賄賂を受け、

【字解】【一】太皇亮陰　太皇は順宗を謂ふ。諒陰とは天子の喪に居られること。諒は信、陰は默、信に默して言はずといふ輯。諒、一に亮に作る、輯同じ。書の說命に王宅憂、亮陰三祀とある。【二】小人乘時　王伾・王叔文の二人を指す。唐書に「王叔文は、棋を以て東宮に待詔す。王伾は始め書を以て待詔し、太子の宮に入つて書に侍す。順宗立つて、欬を瘖く能はず、深居帷を施して坐し、牛昭容、宦人李忠言を以て側に侍せしめ、羣臣事を奏すれば、帷中より其奏を可す。叔文は伾に因り、伾は忠言に因り、忠言は昭容に因り、更る相倚仗す。伾は傳受を主とし、叔文は裁可を主とし、乃ち之を中書に授く。叔文、每に言ふ、錢穀は國の大本、その柄を操れば、因つて以て士

(一二)火齊磊落堆金盤。　火齊磊落、金盤に堆す。
(一三)元臣故老不敢語。　元臣故老、敢て語らず、
畫臥涕泣何汍瀾。　晝臥して涕泣、何ぞ汍瀾たる。
(一四)董賢三公誰復惜。　董賢の三公、誰か復た惜まむ、
(一五)侯景九(一六)錫行可歎。　侯景の九錫、行く〻歎ずべし。
國家功高德且厚。　國家功高くして、德且た厚し、
天位未許庸夫干。　天位、未だ許さず、庸夫の干すを。
(一七)嗣皇卓犖信英主。　嗣皇卓犖、信に英主、
文如太宗武高祖。　文は太宗の如く、武は高祖。
(一八)膺圖受禪登(一九)明堂。　圖に膺り、禪を受けて、明堂に登る。
(二〇)共流幽州鯀死羽。　共は幽州に流され、鯀は羽に死す。
(二一)四門肅穆賢(二二)俊登。　四門肅穆として賢俊登る。
(二三)數君匪親豈其朋。　數君親に匪ず、豈に其れ朋ならむや。

な市ふべしと。乃ち白して、杜佑を用ひて度支鹽鐵使を領せしめ、已は之に副とし、實は其權を專にす」とある。【三】北軍　唐代天子の親兵は、禁軍といつて、南北兩衙に分〔れ〕、中にも北衙に屬するものは、天子の親兵として、殊に重んぜられて居た。【四】虎與貔　書の牧誓に「如虎如貔」とある。【五】奪印付私黨　舊唐書王叔文傳に「叔文、翰署に在り、その黨與を引いて竊に謀り、內官の兵柄を奪はむことを謀り、故將范希朝を以て京西北諸鎭を統べしめ、行營兵馬使韓泰、これに副たり」とある。【六】狐鳴梟噪　楚辭に「鴟梟羣而制之」とある。【七】署置　署任、人を見立てて官を授けること。【八】睗睒　說文に「睒は暫視なり、睗は疾視なり」とあり、目を閃かして尋れ

郎官清要爲世稱。　郎官清要、世に稱せらる。
(二四)荒郡迫野嗟可矜。　荒郡迫野、嗟、矜むべし。
湖波連天日相騰。　湖波、天に連つて日相騰る。
蠻俗生(二五)梗瘴癘烝。　蠻俗生梗、瘴癘烝す。
江氣嶺(二六)祲昏若凝。　江氣嶺祲、昏くして凝るが若し。
(二七)一蛇兩頭見未曾。　一蛇兩頭、見て未だ曾てせず。
怪鳥鳴喚令人憎。　怪鳥鳴喚、人をして憎ましむ。
(二八)蠱蟲羣飛夜撲燈。　蠱蟲羣飛して、夜、燈を撲つ。
(二九)雄虺毒螫墮(三〇)股肱。　雄虺毒螫、股肱を墮す。
食中置藥(三一)肝心崩。　食中に藥を置いて、肝心崩る。
左右使令詐難(三二)憑。　左右、使令、詐つて憑り難し。
愼勿浪信常兢兢。　愼んで浪りに信ずる勿れ、常に兢兢。
吾嘗同僚情可勝。　吾かつて同僚、情勝ふべけむや。

羅る。【九】跳踉　身を躍らす。【一〇】超資　資格を超える。【一一】緒序　順序を踰える。【一二】火齊　西都賦に「翡翠火齊、流耀含英」とあり、杜甫の詩に「火齊堆金盤」とあつて、普通に珠玉といつて居るが、太平寰宇記に「天竺に火齊あり、雲母の如くして色紫、これを裂けば、薄きこと蟬翼の如く、これを積めば、紗縠の重」とあるを見れば、珠玉では無いらしく、裝飾に用ふる雲母樣の鑛物である。王叔文の一黨が賄賂を得たことは、舊唐書に「伾、叔文と及び諸朋黨の門、車馬填湊し、しかも、伾の門、尤も盛にして、珍玩賂遺、歲時絕えず。室中に大櫃を爲り、一竅を開き、以て金寶を藏し、その妻、或は上に寢臥す」とある。【一三】元臣故老不敢語　元臣は元老、唐書鄭

具書目見非妄徵。　具に目に見ることを書す、「妄に徵する」に非ず。

嗟爾既往宜爲懲。　嗟爾既往宜しく懲を爲すべし。

珣瑜傳に「王叔文、一日中書に至つて、韋執誼を見る。直吏白す、宰相の會食に方つては、百官見るものなしと。叔文怒つて吏を叱す。吏、走つて入つて白す。執誼、起つて閤に就いて、叔文と語る。珣瑜、杜佑・高郢と箸を輟めて以て待つ。これに頃くして、吏白す、二公同じく飯すと。珣瑜、喟して曰く、吾、復た此に居るべけむや、と。左右に命じて馬を取らしめて歸り、家に臥して出でず」とある。【一四】 董賢　漢書佞幸傳に「哀帝の元壽元年、帝、董賢を重んじ、賢を封じて高安侯となし、その位を極めむと欲し、遂に賢を以て大司馬衞將軍となす、この時、賢年二十二にして三公となる」とある。【一五】 侯景　南史の侯景傳に「景、蕭棟の詔を矯めて、自ら九錫を加ふ」とある。【一六】 九錫　韓詩外傳に「一に車馬、二に衣服、三に虎賁、四に樂器、五に納陛、六に朱戶、七に弓矢、八に鈇鉞、九に秬鬯、これを九錫といふなり」とあつて、東漢以後、九錫を賜はることが、受禪の先ぶれに成つて居た。【一七】 嗣皇　憲宗を謂ふ。【一八】 膺圖　圖籙にあたる。【一九】 登明堂　諸侯を會すること。【二〇】 共流幽州鯀死羽　書の堯典に「共工を幽州に流し、鯀を羽山に殛す」とあつて、共・鯀は王伾・王叔文の二人を指す。前に見えた江陵途中寄三學士の詩に「首罪誅二共」とあるのと同じ。【二一】 四門肅穆　書經に「四門に賓し、四門穆穆」とある。【二二】 賢俊　杜黄裳・鄭餘慶等を用ひて相となせしことをいふ。【二三】 數君　劉禹錫・柳宗元等を指す。【二四】 荒郡迫野　舊唐書に「九月、韓泰を撫州刺史に、司封郎中韓曄を池州刺史に、禮部員外郎柳宗元を邵州刺史に、屯田員外郎劉禹錫を連州刺史に貶す。王叔文に交るに坐するなり」とある。それから、これ等の諸人は、まだ其地に到着せぬ内に、更に僻州の司馬に貶せられたので、禹錫は、荊南に至りし後、武陵の司馬に改められた。【二五】 生獰　荒つぽくして命令を梗塞すること。【二六】 嶺祲　祲は暑熱の氣。【二七】 一蛇兩頭　賈誼の新書に「孫叔敖、嬰兒たりし時、出でて遊び、兩頭の蛇を見て之を埋む」とあり、同じ事が列女傳や新序等に見え、兩頭の蛇を見るものは死ぬといふ諺さへある。【二九】 雄虺　毒蛇の類。【三〇】 墮股肱　手足をも墮す。【三一】 肝心崩　膽玉が潰れる。【三二】 難憑　信頼することが出來ない。

【題意】 舊唐書順宗紀に「貞元二十二年正月癸巳、德宗崩ず、丙申卽位。風病、政を聽く能はず。王伾を以て右散騎常侍となし、王叔文を戶部侍郞度支鹽鐵轉運使となし、事、巨細となく、皆二人に決す。物論喧雜たり、四月、皇太子を册す。八月、册して皇帝となし、貞元二十一年を改めて永貞元年となし、王伾を貶して開州司馬となし、王叔文を渝州司馬となす。元和元年正月、太上皇の尊號を上る」とあつて、順宗在位八個月の間に於ける表面の史實は、單に此だけである。韓愈の此詩は、卽ち裏面の事實を敍したので、王伾・王叔文が宰相韋執誼と結託して、非常に惡い事を行つた有樣を寫した處は、まことに面白いのみならず、亦た實に正史の缺を補ふことが出來る。但し、劉禹錫・柳宗元等は、その黨與であつた爲に、いづれも、遠地に貶謫されて仕舞つた。この二人は、韓愈が曩に陽山令に左遷される時、どうやら中傷を試みたらしいといふ疑も無いではないが、韓愈は、從前の友誼の上から、そんな事は全然忘れて仕舞ひ、この詩の後半に於ては、專ら二人の不運を傷んで、同情を寄せて居る。蔣註に「この詩、郞官、荒郡と言ふは、意ふに劉禹錫が叔文の黨に坐して連州に貶せらるるを指す。公、方に陽山より江陵に量移し、而して、夢得、邂逅して之に及ぶ、故に作る」とある。

【詩意】 順宗皇帝は、折角、御卽位に成つたけれども、まだ先帝德宗の喪に居られる諒闇中でもあり、色色と御遠慮がある處から、まだ政令を發せられなかつた。然るに、小人どもは、奇貨居るべしと爲し、公然、國家の權柄を偸み、天子の詔を矯めて、非常に暴逆なる振舞をした。中でも、一

番怪しからぬのは、北軍は御親兵で、貔虎の精鋭百萬を算すべく、天子が御自身に大元帥と御成りなされ、決して、他の者に其兵權を委ねられることの出來ない制度であるにも拘はらず、王叔文・韋執誼の輩は、第一に兵權を自分達の手に收めなければ、おもふ存分の事が出來ぬといふので、北軍の大將たるべき印を奪ひ、詔を矯めて、黨中の者に附與した。そこで、在廷の朝士は、懍懍として、皆心に恐れ、見す見す惡い事とは知りながら、その命に屈從するやうになり、何人も、これに對して反抗することが出來なかつた。彼等の黨派は、もう大丈夫だといふので、狐の如く鳴き、梟の如く噪ぎ、人選で任官させるといふ段取に成ると、その黨中の者どもは、互に獵官運動を爲し、目を閃めかし、體を躍らし、頻りに媚媚を呈し、どうか上官の氣に入つて、善い役に有り付かうといふので、大騷ぎをやらかした揚句に、王叔文や韋執誼などは、夜中に、勝手に詔書を作つて、翌朝、それぞれ任命したが、その官の授け方は、如何にも亂暴極まるもので、資格にもかまはず、順序をば飛び越して、少しも憚ることなく、おまけに、白晝公然として、賄賂を受け、火齊の如き珍らしい鑛物をさへ、磊落として金盤に堆く盛り上げて、持ち込んで來るものがあつた。そこで、元老とか元勳とか云はれる人人は、權勢の遠く相及ばざる處から、彼等の爲すが儘にして、敢て語らず、鄭珣瑜の如きは、もう世が末になつた、唐の社稷も滅亡が近いといつて啼泣し、涙に咽びつつ、その家に歸り、晝寢をして、再び出ないといふ始末、しかも、決然起つて之を爭ふものは無かつた。王叔文の一黨の羽ぶりの善いことは、かの董賢が三公になり、侯景が九錫を賜はつたと同じく、誰も彼奴に此大官は勿體ないといつて、非難するものもないが、行く行くは、慨歎すべき有樣であつた。さはいへ、從來、唐室は國家の治に貢獻した功績が高く、前代の德澤は厚くして、遍く民心に浸み渡つて居るから、たとひ衰へたとはいへ、詰らぬものが天位を覬覦することは出來ない筈である。果然、順宗は位を遜られて、皇太子が即位されたので、それが即ち憲宗、その憲宗は、卓落として、天晴の英主におはし、文は開國の君たる太宗の如く、武は隋末の亂を平げられた高祖の如く、やがて、圖籙に膺り、禪を受けて、帝位に上られ、仍つて、明堂を開いて、諸侯を朝し、同時に、舜が堯に繼いで立つと、共工を幽州に流し、鯀を羽山に殛したと同じく、小人どもの罪を糺し、王叔文の一黨を盡く斥け、到る處の役所は、俄に肅穆となり、その職に稱ふところの賢俊の士が、次第に登庸され、局面の全く一變したのは、國家の爲に慶すべきことである。ここに、劉禹錫・柳宗元等、數君の如きは、王叔文等と格別の緣故もなく、まさか其朋黨ではあるまいと思はれ、いづれも、員外郎といふ清要の職に居り、世間からも評判されて居た處が、矢張、その連累を受けて、荒郡迫野とも稱すべき遠方に左遷されたのは、まことに、驚くべきことで、我輩は、平素交誼ある處から、一個人の私情としては、實に氣の毒千萬なことと思ふ。その中、劉禹錫は連州に往くさうだが、これは、我輩が今まで居た陽山に近い處で、非常に氣候が惡い。そこへ行く途すがら、洞庭湖の水は、天に連つて、波が高く騰り、うツかりすると、舟が顚覆する。

それから、蠻地の風俗は、何となく荒ッぽく、人づきが惡く、その上、瘴癘の氣の蒸すところで、江嶺の氛祲は、昏く立ちこめて、凝るが如く、今まで見たこともない樣な兩頭の蛇も居るし、怪鳥は惡聲を發して、さも憎さげであるし、蠱蟲は、夜、燈火をつけると、羣飛して之を撲ち、又恐ろしい蛇があつて、それに螫されると、たとひ全治しても、手足を切り落さねばならぬ。それから、人氣が惡くて、食中に毒を入れて人を殺すことがあるので、聞いてさへ膽が潰れる位、左右に召し使つて居る者どもは、詐欺を專らにして居るから、すこしも信賴することが出來ず、常に兢兢として、萬事に氣をつけねばならない。我輩は、むかし、同僚であつたから、劉禹錫が其地に赴くことを聞いて、同情に勝へられぬ。そこで、前以て其風土の實況を述べたが、いづれも、自分が最近目睹したことで、妄りに證據のないことを言つて脅す譯ではない。それにつけても、諸君は、何故、そんな處へ行かねばならぬやうに成つたかといふことを篤と考へ、既往の事に懲り、今後、その身を愼んだならば、將來の發展上、必ず見るべきものがあらう。

【餘論】この詩に特異とするところは、その押韻の法であつて、最初は二句で一轉し、北軍百萬虎與レ貔は四句一韻、狐鳴梟噪爭署置は二句一韻、夜作二詔書一朝拜レ官は十句一韻、嗣皇卓犖信英主は四句一韻、四門肅穆賢俊登より以下は十七句一韻、しかも毎句押韻で、大に調子が違つて居る。かうなると、古詩の換韻などは、もとより、一定の法則なく、その人の心次第で、どうでも遣られるが、但だ意轉すると共に、韻が換はるといふことだけは、如何なる場合にも、動かない樣で、この一點を遺却しなければ、それで善いのである。蔡寬夫詩話に「子厚・禹錫、退之に於て最も厚善、然れども、退之の陽山に貶せらるる、疑なき能はず、赴二江陵一途中寄二三學士一に云ふ、同官盡才俊、偏善柳與レ劉、或慮語言泄、傳レ之落二寃讎一、二子不レ宜レ爾、將レ疑斷還不、と。その永貞行を爲つて、憤疾するに及び、數君匪レ親豈其朋と云ふに至り、又、吾嘗同僚情可レ勝と曰ふ、亦たその坦夷義を尙び、朋友を待つに始終あるを見るなり」といひ、困學紀聞には「少陵、房次律に善し、而して、悲二陳陶一の一詩、これが爲に隱さず。昌黎、柳子厚に善し、而して、永貞行の一詩、これが爲に諱まず、公議の掩ふべからざるや、かくの如し」といつた。顧嗣立は「この詩、前半、小人放逐の快なるを言ひ、後半、數君貶謫の矜むべきを言ふ、蓋し、劉柳諸公の爲にするなり。舊註、專ら夢得を指す、未だ必ずしも然らざるに似たり。然れども、夢得、連州に貶せらる。而して、公、かつて陽山に令たり、具書二目見一の句を以て證と爲す、義に於て亦た通ず、姑らく其說を存し以て考を俟つ」といつた。この詩は、劉禹錫に遇つた時に作つたといふから、無論、禹錫を主としたのであるが、これと同一の運命に遭へる柳宗元に旁及したものと見ても差支はない。それから、朱竹垞は、湖波連レ天日相騰以下を評して「瘴鄕を描寫するの語工」といつた。何義門は「叔文、中人の兵柄を奪ひ、これを天子に還さむと欲す、この事、未だ其人に因つて厚く之を非とすべからず。下文、九錫天位等の語、直に之を坐するに反を以てせむと欲す。公、ここに

於てか、大人長者の度を失ふ」といつたのは、一應尤もで、元來、二王の志は、廓清に在つたらしいが、唯だ其位地が卑い爲に、陰謀に類似したことを行ひ、蹤跡、詭祕に渉つて居る處から、その當時は勿論、後世の非難を受けたので、乾隆帝も、通鑑輯覽に於て、此事に遣及して居る。又義門はこの詩の結末を評して「具書目見、亦た君來洛喜歸洛の意あり、長者の言に非ざるなり。末句言ふ、將來、朝士、咸な宜しく數子既往の事を以て噪進を懲らすべきなり」といつたが、これは、朝士に向つて言ふのではなく、矢張、直に劉禹錫乃至柳宗元等、當事者に向つて言つたものとせねば、この詩を作つた主意が貫徹せぬことと思ふ。最後に、乾隆御批には「前幅天昏地晴、中間日出て氷消ゆ、閲して後幅に至れば、又淒風苦雨の如く、文、情を生じ、變幻かくの如し」といひ、極めて妥當である。

洞庭湖阻風贈張十一署

洞庭湖に風に阻まれ、張十一署に贈る

十月陰氣盛。北風(一)無時休。　十月陰氣盛なり、北風時として休むなし。
蒼茫洞庭岸。與子維雙舟。　蒼茫たり、洞庭の岸、子と雙舟を維ぐ。
霧雨晦爭泄。波濤怒相投。　霧雨晦くして、爭ひ泄れ、波濤怒つて相投ず。
犬雞斷(二)四聽。糧絕誰與謀。　犬雞四に聽くを斷ち、糧絕えて誰と與にか謀らむ。
相去不容步。險如礙山丘。　相去ること、步を容れず、險は山丘に礙へらるるが如し。
清談可以飽。夢想接無由。　清談、以て飽くべし、夢想接するに由なし。
男女喧左右。饑啼但啾啾。　男女、左右に喧しく、饑啼但だ啾啾たり。
非懷北歸興。何用勝羇愁。　北歸の興を懷くに非ざれば、何を用てか、羇愁に勝へむ。
雲外有白日。寒光自悠悠。　雲外に白日あり、寒光自ら悠悠。
能令暫開霽。過是吾無求。　能く暫く開霽せしめよ、これを過ぎては、吾求むるなし。

【字解】【一】北風　文選の古詩に孟冬寒氣至、北風何慘慄とあり、又杜甫の詩にも烈風無時休とある。【二】斷四聽　どの方へ向いても、さつぱり聞こえぬといふこと。

【題義】洞庭湖は、前にも見えて居たが、郭璞の、山海經註に「長沙巴陵縣西に洞庭陂あり、潛伏江に通ず」といひ、水經註には「湖水廣圓五百餘里、日月、その中に出沒するが若し」とある。それから、王伯大は「永貞元年、陽山より徙つて江陵に掾たり。十月、洞庭湖を過ぎて作る。或は云ふ、陽山に赴く時と。非なり。公の江陵途中の詩、はじめて陽山に赴くを敍して云ふ、春風洞庭浪、と。而して此詩の首に云ふ、十月陰氣盛、と。その非なるを知るべし」といつて居る。すると、この詩は、洞庭湖で風に阻まれて、滯泊して居る時に、張十一署に贈つたのである。十一は、例の排行。張署は前

にも見えて居た。この時、韓愈は、張署と途中で落ち合つて、やがて江陵に同行したが、舟を異にして居たのは、無論、各〻その家族を引き具して居て、とても、一つの舟には乘り切れないからであらう。洞庭を經て江陵へ往くのには、北行するので、それ故に北風に阻まれたのである。

【詩意】孟多十月、陰氣が盛であつて、段段と寒くなり、北風は、かつて休む時がない。蒼茫として廣き洞庭湖を渡らむとするに際し、なかなか、行かれぬ處から、橫手の岸に、君と共に雙舟を繫いで風待ちをして居る。折から、一天掻き曇つて、霧雨は、爭うて泄れ、その上、風が强い爲に、波は怒つて、互に投げ付けるやうである。もとより、船著の場所でもないから、どちらを向いても、雞犬の聲は丸で聞こえず、船に貯へて居た糧食も盡きなむとして居るが、互に相談することも出來ない。わが舟と君の舟とは、相去ること歩を容れぬ程であるが、何分波が高くて、寄り付けぬから、山丘を隔てて居るやうであつて、淸談をしたら、閒を消すに足るだらうと思ふが、夢寐にだに接することが出來ないから仕方がない。引き具したる眷屬中の男女どもは、左右に喧しく、殊に食ふ物がないから、飢に泣いて、但だ啾啾たるのみである。これが少しでも都の方へ近く歸るのだから、まだしも善いが、さうでなければ、とても、覊愁の物淋しきに打勝つことは出來まいと思はれる。しかし、旅る雲の上には、白日が相變らず高く挂り、悠悠たる寒光を放つて居るに相違なく、しばしの間なりとも、この天氣を開霽して下さるならば、それ以上、我輩は何も望むところは無い。

【餘論】雲外の白日が天氣を開霽する樣にと祈るは、卽ち讒者を追ひ拂つて、直接に天子の寵光を仰ぎたいといふ諷意があるものと見ても差支ない。朱竹垞は「偶然の境、道ひ來つて、亦た眼を醒ます、興趣、乃ち近くして相就くを得ざる上に在り」といつた。

李花贈張十一署　　李花、張十一署に贈る

江陵城西二月尾。(一)　　江陵城西、二月の尾、
花不見桃惟見李。　　花には桃を見ずして、惟だ李を見る。
風揉雨練雪羞比。　　風は揉み雨は練つて、雪も比するを羞づ、
波濤翻空杳無涘。　　波濤空に翻つて、杳として涘なし。
君知此處花何似。(二)　　君知るや、此處花何にか似たる、
白花倒燭天夜明。　　白花、燭を倒にして、天夜明かなり。
羣雞驚鳴官吏起。　　羣雞驚鳴して、官吏起つ、
(三)金烏海底初飛來。　　金烏、海底、初めて飛び來る。

【字解】【一】二月尾　二月の終り。
【二】花何似　花如何といふに同じ。
【三】金烏　前に見ゆ。太陽を指す。張衡の靈憲に「日は陽精の宗、積ん

で烏を成す、「烏に三趾あり」といひ、隋の孟康の詠日の詩に金烏升曉氣といひ、唐の太宗の詩に、紅輪不暫飛、烏飛豈復停、とある。

【四】青霞　青雲に同じ。

朱輝散射青霞開。　朱輝、散射して、青霞開く、

迷魂亂眼看不得。　魂を迷はし、眼を亂して、看れども得ず。

照耀萬樹繁如堆。　萬樹を照耀して、繁きこと堆きが如し。

念昔少年著遊燕。　念ふ昔、少年遊燕を著く、

對花豈省曾辭杯。　花に對して、豈に省みむや、かつて杯を辭するを。

自從流落憂感集。　流落してより、憂感集まり、

欲去未到先思廻。　去らむと欲して未だ到らず、先づ廻らむことを思ふ。

祇今四十已如此。　祇今四十、すでに此の如し、

後日更老誰論哉。　後日更に老ゆ、誰か論ぜむや。

力攜一罇獨就醉。　力めて、一罇を攜へて、獨り就いて醉はむとす、

不忍虛擲委黃埃。　忍びず、虛擲して黃埃に委するに。

【題意】　これは、元和元年二月、江陵に著到せし後、李花が盛に開いて居るのに對して感興を催し、從來同じ境涯に居る張署その人に贈つたのである。

【詩意】　江陵城西の地、時しも二月の末で、花の咲き滿つる頃であるが、この邊には桃の花は、無くて、李花ばかりである。ここは揚子江の岸で、天氣も荒れ勝ちである處から、李花は、風に揉まれ、雨に練られて、一層美しく、雪も比せられることを羞かしく思ふ位。それから、江中には、波濤空に翻り、それが又李花と相映じ、杳として涯涘を辨せざる位。ここの花は、非常に結構だと思ふが、君も定めてさう考へられるであらう。その白い花が、夜になると、無數の蠟燭を倒に立てた樣で、早や夜が明けたかと思はれる、雞もさう考へて居ると見えて、夜半に驚鳴し、それを聞いて、官吏どもも目を醒ますことがある。兎角する內、本當に夜が明けて、太陽が海底から飛び上り、その朱輝が散射すると、花光これに映じて、青雲の空まで、豁然と開いた樣に見える。そこで、見る者は、目を亂し、魂を迷はし、日色と花光とが判然と見分けの付かぬ位、はては、あらゆる木木が李の花に照耀されて、繁きこと堆を成すかと訝かるばかりである。おもへば昔、少年の時、景色の好い處で遊宴を恣にしたことがあつたが、花に對しては、酒杯を辭することなく、いつでも十分に痛飮した。しかし、今は處處に流落した揚句、憂感が集まつて居るから、花見に出かけやうと思つても、まだ其場所に到著せぬ先に、兎角氣が滅入り込んで歸りたく成つて仕舞ふ。わが年四十、すでに此の如き上は後日愈よ老い朽ちることは、申すまでもない。されば、枉げて一樽を攜へ、花見の興を恣にして、醉つて見たいと思ふので、もし此儘に棄てて置くと、折角の李花も、空しく黃埃に塗れて仕舞ふ、そ

れが如何にも心に忍びぬから、これから、一つ出かける積りである。

【餘論】結末、その同行を促す意は、言外に含めてあるので、極めて餘情がある。この詩は、淺俗に近いが、李花に就いて、夜景朝景を刻劃分說した處は、さすがに、精彩ある筆致である。

杏花

居鄰北郭古寺空。
杏花兩株能白紅。
(一)曲江滿園不可到。
看此寧避雨與風。
(二)二年流竄出嶺外。
所見草木多異同。
冬寒不嚴地(三)恒泄。
陽氣發亂無全功。
(四)浮花浪蘂鎭長有。
纔開還落瘴霧中。
山榴(五)躑躅少意思。
照耀黃紫徒爲叢。
鷓鴣(六)鉤輈猿叫歇。
杳杳深谷攢(七)青楓。
豈如此樹一來翫。
若在京國情何窮。
今旦胡爲忽惆悵。
萬片飄泊隨西東。
明年更發應更好。
(八)道人莫忘鄰家翁。

杏花

居鄰の北郭、古寺空し。
杏花、兩株、能く白紅。
曲江滿園、到るべからず。
此を看て、寧ろ避けむや、雨と風と。
二年流竄、嶺外に出で、
見るところの草木、異同多し。
冬寒嚴ならず、地、恒に泄る。
陽氣發亂して、全功なし。
浮花浪蘂、鎭しへに長く有り、
纔に開いて還た落つ瘴霧の中。
山榴躑躅、意思少し、
黃紫を照耀して、徒に叢を爲す。
鷓鴣は鉤輈、猿は叫び歇む、
杳杳たる深谷、青楓を攢む。
豈に如かむや、此樹一たび來り翫ぶには、
若し京國に在らば、情、何ぞ窮まらむ。
今旦、胡すれぞ、忽ち惆悵、
萬片飄泊して、西東に隨ふ。
明年更に發すれば、應に更に好かるべし、
道人、忘るる莫れ、鄰家の翁。

【字解】【一】曲江　司馬相如の哀二世賦に「臨二曲江之隑州一」とあつて、その註に「曲江は、杜陵の西北五里に在り」と記し、なほ太平寰宇記に「曲江池は、漢の武帝の造るところ、その水曲折、廣陵の江に似たるあり、故に名づく」といひ、康駢の劇談錄に「曲江は、開元中、疏鑿して勝境となす、その南に紫雲樓、芙蓉苑あり、その西に杏園慈恩寺あり、花卉環周、煙水明媚」といつて居る。【二】二年流竄　韓愈は、貞元二十年の春、陽山に至り、その翌年春、赦に遇ひ、夏秋の頃、出發したから、この詩は、永貞元年の春の作であらう。【三】地恒泄　下句に接して陽氣を泄らすといふ意。【四】浮花浪蘂　何でもない、詰まらぬ花。【五】躑躅　つつじ、本草の註に「躑躅は樹生、高さ三四尺、花、山石榴に似たり、一名山石榴」とあり、蔣註に「躑躅は花黃なり、羊食ふときは死し、これを見れば、躑躅分散す、故に名づく」とある。【六】鉤輈　嶺表記に「鷓鴣、自ら呼んで鉤輈といふ」とあり、李羣玉の詩に又聽鉤輈格磔聲とある。【七】青楓　蔣註に「楓は白楊に似、葉圓にして岐、脂あつて香し、厚葉弱枝、善く搖く。霜後に至り、葉丹にして愛すべし。故に騷人多く之を稱す」とある。【八】道人　寺僧を謂ふ。

【題義】蔣註には「前篇と同時に作る」とあるが、二年流竄出二嶺外一の句があり、且つ嶺表の風土を細說せしを見れば、まだ江陵に行かぬ前、陽山縣に居た時分の作に相違ない。

【詩意】わが居る處に鄰れる北郭に、無住になつた一つの荒寺があつて、そこには、二株の杏花がある。その一は花が白く、その一は赤く、まことに、見事に咲いて居る。その花を看て、杏花の名所たる長安の曲江なる滿園の花を思ひ出すが、貶謫の身は、行つて見ることも出來ざるが故に、今しも、風雨の時なるにも拘はらず、わざわざ此に花見に出かけた次第。自分は、二年以來、この嶺外の僻地に流竄せられ、その地の草木は、都で見たものとは違つて居る。ここは、冬の寒氣が强くないから、地からは、絕えず陽氣が泄れ、その陽氣のみが發亂して居るから、陰陽相調和せず、從つて、草木に就いて、全功を見ることは出來ず、花は、四時、常に有るが、いづれも、浮花浪蘂と云つた樣な詰まらぬもののみで、瘴霧の中に在つて、開いたかと思へば、すぐに散つて仕舞ふ。山榴とか、躑躅とか云ふものは、隨分有るが、面白味が少くて、意思太だ稀に、黃の色や紫の色が、ごたごたと相照耀して咲き出すに過ぎず、その間には、鷓鴣が鉤輈と鳴き、又猿が叫び歎むのみで、面白いどころか、或る場合には悲を添へるのである。そして、杳杳たる深谷には、靑楓が攢まつて居るのみである。かかる有樣で、この杏花の樣なものは、外に無く、それで、ここに來て、花見をするのであるが、これが若し、京國に居つたことであつたならば、如何なる心持であらうか。今朝、ここに來て、忽ち悵悵したのは、如何なる故かといふと、一夜の內に、花が衰へて、落紅萬點、風のまにまに、西東に飛んで居るからである。杏花は、明年又美しく咲くが、自分は、ここに居るか如何か分からず、その時、寺の殘僧たちは、去年風雨をも、避けずして、毎日毎日、この花を見に來た鄕家の翁たる我輩の事を忘れずに、思ひ出して貰ひたい。

【餘論】起四句は、複雜な事を極めて簡單に述べたのが手際で、尋常一樣の寫法で無い處が面白い。豈如此樹一來翫の下に若在二京國一情何窮の二句を著けて一頓したのは、波瀾變化を極めた所以で、全篇が爲に振起する。それから、結二句は、あらゆるものを收束したので、非常に含蓄がある。要するに、この詩は、さばかりの傑作ではないが、割合に苦心して、はじめて篇を成したものと見える。

感春　四首

感春　四首

(一)我所レ思兮在二何所一。　我が思ふところは、何の所にか在る。

情多地遐兮徧二處處一。　情は多く、地は遐くして、處處に徧ねし。

東西南北皆欲レ往。　東西南北、皆往かむと欲すれども、

【字解】(一) 我所レ思兮在二何所一　張衡の四愁の詩に、我所レ思兮在二太山一、欲三往從レ之梁甫艱といひ、我所レ思兮在二桂林一、欲三往從レ之湘水深といひ、我所レ思兮在二漢陽一、欲三往從レ之隴阪長といひ、我所レ思兮在二鴈門一、欲三往從レ之雪紛紛といつてあるが、

千江隔兮萬山阻。　千江隔り、萬山阻つ。
春風吹園雜(二)花開。　春風、園を吹いて、雜花開き、
朝日照屋百鳥語。　朝日、屋を照らして、百鳥語る。
(三)三盃取醉不復論。　三盃醉を取るは、復た論せず、
一生長恨奈何(四)許。　一生長恨、奈何せむや。

【題義】 蔣註に「元和元年春、江陵にて作る」とあつて、大方さうだらうと思はれる。感春とは、春の賑はしき景色に對し、わが身の淋しさと對照して、自然感慨を催したのであらう。

【詩意】 わが心に思ひ思つて居る地は、何處かといふと、元來、われは心多く、その上、地は遠く、どこでも往きたい處だらけ、東西南北、風土の好い處ならば、みんな往きたいのであるが、その間には、千江萬山があつて、これを隔てて居るから、往くことは、もとより容易ではない。折しも春で、江陵城中でも時候が追追暖くなり、春風は長閑に我が庭園を吹き度り、くさぐさの花が爛漫と咲き出で、朝日は、きらきらしく屋根を照らし、百千鳥の聲が賑はしく聞こえる。そこで、三杯を傾けて快き醉を取るは、無論の事であるが、東西南北、どこへでも往きたくて往かれないといふ一生の長き恨は、さて如何にしたら好いか、自分は、決して、こんな處の花だけを見て滿足して居る積りではない。

まさしく、之に倣つたのであらう。【二】雜花　くさぐさの花。【三】三盃取醉　李白の詩に「三盃通二大道一」といひ、杜甫の詩に「乘レ舟取レ醉非二難事一」といつて居る。【四】奈何許　奈何せむやと訓すべし、許の字には意味なし、古樂府に「奈何許、石闕生二口中一、銜レ碑不レ得レ語」とある。

【餘論】 この詩は、前半が巧妙である。

(一)皇天平分成四時。　皇天、平分して四時を成す。
春氣漫(二)誕最可悲。　春氣、漫誕として、最も悲むべし。
雜花妝林草蓋地。　雜花は林を妝ひ、草は地を蓋ふ。
白日座上傾(三)天維。　白日座上に天維を傾く。
蜂喧鳥咽留不得。　蜂は喧しく鳥は咽んで、留むれども得ず。
紅萼萬(四)片從風吹。　紅萼萬片、風の吹くに從かす。
豈如秋霜雖慘(五)冽。　豈に秋霜の如くならむや、慘冽と雖も、
(六)摧落老物誰惜之。　老物を摧落するも、誰か之を惜まむ。
爲此徑須沽酒飮。　此が爲に、徑に須らく酒を沽うて「飮む」べし。
自外天地棄不疑。　自外、天地、棄てて疑はず。
近憐李杜無檢束。　近ごろ憐む、李杜が檢束なく、

【字解】【一】皇天平分成四時　宋玉の九辯に、「皇天平分四時兮」とある。【二】漫誕　茫漠として落著の無きこと。【三】傾天維　西京賦に「振天維」とあつて、その註に、「維は綱なり」とある。傾は傾側、風に動かされて傾く、つまり天の綱が傾いてゆらゆらする。蔣註には「天維とは、春光照灼、維帶の猟擧するが如きなり」とある。【四】萬片從風吹　杜甫の詩に「一片花飛減二却春一、風飄二萬點一正愁レ人」とある。【五】慘冽　西京賦に氷霜慘冽とある。【六】摧落老物　晉書に「宣帝、かつて疾む、張皇后、往いて省す。帝曰く、老物憎むべし。又曰く、老物惜むに足らず」とあり、なほ周禮に「蜡を祭り、以て老物を

爛漫長(七)醉多二文辭一。　爛漫として、長く醉うて文辭多きを。
(八)屈原離騷二十五。　屈原の離騷二十五、
不レ肯(九)餔二啜糟與一レ醨。　肯て糟と醨とを餔啜せず。
惜哉此子巧二言語一。　惜いかな、此子、言語に巧なれども、
(一〇)不レ到二聖處一寧非レ癡。　聖處に到らず、寧ろ癡に非ざらむや。
幸逢二堯舜明(一一)四目一。　幸に堯舜の四目を明かにするに逢ふ、
條二理品彙一皆得レ宜。　品彙を條理して、皆宜しきを得たり。
平明出レ門暮歸レ舍。　平明、門を出でて暮に舍に歸る、
(一二)酩酊馬上知爲レ誰。　酩酊馬上、知る誰とか爲す。

息む」とある。【七】長醉多文辭　李白の詩に處世若二大夢一、胡爲勞二其生一、所二以終日醉一、頽然臥二前楹一」とい ひ、杜甫の詩に、誰能更拘束、爛漫是生涯とある。【八】屈原離騷二十五　漢書藝文志に屈原賦二十五篇とある、卽ち離騷經一、九歌十一、天問一、九章九、遠遊、卜居、漁父各一、すべて二十五篇である。【九】餔啜糟與醨　漁父の辭に「何ぞ糟を餔ひ醨を歠らざる」とあり、【一〇】不到聖處　漁父の辭に「聖人は、物に凝滯せず」とあり、又魏略に「太祖の時、酒を禁ず、而して、人、竊に之を飲む、故に酒と言ひ難し、白酒を以て賢人と爲し、淸酒を聖人となす」とある。ここでは兩意を兼ねて云ふ。【一一】明四目　書經に「四目を明かにし、四聰を達す」とあつて、註に「四方の視聽なり」とある。【一二】酩酊　山簡の事、前に歸二郡城一の詩、過レ酒郎酩酊、公知我是誰の處で解釋をして置いた。

【詩意】　皇天は、一年を平等に割つて、春夏秋冬の四時となし、普通に、春は樂しく、秋は悲しいといふが、我輩の考では、春の氣の茫漠として、落著の無いのは、第一に悲しい樣である。くさぐさの花が林を妝ひ、綠なる草が地に蓋うて、春の景色は、まことに綺麗であるが、座上の白日は、少しも之が爲に待つては呉れず、天の綱は、早くも傾いて居るでは無いか。やがて、蜂は喧しく騷ぎ、鳥は咽び入つて鳴くけれども、行く春を引き留める術とてはなく、萬片の紅萼は、風に任かせて吹かれて居る。かくの如く、花が散る位ならば、何も初から雜花を以て林を妝ひ、草を以て地を蓋はずとも善いので、なまじひに、一度よい景色を見せて置いて、忽ちそれを落すといふのは、まことに、しづ心なき仕草で、卽ち春氣の漫誕たる所以である。秋霜は、非常に慘烈なものであるが、すでに老物になつたものを摧落するから、もとより、當り前の事で、誰しも之を惜むものは無い。秋は、必然的と見るべく、春の方が餘程悲しい譯である。かくの如く悲觀すると、酒を買つて飮み、それで慰めるより外はないので、酒以外なる天地間の事は、一切棄てて省みない。近世では、李白といひ、杜甫といふ樣な人達が、まことに檢束なく、春が來れば、爛漫として長醉し、その結果を文辭に顯はしたので、その中心は、我輩と全く同一であると思へば、まことに、同情に堪へられぬ。それに引き換へて、むかし、屈原といふ人があつて、離騷等凡そ二十五篇を作つたが、漁父が、聖人は物に凝滯せずして物と推移するから、世の人が醉つて居れば、おのれも亦た醉ふべしといへるにも拘はらず、敢て糟と醨とを餔啜せず、衆人は皆醉うとも、我は獨り醒むといつて、遂に死んで仕舞つた。惜むべし、屈原は言語文章に巧妙であるが、まだ悟りが足らず、聖人の聖人たる所以に到達しなかつたのは、癡とい

ふ外なく、それにつけても、世に聖人と稱せらるる醇酒を飲まぬ手合は、丸で御話にも成らない。今しも、堯舜に比すべき明君が上に在まし、四目を明かにし、四方の門を開いて、人才を登庸し、陰陽を燮理し、あらゆる種類の萬物を規則正しく整頓して、各〻その宜しきを得せしめるといふ淸平の大御代であるから、朝早く門を出て、日暮に家に歸るまでも飲み續けて、馬上に酩酊して、ひよろひよろとして遣つて來る、これが、まことにあり難い處で、何にせよ、今の時に方り、春の愁を消すには、酒を飲むに限るのである。

【餘論】朱竹垞は「意新に語奇に、すなはち、もとより生硬たり」といつて居る。

朝騎一馬出。暝就一牀臥。　朝に一馬に騎して出で、暝に一牀に就いて臥す。

詩書漸欲拋。節行久已惰。　詩書漸く拋たむと欲す、節行久しく、已に惰る。

冠欹感髮禿。語誤驚齒墮。　冠欹つて髮の禿なるを感じ、語誤つて齒の墮つるに驚く。

孤負平生心。已矣知何奈。　孤負す平生の心、已んぬかな、知る何奈せむ。

【字解】【一】暝　日暮。【二】節行　風節を貴ぶところの素行。【三】語誤　言葉を聞き誤られる。

【詩意】朝に一馬に乘じて家を出で、さうして、前述の如く、一日酒を飲んで歩み廻り、暮に歸つて、おのが牀に就いて寢る。出る、飲む、寢ると、この三つより外に仕事もなく、若い時には、隨分勉强もしたが、近ごろは、詩書を棄ッぽかしにし、風節を尙べる素行も、兎角怠り勝ちになつて來た。これも、年を取つたからのことで、帽子が緩く成つて傾くにつけて、頭髮の禿げたことを感じ、言葉を人に聞き誤られるに因つて、齒が落ちて息の漏れることに驚いた。あはれ、詩書を窮めて、これを其身に行ひ、一廉の人物に成らうといふ平生の志は、さることながら、今日は、自然、これに孤負するに至り、已んぬかな、扨て如何したものかといふより外は無い始末である。

【餘論】朱竹垞が「これ側律、意態自ら妥順」といつた通り、形式上から云へば、仄韻の五言律であるが、それが生硬に流れず、極めて穩妥に出來て居るといふのである。

我恨不如江頭人。　我、恨むらくは、江頭の人に如かず。

長網橫江遮紫鱗。　長網、江に橫はつて、紫鱗を遮る。

獨宿荒陂射鳧鴈。　獨り荒陂に宿して、鳧鴈を射り、

賣納租賦官不嗔。　賣つて租賦を納れて、官嗔らず。

歸來歡笑對妻子。　歸り來り、歡笑して妻子に對す。

【字解】【一】紫鱗　蜀都賦に鮮以紫鱗とあつて、即ち鮮魚の義。【二】荒陂　荒れた陂。【三】畫蛇著足　史記に「楚の懷王、柱國昭陽をして、兵に將として、齊を攻めしむ。陳軫、昭陽に謂つて曰く、昔人、その舍人に、一卮の酒を遺るものあ

衣食自給寧羞㆑貧。 衣食自ら給して、寧ろ貧を羞ぢむや。

今者無㆑端讀㆓書史㆒。 今は、端なくも、書史を讀み、

智慧只足㆑勞㆓精神㆒。 智慧は、只だ精神を勞するに足れり。

(三)畫㆑蛇著㆑足無㆑處㆑用。 蛇を畫いて足を著け、用ふるに處なし。

兩鬢雪白趨㆓埃塵㆒。 兩鬢雪白、埃塵に趨る。

(四)乾愁漫解坐自累。 乾愁、漫解して、坐ながら自ら累ふ。

與㆑衆異㆑趣誰相親。 衆と趣を異にして誰か相親まむ。

數杯澆㆑腸雖㆓暫醉㆒。 數杯、腸に澆いで、暫く醉ふと雖も、

皎皎萬慮醒還新。 皎皎萬慮、醒めて還た新なり。

百年未㆑滿不㆑得㆑死。 百年、未だ滿たず、死するを得ず。

且可㆔勤買㆓(五)拋青春㆒。 且つ勤めて拋青春を買ふべし。

り、舍人相謂つて曰く、數人、これを飲まば、以て徧くするに足らず、請ふ、地に畫いて蛇と爲すあらむ、蛇先づ成るものは之を飲まむ。一人曰く、吾が蛇、先づ成れりと。酒を擧げて起つて曰く、吾、能く之が足を爲るものと、足を爲るに及びて、後に成る。人、その酒を奪うて、之を飲む。或は曰く、蛇、もとより足なし、今、これが足を爲る、蛇に非ざるなり」とある。無用の業に喩ふ。【四】乾愁 いらぬ心配。【五】拋青春 蔣註に蘇東坡の言を引いて「退之の詩、百年未㆑滿不㆑得㆑死、且可㆔勤買㆓拋青春㆒、國史補に云ふ、酒に郢の富春、烏の若下春、滎陽の土窟春、富平の石凍春、劍南の燒春あり。杜子美亦た云ふ、聞道雲安麴米春、纔傾㆓一盞㆒便醺㆑人と。近時、裴鉶、傳奇を作り、裴航の事を記し、亦た酒あり、松醪春と名づく。乃ち知る、唐人、酒を名づくるに、多く春を以てするを。すなはち、拋青春、亦た必ず酒名ならむ」とある。

【詩意】 わが輩は、すでに平生の志に孤負して、江頭の人にだも及ばない。江頭の人は、何をして居るかといへば、或は大きな網を江中に横へて、紫鱗を遮つて捕へ、或は寂しい隄の上に獨宿して、鳧や雁を射て取つて、生業となし、獲物を賣つて、その所得の中から、立派に租稅を上納して、格別お上から御叱りを受けることもなく、家に歸れば、歡笑して妻子に對し、衣食自ら給して、貧乏を羞づることも無いやうである。我輩は、これを異にして、ゆくりなくも、書史を讀み習ひ、これに因つて、智慧を生じ、その智慧が兎角邪魔をして、徒に精神を勞することが多い。それで、自分の遣る仕事は、蛇を畫く時に足を添へて、酒を飲み損つたと同じく、まことに無駄な事ばかりで、兩鬢は雪の如く白く、塵埃の中に奔走して、官吏で候といつて居る。かくて、餘計な心配をして、漫然たる行動を取り、それが徒に自ら累をなし、衆人とは趣向を異にして居る處から、誰も親んで呉れるものもない。まことに不平やら淋しいやらで、數杯の酒を腸に澆いで、暫く醉うて之を忘れやうとするが、胸中に蟠まつて居る萬種の憂慮は、皎皎として明かなるところから、醉つて居る内は、どうやら收まつて居ても、醒めれば、又ぞろ新になつて、煩悶は愈よ堪へられない。いつそ死んだら善いと思ふが、百年の命は、まだ殘つて居て、天命未だ盡きざる間は、むやみに死ぬといふ譯にも行かず、仕方がないから、出來るだけ、拋青春の銘を打つたる酒でも買つて、しばしなりとも、憂を忘れる外はない。

【餘論】拋青春は、前述の如く、酒の名であるが、文字は、青春を拋つといふので、感春の詩には殊に適切である。この四首は、連作であるから、前首の終を承けて、後首の筆を起して居るので、これを詳說すると、第一首の終に一生長恨奈何許といつたから、第二首の初に皇天平分成二四時一、春氣漫誕最可レ悲といひ、その終に酩酊馬上知爲レ誰といつたから、第三首の初に、朝騎二一馬一出といひ、その終に孤負平生心、已矣知何奈といつたから、第四首の初に我恨不レ如二江頭人一といつたので、たとへば、春蠶の絲を吐くが如く、斷えむと欲して遂に斷えず、まさしく其體を得たものである。

寒食日出遊

寒食の日、出でて遊ぶ

李花初發君始病。
李花初めて發して、君、始めて病む。

我往看レ君花轉盛。
我往いて、君を看るとき、花轉た盛なり。

走二馬城西一惆悵歸。
馬を城西に走らし、惆悵して歸る。

不レ忍千株雪相映。
忍びず、千株、雪、相映ずるに。

邇來又見桃與レ梨。
邇來又た見る、桃と梨と、

交開二紅白一如二爭競一。
交る紅白を開いて、爭ひ競ふが如し。

可レ憐物色阻二攜手一。
憐むべし、物色手を攜ふるを阻み、

空展二霜縑一吟二九詠一。
空しく霜縑を展べて、九詠を吟ず。

紛紛落盡泥與レ塵。
紛紛落ち盡す泥と塵と、

不レ共二新妝一比二端正一。
新妝を共にして、端正を比せず。

桐華最晚今已繁。
桐華最も晚けれども、今すでに繁し。

君不二强起一時難レ更。
君强ひて起たずむば、時、更め難し。

關山遠別固其理。
關山遠く別るるは、固より其理。

寸步難レ見始知レ命。
寸步見難く、始めて命を知る。

憶昔與レ君同貶レ官。
憶ふ昔、君と同じく官を貶せられ、

夜渡二洞庭一看二斗柄一。
夜、洞庭を渡つて、斗柄を看る。

豈料生還得二一處一。
豈に料らむや生きて還り一處を得むと。

引レ袖拭レ淚悲且慶。
袖を引き、淚を拭うて、悲んで且つ慶ぶ。

各言生死兩追隨。
各言ふ、生死兩ながら追隨せむと、

【字解】【一】物色　風物景色。【二】霜縑　白色の緻れり絹。古詩に新人工織レ縑、故人工織レ素とある。【三】端正　文選劉楨の詩に、冰霜正慘悽、終歲常端正とある。【四】桐華　禮記の月令に「季春の月、桐、はじめて華さく」とある。【五】直置　唐代の俗語、煎じ詰めればといつた樣な意味と思はれる。【六】南寃吏　寒署は江陵に徙りし後、未だ幾ならずして、邕管經略使路恕の爲に、署せられて判官となつたので、その事は、墓志に見えて居る。【七】鬼門　舊唐書地理志に「容州北流縣南三十里、兩石あつて相對す、その間、闊さ三十步、俗、鬼門關と號す。諺に曰く、鬼門關、十八九不レ還」とある。【八】陛下　蔡邕の獨斷に「陛下と謂ふは、羣臣敢て天子を指斥せず、故に陛下に在るものを呼ぶ、卑に因つて尊に達するの義なり」とある。【九】囊空　杜甫の詩に囊空恐二羞澁一、留得一錢看とある。【一〇】甑倒　後漢書郭林宗傳に「孟敏、太原に客たり、甑を荷うて地に墮つ、顧みずして去る」とある。【一一】一食日還併　禮記に「儒、日を併せて食ふあり」とある。【一二】宋玉庭邊　宋玉は屈原

(五)直置心親無貌敬。　直置、心親にして貌敬なし。
念君又署(六)南荒吏。　念ふ君が又南荒の吏に署せられ、
路指(七)鬼門幽且夐。　路、鬼門を指して、幽且つ夐かなり。
三公盡是知音人。　三公盡く是れ知音の人、
曷不薦賢陛(八)下聖。　曷ぞ賢を陛下の聖に薦めざる。
(九)囊空(一〇)甑倒誰救之。　囊は空しく甑は倒れて、誰か之を救はむ、
我今(一一)一食日還併。　我今一食日還た併はす。
自然憂氣損天和。　自然に憂氣、天和を損ず、
安得康强保天性。　安んぞ得む、康强、天性を保つを。
斷鶴兩翅鳴何哀。　鶴の兩翅を斷つ、鳴くこと何ぞ哀しき、
縶驥四足氣空橫。　驥の四足を縶ぐ、氣空しく橫ふ。
今朝寒食行野外。　今朝寒食、野外を行けば、
綠楊匝岸蒲牙迸。　綠楊岸を匝つて、蒲牙迸る。

の弟子、唐の余知古の渚宮故事に「庾信、江陵に歸り、宋玉の故宅に居る。宅は城北三里に在り、故に哀江南賦に云ふ、誅二茅宋玉之宅一、穿二徑臨江之府一」とあり、杜甫の詩にも曾聞宋玉宅、每欲レ依二荊州一」とあって、江陵には、宋玉の宅址といふものがあつたのである。【一三】參差　不揃の貌。【一四】魚動鏡　鏡とは水平かにして鏡の如きを言ふ。【一五】寧嫌觥底深　南史に「桑乆、江摠の席上に在り、曰く、深盡百罰と雖も、吾、亦た辭せざるなり」とあり、杜甫の詩にも百罰深盃亦不レ辭とある。【一六】筆鋒勁　鮑照の擬古に兩說窮二舌端一、五車摧二筆鋒一とある。【一七】火令　蔣註に「洪慶善云ふ、この時、春末夏初、故に火令といふは非なりと。蓋し、寒食、火を禁ずるを謂ふのみ。火令の

(一二)宋玉庭邊不見人。　宋玉庭邊、人を見ず、
輕浪參差(一三)魚動(一四)鏡。　輕浪參差、魚、鏡を動かす。
自嗟孤賤足瑕疵。　自ら嗟す、孤賤、瑕疵に足る、
特見放縱荷寬政。　特に放縱せられて、寬政を荷ふ、
飲酒寧嫌(一五)觥底深。　酒を飲んで寧ろ嫌はむや、觥底の深きを、
題詩尙倚筆(一六)鋒勁。　詩を題して、尙ほ倚る筆鋒の勁きに。
明宵故欲相就醉。　明宵故らに相就いて醉はむと欲す、
有月莫愁當火(一七)令。　月あり、愁ふる莫れ火令に當るを。

字、周禮に見ゆ。魏の武帝も、亦た寒食禁火の令あり。ここに言ふは、夜行月あり、故に寒食禁火の令に當るを憂へざるなり。蔡子晦、かつて、李公擇の爲に此詩を書し、燈火冷に作る、直に是れ杜撰、據るところあるに非ず」とあるが、何義門は、これを論じて「按ずるに、燈火冷も亦た禁火の意、兩本、字同じからず、被、もとより未だ誤謬ならざるなり」といつて居る。それから顧註には「周禮、司烜、仲春火禁を國中に修す。註、季春辨に火を出さむとするなり。司爟、行火の政令を掌る。鄭玄註、鄒子曰く、春、楡柳の火を取る。又、時には火令を施す。魏の武帝の明罰令に云ふ、聞く、太原、上黨・西河・雁門、冬至の後、百五日、皆火を絶つて寒食す。朱云ふ、ここに言ふは、夜行月あり、故に寒食禁火の令に當るを憂へざるのみ」とある。

【題意】　荊楚歲時記に「冬至を去ること一百五日、卽ち疾風甚雨あり、これを寒食といふ」とあるが、蔣之翹は說をなして「荊楚歲時記に、冬至を去ること一百五日を以て寒食と爲す。これ仲春の末に在り。太原の舊俗、介子推が骸を焚きしを以て、その亡月に至つて、冬中ごとに輒ち一月寒食す。こ

れ仲冬に在り、二說、自ら異なり。退之、寒食と稱するは、淸明の前に在り。すなはち是れ、冬至を去る一百五日、相傳へて子推の亡月といふは、誤なり。魏、按ずるに、周官司烜氏、仲春に木鐸を以て火を徇へて國中に禁ず、火を禁ずるは寒食、燧を鑽るは乃ち火を出すなり。これ正に龍忌の禁を謂ふ。蓋し、龍星は木位、春は木行、心は大火、火盛なり、故に禁ず、周制に在つては、仲春一月皆然り、又獨り冬至を去る一百五日のみに非ざるのみ」といつて居る。して見ると、寒食は、元と周制に在るので、一個月の間であつたが、後には、唯だ一日になつたと見える。そして、介子推の爲にする寒食は、仲冬の頃で、太原の地方に限られて居るのであらう。これは、解說が甚だ簡明である。それから、この詩は、韓愈の自註に「張十一院長、病中花を憶ふの九篇を示さる。寒食の日出でて遊び、夜歸る、因つて、以て投贈す」とある。張十一は例の張署、院長は、國史補に「外郎遺補、相呼んで院長と爲す」とある。又蔣註に「張十一は卽ち功曹署。公、張と同じく御史より官を貶せられ、又同じく江陵の掾となる。公は法曹參軍、張は功曹參軍、元和元年の作なり」とある。すると、この詩は元和二年三月、張署は折惡しく病氣で、花見に行くことが出來ないからと云つて、病中憶花の詩を九首作つて、韓愈に寄せた。そして、韓愈は、寒食の日、花見に出かけ、夜に成つて歸宅し、その詩を見たるに因つて、七古一篇を作り、そして、張署に答へたのである。

【詩意】李花の初めて發する頃になつて、君は始めて病氣に罹られた。予は、時時君の病氣を見舞に出かけるが、その途中で、眼に觸れたのは、李花が轉た盛なることであつた。花は盛なれども、人は病氣であるから、一處に花見をすることも出來ず、自然、感慨に堪へぬ次第である。かくて、馬を城西に走らして、花見をしたが、徒に惆悵して歸つて來た。そは他の故あるに非ず、千株雪の如く、李花は咲き出でて相映じて居るが、君が病氣である處から、何分獨りでは之を見るに忍びぬからである。その後、春の景色は、益す賑はしく、桃が咲き、梨が咲き、紅白交り開いて、互に其色を競ふが如くであるが、手を攜へて、これを見ることが出來ないのは、まことに殘念である。兎角する内に、君は病中憶花といふ題で、九首の詩を作つたといつて、白絹に書いたのを、わざわざ寄せられたから、その絹を展べて、その詩を吟じて見た。つれなの花は、君の全癒を待たず、皆紛紛として地に落ち、いつしか泥と塵とに化して仕舞つたので、花は、人の如く、新妝を凝らして、その容光を長く保つことが出來ながら、まことに、已むを得ない。中でも一番遲いといふ桐までが、今は花繁き時節となつたので、どうか無理にも起きて貰ひたい、この後、一年の間は、再び花を見ることが出來ぬからといつて、頻りに心に念じて居たが、君は、まだ全癒しない。關山を隔てて、遠く別れて居るのならば、顏を見ることの稀なのも、もとより、道理至極であるが、現在寸步の間に居て、顏を見ることの出來ないのは、矢張、運命といふより外はない。むかし、君と共に左遷されたことがあつて、南方へ同行する途中、夜、洞庭湖を渡り、北斗の柄の天上に曲つて居るのを見て、舟の進路を見定めた。その時、生

きて還ることは覺束ないと思つて居たのに、料らずも、無事で北歸することになり、君と一處に江陵まで來たので、袖を引き、涙を拭うて、悲喜交〻集るばかり、緣あればこそ、かくの如くなつたので、今後は生死兩つながら追隨しやうと語り合つた位。元來、君と予との交際は、煎じ詰めれば、形貌の上に於て、互に相敬するのではなく、心から契合して親むので、もとより、尋常一樣の泛交ではない。然るに、つい此頃、君は邕管の判官となつて、復た南荒に赴くといふので、路すがら過ぎ行く鬼門關は、幽にして且つ負かである。今しも、天子を輔佐して居る三公の方方は、我我に取つて、知音の人であるにも拘はらず、かういふ事になつたのを見ると、なぜ賢者を神聖なる陛下に推薦せぬか、甚だ怪しからぬ次第だといひたくなる。殊に剋下の境涯、財布も空になつて、米を買ふべき錢もなく、米櫃は、倒にしてふるつた儘であるのに、この飢渴を誰が救つて呉れるのか。我輩も、丁度君と同じ樣に、一日に一食位で濟まし、甚しきに至ると、二日目に一度飯を食ふに過ぎぬことさへある。そこで、自然の勢、憂氣が天然の調和を損じて、無事に丈夫では天性を保つことも出來なくなるので、君が病氣に惱んで居られるのも、尤も至極な事である。鶴は、優れた鳥であるが、兩の翼を斷てば、悲しい聲を出して鳴くだけであるし、驥は、千里を一飛びにする材能はあるが、四つの足を縛つて仕舞へば、天地を橫絕する氣だけ殘つて居ても、本當に馳せることは出來ない。今日は、寒食であるから、君が一處に行くことが出來ずとも、せめては、春の景色を眺め暮らさうといふので、野外に出て見た處が、柳は綠に煙つて岸を匝り、新蒲は芽を抽いて、勢よく水中から迸つて居る。但し、宋玉の宅址には、人跡絕え、水中には、輕浪參差として起り、魚が鏡の如き水面を動かして、寂寞を破るばかりであつた。この身は、孤賤にして、從來瑕疵だらけ、とても、完全な人物でないのは、まことに嘆息すべきことであつて、その爲に、貶謫の憂き目を見たが、幸ひ今は放免せられて、寬典を荷ひ、この江陵に量移されたので、わが運命の猶は非なるは、仕方がないこととし、酒を呷り、詩を作るより外、仕樣がない。されば、酒を飮む時には、杯の底の深きを嫌はず、詩を題しては、唯だ筆鋒の銳きを賴みとして居る。君は、病氣で出て來られなければ、仕方がないこととし、明晚は、こちらから押しかけて往つて、君と一醉を共にしやうと思ふ。勿論、寒食の候で、火を點けることは禁せられて居るが、幸ひ月夜であつて、來往ともに少しも困まることは無い。是非參上するから、その積りで、用意をして居て貰ひたい。

【餘論】この詩は、事柄が卑近であると同時に、聊か煩冗に失した傾向はあるが、尋常應酬の事を、かほどまでに想化したのは、流石に韓退之の偉らい處である。朱竹垞は「興致、花に本づいて來り、微に藻潤を加ふ、營構、猶は杜法あり」といつて居る。

憶昨行。和張十一

憶昨行、張十一に和す

憶昨(一)夾鍾之呂初吹灰。　憶ふ昨、夾鍾の呂、初めて灰を吹きしとき、

(二)上公禮罷元侯廻。　上公禮罷んで、元侯廻る。

車載牲牢甕舁酒。　車には牲牢を載せ、甕には酒を舁き、

竝召賓客延(三)鄒枚。　賓客を竝び召して、鄒枚を延く。

(四)腰金首翠光照耀。　腰金首翠、光照耀。

絲竹迴發清以哀。　絲竹迴に發して、清以て哀。

青天白日花草麗。　青天白日、花草麗し。

(五)玉斝屢舉傾(六)金罍。　玉斝屢ば擧げて、金罍を傾く。

張君名聲座(七)所屬。　張君の名聲、座の屬するところ。

起舞先醉長(八)松摧。　起つて舞うて、先づ醉ひ、長松摧く。

(九)宿醒未解舊(一〇)痁作。　宿醒未だ解けず、舊痁作る。

深室靜臥聞風雷。　深室に靜臥して、風雷を聞く。

【字解】【一】夾鍾之呂初吹灰　禮記に「仲春の月、律、夾鍾に中る、元日を擇んで、民に社を命す」といひ、後漢書律歴志に「候氣の法、室を爲る三重、緹を布き、木を案と爲し、内は庳く、外は高く、律を其上に加へ、葭莩の灰を以て、その内端を抑へ、歴を按じて之を候し、氣至るものは灰去る」といひ、又漢書律歴志に「夾鍾とは、陰、大族を夾助し、四方の氣を宣べて、種物を出すと言ふなり、卯に位し、二月に在り」といつて居る。仲春の月は、律に於て夾鍾に中り、そして、管より灰を吹くのを見て、其氣の來りしを知るといふ義。【二】上公禮罷元侯廻　方崧卿の説に「上は社と作す、荊帥裴均、社を罷めて客を享するを謂ふなり」といひ、朱子は「方說、

自期殞命在春序。　自ら期す、命を殞すは春序に在るを。

屈指數日憐嬰孩。　指を屈し、日を數へて、嬰孩を憐む。

危辭苦語感我耳。　危辭苦語、我が耳に感ず。

淚落不揜何(一一)漼漼。　淚落ちて揜はず、何ぞ漼漼。

念昔從君渡湘水。　念ふ昔、君に從つて湘水を渡る。

大帆夜(一二)劃窮高桅。　大帆、夜、劃して、高桅を窮む。

陽山鳥路出(一三)臨武。　陽山の鳥路、臨武に出で、

驛馬拒(一四)地驅(一五)頻隤。　驛馬地を拒んで、驅つて頻りに隤る。

踐蛇茹蠱不擇死。　蛇を踐み、蠱を茹うて、死を擇ばず。

忽有飛詔從天來。　忽ち飛詔の天より來るあり。

(一六)伾文未揃崖州熾。　伾文、未だ揃られず、崖州熾なり。

雖得赦宥恒愁猜。　赦宥を得たりと雖も、恒に愁猜。

近者三(一七)姦悉破碎。　近ごろ、三姦悉く破碎。

是なり。但し上を以て社と作すは、未だ然らず。左傳五行の官、封じて上公と爲し、祀りて貴神と爲す、その土正を后土といふ、家に在つては中霤を祀り、野に在つては社と爲す、故に、杜註、幣を社に用ふといふ。以て上公に擬へば、上公は卽ち社神なり、況んや、この句、內、又自ら元侯を以て對と爲すをや」とある。上公は、社に祭つた神で、この地の元侯たる節度使裴均が其處の社の祭をしたといふ義。【三】鄒枚　鄒陽と枚乘、ともに梁の孝王の客で、詞賦を以て稱せられて居た。謝惠連の雪賦に召二鄒生一延二枚叟一とある。【四】腰金首翠　翠は翡翠の羽を飾つた帽子。洛神賦に帶二金翠之首飾一とある。【五】玉斝　斝は酒を納む器、卽ち觥子、劉孝標の廣絕交論に雲二玉斝之餘

羽窟無底幽黃能。　羽窟、底なく、黃能を幽す。
眼中了了見鄉國。　眼中、了了として、鄕國を見る。
知有歸日眉方開。　歸日あるを知つて、眉、方に開く。
今君縱署天涯吏。　今、君、縱ひ天涯の吏に署せらるるも、
投檄北去何難哉。　檄を投じて、北に去る、何ぞ難からむ。
無妄之憂勿藥喜。　無妄の憂は、藥することなくして喜あり。
一善自足禳千災。　一善、自ら千災を禳ふに足れり。
頭輕目朗肌骨健。　頭は輕く、目は朗かにして、肌骨健なり。
古劍新劚磨塵埃。　古劍新に劚つて、塵埃を磨す。
殃銷禍散百福併。　殃は銷え、禍は散じて、百福併す。
從此直至耇與鮐。　これより直に、耇と鮐とに至る。
嵩山東頭伊洛岸。　嵩山の東頭、伊洛の岸、
勝事不假須穿栽。　勝事、穿栽を須ふるを假らず。
君當先行我待滿。　君は當に先行すべく、我は滿を待つ。
沮溺可繼窮年推。　沮溺、繼ぐべし、年を窮めて推せむ。

罍とある。【六】金罍　銅製の酒壺。詩經に我姑酌彼金罍とある。【七】座所屬　座上の人が屬目する。【八】長松擢　世說に「山公曰く、嵆叔夜の人と爲りや、巖巖として孤松の獨り立つが如く、その醉ふや、傀俄として玉山の將に崩れむとするが如し」とある。普通に醉つて舞ふことを玉山の將に崩れむとするが如しといふが、ここでは、松の方を取り、そして、擢の字を加へたので、まことに新警である。【九】宿酲　二日醉、酲は酒病。【一〇】膏痁　左傳の杜預註に「痁は瘧疾なり」とある。【一一】灌灌　集韻に「灌は雪霜流渠の貌」とある。但し、文選陸機の祭魏武帝文に指季豹而灌焉とあつて、その註に「灌は涕泣垂るる貌」とある。【一二】夜劃　劃は張り上げる。【一三】臨武　韓愈は連州の陽山令となり、張署は郴州の臨武令となつた、兩地は相去ること遠からざれども、その間に山がある。【一四】拒地　地を歩くことを厭がる。【一五】虺頽　詩經に我馬虺隤とある。如何に驅つても、つづけざまに倒れる。【一六】任文未掄崖州熾　說文に「掄は滅なり」とあり、史記索隱に「掄は分割せらるるを謂ふなり」とある。崖州は、後に韋執誼の貶せられた處。この句の意は、その頃、王伾・王叔文の二人は、未だ朝廷から退けられず、韋執誼も勢力が盛んであつたといふ意。舊唐書に「王叔文は、越州山陰の人、渝州司戸に貶せられ、明年、これを誅す。王伾は、杭州の人、叔文と同じく、開州司馬に貶せらる。韋執誼は、京兆の人、叔文と交甚だ密、尙書左丞同平章事に累遷し、憲宗、內禪を受けしとき、崖州司戸に貶せられ、貶所に卒す」とある。【一七】三姦　王伾・王叔文・韋執誼を併稱す。【一八】羽窟無底幽黃能　左傳に「鯀、羽山に殛せられ、その神、化して黃熊となり、以て羽淵に入る」とある。熊は、能の誤字かと思はれる。國語には現に黃能に作つてある。能の字に兩音あつて、奴來切のときは三足の鼈、奴登切のときは熊の屬。足、鹿に似たるものといふことで、ここでは、羽淵とあるから、鼈の方が適切である。【一九】天涯吏　前の寒食詩に羨君又署南荒吏とあるに同じ。【二〇】無妄之憂　易に无妄之疾勿藥有喜とある。【二一】耇與鮐　詩經の行葦に黃耇台背とあつて、鄭註に「台の言は鮐なり、人老ゆれば背に鮐文あり」と見ゆ。耇は、脊の曲ること。鮐は、皮膚が荒れて、鮐肌になること。【二二】伊洛　二水の名、韓愈の家は河南に在つて、嵩山並に伊洛二水は、皆その附近であつた。【二三】穿栽　詮議立をする。【二四】待滿　任期の滿つるを待つ。【二五】沮溺　長沮桀溺の二人、耦耕して居たことが、論語に見えて居る。【二六】推　周の時代、籍田の禮を行ひ、天子、自ら耒耜を載せ、三公九卿諸侯大夫を帥ゐて田を耕すとき、天子は三推、三公は五推、諸侯は九推といふ儀式がある。推は、鍬を推し入れることであるが、ここでは、耕すといふ義に用ひたのである。

【題意】憶昨行は、過來の事を憶うて歌つたので、張十一は例の張署。これは、前詩と同時の作であつて、張署が邕管の判官に任じ、再び南方に赴任することに成つたに就いて、これから、都に歸る時が得

られるだらうといつて、之を慰めたのである。前詩は、專ら張署が病氣であつたことを反覆して言つたが、この詩も、矢張、病氣に就いて言ひ、その病氣に罹つた原因に溯つて寫し出したのである。

【詩意】本年二月、律、夾鐘に中つて、蘆管の灰の吹き出す頃、わが上官であつて、この地の元侯たる節度使の裴均に於かれては、社の祭を爲し、滯りなく、其儀を畢つて、やがて引き返して來られたが、車には、犧牲に供した太牢の肉を山の如く積み、甕には、一ぱい酒を滿たして、それを擔がせて來て、やがて、お下がり頂戴の宴會を催し、大に賓客を招集し、その中には、古しへの鄒陽・枚乘に比すべき文學の士も、隨分多く居た。その賓客どもは、御祭の歸りであるから、腰には金の飾を帶び、頭には翡翠の羽を飾つた禮帽を戴き、光彩燦爛として照り耀き、そして、絲竹興を添へ、その聲は、淸く且つ哀れ深く聞こえた。時しも、春の半で、靑天白日、天氣が善かつたから、花草うるはしく咲き亂れ、まことに賑はしき景色。そこで屢ば銚子を擧げて、金罍を傾け盡すに至つた。その時、張君を召し出されたが、君の名聲は、座客の屬目するところで、よつてたかつて酒を勸めたから、やがて大醉し、興に乘じて舞ひ出されたが、たとへば、巖巖たる長松の摧け倒るるが如くであつた。處が、宿醒のまだ解けやらぬ內に、持病が再發し、それから、どつと床に就き、深室の中に靜臥して、苦んで呻く聲は、風雷を聞くが如くである。かくて、寒熱の往來に苦しんで、容易に直りさうもない處から、張君は、この春の內に死んで仕舞ふものと覺悟し、春盡くると共に命も盡きるといふので、指を屈して日を數へ、それにつけても、幼兒どもは、如何にも可哀相だといふので、これのみ、心にかけて居た。かくて、我輩が病牀を訪うた時にも、危辭苦語して、遺言された位で、涙をはらはらと流して、掩ひ兼ねる有樣であつた。さき頃、君と一處に湘江を渡つた時には、帆柱の極めて高いのに眞帆を張り上げて、夜、舟を進めた。その後、予は陽山に、君は臨武に居り、兩處相去ること、さまで遠からざれども、中間には、險阻な山があつて、鳥の通ふ路しかなく、そこを彼方此方と往來して居たが、何分にも嶮しい處から、馬も地を踏むことを厭がつて、いくら驅り立てても、進まなく成るので、困まり入つて仕舞ひ、平生は、蛇を踐み、蠱といふ蟲を食うて、死を顧みずして居た處が、その內に、ふと詔敕が九重の天より下つて、我我の罪を赦されて、江陵に量移することに成つた。その時には、王伾・王叔文の手合は、まだ流されなかつたし、韋執誼も、威權が盛であつたから、折角、御赦免に成つたとはいへ、平生肌が合はぬ故に、この先どうなることか、心中每に愁に堪へなかつた。兎角する內に、この三姦は、近ごろ、悉く破碎されて死んで仕舞ひ、恰も鯀が殛せられて、深淵の中に大龜と爲つて住んで居ると同じである。そこで、我我も、やつと安堵することが出來、眼中に、了了として、鄉國が見える樣な心持で、北に歸る日も知れて居る處から、初めて眉を開き、そして、君の病氣も、けろりと全癒して仕舞つた。今、君は、天涯の吏に署せられて、更に南方に赴任することに成つて居るが、その身が健全でありさへすれば、辭表を出して、北に歸ることは、何の造作も無いことで

ある。君の全癒は、取りも直さず、三姦の死に在るので、易に謂はゆる、無妄の疾は藥せずとも直るといふものである。その喜に依つて、一善自ら千災を禳ふといふやうに、はては、頭も輕くなり、目は朗かに、はつきりとなり、肌膚筋骨も強健になつたので、たとへば、古い劍を新に研ぎ直し、塵埃を拭ひ去つて、光芒を發したと一般、禍殃は、すでに消散して、百福併せ至り、今後は、背が曲り、鮫肌になるまでも、病氣などには侵されることは有るまいと、我輩は、非常に賴母しく思ふ。我輩の故郷たる洛陽は、嵩山の東の端で、伊洛二水の岸に當り、もとより風景の好い處で、物外の勝事は、いろいろ、詮議立てをするにも及ばず、先刻すでに御承知の事であらう。いづれ、君は、先に行かれるであらうが、予も亦た任期の滿つるを待つて、遠からず、君の跡を追ふことに致さう。歸田の後は、官海の事など、一切拋棄して、古しへの長沮・桀溺の如く、年中耦耕して、この生を送りたいと思ふのである。

【餘論】朱竹垞は、全體の上から、この詩を評して「風致は寒食遊に及ばざれども、稍や永貞に勝る」といひ、初の飲酒の段を評しては「飲酒に就いて敍し來る、詩家の趣味、自ら合す」といひ、腰金首翠光照耀の四句は、最も精彩の富んで居る處で、これを評しては「これ排耦を避くるに意あり、未だ精腴ならずと雖も、却つて亦た粗硬ならず」といひ、念昔從ㇾ君渡二湘水一の數句を評しては「敍し得て、婉曲雅致あり、惟だ遠く永貞に勝るのみならず、亦た八月十五夜に勝れり」といひ、嵩山東頭伊洛岸の四句を評しては「敍し得て亦た朗快」といひ、流石に的確である。但し、諸家が此詩に就いて、格別取り出でて彼此言はず、全く之を閒却して居るのは、聊か不思議である。

韓昌黎集巻四

古詩

劉生詩

劉生の詩

生名師命其姓劉。
生、名は師命、その姓は劉、

自少軒(一)輊非常儔。
少より、軒輊、常儔に非ず。

棄家如遺來遠遊。
家を棄つること、遺れたるが如く、「て遠遊、來つ」

東走梁(二)宋暨揚(三)州。
東は梁宋に走り、揚州に暨ぶ。

遂凌大江極東(四)陬。
遂に大江を凌ぎ、東陬を極む。

洪濤春天禹(五)穴幽。
洪濤、天を舂いて、禹穴幽なり。

(六)越女一笑三年留。
越女、一笑、三年留まる。

南逾橫嶺入炎(七)州。
南は橫嶺を逾えて、炎州に入り、

【字解】【一】軒輊　詩經に「戎車既安、如輊如軒」とあり、又後漢書馬援傳に「前に居れば、人をして輊せしむる能はず、後に居れば、人をして軒せしむる能はず」とある。軒は、車の尻尾の方の上がつて居ること、輊は、車の前の方の上つて居ること。そこで、軒輊は、抑揚とか、低昂とか、又甲乙とか、上下とかといふ意味に用ふるのが、普通であるが、ここのは、稍や異にして、人が下になるときには自分が上、人が上になるときには自分が下といふ樣に、故らに人と違

(八)青鯨高磨波(九)山浮。 青鯨、高く磨して、波山浮ぶ。
怪魅炫曜堆蛟虬。 怪魅炫曜して、蛟虬を堆し、
(一〇)山獠讙譟猩(一一)猩游。 山獠讙譟して、猩猩游ぶ。
毒氣爍體黃膏流。 毒氣、體を爍して、黃膏流る。
問胡不歸良有由。 問ふ胡ぞ歸らざる、良に由あり。
美酒傾水(一二)炰肥牛。 美酒、水を傾けて、肥牛を炰にす。
妖歌慢舞爛不收。 妖歌慢舞、爛として收まらず。
倒心(一三)迴腸爲青(一四)眸。 心を倒にし、腸を廻して、青眸の爲にす。
(一五)千金邀顧不可酬。 千金顧るを邀ふれども、酬ゆべからず。
乃獨遇之盡綢繆。 乃ち獨り之に遇うて、綢繆を盡し、
(一六)瞥然一餉成十秋。 瞥然一餉、十秋を成す。
昔鬢未生今白頭。 むかしは、鬢、未だ生せず、今は白頭。
(一七)五管徧歷無賢侯。 五管、徧ねく歷るも、賢侯なし。

迴望萬里還家羞。 迴望萬里、家に還ることを羞づ。
陽山窮邑惟猿猴。 陽山の窮邑、惟だ猿猴。
手持釣竿遠相投。 手に釣竿を持して、遠く相投ず。
我爲羅列陳前(一八)修。 我、爲に羅列して、前修を陳ね、
芟蒿斬蓬利鋤(一九)耰。 蒿を芟り、蓬を斬つて、鋤耰を利くす。
(二〇)天星迴環數纔周。 天星迴環、數、わづかに周る。
文學穰(二一)穰囷(二二)倉稠。 文學、穰穰として、囷倉稠し。
車輕御良馬力優。 車輕く、御良くして、馬力優なり。
(二三)咄哉識路行勿休。 咄なる哉、路を識らば、行いて休むこと勿れ。
往取將相酬恩讐。 往いて、將相を取つて恩讐に酬いよ。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

つた振舞をすること。【二】梁宋 唐書地理志に「宋州睢陽郡は、河南道に屬す、本と梁郡、天寶元年、名を更ふ」とあり、杜甫の詩にも昔我遊宋中、惟梁孝王都とある。【三】揚州 書の禹貢に「淮海惟れ揚州」とあつて、孔安國の註に「北は淮に據り、南は海に距る」とある。【四】東際 東隅に同じ、卽ち越。【五】禹穴 前にも見えて居た。史記の太史公自序に「會稽に上り、禹穴を探る」とあり、張晏の解に「禹巡狩して、會稽に至つて崩ず、因つて葬る、上に孔穴あり、民間云ふ、禹、この穴に入る」とある。【六】越女 杜甫の遠遊に越女天下白とある。【七】炎州 前に見ゆ、南方炎熱の地。【八】青鯨 薛註に「鯨、或は鮮に作る、もとより非。卽ち青の譌、亦た未だ詳ならず。

疑ふらくは是れ、長の字の誤」とある。【九】波山浮 文選海賦に魚則橫海之鯨とあり、莊子の外物に「白波山の若し」とあり、李白の公無渡河に有長鯨白齒若雪山とある。【一〇】山獠 神異經に「西方の深山に人あり、長さ尺餘、袒身、蝦蟹を捕へて、以て食ふ、名づけて山獠といふ」とある。【一一】猩猩 山海經に「猩猩は豕身人面」とある。【一二】炰 炙に同じ、左傳に「酒あり澠の如く、肉あり、陵の如し」とあり、曹植の詩に中廚辨豐膳、烹羊宰肥牛とあり、魏の文帝の艷歌行に但當飮醇酒、炙肥牛とある。【一三】迴腸 漢書司馬遷傳に「腸、一日にして九廻」とあり。【一四】青眸 晉書阮籍傳に「能く青白眼を爲す」とあり、文選舞賦に眄般鼓則騰淸眸とある。【一五】千金邀顧 李白の詩に美人一笑千黃金とあり、又相知兩相得、一顧輕千金とある。【一六】瞥然一餉成十秋 楚辭に目瞥瞥兮西沒とあり、詩經に一日不見如三秋兮とある。瞥は、說文に「目を過ぐるなり」とある。【一七】五管 舊唐書地理志に「嶺南道五管、廣州中都督府、桂州下都督府、邕州下都督府、容州下都督府、安南都督府」とある。【一八】前修 離騷に謇吾法夫前修兮非世俗之所

脰とあつて、王逸の註に「前修は、前世道德を修習するの人を謂ふ」とある。【一九】鎗鏜 鏜は鎗の柄。【二〇】天星迴環 史記に「星、天に囘り、數、將に殞んど終らむとす」とある。【二一】穰穰 史記に「五穀蕃熟、穰穰家に滿つ」とある。【二二】囷倉 囷は米倉。【二三】咄哉 漢書東方朔傳に「朔、これを笑うて曰く咄」とあつて、顏師古の註に「咄は叱咄の聲なり」とある。

【題義】蔣註に「貞元二十一年、劉師命、公を陽山に訪ふとき作る。按ずるに劉生、越に在る、意ふに、必ず眷するところあらむ。故に詩に云ふ、越女一笑三年留と。又云ふ、問胡不レ歸良有レ由、と。繼ぐに妖歌慢舞を以てす。すなはち知る、生の遇ふところ、皆不羈なることを。故に終篇に、咄哉識レ路行勿レ休、往取二將相一酬二恩讐一といふ。蓋し、且つ諷し且つ勸むるの意あり。又集中、生の爲にせる梨花の二詩あり、豈に此より前に作れるか」とある。すると、劉生は、才を負ふと共に、志を得ざるより、放蕩に身を持ち崩して居たものらしい。それが陽山縣を過ぎて、韓退之の門人に成つたから、韓退之は、今後、道を重んじて修學せよといつて、懇に之を指導して遣つたのが、即ち此詩である。

【詩意】生は名を師命といひ、姓を劉といふもので、少時より、兎角、世間の人とは一風變つた事をする男、もとより並大抵のものではない。おのが家などは打遣つた儘、さながら忘れたるが如く、遠く天下の名山大川に遊び、東は梁宋地方より、揚州に及び、それから、揚子江を渡つて、東甌、即ち古しへの越地までも極めた。越の地は、海に接して居るから、洪濤天を舂いて起り、そして、會稽には禹を葬つた穴があるが、その幽奧なる處まで、一一探檢して仕舞つた。越は、古しへ、西施の出た處で、今でも美人が多い、劉生は、その美人の一笑の爲に、三年も其處に滯留して居た。次に南に向つて、横嶺を踰え、南方炎熱の地と稱する嶺南に遊んだが、海には、大きな鯨が山の如く、波に乘つて浮んで居るし、陸には、虬蛟などが羣をなし、山には山魈といふものが喧しく騷いで居るし、又猩猩などが遊び廻つて居る。この邊は、熱帶に近い處であるから、毒氣が身體を焦がして、黄色な脂汗が流れる。劉生は、何故に、そんな處にばかり遊んで居て、家に歸らぬかといふと、それも理由のあることで、美酒は水を傾けるやうに飲めるし、肥牛の炙は、非常に結構で、酒や肴は、すでに十分なる上に、妖歌慢舞をする女どもが居て、爛として收められぬ位。劉生の心を傾倒せしめたのは、實に其女の青眸である。尤も、廣東地方の女は、見識ぶつて居て、千金を積んで、その一顧を迎へやうとしても、なかなか容易に靡くものではないのに、劉生のみは、これに遇つて、綢繆の情を盡し、大に持てた處から、その儘、南海に流連し、一寸ひと時だといつて居る内に、早くも、十年を經過して仕舞つた。むかし、劉生が家を出た時には、口ばたに鬚も無かつたが、今は白髮頭に成つて仕舞ひ、これでは成らぬ、この邊に己の才を愛して用ひて呉れるやうな人は無からうかといふので、五管の地方を殘りなく歷訪したが、誰一人、劉生を用ふるやうな賢太守は無く、萬里の彼方を廻望して、この儘、のそのそと家に還るのも、まことに面目ないことと思つた。その時、予は、陽山の縣令であつたが、陽山は極極の僻邑で、丸で猿の樣な人しか居らぬ。そこへ劉生が釣竿を手に

して、遠く來り投じた故に、予は及ばずながら、前世道德を修習した人たちの事を竝べ立てて、色說き聞かせ、今まで遣つて居た事は宜しくないから、蓬蒿を刈り取つて、鋤鍬を働かすと同じ樣に、この惡い舊慣習を棄てて、眞正の敎育を受けねばならぬ。かくて天星循環し、一年も立つたならば、劉生の文學は、次第に進んで、滿腹の文章は、米の穰穰として囷倉に滿つるやうに成らう。すでに車が輕く、御者も上手で、これを挽く馬も力が優れて居たならば、何處にも、缺點がないので、天下の大道を疾驅することも、容易である。それも、路を識らなければ困まるが、敎育を受けて、路を識つて居る上は猶更の事である。劉生たるもの、修養を積んで、かういふ樣になり、そして、都に上り、一擧して將相の位を取り、恩讐分明、これに報いたならば、まことに傑然たる大丈夫の所爲で、この位、愉快な事は無からう。マア少しの間、辛抱して、學問にいそしんだら善からうと思ふ。

【餘論】この詩は、柏梁體で、每句に押韻し、且つ處處に單句が交つて居るから、普通の詩の樣に、二句宛に切つても、意味の通せぬ處があるので、三句もしくは五句續けて讀まねばならぬ。朱竹垞は「柏梁體の句、各〻一事、これは、自ら是れ燕歌行の體。然れども、この體、宜しく長かるべからず、又須らく錬り得て精なるべし。この作、遒緊味あり、意態尙ほ未だ甚だ濃かならざるを恨む」といひ、何義門は、結末を評して「その人に因つて之を言ふと雖も、然れども、公の生平、恩讐の二字に於て、耿耿忘れず、亦た心病の聲、詩に形はるるものなり。魯頌の克く德心を廣くするを尙ぶ所以なる哉」といつて居る。

鄭羣贈簟

鄭羣、簟を贈る

(一)蘄州(二)笛竹天下知。
蘄州の笛竹、天下知る。

鄭君所寶尤瓌奇。
鄭君、寶とするところ、尤も瓌奇。

攜來當晝不得臥。
攜へ來り、晝に當つて、臥すを得ず。

一府傳看(三)黃琉璃。
一府傳へ看る黃瑠璃。

體堅色淨又(四)藏節。
體は堅く、色は淨くして、又節を藏す。

盡眼凝滑無瑕疵。
盡眼凝滑にして、瑕疵なし。

法曹貧賤衆(五)所易。
法曹、貧賤にして、衆の易るところ。

腰腹空大何能爲。
腰腹空大、何をか能く爲さむ。

自從五月困暑濕。
五月暑濕に困んでより、

【字解】〔一〕蘄州　唐書地理志に「蘄州蘄春郡、淮南道に屬す。土貢は、白紵簟」とある。〔二〕笛竹　齊註に「笛、或は簟に作る、是と爲す」とある。但し、本來笛にする竹で、それを細かに剖いで簟を造ると見ても差支はない。〔三〕黃琉璃　簟の色、黃にして、光澤、瑠璃の如きをいふ。東坡の寄簟與蒲傳正の詩に、愧此八尺黃琉璃とあつて、卽ち此詩を祖としたのである。〔四〕藏節　ふしが外面に顯はれずして滑かなること。〔五〕所易　易は侮る、漢書陸賈傳に「絳侯、我と戲れ、吾が言を易る」とあつて、顏師古の註

如坐深甑遭蒸炊。　深甑に坐して、蒸炊に遭ふが如し。
手磨袖拂心語口。　手磨し、袖拂うて、心、口に語る。
（六）慢膚多汗眞相宜。　慢膚汗多く、眞に相宜し。
日暮歸來獨惆悵。　日暮、歸り來つて、獨り惆悵。
有賣直欲傾家貲。　賣るあらば、直に家貲を傾けむと欲す。
誰謂故人知我意。　誰か謂はむ、故人、我が意を知り、
卷送八尺含風漪（七）。　卷いて、八尺の含風漪を送らむとは。
呼奴掃地鋪未了。　奴を呼び、地を掃ひ、鋪いて未だ了らず。
光彩照耀驚童兒。　光彩照耀して、童兒を驚かす。
（八）青蠅側翅蚤蝨（九）避。　青蠅は翅を側て、蚤蝨は避く。
肅肅疑有淸飈（一〇）吹。　肅肅として淸飈の吹くことあるを疑ふ。
倒身甘寢（一一）百疾愈。　身を倒にして甘寢、百疾愈ゆ。
却願天日恒炎曦。　却つて願ふ、天日の恒に炎曦なるを。

に「その言を輕易するを謂ふなり」とある。【六】慢膚　皮膚の弱いこと。楚辭に「平骨慢膚何以肥之」とあつて、その註に「肥澤の貌」とある。【七】含風漪　漪は水文。【八】青蠅　詩經に、「營營青蠅止于樊」とある。【九】蚤蝨　抱朴子に「蚤蝨、君を攻めて、臥するも安きを獲ず」とある。【一〇】淸飈　古樂府に秋風肅肅晨風颸とある。【一一】甘寢　莊子の徐無鬼に「孫叔敖、甘寢、羽を秉り、而して、郢人兵を投ず」とあつて、安臥すること。【一二】明珠青玉　張衡の四愁詩に美人贈我貂襜褕、何以報之明月珠とあり、又、美人贈我錦繡段、何以報之青玉案とある。

（一二）明珠青玉不足報。　明珠青玉、報ゆるに足らず。
贈子相好無時衰。　子に相好を贈る、時として、衰ふることなからむ。

【題義】鄭羣は、韓愈が撰せし墓志に「羣、字は宏之、榮陽の人、進士に擧げられ、鄠縣の尉より、監察御史に拜せられ、鄂岳使裴均の江陵守たるに佐とし、殿中侍御史を以て其軍に佐たり」とある。して見ると、韓退之が江陵に量移された時は、同僚であつたのである。ある時、鄭羣は、珍らしい簟を贈つたから、韓愈は之を謝して、この詩を作つたものと見える。蔣註に「唐の孔戣の私記に云ふ、退之豐肥、善く睡る、吾が家に來る每に、必ず枕簟を命ず、と。而して、沈存中の筆談亦た云ふ、世、韓退之を畫く、小面にして美髯、紗帽を著く、これは乃ち江南の韓熙載のみ。熙載は、文靖と諡す、江南の人、これを韓文公といふ、これに因つて、遂に誤つて以て退之と爲すと。退之は、肥えて髯少し、この詩、腰腹空大及び慢膚多汗の語あり、二說、信に然り」とある。すると、韓退之は、肥えて居て、每に橫に成りたがる癖があつたから、鄭羣は、之を知つて、簟を贈つたのであらうし、韓愈も、亦た特に其好意を喜んで、乃ち此詩を作つたのであらう。

【詩意】蘄州に產する笛の原料たる竹の美材たることは、天下周知の事實であつて、その竹で造つた簟は尤も宜しく、わが同僚たる鄭君の家に寶藏するものは、最も見事で、珍らしいものである。鄭

君は、折角この簟を役所に持つて來たが、晝に當つても、その上に臥すことが出來ない。なぜかといふと、一府中の役人どもが、これは黃色で、瑠璃の樣な澤があつて、如何にも珍らしいといひつつ、皆驚いて見物して居るからである。そこで、仔細に之を見ると、體は堅く、色は淨く、そして、節は顯はれずして、中に隱れて居るから、平滑であつて、見わたす處、頭から尾に至るまで、一點の瑕疵もなく、すべすべして居る。予は、法曹參軍の職に居るが、もとより貧賤で、人に侮られ、この身體は、徒に肥滿して、腰から腹のあたりは、大さう大きいが、何一つ仕出かすことも出來ず、その上、暑氣には、まことに閉口で、五月の濕つぽくて暑い時分には、丁度、甑の中に坐つて居て、下から蒸し炊がれると同じである。その時、この簟を見たから、手でさすり、袖で拂つて見て、さて心の中で語るには、我輩の樣な肥くて皮膚の弱いものは、汗が出て堪まらないが、かういふ物の上に臥して見たら、どんなにか心持が善からうと、かういつたが、もと鄭君の物であつて、わが物で無いから、どうにも、仕方がない。日暮に、役所から家に歸り、惆悵として、殘念で堪まらず、かくの如き簟が萬一賣物に出たならば、家の財產を傾けても、是非買つて見たいと思つた。然るに、鄭君が我が心を推察されたと見えて、長さ八尺もあり、風を含んで自然に漣を生ずるが如き彼の簟を卷いて、我が家に送り屆けられたのは、まことに、思ひがけぬことであつた。そこで、早速、下男を呼び、地を掃除して、これを敷かせた處が、まだ敷き切らぬ内に、光彩照耀し、子供などは、大騷ぎに騷ぎ立てて、大變な物を頂戴したといつて驚いて居る。さて愈よ其簟を展べて見ると、この土地の名物たる蠅も翅を側てて、その上には止まらず、蚤や蝨なども、決して、ここには乘つて參らぬ、おまけに、肅肅として、清い風が吹き起る如く、自然に心持がすがすがしく成つた。そこで、身體を引ッくりかへし、仰向けに安臥して見ると、如何にも愉快で、百病も卽坐に平癒するかと思はれる。すでに之を貰つたからには、何時までも、夏であつて、天日が照りつけて與れれば善いにと思つた程である。この御返禮としては、明月の珠、靑玉の案を以てしても、到底報い盡すことが出來ない、されば、今後君との交誼の時として衰ふることなく、長しへに、親密にして、この好意に報ゆるより外はない。

【餘論】 この詩は、一韻到底で、前に一寸述べた律句を打破る平仄法を嚴重に守つて居る。そして、六句で一意に成つて、段落も分明である。顧嗣立は「この詩、每に反襯の意を用ひて奇を見る。攜來當㆑晝不㆑得㆑臥、却願天日恒炎曦等の句の如き、是れなり。賦物の妙、直に瑣細の處より、體貼して出づ」といひ、朱竹垞は「物象を描寫すること工に、意趣を寫して、亦た妙に入る」といひ、沈德潛は「却願天日恒炎曦、攜來當㆑晝不㆑得㆑臥と、倶に一層を透過するの法」といひ、乾隆御批には「婕好の怨歌に云ふ、常悲秋節至、涼風奪㆓炎熱㆒、と。ここに云ふ却願天日恒炎曦と同一語妙」とある。

豐陵行

(一)羽衞煌煌一百里。
曉出都門葬天子。
羣臣雜沓馳後先。
宮官穰穰來不已。
是時新秋七月初。
(二)金神按節炎氣除。
(三)清風飄飄輕雨灑。
(四)偃蹇旂旆卷以舒。
逾梁下阪笳鼓咽。
(五)嵽嵲遂走(六)玄宮閭。
哭聲(七)訇天百鳥噪。
(八)幽坎晝閉空靈輿。

豐陵行

羽衞煌煌、一百里。
曉に都門を出でて、天子を葬る。
羣臣雜沓、馳する後先。
宮官穰穰、來つて已まず。
この時、新秋七月の初。
金神、節を按じて、炎氣除く。
清風、飄飄として、輕雨灑ぐ。
偃蹇旂旆、卷いて以て舒ぶ。
梁を逾え、阪を下つて、笳鼓咽ぶ。
嵽嵲、遂に玄宮の閭に走る。
哭聲、天に訇いて、百鳥噪ぎ、
幽坎、晝閉ぢて、靈輿空し。

【字解】【一】羽衞 即ち羽林、蔣註に「漢の武帝、羽林を置き、送從を掌る。期門に次するを以て、名づけて、建章營騎といひ、光祿勳に屬し、令丞を置いて、之を領せしむ。後に名を羽林騎と更む、衆ねて、天に羽林星あつて、車騎を主るに象るなり、又國の羽翼たること、林の盛なるが如し」とあり、舊唐書職官志に「左右金吾衞、凡そ車駕出入、すなはち其屬を率ゐて、以て遊隊を清くし、白澤・朱雀等の旗を建て、隊先驅し、鹵簿の法の如し」といふとある。【二】金神 禮記の月令に「孟秋の月、その帝は少皡、その神は、蓐收」とあつて、註に「少皡は白精の君、金天、是れなり。蓐收は、金官の臣なり」とある。【三】清風飄飄輕雨灑 文選東都賦に雨師汎灑、風伯清塵とある。【四】偃蹇 衆盛の貌。【五】嵽嵲 山小にして安からざる貌。【六】玄宮閭 文選の註に「天子后妃、葬るところの墓を玄宮といふ」とある。閭は宮閭、即ち闕舍。【七】訇天 訇は鳴り響く。【八】幽坎 深い穴。【九】賫送 即ち送葬。【一〇】鎖嬪妓 蔣註に「唐制、諸陵、皆宮殿を置き、官寮を列し、嬪妓侍衞を設くること、平生の如し。杜甫橋陵の詩に、宴晚知曙、祠臣朝見星」とある。

皇帝孝心深且遠。
(九)賫送禮備無贏餘。
設官置衞鎖(一〇)嬪妓。
供養朝夕象平居。
臣聞神道尚清淨。
三代舊制存諸書。
墓藏廟祭不可亂。
欲言非職知何如。

皇帝の孝心、深くして且つ遠し。
賫を送り禮備はりて、贏餘なし。
官を設け、衞を置いて、嬪妓を鎖し、
供養、朝夕、平居に象る。
臣聞く、神道は清淨を尙ぶと。
三代の舊制、諸書に存す。
墓藏廟祭、亂るべからず。
言はむと欲するも、職に非ず、知る何如せむ。

【題義】豐陵は順宗の陵で、長安志に「順宗の豐陵は、富平縣の東北三十五里、甕金山に在り」と記し、唐書には「元和元年七月壬寅、順宗を豐陵に葬る」とある。そして、韓愈は、この年六月、江陵より召し還されて國子博士に拜せられたから、丁度、都に居て、この葬儀を實際に見た譯である。蔣註に「終篇言ふ、三代の舊制、諸書に存せり、と。當時の禮必ず古しへに合はざるものあらむ、故に云ふ」とある。すると、この葬儀は、隨分盛であつたにも係はらず、古禮に合はぬ點あるのが遺憾だと

いふので、韓愈が特に此詩を作つたのである。

【詩意】今次の御葬送は、非常に盛なもので、煌煌たる羽林侍衛の鹵簿は、百里も續いて山川を照り輝かし、曉に長安を出でて、やがて豐陵に葬られた。羣臣は雜沓しつつ、馳せて後先し、その間を宮内官などが積積として、彼方此方に來往し、まことに非常な騷ぎである。時しも、新秋七月の初、秋は五行の中でも、金に屬し、一たび金神が節を按ずれば、炎氣忽ち除いて涼しくなり、加ふるに、清風は、飄飄として吹き起り、輕雨は、道に灑いで、天地も、さながら心あつて、靈柩を導くが如く、銘旗を始め、無數の旗などは、或は卷き、或は舒べて打ち續き、橋を渡り、阪を下る間、笳鼓の聲、響き渡り、やがて、山路にさしかかり、御陵の前なる幄舍に到著した。さて愈よ埋葬となると、哭聲天を動かし、百鳥啼き噪ぎ、さうして、靈柩は、深い穴の中に埋められて、靈輿は空になり、初めて其式を畢つた。御葬儀が、此の如く盛に行はれた故に、今上皇帝の孝心の深遠なるが、窺ひ知られる次第で、その禮は、十分に盡されて、毫髮も遺憾なく、次いで、御陵の四方に役所を設け、侍衛を置き、先帝が宮中で召し使つて居られた宮女どもを送つて、其處に滯留せしめ、御掃除をしたり、食物を供へたり、朝夕奉養して、生前宮中に在ます通にした。しかし、私が承りまするには、神道は清淨を貴ぶので、葬送を盛にしたからといつて、それで、宜しいといふ譯でもない。夏殷周三代の舊制は諸書に殘つて居て、墓に葬ることと廟に祭ることとは、全然區別があつて、決して、紊亂しては

ならぬ。つまり、埋葬は、淸淨でさへあれば善いので、成るべく、質素を旨とし、そして、祭祀は十分立派にする。この點から見ると、今回の事は、遺憾ながら、どうも、古儀に合はぬことがある。しかし、予は、其職に非ざるが故に、彼此申し上げることも出來ず、仍つて、この詩を作つた次第である。

【餘論】順宗の送葬の儀が立派であつたといふが、ここに述べただけでは、普通の事で、特異とするところはなく、つまり、紀述が不十分である。結四句、本志のある處は明白であるが、上記の理由に因つて、甚だ振はぬやうである。清風飄飄輕雨灑の四句は、朱竹垞が「淡淡の語、却つて風致あり」といつた通り、さすがに、趣がある。

遊青龍寺。贈崔大補闕

青龍寺に遊び、崔大補闕に贈る

(一)秋灰初吹季月管。　秋灰初めて季月の管を吹き、
(二)日出卯南暉景短。　日は卯南に出でて、暉景短し。
友生招我佛寺行。　友生、我を招いて、佛寺に行く。
正値萬株紅葉滿。　正に萬株紅葉の滿つるに値ふ。
光華閃壁見神鬼。　光華壁に閃いて、神鬼を見る。

【字解】【一】秋灰 吹 灰を吹くことは、前に憶昨行に註して置いた。【二】日出卯南 卯は陽、禮記の月令に「季秋の月、日、房に在り、昏に虚中し、旦に柳中す」とある。【三】炎官 夏の神。【四】張火傘 南史に「王綸、笠傘を以て面を覆ふ」

赫赫炎官張（四）火傘。　赫赫たる炎官、火傘を張る。
然雲燒樹火實（五）駢。　雲を然やし、樹を燒いて、火實駢ぶ。
金烏下啄頳（六）虬卵。　金烏、下り啄む、頳虬の卵。
魂翻眼倒忘處所。　魂は翻り、眼は倒れて、處所を忘る。
赤氣沖（七）融無間斷。　赤氣沖融して、間斷なし。
有如流傳上古時。　流傳上古の時の如きあり、
（八）九輪照燭乾坤旱。　九輪照燭して乾坤旱す。
二三道士席其間。　二三の道士、その間に席し、
（九）靈液屢進頗（一〇）黎盌。　靈液、屢ば進む頗黎の盌。
忽驚顏色變韶（一一）穉。　忽ち驚く、顏色の韶穉に變ずるを。
却信靈仙非怪誕。　却つて信ず、靈仙の怪誕に非ざるを。
桃源迷路竟茫茫。　桃源路に迷うて、竟に茫茫。
（一二）棗下悲歌徒纂纂。　棗下悲歌して、徒に纂纂たり。
（一三）前年嶺隅鄉思發。　前年、嶺隅、鄉思發す。
躑躅成山開不算。　躑躅、山を成し、開いて算せず。
（一四）去歲羈帆湘水明。　去歲、羈帆、湘水明かなり。
霜楓千里隨歸伴。　霜楓千里、歸るに隨つて伴ふ。
猿呼鼯嘯鷓鴣啼。　猿は呼び、鼯は嘯いて、鷓鴣啼く。
惻耳酸腸難濯（一五）澣。　耳を惻しめ、腸を酸にして、濯澣し難し。
思君攜手安能得。　君と手を攜へむことを思へども、安んぞ能く得む。
今者相從敢辭懶。　今は相從うて、敢て懶を辭せむや。
由來鈍騃寡參尋。　由來、鈍騃、參尋寡し。
況是儒官飽閒散。　況んや是れ、儒官、閒散に飽くをや。
惟君與我同懷抱。　惟だ、君、我と懷抱を同じうす。
鋤去陵谷置平坦。　陵谷を鋤き去つて、平坦に置く。
年少得途未要忙。　年少途を得て、未だ忙を要せず。

四八二

とある。【五】火實　珊瑚をいふ。【六】頳虬卵　頳は赤色、韓醇の解に「上聯は、柿葉の紅にして光華の粲然たるを詠じ、下聯は、柿實の赤くして日光の交も映ずるを詠ず。火傘頳虬は、皆、その紅を狀す。しかも、喩を取るの工、かくの如し」とある。【七】沖融　文選海賦に沖融沆瀁とあり、杜甫の詩に動影裊窕沖融間とある。【八】九輪照燭　淮南子に「堯時、十日並に出で、草木焦枯す。堯、羿に命じ、仰いで十日を射り、その九に中り、日中の九烏、皆死し、その羽翼を墮す」とある。【九】靈液　潘岳の笙賦に浸潤靈液之滋とある。【一〇】頗黎盌　頗黎は玻璃に同じ。韻會に「玻璃は、寶玉の名」とあり、本草に「頗黎に作る、云ふ、西國の寶」とある。盌は小盂、ここには柿を食ひしことをいふ。【一一】韶穉　韶には美の意がある、みづみづしく若きこと。【一二】棗下悲歌　潘岳の笙賦に「詠園桃之夭夭、歌棗下之纂纂」、歌曰、棗下纂纂、朱實離離、宛其落矣、化爲枯枝、人生不能行樂、死何以虛謚爲とあり、古咄唶歌に棗下何攢攢、榮華各有時、棗初欲赤時、人從四邊來、棗適今日賜、誰當仰視之とある。按ずるに、上の二句は、安仁の笙賦に本づいて、柿の赤きを喩へたのである。【一三】前年嶺隅　貞元二十年の春、陽山に在りしことをいふ。【一四】去歲羈帆　永貞元年、陽山より江陵に移りしをいふ。【一五】濯澣　詩經の柏舟に如匪澣衣とある。【一六】諫疏尤宜罕　韓愈、かつて上疏事を言ひしに因つて、陽山に

時清諫(一六)疏尤宜罕。　時清く、諫疏、尤、宜しく罕なるべし。
何人有(一七)酒身無事。　何人か、酒あつて身に事なき。
誰家多(一八)竹門可款。　誰が家か、竹多くして、門款くべき。
須知節候卽風寒。　須らく知るべし、節候、卽ち風寒なるを。
幸及亭(一九)午猶妍暖。　幸に亭午に及びて、猶は妍暖。
南山逼冬轉清瘦。　南山、冬に逼つて、轉た清瘦。
刻畫圭角出崖(二〇)竅。　圭角を刻畫して崖竅を出す。
當憂復被冰雪埋。　當に憂ふべし、復た冰雪に埋めらるるを。
汲汲來窺誡遲緩。　汲汲來り窺うて、遲緩を誡む。

貶せらる、故に云ふ。【一七】有酒身無事　史記陳軫傳に「陳軫、秦に使す、犀首を見て曰く、公、何ぞ飲を好むか。曰く、事なければなり」とある。【一八】多竹門可款　晉書王徽之傳に「呉中に士大夫あり、家に好竹あり、これを觀むと欲して、便輿、竹下に造つて諷嘯す」とあり、南史袁粲傳に「丹陽尹となる、郡南の一家、竹石あり、率爾歩して往き、直に竹の所に造つて嘯詠自得すとある。欵は扣く。【一九】亭午　日の午に在ること、卽ち其地の子午線に當る、今の正午に同じ。【二〇】崖竅　莊子に「大竅に爾く」とあつて、竅は空、卽ち穴。

【題義】 靑龍寺は、長安南門の東に在つて、その頃は、著名であつたが、後には、廢して仕舞つた。崔大の大は排行第一、補闕は官名。この人の事は、舊唐書に「崔羣、字は敦詩、淸河武城の人、進士の第に登り、右補闕に累遷す」とあつて、韓愈と同年の進士である。この詩は、韓愈が元和元年、京師に在つて國子博士たる時の作で、前詩より、二三月後であつたと思はれる。ところで、この詩の前半は赤いといふことを形容して、寺の名を靑龍といふに對して、甚だ相應しからぬ樣であるが、東坡の題跋に「退之、靑龍寺に游ぶの詩、終篇、赤色を言ふ、その故を曉るなし。かつて、小說を見る、鄭虔、靑龍寺に寓し、貧にして紙なく、柿葉を取つて書を學ぶ。九月、柿、葉赤くして實紅、退之の詩、乃ち此を寓するなり」とあるを見れば、寺に於ける柿の紅葉を寫したのである。詩中、柿といふことは一字も顯はれて居ないが、その赤いといふのは、全く柿を詠じたものとして見ると、成程と思はれるので、これは取りも直さず、東坡の發明に係るのである。

【詩意】 今しも、管中の灰が九月の處に吹き到つて、太陽は、房星の南より出で、日脚も段段短くなつた。ここに、友人の招に應じて、一緒に靑龍寺に遊びに往つた處、萬株の紅葉が滿ちて居た。寺の壁には、樣樣の神鬼が畫いてあつて、それが、柿の紅葉に映ずれば、一層はつきりと見え、さながら夏の神と稱する熒官が火傘を張つて居る樣である。その眞赤な柿の紅葉の中には、火實の珊瑚の樣なものが纍纍として竝んで居て、金烏が赤い虬の卵を啄んで居た樣に見える。かういふ眞赤な處に這入り込んだから、魂は飜り、目は引くりかへつて、何處とも知らぬ樣な氣がして、現に赤い氣が徐に立ち昇つて、少しも間斷がない樣に思はれる。傳へ聞く、上古の時、九つの太陽が天上に竝び懸つて、乾坤を悉く燒いた爲に、大旱になつたといふが、丁度こんなであつたらうと思ふ位。漸く本堂に辿り著くと、二三の道士が席を敷いて坐つて居たが、取り敢へず、わが一行を迎へ、寺の名物だか

らといつて、玻瓈の盆に柿の實を盛つて、靈液の滴れる樣なのを御馳走して呉れた。その柿の實は赤い光が映るから、わが顔色も、どうやらつやつやしく、俄に若やいだ樣な氣がした。これまで、仙人などは、荒唐無稽なものだと我輩は、思つて居たが、ここに至つて、靈仙の怪誕に非ざることを信じた次第である。むかし、漁父が紅の雲たなびく桃源の路に迷ひ込んで行つたが、覓に茫茫として、再び求め難くなつたといふし、棗の實が赤く熟して居る處へ、人が集まつて來て、それを取つて食ふ、しかし、食つて仕舞へば、誰も跡を顧みないといふ悲歌があるが、二つとも、この場合には全く比擬すべからざることである。予は、前年、嶺南に遷謫せられ、頻りに故鄕の事を思つたが、折しも、躑躅が眞赤に咲いて山を成し、その夥しきことは、全く數へられぬ程で、それが愈よ鄕思を長じたのである。それから、去年江陵に量移されるに就いて、瀟湘を渡つたが、その時は、霜に染め出された眞赤な楓樹が千里も續いて、我が歸るに伴ふやうであつた。その間、猿が悲しく叫んだり、むささびが嘯いたり、又鷓鴣の啼くのを聞いたから、耳を惻しめ、腸を酸くして、滿胸の愁は、洗ひ盡すことが出來なかつた。その時、わが崔補闕の如き肝合へる友人と手を攜へたならばと思つたが、どうしても出來なかつたのに、今日相從つて、ここに同遊することが出來たから、疎懶の故を以て斷ることをも爲さず、わざわざ、ここに參つた次第。本來、我輩は薄のろであつて、他處へ出かけることも少いし、その上、國子博士といふ樣な閒職に居るから、つい出無精に成つて、家に引込み勝ちである。但し君と我とは、懷抱を同じうし、陵谷を鋤き去つて平地に置くといふ樣に、何事でも打ち明けて語り合ふ程、意氣が投合して居る。その上、君は年少にして、前途多望であるから、忙はしげに立ち廻るにも及ばず、殊に刻下は、太平の御代であつて、諫疏を上ることも極めて稀なるべき筈である。むかし、秦の犀首は、事なければ、門を閉ぢて酒を飲むといひ、王子猷は、竹さへあれば、誰の家でも拘はらず、立ち入つて之を見たといふが、實際、身の無事な時には、酒を飲むのも好いし、氣に入つたら、何處でも尋ねるが宜しい。今は秋の末、追追、寒くなつて、その内に外出も出來ぬ樣にならうし、終南山は、すでに冬に逼つて、落葉した跡は、峰もあらはに、一しほ淸瘦の形を爲し、圭角を刻畫した處が、殘りなく顯はれ、斷崖だの深洞などが、はつきり見える。予は、前に述べた通り、平生參尋少く、疎懶の癖を爲すものであるが、やがて、終南の山が氷雪に埋もれる樣に成つては大變だから、汲汲として、是非靑龍寺に游ばうではないかといひ、その遲緩を戒め、早く早くと促き立てて、君と共に玆に參つて、この一日も樂しく過ごした次第である。

【餘論】朱竹垞が「この詩、運意却つて細、又他處粗硬なる者と同じからず」といつた通り、極めて精細なる注意を以て篇を成したので、その初には、柿の葉と柿の實とを寫し、その形容も極めて適切である。その下、桃源と棗下とを借ひ來り、二物ともに赤い物である處から、これを以て柿に反襯せしめ、前年の貶謫より量移に及び、躑躅と霜楓とは矢張色が赤い故に、擡ぎ出して、愈よ赤色を收め

た。次に思君攜手安能得といつて一轉し、今者相從敢辭懶といつて之を承けた處に、開闔の妙があるので、その懶を辭せむやといふ處から、これを解釋する積りで、後段が出て來るので、この邊は、筆致が極めて面白いのみならず、一分の透間もない樣に出來て居る。結末數句は、前の紅葉に轉應して、面白く收束してある。

贈崔立之評事

崔立之評事に贈る

崔侯(一)文章苦捷敏(二)。　崔侯の文章 苦だ捷敏、
高浪駕天輸不盡。　高浪天に駕するも、輸して盡きず。
曾從關(三)外來上都(四)。　かつて、關外より上都に來る。
隨身卷軸車連軫。　隨身の卷軸、車、軫を連ぬ。
朝爲百賦由鬱怒(五)。　朝に百賦を爲つて、鬱怒に由る。
暮作千詩轉遒緊。　暮に千詩を作つて、轉た遒緊。
搖毫擲簡自不供。　毫を搖かし、簡を擲つて、自ら供せず。
頃刻青紅浮海蜃(六)。　頃刻に靑紅、海蜃を浮ぶ。
才豪氣猛易語言。　才豪に、氣猛にして、語言を易くす。
往往蛟(七)螭雜螻蚓。　往往にして、蛟螭、螻蚓を雜ふ。
知音自古稱難遇。　知音、古しへより遇ひ難しと稱す。
世俗乍見那妨哂。　世俗、乍ち見て、那ぞ哂ふことを妨げむ。
勿嫌法(八)官未登朝。　嫌ふ莫れ、法官の未だ朝に登らざるを。
猶勝赤(九)尉長趨尹(一〇)。　猶ほ勝る、赤尉の長く尹に趨るに。
時命雖乖心轉壯。　時命乖くと雖も、心、轉た壯なり。
技能虛富家逾窘。　技能、虛しく富んで、家、逾よ窘む。
念昔塵埃兩相逢。　念ふ昔、塵埃兩つながら相逢ふ。
爭名齟齬持矛楯(一一)。　名を爭うて、齟齬、矛楯を持す。
子時專場誇(一二)觜距。　子は時に場を專にして、觜距に誇り、
余始張軍嚴(一三)韅靷。　余は始めて、軍を張つて、韅靷を嚴にす。

【字解】【一】崔侯　崔君といふに同じ。【二】捷敏　杜甫の詩に敏捷詩千首とある。【三】關外　關は函谷關であらう。【四】上都　首都に同じ、卽ち長安。【五】鬱怒　物足らぬ心持がする。【六】海蜃　史記の天官書に「海旁の蜃氣は樓臺に象り、廣野の氣は宮闕を成す」とあり、陳藏器の本草に「車蜃は是れ大蛤、一名蜃」とある。【七】蛟螭螻蚓　螭は龍の角なきもの、螻はおけら。蔣註に「蚊螭、螻蚓を雜ふとは、その小大齊しからざるを言ふなり」といひ、苕溪漁隱叢話にも「立之の詩、工ならざる處あり、故に、退之、これを以て之を譏る」といつて居る。【八】法官　大理評事を謂ふ、崔立之の官名。【九】赤尉　元和郡縣志に「大唐の縣に赤・畿・望緊・上・中・下の六等あり、京師、治むるところは赤縣たり、京の旁邑は畿縣たり」とある。京城の縣の邑官。【一〇】尹　府尹。【一一】矛楯　尸子に「楚人に矛と盾とを鬻ぐものあり。これを譽めて曰く、吾が盾の堅き、能く陷るなきなり、と。又これを譽めて曰く、吾が矛の利、物に於て陷らざるなきなり、と。或は曰く、子の矛を以て子の盾を陷らば如何、と。その人應ふる

爾來但欲保封疆。(一四)　爾來、但だ封疆を保たむと欲す。
莫學龐涓怯孫臏。(一五)　學ぶ莫れ、龐涓の孫臏を怯るるを。
竄逐新歸厭聞鬧。(一六)　竄逐、新に歸つて、鬧しきを聞くを厭ふ。
齒髮早衰嗟可閔。　齒髮早く衰へて、嗟、閔むべし。
頻蒙怨句刺棄遺。　頻りに、怨句を蒙つて、棄遺すと刺らる。
豈有閑官敢推引。(一七)　豈に閑官にして、敢て推引するあらむや。
深藏篋笥時一發。　深く篋笥に藏して、時に一發。
戢戢已多如束筍。　戢戢、すでに多くして、束筍の如し。
可憐無益費精神。　憐むべし、無益、精神を費す。
有似黃金擲虛牝。(一八)　黃金、虛牝に擲つに似たるあり。
當今聖人求侍從。(一九)　當今、聖人、侍從を求め、
拔擢杞梓收楛箘。(二〇)(二一)　杞梓を拔擢して、楛箘を收む。
東馬嚴徐已奮飛。(二二)　東馬嚴徐、すでに奮飛。

能はず」とある。【一二】擅場詩觜距　文選東京賦に、「秦政利觜長距、終得ニ擅場一」とある。【一三】韅靷　左傳僖公二十八年に「晉の車七百乘、韅靷鞅靽」とあつて、杜預註に「背に在るを韅といひ、胸に在るを靷といひ、腹に在るを鞅といひ、後に在るを靽といふ」とあり、即ち駕乘修備を云ふ。つまり、韅靷は、車の前に繫ぐ馬の飾で、いつでも陣を整へて乘り出さうと用意して居る轡。【一四】封疆　境界。【一五】龐涓怯孫臏　史記孫武列傳に「孫臏、かつて龐涓と倶に兵法を學ぶ。龐涓、魏に事へて、惠王の將軍となるや、自ら以爲へらく、能、臏に及ばずと。陰に臏を召して至らしめ、すなはち、法を以て、その兩足を斷つて、之を黥す」とある。【一六】新歸　その頃、

枚皐卽召窮且忍。(二三)　枚皐、召に卽いて、窮し且つ忍ぶ。
復聞王師西討蜀。(二四)　復た聞く、王師、西、蜀を討つと。
霜風冽冽摧朝菌。(二五)　霜風、冽冽として、朝菌を摧く。
走章馳檄在得賢。(二六)　章を走らし、檄を馳すること、「賢を得る」に在り。
燕雀紛拏要鷹隼。(二七)　燕雀、紛拏して、鷹隼を要す。
竊料二一塗必處一。　竊に二塗を料るに、必ず一に處らむ。
豈比恒人長蠢蠢。　豈に比せむや、恒人の長く蠢蠢たるに。
勸君韜養待徵招。　君に勸む、韜養して徵招を待て、
不用雕琢愁肝腎。　雕琢して、肝腎を愁へしむるを用ひず。
牆根菊花好沽酒。　牆根の菊花、酒を沽ふに好し。
錢帛縱空衣可準。　錢帛、たとひ空しきも、衣、準ずべし。
暉暉簷日暖且鮮。　暉暉簷日、暖にして且つ鮮なり。
摵摵井梧疎更殞。(二八)(二九)　摵摵たる井梧、疎にして更に殞つ。

韓愈は、江陵法曹參軍より、長安に召し還されて國子博士となつた。【一七】閑官敢推引　國子博士は閑職であつて、他人を推引することは六つかしい。崔立之が頻りに詩を寄せて韓愈の推引を望んだから、かく言つたのである。【一八】虛牝　大戴記に「邱陵を牡となし、谿谷を牝となす」とあり、文選殷仲文の詩に「哀壑叩ニ虛牝一」とある。空しき谷。【一九】聖人　天子、即ち憲宗をいふ。【二〇】杞梓　左傳襄公二十六年に「晉の大夫、杞梓皮革、楚より往くなり」とあつて、杜預註に「杞梓は皆木の名」とある。【二一】楛箘　書經に「惟れ箘簵楛」とあつて、孔傳に「箘簵は美竹、楛は矢幹に中る」とあつて、ともに矢を造る材料。【二二】東馬嚴徐　東方朔、字は曼倩、平原厭次の人。司

高士例須憐麴蘖。(三〇) 高士、例、須らく麴蘖を憐むべし。
丈夫終莫生畦畛。丈夫、終に畦畛を生ずる莫れ。
能來取醉任喧呼。能く來つて、醉を取り、喧呼に任かす。
死後賢愚俱泯泯。死後の賢愚、俱に泯泯。

馬相如、字は長卿、蜀郡成都の人。嚴安、臨菑の人。徐樂、燕郡無終の人。【二三】枚皐　漢書本傳に「字は少孺、自ら枚乘の子と稱す、上、得て大に喜び、召して入つて見えて、待詔たらしめ、拜して郎となす」とある。【二四】西討蜀　元和聖德詩に見ゆ。【二五】朝菌　莊子の逍遙遊に「朝菌は晦朔を知らず」とあつて、司馬彪の注に「菌は大芝なり」とある。【二六】走章馳檄　西京雜記に「枚皐は文章敏疾、長卿は制作淹遲、軍旅の際、戎馬の間、書を飛ばし、檄を馳するには、枚皐を用ひ、廊廟の上、朝廷の中、高文典冊には相如を用ふ」とある。【二七】燕雀紛拏要擒隼　禮記に「鷹隼、蚤く鷙つ。孟秋の月、鷹、隼に搏鷙せむとし、鳥を大澤の上に殺し、四面、これを陳ね、これを鳥を祭るといふ」とある。【二八】摵摵　文選盧子諒の詩に「摵摵芳葉零」といひ、潘岳秋興賦に「庭樹摵以灑落」とあつて、李善の注に「摵は枝空しきの貌」とある。【二九】井梧　井戸の側なる梧桐。【三〇】麴蘖　酒をいふ。晉書孔羣傳に「かつて、親舊に書を與へて云ふ、今年、田に七百石の秫米を得たり、麴蘖の事を了するに足らず」とある。

【題義】顧註に「崔斯立、字は立之、博陵の人。貞元四年、侍郎劉太眞、擧に知とし、進士三十六人を放ち、これを中第に立つ」とある。それから、韓愈の作つた藍田縣丞廳壁記に「博陵の崔斯立、種學績文、貞元の初、その能を挾んで、藝に京師に戰ひ、再び進んで、再び人に屈す。元和の初、前大理評事を以て、得失を言うて、官を黜けられ、再轉して、この邑に丞となる」とあり、又この集の卷五に寄崔二十六立之の詩がある。すると、崔立之は、矢張、韓門に列した一人であるが、生來多作家で、詩文を多く作つて、早く出來るといふことを能事として居た。そこで、韓退之は、早く作れば、どうしても疵が出來る、さう疵だらけでは、宜しくないといふことを戒めたので、餘程面白く言ひ廻はしてある。加之、崔立之は、韓退之に向つて、自分を何處かへ周旋して呉れと賴んだが、それが洵に五月蠅いといふ考もあつて、やがて、此詩を贈つたのである。

【詩意】崔君は、文章を作ることが甚だ敏捷であつて、天に駕する高浪と雖も、とても之には及ぶまいと思はれる程の勢で、筆を飛ばせて居る。さきに、函谷關外より長安に來たときは、車一ぱいに卷軸を積み、しかも、一つの車では濟まず、二つも、三つも、車軸を連ねて、おのが書いた文章を搬入した位。それから、入京以後、朝に百篇の賦を作つても、なほ鬱怒として物足らぬ樣な氣がするし、暮に千首の詩を作つても、轉た遒緊として、力が少しも衰へない。始終、筆を搖かし、簡を擲つて、自ら間に合はない位で、頃刻の間に、蜃氣樓の如き靑紅の色が目前に現はれる。但し、才の豪なるまに、氣は非常に猛く、從つて、語言を輕輕しくする惡癖がある。そこで、出來上つたものを見ると、小大齊しからず、往往にして、蛟螭の間に螻や蚯蚓が雜つて居るといふ樣な安配、偉らいことは偉らいが、かういふ缺點がある。世に知音といふものは、むかしから、なかなか遇ひ難いもので、世俗の者は、君が折角持つて來た隨身の卷軸を見ると、みんな詰まらないものだといつて笑ふものが多いが、

そんな事には頓著せず、立派なものを作ることに骨を折られたら善からうと思ふ。君は、今、大理評事の職に居て、法官ではあるが、朝廷に昇殿することを許されぬ身分、しかし、京城附近の地方屬官が府尹の下に奔走して、その御機嫌を伺はねばならぬに比すれば、なほ勝つて居るし、時の運命は、おもふ樣に成らないけれども、心は轉た壯であるし、文筆上の技能に富んで、家は貧窮であつても、そんな事にはかまはない。おもへば昔、我輩が長安に居た時分、塵埃の間に、君と初めて相逢ふことがあつたが、その時は、御互に競爭を爲し、君と名を爭ひ、文學に對する見地が互に齟齬して、矛盾を持し、自然確執を生じたこともあつた。その頃、君は、鬪雞が嘴と蹴爪とを持つて、勝ち誇り、その場を專にする樣な風で、戰を挑んで來たから、我輩も、負けぬ氣になつて、車の前に繋ぐところの駟馬の飾りを用意し、いつでも乘り出すことの出來るやうに、戰鬪準備を整へて待つて居た。その後は、てんでに、封疆を保つて、自分の得た處を奪はれぬ樣にし、相手の弱り切つて降參するまでは、引き上げぬといふ覺悟で居た。しかし、龐涓が往日同學の友たる孫臏を怯れて、その兩足を切り、後には却つて敗られて死んだといふ樣な眞似はせぬ積りであつた。ところが、我輩は、一朝竄逐せられ、漸く近頃、呼び還されて長安に歸つたが、年の寄つた爲めか、兎角鬧がしい事は聞きたくも無い樣な氣がするし、齒も拔け、髮も薄くなつて、衰老の態は、まことに憐むべき程である。それだのに、君からは、頻りに、詩文を寄せて、怨の文句を列べ、我輩が舊友の誼を忘れて棄てッぱかして置くが如く思つて、非常に譴責される樣な口ぶり。我輩は、今、國子博士の職に居るが、もとより、閒官であつて、人才を天子に推薦することが出來る程、勢力のあるものではない。それだのに、君から、ひどく怨まれるといふのは、まことに困り入つた次第。それも、一度位なら、我慢も出來るが、つづけざまに度度申し越され、深く文箱の中に藏つてあるが、取り出して見れば、戢戢として、その多く集まれることは、雨後に羣がつて出た筍の如く、まことに夥しいものである。こんな無益の事に精神を費されるのは、まことに、御氣の毒の事で、折角、黃金を持ちながら、谿谷の中に拋り込むと一般、頓と役にも立たぬことである。しかし考へて見れば、今上皇帝は、英明の資を以て上に在まし、しきりに侍從の臣を求められ、杞梓の如き、楛箘の如き、何でも役に立つものは擢用されるとのことで、東方朔、司馬相如、嚴安、徐樂の樣な、古しへ漢の武帝の侍臣にも比すべき者が、羽ぶりを利かして御膝元に集まつて居るとのことであるから、彼の枚皐の如き敏捷の才を持つて居る君が、やがて召し出されるのは、無論の事であるから、たとひ、窮したとても、暫時忍耐して居るが善からうと思ふ。それでないにしても、王師は、近ごろ、西、蜀地の叛賊を平定せむとして、戰爭が始まり、晦朔を知らぬ朝菌を凜冽たる霜風が一擊の下に摧くやうな勢である。その場合に、章を走らし、檄を馳せ、軍中の文書を扱ふには、然るべき賢才が必要であるが、燕雀の如き詰まらぬ者どもが紛拏して付き纏ふだけで、鷹隼に比すべき俊秀の人は、是非無くてはならぬことと思ふ。かくの如く、天子は侍從を求め

られるといひ、討蜀の軍中にも文士が入用だといひ、剋下、二つの道があるから、必ず其一に居る樣なことにならうと思ふので、凡人の樣に、何時までも、蠢蠢然として、頭を擧げる時なくして、一生を終ることは無いと、我輩は斷言する。されば、そんなに、焦せらずに、韜晦靜養して、召し出しの御沙汰あるまで、心のどかに待つて居れば善いので、文章を雕琢して、肝腎を愁へしめる樣な事をして、我輩にばかり當つて、小言の百萬陀羅を述べ立てるにも及ぶまいと思ふ。今しも秋で、籬の菊花は、盛に咲き出し、酒を飲むには持つて來いといふ時節。君は、貧乏して、錢帛の貯へも無いといふが、著て居る衣類は有らうから、これを質に置けば、酒位はいつでも買へる、檐に當る晴日は、暉暉として、暖く且つ鮮で、背を曝らすにも好いが、この際、愚圖愚圖して居ると、井上の梧桐の疎なるが擺ひ落されるといふ寒い時節にも成らう。この間、高士の例に漏れず、酒でも飲んで鬱を遣るのが第一。君とても天晴の大丈夫、まさか、我輩が骨を折つて周旋せぬからといつて、畦畛を生じて隔てをされる樣な事はあるまい。若し、君が我輩の家に尋ねて來られたならば、君が如何に罵り騷ぐとも、それには拘はらず、面白さうに酒を飲んで醉つて見せやう。死後の事は、賢愚、ともに泯泯として亡びて仕舞ひ、一切無差別であつて、生きて居る内には、十分に酒を飲むに限ると思ふ。

【餘論】顧嗣立は「長篇韻を換へず、氣一にして直下す、藻潤あるを以て、故に迫切せず、又洗鍊し得て淨し、遒緊の味あり、故に諷詠に足る」といひ、朱竹垞は「崔の長ずるところは、能く速なるに在り、故に首に挑歛といふ。枚皐を引くも、亦た是れ速なるの意。細に此詩を玩べば、還た是れ、その蜀に入るを贊す」といひ、簡單ながら、極めて的確である。要するに、全體が詰らぬ俗事であるが、それを想化して、周匝を極めたのは、例の當行本色で、韓退之なればこそ、巧妙に出來て居るが、うつかり之を學ぶと、飛んでもない鄙俗な者に成るから、特に注意せねばならぬ。それから、乾隆御批には「可憐無益費₌精神₋、千古文人の爲に喟息す」とある。

送₌區弘南歸₋

區弘の南に歸るを送る

穆[一]昔南征軍不ﾚ歸。　穆、むかし、南征して、軍、歸らず、
蟲沙猿鶴伏以飛。　蟲沙猿鶴、伏して以て飛ぶ。
洶[二]洶洞庭莽[三]₌翠微₋。　洶洶たる洞庭、翠微莽たり。
九[四]疑鑱ﾚ天荒₌是非₋。　九疑天に鑱して、是非荒たり。
野有₌象[五]犀₋水貝璣[六]。　野には象犀あり、水には貝璣。
分₌散百寶₋人士稀。　百寶を分散して、人士稀なり。

【字解】【一】穆昔南征　抱朴子に「周の穆王、南征す。三軍の衆、一朝盡く化して、君子は猿となり、鶴となり、小人は蟲となり、沙となる」とあり、造化權輿には「周の昭王南征」とあるが、皆未だ本と何に據るかを詳にしない。【二】洶洶洞庭　楚辭に「聽₌波聲之洶洶₋」とある。【三】莽翠微　離騷に「夕攬₌洲之宿莽₋」とあ

我遷于南日(七)周圍。
來見者衆莫(八)依稀。
爰有區子熒(九)熒暉。
觀以彝訓或(一〇)從違。
我念前人譬葑(一一)菲。
落(一二)以斧引以纆徽。
雖有不逮驅騑(一三)騑。
或採(一四)于薄漁于磯。
服役不辱言不譏。
從我荊(一五)州來京畿。
離其母妻絕因依。
嗟我道不能自肥。
子雖勤苦終何希。

我、南に遷され、日周圍す。
來り見るもの衆く、依稀たるなし。
ここに區子あり、熒熒として暉あり。
觀すに彝訓を以てすれば、或は從違。
我念ふ、前人の葑菲に譬ふるを。
落すに斧を以てし、引くに纆徽を以てす。
逮ばざるありと雖も、驅つて騑騑たり。
或は薄に採り、磯に漁す。
服役辱ぢず、言譏らず。
我に從つて、荊州より京畿に來る。
その母、妻を離れて、因依を絕つ。
嗟、我、道自ら肥ゆること能はず。
子勤苦すと雖も、終に何をか希はむ。

つて、王逸註に「洲草、冬を經て死せざるもの、楚人、名づけて宿莽といふ」とある。翠微は、爾雅に「山未だ上に及ばざるを翠微といふ」とあつて、邢昺の疏に「未だ頂に及ばず、旁の陂陀に在るの處を謂ふ。一說に、山氣青縹色」とあり、蜀都賦に鬱荂藍以翠微とある。【四】九疑 前に見ゆ。湘中記に「九山相似て、行くもの疑惑す、故に九疑と名づく」とある。蔣註に「荒是非とは、豈に此を以てするか」とある。【五】象犀 爾雅に「南方獸の美なるもの、梁山に犀象あり」と見ゆ。【六】貝璣 書經に「大貝、西方に在り」といひ、その疏に「貝は贏の屬、古へ、貝を貨として龜を寶とす」とある。璣は大珠。【七】日周圍 太陽が廻つて一年を經たといふこと、王註に「貞元九年冬、公、陽山に謫せられ、明年冬、弘來る、故に日周圍といふ」とある。【八】莫依稀 依稀はさもにたりといふことで、人らしいものは居らぬといふ義。【九】熒熒 その瞳が綺麗に澄んで居る、卽ち聰明なること。【一〇】從違 或は從ひ、或は違ふ。【一一】葑菲 詩經に「采葑采菲、無以下體」とあつて、一部分が惡いからといつて、全體を棄ててはならぬ。【一二】落以斧引以纆徽 朱熹の解に「ここに纆徽といふは、木工用ふるところの繩墨を謂ふなり、然れども、周易に徽纆に作る。乃ち黑索たり、罪人を拘ふる所以のもの。恐らくは公の用ふるところ、別に據あるなり」とある。蠻人の數に逮つて居る處は斧で切り落し、又曲つて居る處は纆徽で引い

王都觀闕雙巍巍。
騰蹋衆駿事鞍鞿。
佩服上色紫(一六)與緋。
獨子之節可嗟(一七)唏。
母附書至妻寄衣。
開書拆衣淚痕晞。
雖不敕還情庶幾。
朝(一八)暮盤羞惻庭闈。
幽(一九)房無人感伊(二〇)威。
人生此難餘可祈。
子去矣時若發機。
蜃沈海底氣昇霏。
彩雉野伏朝扇(二一)翬。

王都の觀闕、雙んで巍巍たり。
騰蹋たる衆駿、鞍鞿を事とす。
佩服せる上色は、紫と緋と。
獨り子の節、嗟唏すべし。
母は書に附して至らしめ、妻は衣を寄す。
書を開き、衣を拆いて、淚痕晞く。
還れと敕せずと雖も、情は庶幾す。
朝暮の盤羞、庭闈を惻ましむ。
幽房、人なくして、伊威を感ず。
人生、これのみ難く、餘は祈るべし。
子去れ、時は機を發するが若し。
蜃は海底に沈み、氣は昇霏。
彩雉、野に伏して、朝扇は翬なり。

（二二）處子窈（二三）窕王所妃。 處子の窈窕たるは、王の妃とするところ。

苟有令德隱不（二四）腓。 苟くも、令德あらば、隱るとも腓まず。

況今天子鋪德威。 況んや、今、天子德威を鋪き、

（二五）蔽能者誅薦受禨。 能を蔽ふ者は誅せられ薦むるものは禨を受く。

出送撫背我涕揮。 出でて送つて、背を撫し、我が涕を揮ふ。

行行正直愼（二六）脂韋。 行行正直にして、脂韋を愼め。

業成志樹來頎（二七）頎。 業成り、志樹つて、來つて頎頎たるは、

我當爲子言天（二八）扆。 我、當に子の爲に天扆に言ふべし。

て之を矯める。それから、この句は、七字であるが、上三下四になつて居るので、張文潛は「古人、七言の詩を作る、その句脈、多くは上四字にして下、三字を以て之を成す、退之乃ち句脈を變じ、上三下四を以てす、落以井引以繘徽、欲墾悔舌不可捫、是れなり」といひ、何義門は「漢の鐃歌上邪篇に云ふ、山無陵江水爲竭、又汝南堂謠に云ふ、飯我豆食羹芋魁。その句脈、皆上三字、略ぼ斷つ、韓子必ず本づくあるなり」といつて居る。【一三】騑騑 詩經に四牡騑騑とあつて、毛傳に「行いて止まらざる貌」とある。【一四】採于薄漁于磯、蔣註に「草木の叢生するを薄といふ、磯は磧なり」とある。【一五】荊州 江陵を指す、唐書地理志に「江陵府、江陵郡は、本と荊州南郡」とある。蔣註に「元和元年六月、公、江陵より召されて國子博士となる、弘、公と倶に京師に至る」とある。【一六】紫與緋 唐書輿服志に「文武三品已上は紫を服し、四品は深緋を服し、五品は淺緋を服す」とある。【一七】嘵嘵 嘵は欷と同じ、哀んで聲なきな啼といふ。【一八】朝暮登蔗侍庭闈 文選束晳の補亡詩に「馨爾夕膳、潔爾晨羞」とあり、又眷戀庭闈、心不遑安とある。【一九】幽房 潘岳の哀永逝文に「撫靈櫬兮訣幽房」とある。【二〇】伊威 爾雅に「伊威委黍」とあり、郭璞の註に「舊說鼠婦」とある。又詩の豳風に「伊威在室」とあつて鄭箋に「家に人なく、惻然人をして感傷せしむ」といひ、陸德明の音義に「伊威、並に字の如し、或は旁に虫を加ふるものは、後人增すのみ」とある。つまり鳴蟲の一種と見える。【二一】朝扇擧 爾雅に「雉、つまり、五彩皆備はつて、翬を成すを翬といふ」とあつて、郭璞の註に「翬も亦た雉の屬、その毛色の光鮮なるをいふ」とある。蔣註に「朝扇は宮扇なり、雉尾を以て之を爲る、故に此に言ふ、雉、野に伏して、その羽、用つて朝廷の儀と爲すべし、上句と同意」とある。【二二】處子 莊子の逍遙遊に「綽約として處子の若し」とある。【二三】窈窕 詩經に窈窕淑女とある。【二四】不腓 詩經に百卉具腓とあつて、毛傳に「腓は病むなり」とある。蔣註に「これ、言ふは、それ苟くも令德あらば、隱約に在りと雖も、以て病と爲さず」とある。【二五】蔽能者誅 漢書に「賢を進むれば上賞を受け、賢を蔽へば顯戮を蒙る」といへると同義。【二六】脂韋 楚辭に如脂如韋以潔楹乎とあつて、王逸註に「脂韋は柔弱、曲るなり」とある。【二七】頎頎 詩經に碩人其頎とあつて、鄭箋に「言ふは儀表長麗俊好、頎頎然たり」とある。【二八】天扆 朝廷。

【題義】區は歐の古字、唐韻に「區冶子の後、漢王莽傳に、中郎區博あり」と記してある。この區弘は、南方の人で、韓退之が陽山令に貶謫された頃から、附隨して、書生同樣に召し使はれ、退之が其後江陵に量移し、やがて長安に召し還される時も、その供をして往つたが、久しく、父母の膝下を離れて居るからといつて、今度暇を貰つて故鄕に歸省するので、これを送る爲に作つたのである。

【詩意】南方の地は、未開の蠻境ともいふべく、むかし、周の穆王は南征したが、全軍覆滅して、北に歸ることが出來なかつた。その時、三軍の中で、君子の魂は、化して猿となり、鶴となり、小人の兵卒どもの魂は、化して蟲となり、沙となつたといふことで、おもひおもひに、地に伏して飛び廻はつた儘、盡く異物となつて仕舞つた。かくの如く、南方は、征服することも六つかしく、古來帝王が

手古摺つた地域である。その地形を言へば、洞庭湖は洶洶として、波浪その中に湧き、周圍には、山が聳えて、灌木が一ぱい生ひ茂つて居る。九疑といふ山は、天を刺して峙ち、九つの峰が竝び立つて居るといふが、雲霧の中に在つて、はつきりと見えぬから、本當か、うそか、分からない。野には象や犀が居るし、水には貝だの眞珠などがある。かくの如く、百寶を分散した儘、利用せずに棄てて置き、そして、文明的な士人は、極めて稀である。我輩も、その南方の地に貶謫せられ、丁度一年を經過したが、この間に尋ねて來た人は、隨分あつたが、この人はと思ふ樣なものは、一人も居なかつた。然るに、ここに區弘といふ男があつて、その瞳は、綺麗に澄んで、いかにも聰明らしく、これに示すに、聖人の敎を以てすると、從ふこともあるが、違ふこともある。もとより、人には十全を望むべからず、下體を以て葑菲を棄ててはならぬといふ前人の言葉もあることだから、どうかして、これを引き立てて遣りたいと思ひ、聖人の敎に違つて居る處は、斧で切り落し、曲つて居る處は、墨繩を引いて之を矯め直し、精精力を盡した甲斐があつて、力及ばぬまでも、決して、進行を止めたことはなかつた。そこで、始終自分の側に召し使ひ、或は藪に往つて薪を采り、或は河原で魚を捕り、いかなる賤役を命じても、決して辱とせず、苛酷に取り扱つても、蔭口を一つ言つたことは無い。その後、我輩は、江陵に量移せられ、それから長安に召し還された。區弘は、その間、常に附き隨ひ、故鄕には母があり妻があるが、それ等に別を告げ、依るところを失つても、なほ且つ我輩に從つて來た位で、この志は、まことに殊勝である。しかし、我が道ばかり修めて、天晴、學者に成つた處で、それでは、飯が食へず、折角、骨を折つて、我輩に仕へて呉れて、それで行く末どうなるかといはれる。それは甚だ氣の毒で、我輩には、格別あても無いのである。現に王城の内には、立派な宮門が二つ竝んで、巍然として雲に聳え、高位大官の人人は、駿馬に鞍を置いて、得意氣に乘り廻はし、その人人は、紫とか、緋とか、色合鮮にして、等級に隨ふところの大禮服を上に著用して居る。わが道を修めたからといつて、直にかういふ高位大官に成れるといふ譯でもないのに、我輩の如き貧儒に從つて、どこまでも道を修めやうといふ心の節義は、まことに嗟嘆すべき程である。然るに、この頃、故鄕から便りがあつて、母は手紙を寄越し、妻は仕立て上げた著物を送つて來たので、取り敢へず、その手紙を披見し、その著物を取り出すと、乾いては居るが、兩つながら、淚の痕が確に認められるので、特に歸つて來いとは手紙にも書いてないが、情思厚く、歸つて來て貰ひたいと思つて居ることが分かる。朝に、晚に、盤羞を進むる時、母は何となく物淋しく、庭闈の團欒を缺くことを嘆いて居るであらうし、妻は、主人が居らぬに因つて、幽房に人なく、折から、伊威の蟲の聲に感じで、一層悲しい心持で居ることであらう。區弘は、この手紙と著物を見て、歸意が動いたに相違ないが、それとは打ち出し兼ねて居た。我輩は、これを察して、一先づ返すことにした。本來、母を慰めることは、その生前に限るので、人生、これのみは難く、その他の事は、おのが祈誓を籠めさへすれば、どんな事でも、出來

るのである。されば、貴公は取り敢へず歸省しろ、悉圖悉圖せずに、すぐに出發せよと命じた。抑も、人は德さへあれば、自然顯はれるもので、特に自ら顯はれることを求めるには及ばぬ。蜃といふ大きな蛤は、海底に沈んで居るが、時あつて、氣を吐き出せば、蜃氣樓を爲すし、五彩の色を持つて居る雉は、始終野に伏して居るが、その羽は、宮扇を造る爲に用ひられるし、處子の窈窕たるものは、やがて、君王の妃とも成れるので、おのが身に令德だにあらば、如何なる處に隱れて居ても、決して、憂ふるに足らぬ。殊に、方今の世は、天子が普ねく德威を鋪かれ、能を蔽ふものは誅せられ、賢才を推薦したものは、必ず幸福を受けるといふ位であるから、歸鄉した後は、修養を怠らぬ樣にして欲しい。そこで、門を出でて汝の遠行を送り、その背を撫して、覺えず淚を揮つたので、行け、行け、正直なる汝は、愼んで曲りくねりの無い樣にし、いつまでも正直であれかし、さて愈よ業成り、志立つの日が來たならば、何時でも上京するが善い、その時は、及ばずながら、力を盡して、汝の爲に、朝廷に推薦するから、今回は、安心して歸鄉し、ただ其本分を忘れぬ樣にして居て貰ひたい。

【餘論】　この詩も、每句押韻せる例の柏梁體であるが、普通の詩の如く、二句宛續けて讀むと、往往分からぬ處があるので、一句一意に見ねばならぬ。そして、それが、柏梁體の本色である。李光地は「公の陽山に在るや、區冊あり、江陵に在るや、又區弘あり、皆相從つて、舍つるに忍びず、故に弘の公に京師に從つて歸るや、詩以て之を送り、惓惓訓勗して、正に歸す、直に詠ずべく感ずべし」といひ、朱竹垞は「全く氣力を以て驅使し、僅に古詞の歌意を襲ぐ、すべて是れ變體」といひ、何義門は「溫柔敦厚、聲、その志の如し。惓惓藹藹、謂はゆる伯牙の琴絃か。氣味、平子の思玄賦に出づ」といひ、乾隆御批には「分散百賓人士稀、西南邊徼の地脈風氣を道ひ盡す、柳州の謂はゆる人少くして石多きなり。雖不敕遣情庶幾、語意深婉、游子、これを讀まば、以て無聲に聽くべし」とある。

三星行

（一）我生之辰。月宿（二）南斗。
我が生の辰、月、南斗に宿し、

（三）牛奮其角。（四）箕張其口。
牛その角を奮ひ、箕、その口を張る。

牛不見（五）服箱。斗不（六）挹酒漿。
牛は箱に服するを見ず、斗は酒漿を挹せず。

箕獨有神靈。無時停簸揚。
箕、ひとり神靈あり、時として簸揚を停むるなし。

無善名已聞。無惡聲已讙。
善無きも、名、すでに聞こえ、惡なきも聲すでに讙す。

名聲相乘除。得失少有餘。
名聲相乘除、得失少しく餘あり。

（七）三星各在天。（八）什伍東西陳。
三星各〻天に在り、什伍、東西に陳す。

嗟汝牛與斗。汝獨不能神。
嗟、汝、牛と斗と、汝、獨り神なる能はず。

【字解】【一】我生之辰　辰は時、詩經に我辰安在とある。【二】南斗　北斗と對して南方に在る、斗は枡で、六星を連ねると枡の形になる。【三】牛　牽牛、二十八宿の一。詩經の大東に睆彼牽牛、不以服箱とあつて、毛傳に「河鼓、これを牽牛といふ」とあり、孔穎達は「車內物を容るる處を箱となす」とある。【四】箕　同じく二十八宿の一、詩經の大東に維南有箕、不可以簸揚とあつて、正義に「鄭氏云ふ、箕星は踵狹くして舌廣し」とある。【五】服箱　車を引く【六】挹　酌む。【七】三星各在天　詩經に三星在天とあるを用ふ。【八】什伍　縱橫に同じ、南斗は六星、牽牛は六星、箕四星、これが縱橫に竝んで居るをいふ。

【題義】三星は、箕斗牛であつて、その三者が、名實相副はぬ樣に、自分は、兎角無い事を人に言はれて、訾毀されるが、それも、自然の運命であるから、諦める外はないといふ意を詠出したのである。

【詩意】我輩の生まれた日は、星廻りが惡かつたのかも知れぬが、その日、月は南斗に宿り、片方に牽牛が現はれて、角を奮つた樣な光を放ち、片方に箕の星が現はれて、口を張つた樣な安排に成つて居た。牽牛は、光だけ見えるが、その牛が車を引いたといふことは聞かぬし、斗は枡であるが、斗星が酒を挹んだといふことは聞かぬ。唯だ、幸にも、箕といふ星だけは、神靈があると見えて、始終行動して、簸揚することを止めない。かくて、我輩の一生は、絕えず動いて行きつつある譯である。そんなに善い事をした覺えは無いが、韓退之の名は、逸早く人に知られ、又惡い事は、もとより爲ないが、どうも變な奴だといつて、口喧ましく人から譏られて居る。そこで、雙方の評判を乘除して考へると、どうも得るところ少くして、失ふところ多く、つまり、變な奴だといふ譏りの方が多いやうであつて、身體が常に簸揚して、落ち付かぬのも、尤もなことである。我輩が生まれた時、三星が天に在つて、什什伍伍といふ樣に、各〻東方に羅列せしに拘はらず、牽牛南斗は、聊かも神異なること能はず、唯だ箕のみが靈あつて、それが、我が運命の中に現はれるといふのは、如何にも不思議な事である。

【餘論】東坡志林に「韓退之の詩、我生之辰、月宿南斗、乃ち知る、退之は磨蝎を以て身宮と爲すを。僕、磨蝎を以て命宮と爲す。平生多く謗譽を得たり、殆んど同病なり」とあつて、東坡も亦た韓退之と星まはりが同じだといふことである。兪瑒は「奇趣、却つて大東の詩より來り、變化自ら妙、用韻凡そ五轉、古歌謠に似たり」といひ、朱竹垞は「すべて、詩の南箕北斗より演じ來り、大約戲に近し」といつて居る。

剝啄行

剝啄行

(一)剝剝啄啄。有客至門。　剝剝啄啄、客あり門に至る。
我不出應。客去而嗔。　我出でて應へず、客去つて嗔る。
從者語我。子胡爲然。　從者、我に語る、子、胡すれぞして然ると。

我不厭客。困于語言。　我、客を厭はず、語言に困む。
欲不出納。以堙其源。　出納せずして、以て其源を堙がむと欲す。
空堂幽幽。有秸有莞。(二)　空堂幽幽、秸あり、莞あり。
門以兩板。叢書於間。　門、兩版を以て、書を間に叢む。
窅窅深塹。(三)其墉甚完。　窅窅たる深塹、その墉、甚だ完し。
彼寧可隳。此不可干。　彼は寧ろ隳るべきも、此は干すべからず。
從者語我。嗟子誠難。　從者、我に語る。嗟、子、誠に難し。
子雖云爾。其口益蕃。　子、爾云ふと雖も、その口、益す蕃からむ。
我爲子謀。有萬其全。　我、子の爲に謀るに、萬、その全きあり。
凡今之人。急名與官。　凡そ今の人、名と官とに急なり。
子不引去。與爲波瀾。(四)　子、引き去らずむば、與に波瀾を爲せ。
雖不開口。雖不開關。　口を開かずと雖も、關を開かずと雖も、
變化咀嚼。有鬼有神。(五)　變化咀嚼、鬼あり、神あり。
今去不勇。其如後艱。　今去つて勇ならずむば、其れ後艱を如かむ。
我謝再拜。汝無復云。　我謝して再拜す、汝復た云ふ無かれ。
往追不及。來不有年。(六)　往は追へども及ばず、來は年あらざらむや。

【字解】【一】剝剝啄啄　剝啄は門を敲く聲。【二】有秸有莞　秸は藁、莞は蒲の類で席を造るに用ふ。書經に「三百里は秸服を納る」とあり、詩經に下莞上簟とあり。禮記の郊特牲に「莞簟の安くして、蒲越藁鞂の尙き」とある。【三】深塹　漢書高帝紀に「漢王、壘を高うし、塹を深うし」とある。【四】與爲波瀾　蔣註に「與、或は以に作る。韓文、與、多く以に作る。佚文見るもの一に非ず。詩の之子歸、不我以、註に、以は猶ほ與のごときなりと。今按するに、陸宣公奏議、亦た然り、未審云云以否と云ふが如きの類なり。然れども、當に與に作るを正と爲すべし」とある。【五】有鬼有神　左傳昭公十五年に「讒人交も其間に鬭ひ、鬼神にして之を助く」とある。【六】來不有年　諸本に來可待に作る、方世擧の說に「公の祭十二兄文、其不有年、以補我愆、同じく此義なり」とある。

【題義】蔣註に「元和元年、江陵より召され、入つて國士博士となつて作るなり。公、讒を被つて、出でて陽山に令たり。ここに至りて、召し還さる、又これを謗るものあり。故に三星行に云ふ、名聲相乘除、得失少有餘、と。剝啄行に云ふ、我不厭客、困于語言、欲不出納、以堙其源、と。各激するところあつて云ふのみ。歐陽文忠、剝啄行に擬して、趙少師に寄するに云ふ、剝剝復啄啄、柴門驚鳥雀、故人千里駕、信士百金諾、云云、と。然れども、公は讒に遠ざかり、謗を避け、客を謝し、以て其源を埋めむと欲す、故に其塹を深くし、其墉を堅くし、干すべからざるものと爲さむこ

とを要す　而して歐陽は、故鄕に歸老して、欣然客の至るを喜ぶ。これを以て、その辭、同じからざること、かくの如し」とある。すると、この詩も矢張、前詩と同意で、韓愈が都に歸つた後、兎角、誹謗するものが多く、世の中がうるさくて耐まらぬから、一室の中に引込んで、決して、さういふ者と交際はせぬ樣にするけれども、都に居る以上は、矢張、人に惡く言はれるといふ意を面白く述べたのである。

【詩意】剝剝啄啄と客が來て門を敲く、どんな奴が來やうが、返事さへしなければ、やがて歸るだらうといふので、一切出でて應せず、門を敲くに任かせて置くと、果然、客は歸つて仕舞つたが、それからして、韓退之は不都合な奴で、門前拂ひを食はすといつて、觸れ廻るに相違ない。そこで、從者が我に向つて、貴君も餘りひどいではありませぬかといつた。我、これに答へて、おのれは、格別客を厭ふといふ譯ではないが、話をするのが面倒臭い、逢へば話もせねばならぬから、一切さういふ人が出入しない樣にしたならば、その源を塞ぐことに成ると思つて、ここに及んだ始末である。わが家は、空堂幽幽として、薄暗い部屋の土間には藁が敷いてあるし、その上には莞の席が展べてある。門は、ちやんと兩扉になつて居るのを、しつかり閉ぢて、その間には、樣樣の書物を集めてある。前には、一つの塹があつて、窅窅として深く、それから、垣根も堅固に出來て居る、尤も垣根だけは打破れるが、とても自分の居間に侵入することは出來ない。それで、客が來ても默つて居ると、やがて、歸つて仕舞ふのであるといつた。すると、從者が又いふには、それは、甚だ宜しくない。貴君は、そんな事をいつて澄して居られるが、彼等は、貴君が逢はなかつたのを怒つて、益す貴君を誹謗するに極まつて居る。私が貴君の爲に謀つて、一つの萬全の策を獻じまするが、刻下この都に居る程の人は、おのが名と官とを得たいと思つて、あせつて居るばかりであるのに、その中に包まれても引き去らず、ともに波瀾を爲して居られる上は、いくら、口を開くまい、門を開くまいといつた處で、先方が承知せず、鬼神の如き變化を以て、種種に咀嚼して、愈よ誹謗するにきまつて居るから、さういふことを爲すのが間違であつて、早く引き上げるだけの勇氣が無くてはならぬ。いつまでも、こんな事をして居ると、後難があるに相違なく、決して御爲めに成りますまいといつて忠告をして呉れた。そこで、我は、再拜して之を謝し、なる程、分かつた。もう何も言つて呉れるな、既往の事は、今さら、仕方がないとして、これから、將來の時日に於ては、何とか工夫を致すことにしやうと、かう申した。

【餘論】この一篇は、古色があつて、極めて面白く、朱竹垞は「鍛語極めて古、然れども、詩に似ず、只だ箴銘に類す」といつた。

青青水中蒲　三首

青青水中の蒲　三首

青青水中蒲(一)。下有一雙魚(二)。　青青たり水中の蒲、下に一雙の魚あり。

君今上隴去。我在與誰居。　君、今、隴に上つて去る、我在れども、誰と居らむ。

青青水中蒲。長在水中居。　青青たり水中の蒲、長く水中に在つて居る。

寄語浮萍草。相隨我不如。　語を寄す浮萍の草、相隨ふこと我は如かず、

青青水中蒲。葉短不出水。　青青たり水中の蒲、葉短くして水を出です。

婦人不下堂。行子在萬里。　婦人堂を下らず、行子萬里に在り。

【字解】【一】蒲　がま、水草の名。【二】一雙魚　杜甫の詩に一雙白魚不受釣とある。【三】隴　即ち隴山、今の陝西隴州に在つて、その阪九回、上らむと欲するもの、七日に至るといひ、樂府に隴頭流水、鳴聲幽咽、遙望秦川、肝腸斷絕とある。【四】浮萍　浮くさ。【五】行子　征夫に同じ。

【題義】例の如く、起句を以て題を塡した。全篇の趣旨は、男兒たるもの、志、四方に在るが故に、區區として、家を守つて居る譯に行かぬが、婦人は、常に家を守り、終始渝らざるべく、如何なる困難に遭つても、節を屈しないといふ意を述べたので、古樂府、飮馬長城窟行の青青河畔草や、長歌行の青青園中葵と略ぼ同義である。全體、三首であるが、諸本、一首に作つたものもあるし、又その意が聯關して居るから、一首と見て解釋しても差支はあるまいと思はれる。

【詩意】水中に青青した蒲があつて、その下には、魚が二尾居る。魚でさへ、番ひをなして居るのに、君、今遠く出征し、隴山に上つて去れば、我は、此に在るも、誰と共に居るべきぞ。蒲は、長しへに、水中を離れず、浮草は、波のまにまに風に任かせて、何處へでも隨つて行く。われは、夫に別れても、一つ處に留まつて居るので、絕えず、其處を換へる浮草に及ばない。蒲の葉の短きは、水より出です、我は婦人の身で、長しへに堂を下らざるも、男兒は、志、四方に在るが故に、萬里の遠きに出征して仕舞つた。あはれ、空閨を守る我が身の上、まことに孤寂の感に堪へられぬ。

【餘論】第一首は、孤寂の身、魚の雙を爲すに若からざるを嘆じ、第二首は、一つ處に居る身は、相隨つて遷る浮萍と異にして、あくまで、操を變へぬといひ、第三首は、男女各〻其の宜しきを異にすることを言つたので、三首、ひとしく青青水中蒲に就いて發興し、その比擬各〻異にし、その間に、深淺輕重の別ある處が面白く、まさしく、詩經の筆致を學んだものである。されば、胡應麟は「退之青青水中蒲の三首、頓に六朝を安しとせざるの意あり、然れども張王樂府の如き、是に似て非なり、兩漢五言を取つて熟讀すれば、自ら見ゆ」といひ、朱竹垞は「語淺く、意深く、藻繪を鍊つて平淡に入るべし」といひ「篇法は毛詩を祖とす、語調は漢魏の歌行のみ」といひ、何義門も亦た「三章眞に古意」といつた。

孟東野失子　幷序

孟東野子を失ふ　幷に序

東野連產三子。不數日。輒失之。幾老。念無後以悲。其友人昌黎韓愈。懼其傷也。推天假其命以喩之。

【訓讀】東野連りに三子を產む、數日ならずして、輒ち之を失へり。幾んど老いなむとして、後なきを念うて、以て悲む。その友人、昌黎の韓愈、その傷らむことを懼るるや、天を推し、其命を假つて、以て之に喩す。

失子將何尤。吾將上尤天。　子を失うて將に何をか尤めむとする、吾將に上天を尤めむとす。

女實主下人。與(一)奪一何偏。　女、實に下人を主れり、與奪、一に何ぞ偏なる。

彼於女何有。乃令蕃且延。　彼、女に於て何か有らむ、乃ち蕃くして且つ延かしむ。

此獨何罪辜。生死旬日間。　これ獨り何の罪辜、生死旬日の間。

上呼無時聞。滴地淚到泉。　上に呼べども時に聞くことなし、地に滴れて、淚泉に到る。

地祇爲之悲。瑟縮久不安。　地祇、これが爲に悲み、瑟縮、久しうして安んせず。

乃呼(二)大靈龜。騎雲款天門。　乃ち大靈龜を呼んで、雲に騎して、天門を款かしむ。

問天主下人。薄厚胡不均。　天に問ふ、下人を主る、薄厚胡ぞ均しからざるや。

天曰天地人。由來不相關。　天曰く、天地人、由來相關せず。

吾懸日與月。吾繫星與辰。　吾、日と月とを懸く、吾、星と辰とを繫ぐ。

日月相噬齧。星辰踣而顚。　日月は相噬齧し、星辰は踣いて顚る。

吾不女之罪。知非女由緣。　吾、女を之れ罪せず、汝の由緣に非ざるを知ればなり。

且物各有分。孰能使之然。　且つ物各〻分あり、孰れか能く之をして然らしむ。

有子與無子。禍福未可原。　子あると子なきと、禍福未だ原ぬべからず。

魚子滿母腹。一一欲誰憐。　魚子は、母の腹に滿てり、一一誰か憐まむとする。

(三)細腰不自乳。擧族長孤鰥。　細腰は、自ら乳せず、族を擧げて長しへに孤鰥あり。

鴟(四)梟啄母腦。母死子始翻。　鴟梟は、母の腦を啄み、母死して子始めて翻る。

(五)蝮蛇生子時。坼裂腸與肝。　蝮蛇は、子を生む時、腸と肝とを坼裂す。

好子雖云好。未還恩與勤。　好子は好しと云ふと雖も、未だ恩と勤とを還さず。

惡子不可說。鴟梟蝮蛇然。　惡子は說くべからず、鴟梟蝮蛇然り、

有レ子且勿レ喜。無レ子固勿レ歎。　子ありとも、且つ喜ぶ勿れ、子なくとも、固より歎ずる勿れ。
上聖不レ待レ教。賢聞レ語而遷。　上聖は教を待たず、賢は語を聞いて遷る。
下愚聞レ語惑。雖レ教無レ由レ悛。　下愚は語を聞いて惑ひ、教ふと雖も悛むるに由なし。
大靈頓頭受。卽日以レ命還。　大靈、頓頭して受く、卽日、命を以て還る。
地祇謂二大靈一。女往告二其人一。　地祇、大靈に謂ふ、女、往いて其人に告げよ。
東野夜得レ夢。(六)有レ夫玄衣巾。　東野、夜、夢を得たり、夫あり玄衣巾、
(七)闃然入二其戶一。三稱二天之言一。　闃然として、其戶に入り、三たび天の言を稱す。
再拜謝二玄夫一。收レ悲以歡忻。　再拜して玄夫に謝し、悲を收めて以て歡忻す。

【字解】【一】與奪一何偏　莊子に「彼を奪うて此に與ふ、一に何ぞ偏なるや」とある。【二】大靈龜　爾雅に「二に曰く靈龜」とあつて、郉昺の疏に「緖書、靈龜は玄天五色、神靈の精なり」とある。【三】細腰　蜂の屬、爾雅に「果蠃蒲盧」とあつて、郭璞の註に「卽ち細腰蠭なり」とあり、博物志に「細腰には雌雄の類なし、桑蟲或は阜螽の子を取り、抱いて己の子と成す、詩に謂はゆる螟蛉有レ子、果蠃負レ之なるものなり」とある。【四】鴟梟　爾雅に梟鴟といひ、郭璞の註に、土梟とあり、說文に「梟は母を食ふ、不孝の鳥」とある。【五】蝮蛇　楚辭、宋玉の招魂に蝮蛇蓁蓁とあり、羅願の爾雅翼に「蝮、母胎に在るの時、その毒氣發作、母、腹を齧いて、乃ち生まる」とある。【六】有夫玄衣巾　史記龜策傳に「江使神龜、河に使す、漁者、これを得たり。龜、夢に宋の元王に見ゆ、一丈夫を見る、頸を延べて長頭、玄繡の衣を衣て、輜車に乘す」とあり、古今註に「龜、一名は玄衣、督郵」とある。【七】闃然　公羊傳に「これを闚けば闃然、すなはち公子陽生なり」とあり、說文に「闃は馬の門を出づる貌」とある。

【題意】韓愈の自序の意味は「孟東野は、續けて三人の子供を擧げた處が、三人とも、生まれて數日ならざるに死んで仕舞つた。若い時なら、すぐ後から又子の出來る望もあるが、老に垂んとする身では、後來子供の出來ることも覺束ないといふので、後なきを思うて、自ら悲んだ。そこで、その友人、昌黎の韓愈は、彼が體をこはす樣なことがあつては成らぬといふので、天を推し、其命を假り、まことに仕方が無いから、諦める外はないぞといつて喩す爲に、此詩を作つた」といふのである。孟郊が鄭餘慶の留府の實佐となつたのは、元和二三年の頃であるから、韓愈の此詩も、大方その時分だらうと思はれる。そこで、孟郊の集を檢すると、先づ悼幼子の一首がある。

一閉二黃蒿門一。不レ聞二白日事一。生氣散成レ風。枯骸化爲レ地。負二我十年恩一。欠二爾千行淚一。灑二之北京上一。不レ待二秋風至一。

次に杏殤の九首があつて、その序に「杏殤は花乳なり、霜翦つて落つ、因つて、昔嬰を悲む、故に是詩を作る」とあつて、見るものに就いて興を起し、いつまでも、その悲を忘れ得なかつたものと思はれる。その詩は、左に記する通りである。

凍手莫レ弄レ珠。弄レ珠珠易レ飛。驚霜莫レ翦レ春。春翦無二光輝一。零落小花乳。爛斑昔嬰衣。拾レ之不レ盈レ把。日暮空悲歸。

地上空拾レ星。枝上不レ見レ花。哀哀孤老人。戚戚無レ子家。豈若二沒レ水鳧一。不レ如二拾レ巣鴉一。浪數破便飛。風雛裊相誇。芳嬰不二復生一。向レ物空悲嗟。

應二是一線涙一。入二此春木心一。枝枝不レ成レ花。片片落剪レ金。春壽何可レ長。霜哀亦已深。常時洗レ芳泉。此日洗レ涙襟。

兒生月不レ明。兒死月始光。兒月兩相奪。兒命果不レ長。如何此英英。亦爲弔二蒼蒼一。甘爲二墮レ地塵一。不レ爲二末世芳一。

踏レ地恐二土痛一。損二我芳樹根一。此誠天不レ知。翦二棄我子孫一。垂枝有二千落一。芳命無二一存一。誰謂主人家。春色不レ入レ門。

冽冽霜殺レ春。枝枝疑二纖刀一。木心既零落。山竅空呼號。班班落レ地英。點點如二明膏一。始知天地間。萬物皆不レ牢。

哭此不レ成レ春。涙痕三四斑。失レ芳蝶既狂。失レ子老亦孱。且無二生生力一。自有二死死顏一。靈鳳不二銜訴一。誰爲扣二天關一。

此兒自見レ哭。花發多不レ諧。窮老收二碎心一。永夜抱二破懷一。聲死更何言。意死不二必喈一。病叟無二子孫一。獨立猶東柴。

霜似レ敗二紅芳一。剪啄二十餘雙一。參差呻二細風一。噞喁沸二淺江一。泣凝不レ可レ消。恨壯難二自降一。空遺二舊日影一。怨二彼小書窓一。

されば こそ、韓愈は、その悲を消すが爲に、此詩を作つて贈つたのである。

【詩意】子供が亡くなつたに就いて、誰を咎めむとするか、上、天を咎めるより外に仕方がない。そこで、孟東野は、何といつて天を咎めたかといふと、天よ、汝は實に下土の人の主でありながら、與奪を爲すに、どうも甚だ偏頗で、公平ならぬは、如何なる故か。彼の子福者とても、天に對して特別の關係がある譯でもないが、何故に之を眷顧して、子孫を蕃延せしめたのであるか。この孟東野は、天に對して、如何なる罪があつて、三人の子供を、いづれも、旬日の間に死なして仕舞つたのであるか。孟東野は、かくの如く、上に向つて叫んだけれども、天は之を聞いて、返事をする様子もなく、日日號哭し、その涙は、地に滴れて、九泉にも達する位。さうなると、地祇は、流石に默つても居られず、これが爲に、ひどく悲み、恐れ入つて縮み上り、久しく落ち付かぬ有様であつたが、やがて、大靈龜を呼び出し、雲に乘つて、遠く天門を敲き、そして、天に向つて、その理由を尋ねさせた。靈龜は天に向つて、天は下人に主たるものであるのに、厚薄の均しからざるは如何なる故かといふと、天は之に答へて、元來、天地人は三才と稱せられるが、個個別物であつて、相互の間に關係のある譯でもない。天には日と月とが懸つて居り、星と辰とが繫がれて居る。しかし、日月でさへも互に呑噬して、喰ひ合ふことがあつて、日蝕月蝕といふ變が起るし、星辰も、時としては、踏いて倒れ、即ち流星だの、

彗星だのといふものが、現出する次第である。天は、かかる變事があつたからといつて、地祇を罪しないのは、元と地祇と何等の關係もないといふことを知つて居るからである。然るに、今、汝、即ち地祇の方から、天は人間に對して厚薄があると不平がましいことを言つて、天を詰問するのは、以ての外の事で、不届至極である。物には各〻分があつて、銘銘自然に得て來た上は、誰が然らしむるといふ譯でもないから、仕方がない。それから、子が有るから福、子が無いから禍といふ譯でもない。試に例を擧げると、魚の腹の中には、幾つ卵があるか分からぬ位、それで、魚にも、矢張、親子の情は有るかどうか。細腰といふ蜂の一種は、自分に子が出來ない處から、他の蟲の子を取つて來て、それを養つて、自分の子とする。鴟梟は、不孝な鳥で、母が卵を孵して之を育てると、雛が段段長ずるに從つて、母の腦を食ひ、母を殺してから初めて飛ぶといふ話。蝮蛇は、生まれるときに、母の腹を裂いて出る。して見れば、たとひ、子が有つた處で、好い子は好いに相違ないが、それでも、父母の恩愛と辛勤とに報ゆるといふ譯には行かぬ。まして、惡い子であれば、まことに御話にも成らないので、即ち鴟梟蝮蛇と同じ樣なものである。されば、子が有るからとて、一向喜ぶこともなければ、子が無いからといつて、何も深く嘆息するに及ばぬ。元來、上聖は、歎を待たず、生まれながらにして、この理を知つて居るし、賢人は、初こそ疑ふかも知れないが、この話をして聞かせると、これを聞いて還り、成程と合點する。唯だ困まつたのは下愚の輩であつて、いくら話をしても、聞けば聞く程、惑を生じ、敎へてやつても、到底、改悛することが出來ない。孟東野の如きも、氣の毒ながら、下愚の奴であるから、何といつて泣かうが、喚めかうが、決して構はないで、打棄てて置くのである。天が此の如く言つたから、靈龜は、一言もなく恐れ入り、頭を下げて、其命を受け、如何にも御尤もな仰せ、いづれ地祇に申し傳へませうといつて、即日、天からの返事を傳へて歸り、地祇に向つて、その話をした。すると、地祇も、ほとほと感じ入り、如何にも道理至極な次第、然らば、とてもの序に、汝、大靈龜、これから往つて、孟東野に其話をして聞かせろといはれた。その爲めでもあらう、ある夜、孟東野の夢の中に、黑い衣、黑い頭巾を著けた男が現はれ、闖然として其戸に入り、孟東野に向つて、天の言はれた通りの言葉を、三度も繰り返して聞かせた。孟東野も、流石に分かつたと見えて、再拜して、かの黑裝束の男に謝し、その後は、悲を收め、今までとは打つて變つて、機嫌の善い喜びの顏を見せるやうになつた。

【餘論】王伯大は「黃魯直、かつて、この詩を書して石君美に遺る。君美、子を失ふといふ、時に以て觀覽し、用つて思を亂して哀を舒ぶべし。物理を究め觀るに、その實、かくの如し、大概、因果のみ。退之、世弊を救はむとし、故に因果を幷せて言はす、と。然れども、この一段の文意、乃ち是れ涅槃經中の佛語。退之、かつて言ふ、讀まざるところなき能はずして、能く大儒たるものあらず、それ信ならざるかと。魯直言ふところ、かくの如し」といひ、兪瑒は「用韻、もと先字を主とし、眞文元

寒删の諸韻を兼入す、此日足可惜の一首と同法」といひ、朱竹垞は大靈龜を呼び出す一段を評して「但だ直說す、頗る亦た古朴、然れども猶ほ是れ詩の變格」といひ、何義門は「先生、早年の詩、好んで巉巖を爲し、以て怪巧を出す。元和後は、多く古樸に歸す、謂はゆる姦窮變怪得、往往造平淡と。又云ふところ、意を用ひずして、功益す奇老。これ等の詩の如き、愈よ樸淡、愈よ奇古」といひ、乾隆御批には「龜筴傳、祝詞に云ふ、假之玉靈夫子、而上行於天、下行於淵と。詩、大靈を以て端を發するは、これに本づく」とある。

陸渾山火、和皇甫湜用其韻

陸渾山火、皇甫湜に和して其韻を用ふ

皇甫補官古賁渾。（一）　皇甫、官に補せらる、古しへの賁渾。
時當玄冬澤乾源。　時、玄冬に當つて、澤、源を乾かす。
山狂谷（二）狠相吐吞。　山狂し、谷狠りて、相吐呑し、
風怒不休何軒軒。　風怒つて休まず、何ぞ軒軒たる。
（三）擺磨出火以自燔。　擺磨火を出して、以て自ら燔く。
有聲夜中驚莫原。　聲あり、夜中驚いて原ぬるなし。
天跳地（四）踔顚乾坤。　天は跳り、地は踔つて、乾坤を顚へす。
赫赫上照窮崖（五）垠。　赫赫上照して、崖垠を窮む。
截然高周燒四垣。　截然高く周つて、四垣を燒く。
神焦鬼爛無逃門。　神焦れ、鬼爛れて、逃るる門なし。
（六）三光弛隳不（七）復暾。　三光弛隳して、復た暾かならず。
虎熊麋豬逮猴猿。　虎熊麋豬逮び猴猿、
水龍鼉龜魚與黿。　水龍鼉龜魚と黿と、
鴉鴟鵰鷹雉鵠鵾。　鴉鴟鵰鷹雉鵠鵾、
（八）燖炰（九）煨爊孰飛奔。　燖炰煨爊せられて、孰れか飛奔する。
（一〇）祝融告休酌（一一）卑尊。　祝融休を告げて卑尊を酌む。
錯陳齊（一二）玫闢華園。　齊玫を錯陳して、華園を闢く。
芙蓉披猖塞鮮繁。　芙蓉披猖、塞がつて鮮繁。
千鍾萬鼓咽耳喧。　千鍾萬鼓、耳に咽びて喧し。

【字解】【一】賁渾　公羊傳、宣公三年に「楚子、賁渾の戎を伐つ」とあつて、何休の註に「賁は、音六、渾は音奔、左傳に陸渾に作る」とある。【二】谷狠　狠は拗れる。【三】擺磨出火　互に磨擦して火が出る。【四】地踔　羽獵賦に踔天蟜とあつて、李善註に「踔は踰ゆるなり」とある。【五】崖垠　かぎり、文選東京賦に「北動幽崖、南燈朱垠」とある。【六】三光　日月星をいふ。【七】不復暾　再び明かならず。【八】燖炰　燖は說文に「湯中に肉を爚るなり」とあつて、ゆでること。炰は、廣韻に「毛を含んで物を炙るなり」とあつて、毛蒸しにすること。【九】煨爊　煨は說文に「盆中の火なり」とあつて、盆の中に在る火などで炙ること。爊は、廣韻に「物を灰中に埋めて熟さしむるなり」とあつて、灰の中に埋めて蒸燒にすること。【一〇】祝融　火神、左傳昭公二十九年に「火正を祝融といふ」とあり、又「顓頊氏、子あり、黎といふ、祝融と爲す」とある。王伯大の說に「火行の冬に於ける、猶ほ祝融休を告げて歸るがごときなり」とある。【一一】酌卑尊　尊卑の等級の者を會して、

(一三)攢雜(一四)啾嘈沸(一五)篪塤。　攢雜啾嘈として、篪塤を沸かしむ。
(一六)彤幢絳旆(一七)紫纛旛。　彤幢絳旆、紫纛旛。
炎官熱屬朱冠褌。　炎官熱屬、冠褌を朱にせり。
(一八)髹其肉皮通(一九)髀臀。　その肉皮を髹にして、髀臀に通す。
(二〇)頳胸垤腹車(二一)掀轅。　頳胸垤腹、車、轅を掀ぐ。
(二二)緹顏(二三)韎股豹(二四)兩鞬。　緹顏韎股、豹の兩鞬。
霞車(二五)虹靷日(二六)轂轓。　霞車虹靷、日の轂轓。
(二七)丹蕤(二八)縓蓋(二九)緋繙帑。　丹蕤縓蓋、緋として帑を繙へす。
紅帷赤幕羅(三〇)脤膰。　紅帷赤幕、脤膰を羅ぬ。
(三一)衁池波風肉陵(三二)屯。　衁池、波風、肉の陵屯。
(三三)谽谺鉅壑頗(三四)黎盆。　谽谺たる鉅壑は頗黎の盆。
(三五)豆登五山(三六)瀛四罇。　五山を豆登にして、瀛は四罇。
熙熙(三七)醻醻笑語言。　熙熙醻醻、笑うて語言す。

(三八)雷公(三九)擘山海水翻。　雷公、山を擘いて、海水翻り、
齒牙(四〇)嚼齧舌腭反。　齒牙嚼齧、舌腭反す。
電光(四一)䃸(四二)磹赬目暖。　電光䃸磹、赬目暖なり。
(四三)頊冥收威避(四四)玄根。　頊冥威を收めて、玄根を避く。
斥棄輿馬背(四五)厥孫。　輿馬を斥棄して、厥孫に背く。
縮身(四六)潛喘拳(四七)肩跟。　身を縮め、潛に喘いで、肩跟を拳む。
君臣相憐加愛恩。　君臣相憐んで、愛恩を加へ、
命黑(四八)螭偵(四九)焚其元。　黑螭に命じて偵はしめ、其元を焚かる。
天闕悠悠不(五〇)可援。　天闕悠悠として、援づべからず。
夢通(五一)上帝血面論。　夢に上帝に通じて、血面にして論す。
(五二)側身欲進叱(五三)於閽。　身を側て進むと欲すれば、閽に叱せらる。
帝賜九河(五四)湔涕痕。　帝、九河を賜うて、涕痕を湔はしめ、
又詔(五五)巫陽反其魂。　又巫陽に詔して、其魂を反さしむ。

酒盛りをする。【一二】齊玫　子虛賦に其石則赤玉玫瑰とあつて、晉灼の註に「玫瑰は火齊珠なり」とある。【一三】攢雜　集まり交る。【一四】啾嘈　廣韻に「啾唧は小聲、嘈囋は大喚」とある。【一五】篪塤　二つとも笛の類、郭璞の爾雅註に「塤は土を燒いて之を爲り、篪は竹を以て之を爲る」とある。【一六】彤幢絳旆　ともに赤い旗。劉熙の釋名に「幢は容なり、これを車蓋に施せば、童童然として、以て形容を隱蔽するなり」とある。それから、周禮に「通帛を旃となす」とあり、爾雅に「繂に因るを旆といふ」とあつて、郭璞の註に「帛續を以て旐となす、その文章に因つて復た之を畫かず」とある。【一七】紫纛　東京賦に方釳左纛とあつて、その註に「犛牛の尾を以てす、大斗

の如し、駱馬の頭上に置いて、以て馬目を蔽し、相見しめざるなり」とある。【一八】髹其肉皮　周禮に「髹車に飾あり」とあつて、その註に「髹は漆赤多く黑少きなり」とある。赤漆で皮肉を燒きつける。【一九】髀臀　髀は脾と通ず、ひばら。【二〇】頳胸垤腹　逞ましき胸、ぼてぼてした腹。垤は凸に同じ。【二一】掀轅　轅を擧げて車が動き出す。【二二】緹顏　字林に「緹は帛の丹黃色」とあつて、やや黃みがかつた赤色。【二三】韎股　韎は赤色と茜草で染めた韋。【二四】豹兩鞬　方言に「弓を盛る、これを鞬」とあつて、豹の皮で造つた弓袋。【二五】虹靷　靷は手綱。【二六】日轂　太陽を車輪として動き出す。【二七】丹蕤　蕤は流蘇、即ちふさ。【二八】縓蓋　爾雅に「一染、これを縓

徐命之前問何寃。 徐に之に命じて前ましめ、問ふ何の寃。
火行於冬古所存。 火行、冬に於ける、古しへ存する所。
我如禁之絶其飧。 我、もし之を禁ずれば、其飧を絶たむ。
(五六)女丁婦壬傳世婚。 女丁、壬に婦として、世を傳へて婚す。
一朝結讐奈後昆。 一朝、讐を結ばば、後昆を奈かむ。
時行當反愼(五七)藏蹲。 時行反るに當つては、愼んで藏蹲せよ。
視桃(五八)著花可小騫。 桃の花を著くるを視ば、小しく騫るべし。
(五九)月及申酉利復怨。 月申酉に及ばば、怨を復するに利あらむ。
助汝五(六〇)龍從九(六一)鯤。 汝を助けて、五龍、九鯤に從はしめむ。
溺厥邑囚之崑(六二)崙。 厥邑を溺らして、之を崑崙に囚へむとす。
皇甫作詩止(六三)睡昏。 皇甫、詩を作つて、睡昏を止む。
辭誇出(六四)眞遂上(六五)焚。 辭誇つて、眞より出で、遂に上焚す。
要余和(六六)增怪(六七)又煩。 余が和增を要して、怪又煩。

とあつて、郭璞の註に「今の紅なり」とある、赤色の東萱。【二九】 絳旆帶 廣韻に「旆は風の旗を吹く貌」とある。帶は旗の類。【三〇】 賑腯 祭の肉、周禮太宗伯に「賑腯の禮を以て兄弟の國に親む」とあつて、その疏に「社稷の肉を賑といひ、宗廟の肉を腯といふ」とある。【三一】 衁池波風 左傳僖公十五年に「士、羊を刲る、亦た衁なきなり」とあつて、杜預註に「衁は血なり」とある、血の池。【三二】 皷屯 屯は聚まる。【三三】 谽谺 大なる貌、郭璞の解に「澗谷の形容なり」とある。【三四】 頳黎盆 頳黎は赤玉の名、すでに前に見ゆ。【三五】 豆登 ともに肉を盛る祭器、爾雅に「木豆、これを豆といひ、瓦豆これを登といふ」とある。【三六】 瀛四瀆 四瀆を以て酒罇とな

雖欲悔舌不(六八)可捫。 悔いむと欲すと雖も、舌捫るべからず。

す。五岳を豆登とし、瀛は四瀆といつて、後の方を葱と引つくりかへして、齷齪せしめた處は、文章上の遊戯で、まことに面白い。【三七】 酬酢 酬は酒を飲むこと。酢は酬、主人より客に進むること。【三八】 雷公 王充論衡に「圖畫の工、雷の狀を圖すること、連鼓の如し。又、一人を圖して、力士の若く、これを雷公といひ、左手をして鼓を連ね、右手これを推さしむ」とあり、抱朴子に「雷神を雷公といふ」とある。【三九】 擘山 述征記に「華山首陽、本と一山、巨靈擘開して以て河流を通す」とある。【四〇】 舌腭 腭は顎、即ちあご。【四一】 霹靂 電公の閃く貌。【四二】 睅目暖 は廣韻に「大目なり」とあつて、赤い目が大きい。【四三】 頊冥 禮記の月令に「孟冬の月、その帝は顓頊、その神は玄冥」とあり、又左傳昭公二十九年に「水正を玄冥といふ」とある。頊冥は、顓頊と玄冥とを併稱す。【四四】 玄根 底の闇黒なる根據地、玄は水、根は底。【四五】 背厥孫 水は木を生じ、木は火を生ずといふのが、五行相生の說で、火は木の孫に當つて居る。その孫にいぢめられて、これに背くといふ義。【四六】 潜喘 ひそかに知れぬやうに息をする。【四七】 拳肩跟 拳は曲げる、跟は足の踵、肩や踵をすぼめて小さく成つて居る。【四八】 偵 偵察する。【四九】 其元 その頭。【五〇】 不可援 援は攀援、即ち攀ぢる。【五一】 血面論 血だらけの顏になつて訴へる。【五二】 側身 身を側てる。【五三】 吐於閽 閽は門番、門番から吐かられる。【五四】 九河 九州の有らゆる河の水。【五五】 巫陽 宋玉の招魂に「帝告巫陽曰、有人在下、我欲輔之、魂魄離散、汝筮與之」とあつて、王逸註に「巫陽は、天帝の女なり」とある。【五六】 女丁婦壬傳世婚 丁は火、壬は水、丁の火の女は、水の壬に向つて其婦となつて、世世相婚する筈であるといふ義。左傳昭公九年に「鄭の裨竈曰く、火は水妃なり」とあつて、杜預註に「火は水を畏る、故に之が妃となる」とある。又十八年に「梓愼曰く、水は火の牡なり」とあつて、杜預註に「牡は雄なり」とある。そこで、洪興祖は、丁は火なり、壬は水なり、火は女なり、水は男なり。丁女にして壬は婦となる、故に曰く、女丁婦壬と。一に夫丁婦壬に作る。亦た通ず。夫丁とは壬なり。言ふは、壬、丁の夫となるなり。壬を婦とするものは丁なり、言ふは、丁、壬の婦と爲るなり」といひ、朱子は「按ずるに、丁は陽中の陰たり、壬は陰中の陽たり、故に女の丁たるもの、壬に婦たりと言ひ、以て水火の相配するを見る。今、術家亦た丁、壬と合すといふ。洪氏二說、皆

是なり」といつて居る。【五七】愼蔵蹕　愼んで耐へて躡んで居る。【五八】桃著花　禮記の月令に「仲春の月、始めて雨水、桃始めて華さく」とあり。漢書に「杜欽、王鳳に說いて曰く、來春桃花の水盛にして、羨溢せむ」とあり、水衡記に「黃河の水、十二月各名あり、二月、三月、名づけて桃花水といふ」とある。桃の花の咲く頃になれば、少しく頭を上げるが善い。【五九】月及申酉　舊註に「申は七月、酉は八月、水は申に生じ、火は酉に死す、故に水は申に至つて利、火は酉に至つて怨む」とあるが、あとの方が面白くないので、利復怨は、水の利と火の怨とを並立したのでないので、怨を復するに利ありと讀まなければ適切でない。【六〇】五龍　なぜ五といつたか分からぬが、四海と中國とを併稱したのであらう。【六一】九鯤　九は大數、數多き意。【六二】崑崙　水經に「崑崙の墟は、西北に在り、嵩高を去ること五萬里。河水、その東北陬に出づ」とある。【六三】止睡昏　ねむ氣ざましにする。【六四】出罠　罠を寫すといふ上に出て居る。【六五】上焚　これを焚いて上天に告げる。【六六】和增　餘計なものを和して作つた。【六七】怪又煩　構想奇怪にして、辭句煩冗なること。【六八】不可捫　詩經に、「莫レ捫二朕舌一」とあつて、捫はさする、撫でる。舌を撫でても間に合はぬ。

【題義】皇甫湜は前に總說中に略傳を記して置いた通り、字は持正、睦州新安の人、元和元年、進士の第に擢んでられ、陸渾尉となつた。陸渾は、本と周の畿內の地、秦晉が陸渾の戎を伊川に遷したといふことがある。漢には、立てて陸渾縣となし、唐書地理志には「陸渾縣は河南道河南府に屬す、陸渾山、一名方山」とある。ここに韓退之の門人皇甫湜が、陸渾の尉となつて赴任した處が、その地の山は、樹木が非常に茂つて居る處から、木と木と擦れ合つて、山火事に成つたのを目擊して、陸渾山火と題する詩を作つて、韓退之が見せた。すると、韓退之は、非常に面白いといふので、その韻を用ひて、この詩を作つたのである。詩中に時當二玄冬一澤乾レ源とあるから、韓退之が東都に分司たる時で、前詩に次いで、大方、元和三年の頃であらうといふことである。劉攽の說に「唐人賡和の詩、次韻あり、その次に依つて韻を用ふ、依韻あり、同じく、一韻の中に在り、用韻あり、彼の韻を用ひて、必ずしも之に次せず、公の陸渾山火に和する、是れなり。然れども、持正の詩は傳はらず」とあつて、用韻が普通の次韻と異なつて居ることは、殊に記憶して居て貰ひたい。

【詩意】門人の皇甫湜といふものが、古しへの賁渾、即ち今の陸渾の地方官に補せられて、新に赴任した處が、時は玄冬に際し、いづれの澤も、その水源が皆涸れて居た。それで山が狂ひ谷が拗ねて、互に相吐呑するやうに成つたのは、如何した譯かといふと、風が軒軒として、怒號して止まぬからである。かくて木と木とが磨擦して火を發し、つまり木が自分で火を出して、大へんな山火事を始めた。そのばちばちといつて燃える聲を聞いた時、はじめは、何に本づくか、考へても分からなかつたが、窓を明けて見ると、天も跳り、地も踔つて、乾坤を顚覆せむばかり。その焰は、赫赫として、眞赤に上昇し、空の續くかぎり、その光が徹底して居るし、又橫に燃え廣がつては、東西南北、何處までも限りある處まで燒き拂ふといふ勢である。山中に栖んで居た鬼神どもは、火に燒き立てられて、焦頭爛額の憐れな姿となり、逃げ出す口もなく、その心持では、日月星辰、謂はゆる三光までも、最早無くなつたと思ふ位である。鬼神すら其通りであるから、山中に居る虎とか、熊とか、鹿とか、野猪とか、乃至猿猴の類、又水中に住む龍とか、鼉とか、龜とか、魚とか、黿とか、次に鳥の類では、鴉だの、梟だの、鵰だの、鷹だの、雉だの、鵠だの、鶤だののいふやうなものは、この大火の爲に、茹で上げら

れたり、毛蒸し燒にされたり、火で炙られたり、埋め燒に成つたりして、飛奔し去る暇もなかつた。火神の祝融は、今まで、やつと働いて燒き立てて居たが、やがて、全山燒け盡し、鳥獸の類まで、皆燒け死んで仕舞つたので、もう仕事も濟んだ、ここらで、ちよつと一休みといつたやうな風に、休みを告げて、妻子眷屬、長幼尊卑の類を召し寄せて、のんきに酒宴を始めた。その席上には、火齊玫瑰などいふ赤い玉を錯陳し、立派な花園を開いて、その中に芙蓉の花が今を盛りと咲き出でたるを折り取り、花瓶の中に一ぱい挿み、それが、極めて鮮かに見える。そして、音樂を始め、千鐘萬鼓が鳴り出して、耳に喧しく、啾として極めて小さい聲や、嚄として頗る大きな響を集め、箎塤を吹き立てる聲は、さながら、沸くが如くである。それから、赤い旗どもを立て、紫色の大纛を翻し、祝融の幕下に隷屬して居るものは、皆炎官熱屬と稱する火神の一類であつて、帽子は固より、腰卷に至るまで、いづれも火に因んで眞赤であるし、衣裳ばかりでなく、その皮膚筋肉は、赤漆で燒き付けた樣な色をして居て、脊中から尻に至るまで、ずつと眞赤である。それ等の者が、逞ましい胸、ぼてぼてした腹をして、車に打乘り、そして、そろそろ轅が動いて走り出す。それをよく見ると、赤い顏をして、股には赤い皮袋をあてた者どもが、豹の皮で作つた一雙の弓袋をかけ、霞の車に虹の手綱で、太陽を車輪として走り廻り、車の飾とした房も赤く、車蓋も赤く、そして、緋の色の旗を車の上に押し立て、帷も、幕も、亦た眞赤であつて、その車上には、祭肉を積み上げ、血の池が風に波立つかと疑はれ、肉は丘陵の如く堆くなつて居る。彼等は、谽谺たる巨壑の樣に大きな口を開いて、赤い頗黎盆に盛つた其肉を食ふのである。かくて、五嶽を以て豆登の食器に充て、四方の瀛海をば酒罇となし、例の祝融の眷屬どもは、熙熙然として、さも樂しげに獻酬して、娛樂をなし、䚡䚡しく笑ひどよめいて居る。その鬼どもが物を食ふ時に、齒を無茶苦茶に嚙んで、顎を動かす聲は、雷公が山を劈いて、海水を翻すやうであるし、食し畢つて、恐ろしく大きな目を見張ると、さながら、電光が礔礰として暗中を照らす樣である。ここに、祝融と反對の仕草をするのは、水の神で、その一番の頭は顓頊、その下に使はれて居るのは玄冥であるが、顓頊でも、玄冥でも、祝融の暴ばれ廻るには、いたく閉口し、その威を收め、ぢつと身體を縮めて、水底なる根據地に避難を爲し、その勢の善い時、輿に乘り、馬に跨り、意氣揚揚として往來せしには似もやらず、その輿馬を盡く打棄てて、水からいへば孫に當る火が跋扈して、どうにも始末に終へぬといふので、これに背いて逃げかくれ、身を縮め、息を潛め、肩や踵をすぼめて居る。しかし、何時までも、こんな風をしては居られぬといふので、顓頊と玄冥と、君臣相憐んで、愛恩を加へ、何とか工夫はあるまいかと、色色考へた末、ひそかに黑螭に命じて、火の跋扈して居る處へ往つて偵察しろといつたので、黑螭は、仕方がなく、ひよいと身を起すと、火は相變らず燃えて居たから、氣の毒にも、その頭を、すつかり燒かれて仕舞つた。そこで、黑螭は、苦痛に堪へかね、天に向つて號泣したが、天關悠悠として、攀づべからず、仕方がないから、せめては、

夢になりと、天帝の處に往つて、血だらけの顔で泣いて訴へむとし、一體どういふ譯で、火だけが跋扈し、私ども、水の眷屬に、此の如き憂き目を見せられるのか、まことに聞こえませぬといつて、一理窟こねる積りで、愈よ身を側てて天帝の處に往つて見たが、ひどく門番に叱りつけられて、閉口して居ると、天帝は、これを哀れと見そなはし、九州の河の水を悉く其處に集めて、その涙痕を洗ひ落さしめ、又巫陽といふ神聖なる巫女に命じて、黒螭の靈魂を返さしめ、徐に之に命じて、前に進ましめ、其方は夢に顯はれて、何事をか申したいといつて參つたさうだが、一體如何なる寃罪であるかといつて、懇に御尋ねに成つた。そこで、黒螭は、その要點を摘まんで、奏上すると、上帝は、これに答へて、今は冬である、冬は火の跋扈すべき時節で、もし冬に於て火を禁じたならば、天下の生きとし生ける物は、食物を絶たれて死んで仕舞ふに相違ないから、いくら火が跋扈したとて、これを制止する譯には行かぬ。元來、火といひ、水といひ、親類同士であつて、火の丁の女は水の壬に向つて其婦とあり、代代婚姻を續けて居るのに、一朝仇を結べば、貴樣達の後世子孫の爲に甚だ宜しくない、元來、物が勢力を得るのは、時の運行の爲であつて、しばらく耐へて居ると、やがて、元へ歸つて來る、今は、火が勢力を得べき時で、いくら貴樣が愚圖愚圖いつても仕方がないから、矢張、玄根の水底に潛んで、小さく成つて居るが善い。春に成つて桃がそろそろ咲き出す頃にもならば、水も亦た少しづつ頭を出して善いのである。やがて、月、申酉に及び、七八月の頃にも成らば、水は勢力を得べく、かくて、今日火に苦しめられた遺恨を報ゆるも宜しからう。さういふ時が來れば、天帝も決して默つては居らず、五龍を遣はして助けしめ、又多くの鯤を從はせて、汝の勢威を增さしめるであらう。この時は、今しも火の跋扈して居る村村を一時に溺らせ、火の神を捕へて、崑崙山に押し込めても差支はないと、かう申された。皇甫湜は、今次、山火事を見て詩を作つたが、何の爲にしたかといへば、格別深い考もなく、實は睡氣ざましの業くれに過ぎぬ。その癖、眞を寫す上に於て傑出して居るからといつて、大に自慢の氣味で、天に示すが爲に、それを焚いて、上に向つて告げたのである。それで、もう澤山であるのに、皇甫湜は、なほ慊らず、我輩に強ひて、餘計な者を一首作り足すことにした。そこで、我輩は、止むを得ず、作つては見たものの、上述の如く、構想怪奇、そして、文辭煩冗、今さら後悔したが、すでに出來た上は、この舌を撫でても追ッ付かず、これを抹殺する譯にも行かぬから、取り敢へず披露するので、その不完全な個處などは、先づ大目に見て貰ひたい。

【餘論】この詩は、韓集中に在つても、極めて有名なもので、その構想の怪奇なることは、まことに自ら言ふところに負かぬ。ある人の説に、韓退之は、元來佛が嫌ひであつて、佛骨を諫めた一表の爲に、潮州にまで流された位であるが、佛典などは、必要上、熟讀して居たものと思はれる。この詩に火事の有樣を寫した處は、どうも、彼の法華經の方便品中、火宅の喩の敍事文に極めて類似して居る。

但し、彼は印度の文學であつて、自然坊主臭いけれども、此は、何處までも、儒教主義で押し通し、少しも坊主臭い言葉を使つて居ない。但し、その光彩陸離たる處は、髣髴として、互に類似して居るので、まさしく、彼の神を采つて來たものであらう。儒者は、佛教を口にすることさへ憚るが、誰が見ても、宜しい樣に、儒教的に燒き直して見やうといふ樣な考は、韓退之にも有つたに相違ないと思はれる。それから、この詩は、毎句韻の例の柏梁體であるから、勝手次第な句法を用ひ、そして、一番初の起句が最も面白い。皇甫補レ官古賁渾、これは、皇官古渾が雙聲、甫補賁が又雙聲、かういふ雙聲の文字を併せ、錯綜して一句としたのは、文を戲にするものであるが、音節の上に於て極めて妙味がある。唯だ讀み惡いが、そこに又面白味がある」といつて居るが、大體は、中つて居るので、予も亦た此に贊するものである。韓醇は「この詩を詳にするに、はじめは火勢の盛を言ひ、次は祝融の火を御するを言ひ、その下は、水火相剋し相濟ふの說なり」といひ、樊汝霖は「公に從つて、文を學ぶもの多し。惟だ李習之は公の正を得、皇甫持正は公の奇を得たり。持正、かつて人に語つて曰く、書の文、奇ならず、易、奇なりと謂ふべし、豈に理を礙げ聖を傷つけむやと。龍戰二於野一、其血玄黃、見二豕負一レ塗、載レ鬼一車、突如其來、如レ焚如レ死如レ棄如何等の語の如きなり。今、この詩、黑螭五龍九鵾等の語、其れ易の龍戰二於野一と何ぞ異ならむや」といひ、筆墨閒錄には「無逸云ふ、鴉鴟鵰鷹雉鵠鵾の句、正に柏梁體。後山、七字の詩を作る、東坡を上にして、この體を襲ぐ」といひ、劉石齡は「公の詩の根柢、全く經傳に在り。易の說卦、離は火たり、その人に於けるや大腹たりの如き、故に炎官熱屬に於ては、頳胸垤腹を以て、これを其形容に擬す。臆說に非ざるなり。又彤幢紫纛日轂霞車虹靷豹鞬電光蘋目等の字、亦た日となり、電となり、甲冑となり、戈兵となるの句より化して出で、造語極めて奇、必ず依據あらむ。理を以て考索するに、解すべからざるものなし。世儒、この篇に於て、毎に怪異を以て之を目し、且つ解すべからざるを以て之を置く、吁、これ亦た深く其故を求めざるのみ、豈に眞に解すべからざらむや」といひ、朱竹垞は「鑿空硬造、語法、曏に本づく。然れども止だ是れ奇を競ふのみ、甚だしき風致なし」といひ、最後に乾隆御批には「只だ是れ野燒を詠するのみ、寫し得て此の如し、天動き、地岐る、空に憑つて結撰し、心花怒生」とある。

縣齋讀レ書

縣齋に書を讀む

出宰二山水縣一。讀二書松桂林一。
出でて山水の縣に宰とし、書を松桂の林に讀む。

蕭條捐二（一）末事一。（二）邂逅得二初心一。
蕭條、末事を捐て、邂逅、初心を得たり。

哀狖醒二俗耳一。清泉潔二塵襟一。
哀狖、俗耳を醒まし、清泉、塵襟を潔くす。

詩成有二共賦一。酒熟無二孤斟一。
詩成つて共に賦するあり、酒熟して孤斟なし。

青竹時默釣。白雲日幽尋。
南方本多毒、北客恒懼侵。
謫譴甘自守。滯留愧難任。
投章類縞帶。佇答逾兼金。

青竹、時に默して釣り、白雲、日に幽尋。
南方、本と毒多し、北客、恒に侵さむことを懼る。
謫譴、自ら守るに甘んじ、滯留、任へ難きを愧づ。
章を投じて縞帶に類す、答を佇つこと、兼金に逾えたり。

【字解】【一】末事　俗事に同じ。【二】邂逅　偶然に逢ひ見る。【三】時默釣　陽山縣志に「釣魚臺は、縣東半里、湟溪の右に在り。韓愈が區册を送る序に云ふ、之と嘉林に癒し、石磯に坐し、竿を投じて漁し、陶然以て樂む、と。宋の嘉定の初、簿尉邱融、はじめて臺を磯上に作る」とある。【四】縞帶　左傳襄公二十九年、吳の季札、鄭に聘す、子產を見て、これに縞帶を與ふ。子產、紵衣を獻ずとあつて、杜預の註に「吳地は縞を貴び、鄭地は紵を貴ぶ」とある。【五】兼金　陸機の詩に愧無雜佩贈、良訊代兼金とあり、趙岐の孟子註に「兼金は、その價、兼れて常に倍するもの」とある。

【題意】この詩は、次の新竹、晩菊の二篇と共に、貞元二十年、韓愈が陽山に居た時の作である。樊汝霖は「陽山に在つて作るなり。公、かつて曰く、陽山は天下の窮處。又曰く、縣郭に居民なく、官に丞尉なし、少吏十餘家と。これを審にすれば、詩成有共賦、酒熟無孤斟と、其れ孰れか與に此を樂まむや。公の集を觀るに及び、區册、區宏、竇存亮、劉師命の輩、皆遠方より來つて公に從ふ。すなはち、戸外の屨滿つ」といつて居る。それから、胡渭は、陽山縣志を引いて「賢令山は、縣北二里に在り。むかし、韓愈、令たるの日、書を此に讀む、上に讀書臺あり、一名牧民山」といつて居るから、韓愈が書を讀んだのは、卽ち此地であらう。

【詩意】われは、陽山に來て、この樣に山水の眺め宜しき處に縣令となり、そして、松桂の列をなして居る林の中に於て、書を讀んで居る。平生蕭條として、俗事を棄て去り、偶ま相逢ふ人は、皆おのが心を知り合つて居る友達である。その林で啼いて居る猿の悲しき聲は、俗事を醒ますべく、清泉は、塵に汙れた衣襟を洗つて潔くすることが出來る。詩の出來るのも、互に唱和するからであるし、酒が熟すれば、ひとりではなく、互に酌み交はすから、逸興は湧くのである。時には、青竹を竿にして水邊に釣を垂れることもあるし、白雲の深く立ち罩めたる山路を彼方此方と尋ねて、珍らしい景色を探ることもある。元來、南方は、毒熱の地であつて、北から來て風土に慣れぬものは、毎に之に侵される虞がある。しかし、謫譴せられて此に來たものの、上述の如き樂があるから、甘んじて自ら守つて居るので、ここに滯留して、縣宰たる職分を盡し得るや否や、その點は、聊か覺束なく思はれる。抑も、詩を作つて其和を求める爲に、人に詩を贈るは、さながら、昔人が縞帶を贈つたと同じ心持であるし、又先方から和を求めて、その答を待つことは、恰も兼金の珍物でも贈られるやうであるといふから、是非一つ願ひたいと言はれると、默つて居る譯にも行かずして詩を作るので、晨夕の應酬は、先づ此樣なものである。

【餘論】この詩は排律であつて、對仗も嚴確である。朱竹垞は「全く力を費さず、然れども、意味却

つて餘あり」といつた。

新竹

筍添南堦竹。日日成清閟。
縹節已儲霜。黃苞猶掩翠。
出欄抽五六。當戸羅三四。
高標陵秋嚴。貞色奪春媚。
稀生巧補林。併出疑爭地。
縱橫乍依行。爛漫忽無次。
風枝未飄吹。露粉先涵淚。
何人可攜翫。清景空瞪視。

新竹

筍は南堦の竹を添へ、日日清閟を成す。
縹節、すでに霜を儲へ、黃苞、猶は翠を掩ふ。
欄を出でて五六を抽き、戸に當つて三四を羅ぬ。
高標、秋を陵いで嚴たり、貞色、春を奪うて媚ぶ。
稀に生じて、巧に林を補ひ、併せ出でて、地を爭ふかと疑ふ。
縱橫、乍ち行に依り、爛漫、忽ち次なし。
風枝、未だ吹を飄へさず、露粉、先づ淚を涵す。
何人か攜へ翫ぶべき、清景、空しく瞪視す。

【字解】【一】清閟 閟は暗く閉ぢこめる。【二】縹節 青色の節。【三】黃苞 黃色の竹の皮。【四】爛漫 繁生の貌。【五】瞪視 埤蒼に「瞪は直視なり」とある。

【題義】單に新竹を詠じたのである。

【詩意】筍が段段生長して、南階の竹となつたから、自分の居る處は、日に增し、奥深く閉ぢこめて淸幽に見える。若竹であるから、青色の節に白い粉を含んで、霜を貯へたやうであるが、何分皮が剝げたばかりであるから、黃色の薄皮に包まれて、翠色を掩うて居る。忽ちにして、欄干の處に五六本、戸の處に三四本ならび立ち、段段それが伸びるに隨つて、高標は、秋の空の凛凛たる色をも凌ぐかと思はれ、貞色は、いつも變らずして春の艶かしきを奪ふやうである。少し疎らに生えて、巧に林の缺けた處を補つて居るかと思ふと、非常に併出して重り合ひ、他の株と地を爭ふかと疑はれる。その縱橫なるは、行列をなし、茂り過ぎると、順序もなく、ごたごたに成つて來る。まだ枝が磔磔出揃はぬから、風に吹かれる處も少く、露に濕へる竹粉は、淚に涵した樣である。新竹は、如何にも風情あるもので、何人が之を攜へ翫ぶか、我は獨り、この淸景を眺め入つて、如何にも惜いやうな心持がする。

【餘論】これは、仄韻の排律で、朱竹垞は「琢句、前詩に比して更に工峭」といつた。縱橫乍依レ行は稀生巧補レ林を承け、爛漫忽無レ次は併出疑レ爭レ地を承け、即ち隔句對になつて照應して居る處が面白く、この四句が取りも直さず、全篇中の精彩である。

晩菊

少年飲酒時。踊躍（一）見菊花。　少年酒を飲む時、踊躍して菊花を見る。
今來不復飲。毎見恒咨嗟。　今來復た飲まず、見る毎に恒に咨嗟す。
佇立摘滿手。行行把歸家。　佇立、摘んで手に滿ち、行行把つて家に歸る。
此時無與語。棄置（二）奈悲何。　この時、ともに語るなし、棄置　悲を奈何。

【字解】（一）踊躍　興に乘ずる貌。（二）棄置　劉琨の扶風歌に「棄置勿重陳」とある。

【題義】單に晩菊を詠じたのである。

【詩意】少年の時、酒を飲むに際し、興に乘ずれば、身を躍らして菊花を見たが、段段年を取つて、酒も飲めなくなり、菊を見ても、毎毎咨嗟するのみで、むかしの樣に喜ぶことは無くなつた。しかし、菊花は、依然として棄てられぬ故に、佇立して手に一ぱい之を摘み、行行これを攜へて、我が家に歸つて來た。おまけに、これは晩菊であつて、この時に當つて、棄てツぽかして置いたならば、その儘凋んで、跡から如何に悲んだ處で仕方がない。そこで、菊と共に此心を語らうと思ひ、この時を外さず、これを采つて家に歸つたのである。

【餘論】朱竹垞は「興趣、淵明に近し、但し氣脈は太だ今」といつた。

落齒

去年落一牙。今年落一齒。　去年一牙を落し、今年一齒を落す。
俄然落六七。落勢殊未已。　俄然として六七を落す、落勢、殊に未だ已まず。
餘存皆動搖。盡落應始止。　餘の存するも皆動搖、盡く落ちて應に始めて止むべし。
憶初落一時。但念豁（一）可恥。　憶ふ初めて一を落す時、但だ念ふ、豁にして恥づべしと。
及至落二三。始憂衰即死。　二三を落すに及んで、始めて憂ふ衰へて即ち死せむことを。
毎一將落時。懍懍（二）恒在已。　一の將に落むとする時毎に、懍懍として、恒に已るに在り。
叉牙（三）妨食物。顚倒怯漱水。　叉牙として、物を食ふを妨げ、顚倒して、水に漱ぐを怯る。
終焉捨我落。意與崩山比。　終焉として我を捨てて落ち、意、崩山と比す。
今來落既熟。見落空相似。　今來落つること、既に熟せり、落るを見れば空く相似たり。
餘存二十餘。次第知落矣。　餘の存する二十餘、次第に落つるを知る。
儻常歲落一。自足支兩紀（四）。　もし常に歲ごとに一を落さば、自ら兩紀を支ふるに足る。「せむ。
如其落併空。與漸亦同指。　もし其れ落ちて併せて空しく、漸なると亦た指を同じう」

人言齒之落。壽命理難恃。　人は言ふ、齒の落つる、壽命、理、恃み難し。

我言生有涯。長短俱死爾。　我は言ふ、生、涯あり、長短俱に死するのみ。

人言齒之豁。左右驚諦視。　人は言ふ、齒の豁たる、左右驚いて諦視すと。

我言莊周云。木鴈各有喜。　我は言ふ、莊周云ふ、木鴈各喜あり。

語訛默固好。嚼廢軟還美。　語訛すれば、默する固より好し、嚼、廢して、軟なるも還た美なり。

因歌遂成詩。持用詫妻子。　因つて歌うて、遂に詩を成し、持し用つて妻子に詫る。

【字解】【一】豁　あらはに、締りが無くなること。【二】懍懍　疑懼の念。【三】叉牙　動く貌。【四】兩紀　一紀は十二年。【五】莊周　史記に「莊子は、蒙の人なり、名は周、かつて、蒙の漆園吏となる、書十餘萬言を著す。大抵寓言なり」とある。【六】木鴈各有喜　莊子の山木篇に見えて居るので「莊子、大木を見る、木を伐るもの、其旁に止まつて取らざるなり。其の故を問ふ。曰く、用ふべきところなし。莊子曰く、この木、不材を以て、その天年を終るを得たり、と。故人の家に舍す。故人、豎子に命じ、雁を殺して之を烹る。その一は能く鳴き、その一は鳴く能はず。豎子請ふ、奚をか殺さむ。曰く、鳴く能はざるものを殺せ」とある。【七】詫　莊子「孫休門に踵つて、子扁慶子に詫ぐ」とあつて、司馬彪の解に「詫は告ぐるなり」とある。しかし、矜るといふのが普通で、それの方が面白いやうである。

【題義】これは、齒が一年毎に落ちて仕舞ふにつけて、段段自分の衰へ行くことを、つくづく感じて作つたのである。韓愈は早老の人と見え、かつて、姪老成に與へて「吾、未だ四十ならずして、齒牙動搖す」といひ、貞元十八年、崔羣に與ふる書に「近ごろ、左車の第二牙、故なくして動搖、脫し去る」とある。そして、此詩に去年落二一牙一、今年落二一齒一とあるを見れば、貞元十九年の頃でもあらうか。

【詩意】去年から、齒が落ち始めて、一つ奥齒が取れ、そして、今年は、又一つ齒が落ちた。さうかと思ふと、俄然として、六つ七つ、一時に落ち、その落つる勢は、まだ已まず、殘つて居る齒も、皆ぐらぐら搖き出したので、どうせ、みんな落ちて仕舞つて、はじめて止むことであらう。溯つて考へると、去年初めて一つ牙が落ちた時、何だか面相が變り、口に締まりが無くなつて、極まりが惡いやうな心持がしたが、引續いて、今年二三落ちると、これは、身體が衰へたからで、もう死期が近づいたのであらうと、初めて憂の心を生じた。その後は、一つが將に落ちむとするに際し、懍懍たる疑懼の念を懷き、どうか落ちぬやうにしたいといふので、障つて工合の惡いのを怺へ、叉牙として動いて居る其齒に觸れぬ樣にし、朝、口を漱ぐ時にも、もがもがして、やつと濟ませ、務めて、大切に保護したけれども、矢張、その效なくして、遂に落ちて仕舞ひ、さながら、山が崩れかかつて、止めても止まらぬ樣な有樣であつた。しかし、それも、初の內だけのことで、この頃は、齒の落ちることに慣れて仕舞ひ、落ちる上は、一本でも、二本でも、同じ事で、格別身體にも關係しない樣である。今殘つて居る齒は、二十餘本であるが、いづれ次第に落ちるであらう、一年に一本落ちるとすれば兩紀、卽

ち二十餘年間は、まだ保つべき勘定である。その兩紀を經た後の事を考へると、次第に、ぽつぽつ落ちやうが、一時に落ち盡して仕舞はうが、その結果は同一である。ある人は、齒の落ちるのは、壽命の縮まつて來た證據だといつたが、實はさうでもないらしい。わが考では、この生には限があつて、長からうが、短からうが、いづれ、死を免れず、齒が落ちたからといつて、今更の樣に壽命を心配する理由はない。それから、又ある人は齒が落ちて口元に締まりの無いのは見苦しいから、左右の者は、驚いて見て居ますぞといつたが、我が考では、莊子が、木は不材を以て壽を保ち、雁は鳴かざるが故に早く殺されるといふ通り、材藝の有無、どつちが宜しいか分からないので、齒にしても、落ちた方が却つて善いことがある。何となれば、齒が落ちると、言葉が訛つて聞こえるから自然默つて居る、世間の事は、一體默つて居る方が善い。それから齒が無いと物を嚙むことが出來ないけれども、世の中には、軟かで味の善いものがあるから、それさへ食つて居れば善い。初めは、齒が落ちたので、ひどく心配したが、かうなると、どうでも構はないといふ氣に成つた。そこで、この事を詩に作つて、どうだ、我輩の考は、如何にも宜しいだらうといつて、妻子にも誇つて聞かせた次第である。

【餘論】この篇は、一瑣事を取つて、丁寧周匝に敍し盡し、その敍事の工合も面白いし、結末も亦た達道の言である。朱竹坨は「節節敍し來つて、態勢甚だ磊落」といつた。

哭楊兵部凝・陸歙州參

楊兵部凝・陸歙州參を哭す

人皆期七十。纔半豈蹉跎。

人皆七十を期す、纔に半にして豈に蹉跎せむや。

併出知己淚。自然白髮多。

併せて知己の淚を出し、自然に白髮多し。

晨興爲誰慟。還坐久滂沱。

晨興、誰が爲に慟せむ、還つて、坐して久しく滂沱。

論文與晤語。已矣可如何。

論文と晤語と、已んぬるかな、如何すべき。

【字解】【一】蹉跎　楚辭に「驥垂兩耳、中阪蹉跎」とあつて、廣雅に「蹉跎は足を失するなり」とある。韓愈は、大曆三年戊申に生まれたから、今茲貞元十九年癸未、年三十六、そこで、七十の半といつたのである。【二】晨興　朝早く起きる。【三】滂沱　淚の流れる貌。

【題義】唐書楊凝傳に「凝、董晉の判官となり、晉卒の亂起るや、凝、走つて京師に還り、門を閉づること三年、兵部郎中に拜せられ、病を以て卒す」とあり、蔣註に「凝、字は、懋功、兵部郎中たり。凝、兵部郎中に守たり。而して、兵曹といふは、隋、かつて兵部を改めて兵曹となし、禮部を禮曹と爲せばなり」とある。そして、柳宗元は、その墓碣を作つて「貞元十九年正月卒す」といつて居る。次に、李翺の陸歙州述に「吳郡の陸參(一に傪に作る)字は公佐、侍御史より、入つて祠部員外郎となり、二年出でて歙州に剌たり、途に卒す」といひ、その績きに、歿年を紀して、貞元十八年四月としてあ

る。そこで蔣註には「參は、凝に先つこと一年にして卒す、公、乃ち同時に之を哭す。蓋し、參、主司に佐たる時、公、かつて書を以て侯喜等を薦め、出でて、歙に刺たるに及び、亦た序あつて送る。又、かつて行難一篇あり、參の爲に設くるなり。凝は、公と嘗て董晉に汴州に佐たり。皆、知己の者なり。去年、參死し、今年凝又死す。これ公が凝に因つて、併せて之を哭する所以なり」といつて居る。

【詩意】人生は七十を期するのに、我輩は今茲三十六歲、わづかに其半に及んだのであるから、何も蹉跎して非常に悲むにも及ばないが、友を喪つたことに至りては、悲まない譯には行かぬ。それも、一人なら未だしも、又次に一人、つまり二人連續して死んだのであるから、知己の淚を併せて注ぎ出し、その爲に、自然と白髮も多い樣になつた。朝早く起き、おもひ出しては慟哭し、やがて坐つても、淚は滂沱として盡きない。この二人とは、生前、ともに文を論じ、面談して心を慰め、まことに、我が良友であつたのに、最早さうすることも出來ないと思へば、慟哭を止める譯にも行かず、已んぬるかな、今後どうしたら善からうと思ふばかりである。

苦寒

苦　寒

(一)四時各平分。(二)一氣不可兼。　四時、各平分、一氣兼ぬべからず。

隆冬奪春序。(三)顓頊固不(四)廉。　隆冬、春序を奪ふ、顓頊、固より廉ならず。

(五)太昊弛維綱。畏避但守謙。　太昊、維綱を弛む、畏避して但だ謙を守る。

遂令黃(六)泉下。萌牙夭勾(七)尖。　遂に黃泉の下をして、萌牙勾尖を夭せしむ。

草木不復抽。百味失苦甜。　草木復た抽かず、百味、苦甜を失へり。

凶飇攪宇宙。鉟刃甚剳(八)砭。　凶飇、宇宙を攪し、鉟刃、剳砭よりも甚だし。

日月雖云尊。不能活烏(九)蟾。　日月尊しと云ふと雖も、烏蟾を活かす能はず。

(一〇)羲和送日出。恇怯頻窺覘。　羲和、日を送つて出で、恇怯、頻りに窺覘す。

(一一)炎帝持祝融。呵噓不相炎。　炎帝、祝融を持し、呵噓すれども相炎まらず。

而我當此時。恩光何由沾。　しかも、我、この時に當り、恩光、何に由つてか沾はむ。

肌膚生鱗甲。衣被如刀(一二)鐮。　肌膚、鱗甲を生じ、衣被、刀鐮の如し。

氣寒鼻莫(一三)齅。血凍指不(一四)拈。　氣、寒くして、鼻、齅ぐ莫し、血、凍つて、指、拈せず。

濁醪沸入喉。口角如(一五)銜箝。　濁醪、沸いて喉に入れば、口角、箝を銜むが如し。

將持(一六)七箸食。(一七)觸指如排(一八)籤。　將に七箸を持して食はむとす、指に觸れて籤を排するが「如し。」

侵鑪不覺暖。熾炭屢已添。　鑪を侵して、暖を覺えず、炭を熾にして、屢ば已に添ふ。
探湯無所益。何況纖(一九)與縑。　湯を探れども、益する所なし、何ぞ況んや纖と縑とをや。
虎豹僵穴中。蛟螭(二〇)死幽潛。　虎豹は穴中に僵れ、蛟螭は幽潛に死す。
熒惑(二一)喪纏次(二二)。六龍(二三)冰脫髯(二四)。　熒惑、纏次を喪ひ、六龍、冰つて髯を脫す。
芒碭(二五)大包內。生類恐盡殲。　芒碭たり、大包の內、生類、恐らくは盡く殲きなむ。
啾啾窻間雀。不知己微纖。　啾啾たり窻間の雀、己の微纖なるを知らず。
舉頭仰天鳴。所願晷(二六)刻淹。　頭を擧げ、天を仰いで鳴く、願ふ所は、晷刻の淹しからむことを。
不如彈射死。却得親炰燖(二七)。　如かず、彈射せられて死し、却つて、親く炰燖せらるるを得むには。
鸞皇苟不存。爾固不在占。　鸞皇、苟くも存せず、爾、固より占に在らず。
其餘蠢(二八)動儔。俱死誰恩嫌(二九)。　その餘、蠢動の儔、俱に死すとも、誰か恩嫌せむ。
伊我稱最靈。不能女覆苦(三〇)。　伊れ我最も靈なりと稱すれども、女を覆苦すること能はず。
悲哀激憤歎。五(三一)藏難安恬。　悲哀激して憤歎、五藏、安恬し難し。
中宵倚牆立。淫(三二)淚何漸漸(三三)。　中宵、牆に倚つて立てば、淫淚何ぞ漸漸たる。

天王(三四)哀無辜(三五)。惠我下顧瞻。　天王、無辜を哀み、我を惠して、下に顧瞻せよ。
褰(三六)旒去耳纊。調和進梅鹽(三七)。　旒を褰げて、耳纊を去り、調和、梅鹽を進めよ。
賢能日登御。黜彼傲與憸(三八)。　賢能、日に登御、彼の傲と憸とを黜けよ。
生風吹死氣。豁達如褰簾。　生風、死氣を吹き、豁達として、簾を褰ぐるが如し。
懸(三九)乳零落墮。晨光入前簷(四〇)。　懸乳、零落して墮ち、晨光、前簷に入る。
雪霜頓銷釋。土(四一)脈膏且黏。　雪霜、頓に銷釋し、土脈、膏且つ黏。
豈徒蘭蕙(四二)榮。施及艾與兼(四三)。　豈に徒に蘭蕙の榮のみならむや、施いて艾と兼とに及ぶ。
日(四四)暮行鑠鑠(四五)。風條(四六)坐襜襜(四七)。　日暮行く、鑠鑠たり、風條、坐ながら襜襜たり。
天乎苟其能。吾死意(四八)亦厭。　天か苟くも其れ能くせば、吾死すとも、意亦た厭きなむ。

【字解】【一】四時各平分　感春の詩の處で解釋して置いた。【二】一氣不可兼　禮記に「四氣の和、以て萬物の理を著はす」とあるが、これは、全體の上から見たので、春夏秋冬の一季候に就いて云へば、各一氣を以て季候を爲し、その一氣を以て他の四時を兼攝することは出來ないといふ義。【三】顓頊　前に陸渾山火詩の中に見ゆ。禮記月令に「孟冬の月、その帝は顓頊」とある。【四】不廉　不正直で、おのが季候外に在つても跋扈する。【五】太昊　禮記月令に「孟春の月、その帝太昊」とある。【六】黃泉　左傳隱公元年に「黃泉に及ばざれば、相見るなきなり」とあつて、杜預註に「地中の泉、故に黃泉といふ」とある。【七】勾尖　禮記月令に「勾

書學く出で、萌者盡く達す」とある。曲つたり尖つたりする。【八】割砭　切り剩す。杜甫の前苦寒行に寒砭肌膚北風利とある。【九】烏蟾　五經通義に「日中に三足の烏あり、月中に兎と蟾蜍とあり」といつて居る。【一〇】羲和　前に見ゆ、即ち日御。山海經に「東南海の外、甘泉の間、羲和の國あり、女子あり、羲和といふ、帝俊の妻たり、これ十日を生む、常に日を甘泉に浴す」とある。【一一】炎帝持祝融　禮記月令に「孟夏の月、その帝は、炎帝、その神は祝融」とあつて、すでに陸渾山火詩の中に見ゆ。【一二】刀鐮　列子に「鐮を操し、柴を帶ぶ」とあつて、說文に「鐮は鍥なり」とある、鍥は鎌。【一三】莫齅　說文に「齅は鼻を以て氣に就くなり」とあつて、即ち齅ぐこと。【一四】不拈　廣韻に「拈は指にて物を取るなり」とある。【一五】如銜箝　箝くつわを嵌められた樣である。【一六】匕箸　匙と箸。【一七】觸指　指は先觸。【一八】排籤　竹篦を竝べる。【一九】纊與縑　纊は絹。縑は絮、即ち木綿物。【二〇】蛟螭　前にも見ゆ。螭は龍の角なきもの。【二一】熒惑　史記の天官書に「熒惑は南方の火、夏を主り、日丙丁」とある。【二二】纏次　軌道。【二三】六龍　易に「時に六龍に乘じて、以て天を御す」とある。【二四】脫髯　史記の封禪書に「黃帝、鼎を荊山に鑄る、龍、胡髯を垂れて下り迎ふ、黃帝、上つて騎す、餘の小臣、悉く龍髯を持す、龍髯拔け墜つ」とある。【二五】芒碭　廣大の貌。【二六】晷刻淹　一刻でも生き延びて居たいといふ意。【二七】炰燖　陸渾山火詩に見ゆ、炰は毛燒にする、燖は茹でる。【二八】蠢動儔　蟲けらの類を併稱す。【二九】恩嫌　恩はいつくしむ、嫌は其醜態を嫌ふ。氣にかけるといふ義。【三〇】覆苫　爾雅に「白蓋、これを苫といふ」とあつて、郭璞註に「白茅は苫、今、江東呼んで蓋となす」とある。方世擧の解に「女は上文の禽雀を指して言ふ、言ふは我、最も靈、しかも汝を覆蓋する能はざるなり」とある。【三一】五藏　五臟に同じ。【三二】淫淚　とめどなく流れる淚。【三三】漸漸　流れる貌、楚辭に「涕漸漸其若屑」とある。【三四】天王　一本には天子に作つてあるが、天乎の誤だらうと胡渭が云つて居る。それを又天王と誤書したものと見える。【三五】無辜　禮記に「子夏曰く、天乎、予の罪なきや」とあり、史記に「將閭、天を仰いで大に呼んで曰く、天乎、吾、罪なし」とある。【三六】褰旒去耳纊　禮緯に「旒は目に垂れ、纊は耳を塞ぐ」とあり、薛綜東京賦の註に「黈纊は黃綿、大さ丸の如きを以て冠の兩邊に懸けて、耳に當つ、妄りに不急の言を聞くを欲せざるなり」とある。【三七】梅鹽　書の說命に「若し和羹を作らば、爾、惟れ鹽梅」とあつて、鹽は鹹味、梅は酸味をつける。【三八】傲與憸　憸は諛、意地の惡いこと。【三九】懸乳　鍾乳を懸けた樣な氷柱。【四〇】晨光　朝日の光。【四一】土脈靑　國語に「土乃ち脈發」とあり、又「陽氣共に蒸し、土膏其れ動く」とある。【四二】蘭蕙　王逸の楚辭註に「蘭は香草なり」とあり、本草に「蕙草、一名薰草」とある。【四三】艾與蕭　爾雅に「艾は氷臺、蕭は萩なり」とあつて、ともに水邊に生ずる草。【四四】日華　日光に照らされる花。【四五】鑠鑠　光り輝く貌。【四六】風條　風に吹かれる枝。【四七】襜襜　搖く貌、荀子に「この襜襜たるものは何ぞや」といひ、楚辭に「裳襜襜以含風」といひ、長門賦に「飄風迴而赴閨兮擧帷幄之襜襜」とある。【四八】意亦厭　飽き足る。

【題義】蔣註に「この詩、意、蓋し諷するところあり、猶ほ風伯の雲を吹いて、雨作るを得ざることを訟ふるがごときなり。謂ふは、隆寒春序を奪うて、その寒を肆にするは、猶ほ權臣の事を用ふるがごときなり。太昊の畏避するは、猶ほ國に當るもの、權臣を畏れて、充位を取るがごときのみ。その下、反覆して言ふところ、この意を易ふるなし。その末に、天下哀二無辜一といふは、すなはち、人主賢を進め、不肖を退け、恩澤をして下に流れしめ、施いて、草木に及ばむことを望む。その君を愛し、民を憂ふるの意、具に此に見はる。按ずるに唐書、陸贄免ぜられしより、德宗、復た權を下に委ねず、宰相は位に充てて、文書を行ふのみ、倚信するところの者は、裴延齡・李齊運・王紹・李實・韋執誼、渠牟等と、その權人主に侔し。この詩、諷する所以なり、時に、賈耽・齊抗の徒、國に當る。公、四門博士たり、貞元十九年春、作る」といつて居る。それから、唐書五行志に「貞元十九年三月、大雪」とあつて、苦寒とは、大方、この時の事であらうと思はれる。

【詩意】春は暖に、夏は暑く、秋は涼しく、冬は寒いといふ樣に、四時が平分して居るのは、自然

の定まりで、各一氣を以て季候をなし、その一氣を以て四時を盡く兼ねしめることは出來ない。今しも、冬の隆寒の氣が春の節序を奪ひ、非常に寒冷なのは、冬の神たる顓頊が甚だ不正直で、春になつても、跋扈するからであらう。これと同時に、春の神たる太昊は、甚だ氣が利かず、いつとはなしに、締め括りの太い綱を弛め、他の暴威を畏れて、之を避けむとし、唯だ謙を守つて居るのは、もとより宜しくない。そこで、地の下から萌え出づべき筈の草の芽も、曲つたり、尖つたりして、夭死して仕舞ふ。草木が伸びればこそ、百味が出來るのであるが、かうなつては、百味も無くなつて、甘も苦も無い樣になる。それのみか、旋風を起して、宇宙を攪亂し、その切ッ先の鋭きは、刃で切られたり、針で突かれたりするよりも甚しい。日月は尊い物であるが、日中の烏、月中の蟾蜍が、この寒さの爲に死んで仕舞つたらば、何の效用をも爲さぬ。義和は、日御となつて、毎日毎日、東方から太陽を送り出すが、恐る恐る、樣子を伺つてする樣では、一向役に立たぬ。それから、夏の神たる炎帝は、その手下に祝融などいふものを召し連れて居ながら、その出やうとするのを却つて抑へて、叱り懲らして居る位だから、世界は、到底、暖まる譯には行かぬ。われは、此時に當つて、日月の恩光に霑ふことが出來ない爲に、肌膚はひび破れて鱗甲を生じ、著物は皆凍つて刀や鎌を身に著けた樣な心持がする。かくて、あまり寒い爲に、鼻は作用を失つて、物の匂ひも分からぬやうになり、血が凍つた爲に、指は屈んで、物を取ることが出來ない。そこで、濁酒でも沸かして飮んで、元氣を付けやうと思ふが、喉へ行つた其物は熱いけれども、口端に殘つて居る雫は、凍つて仕舞つて、丁度猿ぐつわでも嵌めたやうであるし、匙や箸で物を取らうとしても、野菜なり、魚なり、皆その先端に凍り付いて、さながら、竹篦を竝べた樣で、とんと食ふことが出來ない。鑪の中に幾ら炭を添へて、火を焚いても、一向暖を覺えないし、湯に入つても、身體は少しもぬくまらない。まして、絹物木綿物など、どんなに重ねて著ても、寒氣を防ぐことは出來ない。人は勿論のこと、虎豹でさへも、穴の中に僵れて仕舞ひ、蛟螭の類も、幽潜の中に凍死し、はては、天文までも亂れ、南方の火星たる熒惑は、その軌道を外れて、一向火の效用を爲さず、六龍も凍つて、自然に鬐が脱け落ちるといふ始末、芒碭たる乾坤の内に於て、生きとし生けるものは、到底、命を保つことが出來ないかとも思はれた。啾啾として窓間に鳴いて居る雀は、おのが纖微の物たるを知らず、矢張、命は惜いものと見え、頭を擧げ、天を仰いで、ひたすら鳴き囀り、せめては、一刻でも生き延びたいと願つては居るが、かう成つては、いつそ、人に彈射せられ、そして、料理されて、毛蒸しにするなり、茹でるなりして、暖められた方が善いかも知れない。かの鸞鳳の如き瑞鳥ですら、寒の爲には、皆死んで、苟くも存せぬといふことに成つて居るから、卜筮の中に載つて居らぬ雀などいふ詰まらぬものは、無論、死ぬことに決まつて居る。雀のみか、その餘、蠢動して居る蟲けらの類は、共に死んでも、誰も氣にさへ懸けぬが、しかし、考へて見ると、人は萬物の靈と稱するものであるから、汝等をいたはつて遣ることの出來ないのは、つま

り、責任を盡さぬものである。そこで、悲哀の極、情激して、覺えず、憤慨歎息し、決して、胸には安いと思はず、中宵、檻に倚り、漸漸として、涙が留め度なく流れるのである。天は、罪なき者が難儀して居るのに對し、我等を惠んで、下の方を見下し、これまで目を遮つて居た旒を褰げ、耳を塞いで居た纊を取り去つて、旨い鹽梅に、氣候を調和して貰ひたいものである。若し、賢能の者を日日に登庸し、かの傲慢なもの意地の惡い手合等を黜けて、少しく下民を顧みる樣にされたならば、四時の不調和も追追無くなるであらう。すると、今まで、天地の死氣に閉されて居たのが、一朝生風が吹き拂うて、垂簾を掲げたるが如く、濶達となり、今まで鍾乳をぶら下げて居た樣であつた氷柱が盡く落ちて、朝日の光を前簷に引き入れる樣にして欲しい。かくて、霜雪は俄に消えて無くなり、土脈を弛め、次第に膏ぎらせて、粘著する樣にしたならば、蘭蕙の樣な香草は固より、艾だの葦だのといふ詰まらぬ草までが、芽を出して、今まで、黃泉の下に在つた物までが、すつかり生き伸びるといふことに成るのであらうし、太陽を承けた花は、皆鑠鑠として咲きほこり、風に吹かれる枝は襜襜と搖られるであらう。もし天にして、果して我が願ひ通りにして下さるならば、たとひ、我輩は死んでも、もとより滿足する。

【餘論】この篇は、四段より成り、起首四時各平分より呵噓不相炎に至るまでは、苦寒の正文、而我當此時より生類恐盡殲に至るまでは炎帝持祝融」の句に繫がり、寒さを受ける方から寫して居るから、同じ事を云ふにしても、表裏に成つて居て、少しも重複しない。啾啾窻間雀より淫淚何漸漸に至るまでは、苦寒の餘文で、雀に就いて興を發し、純ら抽象的であつて、その中に洒落を交へた處などは、餘裕綽綽たる處を見せたのである。天王哀無辜より結末吾死意亦厭に至るまでは末段で、その希望を述べ、結二句は、殊に振つて居る。朱竹垞は「怪怪奇奇、陸渾山火と同じ、これは是れ、昌黎の獨造」といひ、天王哀無辜、惠我下顧瞻に就いては「この意、亦た可、但だ此等の詩、意趣原と深からず、須らく簡峭纔は味あるべし、多ければ稍や厭ふ」といひ、結末に就いては「鄭箋と同調、但し彼は眼前の景に就いて、說き得て親切、味ある所以、これは只だ誕を逞うす、殊に味短きを覺ゆ」といひ、何義門は「結、老杜の茅屋爲風雨所破の句法を祖とす」といひ、乾隆御批には「銳思鑱刻、字、刀鋒を帶ぶ、晉人危語了の語を數へず、結意、少陵の吾廬獨破受凍死亦足と正に同じ」とあつて、互に出入して居るから、これを併觀すれば、その得失美惡の個處も分かるであらう。

和虞部盧四酬翰林錢七赤藤杖歌

虞部盧四が翰林錢七に酬ゐたる赤藤杖の歌に和す

赤藤爲杖世未窺。赤藤の杖たる、世、未だ窺はず、〜　【字解】〔一〕虞部　尙書郞ない

（一）臺郎始擕自（二）滇池。 臺郎、始めて擕へて滇池よりす。
滇王掃宮（三）避使者。 滇王、宮を掃うて使者を避け、
跪進再拜語（四）嗢咿。 跪いて進め、再拜して、語、嗢咿たり。
（五）繩橋拄過免傾墮。 繩橋、拄へ過ぎて、傾墮を免る、
性命（六）造次蒙（七）扶持。 性命、造次、扶持を蒙る、
途經百國皆莫識。 途、百國を經るも、皆識るなし、
君臣聚觀逐旌麾。 君臣、聚まり觀て、旌麾を逐ふ。
共傳滇神出水獻。 共に傳ふ、滇神、水を出でて獻ずと、
（八）赤龍拔鬚血淋漓。 赤龍、鬚を拔いて、血淋漓たり。
又云（九）羲和操火鞭。 又云ふ、羲和、火鞭を操り、
暝到西極睡所遺。 暝に西極に至り、睡つて遺すところ。
幾重包裹自題署。 幾重の包裹、自ら題署、
不以珍怪誇荒夷。 珍怪を以て荒夷に誇らず。

ふ、即ち翰林の錢七を指す。【二】滇池 今の雲南の首都大理府、漢書西南夷傳に「夜郎最も大、その西滇池、方三百里」とあり、華陽國志に「澤下の流淺狹、狀、倒池の如し、故に滇池といふ」とある。【三】避 舍を避ける、自分の居る處に迎へ入れること。【四】嗢咿 說文に「嗢は咽なり」とあり、字林に「咿は內に悲むなり」とある。王伯大は「嗢咿は夷語なり」といつた。【五】繩橋 即ち竹索橋、梁益記に「笮橋は竹索を連れて之を爲し、亦た繩橋と名づく」とあり。杜甫の詩に漂搖繩橋壯士喜とあり、李白の詩に泛皮船兮渡繩橋といつてある。【六】造次 しばらくの間も。【七】扶持 杜甫の桃竹杖引に「使我不得爾之扶持」とある。【八】赤龍 河圖に「赤白の金、千歲、各龍を生ず」とある。【九】羲和 前に見ゆ、杜甫の詩に羲和鞭白日といひ、李白の詩に羲和無停鞭とある。【一〇】同舍子 同居の人。【一一】浮光 一本に浮光照把欲手疑に作つてあるといふが、矢張、ここに在る通りで善い。【一二】搜蛟螭 劉敬叔の異苑に「陶侃、かつて魚を捕へむとし、一織梭を得たり。還つて、挂けて壁に著く。頃くあつて、雷雨、梭變じて赤龍と成り、屋よりして躍る」とあつて、亦た晉書陶侃傳に見えて居る。次に後漢書費長房傳に「長房、老翁に辭して歸る。翁、與ふるに竹杖を以てして曰く、これに騎して、之くところに任かせば、自ら至らむ。すでに至らば、杖を以て葛陂中に投ずべきなりと。長房、杖に乘じ、須臾にして家に歸る。即ち杖を以て陂に投ず、顧視すれば龍なり」とあつて、韓愈は、この二事を併用したのであらう。【一三】南宮 虞部を謂ひ、盧を指す。【一四】禁闈 翰林を謂ひ、錢を指す。【一五】塤篪 詩經に伯氏吹塤、仲氏吹篪とある。【一六】分司 この時、韓愈は東都に分司であつた。

歸來捧贈（一〇）同舍子。 歸り來つて、捧げて贈る同舍の子、
（一一）浮光照手欲把疑。 浮光、手を照らし、把らむと欲して疑ふ。
空堂晝眠倚牖戶。 空堂、晝眠つて牖戶に倚れば、
飛電著壁（一二）搜蛟螭。 飛電、壁に著いて、蛟螭を搜る。
（一三）南宮清深（一四）禁闈密。 南宮は清深、禁闈は密、
唱和有類吹（一五）塤篪。 唱和、塤篪を吹くに類するあり。
妍辭麗句不可繼。 妍辭麗句、繼ぐべからず、
見寄聊且慰（一六）分司。 寄せられて聊且分司を慰む。

【題義】 これは、翰林の錢七といふ人が、滇池に產する赤藤杖を虞部の盧四に贈ると、盧四は、歌を作つて之を謝した。その歌を韓愈が見て、これに和して作つたのである。盧四は原註に名は汀とある

が、新舊兩唐書に其傳がない。韓集中の詩より考へると、汀、字は雲夫、元和元年の進士、虞部司門庫部郎中を經、中書舍人に遷つて、給事中となつた。錢七は、原註に名は徽とあつて、舊唐書に「錢徽、字は蔚章、吳郡の人。父起、詩を能くす。徽は、貞元の初、進士の第に擢んでられ、元和の初、入朝し、三たび祠部員外郎に遷り、召して、翰林學士に充てらる」とある。赤藤杖の如何なる物なりやに就いては、詩中に見えて居るから、ここには縷說することを見合はせる。それから、蔣註には「元和四年、公、東都に分司とし、員外郎に官せしときに作る」とある。

【詩意】赤藤で造つた杖などは、これまで世間の人が見たこともない珍らしい物で、今次、尙書郎の翰林錢君が、はるばる雲南の滇池から持つて來られた。錢君が天子の御使として其地に赴かれた時、滇王は、非常に之を優待し、おのが宮殿を掃除して、それを使者の客館に充て、その歸る時には、再拜して、夷語で分からぬことを言つて居たが、やがて跪いて進めたのが、卽ちこの赤藤杖である。錢君は、その赤藤杖に倚つて、雲南地方の危險なる處處を通過されたので、現に繩橋を渡る時にも、それに支へられて行けばこそ、傾墮を免れ、しばしの間なりとも、この杖の扶持に依らねば、性命も危かつたのである。歸途には、種種の國を經過したが、赤藤杖の何物たるかを知つて居るものはなく、その地の君臣が聚まり觀て感心し、わが使者の旗や才配を逐うて、その下風に拜したといふことである。彼等の傳ふるところに據ると、これは、雲南の滇池に居る神樣が水を出でて獻上したので、水中の赤龍が鬚を拔いて、その血の淋漓たるを其儘贈つたのである。或は又、これは太陽を御して居る羲和が、始終操つて居る火の鞭であつて、日暮、西極に至つたとき、眠つた儘、忘れて來たものであらうといふことであつた。あまり觀たがるものが多いので、錢君は珍怪を以て荒夷の者どもに誇るのも宜しくないといふ處から、幾重にも包んで、自ら赤藤杖と題署して、荷物の中に入れ置き、長安に歸著せし後、その同舍の友なる盧君に贈られた。盧君が之を見ると、あまり赤いので、殆んど燃えて居るかと疑はれ、浮光手を照らし、これを取らうとして又疑つた位。空堂に晝寢をして居る時、その杖を戶の處に倚せかけて置くと、忽ちにして、大雷雨が起つて壁に著き、その杖を探がす樣な趣があつて、これは、まさしく蛟螭の化身したものである。盧君は、清深なる南宮に出仕し、錢君は奧深い禁闈に居り、まことに親密の間柄であつて、今次赤藤杖に就いて、唱和の詩の出來たのを拜見すると、伯氏が塤を吹き、仲氏が篪を吹くといつた樣に、いづれも、立派な御作ばかり、姸辭麗句、殆んど繼ぐことが出來ぬ位。それを態態寄せられたから、東都に分司たる我輩も、聊か滯留中の客思を慰め、仍つて、此篇を草した次第である。

【餘論】この詩は、四段より成り、起首、赤藤爲レ杖世未レ窺より跪進再拜語二嘔啞一に至るまでは、赤藤杖の由來を敍し、繩橋拄過免二傾墮一より暝到二西極一睡所レ遺に至るまでは、錢七が之を得て中國に至るまでの途中の有樣を寫し、幾重包裹自題署より飛電著レ壁搜二蛟螭一に至るまでは、錢七が之を盧四

に贈つたことを敍し、南宮清深禁閨密より、結末、見寄聊且慰分司に至るまでは、兩人の唱和よりやがて、自分が此詩を作るに至つたことを記したのである。かくの如く、段落分明、すべてが整然として出來て居るから、後に宋代に至り、歐陽永叔・蘇東坡・黃山谷などが、刻苦して模倣を試みた。沈德潛は「赤龍義和云云、この種の奇傑、昌黎の獨造」といつて居て、この邊は、特に精彩に富んで居る。

崔十六少府攝伊陽以詩及書見投因酬三十韻

崔十六少府、伊陽を攝し、詩及び書を以て投せらる、因つて酬ゆ。三十韻。

崔君初來時。相識頗未慣。　崔君、はじめて來る時、相識ること、頗る未だ慣れず。
但聞赤(一)縣尉。不比博士慢(二)。　但だ聞く、赤縣の尉、博士の慢なるに比せず。
賃屋得連牆。往來忻莫間(三)。　屋を賃して牆を連ぬるを得たり、往來間なきを忻ぶ。
我時亦新居。觸事苦難辦。　我時に亦た新に居る、事に觸れて苦だ辦じ難し。
蔬(四)飧要同喫。破襖請來綻(五)。　蔬飧同く喫せむことを要す、破襖來り綻はむことを請ふ。
謂言安堵後。貸借更何患。　謂うて言ふ、安堵の後、貸借更に何をか患へむと。
不知孤(六)遺多。擧族仰薄宦。　知らず、孤遺多く、族を擧げて、薄宦を仰ぐことを。
有時未朝餐。得米日已晏(七)。　時あつて、未だ朝餐せず、米を得て、日、すでに晏し。
隔牆聞讙呼。衆口極(八)鵝鴈。　牆を隔てて讙呼を聞く、衆口、鵝鴈を極む。
前計頓乖張。居然見眞贗(九)。　前計、頓に乖張、居然として、眞贗を見る。
嬌兒好眉眼。袴(一〇)脚凍兩骭(一一)。　嬌兒、眉眼好し、袴脚、兩骭を凍る。
捧書隨諸兄。累累兩角丱(一二)。　書を捧げて、諸兄に隨ひ、累累として兩角丱す。
冬惟茹寒虀(一三)。秋始識瓜瓣(一四)。　冬惟だ、寒虀を茹ふのみ、秋、はじめて瓜瓣を識る。
問之不言饑。飫若厭芻豢(一五)。　これに問ふも、饑を言はず、飫として芻豢に厭くが若し。
才名三十年。久合居給諫(一六)。　才名三十年、久しくして合に給諫に居るべし。
白頭趨走裏。閉口絕謗訕。　白頭趨走の裏、口を閉ぢて、謗訕を絕つ。
府(一七)公舊同袍。拔擢宰山澗(一八)。　府公は舊同袍、拔擢して山澗に宰たらしむ。
寄詩雜詼(一九)俳。有類說鵬鷃(二〇)。　詩を寄せて詼俳を雜へ、鵬鷃を說くに類するあり。
上言酒味酸。冬衣竟未擐(二一)。　上には言ふ酒味の酸、冬衣覺に擐せずと。

下言人吏稀。惟足彪與虥。(二二)
下には言ふ人吏稀なり、惟だ彪と虥とに足ると。

又言致豬鹿。此語乃善幻。(二三)
又言ふ、豬鹿を致さむと。この語、乃ち幻を善くす。

三年國子師。(二四)腸肚習藜莧。(二五)
三年國子の師、腸肚、藜莧に習ふ。

況住洛之涯。魴鱒(二六)可罩汕。(二七)
況んや、洛の涯に住し、魴鱒、罩汕すべきをや。

肯效屠門嚼。(二八)久嫌弋者篡。(二九)
肯て屠門の嚼に效はむや、久しく、弋者の篡を嫌ふ。

謀拙日焦拳。(三〇)活計似鋤剗。(三一)
謀拙にして、日に焦拳し、活計、鋤剗するに似たり。

男寒澁詩書。妻瘦剩腰襻。(三二)
男は寒くして詩書に澁り、妻は瘦せて腰襻を剩す。

爲官不事職。厥罪在欺謾。(三三)
官と爲つて職を事とせず、厥罪、欺謾に在り。

行當自劾(三四)去。漁釣老葭薍。(三五)
行く〻當に自ら劾し去るべし、漁釣、葭薍に老ゆ。

歲窮寒氣驕。冰雪滑磴棧。(三六)
歲窮まつて、寒氣驕り、冰雪、磴棧滑かなり。

音問難屢通。何由覩清盼。(三七)
音問、屢ば通じ難し、何に由つてか清盼を覩む。

【字解】【一】赤錢樹 前にも見ゆ、都近くの地方官。【二】慢 散慢、役に立たぬこと。【三】莫間 隔てなし。【四】[illegible] [illegible]は古しへの衣の字であるが、ここのは綻に作るべきものだといふ說がある。【五】綻 一字で反對の意義を持つて居るので、綻びに對して綻びを縫ふといふこと。【六】孤遺 親族の孤兒遺族。【七】日已晏 夕に近いこと。【八】極鵝瓜 鵝鳥や瓜の如く膨ぎ立てる。【九】筧贋 極めて輕い意味で、表裏といふ位のこと。【一〇】袴脚 袴は下衣、ヅボンの樣なもの、脚は其脛の部分。【一一】兩骭 爾雅の註に「骭は脚脛」とある。【一二】兩角丱 丱は髮を束ねる貌。詩經に總角丱兮とあつて、正義に「言ふは、その髮を總ねて兩角と爲すなり」とある。【一三】寒齏 周禮七菹の註に「細切を齏となす」とあつて、冷えた齏。【一四】瓜瓣 說文に「瓣は瓜中の實」とある。【一五】芻豢 牛羊をいふ。【一六】給諫 給事中と諫議大夫。【一七】府公 河南府の長官、卽ち河南尹鄭餘慶だらうといふこと。【一八】山澗 嵩山の地、卽ち片田舍、伊陽を指す。【一九】詼俳 漢書に「枚皐詼笑、俳倡に類す」とあつて、その註に「李奇曰く、詼は嘲なり」師古曰く「俳は雜戲なり」とある。嘲謔滑稽。【二〇】斥鷃 莊子の逍遙遊に「冥海に鳥あり、その名を鵬となす、背、泰山の如く、翼、垂天の雲の若し、斥鷃これを笑ふ」とある。鷃は、みそさざえの類。【二一】未擐 說文に「擐は貫するなり」とあり、左傳成公十三年に「文公、躬、甲冑を擐す」とある。【二二】彪與虥 說文に「彪は虎文とあり」とある。又爾雅に「虎の竊毛あるを之を虥といふ」とあつて、註に「竊は淺なり」とある。【二三】善幻 漢書西域傳に善眩といふ語があつて、顏師古の註に「眩は幻と同じ、眩は相詐惑するなり。卽ち今の刀を呑み、火を吐き、瓜を植ゑ、人を屠り、馬を截るの術」とあつて、韓愈は、蓋し此語を用ひたのである。【二四】國子師 國子博士を以て東都に分司たりしをいふ。【二五】藜莧 陸璣の毛詩疏に「萊は卽ち藜なり、莖葉皆王芻に似たり。兗州の人、蒸して以て茹となす、これを萊蒸といふ」とあり。本草に「莧は一名莫實、淮陽の川澤及び田中に生ず、葉、莖の如し」とあつて、二種ともに詰まらぬ野菜。【二六】魴鱒 詩經に九罭之魚鱒魴とあつて、郭璞の爾雅註に「江東、魴魚を呼んで鯿となす。鱒は鯶子に似て赤眼」とある。【二七】罩汕 爾雅に「簄、これを汕といひ、籗、これを罩といふ」とあつて、郭璞の註に「籗は今の撩罟、汕は魚を捕ふるの籠なり」とある。兩者ともに漁器。【二八】屠門嚼 桓譚の新論に「人、長安の樂しきを聞かば、門を出で、西向して笑ふ。肉味の美なるを知らば、屠門に對して大嚼す」とあり、曹子建の吳季重に與ふる書に「屠門を過ぎて大嚼す、肉を得ずと雖も、しばらく快意なるを貴ぶ」とある。【二九】弋者篡 揚子法言に「鴻、冥冥に飛ぶ、弋人何ぞ篡せむ」とあつて、古本及び後漢書にも、さう書いてある。篡は取るの義。今本、揚子に慕に作るは宜しくない。【三〇】焦拳 心を焦

がし爭な圖める。【三一】鋤劉　蒼頡篇に「劉は削平するなり」とある。鋤を以て耕すこと。【三二】剝腰褌　王伯大は「褌は衣系なり」といつた、腰卷の類。腰卷が長くなつて引きずる。【三三】欺謾　上を欺いて疎慢なること。【三四】劾去　彈劾して去る。【三五】葭薍　爾雅に「葭蘆菼薍」とあつて、郭璞の註に「葭は蘆葦なり、菼薍は葦に似て小、中を實す」とある。ともに蘆の屬。【三六】磴棧　磴は石段、棧はかけ橋。【三七】淸盼　蔣註に「盼、或は眄に作る。今按ずるに、盼、盻、眄、三字ともに通ず。この詩、當に眄に作るべし、ここに盼に作るも、亦た通ず、盼は青眼といふがごときなり。李白の詩に君子任青眄とある。

【題義】これは、韓愈が洛陽に居た時の作で、その頃、崔立之といふものと餘程親しくしたと見えるが、その人が現に伊陽の縣官と成つて居るに就いて、兩人の聚散離合の跡を述べて寄懷したのである。伊陽は、唐書地理志に「伊陽縣は河南道河南府に屬す」とある。次に、蔣註には「伊陽を攝す、乃ち洛の屬邑なり。今の河南汝州に在り。詩意を觀るに、初め崔と赤縣尉に相識る、時は乃ち元和二年、公、江陵より入つて國子博士となる日なり。又云ふ、府公舊同袍、拔擢宰山澗と。乃ち留守鄭餘慶、崔を擢んでて伊陽令を攝せしむるなり。又云ふ、三年國子師、況住洛之涯と。すなはち、國子博士を以て分司たるなり。又多衣竟未擐、歲窮寒氣驕と云ふ、すなはち是れ、元和三年冬の作なり」といつて居る。

【詩意】崔君が初めて洛陽に來られた時、面識には成つたものの、さう親しく往來して其人の身跡を十分盡すまでには成らなかつた。聞くところに據れば、君は、都近くの地方官をして居られた人だといふことで、我輩の如き何にも役に立たぬ國子學の教員とは丸で違ふといふことだけは、分かつて居た。

ところが、我輩が借家をして鄰同士となつたから、往來して隔てなき樣に成つた。その時、我輩は、初めて洛陽に來て、まだ住み慣れぬ處から、事に觸れて不便を感じたが、幸ひ鄰同士であるから、疏餐が出來たから一緒に食べやうではないかとか、著物が破れたから一寸綻びを縫つて貰ひたいといつた樣に、大に便宜を得た。我輩が考へるには、長く此土地に落ち付く樣に成つたなら、何か入用の時には、鄰から借りて間に合はせれば善いので、格別心配することはないと思つて居た。しかし、久しい間には、最初の想像とは丸で違つて來て、君の家の暮し向の隨分困難なることが分かつた。高が地方の小官吏でありながら、家には、親類の孤兒とか、遺族とかいふ樣な厄介者が、澤山集まつて居て、君の僅かばかりの俸給を仰ぐといふ始末。そこで、どうかすると、朝飯も食はず、やつと米を求めて來たかと思へば、最早日暮に近く、家の近くに來ると、牆を隔てて、小供達の騷ぎ呼ばはるのが聞こえ、早く飯が食ひたいといつて、がやがやする有樣は、丁度、鵜鳥か雁がギヤアギヤア鳴き立てる樣な安排であつた。無論、さういふ人の處へ物を借りに行くことも出來ず、すつぱり、當てが外れて仕舞つたが、これは、表裏その觀を異にするからであつた。君の最愛の子供は、眉目だけ美しいが、可哀相に、寒中脛もあらはな短い下著を著け、足が凍つて居て、まことに氣の毒千萬、それを一向氣にも掛けずして、書物を捧げ、髮を總角に結んで居る親類の孤兒の年長者に隨つて、本を習つて居る。もとより、暮し向が困難であるから、冬だといつて溫い物を食はせる譯には行かず、唯だ冷えた膾を食ひ、夏

は瓜の冷やしたのを食べる時であるが、秋、瓜が末になつて、無味くて價の安い時、はじめて買つて來て食はせるといふ始末。お前達、腹が減りはせぬかといつて尋ねると、腹は十分膨れて居るといつて、芻豢の牛羊が美味に飽いた樣に、極めて平氣なのが、却つて氣の毒である。君は、才名三十年の久しきに及び、本來ならば、給事中か諫議大夫に任せらるべき筈であるのに、白髮頭に成つても、頻りに趨走し、口を閉ぢて、成るべく人に謗られぬ樣にして居る。かくて、滿腹の經綸を展べることの出來ないのは、まことに情ない。河南尹鄭餘慶は、元と同學であつた緣故から、君を拔擢して、深山の地たる伊陽の縣令たらしめた。そこで近ごろ、態態詩を寄せられたが、その中には、冗談も交つて居て、丁度莊子の大鵬と斥鷃といつた樣な滑稽に似たものもある。その文句を擧げると、第一、田舍の縣令だから、屬僚も少く、時時くて困まるし、冬に成つても、實は綿入を著ない。その次に、田舍の縣令だから、田舍酒は酸ッぱ彪とか䝙とかいふ恐ろしい獸が出て來る。それから、一番終りに、猪とか鹿とかいふ者が澤山あるから、その肉を此次には君の處に送らうと書いてあつたが、この言葉は、例の手品同樣の物で、あてにならぬかも知れない。我輩は、國子學の敎員で、俸給も裕かならぬ處から、藜とか、莧とかいふ野菜ばかり食つて居る。まして、この頃、洛水の邊に住んで居るから、罩とか汕とかいふ漁器を以て、魴鱮の類を十分に捕へることが出來るから、實は肉など送つて戴いても、さのみ有り難いとは思はない。肉屋の前を通つて、その臭だけで滿足するといふ樣な譯でもなく、獵師が網を以て鳥を取るやうな事は、もとより嫌ひである。何分、生計に拙であるから、心を焦がし、拳を堅めて見た處で、追ッ付かず、百姓が鋤で耕すと同じ困難をせねばならぬ。そこで、倅は、寒さに苦んで、詩書の學問も澁り勝ちで、一向進歩せず、妻は、痩せ衰へて、ぞろりと腰卷を引きずつて居る。官に居ながら、職を事とせざれば、上を欺くの罪、まことに相濟まぬ譯であるから、近い内に、折を見て、自ら彈劾して辭表を提出し、蘆間に釣を垂れて、老を送らうと思ふので、さながら、君が昔日の境涯と同じである。今しも、年、將に暮れむとし、寒氣愈よ甚だしく、君の居る處へ行くには、氷雪深く埋めて、山路の磴棧は滑り易く、交通不便なるが故に、手紙さへ通じ難いと思ふから、再び御目に懸るのは何時の事か、その期の無いのを歎ずる次第である。

【餘論】この詩は、五段より成り、崔君初來時より居然見㆓眞贋㆒に至るまでは發端、嬌兒好㆓眉眼㆒より飫若㆑厭芻豢㆒に至るまでは、崔氏の子供に就いて詳しく寫し、才名三十年より此語乃善㆑幻に至るまでは、崔立之が今次伊陽を攝して、詩や手紙を寄せられしを述べて、本題の正文に入り、三年國子師より漁釣老 葭蘊」に至るまでは、自己の事を敍し、最後の四句は、この詩を寄する挨拶である。朱竹垞は「凡そ、詩は、須らく開闔錯綜なるべし、これ意態飛動、風人の趣あり、昌黎の詩、毎に板敍多く、奇古餘あつて興趣長からず」といつて居るが、これも、一面に於ては、まさしく其眞を得たものである。

送侯參謀赴河中幕

侯參謀の河中の幕に赴くを送る

憶昔初(一)及第。各以少年稱。　憶ふ昔、初めて及第、各少年を以て稱せらる。
君頤始生鬚。我齒淸如冰。　君が頤、始めて鬚を生じ、我が齒、淸くして冰の如し。
爾時心氣壯。百(二)事謂已能。　爾時、心氣壯、百事、己れ能くすと謂へり。
一別詎(三)幾何。忽如隔晨興。　一別、詎ぞ幾何ぞ、忽ち晨興を隔つるが如し。
我齒豁可鄙。君顏老可憎。　我が齒、豁にして鄙むべく、君が顏、老いて憎むべし。
相逢風塵中。相視迭嗟矜。　相逢ふ風塵の中、相視て迭に嗟矜す。
(四)幸同學省官。末路再得朋。　幸に學省の官を同じうし、末路再び朋を得たり。
(五)東司絕教授。遊宴以爲恒。　東司、教授を絕ち、遊宴、以て恒となす。
秋漁蔭密樹。夜博然明燈。　秋漁、密樹に蔭し、夜博、明燈を然やす。
雪逕抵(六)樵叟。風廊折談僧。　雪逕、樵叟に抵り、風廊、談僧を折く。
(七)陸渾桃花間。有(八)湯沸如烝。　陸渾、桃花の間、湯あり、沸いて烝すが如し。
三月嵩(九)少步。躑(一〇)躅紅千層。　三月、嵩少に步すれば、躑躅紅千層。

洲沙厭晚坐。嶺壁窮晨昇。　洲沙、晚坐に厭き、嶺壁、晨昇を窮む。
沈冥不計日。爲(一一)樂不可勝。　沈冥、日を計らず、樂たること勝ふべからず。
(一二)遷滿一已異。乖離坐難憑。　遷滿、一たび已に異にして、離乖、坐ながら憑り難し。
行行事結束。人馬何蹻(一三)騰。　行行、結束を事とせよ、人馬、何ぞ蹻騰たる。
感激生膽勇。從軍豈嘗曾。　感激して、膽勇を生じ、從軍、豈に嘗て曾ねてせむや。
(一四)洸洸司(一五)徒公。天子爪(一六)與肱。　洸洸たり司徒公、天子、爪と肱と。
提師十萬餘。四海欽風(一七)稜。　師を提ぐ十萬餘、四海、風稜を欽む。
(一八)河北兵未進。蔡(一九)州帥新薨。　河北、兵未だ進まず、蔡州、帥、新に薨す。
曷不請掃除。活彼黎(二〇)與烝。　曷ぞ請うて掃除して、彼の黎と烝とを活かさざる。
鄙夫誠怯弱。受恩愧徒弘。　鄙夫、誠に怯弱、恩を受けて徒に弘きを愧づ。
猶思脫儒(二一)冠。棄死取先登。　猶ほ思ふ、儒冠を脫し、死を棄てて先登を取らむことを。
又欲面言事。上書求詔徵。　又面のあたり、事を言ひ、上書して、詔徵を求めむと欲す。
(二二)侵官固非是。妄作譴可懲。　官を侵すこと、固より是に非ず、妄作、譴、懲るべし。

惟當待責免。耕斸歸溝塍。
惟だ當に責の免るるを待つて、耕斸、溝塍に歸るべし。

今君得所附。勢若脫韝鷹(二三)。
今、君、附くところを得たり、勢は韝を脫する鷹の若し。

檄筆無與讓。幕謀職其膺。
檄筆、與に讓るなし、幕謀、職として其れ膺らむ。

收績開史牒。翰飛逐溟鵬。
績を收めて、史牒を開き、翰、飛んで溟鵬を逐ふ。

男兒貴立事。流景(二四)不可乘。
男兒、事を立つるを貴ぶ、流景、乘ぐべからず。

歲老陰(二五)沴作。雲頹雪翻崩。
歲、老いて、陰沴作り、雲、頹れて、雪翻崩。

別袖拂落水。征車轉崤陵(二六)。
別袖、落水を拂ひ、征車、崤陵に轉ず。

勤勤酒不進。勉勉恨已仍。
勤勤として、酒、進まず、勉勉として、恨、すでに仍る。

送君出門歸。愁腸若牽繩。
君を送つて、門を出でて歸る、愁腸、繩を牽くが若し。

默坐念語笑。癡如遇(二七)寒蠅。
默坐、語笑を念ふ、癡は寒に遇ふの蠅の如し。

策馬誰可適。晤(二八)言誰爲應。
馬に策つて、誰にか適くべき、晤言、誰か爲に應へむ。

席塵惜不掃。殘罇對空凝。
席塵、惜んで掃はず、殘罇、對して空しく凝る。

信知後會時。日月屢環緪(二九)。
信に知る、後會の時、日月屢ば環緪せむことを。

生期理行役。歡緒絕難承。
生期、行役を理め、歡緒、絕えて承ぎ難し。

寄書惟在頻。無恡簡(三〇)與繒。
書を寄せて、惟だ頻なるに在り、簡と繒とを恡む無かれ。

【字解】【一】初及第　前に見ゆる通り、貞元八年に、韓愈侯繼、同じく進士の第に登つた。【二】百事諳已能　方世擧の説に「中庸、人一たびして能くすれば、己、これを百たびするの語を用ふ」とある。【三】詎　何に同じ、字林に「詎は未知の詞なり」とあり、潘岳の詩に曾祭詎幾時とある。【四】幸同學省官　韓愈の祭薛助教文に朝議郎守國子博士韓愈、太學助教侯繼とあつて、その時は、元和四年後三月二十一日であつた。【五】東司絀教授　新唐書の韓愈傳に「元和の初、權知國子博士として、東都に分司たり、三年、眞となる」とある。絀教授とは、教授が閑で、殆んど休講同様であるといふこと。【六】風廊　風通しの宜しい長廊。【七】陸渾　縣名、前に陸渾山火詩の條に見ゆ。【八】有湯　溫泉を云ふ。【九】崧少　嵩山の少室山。戴延之の西征記に「嵩高は山巖の中なり、東を太室と爲し、西を少室と爲し、相去ること七十里、嵩高は總名なり」とある。【一〇】躑躅　つつじ、前に見ゆ。【一一】爲樂不可勝　韓集中に嵩山天封宮題名があつて「元和四年三月二十六日、盧仝と洛中より少室に至り、李渤に謁し、玉泉寺に次し、明日李盧、道士韋濛、僧榮と少室に竝んで東して、衆寺に抵り、太室中峰に上り、封禪壇下の石室に宿し、逐に龍泉寺より、龍潭水に釣し明日、乃ち歸る。閏三月三日、國子博士韓愈題す」とある。【一二】遷滿　任期が滿ちる。【一三】躡履　躡は踏る貌。【一四】洸洸　詩經に武夫洸洸とあつて、爾雅に「洸洸は武なり」とある。【一五】司徒　王鍔を指す。【一六】爪與肱　爪牙股肱、詩經に祈父予王之爪牙とあり、書經に「臣は朕の股肱耳目と作る」とあり、左傳成公十二年に「以て己の腹心股肱爪牙と爲す」とある。【一七】風稜　風采威稜、稜は神靈の威。【一八】河北兵未進　唐書に「元和四年十月辛巳、成德軍節度使王承宗反す、癸未、吐突承璀に命じ、兵馬招討使となし、以て之を討つ」とある。【一九】蔡州帥新薨　唐書に「元和四年十一月己巳、彰義軍節度使吳少誠卒し、その弟少陽、自ら留後と稱す」とある。【二〇】黎與烝　黎烝は人民、封禪文に覺悟黎烝とあり、杜甫の詩に人生無家別、何以爲烝黎とある。【二一】儒冠　漢書酈食其傳に「客、儒冠を冠して來るもの、沛公輒ち其冠を解いて、其中に溺す」といひ、杜甫の詩に儒冠多

誤レ身とある。【二二】倭官　左傳成公十六年に「倭官は、冒なり」とある。【二三】脫韝鷹　鮑照の樂府に昔如二韝上鷹一とあり、東觀漢記に「桓譚、趙韜に謂つて曰く、善吏は良鷹の如し、韝を下れば即ち中つ」とある。【二四】流景　日月の移り行くを云ふ。【二五】陰沴　莊子に「陰陽の氣、沴たるあり」といひ、漢書五行志に「氣相傷ふ、これを沴といふ」とある。【二六】晴陸　地名、河南陝州に在つて、左傳僖公三十二年に「殽に二陵あり」と見ゆ。【二七】迅寒蠅　即ち凍蠅、朝野僉載に「蘇味道、才高く識廣し。王方慶、質卑く辭鈍なり。ともに鳳閣舍人となる。張元一曰く、蘇は九月霜を得るの鷹、王は十月凍を被るの蠅」とある。【二八】晤言　晤は對面する。【二九】環組　楚辭王逸註に「組は弓に弦を張るなり」とある。環組は循環に同じ。【三〇】牋與緒　手紙を書く紙と狀袋、緒は元と帛の總名。

【題義】原註に「侯繼、時に王諤の辟に從ふ」とある。舊唐書に「元和三年九月、淮南節度使王諤を以て、檢校司徒河南尹河中晉絳慈隰節度使たらしむ」とあるから、侯繼の赴任したのは、いづれ、それより後の事であらう。蔣註には「按ずるに、繼、公と本と同擧、貞元八年の進士、元和四年、又官を學省に同じうし、公は博士、繼は助敎たり。六月、公、東都に分司とし、而して、繼も亦た河中の幕に參す。この詩は、この年冬の作なり」とあり。すると、王諤が節度使に成つた後年餘、元和四年冬の事である。

【詩意】おもへば昔、初めて進士に及第した時、君と一緒であつて、各〻少年を以て稱せられ、君は、頤に始めて少しばかりの鬚が生え、我は、歯の綺麗なること、さながら氷の如くであつた。その時、兩人とも、心氣壯にして、百事何でも自分の出來ぬことは無いと思つて居た。一別以後、多くも時は過ぎず、昨日の朝と今日の朝と隔つる位に思つて居たが、さて愈よ逢つて見ると、我が歯は處處拔け落ちて、甚だ鄙むべく、君の顏は大分ひねて、憎むべき有樣に成つた。風塵の中に相逢うて、互に僅の間、別れて居たと思つたのに、かくも容貌の違ふ程、年月が經たものかといつて嘆嗟した位。幸にも、一緒に學校の役人に成つて、又ぞろ、親交を續けることの出來たのは、まことに喜ばしい。洛陽の學校は、隨分ひまで、殆んど敎授を絕つて居る程であるから、君と共に游宴するを以て常とし、秋は近傍の河に行つて、密樹の蔭に身を寄せ、一日釣り暮らし、夜は、博戲を爲して明燈を燃やし、雪ふる朝、細路を辿り、山中の樵夫を尋ねて遊んだこともあるし、寺の風通しの宜しい長廊で、坊主と問答をして、其奴を見事に負かしたことなどがあつた。それから、陸渾山に桃花の咲く頃、溫泉に往つて浴したこともあるし、三月の頃、嵩山の少室を往來して、躑躅の花の紅千層に咲いて居るのを見たこともあり、その他、洲沙に往つて、日暮の頃、久しく坐つて居たり、嶺壁を朝早く攀ち登つたり、毎日毎日、處處に出あるいて、殆んど日を計らず、興を山水の間に縱にして、その樂、勝ふべからざる位であつた。やがて、任期が滿ちると、今までは終始變らぬと思つて居たのが、忽ち乖離し、まことに憑り難き始末に成るので、ここに、侯君も參謀として、今次、河中府に赴任することに成つた。そこで、旅の支度を爲し、多くの供人を連れて、門出を爲せば、今までとは打つて變つて、勢も善く、一たび主將の恩に感激すれば、自然、膽勇を生じ、まだ從軍したことは無いが、まことに、意

氣揚揚たる有様であつた。今度、君を拔擢した司徒王諤は、洸洸たる武人であつて、天子の爪牙股肱となり、十餘萬の兵を擁して、河中府に居り、四海の人民は、その風采威稜を欽仰して居る。今しも、河北は亂を始めたが、征討の兵は、未だ進まず、蔡州に於ては、吳少誠が新に死んだので、すべて、この機に乘じ、一擧して王化に服せざる諸鎭を掃除し、人民を救ひ出すといふ樣な名策を進めて貰ひたいものである。君とは打つて變つて、小生は鄙夫で、天性怯懦、平生徒に國恩を受けて居ることを恥として居る譯であるから、この機會に乘じ、儒冠を脫し、一死を賭して先登の功を立てたいと念じて居る。實は面のあたり、此事を陳情し、詔を以て徵されむことを求めたいと思ふが、自分の職分を忘れるは、侵官に當つて、甚だ宜しからぬことで、無暗に出遊張ると、譴責を受けるに決まつて居る。そこで、責任の免除されるを待ち、田圃溝塍の間に耕作して、一身を終らうと思つて居る。君は今、然るべき地位を得て、その勢の善いことは、鞲を脫したる鷹のやうである。かくて、檄を草しては、他人に讓ることなく、幕中の謀議に參與する上は、速に功を奏して、史上に其名を留める樣にし、羽翰を奮へば、北溟の鵬を逐うやうに有りたい。男兒は、一つの事業を立てることを貴ぶので、愚圖愚圖して歲月の流るるままに老い行くやうでは、まことに仕方がない。今しも、年の暮で、天地は陰氣に閉され、雲頹れて雪翻り、非常に荒寒の景色である。この時、君は洛水に臨んで別の袖を拂ひ、征車に乘じて、崤陵に差しかかり、愈よ河中府に赴かれる。しきりに、酒を勸むれども、さう飲む氣にも成らず、わざと力んでは居るが、別恨は依然として生ずる。君を送つて後、ここの門を出でて我が家に歸つたならば、わが愁腸は、牽ける繩の如くであらう。今後は、友なく、ひとり、默然兀坐し、前日語笑せしことを思へば、心細くて、さながら、寒氣に凍つた繩の如く、君が居なくなつた上は、馬に鞭つて外出しても、尋ねるべきあてもない。君が今まで坐つて居た席の塵は、惜しくて、掃ひたくもない心持がするし、君と對酌した酒の滴りが樽中に其儘凝つて殘れるを見れば、君を思ふ心は、愈よ痛切である。後會は何時とも分からぬが、いづれ、日月屢ば循環した數年後の事であらう。もとより、生きて居る間は、各〻おのが務を勵まねばならず、君と別れては、歡喜の綱も斷えて、これを續けることも出來ない。せめて、手紙の往復だけは、頻繁やつて貰ひたいので、それを書く紙や狀袋を惜むことの無いやうにして貰ひたい。

【餘論】この詩は七段より成り、起首、憶昔初及第より相視迭嗟矜に至るまでは、往年の出處を敍し、幸同㆓學省官㆒より爲㆑樂不㆑可㆑勝に至るまでは、同じく東都に居て交誼愈よ深きことを敍し、遷滿一已異より活㆓彼黎與㆒烝に至るまでは、送別の正文、鄙夫誠怯弱より耕斸歸㆓溝塍㆒に至るまでは、韓愈自身の境涯を寫し、今君得㆑所㆑附より流景不㆑可㆑乘に至るまでは、赴任後の功績を豫想し、歲老陰沴作より殘罇對空凝に至るまでは別情、信知後會時より結末無㆑恡㆓簡與㆒繒とに至るまでは將來の希望を述べたのである。但し、朱竹垞は「間ま佳句あるも大約粗硬」といひ、更に之を細說し、憶昔初及第に

就ては「この起一段、尤も硬排を覺ゆ」といひ、行行事結束に就いては、以下敍事、蒼古と雖も、然れども、終に板實を覺ゆ」といひ、蔵老陰沴作に就いては「敍別稍や委態あり」といつて居る。

東都遇春

東都、春に遇ふ

少年氣眞狂。有意與春競。　少年、氣、眞に狂、意あり、春と競ふ。

行逢二三月。九州花相映。　行く〻、二三月に逢ふ、九州、花、相映す。

川原曉服鮮。桃李晨妝靚。　川原、曉服鮮に、桃李、晨妝靚たり。

荒乘不知疲。醉死豈辭病。　荒乘、疲るるを知らず、醉死、豈に病を辭せむや。

飲啖惟所便。文章倚豪横。　飲啖、惟だ便とするところ、文章、豪横に倚る。

爾來曾幾時。白髮忽滿鏡。　爾來、かつて幾時ぞ、白髮、忽ち鏡に滿つ。

舊游喜乖張。新輩足嘲評。　舊游、喜んで乖張、新輩、嘲評するに足る。

心腸一變化。羞見時節盛。　心腸、一に變化し、時節の盛なるを見るを羞づ。

得閒無所作。貴欲辭視聽。　閒を得て作るところなし、貴くして視聽を辭せむと欲す。

深居疑避仇。默臥如當暝。　深居、仇を避くるを疑ふ、默臥、瞑に當るが如し。

朝曦入牖來。鳥喚昏不醒。　朝曦、牖に入つて來り、鳥喚んで、昏くして醒めず。

爲生鄙計算。鹽米告屢罄。　生の爲に計算を鄙み、鹽米、屢ば罄くるを告ぐ。

坐疲都忘起。冠側懶復正。　坐疲すべて起つを忘る、冠側つて、復た正すに懶し。

幸蒙東都官。獲離機與穽。　幸に東都の官を蒙り、機と穽とを離るるを獲たり。

乖慵遭傲僻。漸染生弊性。　乖慵、傲僻に遭ふ、漸染、弊性を生ず。

既去焉能追。有來猶莫聘。　既に去つて、焉ぞ能く追はむ、來るあつて猶ほ聘するなし。

有船魏王池。往往縱孤泳。　船あり、魏王の池、往往、孤泳を縱にす。

水容與天色。此處皆綠淨。　水容と天色と、此處皆綠淨。

岸樹共紛披。渚牙相緯經。　岸樹、共に紛披、渚牙、相緯經。

懷歸苦不果。卽事取幽迸。　歸るを懷うて、苦に果さず、事に卽いて幽迸を取る。

貪求匪名利。所得亦已併。　貪求、名利に匪ず、得るところ、亦た已に併す。

悠悠度朝昏。落落捐季孟。　悠悠として朝昏を度り、落落として季孟を捐つ。

羣公一何賢。上戴天子聖。
謀謨收禹績。四面出雄勁。
轉輪非不勤。稽逋有軍令。
在庭百執事。奉職各祗敬。
我獨胡爲哉。坐與億兆慶。
譬如籠中鳥。仰給活性命。
爲詩告友生。負愧終究竟。

羣公、一に何ぞ賢なる、上に天子の聖を戴く。
謀謨、禹績を收め、四面、出でて雄勁。
轉輸、勤めざるに非ず、稽逋、軍令あり。
在庭の百執事、職を奉じて各祗敬。
我、獨り胡すれぞや、坐に億兆と慶を與にす。
譬へば、籠中の鳥、給を仰いで、性命を活かすが如し。
詩を爲つて友生に告ぐ、愧を負うて終に究竟。

【字解】【一】川原　川は必ずしも河ではなく、矢張平地をいふ。【二】晴服　朝早く飾られた服裝。【三】妝靚　上林賦に「靚妝刻飾」とあつて、郭璞の註に「靚妝は粉白黛黒なり」とあり、蔣註には「靚は青黒色」とある。【四】走乗　あちらこちら勝手に馬で乗り廻はす。【五】喜乗張　無沙汰をすることを却つて喜ぶ。【六】獲離機與穽　李翺の撰せる韓愈の行狀に「江陵の掾より、入つて國子博士となる、宰相に公の文を愛するものあり、將に文學の職を以て公を處らしめむと欲す。先を爭ふものあり、公を謗す、公、禍に及ぶを恐れ、途に分司を求む」とある。【七】乖慵　一般の人と相背いて疎慵なること。【八】漸染　次第に染まる。【九】魏王池　河南志に「洛水、徇善・旌善二坊の北を經、南に溢れて池となり、深處、數頃に至り、水鳥翔泳、荷芰翻覆、都城の勝たり。貞觀中、以て魏王泰に賜ふ、故に魏王池と號す」とある。【一〇】渚牙　汀渚の犬牙の如く出入せるをいふ。【一一】幽迸　幽趣の迸り溢るるをいふ。【一二】季孟　論語に季孟之間とある、季氏孟氏、ともに魯の公族で、先祖は兄弟同士であつた。ここでは、始終の義。【一三】禹績　禹が有苗を征伐した事をいふので、元和の初、蜀の劉闢を平らげしことを指す。【一四】轉輸　輜重の運搬。【一五】稽逋　滯つて進行せぬこと。【一六】籠中鳥　鶡冠子に「籠中の鳥は、籠を空しうするも出でず」とあり、左思の詠史に習習籠中鳥とある。

【題義】唐書地理志に「河南を東都といふ、隋置く、武德四年廢す、貞觀六年、洛陽宮と號す。顯慶四年、東都といひ、光宅元年、神都といひ、神龍元年、復た東都といひ、天寶元年、東京といひ、上元二年、京を罷め、肅宗元年、復た東都となす」とある。それから、蔣註に「これと後の感春と、當に皆元和五年春に在つて作るなるべし」とあつて、大方、さうだらうと思はれる。

【詩意】我輩の少年の頃に當つては、人から氣違ひ染みて居るといはれる程も活潑であつて、さながら、春と競爭する樣な心持になつて、一日も、家にじつとして居ることが出來なかつた。二三月になると、世界中の花が一齊に咲き出でて相映じ、曉に川原の飾られたる服裝は、いとも鮮に、桃李の朝に肢へるは、まことに目ざましい。その時は、あちらこちらと勝手に馬を乗り廻はして、疲れることを知らず、又醉つた儘、死んでもかまはぬといふ位、唯だ便とするところに從つて、飲食を恣にし、又文章は非常に豪快縱橫なることを自負して居た。その後、かつて幾時も經ぬやうに思ふが、鏡を開けば、白髮になつて仕舞ひ、昔馴染の友達は、いくらもあるが、いつしか嫌はれて、無沙汰することを却つて喜ばれるやうになり、又新進の少年は、蔭で非常に嘲評して居るとのことである。そこで、自分の心腸も若い時とは丸で變つて仕舞ひ、春の時節の賑賑しいのを見るも羞かしい樣な心持がす

る。今日は、別に忙しい職に居るでもなく、隨分暇はあるが、何をするのも厭であるから、すべて視ざる、聽かざるといふ主義を取つて、おのが心を煩はさざるを貴ぶ樣な氣に成つた。かくて、堅く門を閉ぢて深居し、さながら仇を避けて隱れて居る樣であり、默然として身を横へ、いつでも、睡つて居るも同じである。朝日が窓に差しこんで、鳥が頻に囀き立てても、なほ昏昏として、一向目を醒まさない。元來、我輩は、錢勘定を賤しいとして居るから、毎日寢てばかり居ては、鹽米の屢ば盡きるのも、致方の無い次第で、精神が既に疲れては、唯だ茫然として、身體を起すことをも打忘れ、又冠が傾いても、之を正すことさへ煩はしい。長安に居たならば、如何なる憂き目に遇ふか分からぬ位であつたが、幸に東都の官を蒙つて、この洛陽に來た爲に、機と穽とに陷るの危險だけは、どうやら先づ逃れることが出來た。しかし、何事も人と違うて疎懶であり、且つ人並に遊び戲れるのも面白くないといふ傲僻が手傳ひ、それが次第に一つの慣習を爲し、家に居ても、ぼんやりして、何もしないといふ僻性を形成するに至つた。もとより、人と交を結ばうといふ氣が無いでもないが、既に去りしものは、決して此に進み來らず、未知の者は、猶更呼んでも來ないといふ始末で、愈よ世の中と遠ざかる樣になつた。ここに、おのが心を慰めるのは、東都の一名所たる魏王池であつて、唯だ一人で舟を泛べ、勝手に水上を漕ぎ廻ると、天水相接し、その色は、綠色極めて淨く、岸樹とともに紛披し、池の渚は犬牙出入、互に經緯となつて、如何にも景色が宜しい。我輩は今歸鄉することも出來ないから、故鄉に似た樣な幽趣の迸り溢るるのが氣に入つたのである。我輩の貪り求めるのは、天然の景色であつて、名利ではない。そこで、今、魏王池に遊んで、山水の樂を併せ有するを得たから、これを以て、滿足して居る譯である。それで唯だ悠悠として朝夕を度り、落落として、終始かくありたいと念じ、この外には、格別望もない。翻つて、朝廷の上を見ると、羣公皆賢にして、上には聖明の天子を戴き、今次、禹が有苗を征して、偉績を收めた樣に、蜀の劉闢といふ叛賊を平定するに就いて、四方より雄勁の軍兵を派出し、地方の節度使等に命じて、轉輸を勸めしめ、愚圖愚圖して居ると、軍令を以て之を處分することになり、從つて、在廷の百執事は、各祇敬して職を奉じて居る。然るに、我輩は東都の散官となつて、億兆の臣民とともに御喜びを申し上げるだけで、國家の爲に盡力することの出來ないのは、まことに意氣地の無い話。たとへば、籠中の鳥の如く、唯だ俸給を戴いて、生命を繋いで居るだけである。そこで、慚愧の念に堪へぬ處から、この詩を作つて、友人どもに、近況を告げ知らす次第である。

【餘論】この詩は、四段より成り、少年氣眞狂より文章倚㆓豪横㆒に至るまでは、往年の豪俠を敍し、爾來曾幾時より有㆑來猶莫㆑聘に至るまでは、東都に於ける現在の境遇を寫し、有㆑船魏王池より落落捐㆓季孟㆒に至るまでは、東都の春に遇うて、獨り幽賞を縱にすることを述べ、羣公一何賢より結末負㆑愧終究覺に至るまでは、おのが志を得ない處から、その不平を漏らし、國家の爲に力を盡せる樣な重

要の地位に引き上げて欲しいといふ意を婉曲に述べて居る。顧嗣立は「興致頗る豪、但だ尙ほ未だ渾然たらざるを覺ゆるのみ」といひ、朱竹垞の評に、川原曉服鮮に就いては「亦た生割と雖も、然れども、之を玩べば味ひあり、粗硬と爲さず」といひ、幸蒙東都官に就いては「東都の數語、頗る拙滯」といひ、魏王池の數句に就いては「この段、却つて寫し得て姿態あり、且つ轉折亦た多し」といつて居る。

感春 五首

感春 五首

(一)辛夷高花最先開。 辛夷の高花、最も先づ開く、

青天露坐始此廻。 青天露坐、始めて此に廻る。

已呼(二)孺人戛鳴瑟。 すでに孺人を呼んで、鳴瑟を戛し、

更遣稚子傳清杯。 更に稚子をして、清杯を傳へしむ。

選壯軍興不爲用。 壯を選んで、軍興、用を爲さず、

(三)坐狂朝論無由陪。 狂に坐して、朝論、陪するに由なし。

如今到死得閒處。 今の如き、死に到つて、閒處を得たり。

【字解】【一】辛夷 洪興祖は、「辛夷は、高さ數丈、江南は地暖にして正月開く。北地は寒くして二月開く。初め發するとき筆の如し、北人呼んで木筆と爲す。その花、最も早し、南人呼んで迎春と爲す」といひ、苕溪漁隱叢話に「木筆迎春、自ら是れ兩種。木筆は色紫にして叢生し、二月方に開く。迎春は、白色にして高樹、立春すでに開く。然らば辛夷は乃ち此花のみ」とある。すると、木筆はこぶし、迎春は白蓮で、同種類ではあるが、その花の色が違つて居る。元微之の集中、辛夷花問韓員外」といふ詩があつて、韓員外は卽ち韓退之、すると韓愈の洛陽の寓居の庭には、實際辛夷が澤山に有つたのである。【二】孺人 禮記に「大夫の妻を孺人といふ」とある。【三】坐狂 憲宗卽位の五年、夏を平らげ、蜀を平らげ、江東に軍し、赫然中興の盛を顯はしたが、韓愈は、年、强仕を踰え、閒に分司に投ぜしが故に、かく言つたのである。【四】康哉 書の皐陶謨に見えた歌に、庶事康哉とある。

還有詩賦歌(四)康哉。 還た詩賦の康哉を歌ふあり。

【題義】これは、春景に感じて作つたので、矢張、前首と同時の作である。

【詩意】辛夷の殊に高い處の花が第一に咲き出した。この身は、平生、外出ばかりして、青天の下に露坐して居たが、その時、丁度、わが家に歸り來り、細君を呼んで、戛然として瑟を彈せしめ、又子供に酌をさせて、心のどかに其花を賞した。兵隊には壯丁を選ぶから、年老いたる我は、近ごろ、戰爭が始まつても、國家の爲に何等の用を爲さず、それなら、文筆はどうかといふと、先頃、忌憚なく、上役を誹謗したといふので、狂に坐して、この東都に移され、國家の經綸を談ずる朝廷の上に陪席することも出來ず、とんと、もう役にも立たない。しかし、今日かういふ事をして居るのは、將に死なむとして、稍や身の落ち付く閒處を得たやうなもので、詩賦に依つて、康哉を歌ひ、聊か太平を頌し、それで、せめてもの事として居る。

【餘論】選壯の二句は、いづれも、上二下五といふ句法であつて、その離奇の處は、後世、黃山谷な

どが喜んで用ふるところである。なほ、全篇に就いて、朱竹垞は「粗硬自ら肆にす、惟だ感春を志るし、稍や風致を見る」といつた。

洛陽東風幾時來。　洛陽の東風、幾時か來る。
川波岸柳春全廻。　川波岸柳、春、全く廻る。
(一)宮門一鎖不復啓。　宮門、一たび鎖ぢて、復た啓かず、
雖有九陌無塵埃。　九陌ありと雖も、塵埃なし。
策馬上橋朝日出。　馬に策ち、橋に上れば、朝日出で、
樓闕赤白正崔嵬。　樓闕赤白、正に崔嵬。
孤吟屢闋莫與和。　孤吟、屢ば闋つて、與に和するなし、
寸恨至短誰能裁。　寸恨至つて短きも、誰か能く裁せむ。

【字解】【一】宮門一鎖　王伯大の解に「唐は長安に都し、洛陽を以て東都となす、故に宮門一鎖の句あり、宮門啓かず、故に、九陌、往來の塵埃なきなり」とある。

【詩意】洛陽に、東風は何時來たか知らぬが、今しも、川の波は綠に、岸の柳は芽ぐんで、春は全く廻つて來た。しかし、まだ春らしい心持のしないのは、洛陽への行幸が全く絶え、宮門一たび鎖されて復た啓かず、都大路も靜まり返つて、車馬の塵埃を揚げることが無いからである。偶ま馬に策つて、橋に上り、朝日の上る時分に、宮城の方を眺めると、樓闕の白壁が日光を受けて赤く見えるのが、崔嵬として高く聳えて居る。但し、天子の御膝元でないから物淋しく、又わが友も居らず、唯だ一人で吟詠するばかり。數ば歌ひ終つても、誰も和して呉れるものはなく、この至つて短い寸恨を裁斷して呉れぬから、愈よ以て、鬱鬱の念に堪へぬ次第である。

【餘論】朱竹垞は「結句、太だ俚に近く、終に雅調に非ず、宋人は、すなはち多く之を尙ぶ、結、湊泊に苦めども、對を作すは、亦た、小しく致あり」といつて居る。

春田可耕時已催。　春田耕すべく、時、すでに催す、
(一)王師北討何當廻。　王師北討、何ぞ當に廻るべき。
放車載草農事濟。　車を放ち、草を載せて、農事濟り、
戰馬苦饑誰念哉。　戰馬、饑に苦んで、誰か念はむや。
(二)蔡州納節舊將死。　蔡州、節を納れて、舊將は死し、
(三)起居諫議聯翩來。　起居諫議、聯翩として來る。
朝廷未省有遺策。　朝廷、未だ遺策あるを省みず。

【字解】【一】王師北討　元和四年、成德節度使王承宗を討ちしことを云ふ。【二】蔡州納節　この年、彰義軍節度使吳少誠の死せしことを云ふ。【三】起居諫議　裴度、河南府功曹を以て召されて、起居舍人となり、孟簡・孔戣、皆諫議大夫となりしことを云ふ。【四】觥、罍　ともに酒器、詩の小雅に見えて、自ら喩へて云ふ。

肯不垂意缾(四)與罍。　肯て意を缾と罍とに垂れざらむや。

【詩意】 春田は、最早、耕すべき時に成つたが、河北の王承宗を征伐に出かけたものは、何時凱旋するであらうか。車を放ち、草を載せ、農事は、段段捗つて居るに反して、王師に從つて往つた戰馬は、饑に苦んで居るに相違ないが、誰もさういふ事までは考へない。蔡州では、吳少誠が死んだ爲に、新に朝廷の節制を受けるやうになり、裴度は起居舍人に、孟簡・孔戣は諫議大夫に任命され、聯翩として人物が登庸されるのは、まことに宜しい。朝廷に於ては、目下遺策があるといつて省みる程の事もないが、我輩の希望するところは、缾罍の端に至るまで、一物でも、其處を得せしめざるは、天子の恥であるから、どうか、然るべく工夫をして貰ひたいといふことである。

前隨杜(一)尹拜表廻。　前に杜尹に隨つて、表を拜して廻る、
笑言溢口何歡(二)咍。　笑言、口に溢れて、何ぞ歡咍せる。
(三)孔丞別我適臨汝。　孔丞、我に別れて、臨汝に適く、
風骨峭峻遺塵埃。　風骨峭峻、塵埃を遺る。
音容不接秖隔夜。　音容接せず、秖だ夜を隔つ、
(四)凶訃詎可相尋來。　凶訃、詎可相尋いで來る。
天公高居鬼(五)神惡。　天公高居、鬼神惡み、
欲保性命誠難哉。　性命を保たむと欲するも、誠に難いかな。

【字解】【一】杜尹　舊唐書の「杜兼、京兆の人。元和間、河南尹に拜せらる」とある。【二】歡咍　楚辭の王逸註に「咍は笑ふなり、楚人、相啁笑するを謂うて咍といふ」とある。【三】孔丞　韓愈の撰せる孔戡の墓志に「戡、字は君勝、衞尉寺丞に除せられ、東都に分司たり」とある。【四】凶訃　舊唐書杜兼傳に「元和四年、官に卒す」とあり、韓愈の撰せる杜兼の墓志に「兼、河南少尹に改められ、大尹の事を行ひ、中歳、大尹に拜す。元和四年十一月、病なくして暴に薨ず」とあり、又孔戡の墓志に「元和五年正月、將に臨汝の溫泉に浴せむとし、その縣に至り、遂に卒す」とある。【五】鬼神惡　揚雄の解嘲に「高明の家、鬼、その室を瞰ふ」とある。

【詩意】 さきに河南尹の杜兼に隨つて、この洛陽に來ることになり、拜表して、愈よ著任した。杜兼は、笑言、口に溢れて、如何にも愉快さうに見える人であつた。衞尉寺丞の孔戡は、暇乞に來て、これから臨汝の溫泉に往くとのことで、その風骨は、峭峻として氣高く、如何にも世間の塵埃を遺れて居て、只の人では無いと思はれた。その音容に接せざること、わづかに一夜か二夜を隔てたと思ふ位であつたのに、料らざりき、訃音相繼いで來らむとは、元來、天公は高く上に居ながら、とんと人間の事を構はず、鬼神が勝手に人を惡み、隙があつたら、生命を奪はうとして居るから、人が性命を保持するのは、まことは六つかしいことで、何時死ぬとも分からないといふ譯である。

【餘論】 朱竹垞は、例の如く「結、太だ俚」といつた。

(一)辛夷花房忽全開。 辛夷の花房、忽ち全く開く、

將衰正盛須頻來。 將に衰へむとして正に盛に、須く頻に來るべし。

清晨輝輝燭霞日。 清晨、輝輝として、霞日に燭り、

薄暮耿耿和煙埃。 薄暮、耿耿として煙埃に和す。

朝明夕暗已足歎。 朝に明かに夕に暗く、已に歎ずるに足る。

況乃滿地成摧頽。 況んや乃ち、滿地摧頽を成すをや。

迎繁送謝別有意。 繁を迎へ、謝を送る、別に意あり。

誰肯留念少環廻。 誰か肯て念を留めて少らく環廻せむ。

【字解】【一】辛夷花房忽全開 元微之の詩に、「韓員外家好辛夷、開時乞取兩三枝、折枝爲贈君莫惜、縱君不折風亦吹」とある。

【詩意】 はじめは高花だけであつたが、やがて、辛夷の苔は、盡く開いた。盛なるは、將に衰へむとする始であるから、頻繁に來て、飽くまで見て置きたい。朝には、輝輝として、霞の間の日を照らして居るが、晩には、耿耿として、煙埃に和し、その光がきらきらする。朝は明かで、夕は暗いといふことを知つてすら、すでに嘆息するに足る位。まして滿地に摧頽すれば、如何とも致方がない。この花に對して、その盛なるを喜んで迎へ、その落つるを悲んで送るといふのは、別に意義ある譯で、何も花の事にも限らない。苟くも、此花の落ちぬ内に愛でて置かうといふ位の人は、決して、拋つて置く氣遣はないが、扨て、誰か念を留めて、暫らく此に環廻するか、さういふ人の見えないのは、まことに遺憾である。

【餘論】 何義門は「將衰正盛は名理、亦た筆語ともに妙」といつた。

酬裴十六功曹巡府西驛塗中見寄

裴十六功曹の府西驛を巡り、塗中より寄せらるるに酬ゆ

(一)相公罷論道。(二)聿至活東人。(三) 相公道を論ずるを罷め、聿に至つて東人を活かす。

(四)御史坐言事。作吏府中塵。 御史、事を言ふに坐せられ、吏と作る、府中の塵。

遂令河南治。今古無儔倫。 遂に河南の治をして、今古に儔倫なからしむ。

四海日富庶。道途隘蹄輪。(五) 四海、日に富庶、道途、蹄輪に隘し。

府西三百里。候館同魚鱗。(六)(七) 府西三百里、候館、魚鱗に同じ。

相公謂御史。勞子去自巡。 相公、御史に謂ふ、子を勞して、去つて自ら巡らしめむと。

是時山水秋。光景何鮮新。 この時、山水秋なり、光景何ぞ鮮新。

哀鴻鳴清耳。宿霧褰(八)高旻(九)。　哀鴻、鳴いて耳を清まし、宿霧、高旻を褰ぐ。

遺我行旅詩。軒軒有風神。　我に行旅の詩を遺り、軒軒として風神あり。

譬如黃金盤。照耀荊(一〇)璞眞。　譬へば、黃金の盤、荊璞の眞に照耀するが如し。

我來亦已幸。事(一一)賢友其仁。　我、來つて、亦た已に幸なり、賢に事へて其仁を友とす。

持竿洛水側。孤坐屢窮(一二)辰。　竿を洛水の側に持して、孤坐、屢ば辰を窮む。

多才自勞苦。無用祇因循(一三)。　多才は、自ら勞苦し、無用は祇だ因循。

(一四)辭免期匪遠。行行及山春。　辭免、期遠きに匪ず、行行、山春に及ぶ。

【字解】【一】相公　舊唐書に「元和元年、鄭餘慶、相を罷め、出でて河南尹となる」とある。【二】論道　書經に「三公は、道を論じ、邦を經す」とある。【三】東人　東方の人民。【四】御史　裴度を指す。【五】隘轔輪　馬や車が多く往來する爲に隘く感ずる。【六】候館　旅館、周禮に「五十里に市あり、市に館あり、館に積あり、以て朝聘の客を待つ」とある。【七】魚鱗　漢書劉向傳に魚鱗左右とあつて、顏師古の註に「帝の左右に在つて相夾すること、魚鱗の如きを言ふなり」とある。【八】褰　かかげる、開く。【九】高旻　爾雅に「秋を旻天といふ」とある。【一〇】荊璞　楚人和氏、玉璞を楚山の中に得た、荊は楚に同じ。【一一】事賢友其仁　賢は鄭餘慶、仁は裴度をいふ。【一二】窮辰　日を暮らす。【一三】因循　愚圖愚圖して居る。【一四】辭免　辭職並に免職。

【題義】裴十六功曹は、即ち裴度であつて、舊註に裴諗としたのは、誤である。この時、裴度は河南府の功曹であつて、韓愈は東都に分司であつた。舊唐書に「裴度、字は中立、河東聞喜の人、貞元五年、進士の第に擢んでられ、河南縣尉を授けられ、監察御史に遷る、密に權倖を疏論し、語切に旨に忤ひ、出でて河南府功曹となる」とある。これは、裴度が公務で府西驛を巡回した時、途中から詩を寄せたから、これに酬いて作つたのである。

【詩意】鄭餘慶は、中央政府の宰相であるのに、天子の御側に居て道を論じ邦を經することを罷め、洛陽地方の人民を活かす爲に、河南府尹となつて、聿に來任された。裴度も御史の職に居たが、上書して事を言ふに坐し、東都の功曹といふ風塵の一小吏と爲られた。さういふ偉らい方方が來られたら、河南の爲には、誠に仕合せで、今古ともに其例の無いことである。そこで、四海の富は、益す盛になり、人口は增殖し、車馬が往來する爲に、大道も狹いと思ふ位。ここに、府西驛は洛陽を去ること三百里、その間には旅館も澤山あつて、魚鱗の如く竝んで居る。さて、相公は御史に向ひ、御苦勞ながら、府西を一つ巡回して貰ひたいといつたので、愈よ發程することになり、折しも、山水正に秋にして、滿目の景色は、新鮮に見え、哀鴻の聲は、耳を清ますべく、大空の上には、宿霧消えて跡なく、まことに心地も爽である。かくて、裴君は、途中から行旅の詩を作つて贈られたが、それを拜見すると、軒軒として、高く風神が充ちて居て、これを我が詩に比べると、黃金の盤が楚地の玉璞を照耀するやうである。わが此地に來りしは、洵に幸で、長官としては鄭君の如き賢者を戴き、友人

としては裴君の如き仁人が居る。しかし、生來無能の者であるから、洛水の畔に釣を垂れ、ひとり坐して日を終ることが數ばある。それも當り前の事で、多才の者は自然苦勞して働き、役に立たぬ者は唯だ愚圖愚圖して居る。その役に立たぬ我輩の如きは、辭免の期遠からざるべきも、君は明年の春でなければ御歸りに成るまじく、どうか、その前に、御目にかかりたいものである。

【餘論】　朱竹垞は「亦た古淡に近し、然れども、未だ工ならず」といつた。

燕河南府秀才

河南府の秀才を燕す

(一)吾皇紹祖烈。天下再太平。
吾が皇、祖烈を紹いで、天下再び太平。

詔下諸郡國。歲貢鄉曲英。
詔、諸郡國に下り、歲ごとに、鄉曲の英を貢せしむ。

元和五年冬。房公(二)尹東京。
元和五年の冬、房公、東京に尹たり。

功曹上言公。是月當(三)登名。
功曹、公に上言す、この月、當に名を登すべしと。

乃選(四)二十縣。試官得(五)鴻生。
乃ち二十縣を選びて、試官、鴻生を得たり。

羣儒負己材。相賀簡擇精。
羣儒、己の材を負うて、相賀す、簡擇の精なるを。

怒起簸羽翮。引(六)吭吐(七)鏗轟。
怒起して、羽翮を簸し、吭を引いて、吐いて鏗轟たり。

此都自周公。文章繼名聲。
この都、周公より、文章、名聲を繼ぐ。

自非絕殊尤。難使耳目驚。
絕だ殊尤なるに非るよりは、耳目をして驚かしめ難し。

今者遭震薄。不能出聲鳴。
今は、震薄に遭ひて、聲を出して鳴くこと能はず。

鄙夫忝(八)縣尹。愧慄難爲情。
鄙夫、縣尹を忝うし、愧慄、情を爲し難し。

惟求文章寫。不敢妬與爭。
惟だ文章を寫さむことを求め、妬と爭とを敢てせず。

還家敕妻兒。具此(九)煎炰烹。
家に還つて、妻兒に敕す、この煎炰の烹を具へよ。

柿紅蒲萄紫。肴果相扶檠。
柿は紅にして、蒲萄は紫に、肴果、相扶檠す。

(一〇)芳茶出蜀門。好酒濃且淸。
芳茶は蜀門より出で、好酒は濃且つ淸。

何能充歡燕。庶以露厥誠。
何ぞ能く歡燕に充て、庶はくは、以て厥誠を露はさむ。

昨聞詔書下。(一一)權公作(一二)邦楨。
昨聞く、詔書下り、權公、邦楨と作ると。

文人得其職。文道當大行。
文人、その職を得たり、文道、當に大に行はるべし。

陰風攪短日。冷雨澁不晴。
陰風、短日を攪し、冷雨、澁りて晴れず。

勉哉戒徒馭。家國(一三)遲子榮。
勉めよや、徒馭を戒めよ、家國、子の榮を遲つ。

【字解】【一】吾皇　憲宗を指す。【二】房公　舊唐書に「元和四年十一月、河南尹杜兼卒す、十二月、陝虢觀察使房式を以て河南尹と爲す」とある。【三】登名　姓名を登錄する。【四】二十縣　唐書地理志に「河南府河南郡、本と洛州、開元元年、府となり、縣二十」とある。【五】鴻生　鴻は大、羽獵賦に於茲乎鴻生鉅儒とある。【六】吭　咽喉。【七】鏗轟　禮記に鐘聲鏗鏗とある。轟は鳴聲。【八】騫尹　新唐書の韓愈本傳に「都官員外郎に改められ、河南尹に拜す」とある。【九】煎熬烹　煎つた物、ゆでた物、煮た物。【一〇】芳茶　茶は荼と別字であるが、多く混用して居るので、蔣註に「大抵、字形相近くして誤るもの之あり、或は、六經に茶の字なし、古しへ、止だ荼の字あるのみ。後人、その畫を減じて、此字を爲るも未だ知るべからざるなり」とある。爾雅に「檟、苦荼」とあつて、郭璞の註に「樹小にして梔子の如く、早く采るものを荼となし、晩く采るものを茗となす」とある。【一一】權公　唐書に「元和五年九月、太常卿權德輿を禮部尙書同中書門下平章事となす」とある。【一二】邦楨　詩經に維周之楨とある、楨は幹。【一三】遲　待つ。

【題義】これも、矢張、洛陽に居た時ではあるが、前詩よりも稍や後で、房式といふ人が、河南府尹と成つた時の事である。この時、府に於て、秀才の試驗を行ひ、それを朝廷に薦めて、更に進士の試驗を受けさせる。そこで、その秀才連中が上京するに就いて、宴を張ることが定例であつて、席上、韓愈が挨拶に代へて、この詩を作つた。自註に「得二生字一」とあるから、何か句を分つて韻となし、韓愈は、生の字を得たのである。舊唐書職官志に「有唐以來、出身出仕の者、令を著して、秀才、明經、進士、明法、書、算の六科あり」といひ、新唐書選擧志に「每歲仲冬、擧選、館學に繇らざるもの、これを鄕貢といふ。皆牒を懷にして、自ら州縣の試に列して已めば、長吏、鄕飮酒の禮を以て、屬僚を會し、賓主を設け、俎豆を陳し、管絃を備へ、少牢を用ひて、鹿鳴の詩を歌ふ」とある。

【詩意】今の天子は、御先祖の遺烈を繼いで、御卽位になり、天下は再び太平に歸したから、詔を諸郡國に下して、今まで廢絕して居た鄕貢の制を復興し、鄕國の英才を選拔して、每年長安に差し出すやうにされた。時しも、元和五年の冬であつて、房公は河南府尹として、はじめて任に蒞まれた。處が、功曹の面面が房公に上言し、仲冬の月に於て、愈よ試驗をして、その姓名を登錄することになり、そこで、試驗官は管內二十縣の秀才を試驗し、その選に中つたのは、當代に於て鴻生と稱すべき者どもであつた。羣儒は、平生その才を自負して居たから、それが及第すると、簡擇がなかなか精確で、至極宜しいといつて、大に喜んで居た。そこで、非常に勢よく成つて、たとへば、鳥が怒起して羽を擴げ、そして、喉を引いて、鏗轟たる大きな聲を發する樣な風であつた。元來、洛陽は、周公以來、文章を以て名聲ある地方で、餘程、世間に優れて居るものでないと、人の耳目を驚かす樣な事の出來ないから、今回の及第者に對して、天下の人材は、皆篩ひ落されて、ぐうの音も出ずして恐れ入つた次第である。我輩の如きは、一縣の尹たる職に居るが、矢張、その恐れ入つた方の仲間で、慙愧戰慄して、情を爲し難い樣な譯である。仍つて、參考の爲に、諸君の文章を寫して置きたいといつて願ふだけで、諸君の能を妬むとか、爭ふとかいふ樣な事のあるべき筈ではない。兎に角、一通り、餞別の宴を設けるのが、慣例である處から、家に歸つて、妻兒に命じ、煎つた物とか、煮た物とか、御馳走の品品に加ふるに、赤い柿とか紫の葡萄とかを以てし、その他の肴果と共に卓上に陳べ、蜀に產する芳茶、

酒の濃くして成るべく善いのを取り揃へて、御招待をしたが、もとより宴會などいふ大仰なものではなく、聊か諸君の爲に滿腔の誠意を表するだけである。殊に、諸君の爲に賀すべきは、昨日、詔書が下つて、今回、權德輿と申す御方が邦國の楨たる宰相に任せられたといふことである。權公は、文章を以て名ある御方で、それが宰相の職を得られたから、今後、文字の道の大に行はれるは、勿論の事である。時しも冬で、風はすさまじく、日も短く、時雨の空は、澁つて晴れさうもない。國家は、諸君の榮達を待つて居る京されるのであるから、徒馭を戒めて、道中に氣に付けるが善い。この際、上京されるのであるから、その積りで、愈よ勉强されむことを希望するので、これを送別の詩と致します。

【餘論】朱竹垞は「すでに生造、亦た復た聊且、想ふに一時の戲筆に出づ」といひ「鍛二羽翮一引レ吭、ことさらに顚倒を爲して、對を作さず、これ昌黎の獨法」といひ「煎炰烹の三字を疊む、昌黎に非ざれば、この句法なし」といひ、何義門は、全體を評して「體を得たり」といひ、又結末四句を評して「曲折頓挫」といつた。

送二李翶一

李翶を送る

廣州萬里途。(一)山重江逶迤。(二)
廣州萬里の途、山は重つて江は逶迤たり。

行行何時到。誰能定二歸期一。
行行何の時か到らむ、誰か能く歸期を定めむ。

揖レ我出レ門去。顏色異二恒時一。
我を揖して、門を出でて去る、顏色、恒時に異なれり。

雖レ云レ有二追送一。足跡絕レ自レ茲。
追送ありと云ふと雖も、足跡、茲より絕ゆ。

人生一世間。不レ自二張與レ施。(三)
人生一世の間、張と施とに自らざらむや。

譬如二浮レ江木一。縱橫豈自知。
譬へば、江に浮ぶ木の如く、縱橫、豈に自ら知らむや。

寧懷二別時苦一。勿レ作二別後思一。
寧ろ別時の苦を懷くとも、別後の思を作すこと勿れ。

【字解】【一】廣州　唐書地理志に「廣州は南海郡、嶺南道に屬す」とある。【二】逶迤　屈曲の貌。【三】張與施　施は一本弛に作つた方が善いので、禮記に「張つて弛めず、文武能くせざるなり」とある。

【題意】李翶の事は、前に總說の中にも述べて置いたが、唐書の本傳に「翶、字は習之、進士の第に中り、元和の初、國子博士史館修撰となり、山南東道節度使に歷官して卒す。はじめ、昌黎の韓愈に從つて文章を爲り、辭致渾厚、當時に推さる、故に有司亦た諡して文といふ」とある。それから、李翶は、韓愈の兄弁の女を娶つたから、韓愈の姪壻で、もとより親密である。蔣註に「元和三年四月乙亥、戶部侍郞楊於陵、出でて廣州刺史嶺南節度使となり、翶を表して其府に佐たらしむ。四年正月己酉、翶、東都の旌善坊より、妻子を以て船に漕に上り、乙未、東都を去る。公、石洪と舟を假りて

之を送り、丁酉、同じく嵩山に登つて姓名を題し、別を紀す、故に此詩あり」といつて居る。

【詩意】廣州へ往くには、萬里の路を通らねばならず、その間には、山が重なり、江が屈曲し、行き行きて、何時到著するか分からぬといふ位、だから、前以て歸期を定めることも出來ない。李翶は、我に挨拶して、愈よ門を出たが、何となく顏色が平生とは違つて居る樣である。見送りの人は澤山だが、一たび別れては、足跡、これより絕えて、一寸足を此方に廻すことも出來ない。人の此世に在る間は、一張一弛、自分で勝手にする譯には行かず、必ず天の配劑に任かす外はない。たとへば、江上に浮んで居る木の樣なもので、縱になるか、橫になるか、木、自らは分からない。されば、別後相思ふことは兎に角、別れる時には、隨分つらい思をせねばならぬ次第である。

【餘論】朱竹垞は「酷だ李都尉に效ふ、亦た彷彿として之に近し」といつて居る。

送石處士赴河陽幕　　石處士の河陽の幕に赴くを送る

長把種樹書。人云避世士。　長く種樹の書を把つて、人は云ふ世を避くるの士と。

忽騎將軍馬。自號報恩子。　忽ち將軍の馬に騎して、自ら報恩の子と號す。

風雲入壯懷。泉石別幽耳。　風雲、壯懷に入り、泉石、幽耳に別る、

（一）鉅鹿師欲老。常山險猶恃。　鉅鹿、師老いむと欲す、常山、險猶ほ恃む。

豈惟彼相憂。固是吾徒恥。　豈に惟だ彼相の憂のみならむや、もとより、是れ吾が徒の恥。

去去事方急。酒行可以起。　去去、事方に急、酒、行らば、以て起つべし。

【字解】【一】鉅鹿　この二句は、王承宗の亂の未だ平定せざることを云つたので、唐書地理志に「邢州鉅鹿郡、鎭州常山郡、大都督府、ともに河北道に屬す」とあり、又舊唐書に「元和四年、王承宗反す、中人吐突承璀に詔し、兵を以て之を討つ、功なし、五年六月、王承宗を洗し、その官爵を復す」とあつて、つまり、どうしても平定することが出來ないから、この罪を赦し、その官爵を復して、懷柔したのである。

【題意】石處士は石洪。この詩は、文章軌範に載する送石處士之河陽軍序と同時の作である。韓愈の撰に係る石洪墓志に「洪、字は濬川、能く學行を勉め、仕へず、退いて東都洛上に處ること十餘年、河陽節度烏重胤、幣を以て廬下に走り、爲に河陽軍に佐たり。元和六年、詔あり、徵して京兆昭應尉集賢校理に拜せられ、明年六月卒す」とある。次に舊唐書に「元和五年四月、烏重胤を以て、懷州刺史河陽三城懷州節度使と爲す」とあり、韓愈の送序に「河陽軍節度烏公、節度たるの三月、士を從事の賢者に求む」とあるから、石洪の出立したのは、同年七月の事であらう。又送序に「東都の人、各歌詩六韻を爲る」とあり、この詩の自註に「得起字」とあるを見れば、例の如く字を分つて韻となし、そして詩體を限つて、各賦したものと見える。

【詩意】石處士は、平生圖藝の書物ばかり見て居る處から、人は皆之を世を避くる隱者と稱して居たが、今しも將軍から差し廻された馬に跨つて、勢よく乘り出し、節度烏公の知遇に感じて、一仕事やり出さうといつて居る。かくて、風雲が壯懷に入れば、幽耳に響いて居た泉石の聲にも、別を告げる次第。今しも、鉅鹿に駐屯する王師は勢が鈍り、賊は、依然、常山の險を恃として居る。かくの如きは、彼の宰相の憂たるばかりでなく、又實に吾が徒、志士の恥である。君が河陽の幕に赴かれるのは、刻下の急務であるから、別離の私情は、姑らく之を措き、酒が一巡したならば、直に御出立に成るが宜しい。

【餘論】結二句は、如何にも急激なる有機を道破して、眼前に見える樣である。朱竹垞は「これ即ち序に謂はゆる各歌詩六韻を爲るもの、即ち口頭の說話を以て詩を作る、唐人亦た此體少し」といひ、又「末二句、備はるを責む」といつた。

送湖南李正字歸

湖南李正字の歸るを送る

長沙入楚深。洞庭値秋晩。
長沙、楚に入つて深く、洞庭、秋に値うて晩し。

人隨鴻雁少。江共蒹葭遠。
人は鴻雁に隨つて少く、江は蒹葭と共に遠し。

歷歷余所經。悠悠子當返。
歷歷として余が經るところ、悠悠として、子當に返るべし。

孤遊懷耿介。旅宿夢婉娩。
孤遊、耿介を懷き、旅宿、婉娩を夢む。

風土稍殊音。魚蝦日異飯。
風土稍や殊音、魚蝦日に異飯。

親交俱在此。誰與同息偃。
親交ともに此に在り、誰と與に同じく息偃せむ。

【字解】【一】余所經　蔣註に「公、貞元十九年、出でて陽山令となり、すでにして、徙つて江陵に掾たり、入つて、國子博士となる。湖南の地、かつて經行す」とある。【二】耿介　韓非子に「耿介の士、寡くして、商賈の人多し」といひ、廣絕交論に「耿介の士、疾むこと其れ斯の如し」とある。【三】息偃　詩經に或息偃在牀とある。

【題義】李正字は、名を礎といつた。蔣註に「李礎、その父仁鈞、時に親王府長史たり、礎、湖南從事より、告を請うて來り省す、公、かつて序あり、送る。元和五年、東都に分司たるとき作る」とある。つまり、父を省する爲め、休暇を貰つて洛陽に來たが、又湖南に歸任するに因り、この詩を作つて、その行を送つたのである。

【詩意】長沙は、楚地の中でも奧深い處であるし、洞庭は、今しも秋の暮で、定めて凄涼たる景色であらう。雁は衡山を限りとして、その南には飛んで行かぬといふ通り、人も亦た其地に少く、洞庭より揚子江にかけて一帶の澤地には、蒹葭が茂つて居る。これ等の地は、さきに予が陽山に流された時に經過した處で、その悠悠として遠い僻地に向つて、君は今次歸任するのである。君は道づれもなく、

309
65

唯だ一人で遊行し、心に耿介の節を懐き、そして、旅宿に於ては、朋友と睦しく話し合つたといふ樣な婉娩の夢を見ることであらう。長沙地方は、風土のみならず、語音も違つて居るし、飯の菜たる魚蝦の類も、ここらあたりの物とは全く異なつて居る。おまけに、君の親交は、皆この洛陽に居るのだから、折角歸任しても、共に偃息する人もなく、さぞ心寂しくて困ることであらう。

【餘論】蔣註には、起首四句を賞して「澹然の景、悠然の懷、一時湊泊の能く得るところに非ず」といつたが、敍景の文字としては、極めて巧に出來て居る。それから、顧嗣立は「音調輕圓、絕だ謝元暉に類す。卽ち新亭渚の一首に暗擬するに似たり」といつて居る。次に朱竹垞は「前十句は、預め途中の情景を道ひ、末二句は別意」といひ、解說は極めて的確である。又乾隆御批には「風神綿邈、絕えて韋柳に似たり、是れ昌黎集中の變調、唯だ南溪の三首、これに近し」といひ、沈德潛は「昌黎の五言、この清遠の格を得がたし」といつた。ここに、送別の詩が三首かためて載せてあつて、各〻その趣致を異にして居るが、一番よく纏まつて居るのは、卽ち此一首である。

終

續國譯漢文大成

文學部　二十八

309
65

帙入

始

吉田徳次郎氏 寄贈本

續國譯漢文大成

文學部 第二十八册（第七帙の四）

韓退之詩集 上の四

309
65

韓昌黎集巻五

古詩

辛卯年雪

元和六年春。寒氣不肯歸。
河南二月末。雪花一尺圍。
崩騰相排(一)拶。龍鳳交橫飛。
波濤何飄揚。天風吹旛旂。
(二)白帝盛羽衛。(三)鬖髿振裳衣。
(四)白霓先啓途。從以萬王妃。
(五)翕翕陵(六)厚載。譁譁(七)弄陰機。

辛卯の年雪ふる

元和六年の春、寒氣肯て歸らず。
河南二月の末、雪花一尺圍む。
崩騰して相排拶し、龍鳳交も橫飛。
波濤何ぞ飄揚せる、天風、旛旂を吹く。
白帝、羽衞を盛にし、鬖髿として裳衣を振ふ。
白霓、先づ途を啓き、從ふに萬王妃を以てす。
翕翕として、厚載を陵ぎ、譁譁として、陰機を弄す。

生平未曾見。何暇議是非。　生平、未だ曾て見ず、何ぞ是非を議するに暇あらむ。

或云豐(八)年祥。飽食可庶幾。　或は云ふ、豐年の祥と、飽食、庶幾すべし。

善禱吾所慕。誰言寸誠微。　善禱、吾が慕ふところ、誰か寸誠を微なりと言はむ。

【字解】【一】排拶　みしみしと押し付ける。【二】白帝　史記封禪書に「秦の襄公、以て少皥の神を主となせしより、西畤を作つて白帝を祀る」とある。【三】鬖髿　髪の亂るる貌。【四】白霓　楚辭王逸註に「蜺は、雲の色あつて龍に似たるものなり」とある。【五】翕翕　重る貌。【六】厚載　大地を云ふ。【七】弄陰機　ひそかに機巧を弄する。【八】豐年祥　毛萇詩傳に「豐年の冬、必ず積雪あり」と見ゆ。

【題義】この詩は、その破題に見ゆる通り、元和六年の春、河南尹たりしときに作つたので、同時の白樂天も、元和歲在卯、六年春二月、月晦寒食天、天陰夜飛雪の一首を作つて居る。

【詩意】元和六年辛卯の春、寒氣は歸り去らうともせず、二月の末、河南の地に於ては、雪が一尺も降つた。その雪は、なだれを打ち、みしみしと押し付けて、龍鳳が交も飛んで居るやうでもあり、波濤が飄揚して、天風が眞白な旗を翻すかと思ふばかり。又たとへば、白帝が羽衞の儀仗兵を盛にし、鬖髿として各、著物を振ひ、白い虹が先に立つて道を開き、そして、萬を以て數ふべき王妃が、しづしづと天上から降つて從ふが如くである。やがて、翕翕と重つて、大地の上に山と積み、譁譁と騷がしく、白帝が陰機を弄して居る。かういふ事は、平生まだ見ぬことで、唯だ驚嘆するばかり、その吉凶を論ずる暇さへない。しかし、普通に雪は豐年の兆といふから、今年は五穀が實つて飽食することも出來るであらう。すべて、善い方へと禱ることは、吾が慕ふところで、取りも直さず、國家を思ふ寸心の誠に本づいたものである。

【餘論】朱竹垞は「佳處、亦た生硬に在り」といひ、崩騰相排拶以下數句に就いては、仍ほ是れ陸渾山火苦寒一派の語法」といつた。

醉留東野

醉うて東野を留む

昔年因讀李白杜甫詩。　昔年、李白杜甫の詩を讀むに因つて、

長恨二(一)人不相從。　長く恨む、二人の相從はざることを。

吾與東野生竝世。　吾、東野と、生まれて世に竝ぶ。

如何復躡二子蹤。　如何ぞ、復た二子の蹤を躡まむ。

東野不得(二)官。白首誇龍(三)鍾。　東野は官を得ず、白首、龍鍾を誇る。

韓子稍姦黠。　韓子は、稍や姦黠、

自慚青蒿倚長松。
低頭拜東野。
願得終始如駏蛩。
東野不廻頭。
有如寸莛撞鉅鐘。
我願身爲雲。東野變爲龍。
四方上下逐東野。
雖有離別無由逢。

自ら慚づ青蒿の長松に倚るを。
低頭、東野を拜す。
願はくは、終始駏蛩の如くなるを得む。
東野、頭を廻らさず。
寸莛の鉅鐘を撞くが如きあり。
吾、願はくは、身、雲となり、東野、變じて龍と爲らむことを。
四方上下、東野を逐ひ、
離別ありと雖も、逢ふに由なからむや。

【字解】【一】二人不相從　杜甫は南尋禹穴見李白、道甫問訊今何如といひ、不見李生久、佯狂眞可哀といひ、何時一樽酒、重與細論文といひ、李白は何時石門路、重有金樽開といひ、思君若汶水、浩蕩寄南征といひ、李杜二人、交際は深密であつたが、相從ふことは、稀であつた。【二】不得官　東野は、この前一年、方に河南水陸轉運從事を罷めた。【三】龍頷　韓醇の演義に、「龍頷は、昌黎ならず、懇摯せざるの貌」とある。【四】青蒿　よもぎ。【五】駏蛩　孔叢子に「北方に獸あり、名を蟨といふ。蛩蛩駏驉を愛し、食、甘草を得れば、必ず齧んで以て遺る。蛩蛩駏驉、人の將に來らむとするを見れば、必ず蟨を負うて以て走る。蟨は、駏蛩を愛するに非ざるなり、その假足の爲めなり。二獸、亦た蟨を心愛するに非ざるなり、その甘草を得て之を遺るが爲めなり」とあり、文選子虛賦の張揖註に「蛩蛩は青獸、狀、馬の如し。距虛は驘に似て小」とある。二獸相助けて、又蟨をいたはつて居る。【六】

寸莛撞鉅鐘　短い撞木で大きな鐘を撞く。

【題義】これは、孟東野が志を得ざるに因りて、その地を去らむとするに際し、折角の友を無くする譯であるから、出來るものなら、矢張、ここに居て貰ひたいといふ意を述べて、之を留めたのであるが、つまり、送別に充てたので、蔣註に「前と同時の作」とある。

【詩意】むかし、李白杜甫の詩集を讀んだ時、この二人が相從つて一緒に居らぬことは、洵に遺憾であると思つた。我と孟東野とは、同じ世に生まれ合せて、又しても、李杜の蹤を踏み、兎角、別離の多いのは、如何なる故か。そは出處が自然異なつて居るからである。東野は、役人にも成らず、白髮頭になるまで、見すぼらしい姿をして居る。韓退之は、東野よりも聊か惡がしこい處があつて、役人には成つて居るが、よもぎが長松に倚るが如く、ほんの微官に過ぎぬ。かくて、低頭して、東野を拜し、長く離れぬやうに、どうか、始終、駏驉と蛩蛩との二獸の如くありたいといつたが、東野は、首をも廻らさず、短い撞木で大きな釣鐘を撞いた樣に、殆んど感じがない。この上は、吾、願はくは、身を以て雲と爲し、東野が龍となつたならば、四方上下に追逐することが出來るので、たとひ離別が有るとしても、逢ふに由なき樣なものでもあるまいと思ふ。

【餘論】顧嗣立は「粗粗莽莽、口を肆にして、一種の眞意を道ひ出で、亦た自ら喜ぶべし」といひ、何義門は雲龍の四句を評して「奇趣」といつた。

李花　二首

平旦入西園。　平旦、西園に入れば、
梨花數株若矜夸。　梨花數株、矜夸するが若し。
旁有一株李。　旁に一株の李あり、
顏色慘慘似含嗟。　顏色慘慘、嗟を含むに似たり。
問之不肯道所以。　これに問へども、肯て所以を道はず、
獨繞百匝至日斜。　獨り繞つて百匝日の斜なるに至る。
忽憶前時經此樹。　忽ち憶ふ、前時、この樹を經たることを、
正見芳意初萌芽。　正に見る、芳意、初めて萌芽せしを。
奈何趁酒不省錄。　奈何ぞ、酒を趁うて省錄せず、
不見玉枝攢霜葩(一)。　玉枝の霜葩を攢むるを見ず。
泫然爲汝下雨淚。　泫然、汝の爲に雨淚を下す、
無由反旆羲(二)和車。　旆を反すに由なし、羲和の車。

【字解】（一）玉枝攢霜葩　郭子横の洞冥記に「琳國は長安を去ること九萬里、玉葉李を生ず、色は碧玉の如く、數千歲にして一たび熟す」とある。
（二）羲和車　前に數ば見ゆ。

東風來吹不解顏。　東風來り吹いて、顏を解かず、
蒼茫夜氣生相遮。　蒼茫夜氣、生じて相遮る。
冰盤夏薦碧實脆。　冰盤、夏は碧實の脆きを薦む、
斥(三)去不御慚其花。　斥け去つて御せず、その花に慚ぢよ。

【三】斥去不御　張衡思玄賦に斥西施而不御とあるを翻用したのであらう。

【題義】韓愈が江陵に居る時分には、杏花の詩が大分あつたが、今度は李花で、これは元和六年河南尹たりし時の作である。但し、前首は、花の落ちて仕舞つてからの詩であるし、後首は、花の盛に咲いて居る時の詩である。どうやら、順序が顚倒して居るが、それは、編輯者の不注意からであらう。

【詩意】朝早く、西園に往つて見ると、數株の梨の花が、今を盛りと咲き誇つて居て、旁なる一株の李花は、すでに盛りを過ぎ、顏色憔悴して、どうやら、憂を含んで居るやうに見える。そこで、どういふ譯かといつて尋ねやうと思ふが、非情の草木、物言はねば、それも詮なく、おのれ一人、その木を百回も繞つて、日の斜なる頃にも及んだ。ふと憶ひ起したのは、さきに此木の處に來た時には、芳意、はじめて萌した位で、まだ碌碌咲いて居なかつたが、あちらこちら浮かれて飲み廻はつて居る内に、この李花の事は、全く忘れて仕舞つて、玉の如き枝に霜の色せる花を攢めて咲いた眞盛りの時を見落した次第。そこで、今日、その衰容を見て、覺えず、泫然として、淚を雨と降らしたが、羲和の車

を引き返すに由なく、過ぎた日は、すでに及ばず、東風は、依然として、吹いて居るが、再び其顏を解いて笑ましめることも出來ず、その内に、蒼茫たる夜氣が生じて來た。やがて、夏に成ると、氷の如き盤の上に、李の實の味の良いのを盛つて薦めるであらうが、われは之を斥けて、その碧實を食ふまいと思ふ。何となれば、花の盛りを忘れて、見に來なかつたことが、如何にも愧づかしいからである。

【餘論】朱竹垞は、泫然爲汝下雨涙の二句を評して「細に玩ぶに、是れ比意なるに似たり、第だ何の比たるかを知らず」といひ、結二句に就いては「語法生にして硬ならず、一種の清味あり」といつた。

當春天地爭奢華。　春に當つて、天地、奢華を爭ふ。
洛陽園苑尤紛拏。　洛陽の園苑、尤も紛拏。
誰將平地萬堆雪。　誰か平地萬堆の雪を將て、
剪刻作此連天花。　剪刻して、この連天の花と作す。
日光赤色照未好。　日光赤色、照らして未だ好からず。
明月暫入都交加。　明月暫く入つて、都て交加す。
夜領張徹投盧仝。　夜、張徹を領して、盧仝に投じ、
乘雲共至玉皇家。　雲に乘じて、共に玉皇の家に至る。
長姫香御四羅列。　長姫香御、四に羅列、
縞裙練帨無等差。　縞裙練帨、等差なし。
靜濯明妝有所奉。　靜に明妝を濯うて、奉するところあり。
顧我未肯置齒牙。　我を顧みて、未だ肯て齒牙に置かず。
清寒瑩骨肝膽醒。　清寒骨を瑩いて、肝膽醒む。
一生思慮無由邪。　一生思慮、邪なるに由なし。

【字解】【一】投盧仝　後の寄盧仝の詩の結末に偶逢明月曜桃李とあつて、まさしく此時であらう。【二】玉皇家　雲笈經に「玉皇、雲房に居り、紅雲あつて之を繞る」とある。【三】長姫香御　丈長い姫妾、脂粉の香高き婦人。【四】縞裙　裙は下裳。【五】練帨　帨は佩巾、ねり絹の頭巾。【六】置齒牙　宋書謝朓の語に「この子、聲名未だ立たず、應に共に奬成すべし、齒牙の餘論を惜むなかれ」とある。【七】思慮無由邪　詩經の魯頌に思無邪とある。

【詩意】春に當つて、天地は、奢華を爭ふが如く、百花爛漫として咲き出で、洛陽の園苑は、殊に盛で、紛拏として賑かである。園中には、花が一ぱい天に連つて眞白に咲き、さながら萬堆の雪を剪刻して作つたかと思はれる。晝は、日の赤色に照らされて、あまりはえぬが、夜、明月の光が暫く其中に入ると、非常に好い眺めである。そこで、友の張徹を引き連れて、盧仝の家に尋ねて行き、三人汀

揃つて、花見に出かけると、丸で雲に乘つて、玉皇の家に往つた樣であつた。李花と明光と交加して居る有樣は、縞裙練帨の白裝束をして、等差なき長姬香御が列んで居る樣で、それが靜に明妝を洗ひ、各、媚を呈して我に奉ずるが如く、顧みて、この絕景に對し、褒めるにも言葉がない位。但し、淸寒の氣、骨に透つて、肝膽を醒ますに因つて、少しも、邪念が起らない。

【餘論】樊汝霖は「この詩、夜領張徹投盧仝より以下、この李花を狀する所以の者至れり。蘇內翰の詩、此を擧げて云ふ、

縞裙練帨玉川家。肝膽淸新冷不邪。穠李爭春猶辨此。更教踏雪看梅花。

亦た一奇なり」といひ、朱竹垞は、長姬香御四羅列の四句を評して「花を賞するに、乃ち禮法の語を作す。然れども、却つて是れ詩家の風韻」といひ、又二首を合評して「この二詩、乃ち絕えて風致あり、又他詩と迥に別、只だ一時見るところの光景に就いて、寫し、骨髓に入り、因襲するところなく、亦た强ひて鑿空撰出を置かず、眞趣宛然、後、能く繼ぐ者鮮し」といつた。

招揚之罘
揚之罘を招く

柏生兩石間。萬歲終不大。　柏の兩石の間に生ずるは、萬歲終に大ならず。

野馬不識人。難以駕車蓋。(一)　野馬の人を識らざるは、以て車蓋を駕し難し。

柏移就平地。馬羈入廐中。　柏は、移して平地に就き、馬は、羈して廐中に入る。

馬思自由悲。柏有傷根容。　馬は、自由を思うて悲み、柏は、根を傷けたる容あり。

傷根柏不死。千丈日以至。　根を傷くるも、柏は死せず、千丈日に以て至る。

馬悲罷還樂。振迅矜鞍轡。　馬は、悲めども、罷めて還た樂み、振迅して鞍轡を矜る。

之罘南山來。文字得我驚。　之罘、南山より來り、文字、我を驚かすを得たり。

館置使讀書。(二)日有求歸聲。　館置して、書を讀ましむれば、日に歸るを求むるの聲あり。

我令之罘歸。(三)失得柏與馬。　我、之罘をして歸らしむ、失得、柏と馬と。

之罘別我去。計出柏馬下。　之罘、我に別れて去り、計は、柏馬の下に出づ。

我自之罘歸。入門思而悲。　我、之罘の歸りしより、門に入り、思うて悲む。

之罘別我去。能不思我爲。　之罘、我に別れて去り、能く我を思ふことを爲さざらむや。

灑掃縣中居。引水經竹間。　縣中の居を灑掃し、水を引いて竹間を經。

囂譁所不及。何異山中閒。　囂譁及ばざるところ、何ぞ山中の閒に異ならむ。

前陳百家書。食有肉與魚。　前に百家の書を陳し、食に肉と魚とあり。
先王遺文章。綴緝實在余。　先王、文章を遺す、綴緝、實に余に在り。
禮稱獨學陋。易貴不遠復。　禮に獨學は陋と稱し、易に遠からずして復するを貴ぶ。
作詩招之罘。晨夕抱饑渴。　詩を作つて之罘を招く、晨夕、饑渴を抱く。

【字解】【一】車蓋　蓋は天蓋だが、ここでは、押韻の都合で用ひたので、矢張ただ車といふこと。【三】館置　家に留め置く。【二】失得柏與馬　朱註に「蓋し其意に曰く、失得の計、柏馬に譬て見るべしと云ふのみ」とある。【四】禮稱　禮記に「獨學にして友なければ、孤陋にして寡聞」とある。【五】易貴　易に「遠からずして復す、祇なる悔なし」とある。

【題義】蔣註に「之罘は、元和十一年の進士、一に之杲に作り、或は粲之に作る、訛なり。公、河陽令たりしとき、之罘、中山より來り、公に從つて學ぶ。公、その歸るを惜み、詩を以て之を招く」とあり、方世擧は「時に、之罘、猶ほ未だ第せず、故に、公、詩を以て之を招き、柏馬の喩あり、而して後の畫に工なるもの、遂に柏石の圖を作爲し、陳季常の家、これを藏す」とある。楊之罘、字は不詳、詩中に南山來とあるから、終南山中の隱者で、もと孟東野一輩の人と見える。

【詩意】柏が兩石の間に生ずるに當つては、萬歲を經るとも、石に礙げられて、到底大きな木にならないし、放し飼の野馬は、人を見知らないから、車を引かせることが出來ない。いくら本來の性質が善くても、居る場所が惡いと、決して其用を爲さない。そこで、柏を移して平地に植ゑ、野馬を繫いで廐に入れる。馬は一時自由を失つて悲み、柏は根を傷められた樣で、一時憔悴する。しかし、少し位根を傷めたからといつても、柏は死せずして段段生長し、やがて、千丈の高さになるし、馬も悲が罷むと、遂に樂を生じ、振迅と馳せ廻つて、鞍轡の飾を矜るやうになつて、始めて柏たり馬たるの效用を全うするのである。ここに、揚之罘は、終南山を出て、この洛陽に來り、文字を以て我に謁し、我は其文字を見て驚嘆し、かういふものを山中に老い朽ちさせるのは、いかにも惜しいといふので、我が家に留め置いて、書物を讀ませた處が、毎日頻りに歸りたいといつて、仕方がないから、遂に之を歸らせたが、よく柏馬の得失を考へて貰ひたい。之罘は、喜んで我に別れて山中に歸つたが、その計は、柏馬の下に出づるものと云はねばならぬ。我輩は、之罘の歸りしより後、門に入つて家居し、常に之を思うて悲んで居るから、之罘も、我に別れし後、定めて、我を思はぬことは無からう。さきには、我が家が狹く穢いから、居るのも厭であつたかも知れぬといふので、縣中なる我が家を掃除し、水を引いて竹間を經、都の騷がしさの及ばぬ樣にして、山中の閒なるに異ならず、そして、前には百家の書を陳し、食物も肉と魚とを缺かぬ樣にして置いたから、是非もう一度來て貰ひたい。古先聖王は、文章を遺されて置いたから、これを綴緝してまとめる責任は、我輩に在つて、自然助手が入用で、我輩も、之罘の來るのを待つて居る。禮記には、獨りで學問しても、孤陋で役に立たぬとある

し、易には、一旦離れても、遠からずして、元に戻らねばならぬとある。そこで、この詩を作つて、之罘を招くので、我は、朝夕、飢渇の想を懷いて居るので、その早く此に來らむことを希望するのである。

【餘論】何義門は起首を評し「一起十二句、卽ち董子、常玉琢かざれば文章を成さず、君子學ばざれば其德を成さずの指趣」といひ、我自二之罘蹈一の四句を評して「古淡味長し」といひ、灑二掃縣中居一以下を評して「計、柏馬の下に出づべからず、或は山中の閒曠を思ふのみ、復た此解を以て之を招く、その心を用ふるや苦なり」といつた。

寄盧仝　　盧仝に寄す

（一）玉川先生洛城裏。　玉川先生、洛城の裏、
破屋數間而已矣。　破屋數間のみ。
一奴長鬚不裹頭。　一奴は長鬚、頭を裹まず、
一婢（二）赤脚老無齒。　一婢は赤脚、老いて齒なし。
辛勤奉養十餘人。　辛勤奉養十餘人、
上有慈親下妻子。　上に慈親あり、下には妻子。
先生（三）結髮憎俗徒。　先生、髮を結んで、俗徒を憎み、
閉門不出動（四）一紀。　門を閉ぢて出でざること、動もすれば「一紀。」
至令鄰僧乞米送。　鄰僧をして米を乞ひ送らしむるに至る。
（五）僕忝縣尹能不恥。　僕、縣尹を忝うし、能く恥ぢざらむや。
俸錢供給公私餘。　俸錢供給、公私の餘、
時致薄少助祭祀。　時に薄少を致して、祭祀を助く。
勸參（六）留守謁（七）大尹。　留守に參し、大尹に謁せよと勸む、
言語譏及輒掩耳。　言語譏に及べば、輒ち耳を掩ふ。
（八）水北山人得名聲。　水北の山人、名聲を得たり、
去年去作幕下士。　去年、去つて幕下の士となる。
（九）水南山人又繼往。　水南の山人、又繼いで往き、
鞍馬僕從塞閭里。　鞍馬僕從、閭里に塞がる。

【字解】【一】玉川先生　盧仝、自ら號す。【二】赤脚　足袋をはかぬこと。【三】結髮　はじめて冠すること。【四】一紀　周禮に「十有二年をいふ」とある。【五】僕　韓愈自ら謂ふ。【六】留守　卽ち東都留守で、鄭餘慶が此官に居た。【七】大尹　河南尹、普通に東都留守が兼任することに成つて居るが、この時は、李素が少尹を以て、大尹の事を行つて居た。【八】水北山人　洛水の北に居る山人石洪を指す。河陽節度使烏重胤、これを辟して從事となし、前に其送別の詩が見えて居た。【九】水南山人　温造を指す、字は簡輿、性、書を嗜み、吏たるを喜ばずして、東都に隱れて居たが、烏重胤は、奏して幕府に置いた。この二人に就いて、韓愈は、各送序を作り、文章軌範にも載せてある。【一〇】少室山人　李渤を指す、唐書の本傳に「字は濬之、仲兄渉と偕に廬山に隱れ、これに久しうして、更に少室に徙る。元和の初、戸部侍郎李巽、諫議大夫韋況、交章これを薦む。詔して、右拾遺を以て召し、河南少尹杜兼、吏

（一〇）少室山人索價高。　少室の山人、價を索むること高く、
兩以諫官徵不起。　兩たび諫官を以て徵せども起たず。
彼皆（一一）刺口論世事。　彼、皆口に刺して、世事を論ず、
有力未免遭驅使。　力あり、未だ驅使に遭ふを免れず。
先生事業不可量。　先生の事業、量るべからず、
惟用法律自繩己。　惟だ法律を用ひて、自ら己を繩す。
（一二）春秋三傳束高閣。　春秋の三傳、高閣に束ね、
獨抱遺經究終始。　獨り遺經を抱いて、終始を究む。
往年弄筆（一三）嘲同異。　往年、筆を弄して同異を嘲り、
怪辭驚衆謗不已。　怪辭、衆を驚かして、謗、已まず。
近來自說尋（一四）坦途。　近來自ら說く、坦途を尋ぬと、
猶上虛空跨（一五）綠駬。　猶ほ虛空に上つて、綠駬に跨る。
去歲生兒名添丁。　去歲、兒を生んで、添丁と名づけ、

を遣し、詔幣を持して、山に即かしむ。渤、上書して謝す。洛陽令韓愈、書を遣って譬說す。渤、心に其言を善しとし、はじめて出でて東都に家す。朝廷、闕政ある毎に、輒ち附章列上す」とある。【一一】刺口　口に刺ありといふので、議論に圭角あること。【一二】春秋三傳　左氏、公羊、穀梁をいふ。許彥周詩話に、「玉川子の春秋傳、僕の家、舊と之あり、今なし。辭簡にして遠く、聖人の意を得たること多しと爲す。後世經に深くして虛傳を見るものあらば、當に退之の妄りに人に許さざるを知るべきなり」といひ、朱竹垞の說に「唐の啖趙の春秋、惟だ經に據つて盡く三傳を駁す、蓋し時にこの一種の學問あり、玉川、想ふに亦た此學を宗とす」とある。又一に五傳に作

意令與國充（一六）耘耔。　意、國の與に耘耔に充てしめむとす。
國家（一七）丁口連四海。　國家の丁口、四海に連り、
豈無農夫親耒耜。　豈に農夫の耒耜を親らするなからむや。
先生抱才終大用。　先生、才を抱いて、終に大に用ひられむ、
宰相未許終不仕。　宰相未だ許さず、終に仕へず。
假如不在（一八）陳力列。　たとひ、力を陳ぶるの列に在らずとも、
立言垂範亦足恃。　言を立て、範を垂るる亦た恃むに足れり。
（一九）苗裔當蒙（二〇）十世宥。　苗裔、當に十世の宥を蒙るべし、
豈謂（二一）貽厥無基阯。　豈に謂はむや、貽厥基阯なきを。
故知忠孝生天性。　故に知る、忠孝の天性に生ずるを、
（二二）潔身亂倫安足擬。　身を潔くし、倫を亂るは、「安んぞ擬するに足らむ。」
昨晚長鬚來下狀。　昨晚、長鬚來つて狀を下す、
隔牆（二三）惡少惡難似。　牆を隔つるの惡少、惡、似せ難し。

つてある。すると、鄒氏夾氏を並稱するのだが、二氏ともに書は無かつた。【一三】同異　盧仝、馬異と交を結び、之に詩を贈り、その中に、「仝不仝、異不異、是謂大同而小異、仝自仝、異自異、是謂仝不往兮異不至」とある。【一四】坦途　平易。【一五】綠駬　穆天子傳、荀列史漢には綠耳としてあり、淮南子に「騏驥綠駬は天下の疾馬」とある。【一六】耘耔　草きり且つ耕す。【一七】丁口　唐制、凡そ民、二十一歲を丁と爲す。【一八】陳力　論語に「力を陳べ列に就く」とあるに本づく。【一九】苗裔　遠孫。【二〇】十世宥　左傳襄公二十一年に「謀つて過鮮く、惠訓して倦まざるもの、叔向在り、社稷の固なり、猶ほ將に十世之を宥さむとす」とある。【二一】貽厥

每騎屋山下窺闞。(二四)(二五) 每に屋山に騎して、下に窺闞し、
渾舍驚怕走折趾。(二六) 渾舍驚怕、走つて趾を折く。
憑依婚媾欺官吏。(二七) 婚媾に憑依して、官吏を欺き、
不信令行能禁止。 令の行はるるを信せず、能く禁止せむや。
先生受屈未曾語。 先生、屈を受けて、未だ曾て語らず、
忽此來告良有以。 忽ち此に來り告ぐる、良に以あり。
嗟我身爲赤縣令。(二八) 嗟、我、身、赤縣の令となり、
操權不用欲何俟。 權を操て用ひず、何をか俟たむと欲する。
立召賊曹呼伍伯。(二九)(三〇) 立どころに、賊曹を召して伍伯を呼び、
盡取鼠輩尸諸市。(三一) 盡く鼠輩を取つて、諸を市に尸せしむ。
先生又遣長鬚來。 先生、又長鬚を遣して來らしむ、
如此處置非所喜。 此の如きの處置、喜ぶところに非ず。
況又時當長養節。(三二) 況んや、又、時は長養の節に當るをや、

詩經の大雅に貽厥孫謀以燕翼子とある。【二二】 潔身亂倫 論語に「その身を潔くせむと欲して、天倫を亂る」とあるに本づく。【二三】 惡少 即ち惡少年、荀子に「廉恥なくして飲食を嗜む、惡少と謂ふべきものなり」とある。【二四】 屋山 屋根、高く危きが故に云ふ。【二五】 闞 下に見る。【二六】 趾 足の指。【二七】 婚媾 媾は重婚。【二八】 赤縣令 前に見ゆ、京城附近の縣令。【二九】 賊曹 盜賊のことを掌る。【三〇】 伍伯 朱註に「古今注に見ゆ、什伍の長なり」といひ、後漢書輿服志の註に「五百は、猶ほ今の問事のごときなり」とあり、又五百は行杖人、即ち先驅者といふ說もある。こゝでは捕手の事であらう。【三一】 尸 曝らす。【三二】 長養節 春時

都邑未可猛政理。 都邑未だ政理を猛くすべからず、と。
先生固是余所畏。 先生固より是れ余の畏るるところ、
度量不敢窺涯涘。(三三) 度量敢て涯涘を窺はず。
放縱是誰之過歟。 放縱は是れ誰の過ぞや、
效尤戮僕愧前史。(三四) 尤に效うて、僕を戮す、前史に愧づ。
買羊沽酒謝不敏。 羊を買ひ、酒を沽うて、不敏を謝す、
偶逢明月曜桃李。 偶ま明月の桃李に曜くに逢ふ。
先生有意許降臨。 先生、降臨を許すに意あらば、
更遣長鬚致雙鯉。(三五) 更に長鬚を遣して、雙鯉を致せ。

をいふ、董仲舒上策に「陽、常に大夏に居り、生育長養を以て事となす」とあるに本づく。【三三】 涯涘 涘は水涯。【三四】 效尤 左傳襄公三年に「晉侯の弟楊干、行を曲梁に亂る、魏絳、その僕を戮す」とあり、又二十一年に「晉の欒盈、周を過ぐ、周の西鄙、これを掠む、王曰く、尤めて之に效ふ、それ又甚し」とある。二事を併用して云ふ。【三五】 雙鯉 爽白齋詩話に「古詩に客從遠方來、遺我雙鯉魚とあり、魚腹中、安んぞ書あるを得む。古人以て隱密を喩ふるなり。魚は潛沈の物、故に云ふ」とあり、丹鉛餘錄に「古樂府、尺素如殘雪、結成雙鯉魚、安知心裏事、看取腹中書、この詩に據れば、古人、尺素結んで鯉魚の形をなす。即ち緘なり。今人蠟を用ふるが如きに非ず。文選、客從遠方來、遺我雙鯉魚とは、即ち此事なり。下に云ふ、魚を烹て書を得と、亦た譬況の辭のみ、五臣及び劉履、古人多く魚腹に於て書を寄すといひ、陳涉罩魚の事を以て之を證す、何ぞ痴人夢を說くに異ならむや」とある。今、これに從つて、その初、鯉魚の形に結んであつたから、書翰を雙鯉といふとして置く。

【題義】 盧仝は、前に總說の中に略傳を載せて置いた。仝は、玉川子と號し、韓門の一名家として知

られ、孟郊・賈島と竝稱されて居る。その人の性質が怪僻であつた丈に、その詩も、頗る奇僻、その奇僻な處が、ひどく韓愈の氣に入つて、厚遇されて居たのである。この詩は、韓愈が河南令たりしとき、仝は洛陽に居たから、賦して贈つたので、これを以て、仝の人物及び韓愈との交情は、愈よ明白に分かる。元來、この詩は、杜甫が鄭虔に贈つた醉時歌と同じ心持で、又、實にそれを規撫したのである。

【詩意】玉川先生は、洛陽城中に居るが、その宅は、五六間の破屋に過ぎず、僕婢といへば、下郎が一人、鬚長くして頭巾も被らず、下婢が一人、跣足で足袋も穿かず、年寄で齒が拔けて居る。先生は、かくの如く貧乏であるが、辛勤して、十餘人を奉養し、上には兩親あり、下には妻子あり、それを一人で引き受けて居る。先生は、元服した時分から、俗物が大嫌ひで、門を閉ぢて出でざること、動もすれば十二年の久しきに及び、鄰僧が餘りの氣の毒さに、米を與へて貢いだ位。予は、縣令の職に居ながら、天晴の賢士をして、かくまで生活に困む樣にさせるのは、まことに愧ぢ入る次第で、公私の用に費せし俸祿の殘れるを供給し、時たま、薄儀を呈して、その先祖の祀を助けた。それから、東都留守、河南尹の處へ時時御出かけに成つては如何といふと、先生は、一寸聞いたばかりで、卽坐に、耳を掩うて返事もせず、その高節は、なかなか尋常ではない。洛水の北に居た處士の石洪は、大分名聲があつたが、去年、烏重胤に徵されて、幕下の從事となり、洛水の南に居た山人の溫造も、繼いで出かけ、一朝美官を得て、鞍馬僕從、狹い路次に塞がる位。それから、少室山に居た李渤は、なかなか抱負が大きく、兩度まで拾遺の官に拜命させるといつて、朝廷から召されたが、それでも起たない。彼等は、皆洛陽の名士で、諤諤の議論を以て、世事を批評して、見識はあるらしいが、終には、人の爲にこき使はれることを免れない。これに反して、先生は、どれだけの事業を仕出かすか、今から分からず、あくまで其身を愼んで、法度を以て自ら繩し、學問をするにも、眞に源流を探るを主とし、左公穀の三傳は、詰まらぬものとして高閣に束ね上げ、ひとり、春秋の本經を抱いて、事實の終始を研究し、一廉の學說を立てられた位。先生は、兼ねて詞章に長じ、往年、馬異に詩を贈つて、おのが名の仝と併せて、同異を嘲つたが、その怪詭奇譎たる辭句は、衆を驚かし、分からぬ者どもは、今に之を誇つて居る。そこで近ごろは、平易を旨として居ると自ら言はれるが、それでも騄駬の名馬が虛空に跳り上る如く、決して、世間普通の格調ではない。先生は、去年、兒を生んで、添丁といふ名を付けたが、その心は、國家の爲に夫役をさせるといふのである。もとより、國家の丁口は、數へ切れぬ程多く、鋤鍬に親む農夫は、自ら其人あるが故に、何も先生の御令息を煩はす迄もないが、ここらが、先生の一寸かはつた處である。元來、先生は、卓絕せる才を抱いて居るから、やがて、大に用ひられるであらうが、宰相の位を以て許されざれば、決して仕官しさうもない。しかし、實際力を陳べて天下を經營する位に在らずとも、立言して模範を垂れ、以て不朽に傳へることが出來るから、それで澤山である。されば、先生は、もとより天下に功ある人で、その子孫は、十世の後まで、如何なる

事があつても、罪を宥さるべき筈で、家貧なるが故に、子孫に貽す物が無いなどと云ふべき譯でもない。抑も、忠孝は、天性から出るもので、一身を潔くする爲に、人倫を亂すなどは、決して、先生には無いことである。昨夜、先生の僕たる長鬚の下郎が來て訴へるには、近鄰の惡少年は、亂暴狼藉、たとふるに物なく、毎に屋根に跨つて、無遠慮にも下を見おろし、色色、失敬な振舞を爲し、家内の者どもは、驚き恐れて、逃げ出す途端に足の指を痛めた位。彼等は、權豪と緣組を爲し、その勢を恃んで、官吏を壓倒し、法令などは屁とも思はぬから、なかなか禁止することが出來ず。先生は、凌辱を受けても、一向平氣で、何ともいはれぬが、今、私が此に來て訴へるのは、よくよくの事でありますといつた。聞けば尤も千萬、我は河南の縣令であるのに、その權を用ひて之を處分しなければ、腑甲斐なき骨頂であるから、立どころに、盜賊係を召し、捕手どもを集めて、盡く鼠輩を召し捕り、やがて、之を市に曝らすことに決した。すると、先生は、又ぞろ、長鬚の下郎を遣され、かくの如き處置は、折角だが、甚だ喜ばしくない。まして、今は萬物の長養する春の頃であるのに、都邑に於て、かくまで嚴しい政治をしては成らぬといはれた。先生は、もとより、予の畏敬するところで、その度量の闊きことは、さながら海の如く、その限りも知られぬ位。彼等の放縱は、惡むべきであるが、これは誰の過かといへば、取りも直さず、縣令たる我輩の取締が惡かつたのであるのに、彼を嚴罰に處するといふのは、たとへば、本人を罪せずして、その僕を戮する樣なもので、前史にも戒めてあること

である。そこで、予は、不敏を謝する爲に、羊を買ひ、酒を沽うて、御馳走の用意、すでに整ひ、幸ひ桃李花開いて、月も明かなる折から、先生を御招きするのであるが、若し御出下さるならば、例の長鬚の下郎に御手紙を持たせて、その趣を先に一寸御知らせ下さい。

【餘論】顧嗣立は「これ昌黎自家の體、但だ稍や襯潤及び轉折あり、遂に甚だ直致ならざるを覺ゆ」といひ、何義門は「拙朴味あり、質にして俚ならず、この種、最も是れ到り難し」といひ、乾隆御批には「玉川垂老、尙ほ時宰に依り、甘露の難に罹るを致す。その人、もとより高隱に非ず。退之、何を以て、傾倒乃ち爾る。詩中敍するところを觀るに、ただ鄰人と訟を構へ、しかも情を以て、面のあたり、その起滅を聽すのみ。卻つて、寫し得て壁立千仞、鞭を執つて忻慕するの意あり。乃ち知る、唐時の處士、類ね能く聲價を作すこと、此の如きを」といつて居るが、盧仝の人物論としては、たしかに、その一面を穿ち得たものである。

酬司門盧四兄雲夫院長望秋作

司門盧四兄雲夫院長の望秋の作に酬ゆ

長安雨洗新秋出。　長安の雨は、新秋を洗うて出づ、

極目寒鏡開塵函。　極目の寒鏡、塵函を開く。

【字解】【一】終南　山名、前に見ゆ、潘岳の關中記に「終南、一名は中南、云ふは、天の中に在り、都

(一)終南曉望蹋龍尾(二)、　終南曉望、龍尾を蹋めば、
倚天更覺青巉巉。　天に倚つて更に覺ゆ青巉巉たるを、
自知短淺無所補、　自ら知る、短淺にして補ふところなきを。
從事久此穿朝衫。　從事、久しく此に朝衫を穿つ。
歸來得便卽遊覽、　歸り來り、便を得て、卽ち遊覽、
暫似壯馬脫重銜。　暫く壯馬の重銜を脫するに似たり。
(三)曲江荷花蓋十里、　曲江の荷花、十里を蓋ひ、
江湖生思自莫緘。　江湖思を生じて、自ら緘づるなし。
(四)樂遊下矚無遠近、　樂遊、下矚すれば、遠近なく、
綠槐萍(五)合不可芟(六)。　綠槐、萍合して、芟るべからず。
白首寓居誰借問、　白首にして寓居、誰か借問する、
平地寸步扃雲巖。　平地寸步、雲巖を扃す。
雲夫吾兄有狂氣、　雲夫は吾が兄、狂氣あり、

の南に居る」とあり、輿地志に「長安城を去ること八十里」とある。【二】龍尾　即ち龍尾道、又龍尾陂といふ。賈公談錄に「唐の龍尾道は、含元殿側に在り」といひ、白樂天の詩に「步登龍尾道、卻望終南山」とある。【三】曲江　前に見ゆ、康駢の劇談錄に「曲江池、夏に入れば、菰蒲葱翠、碧波紅蕖、湛然愛すべし」とある。【四】樂遊　漢書宣帝紀に「神爵三年、春、樂遊苑を起す」とあつて、顏師古の註に「三輔黃圖に云ふ、杜陵の西北に在り、今呼んで樂遊廟と爲すと。又關中記に云ふ、宣帝廟を曲池の北に立て、樂遊と號す。蓋し本と苑たり、後因つて廟を立つ」とある。又兩京新記には「亦た樂遊原と名づく、其地最も高く、四望寬敞」とある。【五】萍合　浮草の如

嗜好與俗殊酸鹹。　嗜好、俗と酸鹹を殊にす。
日來省我不肯去、　日に來つて、我を省して、肯て去らず、
論詩說賦相喃喃(七)。　詩を論じ、賦を說いて、相喃喃。
望秋一章已驚絕、　望秋の一章、すでに驚絕、
猶言低抑避謗讒。　猶ほ言ふ、低抑して謗讒を避くと。
若使乘酣騁雄怪、　若し酣に乘じて、雄怪を騁せしむれば、
造化何以當鐫劖。　造化何を以て鐫劖に當らむ。
嗟我小(八)生値强伴、　嗟、我、小生にして强伴に値ふ。
怯膽變勇神明鑒(九)。　怯膽、勇に變じて神明鑒す。
馳坑跨谷終未悔、　坑を馳せ、谷に跨つて、終に未だ悔いず。
(一〇)爲利而止眞貪饞。　利の爲にして止まらば、眞に貪饞。
高揖羣公謝名譽、　高く羣公に揖して、名譽を謝し、
遠追甫(一一)白感至(一二)誠。　遠く甫白を追うて、至誠を感ず。

く合する。【六】不可芟　芟は除く。【七】喃喃　說文に「語聲、又多言の貌」とある。【八】小生　漢書張禹傳に新學小生とある。【九】鑒　詩經の商頌に天命降鑒といひ、元微之の詩に洞照失明鑒といひ、皆平聲に使つて居る。【一〇】爲利而止　蔣註に「利は利祿たり、言ふは利祿に拘せられて、此山に遊ばず、これ貪饞の人なり」とある。【一一】甫白　杜甫・李白。【一二】至誠　說文に「誠は和なり」とあり、書經に「至誠神を感ぜしむ」とある。【一三】完月　朱註に「月蝕の詩に、完完上天東の句あり、月の圓なるを言ふなり、此亦た同意」とある。【一四】撼撼　或は鹹鹹に作る、義同じ。

樓頭完月不ᵣ共ᵣ宿。　樓頭の完月、宿を共にせざれば、

其奈ᵣ就ᵣ缺行攕攕ᵣ。　其れ、缺くるに就いて、行く、攕攕たるを奈かむ。

【題意】　盧四兄雲夫は、前に赤藤杖歌に見えて、名を汀といつた人である。韓集中には、赤藤杖歌の外に、和ᵣ盧郎中寄ᵣ示送ᵣ盤谷子ᵣ詩ᵣあり、有ᵣ和ᵣ庫部盧四兄元日朝回ᵣあり、早赴ᵣ行香ᵣ贈ᵣ盧李二中舍ᵣあり、酬ᵣ盧給事曲江荷花行ᵣあり、二人は頻りに唱和をして居た。雲夫は、貞元元年の進士、新舊兩唐書に傳は無いが、この數詩に因つて考へると、庫部司門庫部郎曹を經、中書舍人に遷り、給事中と爲つた。この唱和は、元和六年の秋の事に係り、盧四は庫部司門、韓愈は河南令より入つて職方員外郎と爲つた頃である。

【詩意】　長安でも、雨あがりの秋の朝空は、綺麗に澄み渡つて、極目寒鏡に比すべき殘月は、久しく塵に埋もれて居た函の中から取り出された樣な心持がする。この曉に當つて、龍尾道といふ宮中の庭から終南山を望むと、高く中天に聳え、愈よ以て靑巉巉たるを覺える。我輩は、元來、才智短淺な者で、少しも朝廷の御爲にも成らぬが、職務に從事して朝衫を著けて居る身分だから、退朝の際など、便宜を得て遊覽することが出來るので、暫時の事ではあるが、馬が重いくつわを取り外された樣な氣がする。長安郭外では曲江が第一で、蓮の花は十里を蓋ひ、そこに往けば、江湖の目を一新して、まことに心ゆくばかり。又樂遊苑に上つて眺望すれば、遠近の別なく、綠色の槐樹は、浮草が合して除くことが出來ぬ樣で、まことに好い景色である。我輩は、白首にして都下に寓居し、誰も尋ねては呉れず、長安の平地に居るが、さながら雲巖を閉づるが如く、全く世間とは懸け離れて居る。處が、吾兄雲夫のみは、一種の狂氣を帶び、その嗜好が俗人と酸鹹を殊にして居る處から、毎日、我輩の處を音づれて敢て去らず、詩賦に關する議論を試み、喃喃として、なかなか盡きない。最近、我輩に示された望秋の一篇は、實に人を驚かすばかりであるが、自分では、おもふ存分の事を言つて退けると、俗人が彼此言ふから、わざと差し控へて置いたと云つて居る。まことに興に乘じて雄怪を騁せしめたならば、造化も、いかで、君の筆の鐫劖に比敵すべき。我輩の如き小生は、君の樣な強い仲間に出ッ會はして、生來臆病なのが俄に氣強くなつて勇氣を生じたことは、神明も、照鑒される通り。今後は、穴だらうが、谷だらうが、どんな處へでも、猛進する覺悟で、利祿に拘束されて、自分の心を慰めることの出來ないのは貪饞の人で、丸で御話に成らぬ。かくて、羣公は高揖して、官吏たる名譽を謝し、遠く杜甫・李白の跡を追ひ、至和を以て交を結ばうではないか。そこで、今夜樓頭の明月に宿し、明朝、終南山に出かけやうと思ふので、さうしないと、この月は、段段缺けて細くなり、折角山へ遊びに往つても、面白くない樣に成るであらう。

【餘論】　朱竹垞は「起二句寫景佳」といひ、自知短淺無ᵣ所ᵣ補以下に就いては「仍は是れ粗硬の調」

といひ、結局に就いては「月の圓缺は、是れ常景、これは用意却つて新なり」といつた。

誰氏子　誰が氏の子

非癡非狂誰氏子。　癡に非ず、狂に非ず、誰が氏の子、
去入王屋稱道士。　去つて、王屋に入つて、道士と稱す。
白頭老母遮門啼。　白頭の老母、門を遮つて啼き、
挽斷衫袖留不止。　衫袖を挽斷して、留むれども止まらず。
翠眉新婦年二十。　翠眉の新婦、年二十、
載送還家哭穿市。　載せ送つて家に還り、哭して市を穿つ。
或云欲學吹鳳笙。　或は云ふ、鳳笙を吹くを學ばむと欲す、
所慕靈妃媲蕭史。　慕ふ所は、靈妃の蕭史に媲するなりと。
又云時俗輕尋常。　又云ふ、時俗、尋常を輕んず、
力行險怪取貴仕。　力めて險怪を行ひ、貴仕を取らむとすと。

【字解】【一】欲學吹鳳笙　列仙傳に「秦の穆公の時、蕭史あり、善く簫を吹く。公の女弄玉、これを好す。公、以て妻はす。遂に弄玉に教へて、鳳鳴を作す。居ること數十年、吹いて鳳聲に似たり、鳳凰、來つて其屋に止まる。公、爲に鳳臺を作る。夫妻その上に止まり、一旦皆鳳凰に從つて飛び去る」とある。
【二】媲　たぐひする、配偶となる。

神仙雖然有傳說。　神仙、然かく傳說ありと雖も、
知者盡知其妄矣。　知るものは、盡く其妄を知る。
聖君賢相安可欺。　聖君賢相、安んぞ欺くべけむ。
乾死窮山竟何俟。　窮山に乾死すとも、竟に何をか俟たむ。
嗚呼余心誠豈弟。　嗚呼、余が心、誠に豈弟、
願往教誨究終始。　願はくは往いて教誨して、終始を究めむ。
罰一勸百政之經。　一を罰して百を勸むるは、政の經、
不從而誅未晚爾。　從はずして誅す、未だ晚からざるのみ。
誰其友親能哀憐。　誰か其れ友親能く哀憐するや、
寫吾此詩持送似。　吾が此詩を寫して、持し送りて似せ。

【三】乾死　ひぼしになつて死ぬ。
【四】罰一勸百　文中子の中說に「杜如晦、政を問ふ。子曰く、一を賞して以て百を勸め、一を罰して以て衆を懲らす」とある。
【五】持送似　持つて往つて示せといふ義。

【題義】これは、呂氏の子で炅といふものが、神仙の道に耽溺したのを諭す積りで作つたので、その事實は、韓愈の撰せる河南少尹李素墓志に見え「素、河南少尹に拜し、大尹の事を行ふ。呂氏の子炅、その妻を棄て、道士の衣冠を著し、母に謝して曰く、當に仙を王屋山に學ぶべし、と。去つて數月、

復た出でて閒に公に詣る。公、これを府門の外に立たしめ、吏卒をして道士の冠を脱せしめ、冠帶を給し、送つて其母に付す」とある。

【詩意】　格別白癡瘋癲でもなく、又狂人といふ譯でもないのに、呂炅といふ男は、突然王屋山に入つて、道士となることに決めた。處が白頭の老母は、今お前に行かれては困まるといつて、門を遮つて泣いて居るけれども、一向頓著なく、提へた袖を振り拂つて、とうとう往つて仕舞つた。その家には、翠眉を描いた新婦の年二十ばかりなるが居て、夫と車を同じうして之を見送り、やがて別れて獨り家に歸らねばならぬといふので、大に慟哭し、その聲は、市を穿つ位。まことに憐れな話。本人は、一體如何なる心持かといふと、或人は、秦の靈妃弄玉が蕭史に配したことを追慕し、その眞似がしたい處から、鳳笙を吹くことを學ばむが爲に、道士と成つたといひ、或人は、世間では竝外れた行をすると、恐ろしく偉い者と考へ、遂には朝廷の貴い役人に採用されるから、それで王屋山に入つたといつて居る。なる程、神仙の事は、傳說に有るけれども、苟くも知あるものは、その妄誕なることを知つて居る。まして、聖君賢相などは、そんな事で欺き得べきものではなく、彼は、たとひ、如何なる目的があらうとも、徒に窮山の間に乾干になつて死ぬだけの事である。ああ、余が心には、その愚を洵に氣の毒と思ふので、親ら往いて、其人に說き、終始を究めて聽かせたならば、必ず分かることと思ふ。但し、養ふべき親を棄てるのは、不孝であつて、罪を鳴らして、罰せぬことはない。そこで一を罰して百を勸め、將來さういふ事の無いやうにするのは、政治の常經であるが、一應敎へ諭し、それでも聞かぬときは、刑罰に處するとしても、決して遲くはない。但し、山に遁つて仕舞つては、仕方がないが、いづれ、その友達とか、親戚とかいふ者が居るであらうから、その者が能く哀憐するならば、我が此詩を寫して持つて往つて示すが善からう。

【餘論】　前に謝自然の五古があつて、昇天の無稽なることを痛論したが、この篇中、力行險怪取貴仕の七字は、當時の流弊に中つて居るので、現に隱れて居た道士が俄に召し出されて、高官を授けられたり、宮中の公主が無理に出家を命ぜられて、女道士となつたりする事實は、唐代を通じて、頻頻たるものであつた。

河南令舍池臺　河南令舍の池臺

灌池纔盈五六丈。　池に灌して纔に五六丈に盈つ、
築臺不過七八尺。　臺を築いて七八尺に過ぎず。
欲將層級壓籬落。　層級を將て、籬落を壓せむと欲す。
未許波瀾量斗碩。　未だ許さず、波瀾の斗碩を量ることを。

規摹雖巧何足誇。景趣不遠眞可惜。長令人吏遠趨走。已有(一)蛙黽助(二)狼藉。

規摹、巧なりと雖も、何ぞ誇るに足らむ。景趣遠からず、眞に惜むべし。長く人吏をして、趨走に遠ざからしむ、すでに蛙黽の狼藉を助くるあり。

【字解】(一) 蛙黽 黽も蛙の屬。(二) 狼藉 說文に「艸編せざる、狼藉なり」とあり、後世動もすると、藉を籍に作るが、それは宜しくない。

【題義】 これは、元和六年、韓愈が河南令たりし時、官舍に聊かばかりの池臺を築き、それが、餘りに小さいといふ處から、解嘲に當てる爲に作つたのである。

【詩意】 池を掘つた處が、僅に五六丈位で、まことに小さなものであるし、臺を築いた處が、七八尺に過ぎず。臺は築き上げて、幾層かの段を造り、わづかに、籬落を壓することが出來る位、池は水が一斗とか一斛とかいふ大きな枡では量るに足らず、ほんの少ししか這入らない。その規模は、巧者に出來て居るが、何分小さくして、誇るに足らず、その景趣は遠大ではないが、猶ほ且つ勿體ない様な氣がする。もと、小役人などいふ俗物が毎毎出入するから、それに遠ざかるが爲に、態態築いたのであるが、如何せむ、蛙が早く之を占領し、池の中で頻りに狼藉を助けて、がやがやと喧しいのは、まことに困まつたものである。

【餘論】 朱竹垞は「率意寫景、亦た天趣あり」といつて居る。

送無本師歸范陽

無本師の范陽に歸るを送る

無本於爲文。身大不及膽。吾嘗示之難。勇往無不敢。(一)

無本、文を爲るに於て、身の大さ膽に及ばず。吾かつて之に難きを示せば、勇往敢てせざるなし。

蛟龍弄角牙。造次欲手攬。衆鬼囚大幽。(二)下覷襲玄窞。(三)

蛟龍、角牙を弄し、造次、手づから攬らむと欲す。衆鬼、大幽に囚はれ、下し覷うて、玄窞を襲ふ。

天陽熙四海。注視首不頷。(四)鯨鵬相摩窣。兩擧快一啗。

天陽、四海に熙たり、注視、首頷せず。鯨鵬、相摩窣し、兩擧、一啗を快くす。

夫豈能必然。固已謝黯黮。(五)狂詞肆滂葩。低昂見舒慘。

夫れ豈に能く必ずしも然らむや、もとより已に「黯黮を」謝す。狂詞、肆にして滂葩たり、低昂、舒慘を見る。

姦窮怪變得。往往造平澹。蜂蟬碎錦纈。(六)綠池披菡萏。(七)

姦窮まり、怪、變じ得て、往往、平澹に造る。蜂蟬、錦纈を碎き、綠池、菡萏を披く。

芝英擢荒蓁。孤翮起連菼。(八)家住幽都遠。(九)未識氣先感。

芝英、荒蓁を擢んで、孤翮、連菼に起す。家は、幽都の遠きに住す、未だ識らず、氣先づ感す。

來尋吾何能。無殊嗜昌歜(一〇)。　來り尋ぬ、吾、何をか能くせむ、昌歜を嗜むに殊なるなし。
始見洛陽春。桃枝綴紅糝(一一)。　始めて見る、洛陽の春、桃枝、紅糝を綴る。
遂來長安里。時卦轉習坎(一二)。　遂に長安の里に來り、時卦、習坎に轉ず。
老懶無鬬心。久不事鉛槧(一三)。　老懶、鬬心なく、久しく鉛槧を事とせず。
欲以金帛酬。擧室常顑頷(一四)。　金帛を以て酬いむと欲すれば、擧室、常に顑頷たり。
念當委我去。霜雪刻以憯(一五)。　念ふに當に我を委て去るべし、霜雪、刻にして以て憯まし。
獰飈(一六)攪空衢。天地與頓撼。　獰飈、空衢を攪し、天地、與に頓撼。
勉率吐歌詩。慰女別後覽。　勉め率ゐて、歌詩を吐く、女が別後の覽を慰む。

【字解】【一】身大不及膽　三國志趙雲別傳に「蜀の先主曰く、子龍、一身すべて是れ膽なり」とある。【二】大幽　地獄の底。【三】玄窖　易の坎卦に入于坎窞とあつて、虞翻の解に「坎中の小穴を窞といふ」とある。【四】不頷　一本に頷に作る、說文に「頷は低頭するなり」とある。【五】黯黮　雲の黒きこと、不明の義に用ふ。【六】錦纈　說文に「纈は結なり、綵繒を繋いで文を爲すなり」とある、つゞれの錦。【七】菡萏　爾雅に「荷、芙蕖、その花を菡萏といふ」とある。【八】逵莢　叢莽に同じ。【九】幽都　卽ち范陽、幽州の都なるが故に云ふ。【一〇】昌歜　菖蒲の醃漬、左傳僖公三十年に「享に昌歜あり」と記し、杜預の註に「昌蒲の菹なり」とある、又呂氏春秋に「文王、昌歜の菹を好む、孔子、これを聞いて頞を蹙む、しかも之を食ふこと三年、然る後、これを美とす」とある。【一一】紅糝　糝は粒。【一二】轉習坎　坎は十一月の卦、この年の秋、韓愈は職方員外郎に遷り、十一月に長安に來てから賈島と別れた。【一三】鉛槧　前に寄侯喜至の詩に見ゆ。【一四】顑頷　楚辭王逸註に「飽かざるの貌」とある。【一五】憯　いたましい。【一六】獰飈　禮記の月令に「孟春、秋令を行へば、猋風暴雨、すべて至る」とある。

【題義】 無本は賈島で、初め坊主であつた。賈島の事は、前に總說の中に略敍して置いたが、元と范陽の人、范陽は、後の直隸順天府、卽ち今の北京である。賈島は、韓愈が河南の令たる時、洛陽まで出て來て、初めて贄を執り、後に長安にも同行したので、この詩は、その歸鄕するを送つて作つたのである。劉公嘉話に「島、はじめ、擧に京師に赴く。一日、馬上に於て句を得たり、云ふ、鳥宿池中樹、僧敲月下門と。初め推の字に作らむと欲し、これを錬つて、未だ定まらず、覺えず、尹を衝く。時に、韓吏部、權りに京尹たり、左右擁して前に至る。島、具さに所以を告ぐ。韓、馬を立つること良や久しうして曰く、敲の字に作ること佳なりと。遂に與に布衣の交をなす。詩あり曰く、

　孟郊死葬北邙山。日月風雲頓覺閑。天恐文章還斷絕。再生賈島在人間。

この話は、推敲の出處として極めて有名である。次に摭言に「島、かつて、驢に天衢に騎す。時に秋風正に厲しく、黃葉掃ふべし。島、忽ち吟じて曰く、落葉滿長安と。卒に一聯を求めて得ず。因つて、京尹劉棲楚に唐突し、繫がるること一夕にして釋さるるを得たり」とある。又新唐書に「島、字は浪仙、范陽の人、はじめ浮屠となつて、無本と名づく。東都に來る。愈、その文を爲るを歎ふ、遂に浮屠を去つて、進士に擧げらる。その苦吟に當つては、公卿大夫に値ふと雖も、知覺せざるなり。一日、

京兆尹を見て、驢に騎す、尹、これを詰責し、久しうして乃ち釋さるるを得たり」とある。そこで、推敲の話を事實とするには、ここに掲げた送㆔無本師歸㆓范陽㆒の詩を否定せねばならぬので、現に東坡は「世俗無知の者、託するところ、退之の語に非ず」といつて居るが、洪興祖は、却つて、この詩を是認して、推敲の話を否定し「按ずるに、無本を送る時、退之、河南令たり、ここに至つて、方に相知るべからず、又、島、はじめ浮屠たり、後、乃ち進士に擧げらる。ここに、後に名を無本と改むといふは、乃ち傳者の誤なり」といひ、樊汝霖も亦た「按ずるに、この詩、元和六年の冬作る、而して、この年、東野、亦た詩あり、無本に與へて云ふ、長安秋聲乾、木葉相號悲と。時に東野尙ほ恙なし、何を以て死して邙山に葬ると云ふか。もし以て、公、京尹と爲つて、始めて島を識ると云はば、公の尹たるは、長慶三年に在り、而して、是年、何を以て此作あるか」といつて居る。この送別の詩は、どうしても韓愈の手筆に相違ないから、折角ながら、推敲の話を否定せねばならず、少くとも、それが韓愈が京兆尹であつた時とすることは、どうしても、出來ないので、推敲の話こそ、後人の捏造かも知れない。劉棲楚の事は、もとより關係はない。

【詩意】 無本が文を爲ることに就いて、特異とするところは、膽が身體よりも大きく、あくまで放膽であるといふことである。我輩は、ある時、色色の六つかしい事を示したが、勇往して、遣り遂げぬことはなかつた。蛟龍は、恐ろしい角や牙を弄して居るが、無本は、無造作に之をさへ手取にせむとした。多くの鬼どもは、地獄の底に居るが、無本は、下に伺うて、深い穴をさへ襲はむとした。太陽は、四海に輝いて居るが、無本は、ちつと見詰めて、決して首を低れることは無い。鯨や鵬は、天を摩し、海を攪き亂して居るが、無本は、兩手を擧げて、其肉を食はむとした。これ丈の試驗をしても、決して閉口しない。元來、文章は、そんな無理な六つかしい事ばかりではないが、これは、彼の筆力を試す爲にしたので、我輩は、今まで誤つて居た不明を君に謝せざるを得ぬ。無本の文たるや、狂詞は滂葩として、自由自在であるし、或は低昂、或は舒慘、各その宜しきを得て居て、姦窮まり、怪變じた揚句には、往往にして、平澹に歸して居る。彼が細密の工夫は、蜂の鬚、蟬の翼が、五彩の錦の上に碎けて居る樣であるし、綠池の中に蓮の花が鮮に咲き出でた樣である。又荒れた草むら中から、靈芝が抽き出で、蘆の茂みから、鳥が飛び起つ樣な趣があつて、衆に傑出して居るが、一層精選すれば、愈よ妙であらうと思ふ。無本は、范陽の人であつて、まだ其顏を知らぬ内から、同氣相感じて居た。然るに、洛陽に來て、我輩を尋ねられたのは、菖蒲の鹽漬を嗜む樣なものである。その時しも、洛陽では春の盛りで、桃の花が紅の粒を綴つて居たが、十一月には、我輩が長安の都に移り、無本も一緒に付いて來たが、今次、范陽に歸るといふので、愈よ御別となつた。我輩は、年を取つて、疎懶であつて、久しく鉛槧を事とせぬ處から、君と才華を鬪はすといふ野心もなく、されはといつて、記念に金帛でも贈らうと思ふが、實は甚だ貧乏で、家内中、常に顎が乾上つて居る位。今しも寒い折から、

君は我を棄てて范陽に赴かるるが、身には雪霜に刻まれる樣な寒さを感ずるであらうし、現に、すさまじき風は、都大路を吹きめくつて、天地も爲に摵くかと疑はれる位。ここに、勉めて、歌詩を作つて、聊か己の情を述べ、別後時時これを見て、汝の心を慰めむと欲するのである。

【餘論】起首、無本於レ爲レ文より孤翮起二連菼一に至るまでは、主として、無本の文章を評論したので、同時に、修爲の進程と見ても善い。家住二幽都遠一より以下終までは、その歸鄕を送つたのである。全體が險韻で、文字も佶屈聱牙ではあるが、大體の意味は取れぬこともない。兪瑒は「凡そ昌黎先生論文諸作、極めて關係あり、その中の次第、ともに、親身より歷過す、故に能く其甘苦を言ひ、親切乃ち爾かく此の如し、詩に云ふ、無本於レ爲レ文、身大不レ及レ膽、吾嘗示二之難一、勇往無レ不レ敢、詩を作つて手に入る、須らく膽力を要すべし。全く勇往の上に在りて、その造詣の高きを見る。姦窮怪變得、往往造二平澹一、平澹は能く變ずるの後に得、謂はゆる漸く自然に近きなり。この境、夫れ豈に到り易からむや。公の來學者を指點する、深く、微なり」といひ、乾隆御批には「獎賞の中、諷諭深遠、正に獨り浪仙の爲に法を說くのみに非ざるなり。身大不レ及レ膽、翻用に妙なり」とある。

石鼓歌

石鼓の歌

(一)張生手持二石鼓文一。　張生手に石鼓の文を持し、
勸レ我試作二石鼓歌一。　我に勸めて試に石鼓の歌を作らしむ。
(二)少陵無レ人(三)謫仙死。　少陵人なく、謫仙死し、
才薄將レ奈二石鼓一何。　才薄く、石鼓を奈何せむとする。
(四)周綱(五)陵遲四海沸。　周綱陵遲して、四海沸き、
宣王憤起揮二天戈一。　宣王、憤起して天戈を揮ふ。
大開二(六)明堂一受二朝賀一。　大に明堂を開いて、朝賀を受け、
諸侯劍珮鳴相磨。　諸侯の劍珮、鳴つて相磨す。
(七)蒐二于岐陽一騁二雄俊一。　岐陽に蒐して、雄俊を騁し、
萬里禽獸皆遮羅。　萬里禽獸、皆遮羅せらる。
鐫レ功勒レ成告二萬世一。　功を鐫し、成を勒して、萬世に告げ、
鑿レ石作レ鼓隳二嵯峨一。　石を鑿ち、鼓を作つて、嵯峨を隳る、
從臣才藝咸第一。　從臣才藝、咸な第一、

【字解】【一】張生　張籍。
【二】少陵　杜甫、その宅少陵原の西に在りしが故に取って號とした。
【三】謫仙　唐書李白傳に「賀知章曰く、子は謫仙人なり」とある。
【四】周綱　周室の綱紀。
【五】陵遲　次第に衰へる、荀子の註に「丘陵の勢漸く慢なるなり」とある。
【六】明堂　政教を明かにする堂、その詳は禮記、晏子春秋、呂氏春秋、新論、管子、尸子、通典等に見ゆ。
【七】蒐　狩獵。

揀選撰刻留山阿。

揀選撰刻、山阿に留む。

雨淋日炙野火燎。

雨は淋ぎ、日は炙つて、野火燎け、

鬼物守護煩撝呵。（八）

鬼物守護して、撝呵を煩はす。

公從何處得紙本。

公、何處より紙本を得たる、

毫髮盡備無差訛。

毫髮、盡く備はつて、差訛なし。

辭嚴義密讀難曉。

辭嚴に、義密に、讀めども曉し難く、

字體不類隸與科。（九）

字體、隸と科とに類せず。

年深豈免有缺畫。

年深く、豈に缺畫あるを免れむや、

快劍斫斷生蛟鼉。

快劍、斫り斷つ生蛟鼉。

鸞翔鳳翥衆仙下。

鸞は翔り、鳳は翥うつて、衆仙下り、

珊瑚碧樹交枝柯。

珊瑚碧樹、枝柯を交ふ。

金繩鐵索鎖紐壯。（一〇）

金繩鐵索、鎖紐壯、

古鼎躍水龍騰梭。（一一）

古鼎水に躍つて、龍、梭を騰ぐ。

【八】撝呵　指斥の意。

【九】科　科斗、最古の字體。

【一〇】鎖紐　鎖は鎖で繋ぐこと、紐は結ぶ。

【一一】龍騰梭　晉書に「陶侃、嘗て雷澤に漁するや、一梭を網し得て、壁に挂く。頃くあつて雷雨、化して龍と爲つて去る」とある。

陋儒編詩不收入。

陋儒、詩を編して收め入れず、

（一二）二雅褊迫無委蛇。（一三）

二雅、褊迫にして委蛇たるなし。

孔子西行不到秦。

孔子西行、秦に到らず、

掎摭星宿遺羲娥。（一四）

星宿を掎摭して、羲娥を遺す。

嗟余好古生苦晚。

嗟、余、古を好めども、生、苦だ晚し。

對此涕淚雙滂沱。

此に對して、涕淚雙んで滂沱たり。

憶昔初蒙博士徵。

憶ふ昔、初めて博士の徵を蒙る、

其年始改稱元和。

其年、始めて改めて元和と稱す。

（一五）故人從軍在右輔。（一六）

故人從軍、右輔に在り、

爲我量度掘臼科。（一七）

我が爲に、量度して臼科を掘る。

濯冠沐浴告祭酒。（一八）

冠を濯つて沐浴、祭酒に告ぐ、

如此至寶存豈多。

此の如きの至寶、存する豈に多からむや。

氈苞席裹可立致。

氈に苞み、席に裹みて、立どころに致すべし。

【一二】二雅　詩經に收めたる大雅、小雅。

【一三】委蛇　委曲　自得の貌。

【一四】羲娥　羲和・嫦娥、即ち日月。

【一五】故人　その人不詳。

【一六】右輔　右扶風、即ち鳳翔府。

【一七】臼科　石鼓を安置する處、地窪めるが故に云ふ。

【一八】祭酒　國子學の長、今でいへば大學總長。

十鼓秖載數駱駝。　十鼓、秖だ數駱駝に載するのみ。
薦諸大廟比部(一九)鼎。　これを大廟に薦めて、郜鼎に比すれば、
光價豈止百倍過。　光價、豈に止だ百倍過ぐるのみならむや。
聖恩若許留太學。　聖恩、若し太學に留むるを許さば、
諸生講解得切磋。　諸生講解、切磋を得む。
觀經鴻(二〇)都尚塡咽。　經を鴻都に觀るも、尙ほ塡咽、
坐見擧國來奔(二一)波。　坐ながら見る、擧國來つて奔波するを。
剜苔剔蘚露節角。　苔を剜り、蘚を剔いて、節角を露はし、
安置妥帖平不頗(二二)。　安置妥帖、平にして頗せざらむ。
大廈深簷與蓋覆。　大廈深簷、與めに蓋覆、
經歷久遠期無佗。　經歷久遠、期すること佗なし。
中朝大官老於事。　中朝の大官、事に老ゆ、
詎肯感激徒婗(二三)嫛。　詎ぞ肯て感激せむ、徒に婗嫛。

【一九】部鼎　左傳桓公二年に「郜の大鼎を宋より取り、戊申、大廟に入る」とある。

【二〇】鴻都　後漢書に「漢の靈帝光和元年二月、はじめて鴻都門府を置き、熹平四年三月、諸儒に詔して、五經の文字を正さしめ、議郎蔡邕に命じ、古文篆隸の三體を爲して之を書せしめ、石た大學門外に刻し、後儒晩學をして、咸な正を取らしむ。碑、はじめて立つや、その觀見及び摹寫するもの、車乘日に千兩、街陌に塡塞す」とある。鴻都と觀經と、もと二事であるのを併用したのである。

【二一】奔波　聚まり來ること。

【二二】頗　不平、かたよる。

【二三】婗嫛　決せざる貌。

牧童敲火牛礪角。　牧童、火を敲いて、牛、角を礪き、
誰復著手爲摩挲。　誰か復た手を著けて、爲に摩挲せむ。
日消月鑠就埋沒。　日に消え、月に鑠えて、埋沒に就かむ。
六年西顧空吟哦。　六年、西に顧みて、空しく吟哦。
羲(二四)之俗書趁姿媚。　羲之の俗書は、姿媚を趁ひ、
數紙尙可博白(二五)鵝。　數紙尙は白鵝を博すべし。
繼周八(二六)代爭戰罷。　周に繼いで、八代爭戰罷み、
無人收拾理則那。　人の收拾するなし、理則ち那ぞ。
方今太平日無事。　方今太平、日に無事、
柄任儒術崇丘(二七)軻。　柄、儒術に任じて、丘軻を崇ぶ。
安能以此上論列。　安んぞ能く此を以て、上に論列、
願借辯口如(二八)懸河。　願はくは、辯口懸河の如きを借らむ。
石鼓之歌止於此。　石鼓の歌、此に止まる、

【二四】羲之　即ち王羲之、王脅臣の歷史に「王右軍の書、多く偏旁を講ぜす、これ退之の謂はゆる羲之俗書趁二姿媚一ものなり」とある。

【二五】博白鵝　晉書王羲之傳に「性、鵝を愛す。山陰に一道士あり、好鵝を養ふ。羲之、固く之を市はむことを求む。云ふ、爲に道德經を寫さば、當に羣を擧げて相贈るべしと。羲之、欣然として寫し畢り、鵝を籠にして歸る」とある。

【二六】八代　周より唐に至るまでを云ふ、漢・魏・晉・宋・齊・梁・陳・隋。

【二七】丘軻　即ち孔孟。

【二八】如懸河　晉書に「郭象、字は子玄、少にして才理あり、老莊を好んで、清言を能くす。太尉王衍、每に云ふ、象の語を聞けば、懸河の水

〰を瀉ぐが如く、注いで歸らず」とある。

嗚呼吾意其蹉跎。　嗚呼、吾が意、其れ蹉跎たり。

【題義】石鼓は、周の宣王が狩をしたことを詩に作らせて、それを鼓の形をした石十個に鐫りつけたもので、支那最古の金石文字の一である。これに就いては、予がかつて一小論文中に略述したことがあるから、今、その文を下に引抄することにする。「石鼓に就いては、異論頗る多し。或は周の文王の作となすあり、唐の韋應物の石鼓歌に曰く、周文大獵岐之陽、刻石表功何煒煌と。或は周の成王の時のものとなすあり。左傳、周成王蒐於岐陽の文に據れるなり。又金の馬定國の如きは、宇文周の作るところとなし、或は斷じて後世の僞作となすものあり。然れども、周宣の遺物となすもの、最も多く、一般の通說、因襲の久しき、自ら據るところあり。これに從ふ、もとより不可と爲さず。韓愈、かつて石鼓歌を作つて曰く、周綱陵遲四海沸、宣王憤起揮天戈、大開明堂受朝賀、諸侯劍珮鳴相磨、蒐于岐陽騁雄俊、萬里禽獸皆遮羅、鐫功勒成告萬世、鑿石作鼓隳嵯峨と。これより先、蘇勗の載記に云ふ、周の宣王の獵碣といふ、共に十鼓と。次いで、歐陽修の集古錄、三疑を著くと雖も、全く之を否定する程、大膽ならず、曰く、石鼓の文、岐陽に在り。はじめ、世に稱せられず、唐に至り、始めて盛に之を稱す。而して、韋應物、以爲へらく、周の文王の鼓、宣王に至りて、詩を鐫するのみと。韓退之、直に以爲へらく、宣王の鼓なり、と。今鳳翔縣孔子廟に在り。鼓十あり、先時、野に遺棄す、鄭餘慶、始めて廟に置いて、その二を失ふ。皇祐四年、向傳師、民間に求めて之を得たり、その文、見るべきもの四百六十有五、磨滅して識るべからざるもの過半、然れども、その疑ふべきもの三四、退之、古を好んで妄ならざるもの、予、姑らく取り以て信となすのみ。字畫に至りては、亦た史籀に非ざれば、作る能はざるなりと。また困學紀聞に曰く、石鼓は、天興縣南に在り、乃ち雍縣なり。太平寰宇記に「石の形、鼓の如く、その數、十あり。蓋し、周の宣王遊獵の事を記す、その文は卽ち史籀の跡なり」とあり。唐の貞觀中、蘇勗、その事を紀して云ふ、虞褚歐陽、ともに古妙を稱す。歲久しく訛誤すと雖も、然れども、尙ほ觀るべきものありと。名勝志に「鳳翔縣南石鼓鎭あり」とあり。石鼓、はじめ陳倉野中に散ず。韓文公、博士となり、祭酒に請ひ、輿して大學に致さむと欲せしが、能はず、鄭餘慶、始めて鳳翔孔子廟に遷し、元の季、燕京國子監に移す。かくの如くして、石鼓は、宋の時、鳳翔の孔子廟に在り、故に蘇東坡鳳翔八觀の詩、石鼓歌を以て其首となし、その博聞多識を以て、なほ舊說に從ひ、亦た以て周宣の遺物となす。これに次いで、趙古則の石鼓文跋に、「余、斷然以て周の宣王田狩の詩にして、史籀の書となすなり」といひ、消夏記も亦た「蓋し周の宣王田獵の事、史籀の跡なり」といひ、弇州山人稿、及び金石文、皆說を同じうす。むかし、韋韓の前、杜子美、かつて歌うて曰く、陳倉石鼓久已訛と。歲月すでに久しきを經、風雨、その面を蝕す、唐時、すでに全文なし、所作の時を推す、亦た難いかな。然れども、最も公平穩妥なる近淸考證家の說に從

へば、少くとも、先秦時代の遺物たること、もとより論なく、その字は、斷じて史籀の大篆に依りしものなるが如し。李調元の如き、卽ち是れなり。なほ石鼓文の全體を知らむと欲するものは、李調元の金石存、及び楊愼の石鼓文旨釋に就いて覽るべし」石鼓は、元の時、燕京の國子監に移した儘、今でも、其處に存して居る。韓愈の此詩は、石鼓の由來を敍し、兼ねて、その感慨を述べたのである。

【詩意】張籍が石鼓文の石搨を持つて來て我に石鼓の歌を作れといつて勸めたが、李杜の兩詩聖、すでに死し、才薄きこと、吾の如きものでは、とても、面白いものは出來ぬ。顧みれば、むかし、周の綱紀が次第に衰へ、四海鼎沸せしとき、宣王憤然として起ち、戈を揮つて、淮夷徐戎を平らげ、服せざるものを伐ち、大に明堂を開いて朝賀を受けしが故に、諸侯再び入朝し、劍佩相摩して、その典儀は、まことに立派であつた。そこで、諸侯を率ゐ、岐陽に於て狩獵を催し、士馬雄俊、爭うて相馳せ、萬里の禽獸は、皆網せられた。その大業成功を萬世に告げむが爲に、歌を作り、太鼓の形を爲せる石に鐫りつけ、嵯峨たる山を切り崩して据ゑ付け、當時の從臣、いづれも才藝あるものであつたが、擇りに擇つて、その文辭も、頗る見事で、石も頗る善かつた。されば、歳月すでに久しきを經て、雨注ぎ、日炙り、野火にも焚かれたが、神靈、これを守護せしものか、依然として儼存し、今に指斥を勞するのである。君は、何處から、この石搨を得たか知らぬが、まことに善く出來て、少しも誤つて居らず、試に讀んで見ると、文辭謹嚴、義理縝密、なかなか六つかしく、その字體は、科斗でもなく、隷書でもなく、卽ち大篆の體であつて、何分古いから、少しづつ、字畫の缺損して居るのは、まことに致方の無いことで、これを形容すれば、切れ味よき劍を研ぎ澄まして、生ける蛟鼉を斷ち切るが如く、鸞鳳先驅して、羣仙天より下降するが如く、珊瑚玉樹が枝を交へたるが如く、金繩鐵鎖を以て堅く結び付けたるが如く、古鼎水に躍り、梭が龍に化して騰り去るが如く、まことに、絶奇の致を極めて居る。かくの如く、その字が面白いばかりでなく、その文も、亦た之に協つて居る。むかし、下らぬ學者が詩經を編集した時に、これを其中に收めざりしは、まことに奇怪至極の事で、これに較べては、大雅小雅などは、その意象、褊狹逼迫して、委曲自得の趣が無い。それから、孔子は、西の方、周までは往かれたが、秦に至らざりしが故に、これあるを知らず、詩經を整理しても、丸でこの石鼓文には考へ及ばず、たとへば、星宿を拾ひ集めて、日月を遺した樣なものである。予は、本來、好古の癖あるものであるが、生まれしこと、甚だ晩かりし爲に、かかる事をも爲し得なかつたので、今、これに對すれば、感慨愴然、雙涙滂沱として流れる。さきに、元和改元の年、予は、徵されて國子博士となつたが、その時、故人の某は、從軍して鳳翔に至り、わが爲に種種研究し、その地を掘り、十個の石鼓を整理して、原形に復した。そこで、予は、冠を濯ひ、身を淨め、國子祭酒の處に往つて、石鼓の如き寶は、外に類がないから、これを毛氈に包み、席に裹み、數頭の駱駝に載せて、長安に持つて來て、太廟の中に納めて置けば、かの郜鼎の如く、その價値も百倍する。さなくば、敕許を得て、

これを太學に納めて置けば、學生どもが研究して、大に講學の助にもなる。むかし、漢末の頃、石經を洪都門外に据ゑ付けてさへ、日ごとに、大勢見に來たといふ位だから、天下の人を擧げて、ぞろぞろ遣つて來るに相違なく、その石面の蘚苔を削り落して、文字の節角を明かにし、傾かざる樣に、うまく安置し、大屋深簷を設けて之を覆うて置けば、今後いくら時代を歷ても、少しも傷が付かずに、昔の儘に殘つて居るだらうといつた。しかし、朝廷の貴官どもは、多事に倦み疲れて、その儘、愚圖愚圖に終つたから、今に、石鼓は、鳳翔の原中に野ざらしになつた儘で、牧童は、いたづらをして、其石で火を敲き出し、牛は角を礪きなどし、誰も手を著けて之を撫し、古を憶ふものさへなく、日に月に銷鑠して、埋沒せむとして居る。予は、爾後六年の間、西に顧み、むなしく嘆嗟して、吟哦するのみである。王羲之は、名筆の譽があるが、俗體の字を書き、なまめかしき姿を旨とし、それでも、老子道德經を寫して、道士の鵝に換へたといふ傳說もあつて、世に珍重されて居るが、石鼓は、史籀の書いた大篆で、單に字體から云つても貴いものである。それを、周後八代を經て爭戰方に罷みし唐の世になつて、取り收めもせずして、棄てて置くのは、どうしたものか。まして、方今太平無事の日に際し、政は儒術に本づいて、孔孟を尊崇し、舊物の保存などに十分注意すべき折から、願はくは、懸河の如き辯舌を以て、如上の趣旨を再び當路者に向つて論述したいものである。石鼓の歌は、これまでであるが、わが宿志の遂げられざるは、まことに遺憾至極の事である。

【餘論】 容齋隨筆に「文士文を爲る、矜夸實を過ぐるあり、韓文公と雖も、免るる能はず。石鼓歌の如きは、極めて宣王の事を道ふ、偉なり。孔子西行不レ到レ秦、掎二摭星宿一遺二羲娥一、陋儒編レ詩不レ收入、二雅褊迫無二委蛇一と云ふに至りては、これ三百篇皆星宿の如く、ひとり此詩日月の如しと謂ふなり。二雅褊迫の語、尤も宜しく言ふべきところに非ず。今世に傳ふるところの石鼓の詞、尚ほ在り、豈に能く吉日車攻の右に出でむや。安んぞ、聖人の删するところを經たるに非ざるを知らむや」といひ、困學紀聞にも「致堂云ふ、韓退之、石鼓を賦して曰く、孔子西行不レ到レ秦、故に錄せられずと。孔子詩を編す、豈に必ずしも身歷して後に及ばむやと。信なり斯言。車鄰駟鐵、胡すれぞして之を收むるや」といつた。ともに、尤も千萬で、勿論、尊題法ではあるが、あまりに甚だしく、これでは、道理に合はぬことに成る。沈德潛は「陋儒は、當時の采風者を指す。言ふは、二雅に載せず、孔子、從つて采取するなきなり。隸書は風俗通行、古篆に別、故に俗書と云ふ、右軍を貶するの意なし」といつて、聊か韓愈の爲に辯護して居る。それから、筆墨閒錄に「この歌、全く杜子美の李潮八分小篆歌を仰止す」といひ、蔣之翹は「退之の石鼓歌、頗る形似の語に工なり、韋蘇州、蘇眉山、皆作ありと雖も、及ばざるなり」といひ、朱竹垞は「大約、蒼勁を以て勝る、力量自ら餘あり。然れども、氣一にして直下、微に藻潤轉折の妙に乏しきを嫌ふ」といひ、乾隆御批には「典重瑰奇、良に之を金に鑄つて之を石に磨するに足る。後半は旁皇珍惜、更に懷古情深きを見る。厥後、石鼓、升沈一ならず、竟に聖人の居

に依り、その文、六籍と竝に永世に垂るるを得たり、すなはち、退之太學に留めむを請ふの說、實に力あり、この詩、亦た空作と爲さず」とある。

雙鳥詩

雙鳥の詩

雙鳥海外來。飛飛到中州。　雙鳥、海外より來り、飛飛として中州に到る。
一鳥落城市。一鳥集巖幽。　一鳥は城市に落ち、一鳥は巖幽に集まる。
不得相伴鳴。爾來三千秋。　相伴うて鳴くことを得ず、爾來三千秋。
兩鳥各閉口。萬象銜口頭。　兩鳥、各口を閉ぢ、萬象、口頭に銜む。
春風卷地起。百鳥皆飄浮。　春風、地を卷いて起り、百鳥、皆飄浮す。
兩鳥忽相逢。百日鳴不休。　兩鳥、忽ち相逢うて、百日、鳴いて休まず。
有耳聒皆聾。有口反自羞。　耳あるものは、聒しくして皆聾し、口あるものは、反つて自ら羞づ。
百舌(一)舊饒聲。從此恆低頭。　百舌、舊と饒聲、これより恆に低頭。
得病不呻喚。泯默至死休。　病を得て呻喚せず、泯默、死に至つて休す。
雷公告天公。百物須膏油。　雷公、天公に告ぐ、百物、須らく膏油なるべし、
自從兩鳥鳴。聒亂雷聲收。　兩鳥の鳴いてより、聒亂、雷聲收まる。
鬼神怕嘲詠。造化皆停留。　鬼神、嘲詠を怕れて、造化皆停留。
草木有微情。挑抉示九州。　草木、微情あるも、挑抉、九州に示す。
蟲鼠誠微物。不堪苦誅求。　蟲鼠誠に微物なるも、苦だ誅求するに堪へず。
不停兩鳥鳴。百物皆生愁。　兩鳥の鳴くを停めざれば、百物皆愁を生せむ。
不停兩鳥鳴。自此無春秋。　兩鳥の鳴くを停めざれば、これより春秋なからむ。
不停兩鳥鳴。日月難旋輈。　兩鳥の鳴くを停めざれば、日月輈を旋らし難し。
不停兩鳥鳴。大法失九疇(二)。　兩鳥の鳴くを停めざれば、大法、九疇を失はむ。
周公不爲公。孔丘不爲丘。　周公も公たらず、孔丘も丘たらず。
天公怪兩鳥。各捉一處囚。　天公、兩鳥を怪み、各一處に捉へて囚ふ。
百蟲與百鳥。然後鳴啾啾(三)。　百蟲と百鳥と、然る後、鳴いて啾啾たり。
兩鳥既別處。閉聲省愆尤。　兩鳥すでに處を別にし、聲を閉ぢて、愆尤を省る。

朝食千頭龍。暮食千頭牛。　朝に、千頭の龍を食ひ、暮に千頭の牛を食ふ。

朝飲河生塵。暮飲海絶流。　朝に飲めば、河に塵を生じ、暮に飲めば、海流を絶つ。

還當三千秋。更起鳴相酬。　還た三千秋に當つて、更に起つて、鳴いて相酬いむ。

【字解】【一】百舌　禮記に「反舌聲なし」とあつて、註に「百舌なり、その舌を反易して、能く百鳥の鳴に效ふ」とある。【二】九疇　書の洪範に見え、民を治める九つの方法。【三】啾啾　郭璞の三蒼解詁に「衆聲なり」とあり、樂府の隴西行に鳳皇鳴啾啾とある。

【餘義】蔣註に「蘇子瞻、李白畫像の詩を作り、化爲二鳥鳴相酬、一鳴一止六千秋の句あり。或は遂に謂ふ。この詩、李杜の爲に作ると、柳仲塗の此詩を解するに及びて、又云ふ、韓の心たる、夫の道を憂ふるなり、履行孔子に非ざるものは夷たり。故に言を垂れて、以て之を刺る、釋老ともに夷にして敎殊なり、故に雙鳥といふ、と。讀者倶に其說に相仍る。翺は以爲へらく、二說皆非なり、獨り朱子謂へらく、己と孟郊との爲に作る、その說、是に近し。城市に落つるものは己なり、巖幽に集まるものは郊なり、と。はじめ、疑なき能はず、葛氏の韻語陽秋を見るに及びて、亦た云ふ、これを信ず、と。然れども、その詞、淺陋にして倫ならず」とあつて、戯れに己と孟郊とを雙鳥に比して作つたといふことが定說となつて居るが、如何さま、さうだらうと思はれる。

【詩意】二つの鳥があつて、海外より飛んで來て、とうとう中國に到著した。その内の一つの鳥は、城市に住んで居り、他の一つの鳥は、山奥の巖の幽かなる處に住まつて居る。この鳥が、中國に來てからは、今日までは、殆んど三千秋といふ長い歲月を經て居るのであるけれども、相伴うて鳴いたことは無かつた。その間、二つの鳥は、天下の萬象に就いて言ひたいことが、幾らもあるが、その萬象を銜みしまま、久しく口を閉ぢて居た。處で春風が地を卷いて起り、百鳥が皆飛ぶ時節に成つたから、兩鳥も相逢ふことに成つて、非常に鳴き出した。それで、天下の耳のあるものは、皆この兩鳥に鳴かれて、耳を聾する樣になり、又口あるものは、自ら羞ぢて、能く言はぬやうに成つた。鳥の中でも、百舌は、その名の如く、平素から饒舌で、聲の多いものであるが、今この兩鳥に鳴かれてから、恆に頭を垂れ、急に病氣に成つて、喚ぶことも出來ず、とうとう默つて死んで仕舞つた。かうなつては、兩鳥の鳴聲は、容易ならぬことであるから、雷公が、天公卽ち造物主の處に往つて申すには、自分は、天上在つて鳴り閃き、萬物に膏澤を與へる役であるが、どうも、兩鳥が鳴き出してからは、それに聒亂せられて、折角の雷の聲などは通らぬやうに成り、隨つて、鬼神も兩鳥に嘲けられむことを恐れて、その威を振はぬやうになり、造化の仕事は一時全く停滯して仕舞ふ譯になる。又草木に少しばかりの情があつて、芽でも吐かうとすると、兩鳥が出て來て、その偃憎を抉り出して、先づ九州の人に示して仕舞ふから、草木は、十分に生長して行くことが出來ない。蟲鼠は、もとより微物であるが、兩鳥が之を殺し廻つて苛めるのは、まことに氣の毒である。いづれにしても、百鳥が鳴くことを止めない

と、百物は、之が爲に、愁を生ずる譯である。又雨鳥が鳴くことを止めないと、春と秋とは全く無くなつて仕舞ふ。又雨鳥が鳴くことを止めないと、天上の日も、月も、その運行を全うすることが出來ぬやうになるかも知れぬ。又雨鳥が鳴くことを止めないと、國家の大法は、九疇を失つて來るかも知れぬ。もし、この雨鳥をして、その鳴くに任かせて措いたならば、周公と雖も、公と稱して貴ばれることが出來ないかも知れぬ。孔子と雖も、丘と云はれて、聖人と仰がれることが出來ぬ樣になるかも知れぬ。この儘に打棄て置くことは、どうしても宜しくないと、雷公がいつた。そこで、天公は、雨鳥を怪んで、各〻別の處に囚にして仕舞つた。雨鳥は、俄に鳴くのを止めたものだから、世界の百蟲と百鳥とは喜んで、得意に啾啾として鳴くやうに成つた。雨鳥は、すでに別處に囚はれて、聲を閉ぢ、今まで相逢うて、うれし紛れに饒舌り過ぎたことが惡かつたと、流石に自分の愆尤をば省みつつある。しかし、この雨鳥は、尋常一樣の鳥で無いから、朝に千頭の龍を食ひ、暮に千頭の牛を食ふといふ樣に大食を爲し、それから、朝に水を飲むと、河が涸れて仕舞つて塵を生じ、暮に水を飲むと、海の流と雖も絶えて仕舞ふといふ位に水を飲む。その飲食すら、かくの如く、もとより、容易ではない、雨鳥は、今こそ、しばらく天公に囚はれて別別になつて居るが、この後、三千秋を經たならば、或は再び起つて、鳴いて相酬い、天下の百物をして、聲を收めしめる樣に成るかも知れぬ。

【餘論】朱竹垞は「雨鳥は、未だ指すところを定めずと雖も、謂うて釋老と爲す、猶ほ之に近し。若し、李杜及び己と孟と謂ふは、斷然非なり、何となれば、詆斥の意多くして、贊許の意少ければなり」といつたが、どうも贊成し兼ねる。その詆斥の意少きは、わざと、しらばくれて言つたので、反照的に其非凡なことを影寫したものである。但し、蔣之翹が「その詞、淺陋にして不倫」といつたのは、まことに的確である。

贈劉師服

劉師服に贈る

羨君齒牙牢且潔。
羨む、君が齒牙牢くして且つ潔、

大肉硬餅如刀截。
大肉硬餅刀もて截るが如し。

我今呀（一）豁落者多。
我、今、呀豁、落つるもの多く、

所存十餘皆兀（二）臲。
存するところは十餘、皆兀臲たり。

匙抄（三）爛飯穩送之。
匙は爛飯を抄ひて穩に之を送り、

合口軟嚼如牛呞（四）。
口を合せて軟嚼、牛の呞むが如し。

妻兒恐我生悵望。
妻兒、我が、悵望を生せむことを恐れ、

【字解】【一】呀豁　文選上林賦に、谽呀豁閜とある、齒に隙が出來る。【二】兀臲　書の秦誓に邦之杌隉とあつて、孔安國の註に「不安なり」とある、ぐらぐら動くこと。【三】抄爛飯　よく煮潰した粥をすくふ。【四】呞　爾雅に「牛には齝といふ」とあつて、郭璞の註に「これを食ふこと、すでに久しく、復た出して之を嚼むを齝といふ、呞と同じ」とある。噛み直す。【五】弊齒　方世擧は、「齒弊は、莊子、政を爲す齒弊たる

盤中不飣栗與梨。　盤中、栗と梨とを飣らず。
祇今年纔四十五、　祇今、年纔に四十五、
後日懸知漸莽鹵。　後日、懸に知る、漸く莽鹵なるを。
朱顏皓頸訝莫親。　朱顏皓頸、訝つて親むなし。
此外諸餘誰更數。　この外の諸餘、誰か更に數へむ。
憶昔太公仕進初。　憶ふ昔、太公仕進の初、
口含兩齒無贏餘。　口に兩齒を含んで、贏餘なし。
虞翻十三比豈少。　虞翻十三、比するに豈に少からむや。
逐自惋恨形於書。　逐に自ら惋恨、書に形はす。
丈夫命存百無害。　丈夫、命存して百害なし、
誰能點檢形骸外。　誰か能く點檢せむ、形骸の外。
巨緡東釣儻可期。　巨緡東に釣る、儻し期すべくむば、
與子共飽鯨魚膾。　子と共に鯨魚の膾に飽かむ。

勿れ」に本づく。然れども、唐人多く之を倒用す。柳子厚、沈𩰞莽鹵、又食貧甘莽鹵。白樂天、養生仍莽鹵、始覺皆莽鹵、莽鹵、用ふるところ同じきなり」といつて居る。ここでは、老衰の義に用ひて居る。【六】太公　太公望が七十餘歲になつて、初めて文王に事へ、その時、齒が唯つた二枚しか無かつたといふこと、古本荀子に見ゆ。【七】虞翻十三比豈少　比は或は此に作つてあるといふが、その方が善い。方世擧の說に「虞翻、吳志に、只だ其上書を載す、謂ふ、臣、年耳順、髮白く、齒落つ、豈に當時に在つて猶ほ考ふべきあるか」とあるが、顧嗣立は「按ずるに、三國志、虞翻、少にして學を好み、高氣あり、年十二、客に其兄を候するものあり、翻を過ぎず、翻、追うて書

を與へて曰く、僕聞く、虎魄は塵芥を取らず、磁石は曲鍼を受けず、過ぎて存せず、亦た宜ならずやと。客、書を得て之を奇とし、これに由つて稱語せらる。吳書に出づ。公の詩、これを用ふ、嵇娜、祇だ髮白齒落の語を引いて、此に及ばず、豈に未だ之を見ざるか」といつて居て、今これに從ふことにする。【八】形骸外　莊子の德充符に「申徒嘉、鄭子產に謂つて曰く、今、子、我と形骸の内に遊ぶ、而して、子、我を形骸の外に求む、亦た過たずや」とある。【九】巨緡東釣　莊子の外物に「任公子、大鉤を爲り、巨緇五十犗以て餌と爲し、會稽に蹲し、竿を東海に投じ、旦旦にして釣る。朞年、魚を得ず。すでにして、大魚、これを食ふ、任公子、若魚を得たり、離して之を腊し、淛河より以東、蒼梧以北、若魚に饜かざるはなきなり」とある。【10】鯨魚膾　異物志に「鯨魚、長きものは數十里、小なる者は數十丈」とあつて、東坡の詩に「嘗識韓子隘且陋、一飽鯨魚何足膾」とあるは、卽ち、此事を指斥したのである。

【題義】 劉師服は、いづれ韓愈の門人であらうが、その傳記等は、不明である。この詩は、劉師服に示したので、しきりと齒の惡くなつたことを言つて居るから、前の齒落の詩と併せ見るべきである。

【詩意】 君の齒は、羨ましい程、しつかりして居て、且つ綺麗である。大きな肉でも、硬い餅でも、一たび嚙むと、刀で切つた樣に、さくさくと容易に食へる。我輩は、之と異にして、齒に隙が出來、その齒も段段と落ちて仕舞ひ、殘つて居るのは、上下わづかに、十數枚、皆ぐらぐらと動いて居る。そこで、匙で煮潰した粥を掬つて、そつと入れるが、口を合せて、もがもがと軟嚼し、齒に觸れぬやうに嚙み、丁度、牛が嚙み直す樣な安排である。妻や子供は、わが怨めし氣に見むことを恐れて、盤中に栗や梨を盛らぬ樣にして居る。我輩は、今やつと四十五歲、すでに此の如き上は、後日、次第に老衰することは、分かり切つて居る。朱顏皓頸の美人には、兎角訝られて、親むことが出來ず、その外

の事どもに就いては、自身で覺悟をして居るから、誰か更に數へむや。むかし、太公望が初めて文王に事へた時、口中の齒は唯つた二枚しかなかつた。さうかと思ふと、虞翻は、十三歳の時から、聲名を世に知られ、ある人が兄を訪うて、自分の處へ來ぬは、如何なる故かといつて、怨恨の言葉を手紙に書き列ねた。かくの如く、人によつて榮達に老少の差あることは勿論であるが、丈夫は、命さへあれば、それで十分である。君の齒は立派、我輩の齒は落ちたといつて、形骸に就いて論ずるのは、愚の極で、宜しく、形骸の外を檢點すべきである。むかし、任公子は、恐ろしく大きな釣針で、東海に大魚を釣り上げたといふ話があるが、もし出來るならば、我輩も、此から、君と共に東海に行つて、鯨魚を釣り、その膾に飽きたいと思ふ。

【餘論】 結二句は、前の贈侯喜の詩に大魚豈肯居沮洳といへるのと同じ意味合で、均しく、おのが弟子である處から、劉師服を激勵したのである。朱竹垞は、この篇を評して「亦た慢興に渉る」といつた。

題炭谷湫祠堂

炭谷湫の祠堂に題す

萬生都陽明。幽暗鬼所(一)寰。
萬生、陽明に都し、幽暗は鬼の寰するところ。

嗟龍獨何智。出入人鬼間。
嗟、龍、獨り何ぞ智にして、人鬼の間に出入する。

不知誰爲助。若執造化關。
知らず、誰か助くることを爲す、造化の關を執るが若し。

厭處平地水。巢居(二)插天山。
平地の水に處ることを厭うて、巢居す天に插むの山。

列峰若攢指。石盂(三)仰環環(四)。
列峰、指を攢むるが若く、石盂、仰げば環環たり。

巨靈高其捧。保此一掬慳。
巨靈、高く其れ捧げ、この一掬の慳を保つ。

森(五)沈固含蓄。本以儲陰姦(六)。
森沈、固より含蓄、本と以て陰姦を儲ふ。

魚鼈蒙擁護。羣嬉傲天頑。
魚鼈、擁護を蒙り、羣嬉して、天頑に傲る。

翾翾棲託禽。飛飛一何閒。
翾翾たり棲託の禽、飛飛、一に何ぞ閒なる。

祠堂像侔眞。擢玉紆煙鬟。
祠堂、像、眞に侔し、玉を擢げて、煙鬟を紆ふ。

羣怪儼伺候。恩威在其顏。
羣怪、儼として伺候し、恩威その顏に在り。

我來日正中。悚惕思先還。
我來つて、日、正に中す、悚惕先づ還らむことを思ふ。

寄立尺寸地。敢言來途艱。
寄立す尺寸の地、敢て來途の艱を言はむや。

吁無吹(七)毛刃。血此牛蹄(八)殷。
吁、吹毛の刃の、此牛蹄に血ぬつて殷くするなし。

至令乘水旱。鼓舞寡與鰥。 水旱に乘じて、寡と鰥とを鼓舞せしむるに至る。

林叢鎭冥冥。窮年無由刪。 林叢、鎭へに冥冥たり、年を窮めて、刪るに由なし。

妍英雜豔實。星瑣(九)黃朱班。 妍英、豔實を雜ふ、星瑣、黃朱班る。

石級皆險滑。顚躋莫牽攀。 石級、皆險滑、顚躋、牽攀するなし。

龍區雛衆碎(一〇)。付與宿已頒(一一)。 龍區、雛衆碎なり、付與、宿、已に頒なり。

棄去可奈何。吾其死茅菅。 棄て去つて奈何すべき、吾、其れ茅菅に死せむ。

【字解】【一】所寰 居るところ。【二】巢居揜天山 湫は元と平地に在つたが、一日風雷の爲に南山の上に移つたといふので、その事は、龍移の詩の條に述べて置いた。【三】石盂 石臼。【四】瓌瓌 古樂府に「四角龍子幡、瓌瓌當江柱」とある。【五】森沈 鮑照の詩に銅溪晝森沈とある。【六】陰姦 龍を指す、南山の詩に「凝湛閟陰獸」といふと同じ。【七】吹毛刃 杜甫の詩に「匣裏雌雄劍、吹毛任選將」とあり、又騎突劍吹毛とある。晉季鈫は、吳越春秋に、千將の劍、能く吹毛遊塵を決すとあると云つて居るが、今の吳越春秋には、この語がない。【八】牛蹄殷 淮南子に「牛蹄の涔、尺の鯉なし」とある、殷は赤黑色。その意は「我豈に吹毛の劍の、この牛蹄の涔の水へんして殷ならしむるなからむや」といふので、卽ち龍を殺すといふこと。【九】星瑣 祠堂の格子の屬。【一〇】碎 零碎、細かいこと。【一一】頒 大なること。

【題義】原註に「時に、公、京師に在り」とあつて、これは、長安に居た時の作である。歐陽修は、「京兆の南、終南の下に在り、雨を祈る所なり、南山、秋懷の詩、皆これを見る」といひ、陸長源の辨疑志に「長安城南四十里、靈母谷あり、俗呼んで炭谷となす」といひ、宋敏求の長安志に「炭谷は、萬年縣南六十里に在り」といひ、又「澄源夫人の湫廟は、終南山の炭谷に在り、公の南山の詩に云ふあり、因緣窺其湫」と。卽ち此湫は龍の居るところなり」とある。炭谷湫の澄源夫人の廟に祈ると、いつでも、雨が降ると傳へられて居るが、韓愈は、元來、神佛を信仰せぬ處から、龍女などを祀るのは、甚だ宜しくないといふので、この詩を作り、龍女の靈といつても、實は妖怪であらう、さういふものを活かして置くべきではないといふ一段の議論を試みたのである。

【詩意】萬種の生物は、皆太陽の光の輝く方に向つて居るが、鬼のみは、幽暗の處に住んで居る。龍湫の龍は、不思議な智慧を持つて居ると見えて、山の頂上の明るい處の片隅の沼に陣取り、つまり、人界と鬼界との間に出入して居る譯である。さて此龍を誰が補助するか知らぬが、丸で造化の關門を手に執つて居るやうなものである。この龍は、平地に住むことを厭うて、天に挿む樣な終南山の絕頂に巢居し、その炭谷の左右には、羣峰指を集めたるが如く、その間に、沼は、石臼の如く、環環として圓く、上を仰いで居る。その石臼の中の水は、巨靈が高く捧げて、態態盛つたので、さも惜しい樣に一掬の水を玆に保つて居るのは、如何にも、不思議である。その水は、森沈として深く靑く、いかさま龍を住まして居ると見える。魚鼈も、龍の御蔭で、誰にも捕へられることなく、羣游して、如何なる物をも恐れず、自由自在に跋扈し、沼の周圍なる一帶の樹林に棲む鳥も、翾翾と飛び廻つて、さも長

閑に見える、祠堂なる龍女の像は、生けるが如く、煙とまがふ髻には、寶玉を飾とし、その前後左右には様様の羣怪が儼として伺候し、恩威兩つながら一に龍女の顔色に在る譯で、いづれも恐れ入つて居る。予が此に來たのは、眞晝の時分であつたが、身の毛が堅つ樣であつて、直に引き返さうとした。それは、祠堂に接する尺寸の地に自分が立つて居て、格別、道が困難で、内に這入れないといふ譯ではないが、あはれ、吹毛の利劍あらば、龍を引き摺り出して、斬り殺し、この牛蹄の水溜りのやうな沼の水を眞赤にするのだが、さう出來ぬのは殘念至極。おもへば、洪水旱魃の際など、地方の寡婦鰥夫どもが、雨乞の爲に此に來て、鼓を鳴らしたり、踊つたりして、その間には、風俗を紊亂する樣な事もあるが、これを懲罰することの無いのは、如何にも腹立しい譯で、自分は、覺えず、身震ひをして、引き返さうとしたのである。祠堂の近傍は、樹木が生ひ茂つて、長しへに冥冥として居る。おまけに、何人も斧を入れて、之を伐ることがないから、美しい花が豔質を交へ、祠堂の格子窓の扉の處に、黄や赤の花が矢鱈に點綴して居る。そこに通ずる石段には、苔が蒸して居て、足が滑るから、つるつると轉げ落ちる虞がある。この樣な厖雜なる區域に、鳥の小さな雛などが澤山居て、一たび其處に放たれると、わづか一宿して、大きな物となる。かういふ譯で、愚民どもが渇仰して、神靈の場所と信じて居るのは、どうも、致方の無い話。これを警醒する爲に、龍を亡ぼさうとすれば、吾は菅茅の間に死なねばならぬ、しかし、さうまでにする必要もないから、棄て去つて、そこに立ち寄るまいと思つたのである。

【餘論】胡渭は「公、南山を詠じて云ふ、拘官計二日月一、欲レ進不レ可レ又、因緣窺二其湫一、凝湛閟二陰冥一」と。これ四門博士の時の事なり。時天晦大雪、涙目苦矇瞀、これ陽山に赴かむとして藍關を過ぐる時の事なり。昨來逢二清霽一、宿願忻二始副一、これ江陵より入つて、藍田に至る時の事なり。炭谷湫に題するの詩は、蓋し貞元十九年、京師旱し、雨を湫祠に祈り、公往いて觀る、故に曰く、因緣窺二其湫一と。因緣とは、事を以て行くを謂ふ、特に遊ぶに非ざるなり。篇中僥く諷刺あり。時に、德宗の幸臣李齊運・李實・韋執誼等、王叔文と交通し、政を亂すこと滋す甚し、故に、公、見るところに因つて、以て興を起す。湫龍澄源は幸臣に喩へ、魚鼈禽鳥及び羣怪は黨人に喩ふるなり。秋懷は、寒蛟を習せむと欲す。而して、この詩は、この牛蹄を血にせざるを恨む。剛腸疾惡、情、辭に見はる。劉柳、言を洩らし、羣小目を側つ、陽山の謫、自つて來るところあり、上疏と云はむや」といひ、何義門は「この詩は、全く是れ託諷、造語亦た奇警」といひ、乾隆御批には「感詩託諷、覺えず、義、色に形はる。秋懷、すでに其端を發す、これ更に淋漓致を盡す。按ずるに、唐書王叔文傳、順宗政を聽く能はず、深居幄を施して坐し、牛昭容・宦人李忠言を以て側に侍せしめ、羣臣、事を奏するや、帷中より其奏を可とす、大抵、叔文は伾に因り、伾は忠言に因り、忠言は昭容に因り、更る相依仗す。又王伾傳、叔文は入つて翰林に止まり、而して、伾は柿林院に至り、牛昭容等を見る、この詩、擢レ玉紆二

煩襟云云、蓋し澄源を借りて、以て昭容に喩ふるなり」とある。

聽穎師彈琴

穎師の琴を彈ずるを聽く

昵昵兒女語。恩怨相爾汝。　昵昵として、兒女語り、恩怨、相爾汝す。

劃然變軒昂。勇士赴敵場。　劃然として、軒昂に變じ、勇士、敵場に赴く。

浮雲柳絮無根蔕。　浮雲柳絮、根蔕なく、

天地闊遠隨飛揚。　天地闊遠にして、飛揚に隨ふ。

喧啾百鳥羣。忽見孤鳳凰。　喧啾たる百鳥の羣、忽ち見る孤鳳凰。

躋攀分寸不可上。　躋攀、分寸上るべからず、

失勢一落千丈強。(一)　勢を失つて、一たび落つ千丈強。

嗟余有兩耳。未省聽絲篁。　嗟、余、兩耳あれども、未だ絲篁を聽くことを省せず。

自聞穎師彈。起坐在一旁。　穎師の彈を聞きしより、起坐、一旁に在り。

推手遽止之。濕衣淚滂滂。　手を推して遽に之を止む、衣を濕して淚滂滂たり。

穎乎爾誠能。　穎や、爾、誠に能くす、

無以冰炭置我腸。(二)　冰炭を以て、我が腸に置くこと無かれ。

【字解】【一】千丈強　强は餘といふに同じ。【二】冰炭置我腸　莊子の郭象註に「喜懼、胸中に戰ひ、固より已に氷炭を五臟に結ぶ」とある。

【題義】これは、穎師といふ名人の琴を彈ずるを聽いて作つたのである。李賀の集にも、亦た、同題の詩があつて、竺僧前立當吾前、梵宮眞相眉稜尊、とあるを見れば、この人は、天竺渡來の胡僧と見える。

【詩意】最初は極めて低い調子の微かな響で、兒女輩が語り合つて、互に爾汝と稱し、こせこせした恩怨の事を話して居るやうである。劃然として、それが強い調子に變ると、勇士が敵場に赴くやうな勢であるし、その聲の散漫たるは、浮雲が柳絮に隨ひ、少しも根がなくして、風に吹き廻されて、天地の闊遠たる間を勝手に飛び廻るやうである。又しばらくすると、喧啾たる百鳥の羣が、がやがや鳴いて居る中に、一羽の鳳凰が、極めて高い聲を揚げるやうである。それから、愈よ高い調子に成つて、殆んど琴の絲が切れるかと思ふまでに上つて、もう分寸といふ處まで來ると、俄然、千丈あまりもある山の上から大きな石を轉ばした樣な勢で、ずつと低い音に落して仕舞つた。我輩は、二つの耳あ

れども、未だ絲竹を聞き分けることが出來なかつたが、今、穎師の彈琴を聽いて、その傍に起坐し、手を推して、遽に之を止めむとした位、ひどく心に感じ、衣を濕すまで、涙の滂滂たるを禁じ得なかつた。穎師よ、師の琴は、誠に上手で、能く人の心を移し、或は喜ばしめ、或は僵れしめ、さながら、互に相反する氷炭を以て、我が腸の中に入れた樣な心持がする。

【餘論】西淸詩話に「六一居士、かつて、東坡に琴の詩孰れが優れるかを問ふ。坡、答ふるに、退之の聽穎師琴を以てす。公、曰く、これ祇だ是れ琵琶のみ、と。吳僧義海、琴を以て世に名あり。或は六一の語を以て海に問ふ。海曰く、歐陽公は一代の英偉、然れども、斯語誤れり、昵昵兒女語、恩怨相爾汝、言ふは、輕柔細屑、眞情出て見はるるなり。劃然變軒昂、勇士赴敵場、精神該聳、觀聽に餘るなり。浮雲柳絮無根蔕、天地闊遠隨飛揚、縱橫變態、浩乎として自然を失はざるなり。喧啾百鳥羣、忽見孤鳳凰、又穎が孤絕、流俗下俚の聲に同じからざるを見るなり。躋攀分寸不可上、失勢一落千丈强、起伏抑揚、故常を主とせざるなり。皆指下絲聲の妙處、惟だ琴を然りと爲す。琵琶格上の聲、烏んぞ能く爾からむや。退之、深く其趣を得たり、未だ譏評し易からざるなり」といひ、許彥周詩話に「退之の聽穎師彈琴の詩に云ふ、浮雲柳絮無根蔕、天地闊遠隨飛揚、これ泛聲なり、輕きは絲に非ず、重きは木に非ざるを謂ふなり。喧啾百鳥羣、忽見孤鳳凰、泛聲中、寄指の聲なり。躋攀分寸不可上、吟繹の聲なり。失勢一落千丈强、順下の聲なり。琴を善くするもの云ふ、この數聲、最も工なり難し、と。文忠公、東坡と此詩を論じ、琵琶を聽くの詩と作せし後、後生例に隨つて云云す、故に之を論じて、少しく、退之の爲に寃を雪ぐ」といひ、朱竹垞は「琴聲の妙を寫して古今の絕唱といふべし。六一、琴を善くするに、乃ち指して琵琶と爲す、竊に未だ解せざるところ」といひ、又「純ら是れ唐詩、亦た何ぞ杜に讓らむや」といひ、乾隆御批には「琴聲の妙を寫し、實に髓を得たり髓に入る、又一一皆實境、繁休伯は車子を稱し、柳子厚は箏師を誌す、皆及ぶ能はず。古今の絕唱と爲す。繁休伯は車子を稱し、柳子厚は箏師を誌す、皆及ぶ能はず、永叔、琴を善くす、乃ち此を用ひて譏議を爲すか。躋攀の二語、千古の詩文の妙訣と」あるが、これは、朱竹垞の受賣に外ならぬものである。

送陸暢歸江南

陸暢の江南に歸るを送る

(一)擧擧江南子。名以能(二)詩聞。
擧擧たり江南の子、名は詩を能くするを以て聞こゆ

一來取(三)高第。官佐(四)東宮軍。
一たび來つて、高第を取り、官は東宮の軍に佐たり。

迎(五)婦丞(六)相府。誇(七)映秀士羣。
婦を丞相の府に迎へて、秀士の羣に誇映す。

鸞鳴桂樹間。觀者何繽紛。
鸞は鳴く桂樹の間、觀る者、何ぞ繽紛たる。

人事喜顚倒。旦夕異所云。　人事、喜んで顚倒、旦夕、云ふところを異にす。

蕭蕭青雲幹。遂逐荆棘焚。　蕭蕭たり青雲の幹、遂に荆棘を逐うて焚かる。

歲晚鴻鴈過。鄉思見新文。　歲晚れて鴻鴈過ぐ、鄉思、新文を見る。

踐此秦關雪。家彼吳洲雲。　この秦關の雪を踐んで、彼の吳洲の雲に家す。

悲啼上車女。骨肉不可分。　悲啼、車に上るの女、骨肉、分かるべからず。

（八）感慨都門別。丈夫酒方醺。　感慨、都門に別る、丈夫、酒方に醺す。

我實門下士。力薄蚋與蚊。　我、實に門下の士、力は蚋と蚊とより薄し。

受恩不卽報。永負湘中墳。（九）　恩を受けて、卽ち報せず、永く湘中の墳に負く。

【字解】【一】擧擧　方世擧の解に「唐人、擧止端麗なるを以て擧擧と爲す」とある。【二】能詩　樊汝霖の解に「暢、貢擧の年、對雪の落句に云ふ、天人事底巧、翦水作花飛。山齋玩月に云ふ。起來自擘書窗破、恰漏淸光落枕前。經崔諫議林亭に云ふ、蟬噪入雲樹、風開無主花と。闈省に登るに及び、雲陽公主の下降するに遇ひ、暢、儐相たり、詠簾、詠行障、催妝等の作あり、內人、暢が吳音才思敏捷なるを以て、詩を以て之を嘲る。暢、酬いて曰く、粉面仙郎選聖朝、偶逢秦女學吹簫、須敎翡翠聞王母、不奈烏鳶噪鵲橋と。これを觀て、その詩を能くするを見るべし」とある。【三】取高第　元和元年進士となりしことをいふ。【四】佐東宮軍　蔣註に「暢、進士に擧げられ、皇太子の僚屬となる」とある。【五】迎婦　董晉の孫女を娶りしをいふ。【六】丞相府　丞相府は屋敷。【七】誇映秀士羣　禮記の王制に「鄕に命じ、秀士を論じ、之を司徒に升せて選士といふ」とある。唐書に「董晉、字は混成、河中虞鄕の人、明經に擢んでらる。貞元五年、門下侍郎を以て同中書門下平章事たり。九年、詔に詔して、宣武節度觀使知節度事と爲す、軍に在ること五年にして卒す。子溪、字は惟深、亦た明經に擢んでられ、東道行營糧料使となる。軍貨を盜むに坐して、封州に流され、長沙に至つて死を賜ふ」とある、又古今詩話に「陸暢、董溪の女を娶る、每旦、婢、澡豆を進む、暢、輒ち水を沃いで之を服す。或は曰く、君は貴門の女壻たり、幾多の樂事。暢曰く、貴門、禮法に苦む、婢子、辣麩を食はしめ、殆んど過ぐべからず」とある。【八】感慨　漢書顏師古の註に「意氣に感じて、節槪を立つるなり」とある。【九】湘中墳　韓愈の撰せる董溪の墓志に「溪、除名し、徙されて湘中に死す。明年皇太子を立つ、赦令あり、歸葬を許す。元和八年、河南に葬る」とあつて、はじめは長沙に其墓があつたのである。

【題義】古今詩話に「陸暢、字は達夫、吳郡の人、韋皐の雅に厚禮するところ。李白、蜀道難を爲り、以て嚴武を斥く、暢、更に蜀道易を爲り、以て皐を美す」とある。李白の蜀道難を以て、嚴武を斥したといふのは、もとより誤であるが、その他は宜しい。又蔣註に「暢、字は達夫、かつて、蜀道易の詩を著す、元和元年の進士、盩厔尉となり、侍御に遷る、董溪の壻なり。溪は、丞相董晉の第二子、湘中に貶死す。事は、墓誌に見ゆ。公、かつて董晉の幕に佐たり」とある。すると、陸暢は、韓愈が曩に世話になつた董晉の孫壻に當る譯で、董晉の死後、董溪は罪を得て、遠い南方の瀟湘地方に流されて、遂に其處で死んだ。その頃、陸暢も、都に在つて志を得ざるに因り、その跡を弔ふ爲に、はるかに其地に赴いたので、韓愈は、乃ち之を送る爲に、この詩を作つたのである。

【詩意】陸暢は、江南の出であつて、頗る風采の揚がつた一表の人物、又詩が上手だといふので、有

名であつた。かくて、一たび上京すると、直に及第し、初めに皇太子の僚官となり、宰相に見込まれて、その孫娘を娶り、現に秀才の羣中に於て、誇らしげに輝映して居たので、たとへば、鸞鳳が桂樹の間に鳴くが如く、觀る者、繽紛として、頻りに之を褒めたたへて居た。然るに、人間の事は、ともすれば顚倒したがるもので、評判は朝夕に殊にして、もとより定準なく、蕭蕭として靑雲にも屆きさうな大木の幹が、遂に荊棘を逐うて一緒に焚かれるといふ運命に立ち至つたのは、是非もなき次第である。歲の暮に、雁が書信を傳へ、その新しい手紙を見たるに因つて、故鄕の思を動かして、愈よ歸ることに決心し、この秦關の雪を踐んで都を出て、江南なる吳地の雲に家することとなつた。かくの如き流落に際し、女子どもは、悲啼して車に上り、親戚の者は、別れ難い別をして、如何にも憐れに見えるが、男子は、流石に、意氣節槪を以て相許し、一杯の酒を以て、この行を送るのである。我輩の如きも、故丞相の門下に居て、長らく御世話に成つたものであるが、本來、勢力微弱にして、蚋蚊の如き蟲より薄い處から、斡旋して、かういふ破目にならぬ樣に致すことも出來ず、當年の洪恩に報ゆるに及ばずして、長く湘中の墳墓に負くのは、まことに申譯の無い次第である。

【餘論】朱竹垞は「未だ手段を見ず」といつて、例の如くけなし、悲啼上車女を評して「この二句佳」といつた。

送進士劉師服東歸

進士劉師服の東に歸るを送る

(一)猛虎落檻穽。坐食如孤豘。　猛虎、檻穽に落つれば、坐食、孤豘の如し。

丈夫在富貴。豈必守一門。　丈夫、富貴に在り、豈に必ずしも一門を守らむや。

公心有勇氣。公口有直言。　公の心、勇氣あり、公の口、直言あり。

奈何任埋沒。不自求騰軒。　奈何ぞ、埋沒に任かせて、自ら騰軒を求めず。

僕本亦進士。頗嘗究根源。　僕、本と亦た進士、頗る嘗て根源を究む。

(二)由來骨鯁材。喜被軟弱呑。　由來、骨鯁の材、喜んで軟弱に呑まる。

低頭受侮笑。隱忍硉(三)兀冤。　低頭、侮笑を受け、隱忍す硉兀の冤。

泥雨城東路。夏槐作雲屯。　泥雨、城東の路、夏槐、雲屯を作す。

還家雖闕(四)短。指日親晨(五)飧。　家に還つて、闕短と雖も、日を指して、晨飧を親らせむ。

攜持令名歸。自足貽家(六)尊。　令名を攜持して歸り、自ら家尊に貽るに足る。

時節不可翫。親交可攀援。　時節、翫ぶべからず、親交、攀援すべし。

勉來取金(七)紫。勿久休中園。　勉め來つて、金紫を取る、久しく、中園に休むこと勿れ。

【字解】【一】猛虎落檻穽　この二句に就いて、蔣註には「これ太史公、猛虎、檻穽の中に在り、尾を搖つて食を求むるの語を用ふるなり。故に、朱子云ふ、坐は當に求に作るべしと。然れども、麹、按ずるに、坐の字、亦た通ず、語は史を用ふと雖も、しかも亦た其意を變す、坐食、言ふは外に求めずして、止だ有限の食を食ふなり」とある。【二】由來骨鯁材　蔣註には「二句、絕だ劉越石の晉爲二百鍊剛一、化作二繞指柔一に類す、悲しいかな、その之を言ふや」とある。【三】硉兀　不平の貌。【四】鬭䍴　粗末にして物足らぬこと。【五】親交　文選東晳の補亡の詩に馨二爾夕膳一、潔二爾晨飧一とある。【六】家尊　父をいふ、晉書王獻之傳に「謝安問うて曰く、君が書、君の家尊に何如」とある。【七】金紫　金は印、紫は綬色、大官の服裝。

【題義】劉師服は、前にも見え、韓愈の門人で、折角及第して進士になつたが、官途に就くことが出來ずして故鄕に歸るに因り、韓愈は、これを送る爲に、この詩を作つたので、蔣註には「元和十年の夏、京師に在つて作る」とある。

【詩意】猛虎でも檻や穽の中に、落ちると、坐食して、人の與れる丈の餌に甘んじ、丸で小さな豚と同じである。丈夫の目的は、富貴に在つて、これを求める爲には、一門に限らず、多くの豪貴の處に出入して賴み込まねばならぬ。ここに、劉師服は、勇氣に富み、辯舌も爽かで、天晴な人物であるのに、その儘、埋沒に任かせて、自ら飛び上ることを求めないのは、實に意外である。僕も亦た嘗て進士であつて、君と同じ境遇を經たから、これに就いては、根源を究めて、よく知つて居る。元來、硬すぎる氣骨を持つて居るものは、却つて、軟弱な者どもに呑まれて仕舞ふので、頭を低れて、人の侮笑を受け、胸中には限なき不平の恨があつても、之を我慢せねばならぬ。君も、つまり、軟弱の者に呑まれた譯である。今しも、城東の路は、雨の爲にぬかるみとなり、夏の槐は、枝葉繁茂して雲の如く見える。君が家に還るに就いて、格別みやげもなく、甚だ粗末で、物足らぬ次第であるが、唯だ日を期して、親の膝元の朝御膳に侍するのは、喜ばしいことである。まして、進士に及第したといふ令名を攜へて、家に還るのであるから、父君を慰めることも出來やう。しかし、時節は、甑ぶことは出來ず、遠慮なく過ぎ去るものであるし、君の親交者も幾らもあらうから、それに攀援すれば、一身を賴むことも出來る。されば、再び勉めて、天晴、金紫を取るが善いので、久しく故鄕に歸休して居らぬ方が宜しからうと思ふ。

【餘論】言ひ草は、一應無難であるが、詩としては、格別の名句もない。そこで、朱竹垞は「立意猶ほ好し、恨むらくは、鍊法未だ盡さず」といつた。

嘲魯連子

魯連子を嘲る

魯連細而黠。有似黃鷂子。　魯連、細にして黠、黃鷂の子に似たるあり。

(二)田巴兀老蒼。憐汝矜爪嘴。　田巴は兀として老蒼、憐む汝が爪嘴を矜るを。

(三)開端要(四)驚人。雄跨吾厭矣。　端を開いて、人を驚かさむことを要す、雄跨、吾、厭きぬ。

高拱禪鴻聲。若輟一盃水。　高拱して、鴻聲を禪る、一盃の水を輟つるが若し。

獨稱唐虞賢。顧未知之耳。　獨り唐虞の賢を稱す、顧るに、未だ之を知らざるのみ。

【字解】【一】黄鸝子　くま鷹の類。【二】田巴　魯連子に「齊の辯士田巴、徂邱を服し、稷下に議し、五帝を毀り、三王を罪し、五霸を服す、一日千人を服す。徐劫といふものあり、その弟子を魯仲連といふ、年十二、千里の駒と號す。往いて、田巴に請ふ云云。巴、徐劫に謂つて曰く、先生は乃ち飛兎なり、豈に直に千里の駒のみならむや、巴、終身談ぜず」とある。【三】鳴人　史記滑稽傳に「この鳥、鳴かざれば巳む、一たび鳴かば、人を驚かさむ」とある。【四】開端　漢書淮陽王傳に「すでに端緒を開く、願はくは、卒に之を成さむ」とある。

【題義】蔣註に「魯仲連は齊人、奇偉俶儻の畫策を好んで、仕宦して職に任ずることを肯んせず、好んで高節を持す。太史公、亦た取るあり。公、これを嘲るの意。その安くに在るかを悉くさず。意ふに、必ず當時に諷するところあらむ、後世、得て窺はざるものあり」といつて居る。おもふに當時、韓愈と名を爭ふものがあり、それが非常の辯舌家で、平生韓愈を嘲つて居た處から、韓愈は、之を古しへの魯仲連に比して、却つて、之を嘲つたのであらう。方世擧の說に、韓愈が京兆尹たりし時、李紳と少しく名を爭つた。この李紳は、身の丈が低くて、短李とさへ稱せられた位。この詩、破題に魯連細而黠とあるのは、卽ち此意であるといつて居るが、或は、さうかも知れない。

【詩意】魯仲連は、極めて小さい男で、しかも、狡猾であつて、くま鷹に能く似て居る。その頃、田巴といふものがあつたが、一たび、魯仲連に說破された後は、兀然として老耆の姿を爲しながら、氣の毒にも、すつかり魯仲連の爪や嘴の鋭いのに恐れ入つて仕舞つた。しかし、魯仲連が、口さへ開けば、大きな事を言つて、人を驚かさむと力め、人を說き伏せて、獨りで偉らがるといふ其態度が、我輩は甚だ氣に食はぬ。若し夫れ、高く手を拱いて、大なる名譽を惜し氣もなく人に讓り、さながら、手にせる一盃の水を棄てると同じ樣な心持で居るのは、堯舜の賢なるところであるが、かういふ賢人の心は、決して、魯仲連などには分からないのであらう。

贈張籍　張籍に贈る

吾老著(一)讀書。餘事不掛眼。　吾、老いて書を讀むに著く、餘事、眼に掛けず。

有兒雖甚憐。教示不免簡(二)。　兒に有りて、甚だ憐むと雖も、教示、簡を免れず。

君來好呼出。踉蹡越(三)門限。　君來つて、好し呼び出で、踉蹡として、門限を越ゆ。

懼其無所知。見則先愧赧。　その知るところなきを懼れて、見ては則ち先づ愧赧。

昨因有緣事。上馬挿(四)手版。　昨、緣事あるに因り、馬に上つて手版を挿む。

留君住廳(五)食。使立侍盤餞。　君を留めて、住つて廳食せしめ、立つて盤餞に侍せしむ。

薄暮歸見君。迎我笑而莞。
指渠相賀言。此是萬金產。
吾愛其風骨。粹美無可揀。
試將詩義授。如(六)以肉貫弗。
開(七)袪露毫末。自得高蹇(八)嵼。
我身蹈丘軻(九)。爵位不(一〇)早綰。
固宜長有人。文章紹編(一一)劃。
感荷君子德。怳若乘朽(一二)棧。
召令吐所記。解摘了瑟(一三)僩。
顧視窗壁間。親戚競覘(一四)瞀。
喜氣排寒冬。逼耳鳴睍(一五)睆。
如今更誰恨。便可耕灞(一六)滻。

薄暮、歸つて君を見れば、我を迎へて、笑うて莞たり。
渠を指して相賀して言ふ、此は是れ萬金の產。
吾、その風骨を愛す、粹美にして揀ぶべきなし。
試みに詩義を將て授くれば、肉を以て弗に貫くが如し。
開袪して、毫末を露はせば、自得して、高く蹇嵼。
我が身、丘軻を蹈む、爵位早く綰はされず。
固より宜しく、長く人あつて、文章、編劃を紹ぐべし。
君子の德に感荷して、怳として、朽棧に乘ずるが若し。
召して、記するところを吐かしむれば、解摘、瑟僩を了す。
顧みて、窗壁の間を視れば、親戚、競うて覘瞀。
喜氣、寒冬を排し、耳に逼つて、鳴いて睍睆たり。
如今更に誰をか恨まむ、便ち灞滻に耕すべし。

【字解】【一】著讀書 著、一に嗜に作る。但し、蔣註に「著は高士著二閑禪一、少年著二遊宴一の著の如し」とある。【二】倚 お

ろそか。【三】 鵠門限 數居の處に來た。【四】 手版 即ち笏、隋書禮儀志に「百官、朝服公服、皆、手版を執る」とあり、唐輿服志に「古しへは、貴賤皆笏を執り、君上の吹令を書し、事あらば之を腰帶中に搢む。後代は、唯だ八座の尙書、笏を執り、筆を以て手版の頭を綴り、紫囊、これを裹み、餘は但だ手版を執つて筆を執らず、記事の官に非ざるを示すなり」とある。【五】 廳食 庶數で飯を食ふ。【六】 以肉貫弗 弗は串、王伯大の解に「弗は肉を炙るときの串なり。言ふは、公の見子、籍に侍し、籍、見に詩義を授け、條貫あるなり」とある。【七】 開袪 袪も開く。【八】 蹇嵼 山の險しきを云ふ、東方朔の七諫に望二高山之蹇産一とある。【九】 丘軻 孔孟に同じ。【一〇】 不早綰 綰はまとふ。【一一】 編劃 劃は劃る。【一二】 朽棧 棧は車、王伯大の解に「朽棧に乘ずとは、懼喜を謂ふなり」とある。【一三】 瑟僩 詩經に瑟兮僩兮とあつて、註に「矜莊寬大なり」とある。【一四】 覘瞀 目を見張る。【一五】 睍睆 詩經に睍睆黃鳥とある。【一六】 灞滻 文選上林賦に終始灞滻とあつて、顏師古の註に「灞水は、藍田谷の西北に出でて、渭に入る。滻水も、亦た藍田谷の北に出で、霸陵に至つて灞に入る」とある。

【題義】 これは、例の張籍に贈つたのであるが、詩中に於ては、おのが息子の事ばかり云つて居る。韓愈は、その息子の敎育を張籍に託した處が、張籍は、大層ほめて吳れたといふので、この詩を作つたのである。蔡寬夫詩話に「舊說、退之の子不慧、金根車を讀んで金銀となすと。然れども、退之の張籍に贈る詩に、謂はゆる、召令吐所記、解摘了二瑟僩一、すなはち、應に字を識らざるべからざるなり、知らず、詩の稱するところは、乃ち此子か」とある。なほ蔣註に「この詩の大意、その子の惠あるを以て、喜を爲すのみ、張籍、後に公を祭るの詩あり、云ふ、坐令二其子拜一、常呼二幼時名一と。詩意と合す」とある。

【詩意】 予は、年老いて、讀書に打込み、その他の事は、目にも掛けず、息子は非常に可愛いが、兎

角、面倒臭い處から、敎育も自然おろそかであつた。偶ま君が來られた時、息子を呼び出すと、ひよろひよろとして敷居の處に來たが、何も知るところなきを懼れて、客の顏を見ると、はにかんで仕舞ふ。昨日は、或る用事がある爲に、馬に乘り、笏を手にして出かけたが、その時、君を留めて、自分が歸るまで家に居て、食事でもして、これを相手にして待つて居て具れといひ、息子をして、杯盤に侍せしめて置いた。それから、薄暮の頃歸つて見ると、君は我を迎へ、莞爾として笑ましげに、わが息子を指しつつ、相賀して云ふには、この子は、實に萬金の產である。今日篤と御樣子を伺ふと、その風骨は全體粹美にして、何處といつて揀ぶべき處もなく、これに向つて、詩經の義を授けて見ると、丁度、肉を串に刺すが如く、まことに貫徹して、よく分かる。これを開き導いて、段段細かいことまで敎へ込むと、やがて自得して、偉いものになることは、山の高きを望むと同じで、決して、間違ひはないといつた。顧みれば、われは、孔孟の道を踏んで居る者であるが、矢張、爵位は早く纏はされざりしに因つて、格別、偉らくも成らなかつた。子孫に然るべき人があつて、わが文章を編次し、改竄して具れれば善いがと思つて居た處で、わが息子が、御言葉の樣であれば、君子の德を感謝するが、どうやら、危く思ふ。そこで、息子を呼び出して、今日敎はつたところを吐かしめると、なる程、詩經の文句を摘み出して、悉たり僩たりの一節を能く了解して居る。そこで、げにもと思つて、大に喜んだが、窓壁の間には、親戚の人人が覗きつつ、いづれも、驚きの餘りに目を見張つて居る。かくて喜氣は、冬の寒さを排し、耳に近く鶯が鳴く樣である。あはれ、わが事業を繼いで具れるものさへあれば、誰を恨むこともなく、いつでも、仕官を罷めて、長安の近郊なる灞滻の間に、躬耕して、一生を樂に終ることが出來るので、まことに、有り難き仕合である。

調張籍

張籍を調す

（一）李杜文章在。（二）光焰萬丈長。
李杜文章在り、光焰萬丈長し。

不知（三）羣兒愚。那用故謗傷。
知らず、羣兒の愚、那ぞ用ひむ、故らに、謗傷。

（四）蚍蜉撼大樹。可笑不自量。
蚍蜉大樹を撼かす、笑ふべし、自ら量らざるを。

伊我生其後。擧頸遙相望。
伊れ我、その後に生まれ、頸を擧げて、遙に相望む。

夜夢多見之。晝思反微茫。
夜夢多く之を見、晝思反つて微茫たり。

徒觀斧鑿痕。不矚治水航。
徒に斧鑿の痕を觀て、治水の航を矚せず。

想當施手時。巨刃磨天揚。
想ふ、手を施すの時に當つて、巨刃天を磨して揚がる。

（五）垠崖劃崩豁。乾坤（六）擺雷硠。
垠崖、劃として崩豁、乾坤、擺うて、雷硠たり。

惟此兩夫子。家居率荒涼。　惟だ此兩夫子、家居率ね荒涼。
帝欲長吟哦。故遣起且僵。　帝、吟哦を長うせむと欲し、故に起つて且た僵れしむ。
翦翎送籠中。使看百鳥翔。　翎を翦つて、籠中に送り、百鳥の翔けるを看せしむ。
平生千萬篇。金薤(七)垂琳琅(八)。　平生、千萬篇、金薤、琳琅を垂る。
仙官敕六丁(九)。雷電(一〇)下取將。　仙官、六丁に敕し、雷電、下つて取將す。
流落人間者。太山一豪芒。　人間に流落するものは、太山の一豪芒。
我願生兩翅。捕逐出八荒(一一)。　我、願はくは、兩翅を生じ、捕逐して、八荒に出でむことを。
精誠忽交通。百怪入我腸。　精誠、忽ち交通、百怪、我が腸に入る。
刺手拔鯨牙。擧瓢酌天漿。　手を刺して、鯨牙を拔き、瓢を擧げて、天漿を酌む。
騰身跨汗漫(一二)。不著織女襄(一三)。　身を騰げて、汗漫に跨り、織女の襄を著けず。
顧語地上友。經營無太忙。　顧みて、地上の友に語る、經營、太だ忙はしき無からむや。
(一四)乞君飛霞珮。與我高頡頏(一五)。　君に飛霞の珮を乞へむ、我と高く頡頏せよ。

【字解】【一】李杜　新唐書の本傳に「昌黎韓愈、文章に於て許可を重んず、詩歌に至りては、ひとり李杜を推す」とある。【二】光焰　西京賦に光焰燭天庭とある。【三】羣兒愚　魏道輔は「公、この詩を作る。元微之の爲に發す。蓋し、元稹、李杜優劣論を作り、杜を先にして李を後にす、故に爾り」といひ、黃魯直は「吾が友黃介、李杜優劣論を讀んで曰く、文を論ずる、當に此の如くなるべからずと。予以て知言と爲す」とある。【四】蚍蜉　小蟲、ぶよの類。【五】垠崖　かぎりなき斷崖。【六】擺雷硠　擺はふるふ、硠は礧石の聲。【七】金薤　金錯書、倒薤書を合稱したので、ともに篆體の名。【八】琳琅　珠玉の類で、その光彩を云ふ。【九】六丁　道書に「陽官六丁、陰官六丁」とあつて、六甲中の丁神をいふ。【一〇】雷電下取將　異人記に「上元中、台州の道士王遠知、易を善くし、人の死生禍福を知り、易總十五卷を作る。一日、雷雨、雲霧中、一老人、遠知に語つて曰く、泄らすところのもの書、何にか在る。上帝、吾に命じ、六丁雷電を攝して追取す。上方の祕文、自ら飛天保衞あり、金科は、玄都に祕藏す。汝、何者ぞ、輒ち緗帙を藏すと。遠知曰く、青邱元老傳授するなり」とある。【一一】八荒　天をいふ。【一二】跨汗漫　淮南子に「盧敖、北海に游び、蒙穀の上に至つて一士を見る。敖、仰いで之を視る。士、笑つて曰く、吾、汗漫に於て九垓の上に期す、吾、以て久しく居るべからずと、臂を擧げて、身を竦し、遂に雲中に入る」とある。【一三】織女襄　詩經に、跂彼織女、終日七襄とあつて、鄭箋に「襄は駕なり」とある。【一四】乞　與へる。【一五】頡頏　詩の毛傳に「飛んで上るを頡といひ、飛んで下るを頏といふ」とある。上下する。

【題義】調は戲れる。これは張籍に戲れた詩といふが、その實は、韓愈が自己の本領を述べたのである。おのれの推服するところは唯だ李杜二人のみ、李杜を研究して、自ら得るところが無ければ駄目だといひ、張籍等の門弟に向つて、唯だ碌碌として居ては宜しくない、何でも活眼を開いて、大に得るところあるを要するといつて聞かせたのである。尤も韓愈と同時に、元微之は、李杜優劣論を唱へ、杜を揚げて李を抑へたから、これに對する反駁の意味も籠つて居る。蔣註に「退之、李杜に取るあり、

薦士、聯句、留東野、望秋、石鼓等の詩、毎に意を致す。然れども、この詩の美を專にするに若かざるなり。筆墨閒錄に曰く、退之、李杜に參して機關に透る處、調二張籍一の詩に於て之を見る」といつて居る。

【詩意】李杜の文章は、今に存在して、萬丈の光焰を放つて居る。然るに、世間の羣兒輩は、愚にも、ともすれば、李白を誹傷するが、たとへば、蚍蜉の如き小蟲が大樹を撼かさうとする樣なもので、自己の力如何を量らず、まことに、笑ふべきことである。我輩は、李杜の後に生まれ、頸を擧げて遙に之を望み、どうか、李杜の樣に成りたいと心に念じ、夜は數ば夢に之を見、晝は之を思うて、ぼんやりして居る。世人が李杜を能く知らぬのは、たとへば、禹が洪水を治めた時、山や崖を切り開いた其斧鑿の痕ばかりを見て、禹が治水の爲に舟を乘り廻はし、天を磨する程の巨刃を揚げて、限りなき崖を劃然として切り落し、乾坤が震動して鳴り出した其事を考へないと同じである。李杜兩夫子も、家に居るときは、貧乏であつたが、それは、天帝が二人をして、長く吟哦せしめる樣にといつて、わざと之を起したり僵したりしたからである。かくて、その翼を剪つて籠中に入れ、他の百鳥の翔けるのを見せしめたから、勢、吟哦せざるを得ざるやうになり、その作に係る千萬篇の文章は、金錯倒薤の篆體で書かれ、光彩爛然として居た。處が、天上の仙官は、六丁の神神に命じ、これを人間に殘して置いては、天機を漏らす虞があるといふので、雷電を下して、これを天上に持つて行かしめたので、今日人間に流落せるものは、太山の一豪芒たるに過ぎぬ。我輩は、平生、二人を欽慕し、願はくは、この身に兩翅を生じ、何處までも追ひかけて、八荒の外に出たいと常常心にかけて居た爲に、精誠が自然交通したものか、李杜の樣樣の奇怪なる伎倆が、覺えず、我が腸に逼入つて來た。これまで、自分の研究した結果、おのれの手を刺して探れば、幽溟の下に潛める鯨の牙にも探り當てるし、一たび瓢を擧げて酌めば、天漿といふ酒を酌むことが出來る。そこで、身を翻し、汗漫として萬里の外に思を遊ばせ、かの織女が終日七襄して衣を織るといふ樣な小細工は決して爲さぬ。ここに地上の友たる諸君の爲すところを見ると、著しく經營を費して、まことに、忙はしげに見えるが、さういふ事では、まだまだ修行が足らない。今しも、霞を飛ばすと云ふ珮玉を諸君に與へるから、諸君は之を腰に下げて、我輩と同じく、天上を翱翔することの出來る樣に勉强されたいものである。

【餘論】雪浪齋日記に「退之が李杜に參し、機關に透る處、調二張籍一の詩に於て之を見る。我願生二兩翅一、捕逐出二八荒一より以下、乞二君飛霞珮一、與レ我高頡頏に至る、これ領會の語なり。退之に從つて、詩を言ふもの多し、しかも、獨り籍に許すものは見る處あり、以て衣を傳ふべきを以てのみ」といひ、竹坡詩話に「元微之、李杜優劣論を作つて謂ふ、太白は杜甫の藩籬を窺ふ能はず、況んや堂奥をやと。唐人未だ嘗て此論あらず、しかも、稹始めて之を爲す。退之が李杜文章在、光焰萬丈長、不レ知羣兒愚、那用故謗傷と、云ふに至りては、復た優劣を爲さず」といひ、專ら李杜優劣を反駁した公平の態度を賞

讃して居る。朱竹垞は「議論の詩、是れ又別に一調、蒼老を以て勝る、他人此膽なし」といひ、徒觀二斧鑿痕一の數句に就いては「運思好し、造語の若きは、則ち全し、これ高秀を爲すに意あり」といひ、何義門は精誠忽交通の數句を評して「これ公が自得の處、謂はゆる一體を名づけず、怪怪奇奇」といひ、乾隆御批には「これ籍に示すに、詩派の正宗を以てして言ふ、おのれの手追心慕するところ、惟だ李杜あるのみ、幾及すべからずと雖も、亦た必ず天に升り地に入り、以て之を求めむ。籍、これに志あり、當に相與に先後を爲すべきなり。その景仰の誠、直に、上、孔夢に通せむと欲す、その運量の大、遠續禹功に減せず、李杜を推崇する所以のもの、至れり」といつて居る。

盧郎中雲夫。寄示送盤谷子詩兩章。歌以和之

盧郎中雲夫、盤谷子に送る詩兩章を寄示す、歌うて、以て之に和す

昔尋李愿向盤谷。　むかし、李愿を尋ねて、盤谷に向ふ、
正見高崖巨壁爭開張。　正に見る、高崖巨壁爭うて開張。
是時新晴天井溢。　この時、新に晴れて、天井溢る、
誰把長劍倚太行。　誰か長劍を把つて、太行に倚る。
衝風吹破落天外。　衝風、吹き破つて、天外に落ち、
飛雨白日灑洛陽。　飛雨白日、洛陽に灑ぐ。
東蹈燕川食曠野。　東、燕川を蹈んで、曠野に食み、
有饋木蕨芽滿筐。　木蕨、芽の筐に滿つるを饋るあり。
馬頭溪深不可厲。　馬頭、溪深くして、厲るべからず、
借車載過水入箱。　車を借つて載せて過ぐれば、水箱に入る。
平沙綠浪榜方口。　平沙綠浪、方口に榜す。
鴈鴨飛起穿垂楊。　鴈鴨、飛び起つて、垂楊を穿つ。
窮探極覽頗恣橫。　窮探極覽、頗る恣橫。
物外日月本不忙。　物外の日月、本と忙はしからず、
歸來辛苦欲誰爲。　歸來辛苦、誰か爲にせむと欲す。
坐令再往之計墮　坐ながら、再往の計をして、眇芒に墮

【字解】【一】天井　關名、太行山上に在る。水經註に「天井溪は天井關に出で、北流して白水に注ぐ、世、これを白流泉といふ」とある。【二】把長劍　宋玉の賦に長劍耿介倚二天之外一」とある。蔣註に「水、天井より傾溢して下る、長劍の山に倚るが如し」とある。【三】衝風　楚辭九歌に、「衝風起兮橫レ波」とある。蔣註には、この二句を解して「云ふは、大風、この長劍の水を吹き、漂散雨と作つて、洛陽に灑ぐなり」とある。【四】燕川　朱註に「燕川方口は皆盤谷旁近の小地名」とある。【五】馬頭　溪の名。【六】不可厲　詩經の毛傳に「衣を以て水を渉るを厲といふ」とある。【七】榜　榜は船を進むること、方口は前に見えた通り、地名で、韓愈の盆池の詩に恰如二方口釣レ魚時一とある。【八】撲擊　撲は擲つ。【九】慨慷　魏の武帝の短歌行に慨當二以慷一、憂思難レ忘とあつて、その註に「意氣を抑揚するなり」とある。【一〇】風和　宋玉の對二楚王一問に「國中屬して和するもの數十人」

眇芒。　ちしむ。

閉門長安三日雪。　門を閉づ、長安三日の雪、

推書撲(八)筆歌慨慷(九)。　書を推し、筆を撲げて、歌慨慷。

旁無壯士遣屬和(一〇)。　旁に壯士の屬和せしむるなし、

遠憶盧老詩顚狂。　遠く憶ふ盧老詩顚狂。

開緘忽覩送歸作。　緘を開いて忽ち覩る、歸るを送るの作、

字向紙上皆軒昂。　字は紙上に向つて皆軒昂。

又知李侯竟不顧。　又知る、李侯の竟に顧みざるを、

方冬獨入崔嵬藏。　冬に方つて獨り崔嵬に入つて藏す。

我今進退幾時決。　我、今、進退幾時か決せむ、

十年蠢蠢隨朝行。　十年蠢蠢として朝行に隨ふ。

家請官供不報答。　家、官供を請うて、報答せず、

無異雀(一一)鼠偸太倉。　雀鼠の太倉を偸むに異なるなし。

とある。【一一】 雀鼠偸太倉　史記の李斯傳に「吏舍廁中の鼠を見るに不潔を食ひ、人犬に近づき、數ば驚いて之を恐れ、倉中の鼠は、積粟を食ひ、大廡の下に居て、人犬の憂を見ず」とあり、又漢書に「太倉の粟、紅朽して食ふべからず」とあり、又梁書賀琛傳に「家僮、米三千石を斂せ、すでに至る、その大半を耗す。琛、その故を問ふ、曰く、雀鼠耗する也。琛、笑つて曰く、壯なるかな雀鼠」とある。【一二】 手版　前に見ゆ、卽ち笏。【一三】 彈劾　劾は罪を按ずること。

行抽手(一二)版付丞相。　行く〱手版を抽いて、丞相に付し、

不待彈(一三)劾還耕桑。　彈劾を待たずして、耕桑に還る。

【題義】 盧雲夫は、前にも見えて居た。これは、郎中の官に居た盧雲夫が、盤谷子を送る詩を示されたに就いて、それに和して作つたのである。盤谷は、河南懷慶府濟源縣太行山の南に在つて、李愿といふものが、此に居て、自ら盤谷子と號した。貞元十七年、韓愈は、送李愿歸盤谷序を作り、その文は、文章軌範にも載せてあるから、誰でも知つて居る。この詩は、元和七年の冬、長安に居た時の作で、詩中に在る十年蠢蠢隨朝行の句は、貞元十九年癸未、御史となつて登朝せしより、元和七年壬辰に至るまで、丁度十年になるを云ふ。

【詩意】 むかし、李愿を尋ねて、盤谷に分け入つたことがあつたが、盤谷の名の起る所以は、高崖巨壁、爭つて開張すといふ樣に、險しくして巖石が亂立して居るからである。その途に天井關があるが、丁度その時、雨あがりで、山上の溜り水が瀉下する壯觀は、さながら、人が長劍を把つて太行の山に倚つて居るかと思ふ位。その內に恐ろしい風が吹いて來ると、その水を天外に撒き落し、遠く洛陽の地に向ひ、飛雨となつて白日に灑ぐやうである。天井關より、東して燕川といふ處へ往つた時は、晝頃であつたから、辨當を使はうと思つて居ると、通り懸つた百姓が、蕨の芽を筐の中から取り出し

で賭られた。その先には、馬頭溪といふ谷川があつて、雨後の水は深くして渉れない。無理に渡れば、水が車の中に這入るから、仕方がない。そこで、綠浪が平沙を漂はして居る方口といふ處に至り、やつと舟で渡つた。すると、雁や鴨が驚いて飛び起ち、枝垂れて居る柳の間を穿つて過ぐるので、一寸面白い眺めであつた。それから、李愿の處に往つて、窮探極覽、隨分勝手に面白く遊んだが、物外の日月は、流石に長閑である。やがて、歸つて來ると、あくせくと、誰の爲に辛苦するのか、一向面白くないが、再びさういふ山の間に遊ばうといふことは、遺憾ながら出來兼ねた。今は長安に居るが、三日ばかり、雪が降り續いて、外出も出來ず、左右に書物を堆く積み上げ、筆を擲つて、覺えず慷慨の歌を歌つたが、別に壯士が傍に居て、屬和する譯でもないから、まことに詰らない。その時、ふと思ひ付いたのは、我が友盧老で、彼は詩の爲には、氣違ひ染みて見える位。その人が傍に居て吳れたら善いがと思ふ折しも、偶然にも、盧老から手紙が屆いた。開封して見ると、李愿の盤谷に歸るを送るといふ詩があつて、その詩を讀むと、文字が紙上に軒昂の勢を爲して居る。李君は、到底、俗を顧みず、寒い冬でも何でも、盤谷の山奧に往つて隱れやうといふので、その間の消息は、お蔭ですつかり分かつた。我輩の如きは、何時、進退を決すべきか、十年以來、徒に蠢蠢然として、朝官の行列の末班に從ひ、何一つ仕出かさず、それで一家の眷屬は、官俸に因つて生活し、それに對して、報ゆることも協はず、丸で雀や鼠が太倉の米を偸んで食ふと同じで、これでは男兒の本分も立つまいと思ふ。我輩には、とても李愿の眞似は出來ないけれども、行く〳〵は、笏を丞相に返付し、人に彈劾されぬ内に、早く田園に歸臥し、耕桑の間に餘生を送りたいものである。

【餘論】蘇東坡は、韓愈の送李愿歸盤谷序を賞歎した序に「退之尋常の詩、自ら謂ふ、李杜に及ばずと。昔尋李愿向盤谷の一篇に至りては、獨り子美に減せず」といひ、朱竹垞は衝風吹破落天外の數句を評して「別に是れ一の鍊法、全く尋常の畦徑に落ちず、亦た是れ及び難し。大抵、鍊意を多しと爲す、此首の若きは、卽ち鍊景も亦た得たりと謂はむ」といひ、九字句の二つあることに就いては「正に相應するが若くならしむるを見る、然れども、佳處は此に在らず」といひ、結末に就いては「詩、志を言ふこと、此の如し、收束亦た得たり」といひ、何義門は我今進退幾時決の二句を評して「題面只だ此れ之を了す、奇絕高絕」といひ、結末に就いては「盤谷子を送るの詩に和し、却つて、自家の出處に就いて感慨を作す、正に爾かく味長し」といひ、乾隆御批には「字向紙上皆軒昂、正に是れ此篇の評語、高詠數番、人をして意氣を增長せしむ」とある。

寄皇甫湜　　皇甫湜に寄す

敲門驚晝睡。問報睦州吏。　門を敲いて晝睡を驚かす、問へば報ず、睦州の吏。

手把一封書。上有皇甫字。　手に一封の書を把つて、上に皇甫の字あり。
坼書放牀頭。涕與淚垂(一)四。　書を坼いて、牀頭に放ち、涕は涙と四を垂る。
昏昏還就枕。惘惘夢相値。　昏昏として、還た枕に就き、惘惘として、夢に相値ふ。
悲哉無奇術。安得生兩翅。　悲しいかな、奇術なし、安んぞ、兩翅を生ずるを得む。

【字解】【一】垂四　方世擧の解に「垂四、蓋し涕と涙とを以て分つて之を言ふ、猶ほ石鼓歌に謂ゆる對此涕淚雙滂沱のごときなり」とある。涕は水鼻。

【題義】ある時、皇甫湜が、睦州の任地から手紙を韓愈に寄せたから、韓愈は、大に喜んで、この詩を作つたのである。

【詩意】ほとほとと門を敲く音がして、覺えず午睡の夢を驚かした。そこで、誰かと問へば、睦州の役人が參つたといふ返事で、手に一封の書を把つて、恭しく差し出したが、上には、差出人の名を書いて、皇甫としてあつた。そこで開封して一讀したる後、これを牀頭に差し置いた。かの如き同心の友が長く隔つて居て、常に逢ふことが出來ないと思へば、悲しさ限りなく、涙と水鼻とが兩方の鼻と目から流れて、四すぢを垂れた。かくて悲極まり、うとうと眠くなつて枕に就き、惘惘然として、夢の中で皇甫湜に逢ふこともあらうかと思つた。いつそ、兩の翅を生じたならば、鳥の如く翔けることも出來るのに、悲しいかな、人は鳥に非ず、仍つて、彼と相見ることが出來ないのは、まことに遺憾である。

【餘論】この詩の破題に就いて、何孟春は「退之の此詩云云、又盧玉川の日高五丈睡正濃、將軍叩門驚周公、口傳諫議送書信、白絹斜封三道印。句法意象、かくの如し、豈に眞に相襲へるものならむや」といつて居る、朱竹垞は「只だ離情の悲切を賦し、未だ所以を道はず」といつて、甚だ物足らぬ樣に考へて居るが、この詩は、手紙を得た時の感じを直敍しただけで、さう六つかしく云ふには及ぶまいと思ふ。

病中贈張十八　病中、張十八に贈る

(一)中虛得暴下(二)。避冷臥北窗。　中虛、暴下を得たり、冷を避けて、北窗に臥す。
不踏曉鼓朝。安眠聽逢逢(三)。　曉鼓を踏んで朝せず、安眠して逢逢を聽く。
籍也處閭里。抱能未施邦。　籍や閭里に處り、能を抱いて未だ邦に施さず。
文章自娛戲。金石日擊撞。　文章自ら娛戲、金石日に擊撞。
(四)龍文百斛鼎。筆力可獨扛(五)。　龍文百斛の鼎、筆力獨り扛ぐべし。

(六)談舌久不掉。非君亮誰雙。
談舌、久しく掉はず、君に非ざれば、亮に誰か雙せむ。

扶几導之言。曲節初(七)摐摐。
几を扶け、之を導いて言ふ、曲節初めて摐摐たり。

半塗喜開鑿。派別失大江。
半塗、喜んで開鑿、派別、大江を失ふ。

吾欲盈其氣。不令見(八)麾幢。
吾、その氣を盈たしめむと欲し、麾幢を見せしめず。

牛羊滿田野。解(九)旆束(一〇)空杠。
牛羊、田野に滿つ、旆を解いて、空杠を束ぬ。

傾罇與斟酌。四壁堆罌缸。
罇を傾けて、與に斟酌し、四壁、罌缸を堆す。

(一一)玄帷隔雪風。照鑪釘(一二)明釭。
玄帷、雪風を隔て、鑪を照らして、明釭を釘つ。

夜闌縱(一三)捭闔。(一四)哆口(一五)疎眉厖。
夜は闌にして、捭闔を縱にし、哆口にして、疎眉厖たり。

勢侔(一六)高陽翁。坐約齊橫降。
勢は高陽の翁、坐ながら、齊横を約して降すに侔し。

連日挾所有。形軀頓(一七)胮肛。
連日有るところを挾んで、形軀、頓に胮肛たり。

將歸乃徐謂。子言(一八)得無哤。
將に歸らむとして、乃ち徐に謂ふ、子が言哤たるなきを得むや。

廻軍與角逐。(一九)斫樹收窮龐。
軍を廻らして、與に角逐、樹を斫つて窮龐を收ふ。

(二〇)雌聲吐(二一)款要。酒壺綴(二二)羊腔。
雌聲にして款要を吐き、酒壺、羊腔を綴る。

君乃(二三)崑崙渠。籍乃(二四)嶺頭瀧。
君は乃ち崑崙の渠、籍は乃ち嶺頭の瀧。

譬如蟻垤微。詎可陵(二五)崆峴。
譬へば、蟻垤の微なるが如し、詎ぞ崆峴を陵ぐべき。

幸願終賜之。斬拔(二六)枿與椿。
幸ひに願くは終に之れを賜ひ、枿と椿とを斬拔せよ。

從此識歸處。東流水淙淙。
此より歸處を識り、東流、水淙淙たり。

【字解】【一】中虛　胃腸を害して腹の中が空虛になつた。【二】暴下　下痢。【三】逢逢　鼓聲をいふ、詩經に「鼉鼓逢逢」とある。【四】龍文百斛鼎　面に龍文の模樣を畫き、百斛を盛る大きな鼎、史記に「秦の武王、孟說と龍文の鼎を扛ぐ」とある。【五】扛　指し上げる、史記の項羽本紀に「力、能く鼎を扛ぐ」とあり。文選西都賦に「烏獲、鼎を扛ぐ」とある。【六】談舌久不掉　掉は搖かす、ふるふ、史記に「張儀三寸の舌を掉ふ」とある。【七】摐摐　摐は、擊つ、撞くといふ義で、きびきびと動くこと。【八】麾幢　旗さし物。【九】旆　大旗で、中軍の旗。【一〇】空杠　杠は竿。【一一】玄帷　黑色の戸ばり。【一二】釘明釭　燈火を點ずる。【一三】捭闔　もと鬼谷子の篇名で、捭は開く、闔は閉ぢる、開合抑揚。【一四】哆口　口に任かせて饒舌る。【一五】疎眉厖　厖は毛の多き貌、眉毛を動かす。【一六】高陽翁　史記田儋傳に「田橫、復た齊の城邑を收め、田榮の子廣を立てて齊王と爲して之に相たり。漢王、酈生をして往いて說き、齊王廣及び其相國橫を下さしむ、橫、以て然りと爲し、その歷下の軍を解く」とあり、又酈生傳に、「酈生食其は陳留高陽の人なり」とある。【一七】胮肛　廣韻に「肥大の貌」とある。【一八】得無哤　廣韻に「詩、雜亂なるを哤といふ」とある。【一九】斫樹收窮龐　史記に孫子列傳に「魏の將龐涓、韓を去つて歸る。孫子、その行を度るに、暮には當に馬陵に至るべし、乃ち大樹を斫り、白うして之に書して曰く、龐涓この樹の下に死せむと。善く射るものをして、道を夾んで伏せしむ。涓、果して夜至り、書を讀んで未だ畢らず、萬弩ともに發す、乃ち自剄す」とある。蔣註に以上數句を解し「公、はじめ、机に扶けられて、籍を導き、これをして言はしめ、しばらく其麾幢に匿し、旆を解き、杠を束れて之に弱を示す。籍、乃ち其捭闔を縱にし、酈生の齊を下

すが如し。すでに、連日、その有するところを挾み、その後、頓病語厄、乃ち公に敗らる、これ猶ほ孫臏の龐涓を收むるがごときなり」とある。【三〇】雌聲　聲を潜める。【三一】吐款要　和睦を申し込む。【三二】綴羊腔　羊の腸を綴り之を括つて持つて來る、左傳に「楚子、鄭に克つ。鄭伯、肉袒、羊を牽いて以て逆ふ」とあるを用ふ。【三三】崑崙渠　崑崙より流れ出る川、卽ち黃河、爾雅に「河は崑崙の墟に出でて、色白し。渠とするところ、併せて千七百一川、色黃なり」とある。【三四】嶺頭瀧　說文に「瀧は奔湍」とある。【三五】崆峒　文選李善註に「山石高峻の貌」とある。【三六】枿與樁　木の蘖と枯れた木の根。蔣註に結數句を解し「籍、すでに公に敗らる、乃ち自ら以爲へらく、嶺頭の瀧は、以て崑崙の渠に方ぶるに足らず、蟻垤の微は、以て崆峒の山を陵ぐに足らず、願はくは、終に敎を公に受けむと。而して、公、ここに於て、その歸するところに導く」とある。

【題義】蔣註に「張十八は籍なり、貞元十四年、公、汴州に佐たり、籍、公に薦送せられ、明年登第す。又明年、喪に居り、服除いて、太常寺太祝に補せらる。」この詩に謂ふ、抱レ能未レ施レ邦、と。豈に籍が未だ第せざる時に作れるか、或は既に第して未だ仕へざる時か」とあつて、何時といふことは、はつきりしない。大體、韓愈が病氣で靜養して居た時、張籍が來て、何か議論をしたが、韓愈は、初めから唯だ靜に聽いて居るのみで、一向可否を言はず、十分先方の言ふことを悉したるに因つて、最後に、籍の誤つて居る處を指摘し、直に之を說服したといふ其經過を、一首の詩に作り上げたのである。

【詩意】この頃、胃腸を惡くして、腹の中が空虛になり、頻りに下痢を催す處から、冷氣を避けて、北窓の下に臥し、朝の一番太鼓を聞くとひとしく、參朝することも出來ず、唯だ安眠して、鼓聲の逢逢たるを聞いて居るだけである。門人の張籍は、長安の閭里に住み、十分の材能を抱きながら、未だ之を一國の政治の上に施すことを得ず、文章を以て娛樂として居るが、その作は、金石が日日に擊撞するが如く、妙なる響を發して居る。それで、その筆力といへば、面に龍の模樣を彫り付けて、中に百斛を盛る樣な、大きな鼎を獨りで指し上げる位。ところが、張籍は、我が家に來て、文章だけでは、とても、自分の材能を思ふ存分發揮することが出來ぬから、一つ辯舌を以てしやうと思ふ、しかし、相手が無いので、久しく舌を掉はなかつたので、君に非ざれば、誰も然るべき者が居ないから、態態遣つて來たといつた。かくて、机に扶けられて坐し、張籍を案內して入り來らしめ、先づ靜に其言ふところを聞くと、その辯舌には、曲節があつて、なかなか面白い。しかし、半途にして、橫にそれ込み、人の通らぬ道を開鑿し、大江の水が別派に分れて、あらぬ方に走り入る樣な工合。我輩が口を出すと、恐れて頓挫するだらうといふので、態と先方の氣を盈たしめむと欲し、伏兵を設けて、敵を欺くやうな心持で、旗さし物を隱して少しも現はさず、わざと牛羊を放つて田野に滿たしめ、旗を解き去つて、竿だけになつたのを束ねて片づけ、十分、張籍に物を言はせやうと企てた。そこで、酒樽を傾けて、共に酌み、四壁には瓶を幾つも積んで、どんなに、飮んでも構はないといふ用意をなし、時しも冬で、吹雪が劇しいから、黑い帷を引き廻らして、雪げの風の這入らぬ樣にし、又夜に成つてからは、爐に十分火を起し、その上、明燈を點して、終夜、喋舌つても、善い樣にして置いた。すると、張籍は、

夜の更け行くにつれて、益す辯論の歩武を進め、開合抑揚を恣にし、口に任かせて、得意の極は、眉毛まで引き立ち上つて、動くかと思はれる位。その勢は、高陽の酒徒と稱せられた彼の酈食其が、齊の田横の處に乘り込んで、坐ながら七十二城を下して降參させた樣であつた。かくて、一日一晩、喋舌り續けても、まだ盡きぬと見えて、翌日も其通り、得意氣に辯論をつゞけ、非常に驕り高ぶつた心持が形體の上にも顯はれる程であつた。そこで、我輩は、彼が勝ち誇つて將に歸らむとするに乘じ、

徐に口を開いて云ふには、一體、君の今まで喋舌つた事は、蕪雜極まつて、少しも、道理に叶はぬことでは無いかと、先づ一喝を食はして置いて、おのが軍勢を廻らして角逐し、丁度、孫臏が樹を白くし、龐涓をおびき寄せて、之を打ち取つた樣に、手もなく之を說破すると、張籍は、俄に猫撫聲をして、和睦を申し込み、酒壺に酒を一ぱい盛り、羊の腸を綴り、之に添へて降參の意を表し、さて云ふには、君は、崑崙より流れ出る黃河の水の樣であるが、おのれは、普通の山から落ちる早瀨の如きものである。又おのれは、蟻の塔の樣な小さな物であるのに、君は、崆峒たる山嶽の如きもので、とても、比較には成らぬ。この上は、不束なるを棄てられず、始終面倒を見て敎を賜はらむことを切望するので、彥ばえや殘つて居る根ッこなどは、容赦なく切り拂つて、その木の本當に伸びて行くやうにして貰ひたいといつた。ここに、張籍は、はじめて、おのが本心の歸著するところを知り、今後は、大江の水が東に向つて淙淙として海に入るが如き有樣となつたので、その發展は、刮目を値するであらう。

【餘論】韓醇は「公始めや、几に扶けられて籍を導き、之をして言はしめ、且つ其麾幢を匿し、旆を解き、杠を束ねて、之に弱を示す。籍、乃ち其捭闔を縱にし、酈生の齊を下すが如し。すでに、連日、その有するところを挾み、その後、軀病語哤、乃ち公に敗らる。これ猶ほ孫臏の龐涓を收むるがごときなり、籍、すでに公に敗らる、乃ち自ら以爲へらく、嶺頭の瀧は、以て崑崙の渠に方ぶるに足らず、蟻垤の微は、以て崆峒の山を陵ぐに足らず、願はくは、終に敎を公に受けむ、と。而して、公、ここに於て、その歸するところを導くなり」といつて居て、略ぼ其旨意を盡して居る。何義門は「扶几以下、この篇の波瀾起伏、分明、管公明と諸葛景春との往復より變化して來る、但だ其辭を變せざるのみ」といひ、乾隆御批には「この篇、當に用韻の處に就いて、其苦心巧思を玩ぶべし、大略、軍事進退を以て比と爲す。皆韻の近しとするところに就いて、詞義乃ち各〻その倂を得たり、前に高陽の一喩ありて、後の窮龐、乃ち類を以て從ふが如き、强押を爲さず。凡そ旆を解き、軍を廻らし、降を約し、款を吐き、前後倶に一綫穿ち成す、ここに於て、長篇險韻、定めて須らく慘淡經營すべく、才を恃んで鹵莾たるべからざるを見るなり」とある。

雜詩

古史散左右。詩書置後前。
豈殊(一)蠹書蟲。生死文字間。
古道自愚惷。古言自包纏。
當今固殊古。誰與爲欣歡。
獨攜無言子。共昇崑崙顚。
長風飄襟裾。遂起飛高圓。
下視禹九州。一塵集豪端。
遨嬉未云幾。下已億萬年。
向者夸奪子。萬墳厭其巔。
惜哉抱所見。白黑未及分。
慷慨爲悲咤。淚如(二)九河翻。
指摘相告語。雖還今誰親。

雜詩

古史、左右に散じ、詩書、後前に置く。
豈に蠹書の蟲、文字の間に、生死するに殊ならむや。
古道、自ら愚惷、古言、自ら包纏。
當今、固より古しへに殊なり、誰と與にか欣歡を爲さむ。
獨り無言の子を攜へて、共に昇る崑崙の顚。
長風、襟裾を飄し、遂に起つて、高圓に飛ぶ。
禹の九州を下し視れば、一塵、豪端に集まる。
遨嬉、未だ云に幾ならず、下は已に億萬年。
向きに夸奪の子、萬墳、その巔を厭す。
惜いかな、所見を抱いて、白黑未だ分つに及ばず。
慷慨、爲に悲咤、淚は、九河の翻るが如し。
指摘して、相告語す、還ると雖も、今誰と親まむ。

翩然下大荒。被髮騎騏驎(三)。　翩然、大荒より下り、髮を被つて騏驎に騎す。

【字解】【一】蠹書蟲　蠹は白魚、一名蟫魚、衣書中の蟲、卽ち紙魚。【二】九河　書經に見ゆ。【三】騏驎　麒麟に同じ、古書には、多く通じて使つて居る。

【題義】蔣註に「選に、王粲、曹植、皆雜詩あり、李善謂ふ、物に遇うて卽ち言ひ、流例に拘はらずと。是なり。この詩、離騷の離心遠逝、道夫崑崙、已而臨睨舊京曰、國無人、莫我知兮、又何懷乎故都の意を祖とす」とあるが、平たくいふと、この詩は、一面には儒者たる己れは、兎角世に容れられぬといふ不平を寫し、一面には、富貴利達を趁ふ者どもが、盛衰常ならず、往往遷謫の憂目を見ることを暗に嘲つたのである。

【詩意】左右前後には、古史竝に詩書の類を一ぱいに取り散らし、兀兀として、これ等の書物を研究して居るのは、丁度紙魚が文字の間に生死すると同じである。古道は、もとより間の拔けたものであるし、古言は、自分を束縛する樣なものである。無論、今の時勢は、古しへと異にして、自分と共に相得て喜ぶ樣な友達は、到底求められない。そこで、仕方がないから、獨り無言子を攜へて、ともに崑崙の絕巓に登り、長風に向つて、襟裾を翩すと、この身は、知らず識らず、天に飛び上つて、下に世界を見るやうに成つた。禹の九州といふと、大層な物の樣だが、天上から見ると、毫毛の一端に塵埃が止まつた樣なものに過ぎぬ、かくて天上に在つて遨嬉すること、未だ幾ならざるに、下界に於ては、

早くも億萬年を經過した。そこで、首を囘らして能く見ると、先に自分と心を異にして居た夸奪の手合は、みんな墳墓に成つて、土饅頭に腦天を押し壓されて居る。惜むらくは、おのが所見を持して、彼等に說き聞かせ、はつきり黑白の分かるやうにして遣ることが出來ず、自分が一寸天上に往つて居る間に死んで仕舞つたかと思へば、まことに氣の毒千萬で、物とはなしに悲しく、涙は九河の翻るが如くである。そこで、無言子と共に、處處を指しつつ互に語り合ひ、これでは、下界に還つても、誰も親んで吳れるものもない。されば、髮を振りさばいた儘、麒麟に跨り、翩然として大空の只中に下る外はあるまいといつた。

【餘論】樊汝霖は「東坡、公の潮州廟碑を爲る、終篇、實に此義を取る」といひ、朱竹垞は「これ寓意、これ古意ならず、然れども、未だ工と爲さず」といひ、何義門は「太白に體源す、要するに、自ら公の胸次あり、介甫、多く此を學ぶなり」といつた。

寄崔二十六立之

崔二十六立之に寄す

(一)西城員外丞。心跡兩屈奇。(二)　西城の員外丞、心跡兩つながら屈奇、

往歲戰詞賦。不將勢力隨。　往歲、詞賦を戰はしめて、勢力を將て隨はず。

(三)下驢入省門。左右驚紛披。　驢を下つて、省門に入れば、左右驚いて紛披。

傲兀坐試席。深叢見孤羆。　傲兀として、試席に坐し、深叢に孤羆を見る。

文如翻水成。初不用意爲。　文は水を翻すが如くして成り、初めより「意を用ふること」を爲さず。

四座各低面。不敢捩眼窺。(四)　四座各面を低る、敢て眼を捩らして窺はず。

升階揖侍郎。(五)歸舍日未欹。　階に升つて侍郎に揖し、舍に歸つて日未だ欹たず。

佳句喧衆口。考官敢瑕疵。　佳句、衆口に喧しく、考官、敢て瑕疵せむや。

連年收科第。若摘頷底髭。　連年、科第を收め、頷底の髭を摘むが若し。

廻首卿相位。通途無他岐。　首を廻らす卿相の位、通途他岐なし。

豈論校書郎。(六)袍笏光參差。　豈に論せむや、校書郎、袍笏光參差たるを。

童稚見稱說。祝身得如斯。　童稚にも稱說せらる、身を祝す、斯の如きを得むと。

儕輩妬且熱。喘如竹筒吹。　儕輩妬んで且つ熱し、喘ぐこと、竹筒を吹くが如し。

老婦願嫁女。約不論財貲。　老婦、女を嫁せむことを願ひ、約して、財貲を論せず。

老翁不量分。累月笞其兒。　老翁、分を量らず、累月、その兒を笞つ。

攪攪爭附託。無人角雄雌。
攪攪爭つて附託し、人の雄雌を角するなし。
由來人間事。翻覆不可知。
由來人間の事、翻覆知るべからず。
安有巢中鷇。揷（七）翅飛天陲。
安んぞ、巢中の鷇にして、翅を揷んで、天陲に飛び、
駒（八）䮣著爪牙。猛虎借與皮。
駒䮣、爪牙を著け、猛虎、皮を借し與ふるあらむや。
汝頭有韁繫。汝脚有索縻。
汝が頭に韁繫あり、汝が脚に索縻あり。
陷身泥溝間。誰復稟指（九）撝。
身を泥溝の間に陷る、誰か復た指撝を稟けむ。
不脫（一〇）吏部選。可見偶（一一）與奇。
吏部の選を脫せず、偶と奇とを見るべし。
又作朝士貶。得非命所施。
又朝士と作つて貶せらる、命の施すところに非ざるを得むや。
客居京城中。十日營一炊。
客居す京城の中、十日一炊を營む。
逼迫走巴（一二）蠻。恩愛座上離。
逼迫して巴蠻に走り、恩愛、座上に離る。
昨來漢水頭。始得完孤羈。
昨は漢水の頭に來り、始めて孤羈を完うすることを得たり。
桁（一三）掛新衣裳。盎棄食殘糜。
桁には新衣裳を掛け、盎には食殘の糜を棄つ。
苟無饑寒苦。那用分高卑。
苟くも、饑寒の苦なくむば、那ぞ高卑を分つを用ひむ。

憐我還好古。宦途同險巇。
憐む、我が還た古を好み、宦途、險巇を同じうするを。
每旬遺我書。竟歲無差（一四）池。
每旬、我に書を遺る、竟歲、差池なし。
新篇奚其思。風幡肆逶迤。
新篇奚ぞ其れ思はむ、風幡肆にして逶迤たり。
又論諸（一五）毛功。劈水看蛟螭。
又諸毛の功を論じ、水を劈いて蛟螭を看る。
雷電生睒（一六）睗。角鬣相撐披。
雷電、睒睗に生じ、角鬣、相撐披す。
屬我感窮景。抱（一七）華不能攡。
我が窮景を感ずるに屬し、華を抱いて攡ること能はず。
唱來和相報。愧歎俾我疵。
唱へ來つて、和して相報ゆ、愧歎、我をして疵ましむ。
又寄百（一八）尺綵。緋紅相盛衰。
又百尺の綵を寄せ、緋紅相盛衰。
巧能喩其誠。深淺抽肝脾。
巧に能く其誠を喩し、深淺、肝脾を抽く。
開展放我側。方餐涕垂匙。
開展、我が側に放ち、餐に方つて、涕、匙に垂る。
朋交日凋謝。存者逐利移。
朋交日に凋謝、存するもの利を逐うて移る。
子寧獨迷誤。綴綴意益彌。
子、寧ろ獨り迷誤せむや、綴綴として意益す彌せり。
擧頭庭樹豁。狂飈卷寒曦。
頭を擧ぐれば、庭樹豁たり、狂飈、寒曦を卷く。

迢遞山水隔。何由應塤(一九)篪。　迢遞として山水隔り、何に由つてか塤篪に應せむ。
別來就十年。君馬記騧(二〇)驪。　別來、十年に就んとす、君が馬、騧驪を記す。
長女當及事。誰助出帨(二一)縭。　長安、當に事に及ぶべし、誰か助けて帨縭を出さむ。
諸男皆秀朗。幾能守家規。　諸男、皆秀朗、幾くか能く家規を守る。
文字銳氣在。輝輝見旌麾。　文字銳氣在り、輝輝として旌麾を見る。
摧腸與慼(二二)容。能復持酒卮。　腸を摧くと容を慼むると、能く復た酒卮を持す。
我雖未耋(二三)老。髮禿骨力羸。　我未だ耋老せずと雖も、髮禿にして骨力羸る。
所餘十九齒。飄颻盡浮危。　餘すところは十九齒、飄颻として盡く浮危。
玄花著兩眼。視物隔褷(二四)襹。　玄花、兩眼に著き、物を視て、褷襹を隔つ。
燕席謝不詣。游鞍懸莫騎。　燕席、謝して詣らず、游鞍、懸つて騎するなし。
敦敦凭書案。譬彼鳥黏(二五)䊵。　敦敦として書案に凭り、彼の鳥の䊵に黏したるに譬ふ。
且吾聞之師。不以物自隳。　且つ吾これを師に聞く、物を以て自ら隳らす。
孤豚眠糞壤。不慕太(二六)廟犧。　孤豚、糞壤に眠り、太廟の犧を慕はす。

君看一時人。幾輩先騰馳。　君看よ一時の人、幾輩か先づ騰馳。
過半黑頭死。陰蟲食枯(二七)骴。　過半黑頭にして死す、陰蟲、枯骴を食む。
歡(二八)華不滿眼。咎責塞兩儀。　歡華、眼に滿たず、咎責、兩儀に塞がる。
觀(二九)名計之利。詎足相陪裨。　名を觀て之を利に計る、詎ぞ相陪裨するに足らむ。
仁者恥貪冒。受祿量所宜。　仁者は貪冒を恥づ、祿を受けて所宜を量る。
無能食國惠。豈異哀癰(三〇)罷。　無能にして國惠を食む、豈に癰罷を哀むに異ならむや。
久欲辭謝去。休令衆睢(三一)睢。　久しく辭謝して去り、衆をして睢睢たらしむるを休めむ［と欲す。
況又嬰疹(三二)疾。寧保軀(三三)不貲。　況んや又疹疾に嬰り、寧ろ軀の不貲を保せむや。
不能前死罷。內實慚神祇。　死に前つて罷むること能はず、內、實に神祇に慚づ。
舊籍在東都。茅屋枳棘籬。　舊籍、東都に在り、茅屋、枳棘の籬。
還歸非無指。灞滻揚春(三四)澌。　還歸、指すなきに非ず、灞滻、春澌を揚ぐ。
生兮耕吾疆。死也埋吾陂。　生きては吾が疆に耕し、死しては吾が陂に埋めむ。
文(三五)書自傳道。不仗史筆垂。　文書、自ら道を傳へ、史筆に仗つて垂れず。

夫子固吾黨。新恩釋銜羈。
去來伊洛上。相待安罛箄。（三六）
我有雙飲醆。其銀得朱提。（三七）
黃金塗物象。雕鐫妙工倕。（三八）
乃令千里鯨。么麼微螽斯。（三九）（四〇）
猶能爭明月。擺掉出渺瀰。（四一）（四二）
野草花葉細。不辨蓍菉葹。（四三）
緜緜相糾結。狀似環城陴。
四隅芙蓉樹。擢豔皆猗猗。
鯨以興君身。失所逢百罹。（四四）
月以喻夫道。僶俛勵莫虧。
草木明覆載。妍醜齊榮萎。
願君恆御之。行止雜燧觿。（四五）

夫子、固より吾が黨、新恩、銜羈を釋かる。
伊洛の上に去來し、相待つて罛箄を安んせむ。
我に雙飲醆あり、その銀、朱提より得たり。
黃金、物象に塗す、雕鐫、工倕よりも妙なり。
乃ち千里の鯨をして、么麼、螽斯よりも微ならしむ。
猶ほ能く明月を爭うて、擺掉して渺瀰より出づ。
野草、花葉細、蓍菉葹を辨せす。
緜緜として相糾結し、狀は城を環る陴に似たり。
四隅芙蓉の樹、豔を擢んでて皆猗猗たり。
鯨は以て君が身に興し、所を失うて百罹に逢ふ。
月は以て夫の道に喻へ、僶俛、勵んで虧くるなし。
草木、覆載を明かにし、妍醜、榮萎を齊しくす。
願はくは、君、恆に之を御し、行止、燧觿を雜へよ。

異日期對擧。當如合分支。（四六）

異日、對擧を期す、當に分支を合するが如くなるべし。

【字解】【一】西城　城西に同じ、卽ち藍田。元和の初、立之は前大理評事を以て事を言うて官を黜けられ、再び轉じて藍田縣丞となつた。【二】屈奇　文選西征賦の註に「屈は奇異なり」とある。【三】下驢　唐の進士は、皆驢に乘つたので、杜甫の詩にも「騎驢三十載、旅食京華春」とあり、韓愈の孟東野に與ふる詩にも、「騎驢到京國、欲知薰風琴」とある。【四】捩眼　捩は拗、もとらす。【五】侍郎　試驗係長たりし劉太眞をいふ。【六】校書郎　立之登第の後、祕書省祕書郎に除せられた。【七】排翅飛天陸　文選陳琳の檄に「たとへば、鷇卵、はじめて輪毛を生じて、便ち陸梁放肆なるが如し」とあるを用ふ。天陸は天途に同じ。【八】駒犢　墓文に「馬二歳を駒となす」とあり、爾雅に「牛、その子犢」とある。【九】指擿　さし圖。【一〇】吏部選　吏部の役人の銓衡。【一一】偶與奇　蔣註に「古人、遇合を以て耦となし、不遇を奇と爲す。霍去病傳に、諸將常に留落不耦といひ、李廣傳に、衛青、陰に上の旨を受け、以爲へらく、李廣は數奇、註に、廣の命隻にして、耦合せざるを言ふなり」とある。【一二】巴蠻　巴西の蠻地。【一三】桁　卽ち衣桁、韻會に「竹竿なり」とある。【一四】差池　左傳襄公二十二年に「何ぞ敢て差池せむ」とあつて、註に「齊しからざるなり」とある、たがふ。【一五】諸毛功　朱註などに據ると、韓愈が筆を擬人化して毛穎傳を書いたに就いて、それが面白いといつて、稱賛の言葉を書いて寄越したのであらうといふが、諸毛は筆、崔立之の詩文を指したものと見るのが穩妥であらう。【一六】睒睗　前に永貞行に見えた睒睗と同じ、睒は狹視、睗は覽視。【一七】抱華不能摛　漢書班固の敍傳に「答賓戲」に云ふ、摛藻如春華」とあつて、方世擧は「蓋し、公、崔の詩を得たるは、正に冬月に當る、故に窮景に感じて、その春華を摛發する能はざるのみ」とある。【一八】百尺綵　朱註に此數句を解して「言ふは、崔、我に新贈綵帛を遺る、能く其意を達するに巧なり、猶ほ某事に工なりと言ふがごときのみ」とある。【一九】塤篪　前に赤藤杖の下に見ゆ、詩經に伯氏吹塤、仲氏吹篪とある。【二〇】騧驪　詩經に騧驪是驂とあつて、註に「黃馬黑喙を騧といふ」とあり、又說文に「驪は馬の深黑色」とある。【二一】帨縭　蔣註に「禮に、婦、舅姑に事ふるときは、左に紛帨を佩ぶ。註に、物を拭ふの巾。詩に、之子于歸、皇駁其馬、親結其縭、註に婦人の褘なり、母、女を戒め

て之が爲に衿を施し、帨を結ぶなり」とある。【二二】 憂容　心配さうな顏をする。【二三】 耋老　耋は年七十をいふ。【二四】 襹褷　もと毛羽始めて生ずる貌、ここでは、ちらちらする貌。【二五】 黏黐　もちに粘着する。【二六】 太廟犧　莊子に「或は莊子を聘す。莊子、その使に應へて曰く、子、夫の犧牛を見ずや、衣するに文繡を以てし、食はしむるに芻菽を以てす、その牽ゐて太廟に食はしむるに及びて、孤犢たらむことを欲するも、其れ得べけむや」とある。【二七】 枯骴　廣韻に「骴は殘骨」とある。【二八】 歡華不滿眼　蔣註に「饑人の窒殖に云ふ、福は管に盈たず、禍は將に世に溢れむとす、と。退之、すなはち曰く、歡華不﹅滿﹅眼、咎實塞二兩儀﹅と。古を用ふるの化、かくの如し」とある。【二九】 討名　朱註に「この二句、曉し難し。竊に意ふ、討は猶ほ校のごときなり、言ふは、その得るところの虛名を覩、之を校ぶるに實利を以てするも、相補ふに足らざるなり」とある。【三〇】 瘠瘻　身體の不具なること。【三一】 睢睢　說文に「睢は仰視なり」とあり、漢書五行志に「萬衆睢睢、驚怪連日」とある。【三二】 疹疾　文選李善註に「疹は疾なり」とある。【三三】 軀不貲　漢書蓋寬饒傳に「不貲の軀を用ふ」とあつて、顏師古の註に「貲は資と同じ」とある。不貲とは、貲量以て比すべきなきを言ふ、貴重の極なり」とある。【三四】 春澌　說文に「流氷を澌となす」とあり、楚辭に流澌紛兮將﹅來下﹅とある。【三五】 文書自傳道　文選の典論に「古しへの作者は、身を翰墨に寄せ、意を篇籍に見はし、良史の辭を假らず」とある。【三六】 罠罩　罠は網、罩は魚を取る竹器。【三七】 朱提　漢書地理志に「犍爲郡に朱提縣あり、山より銀を出す」とあつて、應劭の註に「朱提山は西南に在り」と見ゆ。又食貨志に「朱提の銀、重さ八兩、一流と爲し、直一千五百八十他の銀は、一流直千、これを銀貨の二品と爲す」とある。【三八】 工倕　莊子の胠篋に「工倕の指を攦る」とあつて、陸德明の註に「倕は堯時の巧者なり」とある。【三九】 幺麼　通俗文に「長からざるを幺といひ、細小を麼といふ」とある。【四〇】 螽斯　陸璣の詩經疏に「蝗の類、長くして青し、股を以て鳴く」とある。いなご。【四一】 擺掉　ふるふ。【四二】 渺瀰　曠遠の貌。【四三】 薋菉葹　楚辭に薋菉葹以盈﹅室兮とあつて、王逸註に「薋は蒺藜なり、菉は王芻なり、葹は枲耳なり、三者皆惡草なり」とある。【四四】 與君身　與は猶ほ比のごとし、君は立之を指して言ふ。【四五】 雜佩觿　雜は交ふ、禮記內則に「左に小觿金燧を佩ぶ」とあつて、鄭玄の註に「觿は、貌、錐の如し、象骨を以て之を爲る、金燧は火を日に取るべし」とある。この句の意は、蔣註に「言ふは、當に此觿を御して、佩ぶるところの璁瓏の間に雜ふべきなり」とある。【四六】 合分支　手形の割符を合す、王伯大の解に「通鑑、元魏熙平元年、法を立て、軍に在つて功あるものは、行臺より券を給し、當中豎に裂き、一支は勳人に給し、一支は門下に送り、以て僞巧を防ぐ。今人、亦た析產の符契を謂うて分支帳と爲す、卽ち此類なり。公、雙關の一を以て崔に贈る、故に末句かくの如し」とある。

【題義】 崔立之は、前に贈詩があつて、その處で、略傳を述べて置いた。もと韓愈の門人であつて、大前の詩では、その人が矢鱈に、詩文を作るが、兎角、蛟螭の中に螻蚓を雜へて居る樣だといつて、大に之を諷して居たが、その中に、立之も閱歷を積み、韓愈自身も、屢ば升沈を經、交情が益す深くなつたので、立之の爲に、傳を作るやうな心樣で、この詩を作つたのである。蔣註には、その製作時代を考證して「貞元四年、侍郞劉太眞、擧に知として、進士三十六人を放つ。立之第に中る。公、かつて立之の爲に藍田縣丞壁記を作る、元和十年なり。記に載するところ、立之、藝を戰はしめて人に出づ、事を言ふに及びて、官を黜けらる。皆詩意と合ふ、又立之に贈るの詩あり、乃ち元和元年に在り、而して、此に別來就十年といふ、蓋し元年より後、方に相別れ、ここに至り、詩を作つて寄と爲す、亦た當に元和十年に在るべきなり」といつて居る。

【詩意】 西城に住んで居た崔立之は、その心も、身の跡も、兩つながら倔奇で、珍らしい。その昔、都に出て詞賦を戰はして試驗に應ずる時分に、外の者ならば、勢力ある者に取り入つて、色色運動して賴み廻るが普通であるが、さういふ眞似はせず、直に驢を下つて、試驗場に乘り込んで來たから、

左右の者どもは、驚いて紛披した位。それで傲然として、平氣で試驗の席に坐つた處は、深い藪の中に突然一つの羆が出現した樣であつた。その答案は、水を翻して歩く如く容易に出來、最初から、何等の意匠をも用ひなかつた。その時、四座の者は、皆首を低れて居て、横目で之を窺ふものもない。そこで、直に階段を登つて、試驗官たる侍郎劉太夏の處に往つて挨拶を爲し、さつさと引き上げたから、家に歸つて來ても、日は未だ傾かぬ位であつた。處が、其文章は、非常に評判になり、試驗官が瑕疵を求めやうとしても、一點非難すべき處がなかつたから、無論通過し、その翌年も、殿試に應じて、目出たく進士となり、その容易なることは、頷下の髭を剃るが如くであつた。その心の中では、何も首を廻らして卿相の位までも見渡し、この儘、ずつと行けば、一すぢ路、で分れる處もなく、何も譯は無いと思つた位だから、取り敢へず校書郎に拜せられ、袍笏の光參差たるを身に著けても、もとより論ずるに足らぬことと思つて居た。しかし、世間では、矢鱈に偉い者として騷ぎ立て、子供にさへ羨まれ、自分達も、行末はかくありたいものだといはれ、朋輩は羨み妬んで、その鼻息の荒いことは、火吹竹で火を吹くやうに熱くなつて來た。すると、鄰の老婦は、一人の娘を是非嫁に遣らうといひ、貴下の樣な立派な方は、財産などは、どうでも善いといひ、又鄉の老翁は、自分の息子の天分を量らず、崔立之の樣にならないのは不屆至極だといつて、累月の間、鞭つて之を叱り通しにしたといふ話さへある。かくの如く、騷がれた揭句には、攪攪として之に附託し、どうか之にあやかりたいといふので、何人も之と勝負を試みるものがなかつた。しかし、人間の事は、由來、飜覆もとより豫知すべからず、巢の中で、孵化したばかりの雛鳥に、翅を挿んで自由自在に天邊に翶翔せよといつた處で、到底出來るものではなく、又小馬や小鹿に爪や牙をつけ、虎の皮を借りて被らせて威嚴を生せしむることは、もとより無理な注文である。おまけに、役人が、頭に手綱をつけられ、足に繩を繋がれて、身を泥溝の間に陷れた時には、誰でも、馬鹿にして、その言ふことを聞くものではない。崔立之は、初めこそ大した勢であつたが、吏部の役人の銓衡に掛つて、將來の運命の幸不幸が截然として分れることに就いては、御多分に洩れず、折角、朝士には成つたが、さまざまの讒構に遇つて貶謫せられる樣に成つたので、矢張、その人の運命であるから、まことに已むを得ぬ次第である。崔立之は、京城の中に客居する間も、始終貧乏で、十日に一度飯を炊ぐ位、それが無理に逼られて、巴西の蠻地に流され、妻子眷屬等、恩愛の深いものと座上に離れて其地に發向したが、その後、年月を經て、近ごろは、漢江の邊に量移され、因つて、家族を迎へて、一家團欒することが出來、衣桁の上には新しい衣裳を挂け、劄籠の中なる食ひ殘しの飯を棄てても善い樣になり、その境遇にも、多少の弛みが出來た。人生、苟くも、飢寒の苦だに無ければ、官の高卑などは、もとより論ずべきものでない。予も、亦た君と同じく、古しへを好み、從つて、君と同しく、官途の險巇を經たので、それを君は憐まれたものと見えて、爾後、十日に一度づつ、手紙を遣はされ、一年の間は、決して誤ることなく、又

新作の詩を寄越されたが、幡が風に靡く如く、面白く結構せられ、筆の先から出る文章は、至極奇妙である上に、その文字は、水を劈いて蛟螭を見、雷電が目の前に起り、種種の動物が角や鬣を振り亂して、互に糾れ合ふ樣で、その筆勢の飛騰することは、まことに素張らしいものである。今しも冬で、予は、窮景を守る爲に、筆藻も全く枯れて、春の花が芽を出し得ないと同じく、予も文思を引き出す樣な考が少しも浮ばない。しかし、折角の原唱に對して、和作を試みて返事を出すと、頻りに褒めて來て、どうか、前度の作に就いて、疵を指摘して直して下さいといひ、時としては、百尺もある綵段を送り來り、その色は緋や赤など、巧に色の深淺を取り合せ、肝脾を現はして、その誠意を表出したものと見える。これ等の綵段を自分の前に展開して見ると、この人も、刻下は氣の毒だといふので、食事の最中、匙の中に涙が落ちた。おまけに、朋友は、次第に死歿し、生存して居るものも、利を趁うて移り、いつしか絶交する樣に成つたが、崔立之のみは、獨りで迷つて居るか、誤つて居るか、その邊は知らぬが、綴綴として親切な意を現はし、まことに感謝に勝へない。今しも、庭の木には葉もなく、狂風は寒げなる太陽を吹き卷くり、長安と澳水とは山水遠く相隔り、塤篪相和する能はざるはまことに、遺憾である。顧みれば、君と別れてから、十年に垂んとし、君が黒馬に跨つて都を出て行かれたことすら、今でも覺えて居る。君の長女は、既に婚儀を修つたらうが、誰が助けて、嫁入の支度をしてやつたか、それも、氣にかかる。君の息子さん達は、皆秀朗で、定めて家規を守つて居ることであらう。現に來書中に時時その詩文も這入つて居たが、文字の中に鋭氣があつて、輝輝として、一方に將たるべき旄麾を顯はして居る。この十年間に於ける君の境遇は、腸を摧き、顏をしかめる樣なことばかりであつたが、息子達が酒巵を持して進められたことであらうと思へば、聊か心を慰めたに相違ない。これに反して、予は年未だ耋老とまでは行かぬが、頭は禿げ、骨力衰へ、齒も段段抜けて、剩すところは十九枚、それも、ぐらぐら動いて居て、まことに危い位。目も黒く霞んで、物を視ても、ちらちらして能くは分からない。そこで、折角、他人から招かれても、大抵の宴會は斷つて仕舞ひ、鞍は家に懸けた儘で、久しく外出せず、つくねんとして、机に倚りかかり、丁度、黐に捉まつた鳥の樣である。しかし、かつて師たりし人に聞いたことがあるが、物は自ら毀つのは宜しくない、糞壤の間に寢て居る豚は、決して、太廟の犧牲たることを望まないといふことで、予も亦た刻下の境地に甘んずる外はない。君看よ、一時志を恣にした人の中の幾輩が、予に先つて騰馳したか、その過半は、黒頭である内に、死んで仕舞ひ、陰蟲の爲に墓中の枯骸を食はれて仕舞つた。人間に於て、歡樂榮華の盛なことは誠に少く、また目に滿たぬ内に、咎責は天地に塞がる位。折角汲汲として、名だけ得たところで、實利は之に伴はず、勘定して見ると、名に對して、利は之を補足する譯にも行かぬものである。仁者は貪ることを恥とし、祿を受けるにしても、過分であつてはならぬ。我輩の如き無能の者が、國家の惠を受けて、俸祿を頂戴して居るのは、不具者を救養すると同じ譯である。そこ

で、予は、役人を罷めて歸臥したいと思ふので、久しく、利祿を慕うて居ると、睢睢として、衆人に睨まれる。まして、病氣では、何時死ぬとも分らず、死ぬ前に罷めることが出來なければ、神祇に對しても愧ぢ入る始末。本來、予の原籍は洛陽で、茅屋には枳棘の籬を環らして居るが、歸るといつても目ざす處がないでもないから、灞渭の二水の氷が解ける來年の春には、是非、さうしたいと思ふ。かくて、生きては自分の土地を耕し、死しては我が家の陂に葬り、平生、文書を草して、自ら其道を傳へて居るから、何も史上に傳を立てて貰ふにも及ばない。君は、固より吾黨の士であるから、來春、予に新恩を賜はつて、轡や綱から解除された時には、伊洛の川の邊に尋ねて呉れるが善いので、その時は、魚でも捕つて、ゆつくり遊ばうではないか。わが家には、二つの珍らしい杯があつて、朱提山に產する銀で造つたものである。これに鍍金をして、さまざまの物象を畫き出し、その彫刻の精妙なるは、音に聞く工倕にも勝つて居る。千里の鯨は、細小にして、いなごの如く、その鯨が尾を海中に掉つて、明月を爭ふ處もあるし、野草の花葉は、いかにも細かで、蓍か、菉か、葹か分からぬが、綿綿として相連り、城の屏が廻つて居る樣な風に、杯の緣邊を爲し、四隅には蓮の花をあしらひ、猗猗として水を出でた處は、如何にも豔である。そこで、この二つある杯の一つを君に贈るので、千里の鯨は、差し向き、君が身に喩へ、月は彼の道に譬へ、その道を飽くまで勵んで、虧くることなきを希望する。その他の草木は、覆載の間に生を享けたもので、妍醜は異なれども、榮萎は同じである。願はくは、君、常に之を使用し、燧石や根附と一處に、行止の間、常に之を腰に佩んで居て貰ひたい。かくて、他日思ひ通りに成つて、予を伊洛の上に尋ねて來られる時、矢張、これを持參せられ、予と君と相對して、均しく杯を擧げたならば、丁度、割符を合はせる樣な感じがするであらう。

【餘論】この詩は、六大段より成り、起首、西城員外丞より無二人角二雄雌一に至るまでが第一段で、崔立之が少年の時、都に出て來て、進士の試驗に應じ、短い時間に大文章を書いて、試驗官を驚かし、立どころに、登第したことを敍し、由來人間事より那用レ分二高卑一に至るまでが第二段で、すべて、順調に行けば、顯官の地位を得ることは、何の造作も無かつたが、人間の事は、さうも行かないといふことを敍し、憐我還好レ古より何由應二塤篪一に至るまでが第三段で、崔立之の韓愈に對する交情を敍し、別來就二十年一より詎足二相陪裨一に至るまでが第四段で、韓愈自身の境涯を敍し、仁者恥二貪冒一より相待安二罛箄一に至るまでが第五段で、韓愈が早晚官を罷めて洛陽に歸臥せむとする志あることを敍し、我有二雙飲醆一より、結末、當レ如レ合二分支一に至るまでが第六段で、二つある銀の盃の一つを贈ることを敍したのである。隱居詩話に「詩、古人の意を踏襲するを惡む、亦た襲うて愈よ工に己に出づるが若き者あり。蓋し、之を思ふこと、愈よ精しければ、造語愈よ深きなり。魏人の章疏に云ふ、福不レ盈レ眥、禍將レ溢レ世、と。韓愈、すなはち曰く、歡華不レ滿レ眼、咎責塞二兩儀一と。蓋し前よりも工なるなり」といひ、李光地は「前に崔の登第謫官を敍し、中道は崔と唱酬の事にして、因つて、その安候を訊ね、

後には、乃ち自ら其志を逃べ、而して後、崔と偕隱せむとす。末、方にその崔の貽に報する所以に及び、前の巧喩と其れ誠に相應ず」といひ、朱竹坨は「崔を敍する小傳の如く、自ら敍する尺牘の如し。局面亦た開闊、第だ夸多を以て勝を角すれば可、頗る人を驚かす處に乏し」といひ、乾隆御批にも之を承けて、「崔を敍すること小傳の如く、自らを敍すること尺牘の如し。雜沓龐雜、破碎に似て實は渾成、その詞意懇欵、筆を下して自ら休む能はず、交誼の厚きを想見すべし」とある。

月蝕詩。效玉川子作

月蝕の詩、玉川子の作に效ふ

(一)元和庚寅斗(二)揷子。　元和庚寅、斗、子に揷む、

月十四日三更中。　月の十四日三更の中、

森森萬木夜僵立。　森森たる萬木、夜、僵立し、

寒氣(三)屓奰頑無風。　寒氣屓奰、頑にして風なし。

月形如(四)白盤。(五)完完上天東。　月形は白盤の如く、完完として天東より上る。

忽然有物來噉之。　忽然物あり來つて之を噉ふ、

不知是何蟲。　知らず是れ何の蟲、

如何至神物。遭此(六)狼狽凶。　如何ぞ至神の物にして、この狼狽の凶に遭へる。

星如撒沙出。攢集爭强雄。　星は沙を撒するが如くして出で、攢集して强雄を爭ふ。

油燈不照席。　油燈、席を照らさず、

是夕吐燄如長虹。　この夕、燄を吐いて長虹の如し。

玉川子。涕泗下中庭獨行。　玉川子、涕泗下り、中庭に獨行す。

念此日月者。爲天之眼睛。　念ふに此日月は、天の眼睛たり。

此猶不自保。吾道何由行。　これ猶は自ら保たずむば、吾が道何に由つてか行はれむ。

嘗聞古老言。疑是(七)蝦蟇精。　かつて、古老の言を聞く、疑ふらくは是れ蝦蟇の精。

(八)徑圓千里納女腹。　徑圓千里、女の腹に納る。

何處養女百醜形。　何の處にか、女が百醜の形を養はむ。

(九)把沙脚手鈍。　把沙として脚手鈍、

誰使女解緣靑冥。　誰か女をして靑冥に緣ることを解せしむ。

(一〇)黃帝有四目。(一一)帝舜重其明。　黃帝は四目あり、帝舜は其明を重ぬ。

今天祇兩目。
何故許食使偏盲。
堯呼大水浸（一二）十日。
不惜萬國赤子魚頭生。
女於此時若食日。
雖食八九無噬（一三）名。
（一四）赤龍（一五）黑鳥燒口熱。
翎鬣倒側相搪（一六）撐。
（一七）婪酣大肚遭一飽。
饑腸徹死無由鳴。
後時食月罪當死。
天羅磕（一八）匝何處逃汝形。
玉川子立於庭而言曰。

今天は祇だ兩目、
何の故に食するを許して偏盲ならしむ。
堯は、大水を呼んで、十日を浸し、
萬國の赤子、魚頭生するを惜まず。
女、この時に於て若し日を食すれば、
八九を食すと雖も噬名なし。
赤龍黑鳥、口を燒いて熱し、
翎鬣倒側、相搪撐す。
婪酣大吐、一飽に遭はす、
饑腸死に徹して鳴くに由なし。
時に後れて月を食す、罪、死に當れり。
天羅磕匝、何の處にか汝の形を逃れむ。
玉川子、庭に立つて言うて曰く、

（一九）地行賤臣仝。
再拜敢告上天公。
臣有一寸刃。可刳凶蓋腸。
無梯可上天。
天階無由有臣蹤。
寄牋東南風。
天門西北祈風通。
丁寧附耳莫漏洩。
薄命正値（二〇）飛廉慵。
（二一）東方青色龍。牙角何呀呀。
從官百餘座。嚼啜煩官家。
月蝕汝不知。
安用爲龍窟天河。

地行の賤臣仝、
再拜して敢て上天公に告ぐ。
臣に一寸の刃あり、凶蓋の腸を刳くべし。
梯の天に上るべきなし、
天階、臣の蹤あるに由なし。
牋を東南風に寄す、
天門の西北、風の通ずるを祈る。
丁寧、耳に附して漏洩する莫れ、
薄命正に飛廉の慵きに値ふ。
東方青色の龍、牙角何ぞ呀呀たる。
從官百餘座、嚼啜、官家を煩はす。
月、蝕するも、汝、知らす、
安んぞ龍と爲つて、天河に窟するを用ひむ。

赤鳥司南方。尾禿翅(二二)觰沙。
赤鳥、南方を司る、尾、禿して、翅、觰沙たり。

月蝕於汝頭。汝口開(二三)呀呀。
月の蝕する、汝の頭に於てす。汝の口、開いて呀呀たり。

蝦蟇掠汝兩吻過。
蝦蟇、汝の兩吻を掠めて過ぐ。

忍學省事不以汝觜啄蝦蟇。
忍んで、事を省することを學び、汝の觜を以て蝦蟇を啄まず。

(二四)於菟蹲於西。旗旄衛(二五)毿毸。
於菟は西に蹲し、旗旄、衛つて毿毸たり。

既從白帝祠。又食於(二六)蜡禮有加。
すでに白帝に從つて祠られ、又蜡に食んで禮加ふるあり。

忍令月被惡物食。
忍んで、月をして、惡物に食せられしむ。

枉於汝口插齒牙。
枉げて、汝の口に於て齒牙を插む。

烏龜怯姦怕寒。(二七)縮頸以殼自遮。
烏龜怯姦、寒を怕れ、頸を縮め、殼を以て自ら遮る。

終令(二八)夸娥抉女出。
終に夸娥をして、女を抉して出でしめ、

(二九)卜師燒錐(三〇)鑽灼滿板如星羅。
卜師、燒錐、鑽灼、板に滿ちて、星の如く羅せしむ。

此外(三一)內外官。瑣細不足科。
この外、內外の官、瑣細科するに足らず。

臣請悉掃除。
臣、請ふ、悉く掃除せむ。

愼勿許語令啾譁。
愼んで、許語して啾譁ならしむる勿れ。

併光全耀歸我月。
光を併せ、耀を全うして、我が月を歸し、

盲眼鏡淨無纖瑕。
盲眼鏡淨、纖瑕なし。

弊蛙拘送主府官。
弊蛙、拘へて主府の官に送り、

帝箸下腹嘗(三二)其皤。
帝箸、腹に下して其皤たるを嘗む。

依前使(三三)兎操杵臼。
前に依り、兎をして杵臼を操り、

玉階(三四)桂樹閒婆娑。
玉階の桂樹、閒にして婆娑たらしむ。

(三五)恒娥還宮室。(三六)太陽有室家。
恒娥、宮室に還り、太陽、室家あらむ。

天雖高耳屬地。
天高しと雖も、耳を地に屬す。

感臣赤心、使(三七)臣知義。
雖無明言、潛喩厥旨。
有氣有形、皆吾赤子。
雖忿天傷、忍殺孩稚。
還女月明、安行于次。
盡釋衆罪、以蛙礫死。

臣が赤心を感じ、臣をして義を知らしむ。
明かに言ふことなしと雖も、潛に厥旨を喩せり。
氣あり、形あり、皆吾が赤子、
天傷を忿ると雖も、孩稚を殺すに忍びむや。
女が月明を還し、次に安行せしめむ。
盡く衆罪を釋し、蛙を以て礫死せしめむ。

【字解】【一】元和庚寅　即ち五年。【二】斗挿子　北斗が子の方を指すといふので、即ち十一月。太陰暦では、北斗が寅を指す、即ち建寅を正月として居るから、さういふ勘定になる。【三】屓贔　或は屓贔に作り、亦た通す。贔屓は力を用ふる貌、屓贔は壯士の貌。【四】白盤　李白の詩に「少時不識月、呼作白玉盤」とある。【五】完完　しづしづと。【六】狼狽凶　あわただしき凶變。荀悅の漢紀論に「周勃、狼狽して據を失ふ」とあり、文選西征賦に「亦た狼狽して慭むべし」とあり、酉陽雜俎に「狼狽は是れ兩物、狽は前足絶だ短く、行くごとに、毎に狼の腿上に駕す、狽、狼を失すれば、動く能はず、故に世事の乖くものを言うて狼狽と稱す」とある。【七】蝦蟇精　史記龜策傳に「日、德を爲して、天下に君たり。月は刑して、相佐け、蝦蟇に食はる」とあり、張衡の靈憲に「月は陰精の宗、積んで獸象兎蛤を爲す」とあり、又「姮娥月に奔る、これを蟾蜍と爲す」とあり、春秋孔演圖に「蟾蜍は月の精なり」とある。【八】徑圍千里　白虎通に「日月經千里」とある。【九】把沙　御行する貌。【一〇】黃帝有四目　帝王世紀に「謂ふは、黃帝、力牧常先等を用ひて四方に分掌し、各己が視るが如し、故に黃帝四目と號す」とある。【一一】帝舜重其明　尸子に「舜は兩眸子、これを重瞳といふ」とあり、史記項羽本紀贊に「舜の目、蓋し重瞳子」とある。【一二】十日　淮南子に「堯の時、十日竝に出づ」とあり、その詳は、前に游青龍寺の詩の下に見ゆ。楚辭招魂にも、十日代出、流金鑠石とある。【一三】噬名　貪食するといふ惡名。【一四】赤龍　前に赤藤杖の詩の下に見ゆ。【一五】黑鳥　未詳、或は日中の三足烏を指すといふ說もある。【一六】猪掉　猪突撑拄、つき退ける。【一七】婪酣　貪食する。【一八】磕匝　取り圍む。【一九】地行　地上に居る。【二〇】飛廉　呂氏春秋に「風師を飛廉といふ」とあり、又楚辭に後飛廉使奔屬とあつて、應劭の解に「飛廉は神禽、能く風氣を致す」とある。【二一】東方青色龍　孔穎達の尙書疏に「曲禮に、軍陣象天の行を說く。前に朱雀、後に玄武、左に青龍、右に白虎。雀は即ち鳥なり、武は龜甲、捍禦を謂ふ、故に文を玄武に變ず。これ天星に龍虎鳥龜の形あるなり。東方は龍形を成し、西方は虎形を成す。皆南首して北尾。南方は鳥形を成し、北方は龜形を成す、皆西首にして東尾。見るべし、公の奇詭を極むるの文、必ずこれを經傳に本づいて、方に根據あるを、公の詩に云ふところ、文章豈不貴、經訓乃菑畬とは是れなり」とある。【二二】鯵沙　鯵は角の上に鎺ること、沙は不詳。【二三】呀呀　口を開く貌。【二四】於菟　楚地の方言にて虎を云ふ。【二五】鬣髦　毛の長き貌。【二六】蜡　祭の名、禮記に「天子の大蜡、八たび虎を迎ふ、その田豕を食ふを謂ふ」とある。【二七】縮頸　史記龜策傳に「龜、宋の元王を望見し、頸を延べて前み、三歩にして止まり、頸を縮めて卻き、その故處に復す」とある。【二八】夸娥　列子に「帝、夸娥氏の二子をして、二山を負はしむ」とあつて、註に「夸娥は蓋し神力あるものなり」とある。なほ、其詳は、南山の詩に見ゆ。【二九】卜師　周禮に「卜師は、龜の四兆を開くを掌る」とある。【三〇】鑽灼　鄭玄の儀禮注に「荊焞は龜を鑽灼する所以の者」とあり、莊子の外物に「神龜、能く知る、七十二鑽して遺筴なし」とあり、史記龜策傳に「龜を灼いて兆を觀、變化、窮まりなし」とあり、又「王者、軍を發して、將を行る、必ず龜を廟堂の上に鑽して、以て吉凶を決す」とある。元來龜卜をするには、錐を燒いて龜の背中に穴をあけ、それから灼くのである。【三一】內外官　漢書天文志に「經星、常宿中外官、凡そ百一十八名、積數七百八十三星」とある。【三二】其皤　皤は腹下の白き處。【三三】使兎操杵臼　五經通義に「月中に兎と蟾蜍とあり。月は陰なり、蟾蜍は陽なり、而して、兎と竝に明かなり、陰、陽に係るなり」とあり、楚辭の天問に夜光何德死則又育、厥利維何而顧兎在腹とあり、傅玄の擬天問に月中何有、白兎擣藥とある。【三四】桂樹　虞喜安の天論に「俗傳、月中の仙人桂樹、今、その初めて生ずるを觀るに、仙人の足、漸く已に形を成し、桂樹後に生

ずるを見る」とあり、酉陽雜俎に「月中に桂あり、兎あり、故に異書に言ふ、月桂高さ五百丈、下に一人あり、常に之を斫る、樹創隨つて合す」とある。【三五】恒娥　淮南子に「羿、不死の藥を西王母に請ふ、姮娥、これを竊んで月宮に奔る」とあつて、姮娥は羿の妻。【三六】太陽有室家　禮記の禮器に「大明は東に生じ、月は西に生ず、これ陰陽の分、夫婦の位なり」とある。【三七】使臣知義　朱註に「謂ふは、天、臣の心を感悟し、臣をして天意を默知せしむ、その下、云ふところ、有氣有形以下は、即ち天意なり」とある。

【題義】　この詩は、題を效二玉川子作一としてある。玉川子は、盧仝で、唐書の本傳に「仝、かつて月蝕の詩を作り、以て元和の逆黨を譏切す、韓愈、その工を稱す」とある。韓愈は、その詩がひどく氣に入つた處から、自分も一つ作つて見やうと思つたが、別に面白い趣向も浮ばぬ處から、盧仝の詩の餘り長すぎるのを切り詰めて、自分が作るならば、この位な事にして置くといふことを示す爲に、この一首を組成したのである。ある本には、效二玉川子作一の效の字を删に作つてあるといふが、實際は、删略に外ならぬ。盧仝は、元和時代に、王承宗が謀叛したことを月蝕に擬へたので、その中には、事實なども擧がつて居るし、當時の人の名も這入つて居るが、それでは、餘り露骨に失する處から、韓愈は、時事を言はず、唯だ月蝕を咎めた其荒幻怪奇たる構想だけを取つたのである。陳齊之は「退之、玉川子月蝕の詩に效ふといふは、乃ち盧仝の冗語を删るのみ、玉川に效ふに非ざるなり、韓は法度森嚴と雖も、便ち盧仝豪放の氣なし」といひ、方世擧は「盧詩、新書、以て元和の逆黨を譏ると爲す、然れども、これを稽ふるに、歲月合はず、蓋し、元和の初、宦官すでに橫恣、故に之を譏る、逆黨の爲にするに非ざるなり」といつて居る。そして、朱熹は「盧韓の二詩、必ず爲にするところあつて作るならむ、但だ未だ以てその指すところ、何人何事たるかを見るあらざるのみ。新書、もとより謬れり、方說も、恐らくは、未だ必ずしも然らざるなり」とあるが、矢張、方說が略ぼ事實を得て居るやうである。それから、盧仝の原作は、參照上必要であるが、篇幅が餘り長いから、餘論の項中に付載することにする。

【詩意】　元和五年庚寅十一月十四日、夜半三更の頃に當り、森森たる萬木も僵れむとし、寒氣は非常に烈しく、それで居て、空は一體に頑然として、風がない。この夜の極めて物すごき時に當つて、その形、白玉盤の如き明月が、完完として天の東から上つた。すると、忽然、月を食つて仕舞ふものがあるが、如何なる蟲とも知らず、抑も如何なれば、月の如き極めて神聖なる物が、かかる狼狽の凶變に遇つたのであるか。かくて、月の光が薄くなつたから、星は沙を撒いた樣に夥しく顯はれ出で、攢集して、各〻その光の强雄を爭ふが如く、それから、一盞の燈火は、月があつては、席を隈なく照らすことは出來なかつたが、ここに至りて、餤を吐くこと、長虹の如くである。この天象の變を見て居た玉川子は、覺えず淚を下し、ひとり庭上を獨行して居た。おもへば、日月は元來天の目玉であつて、天公が自分で之を保つこと能はざれば、吾が道の行はれざるは、言はずもがな。かつて、古老の言を聞いたが、月蝕は、蝦蟇の精が月を食ふのだといふこと。しかし、月は直徑千里もある圓いも

ので、これを蝦蟇の腹の中に入れるといふならば、何處に於て、汝は、その百醜の形を養ふのであるか。元來、蝦蟇は、のそのそと匍つて、早く飛ぶことは出來ないが、誰が之に敎へて、青空の上まで登つて、月の國に這入つて行かせたのであるか。むかし、黃帝は四目あり、帝舜は瞳が二つあつたと稱せられて居るが、天は、日月といつて、唯だ二つ目を持つて居るだけであるのに、何故に、蝦蟇などに食ふことを許して、片方の目を潰して仕舞つたのか、全く其譯が分からない。又堯の時には、十個の太陽が同時に出て、暑くて耐まらぬから、堯は大水を呼び、之を浸して消して仕舞はうとして、萬國の赤子が魚頭になることすら顧みなかつた。この時、もし蝦蟇が出て來て、日を食つたならば、まことに善いので、唯だ一つ殘して、八つ九つまで食つた處で、貪食の惡名を貽すことは無かつたであらう。それから、赤い龍は、太陽の車を引き、黑い三足の烏は、太陽の中に居るが、それが十も揃つて天上に顯はれたならば、口を燒く程の暑さであつたらう。そこへ蝦蟇が出て來て、龍の鱗とか、黑烏の羽とかいふものを薙ぎ倒して、頭から一呑にすれば、如何に蝦蟇の腹が大きくても、飢腸は忽ち充滿して、死に至るまで鳴くこともなく、汝も、定めて好都合であつたらうに、今頃になつて、月を食ふから、以ての外の次第、その罪、死に當し、天の網で取り圍んで、汝を逃さぬ樣にして、屹度刑罰を行はねばならぬ次第である。そこで、玉川子は、庭に立つて天に向つて云ふには、私は地上に居る賤臣盧仝と申すもの、再拜して、敢て天公に訴へたいことがある。臣に一寸の刃があるから、これを以て、彼の月を食ふ凶蟇の腸を刳ることも出來ませう、しかし、何分にも、天に登るべき梯子もなく、從つて天上の殿階には、臣の足跡を容るべき餘地がない、それではといふので、上奏文を書いて、東南の風に寄せ、天門の西北から、風に依つて通じ、丁寧に天公の耳に附し、その事の漏れぬ樣にしたかつたが、わが命、正に薄く、風の神の飛廉が怠け者であつて、何と賴んでも、わが言ふことを聞き入れぬから仕方がない。そこで、仕方がないから、天上の星を眺めて見ると、二十八宿の中で、東方の青龍は、牙も角も備はつて、呀呀然として居り、その從官たる百餘座の星どもは、特別の御手當を頂戴して居るにも拘はらず、この月蝕に際して、知らぬ顏をして居るのは、不屆至極で、こんな事なら、龍となつて、天河に屈託して居る必要は、どこに在るか。次に南方朱雀の宿を見ると、その赤鳥は、尾はちぎれても、翅は上に張つて、しつかりして居るのに、頭上に於ける月蝕を見て、徒に呀呀と口を開いて居るだけで、蝦蟇が、朱雀の口先の前を掠めて、月の處に行つても、事なかれ主義で、折角嘴を持ちながら、蝦蟇を啄むことをせぬは、不都合ではないか。西方白虎の宿では、虎が西に蹲まり、その側には、旗旆の如き星が立派な形をして居る。元來、白虎は、西方の白帝に附隨して祀られ、又天子が大蜡の祭をするときには、田豕を食ふ效用があるといつて、特に色色の供へ物をして禮遇を加へて居るのに、今、月が惡物に食はれるのを見て、能くも、我慢がして居られたもので、恐ろしく大きな口に齒牙を挾んで居ても、さつぱり役に立たぬでは無いか。北方の玄武は、黑龜で、

非常に姦を怯れ、寒さを怕れ、ただでさへ頭を縮めて、殼の中に引込んで自ら遮つて居る位、夸娥の樣な力のある神樣をして、無理に之を引き出さしめた處で、卜師が錐を燒いて、背中に一ぱい星の羅列するが如く穴を明けて、それから灼くといふ外には、何等の役にも立たぬ。この外の內外官たる羣星は、元と瑣細なもので、深く咎めるにも及ばない。臣、願はくは、これ等曠職の手合を掃除し、愼んで、勝手に喋舌つて騷がしい樣なことの無いやうにし、その光耀を奪つて、我が月に歸し、月の盲になつた光明を再び鏡の如く淨くして、一點の瑕もない樣に致したい。それから、月を食つた不都合なる蛙は、拘繫して、主府の官に引渡して、天帝、自ら箸を取つて、その腹の膏で白くなつて居る處を切つて召し上つたならば、宜しう御座いませう。さうすると、元の通り、月中に於ては、兎が杵と臼とを操り、玉階の桂樹は、婆娑として搖ぎ出し、姮娥も宮室に歸り、太陽も其配偶を全うすることが出來るであらう。

【餘論】この詩は、長短參差、甚だ複雜であるが、古詩の原則として、韻が換はれば意も換はるのであるから、換韻に注意して、韻の切れる處で、切つて讀むと、意味も自然に分かる譯である。起首、元和庚寅斗挿レ子より是夕吐レ銜如二長虹一までは東韻で、月蝕の景を寫し、玉川子涕泗下より何處逃二汝形一に至るまでは、庚と陽とを通用して、蝦蟇の精が月蝕を致すことを敍し、玉川子立二於庭一より薄命正値二飛廉慵一に至るまでは、東と陽とを通用して、上天に上書することを述べ、東方青色龍より太陽有二室家一に至るまでは、麻と歌とを通用し、青龍、朱雀、白虎、玄武の無能より、おのれが悉く此妖變を掃除したいといふ志望を記し、天雖レ高耳屬レ地より、結末、以レ蛙磔死に至るまでは上聲紙と去聲寘とを通用して、收束を爲して居る。朱竹垞は「世を驚かし、俗を駭かす、大勢亦た天問招魂等に本づいて脫胎し來る。學力才氣、自ら及び易からず。然れども、但だ偶ま一たび之を爲すべし、二あるべからず。今、效ふといへば二なり、還た館本に從つて刪に作るを是と爲す」といひ、何義門は「前半、仝の冗語を刪つて入る、後は乃ち韓公自ら運す、止だ法嚴なるのみならず、更に理を以て勝るなり」といひ「按ずるに、盧詩、流宕に過ぐ、但だ亦た删節太だ多く、暗に近きものあり」といひ「方は以て宦官を譏ると爲す、而して考異に謂ふ、方說、恐らくは亦た未だ必ずしも然らずと。按ずるに、方說、未だ然らずと爲さずむばあらず。この年、吐突承璀、成德を討ち、功なくして還る。憲宗、誅竄を加へず。この詩、蓋し宦官の明を蔽ふを嫉むのみ」といつた。それから、參照に供する爲に、盧仝の月蝕詩の全篇を下に掲げることにする。

新天子卽位五年歲次二庚寅一。斗柄挿レ子調二黃鍾一。森森萬木夜殭立。寒氣𣋳頑無レ風。爛銀盤從二海底一出。出來照二我草屋東一。天色紺滑凝不レ流。氷光交貫寒曈曨。初疑白蓮花。浮出二龍王宮一。八月十五夜。比並不レ可レ雙。此時怪事發。有レ物吞食來二輪中一。輪如二壯女斧斫壞一。桂似二雪山風拉摧一。百鍊鏡照見レ膽。平地埋二寒灰一。火龍珠飛出レ腦。卻入二蚌蛤胎一。摧二壞破壁一眼看盡。當レ天一搭如二煤炲一。磨レ蹤滅レ

跡須臾間。便似萬古不可開。不料至神物。有此大狼狽。星如撒沙出。爭頭事光大。奴婢炷
燈看。揜菼如玳瑁。今夜吐燄如長虹。孔隙千道射戶外。玉川子涕泗下。中庭獨自行。念此日
月者。太陰太陽精。皇天要識物。日月乃化生。走天汲汲勞四體。與天作眼行光明。此眼不
自保。天公行道何由行。吾見日月家有說。望日蝕月月光滅。兩眼不相攻。此說吾不容。又孔
子師老子。云五色令人目盲。吾恐天似人。好色則喪明。幸且非春時。萬物不嬌榮。青山破
瓦色。淥水冰崢嶸。花枯無女豔。鳥死沈歌聲。頑冬何所好。偏使一目盲。又聞古老說。月蝕蝦
蟇精。徑圓千里入汝腹。如此癡騃阿誰生。可從海窟來。便解緣青冥。恐是眶睫間。揞塞所
化成。黃帝有二目。帝舜重瞳明。二帝懸四目。四海生光輝。吾不遇二帝。滉瀁不可知。何
故瞳子上。坐使蟲豸欺。長嘆白兎擣靈藥。恰似有意防姦非。藥成滿臼不中度。委任白兎
夫何爲。憶昔堯爲人。十日燒九州。金爍水銀流。玉熠丹砂燋。六合烘爲窰。堯心增百憂。天見
堯心憂。勃然發怒決洪流。立擬沃殺九日妖。天高日走沃不及。但見萬國赤子戢戢生魚頭。此
時九御導九日。爭持節幡麾幢旒。駕車六九五十四頭蛟螭蚪。掣電九火輈。汝若蝕開齟齬輪。
御轡執索相爬鉤。推蕩轟訇入汝喉。紅鱗燄鳥燒口快。翎鬣倒側聲醆鄒。撑腸拄肚礧礧如山丘。
自可飽死更不偸。不獨塡飢坑。亦解堯心憂。恨汝時當食埋頭擫腦不肯食。不當食張唇
哆觜食不休。食天之眼養逆命。安得上帝請汝劉。嗚呼人養虎被虎齧。天媚蟇被蟇瞎。乃

知恩非類。一一自作孽。吾見患眼人。必索良工訣。想天不異人。愛眼固應一。安得常娥
氏。來習扁鵲術。手操舂喉戈。去此睛上物。初既擠朦朧。既久如抹漆。但恐功業成。便此不吐
出。玉川子又涕泗下。心禱再拜額搨沙土中。地上蟣蝨臣仝告愬帝天皇。臣心有鐵一寸。可刳妖蟇
癡腸。皇天不爲臣立梯磴。臣血肉身無由飛上天揚天光。封詞付與小心風。颾排閶闔入
紫宮。密邇玉几前。劈拆奏上臣仝頑愚胸。敢死橫千天甚長。東方蒼龍角。插戟尾捭風。當心開
明堂。統領三百六十鱗蟲。坐治東方宮。月蝕不救援。安用東方龍。南方火鳥赤潑血。項長尾短
飛跋刺。頭戴弁冠高逵枅。月蝕鳥宮十二度。鳥欲居停。主人不覺察。貪向何人家。行赤口毒
舌。毒蟲頭上喫。卻月不啄殺。虛貶鬼眼赤。突禽鳥罪不可雪。西方攫虎立踦踦。斧爲牙。鑿爲
齒。偸犧牲。食封豕。大蟇一臠。固當軟美。見似不見。是何道理。爪牙根天不念天。天若准
擬錯准擬。北方寒龜被蛇縛。藏頭入殼如入獄。蛇筋束緊束破殼。寒龜夏鼈一種味。且當臛其
肉。一底板沒信處。唯堪支牀脚。不中鑽灼。與天下十歲星。主福德。官爵奉董秦。忽使黯黮
生。覆尸無衣巾。天失眼不弔。歲星胡其仁。熒惑矍鑠。公執法大不中。月明無罪過。不糾蝕
月蟲。年年十月朝太微。支盧謫罰何災凶。土星與土性相背。反養福德生禍害。到人頭上死破
敗。今夜月蝕安可會。太白眞將軍。怒激鋒鋩生。恆州陣斬酈定遠。項骨脆甚春蔓菁。天唯兩眼失
一眼。將軍何處行天兵。辰星任廷尉。天律自主持。人命在盆底。固應樂見天盲時。天若不肯

信。試喚皐陶鬼一問。而今三台文章宮作上天紀綱。環天二十八宿磊落尚書郎。整頓排班行。劍握他人將。一肆太陽側。一肆天市旁。操斧代大匠。兩手不怕傷。弧矢引滿反射人。天狼呀啄明煌煌。癡牛與騃女。不肯勤農桑。徒勞含淫思。旦夕遙相望。蚩尤簸旗弄旬。始搥天鼓鳴璫瑱。枉矢龍蛇行。眉目森森張。天狗下舐地。血流河滂滂。譎險萬萬黨。構架何可當。眛目釁成就。害我光明王。請留北斗一星相北極。指揮萬國懸中央。此外盡掃除。沙磧如山岡。贖我父母光。當時恆星沒殞雨如抨槳。似天會事發。叱喝誅姦狂。何故中道廢。自遺今日殃。善善又惡惡。郭公所以亡。願天神聖心無信他人忠。玉川子詞訖。風色緊格格。近月黑暗邊。有似動劍戟。須臾蝦蟇精。兩吻自決坼。初露半个壁。漸吐滿輪魄。衆星盡原赦。一蟇獨誅磔。腹肚忽脫落。依舊挂穹蒼。光彩未蘇來。慘淡一片白。奈何萬里光。受此吞吐厄。再得見天眼。感荷天地力。或問玉川子。孔子修春秋。二百四十年。月蝕盡不收。今子咄咄詞。頗合孔意不。玉川子笑答。或請聽逗遛。孔子父母魯。諱魯不諱周。書外書大惡。故月蝕不見收。余命唐天。口食唐土。唐禮過三。唐樂過五。小猶不說。大不可數。災沴有無小大瘉。安引衰周。研覈可否。日分晝。月分夜。辨寒暑。一主刑。一主德。政乃舉。孰爲人面上。一目偏可去。願天完兩目。照下萬方土。更不瞽。萬萬古。

随分長いが、實際冗語も少くない處から、韓愈は、刪修を試みたので、兩者を精細に對比すれば、自然得るところが有らうと思はれる。

孟生詩

孟生江海士。古貌又古心。
嘗讀古人書。謂言古猶今。
作詩三百首。窅(一)默咸(二)池音。
騎驢到京國。欲和薰(三)風琴。
豈識天子居。九重鬱沈(四)沈。
一門百夫守。無(五)籍不可尋。
晶(六)光蕩相射。旗戟翩以森。
遷(七)延乍却走。驚怪靡自任。
舉頭看白日。泣涕下霑襟。
朅來遊公卿。莫肯低華簪。
諒非軒(八)冕族。應對多差(九)參。
萍蓬風波急。桑(一〇)楡日月侵。

孟生の詩

孟生江海の士、古貌又古心、
嘗て古人の書を讀んで、謂うて言ふ、「古も猶ほ今の」ごとしと。
詩を作る三百首、窅默たり咸池の音。
驢に騎して京國に到り、薰風の琴に和せむと欲す。
豈に識らむや、天子の居、九重鬱として沈沈たるを。
一門百夫守る、籍なくむば尋ぬべからず。
晶光蕩として相射る、旗戟翩とし以て森たり。
遷延、乍ち却走、驚怪、自ら任ふるなし。
頭を擧げて、白日を看、泣涕下つて襟を霑す。
朅來、公卿に遊び、肯て華簪を低るるなし。
諒に軒冕の族に非ず、應對多くは差參す。
萍蓬、風波急なり、桑楡、日月侵す。

奈何從進士。此路轉嶇嶔(一一)。　奈何ぞ進士に從ふ、この路、轉た嶇嶔。

異質忌處羣。孤芳(一二)難寄林。　異質、羣に處るを忌まる、孤芳、林に寄せ難し。

誰憐松桂性。競愛桃李陰。　誰か松桂の性を憐まむ、競うて桃李の陰を愛す。

朝悲辭樹葉。夕感歸巢禽。　朝には、樹を辭するの葉を悲み、夕には巢に歸るの禽に感ず。

顧我多慷慨。窮簷時見臨。　我を顧みて慷慨多し、窮簷時に臨まる。

清宵靜相對。髮白聆苦吟。　清宵、靜に相對し、髮白くして、苦吟を聆く。

採蘭(一三)起幽念。眇然望東南。　蘭を採つて、幽念を起し、眇然として、東南を望む。

秦吳(一四)修且阻。兩地無數金。　秦吳、修うして、且つ阻たる、兩地、數金なし。

我論徐方牧(一五)。好古天下欽。　我、徐方の牧を論ず、古しへを好んで、天下欽す。

竹實(一六)鳳所食。德馨(一七)神所歆。　竹實は鳳の食するところ、德馨は神の歆するところ。

求觀衆丘小。必上泰山岑。　衆丘の小を觀むことを求むれば、必ず泰山の岑に上れ。

求觀衆流細。必泛滄溟深。　衆流の細を觀むことを求むれば、必ず滄溟の深きに泛べ。

子其聽我言。可以當所箴。　子、其れ我が言を聽かば、以て所箴に當つべし。

既獲則思返。無爲久滯淫。　既に獲ば、則ち返らむを思ひ、久しく滯淫することを爲す無かれ。

卞和(一八)試三獻。期子在秋砧(一九)。　卞和、試に三獻、子を期すること、秋砧に在り。

【字解】【一】 窅默　窈然として默つて居る。【二】 咸池　堯の樂の名。【三】 薰風琴　家語に「舜、五絃の琴を彈じて曰く、南風之薰兮」とある。【四】 沈沈　宮室深邃の貌。【五】 無籍　應劭の漢書註に「籍は、二尺の竹牒たり、その年紀名字物色を記し、これを宮門に懸け、省を按じて相應ずれば、乃ち入るを得るなり」とある。【六】 晶光　說文に「晶は光輝なり」とある。【七】 遲延　あとしざりする。【八】 軒冕　軒は大車、冕は冠、高位高官の者をいふ。【九】 差參　參差に同じ。藝苑雌黃に「古詩押韻、或は語顚倒して理害なきものあり。退之、參差を以て差參となし、玲瓏を以て瓏玲となす、是れなり」といひ、漢皐詩話に「韓愈孟郊輩才豪、故に湖江、白紅、慨慷の句あり、後人、亦た倣效し難し」といつて居る。もとより、玲瓏、慷慨等を倒用した例は、古人にもあるが、韓孟輩に至つて、愈よ大膽に成つたことは事實である。【一〇】 桑榆　淮南子に「西日、影を垂れて樹に在るを桑榆といふ」とある。【一一】 嶇嶔　文選李善註に「山險峻の貌」とある。【一二】 孤芳　文選顏延年の弔屈原文に「物は堅芳を諱み、人は明潔を忌む」とあり、李白の詩に「羣沙穢明珠、衆草凌孤芳」とある。【一三】 採蘭　束晳の南陔の詩に「循彼南陔、言採其蘭、眷戀庭闈、心不遑安」とあり、王伯大の註に「親を念ひ、歸るを思ふを言ふなり」とある。【一四】 秦吳　秦は長安、吳は東野の故鄉を指す。【一五】 徐方牧　張建封をいふ。【一六】 竹實　鄭玄の毛詩箋に「鳳凰は梧桐に非ざれば棲まず、竹實に非ざれば食はず」とある。【一七】 德馨　書經に「黍稷、馨しきに非ず、明德、惟れ馨し」とある。【一八】 卞和　琴操に「卞和、玉を得、楚の懷王に獻ず、以て欺謾すとなし、その一足を斬る。懷王死して、子平王立つ、和、復た之を獻ず、平王、又以て欺くとなし、その一足を斬る。平王死して子立つ、これを荊王となす、和、復た之を獻ぜむとし、その玉を抱いて哭し、晝夜止まず、荊王、これを剖かしむ、中に果して玉あり、乃ち和を封じて陵陽侯と爲す」とある。【一九】 秋砧　文選李善註に「砧は、帛を擣くの質なり」とある。

【題義】蔣註に「東野の詩に、年幾んど五十、はじめて尊夫人の命を以て、京師に來り、進士の試に從ふと。而して、登科記に、東野の及第は、貞元十二年に在り、この詩は、未だ第せざるの前に作り、その下第を以て、之を送つて、張建封に徐に謁せしむるなり。貞元四年、建封、徐州に鎭す。李習之、かつて、書を以て東野を薦めて曰へるあり、郊、將に他人に得られむとす、しかも大に世に立つあると、その短命にして死すると、皆知るべからず。二者、將に郊に一あらむとす。他日、執事の爲に之を惜むと。その後、韋莊、及第せざる人に追贈せむことを請ひ、郊、その中に在り。而して、摭言に謂ふ、莊、郊を以て第せざるものと爲すは誤なり、と。且つ曰く、郊は貞元十二年に及第し、徐州の幕に佐として卒すと。すなはち、東野、果して建封に用ひらる。今、新舊史及び公が東野の墓に誌するを考ふるに、かつて、鄭餘慶に東都に佐たり、餘慶、興元に鎭するとき、奏して、從事と爲す、辟書下つて卒すと。未だ嘗て徐に佐たらざるなり。摭言誤れるか、將に之を用ひむとし、未だ及ばずして餘慶に得らるるか、卒に習之の料るところの如きか。史を按ずるに、建封の卒は貞元十六年を以てす、而して、東野、建封に後るること十四年にして卒す。或は、建封將に之を用ひむとし、未だ及ばずして、已に卒するも、亦た知るべからざるなり。時に、東野も亦た韓愈・李觀に答へ、因つて張徐州に獻するの詩あり、富別愁在レ顏、貧別愁銷レ骨、云云あり」といつて居る。こみ入つた議論は、姑らく之を措き、この詩は、孟東野が折角上京した處が、進士試驗に落第したるに因り、韓愈は、兎も角も、衣食の道を得る爲に、これを徐州節度使の張建封に紹介し、東野が愈よ其地に赴くに就いて、その行を送つたものとして置かう。

【詩意】孟東野は、揚子江と東海との間の生まれで、風采も、心も、共に古めかしく、かつて古人の書を讀んで、むかしの堯舜時代も、矢張今日の樣だと思ひ込んで居た。平生、詩を作ること三百篇、咸池の樂に比すべき高い調べも、窅默して居ては、仕方がないといふので、驢に騎して都に上り、これを天子の五絃薰風の琴の調子に合せて、初めて世に現はしたいと決心した。ところが、今の世では、さう無造作に行かず、天子は、九重の奥深き處に居らせられ、一門ごとに百人の番兵が居て、門鑑を持たぬものは、中に入ることが出來ない。加之、日月の光は、蕩蕩として、互に相射り、旗さし物や、矛などで嚴しく護衞して居るから、覺えず、たじろぎ、却つて驚き怪んで、自ら勝へることが出來ず、頭を擧げて、白日を見れば、涙が自然に下つて、襟を霑す位。天子に謁見することは、到底六づかしいから、今度は、公卿の間に遊ばうとしたが、その公卿も亦た華簪を垂れ、御辭儀をして、東野を迎へるものなどは無く、軒冕の族でもない普通の人士は應對さへして呉れない。かくて、東野は、浮草が風波に漂はされた如く、愚圖愚圖して居る内に、日の桑楡に逼ると同じく、追追年を取る。して見ると、進士に及第して、それから立身しやうなどいふのは、まことに容易ならぬことである。東野は、もとより異質の者であつて、羣小人の中に立ち交ることも出來ず、孤芳が雜木林に生を

寄せて安穩で居ること難きと同じく、松桂の如き立派な本質は、誰も好むものはなく、桃李の花咲いて陰を成す方が、はるかに俗受けが善い。そこで、東野は、朝に落葉の樹を辭するを見て、わが身のはかなきを悲み、夕に、巣に歸る鳥を見て、早く故鄕に歸りたいと思つた。その間、韓退之は慷慨の人だといつて交を結び、東野は數ば我がむさくるしい軒端の家を尋ねて與れた。ある淸宵に於て靜に對坐し、髮が白くなるまで、東野の苦吟するのを聞いたことがある。やがて、東野は、かの古い詩に見ゆる如く、蘭を采るにつけて、故鄕に還つて母と一緒に居たいといふので、眇然として東南の方を望んだが、この長安と吳地とは、相去ること何千里といふ位、數金さへ持ち合はさぬ位では、とても、旅が出來ない。そこで、どうしたものかと色色自分も考へたが、刻下徐州の長官たる張建封は、古しへを好んで、天下の人から敬慕されて居る位の人、由來、竹の實は鳳凰にして初めて食ふべく、神の享けられるは、黍稷の馨しきに非ずして、德の馨しきに在るといふから、東野を歡迎するものは、この人より外に誰も居ない。東野は、人の幕客に成ることは好まぬかも知れぬが、衆丘の小なるを見むと欲せば、先づ泰山の頂に登るべく、衆流の細なるを見むと欲せば、必ず滄溟の深きに泛ぶを要する通り、東野も、座右の箴として、世間の事を知る爲には、わが此言を聽き入れて、是非一度、張建封の如き人の幕中に游ぶ必要がある。かくて金でも貯へたならば、長安に返つても善いので、何時までも、そこに留まつて居るには及ばぬ。むかし、卞和は、足を斬られるをも厭はず、三たび玉を獻じて、初めて志を達した位であるから、一度の落第位には氣を腐らせず、秋、砧の聲する頃、重ねて上京して、試驗を受ける積りで、取り敢へず、徐州に往つて、勉强して居たら善からう。

【餘論】朱竹垞は「平穩好詩」といつたが、意義稍や淺近なるだけに、あつさり筋道が通つて、至極平易に出來て居る。

射訓狐

訓狐を射る

有鳥夜飛名訓狐。　鳥あり、夜飛ぶ、訓狐と名づく、

矜凶挾狡誇自呼。　凶に矜り、狡を挾んで、誇つて自ら呼ぶ。

乘時陰黑止我屋。　時の陰黑に乘じて、我が屋に止まる、

聲勢慷慨非常蟲。　聲勢慷慨、常に非ずして蟲なり。

安然大喚誰畏忌。　安然、大に喚んで、誰をか畏忌せむ、

造作百怪非無須。　百怪を造作して、須ふるなきに非ず。

聚鬼徵妖自朋扇。　鬼を聚め、妖を徵して、自ら朋扇し、

【字解】【一】大喚　曹子建の鷂雀賦に不肯首服、捩頸大喚とある。

擺掉栱桷頽墍塗。　栱桷を擺掉して、墍塗を頽す。
慈母抱兒怕入席。　慈母、兒を抱いて、怕れて席に入る、
那暇更護雞窠雛。　那ぞ更に雞窠の雛を護るに暇あらむや。
我念乾坤德泰大。　我念ふ、乾坤、德、泰だ大、
卵此惡物常勤劬。　この惡物を卵にして、常に勤劬す。
縱之豈卽遽有害。　これを縱すも、豈に卽ち遽に害あらむや。
斗柄行拄西南隅。　斗柄は行く、西南の隅に拄へむ、
誰謂停奸計尤劇。　誰か謂はむ、姦を停むる、計、尤も劇しと。
意欲唐突羲和烏。　意、羲和の烏に唐突せむと欲す。
侵更歷漏氣彌厲。　更を侵し、漏を歷て、氣彌よ厲、
何由僥倖休須臾。　何に由つてか、僥倖休むこと須臾。
杳余往射豈得已。　杳、余、往いて射る、豈に已むを得むや。
候女兩眼張睢盱。　女が兩眼の張つて、睢盱たるを候ふ。

【二】栱桷　景福殿賦に欒栱夭蟜而交結とあり、宋玉の招魂に仰觀二刻桷一畫二龍蛇一些とある。欒梁の類。
【三】墍塗　書經に惟其塗墍茨とあつて、漆喰の類。
【四】羲和烏　前に見ゆ、太陽の中に居る烏。
【五】睢盱　前に縣齋有懷の下に見ゆ。

梟驚墮梁蛇走竇。　梟は驚いて梁より墮ち、蛇は竇に走る。
一夫斬頸羣鶵枯。　一夫頸を斬つて、羣鶵枯る。

【六】一夫　或は一矢に作る。

【題義】　蔣註に「唐五行志、鵂鶹、一名は訓狐。或は曰く、訓狐は其聲なり、因つて以て之に名づくと。この詩、貞元中に作る。時に、德宗、强明を以て自ら任じ、裴延齡、韋渠牟等に倚つて、天下の事を商り、自ら明なりと謂うて、卒に不明に陷る。士の浮躁、進むことを甘んずるもの、爭うて其門に出づ。詩意、端に諷するところあるなり。梅聖俞集に擬二韓吏部射二訓狐一の詩あり、亦た各意を寓するところありと爾か云ふ」とある。して見ると、この詩は、德宗の末年、王叔文等の一黨が惡事を企てたに就いて、その巨魁を斃せば、餘黨は苦もなく亡びて仕舞ふといふ意味で作つたので、前の永貞行などと略ぼ同時のものであらう。

【詩意】　訓狐と名づくる鳥は、夜になると飛んで、樣樣の惡戲を爲し、そして、自分では訓狐といふ名を呼んで誇つて居る。現に、夜中の陰黑なるに乘じて、我が家の屋根に止まり、如何にも慷慨らしく、且つ非常に龐大なる聲を發して居る。それが安然として、大聲に喚ぶのは、誰を畏忌するのか、唯だ鳴くばかりならば善いが、必ず百怪を造作するといふから、まことに憎むべきものである。かくて、鬼魅妖魔の類を呼び集め、家の梁をも震ひ動かし、漆喰まで銜き壞はすから困るので、慈母は、子供

を抱いて、座敷の中で小さくなつて恐れて居る位。更に進んで、雞の巣の中なる雛を食ふかも知れぬが、それを顧る暇さへ無い。われ念ふに、乾坤の德は、廣大なもので、かかる惡物を生出して、常に苦勞して居る。どうせ、天地の德の大なるに甘へて、惡事をするのだから、棄てて置いた處で、今すぐに害になるといふ譯でもない。北斗の柄が西南隅にかかり、程なく夜が明けると、訓狐の性質として、目に物が見えず、何も出來ないから、打遣つて置いても宜しいと思つて居ると、反對に、其姦計は、益す盛になつて、太陽にさへ唐突しやうとする位。そこで、夜が段段ふけて、水時計の響が數を增すに從つて、氣が愈よ荒くなる上は、もう彼を宥して置くことは出來ぬ。我輩は、訓狐の目のぴかぴかと光つて居る處を見澄まして、矢を放つと、ねらひ違はず、見事に的中し、さしもの梟、即ち訓狐は、俄に驚いて梁より落ち、その聲につれて陰惡な事をして居た蛇なども、穴の中にもぐり込んで仕舞つた。そこで、我輩が梟の頸を斬つたならば、その雛どもは、自然と死んで仕舞ふので、何事につけても、その頭株の者を平らげるといふことが第一必要である。

【餘論】朱竹垞は「前半、聲勢を逑ぶること、宛然たり、語、粗厲に涉ると雖も、然れども、恰も其似を得たり」といつて居る。

將歸贈孟東野房蜀客　將に歸らむとして孟東野・房蜀客に贈る

君門不可入。勢利互相推。　君門入るべからず、勢利互に相推す。
借問讀書客。胡爲在京師。　借問す、讀書の客、胡すれぞ京師に在るや。
擧頭未能對。閉眼聊自思。　頭を擧げて、未だ對ふる能はず、眼を閉ぢて、「聊か自ら思ふ。」
倏忽十六年。終朝苦寒饑。　倏忽十六年、終朝、寒饑に苦む。
宦途竟寥落。鬢髮坐差池。(一)　宦途、竟に寥落たり、鬢髮、差池たるに坐せらる。
潁水淸且寂。箕山坦而夷。(二)　潁水、淸且つ寂、箕山、坦にして夷。
如今便當去。咄咄無自疑。(三)　如今、便ち當に去るべし、咄咄、自ら疑ふ無かれ。

【字解】【一】坐差池　蔣註に「晉の陶侃曰く、老子婆娑たるは、正に君が輩に坐せらると。坐の字、これに本づく」とある。【二】箕山　箕潁の事は、贈侯喜の詩に詳しく見えて居た。この二句は、例の祭十二郎文に「當に數頃の田を箕潁の上に求むべし」といへると同義。【三】咄咄　後漢書嚴光傳に「咄咄子陵」とあり、晉書殷浩傳に「浩、桓温に廢せらる、但だ終日空に書し、咄咄怪事の十七年四字を作すのみ」とある。

【題義】原註に「蜀客、字は項卿」とあつて、これも、韓愈の友人である。胡渭の說に「貞元二年丙寅、公、年十九、はじめて京師に至る。この詩に云ふ、倏忽十六年と。すなはち、この歲は十七年辛巳たり。公、京師に在つて、選に調せられ、三月將に東に還らむとす、故に詩を賦して以て贈るなり」

とある。すると、この詩は、韓愈が三十五歳の時、三たび調せられ、しかも遂に志を得ざりしに因り、長安より洛陽に歸らむとし、乃ち孟房二人に留別したものである。

【詩意】都に上つて調選に從ひ、折角一官を得たいと思つて居たが、君門入るべからず、今は勢利ある人が政爭を事として居る世の中であつて、讀書の客などは、京師に居つた處で仕方がない。そこで、頭を擧ぐるも對ふる能はず、目を閉ぢて獨りで思ひ亂るるのみである。はじめて上京してより、ここに十六年、終日飢寒に苦み、宦途は寥落して、志を達せず、鬢髪の白くなるのも、うまく世渡りが出來ぬからである。おもへば、故郷に於ては、潁水淸くして靜に、箕山は平坦で、地勢もなだらかであつて、隱居するには持つて來いといふ處。そこで、我輩は、心に決して、復た疑ふなく、都を後にして、其處に立ち去らうとするのである。

答二孟郊一　孟郊に答ふ

規模背二時利一。文字覰二天巧一。　規模、時利に背き、文字、天巧を覰ふ。

人皆餘二酒肉一。子獨不レ得レ飽。　人、皆酒肉を餘す、子、獨り飽くことを得ず。

纔春思已亂。始秋悲又攪。　纔に春にして思すでに亂る、始めて秋にして悲又攪る。

朝餐動及レ午。夜諷恒至レ卯。　朝餐、動もすれば午に及ぶ、夜諷、恒に卯に至る。

名聲暫羶腥。腸肚鎭煎熠。　名聲暫く羶腥、腸吐、鎭しへに煎熠。

古心雖(一)自鞭一。世路終(二)難レ拗。　古心、自ら鞭つと雖も、世路終に拗し難し。

弱拒喜張レ臂。猛挐閒縮レ爪。　弱拒、善く臂を張り、猛挐、閒に爪を縮む。

見レ倒誰肯扶。從レ嗔我須レ齩。　倒るるを見て、誰か肯て扶けむ、嗔に從つて、我、須らく齩むべし。

【字解】【一】鞭自鞭　蔣註に「鞭の字、蓋し、莊子、その後より之を鞭つ者なりを用ふ」とある。【二】終難拗　韻衡の涵儒に「その中を拗し去る」とあつて、拗は矯め直す。

【題義】蔣註に「東野集に、公に別るるの詩あり、この篇、疑ふらくは、公の以て答ふるところならむ。公、貞元十二年七月、董晉に汴州に佐たり」とあつて、大方、さうだらうと思はれる。東野の原作は、汴州別二韓愈一と題して、全篇は左の如くである。

不レ飮二濁水瀾一。空滯二此汴河一。坐見二此岸氷一。盡爲二還レ海波一。四海不レ在レ家。敝服斷線多。遠客獨頗頓。春英落婆娑。汴水饒曲流。野桑無二直柯一。但爲二君子一云。歎息終靡レ他。

【詩意】おのが大體の考は、時勢に對して不利であるし、文字を以て、造化の祕密を覰はうとして居る。多くの人は、時を得顔に、酒肉に飽いて居るが、東野は、ひとり然らず、春になつても、毎に思

ひ亂れ、秋は悲みが愈よ掻き攪される。米が無くて、處處に乞ふ處から、朝飯は、動もすれば、晝になり、それで、夜は讀書して、卯の刻、卽ち曉にも及ぶ位、名聲だけは香しくして腥味を帶びて居るが、腸の中には、一向何も取り入れぬから、脂氣がなくて、唯だ煎れて居る。古心、自ら𥌒つて、何處まで勵む積りであるか、もとより背馳して居るから、世路を矯め直して、眞直に行くことも出來ない。今の世は、相手が弱ければ、臂を張つて之に掛り、强ければ、爪を縮めて、決して揶揄しないといふ風で、人が倒れたからといつて、誰も扶け起しもせず、腹は立つても、まことに仕方がないから、齒を噛んで、自ら耐へる外はない。

【餘論】洪興祖は「規模背二時利一、文字覰二天巧一、これ東野に效ふ。樊宗師に酬ゆるに云ふ、梁惟西南屛、山厲水刻屈、これ宗師に效ふ。魯直云ふ、子瞻、詩、一世に妙、乃ち庭堅の體に效ふと云ふ。蓋し、退之、戲に孟郊・樊宗師の比に效ひ、文を以て滑稽とするのみ」といひ、樊汝霖は結二句を評して「この聯、公、子厚の墓に誌して、謂はゆる、陷穽に陷るも、一たび手を引いて之を救はず、反つて之を擠し、又石を下すもの、是れなり」といひ、朱竹垞は全篇を評して「句句響快、生劊の意なくむばあらずと雖も、卻つて、硬澁ならず」といつて居る。

從仕　仕に從ふ

居閒食不足。從仕力難任。

閒に居れば食足らず、仕に從はむとすれば力任へ難し。

兩事皆害性。一生恒苦心。

兩事、皆性を害す、一生、恒に心を苦む。

黃昏歸私室。(一)惆悵起歎音。(二)

黃昏、私室に歸り、惆悵、歎音を起す。

棄置人間世。(三)古來非獨今。

人間の世を棄置せよ、古來獨り今のみに非ず。

【字解】〔一〕私室　自宅。〔二〕歎音　歎聲に同じ。〔三〕棄置人間世　漢書張良傳に「願はくは、人間の事を棄て、赤松子に從つて遊ばむのみ」とある。又莊子に人間世といふ篇名もあり、杜甫の句に洒肆人間世とある。

【題義】從仕とは、仕官するといふこと。この詩は、仕官の面白くないことを敍して、その感慨を述べたのである。

【詩意】極めて閒なる處に居れば、飯が食へなくなるし、役人に成れば、働かねばならぬから、力が堪へ難い。いづれにしても、我輩に取つては、性を害するもので、人間の一生は、苦心の仕通しである。そこで、薄暮の頃、仕事を終つて、自宅に歸り、惆悵として、覺えず嘆聲を發した。この人間の世は、もう棄てて仕舞ひたいと思ふ位だが、ひとり、今ばかりではなく、むかしから、かうしたものであるから、どうにも、仕方がない。

【餘論】朱竹垞は「起四句は貧士の通患、後四句は尙ほ覺るも應に醒めざるべし」といつて居る。

短燈檠歌

短燈檠の歌

長檠八尺空自長。　長檠八尺、空しく自ら長し。
短檠二尺便且光。　短檠二尺、便且つ光る。
黃簾綠幕朱戶閉。　黃簾綠幕、朱戶閉ぢ、
風露氣入秋堂涼。　風露の氣は、秋堂に入つて涼し。
裁衣寄遠淚眼暗。　衣を裁し、遠きに寄せむとして淚眼暗く。
搔頭頻挑移近牀。　頭を搔き、頻に挑げて、移して牀に近し。
太學儒生東魯客。　太學の儒生、東魯の客、
二十辭家來射策。　二十、家を辭して、來つて策を射る。
夜書細字綴語言。　夜、細字を書して、語言を綴る。
兩目眵昏頭雪白。　兩目眵昏、頭雪白。
此時提攜當案前。　この時、提攜して案前に當る、
看書到曉那能眠。　書を看て曉に到るまで、那ぞ能く眠らむ。

【字解】【一】挑　燈心を搔き立てる。
【二】太學儒生東魯客　韓愈は、嘗て四門博士となり、もと東魯の人なるが故に云ふ。
【三】射策　試驗の名。顏師古の說に「射策とは、疑問難論をなし、之を策に書し、その大小を量り、署して甲乙の科となし、列して之を置き、彰顯せしめず、射むと欲するものあれば、取つて之を揮び、以て優劣を知る」とあつて、問題を見せずに、摑り取らせることで、且つ之を射に喩へたのである。
【四】眵昏　目やにの爲に目が霞んで明かならざること。

一朝富貴還自恣。　一朝、富貴にして、還た自ら恣なれば、
長檠高張照珠翠。　長檠高く張つて珠翠を照らす。
吁嗟世事無不然。　吁嗟、世事然らざるなし、
牆角君看短檠棄。　牆角、君看よ、短檠の棄てらるるを。

【五】珠翠　女の首飾。

【題義】檠とは燭臺で、上に油皿があり、全體に丈の高いのと低いのとがある。これは、短檠を詠じたので、黃震の云ふ通り、感慨の意がある。又蔣註、顧註等には、檠の字が、むかしは去聲であつたので、燈檠として平聲に用ふるのは、宜しくないといふ議論もあるが、必要も無いから、ここでは、省略することにする。

【詩意】長檠は、八尺もあるが、唯だ長いだけで、割合に役にも立たず、短檠は、二尺しかないが、便利で、且つ下が明るい。短檠は、多く私室で用ひられるもので、黃簾綠幕を垂れて、朱戶を閉ぢたる部屋の中、風露の氣、自ら吹き入つて、秋も涼しき折から、空閨の少婦は、その下で、衣を裁ち、淚に曇る目も暗く、やがて、ほつれし髮を上げながら、燈心を搔き立てて、座邊に近く引き寄せなどする。われは、年二十にして家を辭し、試驗を受けむが爲に、都に來りしより、國子博士となりし今に至るまで、夜ごとに文章を作つて、細字を書き、兩眼が霞んで昏く、頭は雪の如く白くなつたが、

その間、常にこの短檠を机の前に置き、書を看て曉に至るを例とした。しかし、一朝富貴になつて、心驕れば、歌舞宴樂、やがて長檠を高く張つて、滿堂の珠翠を照らす樣な事にも成らう。顧みれば、世間の事、皆然らざるはなく、短檠は、往往にして、牆の角に棄てられて居る。しかし、われは、道に志あるものなれば、たとひ、富貴になつたとても、決して、その操守を移さず、一生、この短檠と相親んで居る積りである。

【餘論】蔣註に「東坡云ふあり、免使韓公悲世事、白頭還對短燈檠」と。蘇、時に黃に謫せられ、その姪安節、下第して遠く來る、故に云ふ」とある。それから、何義門は「この詩、骨節ともに靈、字に虛設なし。首句、賓を以て主を形し、却つて是れ倒挿法、空自長、卽ち反つて照珠翠に對するなり。簾幕戶堂、逐層襯入して牀に近づき、正に結句牆角の爲に一喝し、裁衣を以て讀書を襯起す。その間、關照亦た甚だ密」といひ、又「照珠翠は、裁衣看書と兩層對射、亦た長短檠の相待つが若く然り。吁嗟世事の一語、慨すべきもの深し」といつて居る。

送劉師服

劉師服を送る

夏半陰氣始。淅然雲景秋。夏半、陰氣始まる、淅然として、雲景秋なり。

蟬聲入客耳。驚起不可留。蟬聲、客耳に入り、驚起して、留まるべからず。

草草具盤饌。不待酒獻酬。草草、盤饌を具ふ、酒の獻酬を待たず。

士生爲名累。有似魚中鉤。士、生まれては、名に累せられ、魚の鉤に中るに似たるあり。

齎財入市賣。貴者恒難售。財を齎らし市に入つて賣る、貴きものは恒に售られ難し。

豈不畏顚頓。爲功忌中休。豈顚頓を畏れざらむ、功を爲し中ごろにして休むを忌む。

勉哉耘其業。以待歲晚收。勉めよや其業を耘り、以て歲晚に收められむことを待て。

【字解】【一】淅然 淅瀝淒涼の義。【二】難售 詩經に賈用不售とある。【三】顚頓 楚辭の漁父に、顏色憔悴とあり、杜甫の詩に冠蓋滿京華、斯人獨顚頓とある。

【題義】蔣註に「公の詩に贈劉師服あり、ここに至りて、又送劉師服あり。按ずるに、石鼎聯句に、元和七年十二月、道士軒轅彌明、衡山より來る、奮と劉師服進士と衡湘中より相識る、將に太白を過ぎむとし、師服の京に在るを知り、夜、その居に抵つて宿すと、すなはち、この詩と前の送進士劉師服東歸とは、其れ八年夏作れるか。然れども、登科記を考ふるに、劉師服あるなし。集中又劉師命あり、豈に其れ兄弟か」とある。この詩は、劉師服が歸鄉でもするかして、これを送り、且つ慰め、且つ勵ましたのである。

【詩意】夏の半ば過ぎに當つて、陰氣が始まり、雲の景色も、淒涼として、秋らしく覺える。蟬の聲は、人の耳に強く響き、これを聞けば、驚き起つことを禁じ得ぬ。ここに、君の行を送るに就いて、草草として、御馳走を具へたが、何分お急ぎの爲に、落ち付いて酒の獻酬をすることも出來ない。抑も、士は、名に累せられるもので、名が餘り高いと、多くは、不幸な憂き目に遭ひ、丁度、魚が鉤に懸つたと同樣、どうしても、免れることが出來ない。更に喩ふれば、財寶を齎し、市に入つて之を賣らうとするとき、貴重な物が容易に賣れないと同じである。定めて、身の憔悴を增して、耐へ難いだらうが、折角、心がけた上は、少し位な事で中止してはならぬ。たとひ、志を得ずして歸鄕しても、どこまでも勉强し、一方では、田を耕耘して業を勵み、それで歲晚の收入を待つて居るが善いので、何でも、氣を長くして居らねばならぬ。

【餘論】劉辰翁は「淸空一氣話の如し」といひ、朱竹垞は「起六句、興趣甚だ逸」といひ「每兩句一意、更に閒語なし」といひ、顧嗣立は「これ古調、質意を以て勝る」といひ、乾隆御批には「貧賤糟糠、諷諭深切」とある。

309
65

昭和三年十二月廿二日印刷
昭和三年十二月廿五日發行

著作權所有

續國譯漢文大成　文學部第七卷
【非賣品】

編輯兼發行者　國民文庫刊行會
東京市神田區淡路町二丁目十四番地

右代表者　鶴田久作
東京市本鄕區西片町十番地

印刷者　渡邊一郎
東京市小石川區西古川町二十五番地

印刷所　中外印刷株式會社
東京市小石川區西古川町二十五番地

發行所　國民文庫刊行會
電話神田（五三五番・八三八番）
振替東京一八五七二番

終